

# とある兄妹のデンドロ記録（旧）

貴司崎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは「Infinite Dendrogram」を初日で買った、とある兄妹の記録である。

※現在更新停止中

※リメイク版『とある三兄妹のデンドロ記録：Re』<https://syosetu.org/novel/232018/>の執筆を開始したので、そちらもよろしく願います。

## 目次

登場人物・〈エンブリオ〉紹介：三兄妹編	1
登場人物・〈エンブリオ〉紹介：オリ〈マスター〉編	8
プロローグ：とあるゲームを買った日	19
2043年7月15日	
ログイン・〈アルター王国〉	26
冒険者ギルドと初クエスト	31
兄妹の〈エンブリオ〉	36
アイラさんと初心者講習	41
王都の外へ	47
VS【亜竜血熊】	52
兄妹のデンドロ日和	
エルザちゃんとパーティープレイ	57
プレイヤーキラーとの遭遇	66
ミカとクマさん	73
兄妹のアルバイト	80
〈墓標迷宮〉と第三形態	88
指名クエストと〈UBM〉	
兄妹の指名クエスト	96
パーティーメンバーとの顔合わせ	104
〈ノズ森林〉の調査と前哨戦	112
VS〈UBM〉	120
達成報告と打ち上げ	130
そうだ、ギデオン行こう	

第四形態と旅行準備	139
ギデオンへの道中	146
ギデオン観光とガチャ	154
レントVSミカ	163
決闘王者防衛戦	171
番外編 エルザちゃんのとある一日	179
兄妹の現実と遊戯の話	
〈レーヴ果樹園〉と〈月世の会〉	189
VS【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】	198
兄妹の現実の話	208
祐美ちゃんの初ログイン	217
兄妹の遊戯の話	226
三兄妹のデンドロ日和	
兄の新ジョブ	234
妹達と人探し	243
〈墓標迷宮〉パートII	253
兄の超級職	263
兄妹と生産職	271
ミュウの冒険	280
兄の挑戦・〈マスター杯〉	
戦いの前・回想	291
第一回戦・ガードナー獣戦士理論	298
第二回戦・メタゲーム	306
準決勝・テンプレミラーマッチ	315
決勝戦・VSファイガロ	324

アルター王国一周旅行・まずは南へ

大会の後・準備と出発

〈ニッサ边境伯領〉・遭遇

〈サウダーテ霊林〉・堕ちた【冥王】

〈サウダーテ霊林〉・VS屍冥王樹

〈ニッサ边境伯領〉・事件の後、次への準備

番外編 〈月世の会〉・日向葵

アルター王国一周旅行・西の海

〈ブリテイス伯爵領〉・現状確認

〈ブリテイス伯爵領〉・港町ウエレン

〈水精洞窟〉・そして超級職へ……

〈キオーラ伯爵領〉・各種考察と食事情

〈キオーラ伯爵領〉・海水浴：前編

〈キオーラ伯爵領〉・海水浴：後編

番外編 とあるモヒカン達のその後

番外編 〈プロデュース・ビルド〉の今

アルター王国一周旅行・城塞都市クレミル

出発準備と危険との遭遇

VS 【磁改奇馬 マグネトローベ】前編

VS 【磁改奇馬 マグネトローベ】後編

激戦の報酬と漸くのクレミル

ジヨブクエストと掘り出し物

番外編 エルザのクエスト・ヘイスティア鉱山

ハロウインイベント：前編

ハロウインイベント：中編

541 531 521 511 501 489 477 466 458 450 439 429 419 410 399 391 381 371 360 352 344 335

ハロウィンイベント：後編	551
祐美の今・ミュウのクエスト	562
ミュウと【アスカ】・祐美の過去	573
祐美の決意・ミュウの継承	582
ミュウの試練・祐美の未来	591
閑章 昔々のお話	
先々期文明のとある技術者達の話：或いはその成れの果て	601
アルター王国一周旅行・北の厄災	
色々な問題	609
事件の序章	617
クリラ村へ	626
封竜王と厄災	635
援軍と交渉	645
来たるモノ達	655
神を砕くモノ	667
星を穿つ鉄槌	677
魔鋏蚯蚓・前哨戦	688
クリラ村追撃戦	697
それぞれの戦い・中盤戦	706
古代伝説級・その本領	716
其の命脈を断て	725
金色の流星・銀魔を穿つ	737
終幕・そして……	748
アルター王国一周旅行・ようやく東へ	
リザルト	757

三兄妹のまつたり駄弁り旅

到着・カルチエラタン

ちよつと温泉宿行ってみた

766

775

784

## 登場人物・へエンブリオ〈紹介：三兄妹編

アバター名：レント

本名：加藤蓮

メインジョブ：【高位召喚師】

サブ上級職：【大狩人】【大騎兵】【突撃騎兵】【司教】【紅蓮術師】【翠風術師】【黒土術師】【蒼海術師】【高位付与術師】【高位魔石職人】

サブ下級職：【狩人】【罨狩人】【弓狩人】【毒狩人】【闘士】【槍士】【弓手】【盗賊】【投手】【騎兵】【殿兵】【死兵】【決死隊】【司祭】【召喚師】【魔術師】【付与術師】【防護術師】【祓魔師】【呪術師】【魔導師】【魔石職人】【見習】

〈エンブリオ〉：【百芸万職 ルー】

本作の主人公その一、通称・兄。現在大学一年生。

性格は冷静で家族思いだが時折子供っぽくなる事も。妹二人に対してはかなり甘い相当なシスコン。

全方面に平均を遥かに超える才能を持っており、殆どの事を非常に上手く熟せるが、本当に規格外の天才には一歩及ばない。

昔は自分の才能に驕っていた(初期の某閣下の性格を大人しめにした感じ)が、当時やっていた弓道の大会で規格外な才能の持ち主に出会って挫折。その後しばらくは荒れていたが事故で両親を失い自身も命に関わる大怪我を負い、更に妹が自分の才能に絶望して塞ぎ込む所を見た事で、才能への執着が薄れて今の様な性格になった……とはいえ規格外な才能への執着は未だに燻っており、へエンブリオにもそれが現れている。

デンドロでのプレイスタイルは「遊戯派よりの世界派」。へエンブリオのスキルのお陰で多くのジョブに就いており、戦闘や生産など様々な事を行えるオールラウンダー。現在は二十三の下級職と十一の上級職に就いている。

戦闘スタイルは主に弓と魔法を使った後方支援を担当しているが、必要なら前衛もこなす。生産では【魔石職人】として【ジエム】を作っており、それを売り払ってお金を稼いでいる。



今は【技神】の転職試練でハイエンドの先代【技神】を倒す事を目標にしている。

名称：【百芸万職 ルー】

TYPE：ルール

能力特性：技能補助・才能拡張

到達形態：V

固有スキル：《光神エクスペリエンスブラスターの恩寵》《空想秘奥ブリューナク》《全技能オールスキル》《百芸創主スキルマイスター》

必殺スキル：《我は万の職能ルに通ず》

備考：レントのへエンブリオ《

モチーフは自身を諸芸に達人であると言ったとされるケルト神話の太陽神「ルー」

能力特性は「技能補助と才能拡張」。これは本人の全方面での高い才能と規格外な才能への執着が反映されている。

《光神の恩寵》は獲得経験値を上昇させるパッシブスキル。第五形態時にはレベル五で獲得経験値を最大300%上昇になっており、このスキルのお陰で多くのジョブをカンストしている。実はモンスターやへマスターを倒した際にアイテムのリソースや管理AIの送られるリソースの一部を獲得経験値に回したりする効果も含まれており、そのためにモンスターやへマスターを倒した際にしか効果が発動されない。

《空想秘奥》は自身のHPを現在値の半分消費してジョブスキル一つを強化するアクティブスキル。選択したジョブスキルはアクティブスキルの場合は次の使用時に強化される。スキル効果終了後に選択したジョブスキルは二十四時間使用不可になり、このスキル自体には十分間のクールタイムが存在する。

《全技能》は自身のメインジョブに依らずに取得している下級職・上級職のジョブスキルを使用可能にするパッシブスキル。また、オフに出来ないパッシブスキルをオフに出来る様にもなる。

《百芸創主》は自身が取得しているジョブスキルを複数(第五形態時は最大五つ)組み合わせさせてオリジナルスキルを作るスキル。作れるオリジナルスキルの数は自身の合計ジョブレベル50につき一つ。一

度作成した場合二十四時間削除・変更不可能。既にオリジナルスキル作成に使用しているジョブスキルは、他のオリジナルスキル作成には使用不可能。オリジナルスキル作成時には各種パラメータを調整出来るので汎用性は非常に高いが、その分作れるスキル自体の燃費は非常に悪く、兄はクールタイムを非常に長くするなどして釣り合いをとっている。

必殺スキル《我は万の職能に通ず》はジョブ枠拡張のパッシブスキルで、第五形態時には自身が就く事の出来るジョブを下級職三十個・上級職二十個だけ増やす事が出来る。なので、今のところ兄は三六の下級職と二二の上級職に就く事が出来て、合計レベルを四千まで上げる事が出来る。だが、《ステータス補正がオールゼロになる》、《今後へエンブリオ》の固有スキルを獲得出来ない”、《就いた事のあるジョブに由来する超級職に就く事が出来なくなる》”デメリットが課せられている。



アバター名：ミカ

本名：加藤美希

メインジョブ：【戦棍姫】

サブジョブ：【剛戦棍士】 【戦棍鬼】 【戦士】 【戦棍士】 【壊屋】 【鎧戦士】 【斥候】

〈エンブリオ〉：【激炎棍 ギガース】

本作の主人公その二、通称・妹。現在小学五年生。

性格は明るく天真爛漫……に普段は振る舞っているが、半分くらいはワザとそういう風に見える様にしており、内心は結構ナイーブ。

生まれつき異常な直感を持った天災児。その直感には二種類あり直近の危険を感知する『近い勘』と、いざ起こる危険に備えさせる『遠い勘』がある。某管理AI曰く『ヴァンガード【先導者】の資格者が持つセンススキルに似ている』らしいが詳細は不明。

両親が事故で死んだ時に『直感でその事が分かっていたのに防げ

なかった”事がトラウマになっており、今はある程度割り切っているが内心では自身の直感を疎ましく思っている。

デンドロでのプレイスタイルは“遊戯派よりの世界派”。これはデンドロ世界に入れ込み過ぎない様に一線を引く様にしているからである。

戦闘スタイルは直感によって攻撃を先読みし、ステータスとヘンブリオのスキルを用いてごり押すのが主体。戦闘技能自体はそこまで高くないが、直感でほぼ全ての攻撃に対処出来るのでそこまで問題にはなっていない。

デンドロをやっているうちに直感の精度は上がっており、その事なのでから『この世界でなら自分の直感について何かが分かるかもしれない………それでなくてもこの力に納得が行くようになるかもしれない』と思っている。

名称：「激炎棍 ギガース」

TYPE：エルダーアームズ

能力特性：高ステータス・スキル効果減衰

到達形態：V

固有スキル：《バーリアブレイカー》

必殺スキル：《神砕刑崩》<sup>ギガース</sup>

備考：ミカの「エンブリオ」

モチーフはギリシャ神話において神々と戦った巨人を指す言葉“ギガース”

約二メートルの両手持ち大型メイスの「エンブリオ」。スキルが少ない代わりに武器性能・ステータス補正が高い。

能力特性は“高ステータス”と“スキル効果減衰”、これは妹の『自身ではどうしようもない災いを退ける力が欲しい』願望が反映された結果、災いを退ける力<sup>ステータス</sup>とどうしようも無いモノ<sup>理不尽なスキル効果</sup>を減衰させるスキルとして発現したから。

また、妹の『力が欲しい』という願望からステータス補正が非常に高くなっており、リソースの関係で現在はスキル効果減衰が防御系のみ限定されている。

《バリアブレイカー》は攻撃時に対象の防御スキル効果・身代わり効果・ENDバフ効果を減衰させるパッシブスキル。「ギガス」さえ装備していれば自身のあらゆる攻撃に適応される。効果の強度はスキルのレベルと攻撃時の攻撃力に比例する。第五形態現在スキルレベルは五。

必殺スキル《神砕刑崩》は装備・スキル効果を除く最大HPの半分をSTRに、四分の一話ENDとAGIに加算する自己強化スキル。発動する場合「ギガス」を装備していて、戦っている相手の総リソースが自身のジョブ・エンブリオの総リソースを上回っている必要がある。また維持コストとして秒間1%ずつ最大HPが削られている、途中解除も不可能。更に効果発動中は身体に少しずつヒビが入っていき、その部分にダメージを受けると「出血」状態になる。そして効果が終了して最大HPがゼロになったら肉体が砕け散るので蘇生なども出来ず、そうして死亡した時のデスペナルティのログイン制限時間が三倍の七十二時間になる。

◇

アバター名：ミユウ

本名：加藤祐美

メインジョブ：【武闘姫】

サブジョブ：【武闘家】【拳聖】【拳士】【格闘家】【蹴士】【蹴拳士】【護身術家】【魔拳士】

〈エンブリオ〉：【支援妖精 フェアリー】

少し遅れてデンドロを始めた兄妹の従妹、通称・末妹。現在小学二年生。「なのです」が口癖。

性格は明るく真面目で兄妹の事が大好きで、その分二人に構ってもらいたい寂しがりなところもある。デンドロを始めたのも兄妹と一緒に居たかった為で、両親に「デンドロ内では兄妹と一緒にいる事」と言われた事もあって常に兄妹と一緒にいる。

格闘技に関しての才能は規格外に域にある天災児で、一度見た体術

を完全に模倣するなど出来る。趣味で空手をやっており、その才能もあって大会で優勝するぐらいの実力はあるが、本人にとつて格闘技は趣味の一つに過ぎないので、それだけに打ち込んでいる天災児と比べると実力は劣る。

デンドロでのプレイスタイルは兄妹に合わせて「遊戯派よりの世界派」で、ゲームより現実を優先している。

戦闘スタイルは格闘技の技術を活かした前衛で、自身の「エンブリオ」であるフェイからのバフを受けて戦うスタイル。その特性上武器を持たない上に必殺スキルも直接戦闘能力が大きく上昇する訳では無いので、火力が不足しがちなのが悩みの種。

名称：「支援妖精 フェアリー」

TYPE：ガーディアン

能力特性：支援・魔法ラーニング

到達形態：V

保有スキル：《エール・トゥ・ザ・ブレッシング》《マジカル・ラーニング》《エコー・オブ・トゥワイス》《ミラクル・ミキシング》

必殺スキル：「我等が成るは光の使者」

備考：ミュウの「エンブリオ」

モチーフは西洋の神話や伝説に登場する超自然的存在の総称「フェアリー」

大きさ三十センチぐらいの四足歩行の生物型ガードナーで、末妹曰く『プリキ○アに出てきそうな妖精みたいな外見』とのこと。また性別は女性で、喋る事も出来て一人称は『ぼく』、末妹からは「フェイ」という愛称を付けられており普段はそう呼ばれている。

能力特性は「マスター」への支援で、主に後方から魔法やスキルによる援護を行う。その為ステータスはMPに特化しており、HPはギリギリ千ぐらいで、AGIは二千弱あるがENDはその十分の一でSTRは百前後。

《エール・トゥ・ザ・ブレッシング》はマスターへのバフを行うパッシブスキルであり、レベル五の今はSTR・END・AGIを30%上昇させ、魔法系の被ダメージを30%減少させる。効果の発動には

マスターの両手が非装備状態である事と、自身とマスターが一定の距離以内にいる必要がある。

《マジカル・ラーニング》は発動を目撃した魔法系スキルを1%の確率でラーニングするパッシブスキル。だが、覚えた魔法スキルのレベルは全て一になる上、リソースの関係でスキルレベルが上がる速度は遅い（ラーニングした魔法が多くなる程レベルの上昇速度は下がる）

《エコー・オブ・トウワイス》は自身に掛かっているバフの効果を倍にするアクティブスキル。効果時間は最大五分間で、効果終了後に自身に掛かっているアクティブのバフ効果は全てキャンセルされる。クールタイムは一時間で、マスターの両手が非装備状態である事が発動条件になっている。

《ミラクル・ミキシング》は《エンブリオ》がラーニングした攻撃魔法一つを《マスター》が習得している格闘系アクティブスキル一つに付与・融合させるアクティブスキル。発動条件は《マスター》の両手が非装備状態である事と、両者が接触又は融合状態である事。このスキル自体のクールタイムは十分間で付与出来る時間は三十秒間。付与した魔法スキルと付与された格闘スキルは使用後又は交換時間終了後に二十四時間使用不可能になる。

必殺スキル《我等が成るは光の使者》は《エンブリオ》と《マスター》の融合スキルで、互いのステータスは合計されてスキルもお互いのものが全て使える様になる。自身のステータスが低いので融合してもステータスはあまり高くないが、融合している間は自身に掛かっているバフ効果をパーティー全体に適応させる事が出来る。その為ガードナーの融合スキルでありながらパーティー戦闘で真価を発揮する。発動時にはマスターの両手が非装備状態であり、自身とマスターが接触している必要がある。効果時間は最大五分間で、クールタイムは二十四時間。また融合中は自身とマスターの意識が別々に存在しており、それぞれ独自にスキルを使う事も出来る。

これらのスキルにおけるバフ効果とは、ステータスを上昇させるものだけでなく、属性付与や持続回復効果など自身に掛かっているプラスのスキルの効果全般を指す。

## 登場人物・ヘエンブリオ〈紹介：オリへマスター〉編

アバター名：エルザ・ウインドベル

メインジョブ：【高位飼育者】

サブジョブ：【高位従魔師】【従魔師】【飼育者】【調教師】【獣医】【従魔指揮官】【騎乗従魔師】

〈エンブリオ〉：【代行神騎　ワルキューレ】

兄妹と同じデンドロ初日組で、何も分からないままジョブにも就かず外を歩き回っていたところをモンスターに襲われ、そこに駆けつけた兄妹に助けられた。その後色々あって兄妹とはフレンドになった。

性格は真面目だが、やや天然なところも。初日に助けられた事で兄妹には憧憬の感情を抱いている。

ファンタジー物の話が好きで、デンドロでは自分も物語の主人公の様にカッコよく戦いたいと思っていたが、運動神経が壊滅的だったので諦めた。また彼女のヘエンブリオ〈ワルキューレ〉はその事を自覚した後に生まれたので、彼女の代わりにジョブに就いて戦闘を行うガードナーになった。

実は天然物の《審獣眼》持ちで、指揮官としても優秀でありティマーとしての才能はかなりのもの。戦いではヘエンブリオの特性上自身の戦闘力は皆無な為、直接戦闘は【ワルキューレ】やティムモンスターに任せて後方支援と指揮に徹している。

ジョブ構成は【従魔師】系統特化型。今は【飼育者】<sup>ブリーダー</sup>や【調教師】<sup>トレーナー</sup>の従属キャパシティ内のティムモンスターを成長させやすくするスキルで、固有スキルによってレベルを上げられる【ワルキューレ】やティムモンスターのレベリングを行なっている。

リアルラックは高く物欲センサーも克服しており、その為ドロップアイテムでお金を稼ぐのは得意だが、ティムモンスターが割と大食らいで食費がかかるので金策には苦労している。

名称：ヴェルフ

種族：【スカウト・デミドラグウルフ】

エルザのティムモンスターその一。性別は雄で性格は真面目。進化前は「テイル・ウルフ」で、彼女が【従魔師】としてティムモンスターを手に入れ様と決意して、その為に従魔師ギルドに行った際に出会ってピンと来たので購入した。

【亜竜斥候狼】はAGI特化のモンスターで、総合的なステータスは他の亜竜級の狼型モンスターと比べればやや低い。だが斥候狼の名の通り《危険察知》《殺気感知》《嗅覚索敵》などの索敵・感知系スキルを高レベルで取得している。その為彼女のパーティー内では索敵と遊撃を担当している。

名称：ウオズ

種族：【テンペスト・デミドラグイーグル】

エルザのティムモンスターその二。性別は雄で性格は鳥系モンスターには珍しく実直。進化前は「ウインド・イーグル」で、彼女が王都の郊外で狩りをしている際に出会い、ピンと来たのでティムした。【亜竜嵐鷲】は風属性のスキルを使うAGI型のモンスターで、他の亜竜級の鳥モンスターと比べると大きさは小さいがその分小回りが効く。その為彼女のパーティー内では高空からの周辺警戒と風属性スキルによる攻撃を担当している。

同時期にティムされたヴェルフとは仲が良く、役割が被っている事もあってお互いに上手く連携している。

名称：アーシー

種族：【アース・エレメンタル】

エルザのティムモンスターその三。性別は雌で性格は甘えん坊。元々は王国とレジエンダリアの国境付近で生まれたエレメンタルで、すぐにその近くに突然強力なモンスターが現れた所為で住処を追われて王都近辺まで逃げて来た。その際にエルザに見つかってピンと来たので保護され、そのまま彼女に懐いてティムされた。

【アース・エレメンタル】は地属性魔法全般を使う事が出来る高位エレメンタルであり純竜級のモンスターだが、アーシーは生まれたばかりでレベルが低かったので、ティムされた当初は亜竜級ぐらいのステータスしか無かった。今はレベルが上がったお陰で純竜級のス



テータスになっている。

戦闘時には基本的にエルザの側で後方支援と彼女の護衛を担当している。地属性魔法は殆どの種類が使えるが、一番得意なのはゴーレムの作成と操作などの個体操作系。また最近重力属性の魔法も習得した。

名称：セレナ

種族：【シャイン・ドラゴン】

エルザのタイムモンスターその四。性別は雌で性格は勝ち気で誇り高い。何処からか迷い込んで来た【ドラグワーム】に敗れ逃げている時にエルザと出会い救われた際、彼女を自身の主人と認めてタイムされた。

【シャイン・デミドラゴン】は光属性の天竜種であり、総合的に高いステータスを持つバランス型。光属性ブレスによる砲撃に加え、五体を使った肉弾戦もこなす。

戦闘時にはブレスや肉弾戦によるアタッカー。また、エルザを乗せて空を飛ぶ移動手段としても活躍している。

名称：サファイア

種族：【サファイア・バリアカーバンクル】

エルザのタイムモンスターその五。性別は雌で性格は臆病だが優しい。とあるへUBMに住処を追われて王国中を彷徨っていた時にエルザと遭遇し、戦闘の結果敗北してその後の交渉の結果仲間になった。

小型だがMP、END、AGIに長けた亜竜級モンスターで、水属性と結界の魔法を得意とする。戦闘時にはそれらの魔法で、エルザの護衛とパーティーのサポートを担当している。

名称：【代行神騎 ワルキューレ】

TYPE：レギオン

能力特性：代行

到達形態：IV

保有スキル：《代行者》オルタネイティブ《主の加護》

必殺スキル：《神軍騎行・合一戦姫》キョウレ

備考：

モチーフは北歐神話の戦乙女「ワルキューレ」。種族は天使で、女性の人型ガードナー。人型へエンブリオの特有の食癖は「マスターが食べているものと同じものしか食べない」。

「ワルキューレ」の初期ステータスはHP 100、MP・SPが50、STR・END・AGI・DEX・LUCが30ぐらいで、到達形態が上がっても変わらない。レギオンの「エンブリオ」の為、第四形態時には四人の「ワルキューレ」がいる。

《代行者》により非人型範疇生物でありながらジョブに就くことが出来る。就けるジョブ数は「ワルキューレ」一人につき下級職六つ、上級職二つの合計500レベルまで。「ワルキューレ」が就けるジョブはマスターと同じだが、システム上「エンブリオ」が満たした条件はマスターが満たしたものととして扱うので特に問題にはなっていない。また、マスターと各「ワルキューレ」が同じジョブに就く事が出来なくなるデメリットがある。就けるジョブは下級職六つ・上級職二つで超級職には就くことは出来ない。

《主の加護》はマスターのステータス補正を0にする代わりに「ワルキューレ」にステータス補正を与えるスキル。第四形態時には合計500%の補正を10%刻みで、各ステータスにつき10%〜200%の割合で割り振る事が出来る。一度補正の割り振りを確定した場合には七十二時間再変更は不可。

必殺スキル《神軍騎行・合一戦姫》は「ワルキューレ」一人につき自身にタイムモンスター一体を融合させるスキル。融合時にはそれぞれのステータスが合計され、スキルも覚えている両者のものが全て使える様になる。誰と誰を融合させるのかを事前に決めた上で、スキルの発動には融合させる「ワルキューレ」一人につき五秒のチャージ時間が必要。スキルの最大持続時間は「マスターの合計レベル×10秒を融合させた「ワルキューレ」数で割ったもの」であり途中解除も可能。クールタイムは必殺スキルの使用時間の十倍に融合させた「ワルキューレ」の数を掛けた時間になる。また、チャージ時間中にマスターが攻撃を受けるとスキルが失敗する事と、チャージ開始から効果

終了までマスターは一切の戦闘行動と他のアクティブスキルの使用が不可能になるデメリットがあり、スキルを使用出来るのは戦闘時のみになっている。

愛称：アリア

メインジョブ：【剣聖】

サブジョブ：【剛剣士】【剣士】【戦士】【双剣士】【大剣士】【騎兵】【斥候】

一人目の【ワルキューレ】であり長女。髪型は金髪のロングストレート（彼女達【ワルキューレ】の外見は髪型以外は同じ）で性格は真面目なマスター第一主義だが褒められると調子に乗る事も。エルザのタイムモンスターと【ワルキューレ】中ではリーダー役でもある。戦闘では剣を使った前衛アタッカーであり、ステータス補正もSTR・AGIに極振りして残りはSPという感じ。

最近では二刀流も使い始めた。

愛称：セリカ

メインジョブ：【司教】

サブジョブ：【高位祓魔師】【司祭】【祓魔師】【僧兵】【巡礼者】【解呪師】【防衛術師】

二人目の【ワルキューレ】で次女。髪型は銀髪のツインテールで性格は温和でおおらか。パーティー内ではサブリーダー役。

戦闘では主に回復と後方支援を担当しており、ステータス補正はMPに極振りして残りはAGIやHPなどに振っている。

結構個性的な各パーティーメンバーの調整役も担当している。

愛称：トリム

メインジョブ：【守護者】

サブジョブ：【盾巨人】【騎士】【盾士】【鎧戦士】【盾騎士】【鎧騎士】  
【冒険家】

三人目の【ワルキューレ】で三女。髪型は青髪のポニーテールで性格は明るい元気っ子。

戦闘では主に前衛での壁役で、ステータス補正はEND・HPに極振りして残りはSTRやAGIという感じ。

資金の都合上、高性能な防具が買いつらいのが少し不満。

愛称：フィーネ

メインジョブ：【紅蓮術師】

サブジョブ：【白氷術師】【魔術師】【付与術師】【呪術師】【魔導師】

【助祭】【生贄】

四人目の【ワルキューレ】で四女。髪型は緑髪のショートカットで性格は大人しめで物静か。

戦闘では主に後衛の魔法火力役で、ステータス補正はMPに極振り。

ジョブ構成は〃【生贄】MP特化理論〃にした。

愛称：リーファ

メインジョブ：【弓聖】

サブジョブ：【弓手】【狩人】【盗賊】【罾師】

五人目の【ワルキューレ】で五女。髪型へ黒髪のサイドテールで陽気な性格。

戦闘では弓による後方支援と索敵を担当するサポート型で、ステータス補正はAGIとDEXに降っている。

罾への対処などヴェルフに出来ない分野を担当予定で、ジョブビルドを模索中。

◇

アバター名：ターニャ・メリアム

メインジョブ：【紡績職人】

サブジョブ：【高位裁縫職人】【裁縫職人】【紡績師】【服飾職人】【機織職人】【染織職人】【躁糸師】

〈エンブリオ〉：【天系紡蚕 クロートー】

エルザのリアルの友人で、彼女と同時期にデンドロを始めた。今は克蘭へプロデュース・ビルドの一員として、主に衣服などの布製品を生産を行なっている。

散財癖があり賭け事とかも好きで、現実では自重している分デンドロ内ではよく金欠になっている。だが、基本的に自分のお金を使って

いる為クランのメンバーには迷惑を掛けたりはしてしない（彼女の提案で新しい生産に取り組んだりして失敗してクランが金欠になる事はあるが、それはちゃんとクランメンバーの同意の上でやっている）クランの事は大切に思っており、その宣伝の為に〈D I N〉に依頼したり、掲示板に書き込んだりもしている。

名称：【天糸紡蚕 クロートー】

TYPE：ガードナー

能力特性：製糸・捕縛

到達形態：IV

保有スキル：《天糸紡ぎ》《運命の縦糸》《運命の横糸》《天命紡績》

備考：

モチーフはギリシャ神話の運命の三女神の一人「紡ぐ者」を意味する名前の「クロートー」。

全長一メートル程の蚕型ガードナーで、ステータスはMP・SP・DEXに特化しており、直接戦闘は苦手。

《天糸紡ぎ》は素材を捕食する事で、その素材と同じ性質を持つ繊維を生産出来るスキル。一度に生産出来る繊維の量は捕食した素材のリソース量で決定する。糸を紡ぐ作業はマスターとの共同作業なので【紡績師】系統のジョブスキルの効果も乗る。また、使用する素材に応じてMPまたはSPを消費する。

《運命の縦糸》は巻きついた相手に【拘束】の状態異常を与える白い糸を吐くスキル。相手にキチンと巻き付けなければ効果は無いが、その分状態異常の強度は高い。SP消費。

《運命の横糸》は触れた敵に一定確率で【呪縛】の状態異常を与える黒い糸を吐くスキル。この糸は非実態なので味方を擦り抜けた敵のみに当てる事が出来るが、その分状態異常の強度は低め。MP消費。

《天命紡績》は《天糸紡ぎ》で作った繊維での生産成功率及び生産物の性能を上昇させるパッシブスキル。この効果はマスターが行う生産活動にのみ適応される。

◇

アバター名：エドワード

メインジョブ：【高位冶金錬金術師】

サブジョブ：【鉄鋼術師】【冶金錬金術師】【錬金術師】【付与術師】【刻印術師】【魔術師】【商人】

〈エンブリオ〉：【幻想冶金 オレイカルコス】

兄の大学の同期生で、クラン〈プロデュース・ビルド〉のクランオーナーを務めている。主に金属素材の加工・生産を行なっている。

他の二人が性格的にクランの経営などに向いていないので、それらを一手に引き受けている苦勞人（その為に【商人】のジョブを取ったりしていた）

〈マスター杯〉以降は、兄が自身の装備品について聞かれた時に〈プロデュース・ビルド〉の宣伝を行なったのでそれなりに客が増えた。それによりクラン経営も軌道に乗って来たので、今は新しいクランメンバーを探している。

【幻想冶金 オレイカルコス】

TYPE：テリトリ

能力特性：非金属の金属化

到達形態：IV

保有スキル：《メタル・トランスレイト》《ファンタジー・メタル・ワーキング》

備考：

モチーフは神話や伝承に登場する金属の名称の一つ「オレイカルコス」。

《メタル・トランスレイト》は周辺の任意の非金属を、性質はそのままに金属化させるスキルで、生物に使用した場合は【金属化】の特殊状態異常となる。成功確率は自身と対象の能力差によって変動する。金属化した場合には基本的に強度は上昇するので金属操作・破壊系の魔法を使ったり、【金属化】が手足の先から進行する事を利用して途中で金属化を止めて動きを封じるなどの手段を取っている。クールタイムは短めで使用にはMPを消費し、消費するMPに応じて効果の強

度が変動する。

《ファンタジー・メタル・ワーキング》は自身が所有している非生物・非金属のアイテムを、一定確率で性質はそのままに金属アイテムに変えるスキル。成功確率は自身の能力と効果対象の性能で決定し、失敗した場合にはその素材にスキルを再使用する事が不可能になる。クールタイムは一時間でMPを消費する。

◇

アバター名：ゲンジ

メインジョブ：【彫金職人】

サブジョブ：【高位鍛冶師】【鍛冶師】【装飾師】【彫金師】【細工師】  
【金工職人】【戦鎚士】

《エンブリオ》：【改訂工房 へパイストス】

クラン《プロデュース・ビルド》のメンバーで、主に金属製の武器や防具・アクセサリーの生産を行なっている。大雑把な性格ではあるが、生産は丁寧に行なっている。

時折、意見が対立するターニャとエドワードを仲裁する事あり、クラン名も彼が決めかねている二人を見かねて自身の《エンブリオ》のスキル名から即断で決めた。ちなみにそれで文句が出なかったのは、二人も彼の《エンブリオ》には非常に世話になっているから。

【改訂工房 へパイストス】

TYPE：キャツスル・ルール

能力特性：生産スキル効果強化・生産物効果改竄

到達形態：IV

保有スキル：《プロダクション・エンハンスメント》《プロダクト・リビルド》

備考：

モチーフはギリシャ神話の鍛冶の神“へパイストス”。工房型の《エンブリオ》。

《プロダクション・エンハンスメント》は工房内で発動した生産系ア





い。

【日天鎧皮 カルナ】

TYPE：アームズ

能力特性：光熱吸収&蓄積

到達形態：IV

保有スキル：《日<sup>サンシャイン・アフソープシヨン</sup>天 吸 蓄》

必殺スキル：《日<sup>カルナ</sup>輪殲洗》

モチーフはインドの叙事詩『マハーバーラタ』に登場する皮膚と癒着した黄金の鎧を持って生まれてきた英雄 “カルナ”

全身の皮膚を置換した人工皮膚型の〈エンブリオ〉で、装備枠はあくセサリー枠を一つ消費。副次効果として通常の皮膚よりは強靱なので、若干防御力も上昇している。また、〈エンブリオ〉なので回復魔法などでは治せないが、その分自己修復能力は高い。

《日天吸蓄》は自身へに光・熱エネルギーによるダメージを吸収し、蓄積したエネルギーを使ってMP・SPを使うスキルを使用出来る様になるパッシブスキル。一度に吸収出来るエネルギーの量には限度があり、吸収しきれなかった分のダメージは受けてしまう。保有スキルが一つだけであり、〈エンブリオ〉のリソースをその一点に集中しているので、エネルギーの貯蓄量や最大吸収量は非常に多い（第四形態現在で《クリムゾン・スフィア》クラスの威力なら問題無く吸収出来る、貯蓄量は満杯になった事が無いので自分でもよく分かっていない）

必殺スキル《日<sup>カルナ</sup>輪殲洗》は蓄積した全エネルギーを光熱に再変換した上で指向性を持たせた熱線として放つシンプルなスキル。威力・射程は蓄積されたエネルギー量によって決まり、熱線は放射状に広がるので遠くになればなる程にエネルギーが拡散して威力が落ちる。また、発射地点は人工皮膚である〈エンブリオ〉から数センチ程離れた任意の場所で、クールタイムは二十四時間。

## プロローグ：とあるゲームを買った日

□2043年7月15日

加藤 かとう 蓮 れん

俺の名前は加藤蓮、しがたない大学生である。今日は小学生の妹の美希みきがいきなり「夏休みにやるゲームを買いに行こうよ!」と言いだしたので、近所にあるゲーム屋さんに来ていたところだ。

……………そしてそこで、美希がとあるゲームを見つけたのだった。

「Infinite Dendrogram」? それって確か、今日発売とか言っていていきなり発表されたVRMMOだよな?」

「うん。なんでも『五感を完全に再現する』とか、『ゲーム内では現実の三倍の速度で時が進む』とか言うやつみたいだよ」

他にも『単一サーバーで億人単位の同時プレイ可能』とか『現実視、3DCG、2Dアニメーションの中から視点選択可能』とかも言ってたな。

それで、キャッチコピーは『あなただけの可能性を提供します』だったか。

……………だが……………

「……………正直言って本当に実現可能なのか疑問だな。俺はVRに詳しい訳じゃないが、現在の技術を遥かに超越していると思うし。……………というか、それって地雷ゲーじゃね?」

「まあ、確かに今まで発売されたVRゲームは、どれもあんまり評判が良くなかったしねー。……………でも」

そう言った美希は、どこか遠くを見るような目をして……………

「私の『近い勘』だと危険なものではないみたいだし、何より『遠い勘』の方がこのゲームに反応しているんだよね……………」

「……………それは、このゲームをやらないと俺達に危険が及ぶとかか?」

「そういうのじゃないんだけど……………この『Infinite Dendrogram』の事を聞いた時から、何となくこのゲームをやった方が良い気がするって感じかな?」

「いきなり、ゲームを買いに行こうと言いだしたのはその為か……………」

……………美希の直感が外れる事はまず無いしな。それに「遠い勘  
”の方は従わないとヤバイ事になるやつだし……………

「分かった、じゃあこのゲームを買おうか。……………まあ最初期の頃  
ならともかく、今のVRゲームは健康に害が出るような事はないよう  
だし。……………それに何より一台一万円だからな」

「おサイフに優しいゲームだね。維持費も安いみたいだし、MMO初  
心者の私達でも安心だね!」

……………まあ、これだけ荒唐無稽な宣伝をしておいて一台一万円と  
か、地雷ゲーだろうがそうじゃ無かろうが明らかに「何かあります  
”って感じのヤツな気もするんだが。

一応、美希が「危険は無い」と言っているのだから、危険は無いん  
だろうが……………

「それじゃあへInfinite Dendrogramを買ってく  
るぞ。……………金は、取り敢えず俺が払っておくよ」

「お願いね」

ああそうだ、祐美<sup>ゆみ</sup>ちゃんの分も一応買っておくか……………このゲー  
ムがどんなモノかもまだ解らないし、彼女がやるかも分からないが。

……………そうこうして、俺達はVRMMOへInfinite D  
endrogramを手に入れたのだった。



一通り買う物を買って家に帰ってきた俺達は、早速へInfinite  
Dendrogramのパッケージを開けて中身を確認して  
いた。

「ほーん、このヘッドギアがハードみたいだね。……………意外とシン  
ブルなデザインだね」

「一応説明書も入っているな。どれどれ……………」

……………ええーつと、説明書の内容は……………

「ふむふむ……………基本的にはジョブシステム製のよくあるMMOつ  
て感じかね?」

「それより、目玉はこのへエンブリオってやつじゃない？ 何でも、プレイヤー個人のオンリーワンのアイテムやら能力みたいだけど。……あと、最初に所属する国家は七つから選べるみたいだね」

「……………どうも、この説明書には本当に最低限の用語しか書かれていないみたいだね。詳しくは実際にプレイしてみましようって感じなのかね。」

「取り敢えず、詳しい情報はログインしてからゲーム内で確認しよう。……………まずは、最初に所属する国家を決めようか」

「騎士の国『アルター王国』、刃の国『天地』、武仙の国『黄河帝国』、機械の国『ドライブ皇国』、商業都市群『カルディナ』、海上国家『グランバロア』、妖精郷『レジェンダリア』の七つか……………出来れば一緒にプレイしたいから、同じ国にしようよ！」

そんな感じで、話し合う事しばらく……………。

「とりあえず、所属する国家は『アルター王国』にするか。……………後、俺のアバター名はレントで」

「じゃあ私はミカで。……………と言うか、いつもゲームをする時に使っている名前だけだね」

と、言うわけで俺達は最初に所属する国家を『アルター王国』に決めたのだった……………先日までやっていたゲームがSF系だったから、次は正統派ファンタジーものにしよう！ と言う美希からの提案で安直に決めただけがな。

「じゃあ、早速部屋に戻ってやってみようか。……………後の事はプレイして見てから考えよう」

「そうだね」

こうして俺達はへInfinite Dendrogramを始める事になったのだった。



□ 加藤 美希

「はい、ようこそいらっしゃいましたー。初日からプレイしてくれ

てありがとうねー」

あれからヘッドギアをつけてベッドに横になってからへInfinitite Dendrogramを起動した私は、気がついたら木造洋館の書斎を思わせる部屋にいました。

そして、目の前には一匹の猫が作りの良さそうな木製の揺り椅子に座っていた……どうやら、私に話掛けてきたのはあの猫？ 見たいだね。

「えーと……お邪魔します？」

「うん、いいねー。礼儀正しい人は好きだよー」

……さて、とりあえず色々聞いてみたい事があるけど、まずは……。

「あなたはどちら様？」

「あ、僕はへInfinitite Dendrogramの管理AIのチェシヤだよー。よろしくねー。あと、ここはゲームの設定をする場所だからー。ここで色々決めて貰ってから入る事になってるんだー」

確か管理AIって言うのは、現行のスーパーコンピュータを使った人口知性……だったかな？ 私もこういう事は詳しい訳じゃないんだけどね。

……さて、それじゃあちよつと聞いてみようかな。

「じゃあチェシヤさん、ちよつと聞きたい事があるんだけど」

「なにかなー？」

「ここつて本当にゲームなの？ 何か妙な感じがするんだけど……」

「……それはどういう意味かなー？」

私が放ったその質問を聞いたチェシヤさんは、少しだけ怪訝そうな雰囲気や浮かべて聞き返してきた……なので、私はここに入ってから感じた違和感について話す事にした。

……そうした方がいい気がしたからね。

「私は生まれつき危険に対しての勘が働くんだけど、ここに来てからずっと妙な感じがするんだよね。……そもそも私の勘は危険を感知するものだから、危険の無いゲームではまず働かないし」

だから、現実の私に危険の無いゲームにおいてはこの直感はず動かない筈なんだけどね……………直感のお陰か私は普通の先読みも得意だから、お兄ちゃんとの対戦ゲームでも結構な勝率を誇るけど。

……………まあ、私もこの直感について完全に解っている訳じゃないんだけど……………

「……………危険を感知する直感、それはまるで……………おっと、じゃあお答えするよー」

そして、私の質問を聞いたチエシヤさんは少し思案している様だったが、直ぐに思考を終わらせて私の質問に答えてくれました。

「とりあえず、これだけは言っておくねー……………この〈Infinite Dendrogram〉において現実の人間に危害や危険が及ぶ事は絶対にないよ。実はログアウト不可のデスゲームとかでもないし、その辺りは僕達管理AIの誇りにかけて保証するよ。この〈Infinite Dendrogram〉は君達にとっては最初から最後までただのゲームだからね……………あ、でも、ゲーム内で経験した事によつて起きる精神的なストレスとかは別だからー。ゲーム内で何を感じるのかは君達の自由だからねー」

成る程、とりあえずチエシヤさんの言葉には嘘は無いと思うし、その言葉からは彼等なりの誠意を感じるかな……………直感に違和感があったけど私の命に関わる危険は感じないしね。

……………じゃあ、ここにしようかな？

「分かったよ、ありがとうねチエシヤさん……………それじゃあ設定をしていこうかな？」

「はーい。じゃあまずは描画選択ねー」

それから私は各種設定をこなしていった……………とりあえず視界は現実視、プレイヤーネームは事前に決めていた通りミカで。

後、容姿は現実をベースにいじる事も出来るとチエシヤさんが言ってくれたので、現実の私を中学生ぐらいに成長させた上で髪の色を銀に、目の色を赤にして、少しだけ顔付きを変えておこうかな？

「こんな感じでいいかな？」

「オツケー。じゃあ次は一般配布のアイテムを渡すよー」

そしてチエシヤさんから配布アイテムのアイテムボックスを貰い、初心者装備として適当な洋服と初期装備の棍棒を貰った……………ちなみに棍棒の形状は某国民的RPGに出て来る『こんぼう』みたいな感じである。まあ『ひのきのぼう』よりはマシでしょう。

……………あ、後は路銀として五千リル（リルはこのゲームでの通貨単位で一リルおよそ10円ぐらいらしい）を貰ったよ。

「さて、じゃあいよいよこのゲーム最大の見どころであるへエンブリオを移植するねー」

「おー」

そして、私は一通りの説明を受けた後にへエンブリオを移植して貰った……………第ゼロ形態だと左手にくっついている卵型だけど、孵化したら外れて紋章の刺青になるらしい。

……………どんなのが産まれるのかな？

「じゃあ最後に所属する国家を選択してくださいねー」

そう言ったチエシヤさんが机の上に地図を広げると、その地図の七箇所から光の柱が立ち上つてその中に各国の様子が映し出された。

……………正直、説明書で見たときよりも目移りしてしまっただけ……………

「アルター王国でお願い」

「オツケー。ちなみに軽いアンケートだけど選んだ理由はー？」

「以前までやっていたゲームがSFものだったから、今度は正統派ファンタジーものをやってみようと現実で兄と相談して決めてからだよ」

「そうなんだー」

ちなみに、後で所属国家を変更出来るイベントもあるらしいね。

「それじゃあアルター王国の王都アルテアに飛ばすよー」

「あ、最後に一つだけ……………このゲームに何か目的とかがつてあるのかな？」

……………この世界でなら私が昔から思っていた事を実現出来るかもしれないし、一応聞いておこうかな。

「何でもー」

「何でも？」

そう思つて聞いたらチエシヤさんがあつさり返して来たので、つい聞き返してしまつたよ。

……………そして、チエシヤさんは口調を真剣なものに変えてこう続けました。

「だから、何でもー。英雄になるのも魔王になるのも、王になるのも奴隷になるのも、善人になるのも悪人になるのも、何かするのも何をしないのも、∧Infinite Dendrogram∨に居ても、∧Infinite Dendrogram∨を去つても、何でも自由だよ。出来るなら何をしたらいい」

……………その言葉はまるで何かを語りかけている様で……………。

「君の左手にある∧エンブリオ∨と同じ。これから始まるのは無限の可能性。……………∧Infinite Dendrogram∨へようこそ。『僕ら』は君の来訪を歓迎する」

……………私はチエシヤさんのその言葉を聞いたからこそ、この無限の可能性がある世界でなら自分の才能と向き合う事が出来ると思える様になつたのでした。

最も、いきなり遙か上空からダイブさせられたのには色々と文句があつたけど……………。



2043年7月15日

## ログイン・へアルター王国

□アルター王国・王都アルテア南門前 レント

「青い空、白い雲、目の前にはまさにファンタジーな都市、そしてこれらの光景が現実と変わらないように見えるクオリティ、まさか本物のVRMMOだったとは」

なんとというか盛大な大言壮語をぶち上げて発売されたゲームへInfinite Dendrogram、正直言つてネタゲー枠で買ったけどどうも本物くさい……まあ、チュートリアルが終わったらいきなり上空からスカイダイビング（パラシュート無し）をやらされるとは思わなかったが……。

「三倍時間に関しては後で確認するとして……ん？ 何か上から……プレイヤー？」

「によわ~~~~~」

そのどこか聞き覚えのある声につられて空を見上げると、上空から一人の少女が降ってきた。その少女は上空から勢いよく落ちてきた後に地上スレスレで急減速して地面に着地した……俺の時も側から見ればあんな感じなのか。

「痛っ!!? くはないけど……まさかいきなり紐なしバンジーとは思わなかったよー。って五感すごっ!!? クオリティやばっ!!? やっぱこれマジもののVRMMOじゃん!!?」

なんか物凄く身に覚えがあるテンションの声のプレイヤーが落ちてきた。なのでちよつと声をかけてみることにした……俺の予想が正しければ一緒にこのゲームを買ったアイツだと思うのだが……。

「あくそこの君、プレイヤー名名前“ミカ”とか言わない？」

と、現実での俺の妹がゲーム内で良く使っているネームを出してみた。

「はい？ 私の名前はミカですけど……あーひよつとしてレント？」

「てゆうかマイブラザー?」

「ああ、俺の名前はレントだよ、マイシスター」

やはり我が妹様だったらしい。流石に勘がいいな。

「また本名をもじったその名前にしたんだ、私もそうだけど」

「まあ、いちいち名前を考えるのも面倒だからな。それで早速合流できたけど……とりあえず目の前のファンタジーな都市に行ってみるか?」

そう言つて、目の前にある城壁に囲まれて中心には白亜の居城があるファンタジーな都市を指差した。

「そーだねー管理AIのネコ<sup>チャ</sup>さんもこのゲームの事はあんまり詳しく教えてくれなかったしねー、まずは情報収集からかなー」

「チュートリアルでやった事はアバター作つて、初期装備もらつて、このへエンブリオを移植してもらったぐらいだからな。あ、俺の担当AIはダツチエスつていう女の人だったぞ」

そう言いつつ左手のへエンブリオを眺める。曰く、このゲーム最大の売りであるすべてのプレイヤーに与えられるユニークなモノ、らしいが……。

「いったいどんなへエンブリオが産まれるんだろうねー」

「さあな? いずれ解るだろう。それよりも入り口についたぞ」

そして都市の門の前についた。いや、間近で見るとまさに王道のザ・ファンタジーな街だなあ。……ん? あの人は門番……かな?

俺達二人が門の前で立ち止まっていると向こうから声をかけてきた。

「おい!!? その二人!!? “ジョブ” に就いていない者がなぜ外から来た。少し話を聞かせて貰おうか」

「ジョブ……つて何?」

なんか、門番っぽい人がこの世界の専門用語らしき言葉を含めながら話しかけてきた。よし、ここはこの世界の事について聞いてみよう。

「すみません、この世界に来たばかりであまりこの事をよく知らないんです。よろしければこの世界の事について教えてもらえませんか?」

か？」

「この世界」……？ ひよつとしてあんた達は「マスター」かい？」

「マスター」って何だろうか？

「マスターって何だろう？ お兄ちゃん知ってる？」

「いや知らない。とりあえず話を聞いてみよう」

俺達はこの世界で初めて会った門番さん（仮）に、この世界の事について色々聞いてみることにした。



あれからしばらくの間、門番さんの話を聞いた所によると、「マスター」とは「エンブリオ」に選ばれた者のことであり、絶大な力を持つ変わりに頻繁に別の世界にその身を飛ばされてしまうとの事。更に死の瞬間にも「エンブリオ」の力で別の世界に飛ぶことで生きながらえる事ができるらしい。ただし死んで飛ばされた場合は最低三日は帰ってこないのだとか。

また「ジョブ」とはこの世界の人間が就くことが出来る職業のよ  
うなもので、就くことによってレベルを上げることが出来るようにな  
って、ステータスを上げたりスキル覚えたり出来る。あと、この世  
界の ノンプレイヤーキャラクター N P C のことは「ティアン」と言うらしい。

………どうやら、このゲームでは俺達の様なプレイヤーをそんな  
風な設定でこの世界に落とし込んでいるらしい。

「ほえ、プレイヤーの事はそんなふうに言われているのか。………  
よく出来てるねお兄ちゃん」

「そうだな、死んだ時のことはデスペナの事か？ ……3倍時  
間が本当なら24時間ログイン出来ないってところか」

俺達がそんな話を話していると門番さんが真剣な表情をして話し  
かけてきた。

「ところで今後多くの「マスター」がこの世界に現れると聞いたのだ  
が、それは本当の事なのかい？」

「あくそれは本当の事ですね。この後たくさん来るでしょうし」

「そうか……なら君達はどうしてこの国来たんだい？　そしてこの国で何をするつもりなんだい？」

おっと、ちよつと雰囲気が変わったな、これは返答には気をつけないと……門番って事はこの国の治安維持組織に所属しているんだろうから、下手をするとこの世界の住人がプレイヤーに抱く印象が大きく変わるかもしれないし。

「えーと俺たちは……「はいっ!!? 私達はこの国に遊びに来ました!!? あと冒険とかしてみたいです!!?」っておいっ!!?」

ちよつマイシスター!!?　今はシリアスな場面だから!!?　そんな率直な!

「そうか……遊びと冒険か……。じゃあ君たちへマスターがこの国に害をなす事はあり得るかな？」

「あーそれは「私達はそんなことをするつもりはないけど、他のへマスター」の事は分かりません!!?」ってちよつとマイシスター!!?」

だから今シリアス!!?　この国のへマスターの扱いがヤバくなるルートいつてない!?!?

「そうか……へマスター」という括りではなく、へマスター一人一人を見て判断していかねければならない……と言う事か」

あつ、門番さんへの返答はこれでいいらしい……流石に少し焦りすぎたな、うちのミカがこの手の選択を間違えるはずが無いしな。

……どうも本物のVRMMOという物を前にして思った以上に興奮していたらしい。もうちよつと落ち着こう。

「そうですね、へマスターはこの世界では「自由」みたいですし」「自由」?」

ミカのその言葉に、門番さんが疑問の表情で聞き返した。

「はい、私達をこの世界に送り込んだ者はこう言いました。『英雄になるのも魔王になるのも、王になるのも奴隷になるのも、善人になるのも悪人になるのも、何かするのも何かしないのも、へInfinite Dendrogramを去つても、何でも自由だよ。出来るなら何をしたっていい』と」

「なるほど………そういえば……俺を担当した管理AIも『この世界での貴方たちは自由よ』とか言ってたな」

そう、そんな事をあの女性は言っていた。するとミカが、

「だからこの国に害をなすへマスターも出て来るかも知れませんが、この国を護ろうとするへマスターだつてきつといます」

と言った………つまりは“自由”それがこの世界でのへマスターの在り方になるのだろう。

「ふっ………そうか………冒険がしたいなら“冒険者ギルド”がこの国にはある。この道の先に案内看板があるからその指示に従えばいい、すぐに着く。そして………ようこそアルター王国・王都アルテアへ」

「はい、いろいろありがとうございました」

そう言つて門番さんと別れて、アルター王国・王都アルテアに入ることが出来た。



「いや、門番さんがいい人でよかつたね兄さん」

「そうだな………ていうか、いきなりあんな事言いだすから驚いたぞ」

まあ、ミカのことだから何か感じ取ったことがあつたんだろうが………。

「んーあそこでは素直に本当の事を言ったほうがいいような気がしたんだよね」

「まあ、お前が直感で最適解を選ぶのは何時ものことなのは解ってるけどな。………今思えばあの返答が一番良かったと俺も思うが」

そう言いつつ道を行くと看板が見えて来た、ふむ………ちよつと不安だったが字は読めるな。

まあ、門番さんとも話は通じていたし翻訳機能でもあるのかな？

「さあお兄ちゃん、いざ行かん冒険者ギルド!!？ 私達の冒険はここからだよ!!？」

「なんか打ち切りの漫画みたいなセリフだな」

そんな事を言いつつ、俺達は冒険者ギルドに向かった。

## 冒険者ギルドと初クエスト

□王都アルテア・冒険者ギルド レント

「そしてやってきました！ 冒険者ギルド!!?」

「妹よ、いったい誰に話しかけているんだ?」

ヤケにテンションの高い妹ミカと共に冒険者ギルドに来た俺レント。

とりあえずマイシスター、すごく変な目で見られているから騒ぐのはやめなさい。

「さあお兄ちゃん!!? まずはお約束のギルド登録だよ!!?」

「異世界転移系小説見過ぎじゃないか? とりあえずあそこにいる受付の人に話を聞いてみるぞ。あとあんまり騒ぐなよ」

と、テンションの高いミカに注意しておく。あんまり騒ぎすぎるて周りに迷惑になるからな。

「オツケー! すみませーん! この冒険者ギルドはどんなところで何が出来るんですか!!?」

「あんまり騒ぐなつつつてんだろ!!?」

全然分かったないだろ!!? ほら!!? 受付の女の人ちよつと困惑しているから!!?」

「はい、当冒険者ギルドは討伐、護衛、収集、雑事などの多岐にわたる依頼の幹旋所です。登録さえしてしまえばジョブによらずに依頼を受注できます。冒険者ギルドへの登録がお望みでしょうか?」

だが、そこは流石にプロなのか、すぐにこちらの質問に答えてくれた……………本当にうちの妹がすみません。

「はいっ!!? 冒険者登録お願いします!」

「はくもういいよ……………あつ、いろいろ騒がしくしてすみません、俺も登録をお願いします」

そう言つて謝りつつ、ミカと一緒に俺も登録をお願いした。

「はい、かしこまりました。それではお名前をお願いします」

「俺は『レント』でこっちは妹の…………」

『ミカ』です! よろしくお願いします!」

「はい、かしこまりました、レント様とミカ様ですね……………はい、登録が

終わりました。それでお二人はジョブに就いていないようですが、その場合受注出来る依頼は非戦闘系の雑事となります、よろしいでしょうか」

まあ、ジョブについていないレベル0の人間に討伐や護衛の依頼がまわされるわけがないか。しかしゲームの中で非戦闘系の雑事をやるのもなく。

「お兄ちゃん、私冒険とか戦闘とかのクエストがしたいんだけど」

「そうだな……あの、俺達今日この世界に来たばかりのへマスターへなのですが、ジョブにはどうすれば就くことができるのでしょうか？」  
「というか、俺達この世界の事は門番さんに聞いたことぐらいしか知らないんだよなあ。」

「へマスターへ!??あの伝説の!??……たしかに以前からこの国にいたへマスターへがもうすぐ多くのへマスターへがこの世界に現れると言っていたけど……はっ……!??失礼しました、ジョブに就く方法ですが条件の無いものであれば、主に各種ジョブに対応する施設で就くことが出来ます。ですが、今日この世界に来たばかりと言う事はどの様なジョブがあるのかはわかっていないのではないのでしょうか？」

うん、全然知らないです。

「あっはい、ほとんど分かりません」

「そうですか……ではお二人とも一つ依頼クエストを受けてもらえませんか？」

「依頼クエスト？」

おや？ 何か妙な話になってきたぞ？ いきなりクエストとか。

「はい、私達冒険者ギルドもへマスターへについてはあまり詳しくなく、貴方たちも以前からこの国にいたへマスターへとは違うようなので、そのあたりの話を詳しく聞きたいのです。また、各種ジョブについての解説と斡旋もそこですし、報酬も出します」

ふむ……いきなりへマスターへなんていう異物が現れたせいで、この国のティアンもだいぶ困惑しているみたいだな。

「ねえお兄ちゃん、私この依頼は受けた方がいいと思うんだけど」

「そうだな、俺もそう思う……わかりました、その依頼お受けします」

【クエスト「相談——アイラ・ローラン 難易度：二」が発生しました】  
【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

「ありがとうございます、それでは立ち話もなんですので個室にご挨拶します、こちらへどうぞ」

そうして、俺達はこのゲームでの初めてのクエストを受けることになった。

◇

「なるほど、やはりこれからこの国に来るへマスターは、以前からいたへマスター」とはだいたい違うようですね」

あれから俺達と受付嬢……アイラさんはへマスターやこの国、この世界のことについて色々な話を話し合った。さつき門番さんと話したこと以外にも、俺達の所持金や装備のことや、この世界にいられる時間、これから現れるへマスター達のことなどをわかる限り話した。

また、彼女からはこの国やこの世界の様々な常識や物事についてのことを教えてもらった。特に以前からこの国にいたへマスターであり、何年も前からこの国の決闘王者として君臨しているというザ・リンクス【猫神】トム・キャットの事は特に印象に残った。おそらくは運営側のテスターではないかと思うのだが……。まあミカは『運営は猫推しなのかな?』とか言っていたが……。

あと、へマスター同士の争いに関しては、他に被害が出ない限りはティアン側からはノータッチの様だ。まあ不死身のへマスターを縛るのは難しいだろうからな。だがへマスターが死んでからこちらの世界に戻ってくるには、セーブポイントを使う必要があるらしく、重大な犯罪を犯したへマスターに対してはそれを使用不能にすることによって、死んでから戻ってくる場所を「監獄」という隔離された場所にすることができるといふ。その事についてもミカは『へマスター専門のPプレイヤーキラーKとか沢山出て来そうだね……まあ死な安で重大犯罪犯すへマスターも出るだろうけど』と言っていた、俺も同意見であ



る。

「やはりへマスター」では長時間の護衛任務などは難しいようですね」

まあ、ログアウトのこととかがあるからなあ。

「そうだねー、でもへマスター」はティアンと違ってどうせ死なないんだし、命の危険が高い依頼とかを押し付けちゃえばいいんじゃないかな」

何かミカが物騒な事を言い出したぞ。まあへマスター」はどうせ死なないんだし別にいいんだが。

「オイオイ……まあ、その手の依頼でも高い報酬をチラつかせれば受けるへマスター」はいるだろうな」

「なるほど、へマスター」は不死であり、ティアンとは行動原理が違うことも考慮して依頼を斡旋する必要があるそうですね」

まあ、これ以上は俺達に出来る事はあまり無いだろうし、これからこの国に来るへマスター」が重大犯罪を犯さないことを祈るしかないかな。

「色々相談に乗っていただきありがとうございます。ではこれからジョブの紹介に移らせていただきますね。お二人は冒険がしたいとの事なので、就くのに条件のない戦闘用下級職を中心としたリストを用意しました。また報酬に関しては、選んだジョブにあった初心者用の装備をこちらから提供いたします。流石にその装備でモンスターと戦うのは難しいので……。あと一人三千リル程で初心者用の講習を受けることができます。冒険に必要な各種アイテムなども貰えるので受ける事をお勧めします」

「こちらこそ色々ありがとうございます!!？」  
いやーアイラさんは超いい人だなあ。美人だし。

さて、ジョブのリストはつと……ふむふむ……  
【戦士】、【闘士】、【剣士】、【狩人】、【斥候】、【魔術師】、【司祭】などなど色々あるな。さてどれにしようか………ん？

「ちよっ!!？お兄ちゃん!!？左手のへエンブリオ」が光ってるんだけど!!？」

「ああ！俺もだ!!？ひよっとしてへエンブリオ」が孵化するのか☑」

ジョブのリストを見てみると突然左手の第ゼロ形態の「へエンブリオ」が輝き出したのだ………まさか、このタイムミングで同時に!!? 「おおくへエンブリオ」がすごい光ってるくく!!? バツ……バ○ス!!?」

「いやそんなに光ってないからな。てか、ラピ○タや巨○兵みたいなのが出てきたらどうする」

アホな事を言っているミカは置いておこう………さて、俺達の「へエンブリオ」はいったいどんなものだろうか……。

## 兄妹の〈エンブリオ〉

□王都アルテア・冒険者ギルド レント

さて〈エンブリオ〉とは〈Infinite Dendrogram〉最大の特徴であり、プレイヤーのパーソナルにより千差万別化するオンリーワンのパートナー。

そのカテゴリはいくつかあり

プレイヤーが装備する武器や防具・道具型のTYPE：アームズ

プレイヤーを護衛するモンスター型のTYPE：ガードナー

プレイヤーが搭乗する乗り物型のTYPE：チャリオッツ

プレイヤーが居住できる建物型のTYPE：キャッスル

プレイヤーが展開する結界型のTYPE：テリトリー

これらのカテゴリ以外にもレアカテゴリや、〈エンブリオ〉が進化するとなれる上位カテゴリやオンリーワンカテゴリもあるよ  
by管理AI。

さて、これらの情報から俺の〈エンブリオ〉を見てみると……。

「ふむ……何も無いな」

あれから〈エンブリオ〉の輝きが消えた後は特に何も起きず、ただ  
“太陽を背負った人”のような紋章が左手に現れただけである。

「と……いうことは……「おっくんなんか出た!!? お兄ちゃんこれ!!

?」ん?」

そう言われて妙にハイテンションな妹ミカを見てみると……。

「見て見てお兄ちゃん! これどう思う?」

「すごく大きいです……とでも言えばいいのか?」

実際、ミカの手には約二メートル程の大きさの棍棒メイヌが握られており、その形状は長さ一メートルぐらいの棒に、高さ一メートルぐらいの殺意の高いデザインの四角錐がくっついてる感じだった。

「ふむ、某シリーズ物ロボアニメの主人公機の中に、こんな感じの武器があった気がするな」

「ああ、ビームが無くて実弾と鈍器で戦うヤツの主役機だね。  
………まあ、今の私と名前的には似てるかもしれないけど」

とまあ、大体そんな感じのデザインである。

「しかしそれ〈エンブリオ〉重くないのか？」

「うーん、不思議と重さは感じないんだよねー、片手でも持てるし、ちよつと持つてみる？」

たしかにミカは自身の〈エンブリオ〉を片手で持ち上げている。

「わかった……つてちよつ重い!!？無理だこれ!!？早く退けろ!!？」

「オツケー……つと、やっぱり〈マスター〉にだけ重さとか感じさせないタイプか〜」

「解っていたんだつたら俺に持たせるなよ……」

「いや〜何事も実験と考察は必要でしょ？」

ミカは特に悪びれもせずになそう言った。まったく……。

「そう思うなら、まず〈エンブリオ〉のステータス見ろよ……」

「そうだねー……ふむふむ……こんな感じだよ〜」

と、ステータスを操作して俺に見せてきた。

### 【激災棍 ギガース】

TYPE：アームズ

到達形態：I

装備攻撃力：200

装備防御力：50

ステータス補正

HP補正：D

MP補正：G

SP補正：G

STR補正：D

END補正：E

DEX補正：G

AGI補正：D

LUC補正：G

『保有スキル』

《バリアブレイカー》Lv1:

攻撃対象の防御系スキル効果・ENDへのバフ効果を減衰させる。  
減衰効果はこのスキルのLvと攻撃する際の自身の攻撃力に比例する。

パッシブスキル。

「ふむ、《エンブリオ》の重さを軽減する効果は書いていないな」

「それは《エンブリオ》の基本的な機能なんじゃないかな」

「まあ、そうでなければ《マスター》が生まれた《エンブリオ》を持ってない」なんて事態になってしまうからな」

「そうそう、だからさっきのは私が悪いわけじゃないよね？」

と、ミカはニヤニヤしながら言ってきた。まあこのゲームの仕様はまだ分からない事だからけだからな。

「はあくわかったから、とりあえずそれは物騒だからしまいなさい」

「はい」

そう言つて、ミカは左手の「棍棒を肩に担いだ巨人」の紋章に《エンブリオ》をしまった。

「それじゃあ次はお兄ちゃんの《エンブリオ》の番だね、早く見せて！」

「見せると言つても……俺の《エンブリオ》は多分テリトリーだからな……えーとステータスは……これだな」

その要望に答えて、俺も自身の《エンブリオ》のステータスを操作してミカに見せた。

【百芸万職 ルー】

TYPE：テリトリー

到達形態：I

ステータス補正

HP補正：G

MP補正：G

SP補正：G

STR補正：G  
END補正：G  
DEX補正：G  
AGI補正：G  
LUC補正：G

『保有スキル』

《光神の恩寵》Lv1：  
エクスベリエンクスブリスター

自身が獲得する経験値を最大で+100%する。

パッシブスキル。

ブリユーナク  
《空想秘奥》：

自身のHPを現在値の50%を消費し、ジョブに由来するアクティブスキル一つを強化する。

効果の強化度合は消費したHP量に比例する。

クールタイムは〈Infinite Dendrogram〉内時間で10分。

効果終了後、選択されたスキルは〈Infinite Dendrogram〉内時間で24時間使用不能状態になる。

アクティブスキル。

「お〜、VRMMO物小説主人公お約束の経験値ブーストチートスキルじゃないか(笑)、ルビもふってあってカッコいいね(笑笑)！」「やめい！……というかステータス補正が全部最低値なんだが……」

まあ、レベルが上がりやすくなっているからこんなものなのかな？

って、アイラさん無視して喋りすぎだな………なんかすごいこつち見てるし!!?」

「すみません！ 〈エンブリオ〉の孵化いきなりの事だったので……」

「いえ、大丈夫です。私も〈エンブリオ〉が生まれるところは初めて見たので驚きました。しかし、あの【猫神】の〈エンブリオ〉のとは随分違いますね」  
そう言つて、アイラさんは興味深かそうに俺達の左手を見ていた。

「まあオンリーワンがへエンブリオのウリだからね」

「そうだな……ってこれ以上アイラさんを待たせるわけにもいかないからな。さっさとジョブを決めるぞ」

さて、改めてジョブのリストを見て、その中から孵化したへエンブリオと相性が良さそうなのを選ぶか……よし。

「はいっ！ 私は【戦士】にします！」

「俺は【狩人】にします」

ようやく俺達は自分のジョブを決めることが出来た。

「かしこまりました、ミカさんが【戦士】、レントさんが【狩人】ですね。二つとも冒険者ギルド内のジョブクリスタルで転職出来るのでご案内します。あと初心者講習は受けて行かれますか？」

一人三千リルの初心者講習か……手持ちは五千リルだしなあ。

「お兄ちゃん、ここは受けた方がいい気がするんだけど……」

「なるほど、お前の直感がそう言っているなら受けたほうがいいか……わかりました、受けます」

まあ、ミカの勘が外れることはまずないからな。この世界で戦うのなら戦闘のコツとかを教えてもらう事も必要だろうし。

「わかりました、それではお二人の初心者講習を始めさせていただきます。担当はこの私、アイラ・ローランです。あとクエストの報酬は講習終了後にお渡しします」

アイラさんが担当か……いったいどんな内容なのかな？

## アイラさんと初心者講習

□王都アルテア冒険者ギルド・訓練場 【狩人<sup>ハンター</sup>】レント

あれから、俺達は冒険者ギルドのジョブクリスタルでようやく初の転職をして、今は訓練場でアイラさんの講義を聞いている。

「では、お二人が就いたジョブの事についてお話します。まず、ミカさんが就いた【戦士<sup>ファイター</sup>】は戦闘系汎用下級職の一つで、主に近中距離での戦闘を得意としています。主なスキルは《剣技能》《槍技能》《棍棒技能》などの近接戦闘用技能スキルを使用する武器に応じて取得でき、それらに対応するSP消費が低めのアクティブスキルも取得出来ます。他には《HP増加》《STR増加》などの物理系のステータスを固定値で上昇させるパッシブスキルや、《看破》《殺気感知》《持久力上昇》などの汎用スキルを最大レベル低めですが取得出来ます。また、ステータスはHP、STR、END、AGIが主に伸びます」

なるほど、【戦士】はその名の通り近接系のジョブらしい、妹<sup>妹</sup>もしきりに頷いている。

「そして、レントさんが就いた【狩人】は主に中遠距離での戦闘を得意としています。主なスキルは【狩人】システムのジョブスキルである非人型範疇生物<sup>モンスター</sup>に対して攻撃力を上昇させる《狩<sup>ハンティング</sup>猟》や、モンスターを倒した時のドロップアイテムの質を上昇させる《狩人の流儀》を取ることができます。武器系のスキルは《弓技能》《投擲技能》などの遠距離戦闘用技能スキルを取得でき、それらに対応する威力に優れた単発のアクティブスキルや、相手に状態異常を与えるアクティブスキルを取得できます。また、近接用のスキルは《短剣技能》及びそれ用の防御用や作業用のアクティブスキルも取得できます。他には、《生物索敵》《看破》《危険察知》《殺気感知》などの索敵系スキルや、《罨設置》などの罨系スキル、《気配操作》などの隠密系スキルを最大レベル低めで取得できます。ステータスはSP、AGI、DEXが伸びやすいですね」

ふむふむ、その名の通りに狩猟で使える技術を覚えられる感じか。「さて、お二人には自分たちのジョブで使う武器の訓練をしてもらい



ます。ミカさんはへエンブリオと同じ棍棒<sup>メイヌ</sup>を、レントさんは、弓、投擲、短剣の訓練を一通りやつてもらいます。それが終わったら私と軽く模擬戦をしましょう。ああ、私はこれでも戦闘系のジョブで合計レベル300を越えていますので心配ありませんよ。武器も訓練用の物ですし」

へえ、アイラさんそんなに強かったのか……よし、それじゃあ訓練を始めますか。

◇◇◇

□冒険者ギルド訓練場 「戦士」ミカ

そんなわけで今、私はアイラさんとの模擬戦で叩きのめされ訓練場の隅で座りこんでいます。

いや、最初の武器の訓練は普通に指導してくれたんですよ。私は棍棒の素振りをして悪いところを直してもらったり、お兄ちゃんは弓や投擲での当てをしたり短剣の素振りをしていましたし。

風向きが変わったのは、しばらく時間が経ったあとにアイラさんが「二人共だいぶスジがいいですね。そろそろ軽い模擬戦で戦いの立ち回りを教えて起きましようか。ああ、ミカさんはご自分のへエンブリオを使っても構いませんよ」と言ってからです。

それから私はへエンブリオを使って模擬戦をしたのですが……「武器の振り方が大振り過ぎますね、へエンブリオが重さを感じないはいえ、それではあたりませんよ」とか「ずいぶん勘が良いようですが技術を磨かなければ戦いできませんよ」と言われながらボコボコにされました（その割にHPが全く減っていなかったので、そういうスキルでも使っていたのかな？）。

まあ、戦う前からアイラさんが強いことは解っていたし、遠い勘でもここで指導を受けた方がいい感じだったので別に問題はないけどね！ しかし、まさかアイラさんがここまでスパルタだったとは……（近い勘では少し嫌な予感がしていたけど……）。

で、今はお兄ちゃんがアイラさんと模擬戦を……「ぬわ——っ！！

？」あ、お兄ちゃんが吹っ飛んだ。

「二人共本当にスジがいいですね、おかげで少し本気を出してしまいました」

と、息一つ乱していないアイラさんが声をかけてきた。やっぱり300もレベル差があつて、技術にも圧倒的な違いがあるとどうしようもないね。

「そうですね……少し休憩したら実戦訓練に移りましょうか」

……………実戦訓練？

◇

「さて、休憩も終わりましたし実戦訓練に移ります」

実戦訓練と言つても、何と戦うんだろう？

「はーい、実戦訓練つてモンスターと戦つたりするんですか？」

「いい質問ですねミカさん、その通り、モンスターと戦つてもらいます。ただし、戦うのはこの【ジュエル】の中のモンスターですが」

そう言つて、アイラさんは右手を掲げ、そこについた薄い宝石のようなものを私達に見せた。

「この【ジュエル】は所有するモンスターを仕舞うことができるアイテムです。今回はこの中にいる訓練用に作られた「インスタントモンスター」と戦つてもらいます。ああ、訓練用に作られたものなので【ジュエル】から出したら十五分程度で死んでしまいます。なので倒してしまつても構いません」

ふーん、モンスターを作つたりとかもできるんだ……。

「それではお二人とも武器を構えてください……………行きますよ……………  
喚起<sup>コール</sup>——【チュートリアル・クリーチャー】」

そう言つたアイラさんの【ジュエル】から出てきたモンスターは……………SFものの映画に出てきそうなグロイクリーチャーだった。

「つてか、グロ過ぎないか？」

「人によつてはトラウマものだよね〜これ……………っ！ 来るよ!!？お兄ちゃん!!？」

そうして私達の、この世界に来て初めてのモンスターとの戦闘が始まった。



□冒険者ギルド訓練場 【インストラクター教導官】アイラ・ローラン

(ふむ……やはり「マスター」という存在は、不死身である事以外にもいろいろと規格外ですね)

そう考える彼女の目の前では、レントとミカ兄妹と【チュートリアル・クリーチャー】が戦いを繰り広げていた。

まず、飛び掛かってきた【クリーチャー】をミカが自身の「エンブリオ」棍棒で横に弾き飛ばし、そこにレントが後方から弓を射かけていく。矢に【クリーチャー】が怯んだところにミカが棍棒を叩きつけた。

(ミカさんの「エンブリオ」、私達テイアンが同じような物を使いたければ……STRに長けたジョブで合計200レベルほど必要でしょうか。それにレントさんの「エンブリオ」……獲得経験値を増加させるスキルなんてほとんどのテイアンが欲しがりますね)

命が一つしかないテイアンにとって、レベルを上げることは非常に困難を極める。

また、獲得経験値を増量させるスキルも、彼女自身がメインジョブにしている【ジャーナリスト教導官】や【ジャーナリスト記者】などのごく一部でしか取得できず、その効果もそこまで劇的ではない。

そう考えている間にも、棍棒の一撃に耐えた【クリーチャー】が腕を振りかぶり攻撃を仕掛けるが、ミカは相手が動き出すよりも早くその場から跳びのき、そこにレントが再び矢を射かけていた。

(ミカさんのあの動き……先読みしているというより予めどう動けばいいのか解っているような動きですね。彼女は「昔から勘は良いほうなので」と言っていましたし、その言葉にも嘘はありませんでした。……。レントさんの方は武術……特に弓の心得があるようですね。それと視野も広く他人……ミカさんの動きに合わせるのも上手いですね)

先程の模擬戦でも手加減していたとはいえ、合計レベルが300以上あって技量にも差がある自身の攻撃ミカは直撃だけは避けていたし、レントもこちらの動きがある程度は見えていたようだ。おかげで最後の方は少しだけ本気を出してしまった。

(彼らの話からすると……これらはへエンブリオ〜によらないセンススキルと見るべきでしょうね。ティアンでもその手のものを持っている人はいますし……やはり、へエンブリオ〜や不死性以外の技術などについてはへマスター〜もティアンと同じく個人差があるようですね。……まあ、この事については今後増えるへマスター〜達を見ればわかるでしょう)

そう思っていると、二人の連携に追い詰められている「クリーチャー」が見えた。

(あの【チュートリアル・クリーチャー】はあの恐ろしい見た目で戦えない者をふるいにかけるのが主な役割で、ステータスもHPとEND以外は【リトルゴブリン】と同等かそれ以下。しかし初心者<sup>下級職、職目</sup>ではその高いHPを削りきれず、時間切れが普通なのですけど……もう終わりそうですね)

目の前ではレントの放った矢が「クリーチャー」の足に突き刺さり、その隙にミカの大上段に振りかぶられたメイスがその頭に叩き落とされ、そのまま光の塵となっていた。

(あの見た目の相手にも躊躇なく向かって行けたのは、お二人の精神性によるものかへマスター〜の不死性に起因するものか判断が難しいですが……その事も今後へマスター〜達を観察することで判断していきましよう)

そうして彼女は戦いを終えた二人に声をかけようと歩きだした。



#### □冒険者ギルド訓練場 【狩人】レント

あれから初戦闘を終えた俺達は、しばらくの休憩の後にアイラさんから冒険者としてやっていく為のルールや注意事項、他のギルドの

事、王都にある各種施設の事、王国にある主な都市や場所の事、王都周辺のモンスターの情報などを教えてもらって初心者講習を終えた。「はい、お二人とも初心者講習お疲れさまでした。クエストの報酬、及び講習終了時に渡されるアイテムは今のお二人にあった装備と街の外での行動に必要な各種アイテム、それといくつかのポジションになります」

「はい、わかりました」

そう言つて、俺達はクエスト達成の報酬と各種初心者用アイテムを受け取った。

「それと最後に、お二人は〈マスター〉なので余計な言葉でしょうが……どうか生きてまたここに来てください、戻つて来れなかつた人も多くいるので……では、これで初心者講習を終わります」

「はいっ！　ありがとうございます!!？」



そうして、俺達の初心者講習は終わった。

最初に冒険者ギルドに来た時に受けたクエストの報酬として貰った装備は、ミカが【ライオット】シリーズという軽鎧を中心としたセット装備で《HP増加》と《ダメージ軽減》のスキルが付与されていた。そして俺が貰ったのは【ハンターアロー】という弓と何十本かの矢、投げナイフと短剣、スキルは付いていないものの初期装備よりはマシな皮鎧、コート、ブーツ、グローブである。

「それでお兄ちゃん、これからどうする？　冒険者ギルドのクエスト受ける？」

「そうしてもいいが………ん？　これは………」

「その前に一回ログアウトだ。さつきから空腹と尿意のアナウンスが来ている」

「解った、じゃあ一回ログアウトするねー」

「そうして俺達は一旦ログアウトした。」

## 王都の外へ

□王都アルテア冒険者ギルド 【狩人<sup>ハンター</sup>】 レント

その後、ログアウトして食事などの所用を済ませてから、再びへInfinite Dendrogramにログインした。

今は冒険者ギルドで初心者用の依頼<sup>クエスト</sup>を見繕っている。

「いっぱいあるねー、どれがいいかな？ お兄ちゃん」

「アイラさんは、東門を出てすぐのヘイースター平原でのモンスター討伐依頼が初心者にはオススメだと言ってたな……このあたりの【リトルゴブリン】【パシラビット】【ワイルドキャット】の討伐依頼あたりがいいんじゃないか？」

どのモンスターも、下級職一つ目の初心者でも討伐出来るモンスターだと言っていたな。

「グリーンスライム」の討伐なんかもあるよ、これも受けない？」

「スライムって物理攻撃無効とかじゃなかったか？」

……俺達は二人とも、まだ物理攻撃しか出来ないが……。

「私の【ギガス】のスキル<sup>バリアブレイカー</sup>なら倒せると思うよ？」

「ああそれがあつたな、じゃあ受けるか」

そうして俺達は「ヘイースター平原」に向かった。



ドガアツツツツ!!??

そして今、俺の目の前では一体の【リトルゴブリン】がミンチにきれ光の塵となった。

「ハアツハハハハ！ もつとだ、もつと（経験値とドロップアイテムを）よこせ〜！」

「いや、おまえ完全に採集<sup>バルバトス</sup>決戦になってるぞ」

なぜ、こんな事になっているのかという……簡単に言えば妹<sup>ミカ</sup>の攻撃力が「ヘイースター平原」のモンスターと比べて高すぎた事が原因である。

最初に遭遇した【パシラビット】の群れは、ミカの一撃で吹き飛び瀕死になったところを俺が弓矢と投げナイフで倒した。

次の【リトルゴブリン】の群れは俺が弓矢で牽制しつつ、ミカが習得したアクティブスキルも駆使して一体ずつ潰していった。

途中、【ワイルドキャット】が死角からミカに襲いかかってくる事もあったが、振り向きざまのアクティブスキルで倒されていた。

そして、【グリーンスライム】に至っては蠢いているところを潰すだけの作業だった（物理攻撃が効かないので俺は見ているだけだった）。

「まあ、【ライオット】のダメージダメージを10減らすスキル軽減で殆どの攻撃を受けられる狩場で、攻撃力200の武器を振り回せばこうもなるか……おーい、そろそろ戻ってこーい」

そう言つて、はしやいでいるミカを正気に戻す。

「はーい……いや〜鈍器を振り回すのつて結構楽しいね!」

「その発言はいろいろ不安になるんだが……まあいい、クエストは達成したから王都に戻るぞ」

なんか不安になつてきたから、一旦戦闘から離れよう。

「ほーい………とところでお兄ちゃんレベルは幾つになった? 私は10」

「俺は16だな………光神の恩寵主にスキルのおかげだが」

「やっぱへエンブリオ〜つてチートだよね〜……ん?」

ミカの目が虚空を………ここではないどこかを見る様な目になっていた、これは………。

「どうした、何か感じたのか?」

「うん……あっち………どうする?」

ミカは少し申し訳なきような顔で聞いてきた………やれやれ。

「行ったほうがいいんだろう? ……それに Infinite Dendrogram ここはゲームで、俺達は不死身のへマスターだ。どうせ死にはしないんだしもつと気楽にいけ」

「うん………こっちだよ、行こうお兄ちゃん!」

そうして、俺達はへイースター平原を走つて行った。



□〈ヘイースター平原〉【戦士<sup>ファイター</sup>】ミカ

私達は予感があつた場所へ走つていった。すると……「キヤアアア  
〜ツツ!!?」おお! 悲鳴が聞こえた。

「お兄ちゃん! 美少女の悲鳴だよ! イベントの気配だよ!」

「だからなろうの小説を読みすぎだろ……とりあえず行くぞ」

走つて行くと金髪の少女……左手に卵形<sup>第0形態</sup>の宝石<sup>エンブリオ</sup>をつけてるからヘマ

スター……が二体の「リトルゴ布林」追われていた。

「《看破》してみたがレベル0か……成る程」

「お兄ちゃん、そろそろヤバそうだから私行くよ、援護よろしく」

そう言つて、私はすぐに少女の元に駆け出した。

「わかつた……《空想秘奥》<sup>ブリューナク</sup>《ハンティングスロー》」

お兄ちゃんが投げた青白く輝く投げナイフが、少女を襲おうとしていた「リトルゴ布林」の頭を吹き飛ばした。あつ、もう1体が止まつて  
るね。

「さすがはお兄ちゃんいい狙いだね。……じゃあこれで終わりね《スマツシュ》」

そして、もう一体も私のアクティブスキルによつて倒された。

「ふう、これで片付いたね。あつ私はミカ、あつちはお兄ちゃんのレント、あなたと同じ《マスター》だよ、大丈夫?」

「え……? あ、はい、だつ大丈夫です……」

……ちよつとショックを受けているみたいだけど、大丈夫そうだね。

「まだちよつと動揺してるかな? ほらくお兄ちゃんが目の前で「リトルゴ布林」の頭を吹き飛ばしたから」

「目の前でミンチ作つたおまえが言うな」

そうやって敢えて馬鹿話をしていると、この少女も落ち着いてきたみたい。

「助けていただいてありがとうございます。私はエルザ・ウィンドベルと申します」



「ふうん、エルザちゃんか。ところで、あそこで何してたの？ このゲーム、ジヨブレベル制だからレベル0で外は危ないよ？」

と、落ち着いた様子の彼女に聞いてみる。

「お恥ずかしながら……………このゲームのリアリティに感動してしまつて……………つい、外を走り回つてしまつて……………」

「あくわかるよこのゲームのリアリティ凄いもんね！」

現実のネットでも、そんな理由でデスペナになって「二十四時間口グイン出来なくなつた」(泣)とか書いていた人がいたっけ。

「じゃあ、私達これから王都に戻るところだからついでに送つていつてあげるよ。いいよね？ お兄ちゃん」

「ああ……………冒険者ギルドまで案内すればあとはなんとかなるだろう」

「ええつ……………あつ……………かつ重ね重ねありがとうございます。よろしく願ひします」

こうして、私達はエルザちゃんを連れて王都に戻つていった。



□へノズ森林◇【狩人<sup>ハンター</sup>】レント

あの後、エルザちゃんを王都の冒険者ギルドまで送り届けた俺達は、そのままクエストの達成を報告した。

アイラさんからは「達成が早すぎますね、これがへマスター◇ですか」と言われながらも報酬を受け取り、今のレベルにあつた【ティール・ウルフ】の討伐クエストを受け、次の狩場であるへノズ森林◇で戦っている。

「さうて、お兄ちゃん索敵よろしくー！」

「ハイハイ、《生物索敵》……………五匹、こつちに向かつてくるな」  
「オツケー……………それじゃあいくよ!!っ！」

すると五匹の【ティール・ウルフ】が飛び出してきた。

まず、先頭の一体に狙いをつけ【狩人】のアクティブスキル《ハンティングアロー》で頭を射る。その隙にミカが二番目の相手に飛びか

かり……。

「キミがこの群れのリーダーだよな? 《スマツシュ》!」

そう言って相手を叩き潰した。

そして、俺はリーダーがやられ動きが乱れた「テイル・ウルフ」達に次々と矢を浴びせ掛け、ダメージを与えると共に動きを鈍らせていく。

「さて、あとは烏合の集だね! ……《スマツシュ》! ……《スマツシュ》! ……《スマツシュ》!!?」

そうして、残りの三体も倒された。

◇

「ふう……終わったか……だがコイツら妙に必死そうだったな、まるで何かか逃げてきたような……」

そう言っていると、森の奥を見ていたミカが声をかけてきた。

「お兄ちゃん……来るよ」

「……………はあ、気のせいなら良かったんだが……」

ミカの視線の先から現れたのは……1頭の全長五メートルぐらいの巨大な赤い熊だった。その頭上には……

【デミドラグフラットベア亜竜 血熊】? …… “亜竜級” のモンスターか!!?」

アイラさんの講義に出てきた亜竜級…… “下級職六人のパーティー、もしくは上級職一人” に相当する戦力を持つモンスター……!

「さてどうする? 逃げるか?」

「んー、逃してはくれなさそうだし……ここで放置したらテイアンの人に少し被害が出そうなんだよね」

……………なるほど、ミカがそう言うならどうにかしないとな。

「じゃあ戦うか。……なに、俺達はへマスターだ、諦めるのは死んでからでも遅くはない」

「そうだね、じゃあやろーか」

そうして、俺達のボスモンスターとの戦いがはじまった。

## V S 【亜竜血熊】

□へノズ森林〈【戦士<sup>ファイター</sup>】ミカ

『GUAAAAAAAAAAAAAAAA!!?』

私は【<sup>デミドラッグブラッドベア</sup>亜竜血熊】が振り下ろしてきた爪をギリギリで回避し、空いた懐に潜り込み【ギガス】で後脚をぶん殴った。

『AAAAAAAAA!』

私が懐にいるのを嫌がった【亜竜血熊】は、両腕を振り回して突き放そうとするも、その前に私はコイツから飛び退っていた。

その隙にお兄ちゃんの《ハンティングアロー》が【亜竜血熊】に突き刺さる。

『AAAAAAAAAAAAAAAA!』

攻撃されて怒った【亜竜血熊】はお兄ちゃんに向かっていくが、その進行ルート上に先回りしていた私が予め置いておいた《スマッシュ》で殴り飛ばした。

『AAAAAAAAAAAAAAAA!』

そうやって相手が怯んだ隙に私達は距離を取り、体制を立て直した。

(うーん、このままじゃジリ貧だね。ステータス差のせいでアクティブスキルを使わないとまともに攻撃が通らないし。……何よりHP高すぎ、これ削って倒すのは無理だね)

実際、さつきからこの繰り返しで戦っているが、HPは3割程度しか削れていなかった。

(そろそろ体力と集中力がキツくなってきたし……お兄ちゃんの次のスキルをキツカケにして勝負を決めよう)

そうして、私は息を整え次の攻撃……最後の交錯に備えた。



□へノズ森林〈【狩人<sup>ハンター</sup>】レント

(うん、相変わらずウチの妹<sup>ミカ</sup>はとんでもないな)



そこには頭部から大量の血を垂れ流した【亜竜血熊】がおり、血走った目でこつちに突っ込んできた。

「ちっ！ やっぱヘイトがこつちに移ったか……ほら、こつちだ熊公!!？」

とりあえず《瞬間装備》で短剣を取り出し、迎え撃つ姿勢を見せる。

『G A A A A A A A A A A A A A A A !!?』

「《ダガーパライ》！」

俺は振り下ろされた爪を短剣の防御スキルで受け止め……きれずに、手に持った短剣と、とつきに盾代わりにした弓を砕かれて、そのまま吹き飛ばされていき、近くの木にぶつかった。

「ぐはっ！ ……まあ、俺のステータスじゃこうなるか……だが役目は果たせたな」

そう言う俺の目には、ようやく敵に攻撃を当てられてご満悦の【亜竜血熊】……の死角から接近してきたミカの姿が見えていた。

「囀役ありがとうね、お兄ちゃん！ ……これで終わりだよ《チャージスマッシュ》!!？」

そして、ミカのチャージ時間に応じて威力を上昇させるスキルが【亜竜血熊】の血を垂れ流す程に傷ついた頭部に突き刺さり、そのまま打ち砕いた。



「あく疲れた。……ところでお兄ちゃん生きてる？」

「ああ、生きてるよ………HP残り二割も無いけどな」

俺は、急いでアイテムボックスから【ポーション】を取り出して飲みほした。

そうしていると、ミカが手に「箱」を持って近づいてきた。

「とりあえずおつかれ……あつ、さつき倒した【亜竜血熊】から宝箱が落ちたよ！」

「ハイハイ、お疲れ様……それはボスモンスターが落とす【宝櫃】だな。……さつきの戦いで武器が壊れたから、何か換金できるアイテムでも

出ればいいんだが……」

正直言つて、これはかなり有難い。

「じゃあ早速開けようか？」

「いや、とりあえず王都に戻ろう。さすがにこれ以上の戦闘はキツイ」「オツケー、私も今日はこれ以上の戦いはいいかな」

そう言いながら俺達は王都に戻って行った。

◇

王都の冒険者ギルドに戻った俺達は、クエスト達成の報告をしつつアイラさんに「亜竜血熊」と戦った事を伝えた。

アイラさんは「冒険者になってまだ一日程度しか経っていないのに、もう亜竜級のモンスターを倒すなんて………<マスター>とは本当に規格外な存在なんです。………しかし【亜竜血熊】が生息している場所は<ノズ森林>のもつと奥だったはずなのですが……人の血の匂いを覚えた個体だったのでしようか」と言われた。

また、ドロップアイテム【亜竜血熊の宝櫃】からは【亜竜血熊のコート・ネイティブ】と【怪力の指輪】が手に入った。

この二つのアイテムは、アイラさん曰く「【亜竜血熊のコート・ネイティブ】の方は装備スキルでHPとAGIが増加し、更に装備者の索敵系スキルを強化出来ます………しかし、これを装備するには合計レベルが150以上必要なので、今のお二人には装備できませんね。また、売れば三十万リルはするでしょう。【怪力の指輪】の方はSTRを固定値で増加出来るアクセサリーで、装備制限もないのでお二人でも装備出来ますね。売った場合は二万リル程でしょう」との事。

「で、お兄ちゃん、この二つはどうする？」

「コートは売った方がいいだろう。装備出来ない物を持っていても仕方がないし……武器を揃える金も欲しいからな。指輪はどうする？」と、ミカに聞くと少し悩んでから。

「その指輪は欲しいかな。ああ、指輪分のお金はお兄ちゃんに渡すよ。私はそんなに装備にお金はかからないし」

「別に割り勘でもいいんだが……そう言うならありがたく受け取っておく」

そして、俺達はアイラさんに紹介された雑貨屋で【亜竜血熊のコート・ネイティブ】とこれまでの狩りで手に入ったドロップアイテムを売り、その金で装備と消費したアイテムを買い込んだ。

◇

「いや〜初日から大変だったけど楽しかったね〜お兄ちゃん」

「そうだな……最初はネタのつもりで買ったゲームだったんだがな。確かに楽しいゲームだった」

まあ、ただのゲームとして見れば面白かったな……あまり深入りするのはいくなくも知れないが……。

「うん、そうだねー……まあそう言うスタンスの方が楽しめるかな〜」

「そう言う事だ、リアルよりこちらを優先する訳にもいかないしな。それじゃあ今日はもう終わら<sup>ログアウト</sup>だ」

「わかった、また明日もよろしくお兄ちゃん」

そうして、俺達の〈Infinite Dendrogram〉初日は終わった。

## 兄妹のデンドロ日和 エルザちゃんどパーティープレイ

□王都アルテア冒険者ギルド 【狩人】<sup>ハンター</sup> レント

今日も今日とて、俺はデンドロ生活を満喫中。今はギルドでクエストを見繕っている。

「それにしても、二日目から一気にログインする〈マスター〉が増えたね」

そう言うのは妹のミカ、今は手元でクエストのカタログをパラパラと開いている。

「そうだな……これも初日組の言葉とあの発表が原因だな」

あの発表とは、デンドロ発売翌日に行われた開発責任者「ルイス・キャロル氏」の中継映像の事である。それと初日組の言葉によつて〈Infinite Dendrogram〉が掲げた要素が全て真実であるとわかり、今や世界は空前のデンドロブームとなっている。

「こうしてみると、初日組の私達は勝ち組だね！ 今は転売ヤーとかも現れて、デンドロハードの値段が超高騰してるし！」

「ネットのオークションでハード1台二十万とかしてたしな。……元は一万なのに」

やっぱ転売ヤー怖い、オークション怖い。

「あと、〈マスター〉が増えるに変なことをやり出すヤツも増えるよね。………タンス開けたりツボ壊したりしたら、普通に窃盗や器物損害なのにね」

「ああ………まあそう言う、あんまりわけのわからない事をしてい<sup>〈マスター〉</sup>るヤツは騎士団にしょつ引かれていけるけどな」

今のところは〈マスター〉よりも熟練のテイアンの方が強いしな。

「それとネタに走る人もいるよね。さっきもクマの着ぐるみを着ている人とか見かけたし。テイアンの人達も困惑してたね」

「ゲームだからな、ネタバレレイに走る人は一定数出てくるだろ。」



「……………まあ、他人に迷惑をかけない範囲でなら別に良いんじゃないか？」

「そつちは実害が無ければ、ティアンの人達もじきに慣れるだろう。さてと、とりあえずクエストを……」  
「あつあの！ ひよつとしてミカさんとレントさんじゃありませんか？」  
「ん？ ……この声は……………」



□王都アルテア冒険者ギルド 【戦士】フアイター ミカ

「私達が声を掛けられた方向へと振り向くと……………」

「おゝエルザちゃんじゃん！ 久しぶり〜」

「はい、ミカさんもお久しぶりです」

「そこには、私達が初日にモンスターから襲われている所を助けた、エルザ・ウインドベルちゃん身長170cmぐらいの金髪の女性を引き連れながら立っていた。」

「エルザちゃんもクエスト受けに来たの？」

「はい、ここでお二人をお見かけしたので、以前助けて頂いたお礼をしようと思ひまして……あの時は本当にありがとうございます！」

「エルザちゃんと後ろの女性が深々と頭を下げてきた。」

「はい、どういたしまして。でもそんなに頭を下げなくていいからね〜。ほらっ上げて上げて〜！」

「そうだな、大した事はしていないし、そこまで畏る必要はないぞ」

「そう私達が言うのと、二人はようやく頭を上げた。」

「はい、でもこれは私がお礼を言いたかっただけです」

「うん、わかったよエルザちゃん。……………ところで後ろの人はどちら様？」

「さつきから気になっていたのでエルザちゃんに聞いてみる。」

「あつ、彼女は私のへエンブリオンです。…………アリア、挨拶してくれる？」

「はい、…………紹介に預かりました、TYPEガードナー【代行神騎

「ワルキューレ」と申します。マスターからは「アリア」の愛称を頂いております。お二人には私が産まれる前にマスターを助けた頂いたので、是非お礼を言いたいと思っております。改めて、その節はマスターを助けて頂き本当にありがとうございます」

「そう言つて、女性……………【ワルキューレ】のアリアさんが頭を下げてきた。」

「ふーん、人型のへエンブリオだったんだ。…………美女のへエンブリオを当てるなんてやるね！ エルザちゃん!!？」

「そう言つて、エルザちゃんは少し照れて、アリアさんは顔を上げてドヤ顔になった。」

「はい、私もアリアがいてくれて良かったです」

「ええそうですとも！ 私はマスターを守る最強のへエンブリオですからね!!？」

「うん、二人ともいいチーム見たいだね。…………あ、そうだ。」

「せっかくだから、私達と一緒にパーティーを組んでクエストに行かない？」

「えつと……………あの、いいんですか？」

「うん！ せっかくのゲームだし、いろんな人とプレイしたいしね！ いいよね？ お兄ちゃん」

「ああ、そちらが良いなら俺は別に構わないぞ」

「そう聞くと、エルザちゃんはとても嬉しそうな顔をした。」

「はいっ！ 私は大丈夫です！ 是非お願いします!!？」

「オツケー、じゃあパーティー組もうか。…………あつ私のメインジョブは【戦士】ね」

「俺は【狩人】だ」

「私は【従魔師】です」

「よかったですね、マスター！ ……あつ私は【剣士】です」

「そうして私達はパーティーを組み、適当な依頼を受けてから王都の外へ出発した。……………あれ？ へエンブリオってジョブに就けたっけ？」



「いや、ミカならしばらく放置していても大丈夫だと思うぞ」

「お兄ちゃん酷い!!?」

そう言いつつも、ちゃんとみんなと戦って「ランドリザード」は全滅させました。

◇

「お兄ちゃん！ 放置プレイとか酷くない!?!? 大変だったんだよ!!」

「悪い悪い、でもお前今回もノーダメージだったじゃないか」

「それはそれ！ これはこれだよ!!?」

そもそも、攻撃がまず当たらないコイツと、襲われているエルザちゃんなら当然後者優先なんだよなあ。

そういうも通りバカ話をしていると、エルザちゃんが申し訳なさそうな顔でこつちに来た。

「すみません！ 私が足を引つ張ってしまつて……」

「いえっ！ マスターは悪くありません！ 悪いのは陣形を乱してしまった私で……」

なんか凄く謝って来た。

「いや、パーティープレイならよくある事だ、そう気にしすぎる事はない」

「そうそう、気にしない気にしない。……今回悪いのは大体お兄ちゃんだし」

「うぐっ！ 否定しにくい事を……まあ、さつきエルザちゃんへのフォローが遅れたのは事実だからな。それに関しては俺のミスだ、済まなかった」

実際、フォローしなくても問題ないミカと天災児ずつと組んでいたせいで、他の人への注意が疎かになっていたようだしな。今後は気をつけなければ。

「いえっ！ 悪いのは戦えなかった私で……」

「いや、【従魔師】は直接戦うジョブではないだろう」

「そうそう、殴りタイマーなんて小説の中だけの話だよ」

VRMMO小説では結構いる物理型タイマーでも、現実のゲームではほとんどネタプレイだからな。

……まあ、この世界だと《エンブリオ》次第ではわからないが……。「はい……私、昔から運動は苦手で……でも、カッコよく戦うファンタジー物の話が好きだったのでこのゲームを始めたんですが……初心者講習の時も担当の人からも直接の戦いには向いていないと言われて……それでも、アリアが産まれてくれたお陰で何とかやってきたのですが……やっぱり向いてないのかなあ……」

「マスター……」

うーむ、思ったより落ち込んでいるな。たかがゲームなのだし、そこまで深刻に考えなくてもいいと思うんだが……。

「なら、普通にタイマーとして戦えるように戦力を増やせばいいんじゃないか？」

「戦力？」

「そうだよ、エルザちゃん！ タイマーは複数のモンスターを後方から指揮するのが王道なんだから！ エルザちゃんの護衛が出来るモンスターを手に入ればいいんだよ！」

「そうすれば、アリアさんも攻撃に専念出来る様になるだろうしな」  
そう言つて、俺達はエルザちゃんに出来る限りのアドバイスをしていった。どうもエルザちゃんはMMOは初めてだったらしく、俺達の話聞いてしきりに頷いていた。

「お二人とも、ありがとうございます。お陰でこれから何をすればいいのかかわかって来ました！」

「よかったですね、マスター！」

どうやら、2人とも持ち直したようだ。

「よし！ エルザちゃんが新しいモンスターを手に入れる為には、やっぱりお金リルが必要なのです。だから、早速クエストのターゲットを探しに行こう！」

「そうだな、じゃあ行くか」

そして俺達は《サウダ山道》を歩き始めた。

◇

そして4時間後……………

「全っ然！ ヒツジが見つからないんだけど！」

「本当ですね……………何処にいるんでしょうか？」

あれから、散々へサウダ山道へを歩き回っても、何処にも「サウダ・フアントムシープ」は見つからなかった。

「ネズミの方は直ぐに群れで見つかったのに。くそう、道理で報酬が高いと思ったらしく」

ミカの言う通り「ブルーレミングス」は直ぐに群れでいたところを見つけ、倒す事でクエストを達成出来た。

そのためもうひとつも直ぐに達成出来るだろうと思っていたのだが……………やはり高額の依頼には相応の訳があったらしい。

「お兄ちゃん《生物索敵》とかで見つからないの？」

「あれは一度遭遇したことのある相手でない精度が落ちるからな、まだスキルレベルも低いし……………お前の勘でどうにかならないのか？」

「私の勘は自分かその周りに危険が及ぶ事以外だとムラがあるんだよ。知ってるでしよ」

「そういえばそうだったな。……………いかな、少しイラついてきている……………話を変えよう。」

「そういえば最初から気になっていたのだが、どうしてアリアさんは《エンブリオ》なのにジョブに就く事が出来るんだ？」

「あ、それは私も気になってた」

ジョブは基本的に人間範疇生物にしか就くことが出来ず、ガードナーはカテゴリー的にはモンスターと同じ非人間範疇生物だったとネットに乗っていたが……………

「それに関しては「ワルキューレ」のスキルです」

「はい、「ワルキューレ」のスキル《オルタナティブ代行者》により、私はマスターと同じようにジョブに就くことが出来ます」

それによると「ワルキューレ」のスキル《代行者》は、ヘンブリオンであるガードナーにマスターと同じ下級職六つ・上級職二つの合計500レベルまでのジョブへ就かせる事が出来るようになるらしい。だが、カテゴリーは非人間範疇生物のままであり「従魔師」の《魔物強化》などのスキルも乗るとのこと。

「へ〜汎用性が高そうなスキルだね〜……私のは基本近づいて防御スキル抜いて殴るぐらいしか出来ないし」

「でも経験値が分散してしまうので、レベル上げが大変になるのですが……あれっ？ ……あの、皆さんあれは……？」

エルザちゃんが指差した場所を見てみると……そこに一匹のヒツジが草を食んでおり、その頭の上には「サウダ・ファントムシープ」の文字があった。

「つて、見つけた〜〜!!？」

『MEEEEEEE〜』

こちらと目のあった「ファントムシープ」はミカの叫び声に反応してその身を翻した。

「つて! 逃げるよお兄ちゃん!!？」

「お前が叫ぶからだろ! 《ハンティングアロー》!!？」

俺の放った矢は「ファントムシープ」の身体に当たり……そのまますり抜けた。

「すり抜けた! 幻術か! ミカツ!!？」

「解ってる! ……ここっ!!？」

ミカが何もないように見える場所に「ギガス」を投げつけた。すると、それに驚いた「ファントムシープ」が透明化を解いて飛び退いた。

「アリア! お願い!!？」

「分かりました! これで終わりです《トライスラッシュ》!!？」

そうして、俺達を散々手こずらせてくれた「サウダ・ファントムシープ」は、アリアさんの剣によって光の塵になった。



「いや〜【サウダ・ファントムシープ】さんは強敵でしたね！」  
「本当にな……………」

あれからかなり疲れていた俺達はそのまま王都に戻り、冒険者ギルドでクエスト達成の報告をして報酬を受け取った。

…………後から聞いた話によると、【サウダ・ファントムシープ】は弱いが発見が困難なモンスターで探すだけでも三日は掛かってしまうらしい。…………たった四時間で見つけた俺達は相当運が良かったようだ。

「さてと、報酬は一人四分の一ずつでいいかな？」

「いえっ！ アリアは私のへエンブリオ〜ですし…………」

「イイってイイって！ エルザちゃんはこれからタイムモンスターを手に入れるのにお金が必要でしょ〜。それに私達はお金にはそんなに困っていないし〜」

「まあ確かに、この前倒したクマのドロップ売ったお陰で懐には余裕があるな」

尚も洩るエルザちゃんの手には、ミカは無理矢理報酬の半分を押し付けていった。

「あの…………本当に色々ありがとうございます！ このお礼は必ずします!!？」

「そんなに気にしなくてイイのに…………ならフレコ交換しようよ！」

「フレコ……………ですか？」

「そうそう、それでいずれ私達が困った時に助けられればイイからさ〜」

「……………はいっ！ 分かりました！ いずれ必ず!!？」

そうして俺達はフレンド登録を交換し、またパーティーを組む事を約束して別れていった。



## プレイヤーキラーとの遭遇

□〈ヘウエズ海道〉【狩人<sup>ハンター</sup>】レント

「ん〜今日もクエスト大成功だったね〜お兄ちゃん」

「そうだな、最近は大分このゲームにも慣れてきたし、クエストも安定してこなせる様になってきたな」

今、俺達は王都西の〈ヘウエズ海道〉でのクエストを無事に終えたところだった。

「やっぱり〈エンブリオ〉が第二形態になると戦闘もやりやすくなるね！」

「お前はそうかもしれないが、俺の【ルー】は進化してもあまり強くはならなかったからなあ」

つい最近、俺達の〈エンブリオ〉は第二形態に進化した。

ミカの【ギガース】は武器としての性能とステータス補正が大きく上昇し、<sup>パリアプレイヤー</sup>スキルのレベルも上がった。そのため王都周辺の多少強いモンスターも、アクティブスキルと併用すればほぼ一撃で倒すことが出来る様になった。

「いや、お兄ちゃんの〈エンブリオ〉も<sup>光神の恩寵</sup>獲得経験値補正が+150%になったじゃない。それに新しいスキルも覚えたし」

「それは嬉しいんだが………ステータス補正は<sup>オールGのままだった</sup>一切変わらなかったし、新しく覚えたスキル………《<sup>オールスキル</sup>全技能》も今は意味のないスキルだしなあ………」

新スキル《全技能》の効果は、下級職・上級職で取得したジョブスキルを現在のメインジョブに依らずに全て使用可能にする”と言うものであった。

……デンドロのジョブシステムでは、現在就いているメインジョブに係るジョブスキルしか使えないため、このスキルがそういった制限を無くすスキルであることはわかるのだが………。

「それはつまり下級職一職目の今では何の意味もないスキル、という事なんだよなあ」

「まあまあ、お兄ちゃんならすぐにレベルが上がるし別にいいじゃない

い」

「……そうだな、そろそろ【狩人】のレベルも50になりそうだし、次のジョブを考えるか」

そうして俺達はいつも通りに王都への帰路についていった。

◇

喋りながらしばらく歩いて行くと、ようやく王都が見え出した。

……ふむ……しかし……

「ミカ、気付いているよな？」

「うん、さつきからずっと見られているよね？」

「ああ、………それに《殺気感知》にも反応があった」

「ふーん………その人達、いったい私達に何の用かな？」

ミカは【ギガス】を取り出し、俺は弓に矢を番えて視線を感じた方向に振り向いた。

「ゲツヘツへ、なーんだ、気付いていたのか」

「………」

すると、山賊っぽい格好をして手に剣とデカイ盾を持ったモヒカンの男と、頭に黒い覆面を被った男が物陰から出てきた。

「そっちの覆面の男、それだけ殺気を飛ばしてくれば嫌でも気づくさ」

「ていうか、気配の消し方下手すぎ、もっと上手く隠れたら？ ……で、一体何の用？」

まあ、大体察しはつくが……

「そりゃあ悪かったなあ、生憎隠密系のジョブは取ってなくてなあ。

……それと要件だが、俺達はいわゆるPプレイヤーKキラーってやつでなあ、取り敢

えず金目の物置いてくかキルされるか選べや。へマスターへ同士なら何やつても犯罪じゃないからなあ」

やつぱりそういう類いの連中だったか。……格好からしてそういうロールプレイうRロールPプレイをしているのが丸わかりだったしなあ。

しかし、さつきから黙って殺気をぶつけ続けているあっちの覆面の男はいったry「おい……」ん？

「貴様らは『カップル』か？」

「はっ☒」

「貴様らはカップルかと聞いてイルウ~~~~!!?」

「なんかいきなり叫び出したぞコイツ！ ってか、カップルって  
.....」

「いや、俺達はカップルじゃな r y 「黙  
レエエエエエエエエエエ!!?」ええ.....」

「貴様らは男女二人だけで行動していたあ~~~~！ つまり汝らカップル罪ありき!!? 加えてええ~~~~さつきから仲睦まじい空気を醸し出しながらくつちやべりおつてえ~~~~ギル<sup>有</sup>テイ<sup>罪</sup>!!?」

あーこれはダメだな。人の話とか聞かないぐらいに拗らせていらつしやるタイプだわ。隣のモヒカンの男も呆れた顔をしているし。

「我が名は『ポッチー』!!? 貴様らの様な悪しき存在をこの世から一片残さず爆☆滅させるモノなりい~~~~!!? 出でよお~~~~  
〜【ベンヌヌウウウウ】!!?」

すると、男の左手から小さな青い鳥が現れた。あれは.....ガードナーの「エンブリオ」か!?!?

「フウフハハハハアアア~~~~!!? さあ！ いけえ〜い【ベンヌヌ】よ！ あの忌々しいカップルを爆☆殺するのだあああああ~~~~

!!? 《爆・炎・鳥》!!?」

その声と共に青い鳥.....【ベンヌ】が炎をあげながらこちらに突っ込んできた。

「お兄ちゃん！ 撃つて!!?」

「ちいい！ 《空想秘奥》！ 《ハンティングアロー》!!?」

俺の放った青白く輝く矢が、炎をあげる【ベンヌ】に直撃し.....ドツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?

その結果起こった大爆発に俺は吹き飛ばされた。



■ 〈ウエズ海道〉 【戦士<sup>ファイター</sup>】モヒカン・デイシグマ

「ハアーツハツハアー！ この世に蔓延る悪しきカップルをまた1組消しとばしたゾオオ〜!!？」

あー……まーたボツチーの悪い癖が出てるな………全く、さつきもオレのへエンブリオのスキルで爆発を防がなかったらこつちまでヤバかっただろうに………

「おいコラ、自分達の近くでそのスキルを使うなっついても言ってるだろ………つて、聞いてねーし」

はあ……<sup>ボツチー</sup>コイツも以前まではこんな性格はしてなかったんだけどなあ………

こうなつた理由は現実<sup>リアル</sup>で付き合っていた彼女に盛大にフラれたのが原因なんだが………まさか、デンドロ内で男女ペアのへマスターを片っ端から爆殺する様になるとはなあ………

まあ、オレもリアルでのストレス発散の為に野盗ロールプレイなんてしてるから人の事は言えないが。

「取り敢えずあの二人から金目の物をryへえ？ 誰に何をするって？」………なっつー！」

爆煙が晴れた其処には、二人組の片割れである白髪の少女が立っていた。

「又ウアゼだあああああ！ 何故生きているうう〜！」

「ん？ だつてお兄ちゃんのお陰で爆発自体は遠くで起きたし、あと距離を取って伏せていけば問題なかったよ？ ……あと、私とお兄ちゃんはカップルじゃなくて血の繋がった兄妹だからね」

チツ、途中で【ベンヌ】が撃ち抜かれた所為で威力が足りなかったか。

「だがヨオ、頼りのお兄ちゃんは其処で伸びてるぜえ〜」

もう一人の金髪の男は地に伏せたままピクリとも動かない。《看破》で見るとHPも大分減っているしおそらく【気絶】しているんだろう。

「ん？ お兄ちゃん？ ……ふーん、別に問題ないかな………だつて私の方がお兄ちゃんよりも強いからね。……だいたい、そつちの覆面の人はさつきへエンブリオを自爆させたからもう使えないでしょ

？」

そう言つて、地に伏せた男に顔を向けた少女は、すぐに手に持った大型のメイスの様なへエンブリオを構えこちらに向き直った。その表情は非常に鋭く、すぐにでも此方へ飛び掛かつてきそうだった。なので、オレも少女に向かつて自身のへエンブリオを構えた。

「フウフハハハハアアア！ 私の【ベンヌ】の攻撃に耐えたコトは褒めてやろう!!?だがああ【ベンヌ】のスキルが自爆だけだと思つたら大間違いだアアア〜！ さあ甦れ《再<sup>リ</sup>誕<sup>ボ</sup>》《ハンテイングスロー》コヒュツ！」

「なにい!!?」

ポッチーの喉には何処からか飛んで来た1本の投げナイフが刺さつており、その所為でスキルの発動は中断されていた。

……そしてナイフが飛んで来た方向を見ると、【気絶】したと思つていた男が何かを投げた姿勢で起き上がっていた。

「あの野郎っ！ 実は【気絶】なんてしてなry「はい隙あり《スマツシュ》なあ!!?」

声に反応してポッチーの方を見ると、男に気を取られていた隙に接近していた少女が、手に持ったメイスでその頭を叩き潰しているところだった。

【パーティーメンバーへポッチーが死亡しました】

【蘇生可能時間経過】

【へポッチー】はデスペナルティによりログアウトしました】

そんなアナウンスが、ポッチーが死亡した事を伝えてくる。

「さて、一人目は終わり。……次はそつちか」

ポッチーをキルした少女が此方に向き直る。その表情は完全な無表情だった。

「ヒイツ！ セツ 《七<sup>セブン</sup>の青壁<sup>シヤッター</sup>》!!?」

その表情に怯んだオレは自身のへエンブリオ……【アイアス】のスキルを発動して少女との間に青い光の壁を作り出した。

この《七<sup>セブン</sup>の青壁<sup>シヤッター</sup>》は強固な光の障壁を作るスキルだ。その防御力はポッチーの【ベンヌ】の自爆も防ぎきるほど！ これで隙を作つて逃

r y「邪魔、《スマッシュ》」  
ガツシヤアアアアアン!

そこには少女が無造作に放った一撃によって、鉄壁の筈のスキルがまるでガラスであるかの様に砕け散る光景があった。

「なっ! 何でこんなあつさり y 「隙が大きすぎだ《パラライズアロー》」がツ!?!?」

その光景に動揺していると二の腕に矢が突き刺さり、その後すぐに体が動かなくなつた。

「こひえは「麻痺」まふい?」

「ふむ、流石に【麻痺蜂の矢】を使うと効果が早いな」

そんな声と共にメイスを持った少女が近づいて来た。

「ま待っつひえ……」

「ん? そつちが先に仕掛けて来たんだし……それに《マスター》なら別に死んでもいいでしょ?」

そんな言葉と共に無表情で赤い目を光らせた少女が手に持ったメイスを振り下ろし……

【致死ダメージ】

【パーティー全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】



□《ウエズ海道》【狩人】レント

「やれやれ、傍迷惑な連中だったな」

「そーだねー、あつアイツらが落としていったアイテムがあるよ! 拾つところ」

PKとの戦闘を終えた俺達は【ポーション】でHPを回復させつつ、連中が落としていったアイテムを拾っていた。……うーむ、大した物は落とさなかつたな。これじゃあ【ポーション】代を補填出来るかどうか……

「しっかし、カップルに間違われるとはね〜。いや〜私が美少女過ぎるのが悪いのかな〜」

「アバターがリアルから大分弄られているからな、身長とか」

「お兄ちゃんひど〜い！ 身長と髪の色と目の色ぐらいしか変えてませ〜ん！」

しかし、さっきはコツチの策が上手くハマったな。

「しかしお兄ちゃん、気絶したフリとかよくやるねえ。……私はパーティー用の簡易ステータス画面で気づけたし、それに合わせて立ち回ったけど」

「有効な手ではあっただろう？ 連中の《看破》では俺の状態異常までは判らなかつたようだし」

今回の戦いはミカの「ギガース」がモヒカンの《エンブリオ》に相性で勝っていたり、俺のスキルで覆面男の《エンブリオ》の爆発の威力がある程度抑えられたことが勝因だったのだろう。

「やはりデンドロの戦いは相性が重要だな」

「そーだねー、あと獲物の前で舌舐めずりとかは三流のやる事だよね〜」

「まあ、わざわざ俺達の前に出ずあの《エンブリオ》で奇襲して爆発させていれば良かったのにな」

そんな話をしつつ俺達は王都への帰路に戻っていった。

## ミカとクマさん

□〈ヘノズ森林〉【戦士<sup>ファイター</sup>】ミカ

「あるーひー、もりのーなカー、くまさんーにー、であーったー」

私は今、歌いながら一人でヘノズ森林を歩いている。………えっ

！ お兄ちゃん？ お兄ちゃんは私とは別の所でジョブクエストを受けてるよ。別に、何時も一緒にデンドロをプレイしてるわけじゃないしね。それにお兄ちゃん一つ目の下級職である【狩人<sup>ハンター</sup>】をカンストして、二つ目のジョブ【司祭<sup>プリースト</sup>】に就いたからそのレベル上げも兼ねてるんだけど。やっぱり獲得経験値が増えるのはチートだよね。

そういう訳で私も戦士系のジョブクエストを受けようと思ったんだけど……戦士系、と言うか前衛物理職のジョブクエストを受けるには、ある程度の実力がある事をギルドに証明しなきゃならないみたいなんだよね。確かに前衛物理職のジョブクエストは、殆どが討伐・護衛系だから実力のない人には任せられないだろうけど。まあ、実力をギルドに証明するためのジョブクエストもあつたし、私もその中から指定されたモンスターの討伐のクエストを受けている最中なんだけどね。

「でもやっぱり、お兄ちゃんがいないと狩りの効率は落ちるよね。特に索敵面で」

ここヘノズ森林の奥地には擬態や隠密に優れたモンスターが生息しているからね。さらにそういった相手は状態異常を使って来ることも多いし。【狩人】のジョブに就いているお兄ちゃんが居れば、そういったヤツらもちろから狩りに行けるんだけど……まあ、そういった連中の奇襲に関しては特に問題にはならないんだけど。

むしろこの森の中で私にとって厄介なのは、仲間を読んだりして物量で襲い掛かって来るタイプなんだけど。私の戦い方は一体一体メイスで相手を叩き潰していくスタイルだから、どうしても相手の数が多いと対処しきれないのが出てくるし。やっぱそういう時にはお兄ちゃんのフォローが無いとキツイ。

まあ、そういった連中に対処できる人にとって、此処は相当いい狩



場らしいんだけどね。

「私も対処はできるんだけどね………ん？ ……おつと後ろかな？ 《スマツシユ》」

振り向きざまに放ったスキルが、《透明化》のスキルを使って襲い掛かってきた「レッサーカメレオンバジリスク」を叩き潰した。

……まあこうやって下手な歌や独り言で敵を誘き寄せて、それを「近い勘」で把握して返り討ちにする………というやり方で今は狩りをしている。

「あつ、「レッサーカメレオンバジリスク」は指定されたモンスターのの中に入っていたね。ラツキ〜」

まあ、コイツも「遠い勘」に少し反応があったから選んだんだけど。

………私が生まれつき持っている勘には主に二種類ある。一つ目は自分や周りに降りかかる直近の危険を感知して、それをどうすれば回避出来るのかを示す「近い勘」。もう一つはいつか遭遇する危険に対応するための行動を示す「遠い勘」………正直言つてコッチの勘は私にもよくわかっていないし、反応も大分曖昧に感じる………がある。

………この前エルザちゃんのピンチに反応したのは「遠い勘」のほうで、これまでのパターンからするといつか私に降りかかる危険に対してエルザちゃんが大きな役割を果たすという感じだと思っただけ………

「『遠い勘』の方は変な方向に反応することもあるからなあ………今も反応してるし」

その反応は私をこの森の奥に行かせたいようだった。

「まっしょうがない、所詮ここは私にとってはゲームの世界だし気楽にいけますかー！」

そうして、私は森の奥へと足を踏み入れていった。



「……………あれ、何？」

そこで目にした光景は……………何とも言葉にし難いモノだった。

『クマ——ツ！撃つても撃つてもキリが無いクマ！一体この蟲どもはどれだけ大量にいるんだクマ!?』

そこには様々な種類の大量の魔蟲系モンスターが、ガトリング砲を装備した二足歩行の喋るクマを包囲しているところだった。

……………一瞬モンスター同士の争いかと思っただけど、よく見るとあつちのクマは着ぐるみだし頭上に名前もないから多分へマスターかな。…………普通ならクマの人が蟲たちにあつさりやられそうなもの何だけど…………ガトリング砲の殲滅力と周辺の地形を利用した立ち回りでむしろ圧倒している。…………と言うより、あれは蟲たちの動きを完全に先読みしているね、あれだけの立ち回り私でも出来るかどうか……………

まあ、あの蟲たちの動きも明らかにおかしいしね……………さつきから大量に倒されているのに1匹たりとも逃げようとしていないし……………それも同じ魔蟲系と言うだけで全く違う種類のモンスター達が。

「うーむ、あの蟲たちの動きは明らかにおかしいね……………まるで何かに操られているような……………おっと」

『クマツ×その少女!?そつちに何匹かいったクマ!』

どうやら蟲たちが私にも気づいたらしい。……………とりあえず目の前に迫ってきた【ポイズンホーネット】を打ち払い、死角から飛び掛かってきた【ハイドスパイダー】をその勢いを利用した一撃で叩き潰した。そして、そのまま周りにいた蟲たちを殴り倒して捌きつつクマの人と合流した。

「へーい！ そのクマさん！ 悪いけどチョット横入りするよ!!? 偶々ここに通りがかったらこの騒ぎに巻き込まれちゃってね!!?」

『へえ……………いや、むしろ一緒に戦ってくれと助かるクマ。俺の攻撃が届かない部分のフォローをお願いしてもいいクマ?』

「オツケー! ……………とところでクマさんお名前は? 私はミカ! 【戦士】をやってるよ!!?」

『俺の名前はシュウ・スターリングだクマ、【壊屋】クラッシュヤをやっているクマ』  
「これが私と……………後の〈超級〉、〈アルター王国三巨頭〉の一人」  
シュウ・スターリング」との出会いだった。



『あーやつと片付いたクマ……………いくら何でも数多すぎクマ……………』  
「ホントにね……………」

あの後、主にシュウさんがガトリング砲で蟲たちを薙ぎ払いつつ、私が攻撃範囲の外や死角から迫るヤツを潰していく形で戦って、どうにか包囲していた連中を全滅させた。……………やっぱり範囲攻撃が出来る殲滅能力がダンチだね！

……………まあ、コイツら数は多かったけど行動パターンはほとんどただこつちに向かって来るだけだったので、後半は殆ど作業だったんだけど……………やっぱり数多すぎ！

『いやー、ミカちゃんがいってくれて助かったクマ……………流石にあの数を1人で相手にするのはキツイクマ』

「さっきの戦いかたを見る限り、一人でも時間をかければ大丈夫そうだったけど……………それよりも《看破》で軽く見てみたけど、コイツら全員【魅了】の状態異常にかかっていたよ」

『なるほどな、さっきのコイツらの行動はそれが原因か……………つまり蟲たちを【魅了】したヤツはまだ残っていて、ソイツが俺達を狙ってくるなら疲弊した今を見過ごすことはないってことか』

ガサガサガサ！

その言葉に応えた訳じや無いだろうけど、森の中から何かがかつちに向かって来る音がした……………すぐに私とシュウさんは戦闘態勢を取ってそちらに向き直った。

『KIEEEEEEEEE!!?』

そうして森の中から現れたのは全長五メートル程の白いカマキリだった……………頭の上には【テンプレーション・マンティス】の文字があった。





『そこでうつかり間違つて何も変えずに決定したクマ』

「……………クマー」

ああうん、それじゃ着ぐるみは脱げないよね……………デンドロは現実視だとリアルと変わらないし……………

「ていうか管理A Iは対応してくれなかったの？」

『……………その時担当した管理A Iが面白がつて変えさせてくれなかったクマ……………おのれ！ ハンプテイ!!？』

管理A Iにも色々いるんだね……………チエシヤさんはあたりだったのかな……………

『その後もこの何の効果も付いていないネタ装備の着ぐるみ買うのに初期費用がほぼ全部吹き飛ぶし、ティアンの人達からも変な目で見られるから各種施設も利用しにくいし、同じへマスターからネタプレイヤー扱いされるし、それでヤケになつて“いつそのまま着ぐるみキャラを貫いてやる！”と語尾をクマ語尾に変えたりしたけど正直キツイクマ……………』

「あ、あはは……………でもクマ語尾は似合つてるよ？」

『ありがとうクマ……………』

うーん、すごい苦勞してるなあシユウさん……………あつそうだ。

「せっかくだからフレコ交換しようよ！ シユウさんとはまた一緒にパーティーを組んで見たいし！」

『それはかまわないクマ……………ありがとうクマ』

そうして、私達はお互いにフレンド登録をした。

「じゃあ私は達成したジョブクエストの報告があるから……………またね！ シユウさん！」

『おう、また会おうクマ』

こうして私とシユウさんの初めてのパーティープレイは終わったのだった。

## 兄妹のアルバイト

□王都アルテア冒険者ギルド 【フリーリスト司祭】レント

「アルバイト？」

今日も冒険者ギルドに来ていた俺と妹は、とりあえず討伐系のクエストを受けようと思っていたのだが、そこでアイラさんに別のクエストの依頼を出された。

「はい……………実は私の母が営んでいる雑貨屋で急に欠員が出てしまつて、それでアルバイトを募集したのですが人が集まらず……………どうかお願い出来ないでしょうか？」

ちなみにクエストの内容はこんな感じだった。

難易度：一【アルバイト→マリイの雑貨屋】

【報酬：時給300リル】

『時間は約8時間を予定しています。初心者も大歓迎！ とてもフレンドリーな職場です』

『※ 働きに応じて特別報酬もあります』

んー……………現実換算で時給三千円と考えれば割りのいいバイトと言えなくもないんだが……………こう……………紹介文が……………

「アイラさんには何時もお世話になつてるしね！ 私は受けても良いよ。たまにはこういうのも面白いし！ お兄ちゃんは？」

「……………うん……………まあゲームだし大丈夫か……………わかりました、受けます」

そう言うと、アイラさんは嬉しそうな表情をした。

「ありがとうございます。では雑貨屋への地図を出しておきますね……………どうかよろしくお願いします」

こうして、今日のクエストは雑貨屋でのアルバイトになった。



□王都アルテアへマリイの雑貨屋〈 【ファイター戦士】ミカ

もらった地図に従って歩いてみると、目の前に一軒のお店が見えて

きた………うん、看板にも「マリイの雑貨屋」って書いてあるね！

「ついたみたいだよお兄ちゃん！」

「そうみたいだな………すみません！ アルバイトの依頼を受けた者ですが、誰かいませんか？」

そう言うと、すぐに店の中から声が出て誰かが出てきた。

「は〜い、今行きま〜す………いらっしやい貴方たちが依頼を受けてくれた人達ね！ 何時ものバイトの子達が急に来れなくなつて困つたのよ〜助かるわ！」

出てきたのは気の良さそうな女性だった……何処と無くアイラさんに似ているね、つまりこの人が………

「自己紹介がまだだったわね、私はマリイ・ローラン、この店の店主をやっているわ」

「俺はへマスターのレントです。今回はアイラさんからの紹介で来ました」

「同じくへマスターのミカです！ 今日はこちらのお願いします！」  
するとマリイさんは少し驚いたような表情をした。

「あら〜 貴方たちがレントくんとかミカちゃんなのね！ ウチの旦那と娘から話は聞いているわ！ とりあえず上がってちょうだい」

「はい、失礼します」

「失礼しま〜す」



店の中に入ると、そこにはポーションなどの消耗品や武器・鎧・服・アクセサリなどの装備品、果ては見知らぬマジックアイテムらしき物などが綺麗に並べて置いてあつた………うーん、流石雑貨屋だけあつて様々な物が置いてあるみたいだね。

「とりあえず二人には接客と商品の整理整頓を手伝ってもらうわ。……店の表側には危険なアイテムとかは置いていないけど、それなりに高価なアイテムも置いてあるから私の指示には従つてちょうだい



ね？」

「はい！ わかりました！」

「それと二人にはコレを付けてもらおうわ」

そう言っただけ渡されたのは……………これは片眼鏡<sup>モノクル</sup>？

「この【鑑定士のモノクル】には《鑑定眼》スキルのレベルを＋1する効果があるわ。二人はまだ《鑑定眼》を覚えていない見たいだし、バイトの間だけ貸しておくわ」

「わかりました、ありがとうございます！」

「じゃあ早速仕事にかかりましょうか！」

「はい！」

こうして私達の初めてのアルバイトが始まった。

◇

「レントくん、コッチの鎧を動かすのを手伝ってくれるかしら？」

「はい、わかりました」

「ミカちゃんはコッチのアクセサリを並べて置いてくれる？」

「はい、わかりました」

「……………よし！ 大体の整理整頓は終わったわね。じゃあ二人にはこれから接客をしてもらいましょうか」

「はい！ わかりました！」

◇

「はい、いらっしやいませ！」

「あつミカさん！ ここで何をしていますか？」

「エルザちゃんじゃん！ 久しぶり〜。今はアルバイトしてるよ〜……………ところでそっちのARIAさんにそっくりな女性はどちら様？」

「あ、彼女は私の《エンブリオ》が第二形態に進化した時に生まれた……………」

「【ワルキューレ】二人目のセリカです。よろしくお願いしますね」

「へ〜もう一人増えたんだ……ところでエルザちゃん、何か買ってく？」

「……………じゃあ、MPとSPの回復ポーションをください」  
「まいどあり〜」

◇

『お、ミカちゃんだクマ、バイトクマ?』

「あ、シュウさん!!?久しぶり〜! うん、今バイトしてるんだ!」

「ミカ、そちらの着ぐるみの人は?」

「この人はシュウ・スターリングさん! この前ソロでやってた時に一緒にパーティーを組んだんだ〜……………あつ! こっちは私のお兄ちゃんのリントです!」

「ミカの兄のリントです。先日はウチのミカがお世話になったよう……………」

『シュウ・スターリングですクマ。いやいや、ミカちゃんにはむしろこちらのほうが助けて貰いましたクマ』

「もー! 二人共なんか保護者の会話みたいになってるよ!」

「いや、お前が世話になった様だしちゃんと挨拶しないと……………」

『ま、弟妹に甘いのは兄の常クマ、よくわかるクマ』

「む……………で、シュウさんは何買いに来たの?」

『実は、少し遠出をする事になったクマ。だから消耗品を買い込んでいるところクマ、ポーションとかあるクマ?』

「ポーションは色々ありますよ。あと長時間の野外活動に便利なマジックアイテムも新品・中古と取り揃えていますよ〜」

『ふむふむクマクマ……………あつ、この水をろ過して飲む様にするマジックアイテムはいいクマね、それに中古だから安いクマ、これとポーションをいくつか買うクマ』

「は〜い、かしこまりました〜」

◇

「あーレントくんやん、久しぶりやねー。何しとるん？ バイト？」  
「ああ月夜さん、お久しぶりです。はい、今はアルバイトのクエストをこなしています」

「ちよつとお兄ちゃん！ 一体いつこんな美人と知り合つたの!?!？」  
「ああこの人は、この前ソロで司祭系のジョブクエストを受けた時に知り合つた扶桑月夜さんだ。……こっちは俺の妹のミカです」

「いやー美人なんて嬉しいわー……ミカちゃんやね？ ウチは扶桑月夜、よろしゅうなー……あ、後ろの二人はウチのへエンブリオの力グヤと秘書の影やんや」

「此は月夜のへエンブリオのカグヤよ」

「秘書の月影永仕郎と申します」

「はい……それで月夜さんは何を求められますか？」

「うーん、最初は冷やかしに來ただけのつもりやったんやけど……せつかくやしなんか買つてこか……あつ、この回復魔法スキルの効果を上昇させるアクセサリーとかええやん、それに中古やから安いし……これとMPポーションいくつか買つとくわー」

「はい、かしこまりました」



「おー！ 本当にエーリカの言つてた通り色々な物が売ってるんだね！ マスター！」

「ああそうだな、ネイ……隠れた名店という彼女の言葉は本当だった様だ。……すまない、ステータスが上がるアクセサリーは何処にあるのだろうか？」

「はい、それらのアクセサリーはこちらになります。新品・中古共に取り揃えておりますよ」

「あつ！ 結構いっぱいあるよマスター！ 中古の安いのもあるし！」

「そうだな……このSTRとAGIが上がる中古のアクセサリー

をそれぞれ一つずつ頼めるだろうか？」

「はい、かしこまりました」

◇

「えーと……………特撮ヒーローの様なヘルムですか？ ……………普通  
のフルフェイスヘルムなら置いてありますけど……………そういうのは置いて  
ないですね」

「そうか……………」

「うーん……………そもそも特撮ヒーローという概念がこの世界にはないで  
すから……………」

「確かにその通りだな……………すまない、手間を取らせた様だ」

「いえ、大丈夫です。……………専門の職人ならオーダーメイドでそういう  
デザインのヘルムも作れるかも知れませんが……………」

「……………そうだな、その方向で探してみることにしよう。……………相談に  
乗ってくれて感謝する、それといくつかポーションを買っていこう」  
「はい！ かしこまりました！」

◇

「ふー、いやーようやくバイトが終わったね〜お兄ちゃん」

「ああ、思ったよりいいバイト先だったな。……………なんか新しく《鑑定  
眼》のスキルも覚えたし」

「うん！ 私も覚えたよ！ ……………このモノクルのおかげかな？」  
バイトが終わってからそんな話をしてしていると、マリイさんが質問に  
答えてくれた。

「ええそうよ、そのモノクルをしばらく使っていると、適正のあるジヨ  
ブでなら《鑑定眼》のスキルを取得出来るわ」

「へえーそんなスゴイモノクルだったんですね〜。マリイさん！ 貸  
してくれてありがとうございます〜」  
「ありがとうございます」

「別にいいわよ……私の方も二人が手伝ってくれたお陰で助かったわ。今日はいつもよりたくさんお客さんが来たしね。……さてと、二人には報酬を渡さなきゃいけないわね」

そういうと、マリイさんはリルが入った袋と二枚の紙を取り出した。

「こっちは二人のバイト代、そしてこっちは紙は特別報酬の【墓標迷宮探索許可証】よ。これに二人の名前を書けば、この国の神造ダンジョン〈墓標迷宮〉に入ることが出来る様になるわ」

「バイト代はいいんですけど……特別報酬なんて受け取っていいんですか?」

「ええ、今日は二人のおかげで売り上げが良かったし、この【許可証】も旦那のツテでそれなりに手に入れられるし……それに、二人のおかげでウチの旦那と娘は本当に助かったみたいだから、そのお礼も兼ねているわ」

そうマリイさんが言うけれど、娘の方はアイラさんとしても旦那さんの方はいったい誰のことだろう?

「あの旦那さんっていうのはいったい?」

「ああ、貴方たちがこの国に来た時に、門の所であった騎士がウチの旦那のリヒトよ」

あつ! 門番さんのことか!

「貴方たちが話してくれた〈マスター〉の情報のおかげで、騎士団やギルドが〈マスター〉の増加に対応するのが大分スムーズになったと旦那と娘が言っていたからね、これはそのお礼だから遠慮なく受け取きなさい!」

「はい! ありがとうございます!!?」

そうして私達は【墓標迷宮探索許可証】を受け取った。

……私達がやったことは結構ティアンと〈マスター〉の関係に影響を与えて居たんだね……

「じゃあこれでバイトは終わりね! 次は客として来てちょうだい、サービスするわよ」

「はい! 是非来させてもらいます!!?」

「今日は妹共々ありがとうございました」  
こうして私達の初めてのアルバイトが終わった。

## 〈墓標迷宮〉と第三形態

□王都アルテア 〈墓標迷宮〉前墓地区画 【司祭<sup>フリースト</sup>】 レント

「やってきました！ 〈墓標迷宮〉!!？」

「お前は一体誰に言っているんだ？」

なんか叫んでいる妹は放つて置いて……………俺達は今、アルター王国の墓地区画の地下にある『神造ダンジョン』〈墓標迷宮〉に来ている。

……………『神造ダンジョン』とは、通常のダンジョンと違い、モンスターが自動でリポップする、モンスターが外に出てこない、一定階層ごとにボスモンスターがいて倒すと追加報酬が出るなどの特徴を持ったダンジョンのことである。

その特殊な性質からティアンの間では、神が作ったとしか思えないダンジョン”である事から『神造ダンジョン』と呼ばれているのだとか。

「メタ的なことを言うと、運営が作ったダンジョン”って事になるんだけどね！」

「まあそういう事なんだが……………それで、王国にある〈墓標迷宮〉に入るにはこの【墓標迷宮探索許可証】に記名して使う必要がある」と  
「【許可証】をくれたマリイさんには感謝だね！……………これ、市場価格じゃ最低でも十萬リルはするらしいからね……………」  
「本当にな……………」

後で【許可証】の市場価格を知った俺達は、マリイの雑貨屋〈〉に行つたのだが、「一度記名した【許可証】は売れないから返して貰っても困るわ。それに前にも言ったけど、これは貴方たちへのお礼も兼ねているから遠慮する必要は無いわ。申し訳ないと思うのならこれからこの店に来て、何か買って欲ければそれで十分よ！」と言われて結局そのまま受け取った。

「あの後マリイさんのお店で装備も新調したしね！ 前の【ライオット】シリーズもいい装備だったけど、私とはあんまり相性が良くなかったし」

「まあ、攻撃がほとんど当たらないお前にHPを増やしたりダメージ

を減らすスキルは要らないよな」

「そうだね、だから今回の装備はSTRやAGIに補正が入るのを選んでよ。何より【戦士】のジョブをカンストして新しいジョブに就いたから装備出来る物も増えたしー！」

そう、先日ミカは【戦士】<sup>ファイター</sup>のレベルをカンストして新しい下級職<sup>メイイス・ストライカー</sup>【戦棍士】に就いていた。

新しいジョブである【戦棍士】は棍棒の運用に特化した<sup>クラフ・ストライカー</sup>【棍棒士】の派生下級職で、文字通りメイイスの運用に特化したジョブである。主に習得出来るスキルがメイイスの運用を補助する《戦棍技能》、自分の攻撃に対して相手が防御出来なかったときに自身のSTRの10%×スキルレベル分だけ相手の素のENDを減算する《ストライク・ペネトレイト》、相手の防具を破壊するアクティブスキル《アーマーブレイカー》などがあつたので、自身の《エンブリオ》との相性がいいと思つて選んだようだ。

「私の【ギガース】はメイイスだし、《バリアブレイカー》との相性も良さそうだしね！」

「実際、防御スキルやENDへのバフを減衰させる《エンブリオ》と、素のENDや装備防御力補正を減算するジョブスキルの相性は最高だろうな」

ミカは徹底的に相手の防御をブチ抜いて攻撃を通すビルドにするらしい。……………将来的に攻撃を防げる奴が居なくなるんじゃないか？

「それに何より私達の《エンブリオ》が第三形態に進化したしね！ 私のは相変わらず武器攻撃力とステータス補正とスキルレベルが上がっただけだけど」

「俺も相変わらずステータス補正はオールGのままだけどな。……………まあ《光神の恩寵》のレベルが上がって獲得経験値が+200%になったし、新しいスキルも増えたけどな。……………今回ここに来たのはその試し撃ちも兼ねているし」

「いや〜楽しみだね〜お兄ちゃんの新スキル！」

「あまり期待されても困るんだが……………」



そうして、騒がしいミカを後目に俺は〈墓標迷宮〉に入っていた。



□〈墓標迷宮〉【戦棍士】ミカ

あれから私達は、〈墓標迷宮〉の入り口の見張りの兵士さんに【許可証】を見せ（へマスター）が【許可証】を見せたことに少し驚いていた）中に入っていた。

「さて！ 調べた情報によると序盤の階層に出て来るモンスターはアンデッド系ばかりみたいだね！ ……うん【スピリット】とかも私ならなんとかなるし、お兄ちゃんは【司祭】だから対アンデッド用のスキルも使えるよね？」

「ああ、聖属性攻撃魔法の《ホワイトランス》やアンデッドに対する浄化・デバフ魔法《ピュリファイ・アンデッド》が使えるな」

「よし、ガンガンモンスターを倒してレベルを上げていこう！ 神造ダンジョンなら普通のフィールドと違っていくら倒してもリポップするしね」

「フィールドでは多くの〈マスター〉がモンスターを倒し過ぎたせいで一部の狩場でモンスターが殆ど居なくなった、なんて事になってるらしいからな」

「何事もやりすぎは良くないよね。じゃあ今日は地下5階のボスを倒して終わりにしようか！」

そんなことを話しながらしばらく歩いて行くと、前からモンスターが現れた……………えくと【シビル・スケルトン】に【ウインド・ゾンビ】かく、さすがに現実視だと色々ハッキリ見えてきついね！ ……なんか腐臭も漂ってくるし……………

「さてお兄ちゃん！ 早速新スキルの出番だよ!!？」

「はいはい……………とりあえず撃ってみるか……………《ホワイトアロー》！」

そう言ったお兄ちゃんの弓から白い光を纏った矢が放たれ、その射線上にいたアンデッドが消し飛んだ。

「お、結構凄い威力じゃん！」

「いや思ったよりMPの消費が激しいな、雑魚相手じゃ威力も過剰だし……《ピュリファイ・アンデッド》まで組み合わせる必要は無かったか？」

「まあまあお兄ちゃん、初めて創ったスキルにしては良くできてると思うよ？ ……それにしてもスキルを創るスキルって字面はすごく強キャラ感があるよね！」

「字面だけはな………思ったより使いにくいし………」

そう、お兄ちゃんの新しいスキル《百芸創主》スキルマイスターは自身が所有するスキルを複数組み合わせる新しいスキルを創るスキルである。

今使った《ホワイトアロー》は弓系攻撃スキル《ハンティングアロー》と聖属性攻撃魔法スキル《ホワイトランス》、アンデットデバフ・浄化スキル《ピュリファイ・アンデッド》を組み合わせ、アンデッド特効効果を持つ聖属性弓系攻撃スキルとして創ったスキルである。また、創造するスキルの発動形式や消費MP及びSP・威力・射程・範囲・チャージ時間・クールタイムなども調整出来るとのこと。

「実際この《百芸創主》は制限や制約がかなりあるから………まず、創れるのはアクティブスキルだけで、組み合わせられるスキルの数は《エンブリオ》の到達形態と同じで今は三つだけ、また使うスキルの数を増やすと使用するためのコストが跳ね上がるようだ、さらに各種要素の調整も何処かを上げれば別のところを下げる必要がある、それに一度スキルを創ってしまうとデンドロ内時間で二十四時間は再調整・削除できず、既にオリジナルスキルを創るのに使っているスキルは別のオリジナルスキルを創るのには使えない、何よりオリジナルスキル作成用のスロットは合計ジョブレベル50につき一つだから今は一つしか創れない」

「こうして並べてみると結構制約が多いねー」

「出来たスキルも実際に使ってみなければ詳細はわからないからな。………使いこなすには時間がかかりそうだ」

「どうも新スキルは大器晩成型らしい………お兄ちゃんの《エンブリオ》は全体的にそんな感じだけだ。」

「さて！ 新スキルもここでは役に立ちそうだし先に進もうか！」

「そうだな……………大分臭いにも慣れたしな」

そうして私達は先に進んでいった。

◇

「《ピュリファイ・アンデッド》!!?」

「そこー! 《スマツシユメイス》!!?」

お兄ちゃんのスキルで敵のアンデッドモンスター達の一部が浄化されて消滅し、それ以外の相手もデバフ効果で動きが鈍る。

その隙に目の前の武器を持った【スケルトン・ソルジャー】を【戦棍士】で覚えたスキル——以前まで使っていた《スマツシユ》のメイス版上位互換スキル——で粉碎した。そしてそのまま周りのアンデッド達を【ギガス】で薙ぎ払っていく。

「ハハハハハ！ やっぱりアンデッドは脆いね!!?」

「脆い分しぶといんだから油断するなよ……………《ホワイトランス》!」

私の攻撃範囲外のアンデッドを弓で牽制していたお兄ちゃんが、まだ残っていた【レッサーレブナント】に魔法を放ち消滅させた。それを横目に近くにいた【ホーンテッド・スピリット】を殴って消滅させる。

「《物理攻撃無効》も私には意味がないよ！」

「はいはい……………やっぱりアンデッドには弓より聖属性魔法の方が有効だな」

そうこうしているうちに最後の一体を叩き潰し、それでアンデッドの一団は全滅していた。

……………周りにはアンデッド達が落としたドロップアイテムが落ちてはいるが、正直中身はしょぼい……………【スピリット】とか何も落とさないし……………

「まあ、ドロップアイテムが目的で来た訳じゃないしね！」

「ああそうだな……………目的の地下五階についたし、多分この先がボ

ス部屋だろう」

とりあえず【ポーション】でMPとSPを回復させてから奥に進むとそこは広い空洞になっていた。

「おーいかにもダンジョンのボス部屋って感じだね！」

「確かにボス部屋のような……あそこにボスっぽいモンスターがいるし。……………」【スカルレス・セブンハンド・カットラス】ね」

そこには十メートルほどの巨大なスケルトンがいた。その姿は手の代わりに左右3本ずつの刃状の骨を生やしており、さらに頭は無く代わりに先端に刃がついている連結された長い骨を振り回していた。……………うん、ファンタジーに出て来るザ・ボスって感じのモンスターだね！」

「さて、どう戦うお兄ちゃん？」

「少し試したい事があるからアイツの足止めを頼む……………」《ピュリファイ・アンデッド》!!?」

「オツケー、じゃあ行くよ！」

お兄ちゃんのスキルで多少動きが鈍った【スカルレス・セブンハンド・カットラス】に向かって私は突っ込んで行く。するとボスは七本の刃をこちらに向けて振るって来た！特に頭の鞭みたいな骨が厄介だね、起動が不規則だし……………私には全部の攻撃が解っているけど。

「とりあえず巨大な敵への対処法その一『足を潰す!』」《スマッシュメイス》!!?」

そうやって全ての刃を掻い潜った私はボスの足にスキルを叩き込んだ。

……………やっぱり硬いね、今でもあんまり砕けなかった。とりあえずこのまま密着して戦おう、そうすれば頭の鞭骨以外は振りにくくなるだろうし、あとは動きに気をつけていけばなんとかかな、これだけサイズ差があれば次のお兄ちゃんの攻撃の邪魔にもならないだろうし。

「さて、これなら当てられるな……………」《空想秘奥》ブリューナク《ホワイトアロー》!!」

そして、お兄ちゃんが撃った強い輝きを放った矢がボスの胴体部分に当たり、左右六本の刃の内左側の三本を吹き飛ばした。

「《サードヒール》………思った以上に威力が出たな、《空想秘奥》がスキルの特効効果も強化したのが原因か。………それにオリジナルスキルにも《空想秘奥》は効果を及ぼせる事は確認できたな。………アレに普通の矢は大して効果は無いだろうし魔法主体で戦うか、《瞬間装備》《ホワイトランス》！」

お兄ちゃんは【司祭】用の聖属性・回復魔法に補正が掛かる短杖——この前マリイさんの店で買ったやつ——に持ち替え魔法をボスに放った。左右のバランスが崩れたボスは動きがかなり鈍っておりその魔法をまともに食らった。

………さて、私も死角になった左側に回ろうか、コツチなら鞭骨以外は届かないだろうし。

「あとはワンサイドゲームだよ！ 《スマッシュメイス》!!?」

「これだけダメージを与えればな、《ホワイトランス》！」

その後集中攻撃された足を砕かれたボスは、それから程なくして倒されたのだった。



「いや〜地上の空気は美味しいね！」

「さっきまでは腐臭が酷かったからな」

「まあ【戦棍士】のレベルも大分上がったから良かったけどね」

「俺も【司祭】がカンストしたからな」

あれからボスを倒した私達は、ドロップアイテムとボス撃破の追加報酬を受け取り、出てきたワープポイント（一緒に地下六階への階段も出てきた）を使って地上に戻ってきた。

また、ドロップアイテムには【エレベータータージェム】が二つ出てきており、これを使えば一回だけ地下六階からダンジョンに潜れるようだ。

「他のアイテムは換金アイテムと……【救命のブローチ】か。ええと

「……確率で致死ダメージを無効にするアクセサリだって、どうするお兄ちゃん？」

「それは前衛のお前が持っていればいいだろう。………お前の勘でもどうしようもない攻撃が来ても防いでくれるだろうしな」

「わかったよ……ありがとうお兄ちゃん」

そうして私達の〈墓標迷宮〉初アタックは終わったのだった。

## 指名クエストと〈UBM〉

### 兄妹の指名クエスト

□王都アルテア冒険者ギルド グレイト・ハンター【大狩人】レント

俺達が〈Infinite Dendrogram〉を初めてから現実では十日、デンドロ内で約一ヶ月の時間が経過した。

その間にも世間のデンドロブームは留まることを知らず、この〈アルター王国〉にも多くの〈マスター〉が現れるようになった。そして、ティアンの人達も次第にその事に慣れ始めてきたようだった。

「いや〜この一ヶ月、デンドロの中では色々な事があつたね〜お兄ちゃん?」

「初日から亜竜級のモンスターと戦つたりな……………まあ確かに色々あつたな」

そう言っているのは妹のミカ、今は冒険者ギルド内の一角でカタログを見ながらクエストを見繕っている。

「俺もようやく上級職に転職できたからな。まだまだこれからだろう」

「イヤイヤお兄ちゃん、デンドロ内一ヶ月で下級職二個カンストして上級職に就くなんてスゴイ早いからね! 他の〈マスター〉なんて下級職一職目もカンストしてないのがほとんどだからね!」

「まあ、俺の〈エンブリオ〉はそういうものだからな」

つい先日二職目の下級職である【ブリスト司祭】をカンストした俺は、転職条件を満たしていた狩人系統の上級職【大狩人】に就いていた。これも【ルー】が第三形態になり《エクスベリエンクスマスター光神の恩寵》のレベルが3になつたお陰なのだけでも。

……………やはり上級職だと1レベル毎に上がるステータスが下級職の時よりも高い、これならより経験値稼ぎも捗るな。

「やっぱり経験値増加スキルはチートだね! チーターだね!!?」

「別に衣装は黒くないし二刀流も使わんで……………大体お前の方がSTRとか高いじゃないか」

「戦棍士」は主にSTRを中心に物理系のステータスが伸びるからね、他にもメイス装備時にSTRを上げるパッシブスキル《マツスルフォース・メイス》とかもあるし、「ギガス」のステータス補正もSTRはBぐらいあるしね」

これらの要素と装備補正などを加えるとミカのSTRは1000を超える。「ギガス」の性能とアクティブスキルを合わせれば、亜竜級のモンスターにも大きなダメージを与えられる程である。

……レベルが倍以上差があるのに物理的なステータスは大体負けてるからな。

「人の事をチートとか言えたモノかよ」

「うーん……結論！へエンブリオは大体チート!!？」

「……まあティアンの人から見ればそうなるだろうな」

「そうだねー……ころしてでもうばいとる！……みたいなことにならなきゃ良いけど」

「へマスターは死なないけどな。……ティアンの人達も不死身の化け物相手にそんな無謀なこととはしないだろう」

それに、この世界にはへマスターと言う存在がどれだけ理不尽なモノなのが伝説になるぐらい伝わっている。それらは過去に居たと言うへマスター——大体全部キャット性のやつ——が原因で伝わったモノだ。

……まあ、運営側もそんな事態にならない様な布石としての意味もあってそんな伝説を広めたのだろう。

「ま、この話はこれ以上しても仕方ないし今日やるクエストを決めようか！」

「そうだな……ん？」

「どうしたのお兄ちゃん？……あつ、あれはアイラさんだね、どうしたんだろうっ？」

そこには、何時もはギルドの受付にいるアイラさんがこちらに向かって来るところだった。

「レントさん、ミカさん、少しお時間を頂けないでしょうか？」

「別に良いですけど……何の用なんですか？」



「……………ここではあれなので別室でお話しします。どうかついて来て下さい」

そうして俺達はアイラさんについて行きギルド内の個室に入ってしまった……………どうも周りの目を気にしていた様だし、いったいどんな話なのやら……………

◇

個室に入り、そこに置いてあった机に向かいあつて座ると、いきなりアイラさんが頭を下げて来た。

「お二人とも、いきなり呼び出してしまってすみませんでした」

「頭を上げてください、アイラさんには色々お世話になっているのでそのぐらい構いませんよ」

「そうですよ！ お兄ちゃんの言う通りですって！ ………………それで要件は何なんですか？」

「ありがとうございます。……………それで要件なのですが、お二人にはとあるクエストを受けてもらえないかと打診しに来ました」

そう言ったアイラさんは一枚のクエスト用紙を取り出し俺達に見せた。……………そこにはこう書かれていた。

難易度：五【調査依頼ーノズ森林奥地】

【報酬：一人当たり十万里ル ※ 調査内容次第では特別報酬あり】

『ノズ森林奥地で起きている異常の調査。報酬の十万里ルは結果によらずに支払われる。時間は各種準備・調査で約一日を予定』

『※この依頼を受けるのはへマスター〳〵のみとする』

これはへマスター〳〵限定の依頼？ 内容はへノズ森林〳〵の奥地の調査？ いやそれよりも……………

「難易度五のクエストとは……………俺達はまだ難易度一から三ぐらいのクエストしか受けたことがないんだが……………」

「まあクエストの難易度よりもレベル上げを優先してたしねー……………それよりも、難易度四以上のクエストはそれまでに成功させたクエストの数によつて受けられるのかが決まるんじゃないかなかつたっ

け？」

「確かそうだったはずだが……報酬も妙に高いし……アイラさん、このクエストは一体どういうことなんですか？」

「はい、それを今から説明します。まずこのクエストはギルドが特定の相手にのみ提示する『指名クエスト』です」

アイラさん曰く『指名クエスト』とは通常のクエストと違い、ギルドが特定の相手に直接依頼する形式のクエストなのだという。

……色々気になるところの多いクエストだが、とりあえずアイラさんに詳しい事情を聞く事にした。すると彼女は真剣な表情で語り始めた。

「……事の始まりは王都周辺のモンスターの生態系が変わってきたことです」

「それって『マスター』が王都周辺のモンスターを狩り過ぎて、最近獲物がだいぶ減ったーとか言っていた話ですか？」

「いえ、その話は余り関係はないでしょう。……なぜならこの件の始まりは一ヶ月前……『マスター』がこの国に現れ始めた頃まで遡りますから」

アイラさんの話によると、約一ヶ月前から王都の周辺により遠い場所に生息している強力なモンスターが現れた事が何度か報告されたのだと言う。

……モンスターの生態系の変動自体はこの世界ではそこまで珍しい事ではなく、環境の変化や元々住んでいた場所により強力なモンスターが現れるなどの要因で住んでいた場所を移動するケースはそれなりにあることらしい。

とはいえ王都周辺の生態系の変動はそこに住む住人、ひいては王城に住む王族の安全にも影響するため王国の騎士団や有志の冒険者たちによって、王都周辺及び遠方の高レベルモンスターの生息地の調査がなされた。

「その調査自体は、これまでも何度かあった事なので順調に進みました。……ただ一ヶ所を除いて」

「それが『ヘノズ森林』の奥地だった、と」

「はい……………へノズ森林の奥地に調査に向かった合計レベル200代のベテラン冒険者のパーティーは、もう一週間も消息を絶つています」

何でもその冒険者のパーティーは二日程度で調査を終えて王都に帰って来る筈が、三日経つても何の連絡も寄こさず今に至るらしい。

しかし……………

「そんなベテラン冒険者でもダメだったクエストを、よりレベルの低いへマスターにやらせて大丈夫なんですか？ 多分王国のへマスターの殆どが合計レベル50にも届いていませんよ？」

「そうだね……………合計レベル三桁超えてるお兄ちゃんが言ってもあんまり説得力ないけどね」

「俺はへエンブリオがレベル上げに向いていただけだしな。それにベテラン冒険者たちや騎士団と違って調査の為のノウハウも無いし」

「いえ……………このクエストはへマスターだからこそ意味があるのです」

そう言ったアイラさんは少し申し訳なさそうな表情をしていた……………ああ、成る程ね……………

「死んでも三日経てば蘇るへマスターなら三日後に確実に情報を持ち帰って来れるか」

「はい……………このクエストは以前お二人が話していた提案を元に私と父……………第一騎士団の長・リヒト・ローランが発案したものです。『へマスター』に調査を任せれば確実に情報を持ち帰ってくれるだろう。それにこれ以上の犠牲も減らせる』と」

「……………あれ？ アイラさんのお父さんって門番じゃなかったっけ？」

「えっ……………いえ私の父・リヒト・ローランは王都警備を担当している第一騎士団の長をしています。確かお二人と父が出会った場所は王都の門前でしたね、それなら門番だと勘違いしても仕方ありませんか……………父はよく自分で王都の見回りをしているので、偶々門の前でお二人と会って話をしたと言っていました」

そうだったのか……………ずっと門番さんだと思ってたよ……………

王都警備担当の第一騎士団の長とか、あの人も凄く偉い人だったんだ……………

「今までずっと勘違いしてたな……………それにしてもあの時ミカがした提案がまさか本当に現実のものになるとは……………」

「えっ、私何か言ったっけ？」

「ほら、お前が初日に言ったじゃないか『へマスター』はどうせ死なないのだから命の危険がある依頼でも報酬次第では受けると思う』とか」

「あくそっういえばそんな事も言ったっけ！ 忘れてたよ！」

俺達がそんな話をしていると、アイラさんがこのクエストの詳細について話してくれた。

「このクエストの報酬の十万里ルは調査の結果に関係なく受注した全ての『へマスター』に支払われます。そして、調査内容が危険なものであったりした場合には追加で特別報酬も支払われます。……………それで、お二人はこのクエストを受けてもらえるでしょうか？ なお、クエストを受けない場合はこの部屋での事は他言無用にお願いします」

ふむ……………確かに危険はありそうだがクエストの内容に対して報酬は破格だし、どうせ『へマスター』は死んでも死なないのだから別に受けても構わないと思うのだが……………

「どうするミカ？ 俺は受けても構わないと思うんだが」

「うん……………私もこの依頼は受けた方がいい気がする」

……………ミカがまた遠くを見るような目になっている……………これはまた何か感じ取ったな。ミカがこうなつた時はその直感に従わないとロクなことにならないからな。

……………まあ、どうせ死んでも死なないゲームなのだから気楽に行くか。

「わかりました、そのクエストをお受けします」

「はい！ 私も受けます!!？」

「お二人共ありますがどうぞございます、このクエストは冒険者ギルドの方で、他にも信用できる『へマスター』に声を掛けています。お二人には

その方達とパーティーを組んで頂きたいのですがよろしいですか？」  
「それは別に構いませんが……他のへマスターとは一体誰なんですか？」

俺もミカもあんまり野良パーティーとか組まないんだよな。

……基本二人で組んでるし、お互いソロでも何とかなってしま  
うからな……他のへマスターとパーティーを組んだのってエル  
ザちゃんの時ぐらいじゃなかったか？

「ご安心ください、当ギルドの方で実力と人格面で信用できると判断  
したへマスター達に声を掛けていますから。……まあ何人クエ  
ストを受けてもらえるかは分かりませんが。なので詳しい紹介は  
パーティーメンバーが揃ってからにさせてもらいます。……で  
はしばらくこの部屋でお待ちください、クエストを受けた他のへマ  
スターを連れてきますので」

そうして、アイラさんは部屋から出て行った。

……とりあえずこの間に少しミカと話しておくか。

「さて、何か妙な話になってきたな。……ミカ、お前の勘で何か  
解った事はないか？」

「今のところ近い勘ではこのクエストはそれなりに危険だっ  
て出て、けど遠い勘では受けた方が良いつて感じなんだけど……  
うかこのクエストを受けないとアイラさんの身に危険が及ぶ可能性  
があるって出てる」

「じゃあ受けて正解だったな、流石にアイラさんの身に何かあったら  
寝覚めが悪い。……それでこのクエストの成功率はどの位なん  
だ？」

「そこまではまだ詳しく分からないけど……これから来るへマ  
スター達と協力すれば達成するのは不可能じゃないって感じかな」

成る程、ならなんとかなるか……ミカの勘で受けるなど出てい  
ないからな。

「あんまり私の勘を過信しないでよ。……特にこの世界では私が  
不死身のへマスターなせいとか、感覚も微妙に違ってるし」

「ああ分かっているよ、お前の勘でもどうしようも無いこともあるっ

てことはな。……………それにしても俺達はこのギルドに結構信用されていたんだな」

「そうだねー、それはちよつと嬉しいかな。それに一体どんなへマスター」が来るんだろうね、私達他の人とパーティーとかあんまり組まないから楽しみだなく」

「そうだな」

さてと、これから来るへマスター」達は一体どんな人達なのやら

……………

## パーティーメンバーとの顔合わせ

□王都アルテア冒険者ギルド 【戦棍士<sup>メイス・ストライカー</sup>】ミカ

それから私達はしばらくの間、冒険者ギルドの一室で今回のクエストで一緒になるへマスター達<sup>ミカ</sup>が来るのを待っていた。

「まだかなくまだかなく、一体どんなへマスター<sup>ミカ</sup>が来るんだろうねお兄ちゃん?」

「いいからちよつと落ち着けミカ」

そんなこんなしているうちにこの部屋のドアがノックされた。

……………来たね!

「は〜い! 入ってま〜す!」

「いや、それはなんか違うだろう……………」

「あれっ? この声って……………やっぱりミカさんだ! それにレントさんも!」

そう言つてこの部屋に入って来たのは、私達のフレンドでもあるエルザちゃんだった! その後ろからは彼女のへエンブリオ<sup>ミカ</sup>であるアリアさんと彼女と同じ顔をした二人の女性が入ってきた。

……………えーと一人は以前アルバイトの時に少し話したセリカさんだったつけ、だとするともう一人も……………

「久しぶりだね、エルザちゃん!」【ワルキューレ】がまた増えているね!」

「はい、先日へエンブリオ<sup>ミカ</sup>が第三形態に進化しまして……………改めて紹介しますね、みんな自己紹介してください?」

「はい、改めまして【ワルキューレ】の長女アリアです。ジョブは【剣士<sup>ソードマン</sup>】、役割は前衛のアタッカーです。……………お二人とも、またよろしくお願いします」

「以前少しお話しましたけど……………【ワルキューレ】の次女のセリカと申します。就いているジョブは【司祭<sup>プリースト</sup>】で役割は後衛のヒーラーです。お二人とも今日はよろしくお願いしますね」

「はい【ワルキューレ】三女のトリムだよ! ジョブは【騎士<sup>ナイト</sup>】で役割は前衛の盾役だよ! よろしくね二人とも!!?」

ふーむ、金髪ロングの真面目キャラのアリアさん、銀髪ツインテールの優しそうなセリカさん、青髪ポニーテールの元気っ子なトリムちゃんと三人ともなかなか個性的だね！ みんな同じ顔だけど、これなら誰が誰だかわかりやすいね。

「じゃあ私も改めて、ミカです！ ジョブは【戦棍士】で役割は前衛のアタッカーだよ、よろしくね！」

「ミカの兄のレントです。メインジョブは【大狩人】グレイト・ハンターで役割は主に後方支援をやっている、よろしく頼む」

「二人とも、もう二つ目のジョブに就いたんですね！ ……私はまだ【従魔師】テイマーのままなんですよね」

「いやいやそれが普通だって！ 私も二職目についたばかりだし。既に三職目で上級職に就いてるお兄ちゃんがおかしいんだよ！」

「レントさんもう上級職に就いたんですか！ 凄いですね！」  
そんな話をしていると、いきなりエルザちゃんの服の中から直径約十センチぐらいの石が飛び出してきた。

その石には赤く光るコアの様なモノがあり、ただの石ではなくモンスターであることを伺わせた。

『KYUUUUU』

「あつこらアーシー！ 勝手に出てきたらダメじゃない！」

「エルザちゃんその子って……………」

「はい、この子は私のタイムマスターで【アース・エレメンタル】のアーシーと言います。以前とあるクエストの最中に偶然出会ってなんかピンと来たのでタイムしました」

『KYUUUUU！』

エルザちゃんの紹介に応える様に【アース・エレメンタル】のアーシーちゃんが鳴いた。

……………うん、こうして見るとちよつと可愛いかも。

「エルザちゃん！ タイムマスターも手に入れたんだね！」

「はい、アーシーの他にも二人いるので紹介しますね……………コイル喚起、ヴェルフ、ウオズ」

そうして出て来たのは狼型のモンスターと鳥型のモンスターだった



た。

狼のほうは「テイルルルフ」に似ているけどそれよりも大きいし、鳥のほうは多分驚かな……………?」

「こっちは「ストライク・ウルフ」のヴェルフで、以前従魔師ギルドで買った時は「テイルルルフ」だったんですが最近進化しました。それでこっちが「ウインド・イーグル」のウオズです。この子もアーシーと同じでクエスト中に出会ってピンと来たのでタイムしました」

「おー……………しばらく見ないうちにエルザちゃんの戦力が超強化されている……………」

「はい！ 仲間になってくれたこの子達のお陰で色々なクエストを達成出来るようになりました！」

本当に凄まじい強化具合だよ……………もう初日に「リトルゴブリ」に襲われていた時の面影はカケラもないね。

でも、エルザちゃんがこのゲームを楽しんでくれているなら良かったかな。

「それで、エルザちゃんもギルドから指名を受けたの？」

「はい、冒険者ギルドの方から『今まで多くのクエストを達成して来たあなたに受けてほしいクエストがある』と言われて、それから詳しい話を聞いて受けることにしました。……………それに報酬も十万里ルと良かったので……………」

「……………エルザちゃんお金ないの？」

「……………はい……………「ワルキューレ」達の装備やタイムモンスターの食費とかで……………」

「あ……………」

どうやら、強力な力にはそれ相応の代償が必要らしい。

……………まあゲームでは強くなるほどお金がかかるし、一人で大量の戦力を抱えているテイマーなら尚の事だろう。

「ところで、今回のクエストはまた私達とエルザちゃん達だけで受けるのかな？」

「いえ、他にもこのクエストを受けるへマスターへはいるみたいで、その人たちを連れて来るので先に部屋の中で待っていてほしいとアイ

ラさんは言っていました」

ふーんまだ来るんだ、じゃあその間にエルザちゃんと色々話でもしようかな！

◆◆◆

□王都アルテア冒険者ギルド 【大狩人】 レント

それからしばらくの間、俺達は互いの近況を語り合っていた。

ああ、エルザちゃんのタイムモンスター達は【ジュエル】の中に戻している。流石に部屋が狭いからな。

「へー、エルザちゃんそんなに沢山のクエストをクリアしてるんだ」

「はい、みんなのお陰でなんとかやって来れています。……………クエストを沢山こなさないとお金がすぐに無くなるので……………お二人は王都のダンジョンに挑んだんですね！ 私もダンジョンに行ってみたいです」

「まあ5階層まで行ってボスを倒して帰ってきただけだからな。それにレベルは上がったが、モンスターが骨とゾンビと霊体だからドロップアイテムの実入りは良くなかったしな」

「ちなみに〈墓標迷宮〉に入る為に必要な【墓標迷宮探索許可証】は市場で約十万里ルで買うか、アルター王国が定期的に発注する難易度：三のクエストの報酬で手に入るらしいよ」

「十万里ル……………クエストでの入手を試みたいと思います……………」

そんな話をしていると、ふいに部屋の扉がノックされた……………どうやら他の人達が来たみたいだな。

「失礼します……………3人とも揃っているみたいですね」

そう言いながら、アイラさんが二人の男性と一人の少女を伴って部屋に入ってきた。

男性二人には紋章があるし〈マスター〉だな、少女の方には紋章が無いがこのクエストは〈マスター〉専用だし、おそらくエルザちゃんの【ワルキューレ】と同じ〈エンブリオ〉だろう。

………男性の内一人と少女には見覚えがあるな、確かマリイさんの店でアルバイトしていた時に来ていた客だったかな。

「アイラさん、その人達が一緒にクエストを受けるへマスターなんでですか？」

「そうですミカさん、今回のクエストは此処にいるメンバーで受けてもらいます。それでは皆様、まずは自己紹介からお願いします」

そう言われたので、俺達はお互いに自己紹介をする事になった。

「はい、私はミカと言います！ ジョブは【戦棍士】をやっています!!？」

「ミカの兄のレントと言います。メインジョブは【大狩人】に就いています。本日はよろしくお願いします」

「【従魔師】のエルザ・ウインドベルと申します。後ろの三人は私のへエンブリオで、TYPEガードナーの【ワルキューレ】です」

「【ワルキューレ】長女のエリアです」

「次女のセリカです。よろしくお願いしますね」

「三女のトリムです！ よろしく！」

「俺は【剣士】のフォルテスラという。こっちは俺のへエンブリオのネイリングだ、今日はよろしく頼む」

「はい！ メイデン with アームズのネイリングだよ！ マスター共々よろしくね！」

「【付与術師】<sup>エンチャンター</sup>のシャルカです。今日はよろしくお願いします」

フォルテスラさんにネイリングちゃんにシャルカさんか、三人とも良い人そうで良かったかな。

しかしメイデンか………確か複数タイプの混成型で、少女の姿を取るのが特徴のレアカテゴリだったな。他には月夜さんのカグヤぐらいしか見た事は無いし、同じ女性の人型へエンブリオでもエルザちゃんの【ワルキューレ】はただのガードナーらしいからまだよくわかっていないカテゴリなんだよな。

「では自己紹介も終わったところで、改めて今回のクエストの詳細をお話しします。………このクエストではへノズ森林へ奥地の調査を行ってまいります。調べる場所は以前消息を絶ったパーティーが調

査していた場所を中心におこなわれます。調査地点の詳細に関しては、後でマップを渡すのでそれでご確認ください。調査時間はその場所の周辺を約半日程調査してもらいます。また、その結果によらず十万里ルは支払われます。そして異常の原因となる情報を持ち帰った場合には特別報酬を支払われます。報酬の内容は得た情報次第で個人毎に要相談となります。以上で説明を終わります、何かご質問等はありませんか？」

俺は特に質問は無いが………他の人達も特に質問は無いみたいだな。

「特に質問は無い様ですね。………では今回のクエスト、どうかよろしく願います」

◇

その後、アイラさんから調査地点のマップを受け取った俺達は、各々の準備を整えて王都の北門に集まっていた。

そこでそれぞれが出来る事を話し合い、今回のクエストでのパーティーの役割分担を決めることになった。

「私は主に前衛でメイスを振るつてのアタッカーぐらいしか出来ないかな。へエンブリオのスキルで、物理攻撃が効かない相手にも攻撃を通すことが出来るけど」

「俺は弓での後衛と索敵役だな。あとサブで【司祭】も取っているから回復役も出来るぞ。……ああ、へエンブリオのスキルのお陰でメインが【大狩人】でも回復魔法が使えるからその辺りは心配なくていい」「私自身は【従魔師】なので直接戦闘はできませんが【ワルキューレ】の三人はそれぞれアタッカー・ヒーラー・タンクがこなせます。あと【ストライク・ウルフ】のヴェルフは索敵と遊撃、【ウインド・イーグル】のウオズは上空からの偵察や風属性魔法による支援、【アース・エレメンタル】のアーシーは主に私の護衛で、地属性魔法による攻撃と防御が出来ます。あ、タイムモンスターを全員出すと従属キャパシティが足りなくなるので、パーティー枠の空きを使わせてもらいま

す」

「俺は剣を使った前衛ぐらいしか出来ないな。だが、ネイのスキルは  
一対一の戦闘向きだから強敵が現れた場合は頼りにしてくれ」

「私はパーティーメンバーにエンチャントをかける後衛ですね。あ  
と、私の〈ヘンブリオ〉は「ラフム」という泥状のゴーレムで物理攻  
撃が効かないので前衛を任せる事が出来ます」

こうして見ると前衛・後衛・回復・索敵と揃った、バランスの取れ  
たパーティーになったな。

「さてあとはパーティーのリーダー役を決めないといけないね  
……………と言うわけで、私はリーダーにお兄ちゃんを推薦します！  
この中では一人だけ上級職だしね!!？」

「おい、一体どういう訳だ……………大体ジョブと指揮能力は関係無い  
だry」はい、私も賛成します！」ええ……………」

いきなりミカが俺をリーダーに推薦したと思ったら、エルザちゃん  
まで賛成した、一体どういう事だ……………？

「そうだな…………俺も前衛として戦わなければならぬから、後衛が指  
揮を取ってくれるのはありがたいな」

「私もエンチャントとラフムへの指示がありますので、指揮はお任せ  
します」

フォルテスラさんとシャルカさんまで……………はあ、しょうがない  
か。

「わかった、このパーティーの指揮は俺が取るよ……………パーティー  
のリーダーなんて初めてだから下手でも文句は言わないでくれよ」

「大丈夫、大丈夫！ このゲームが始まってからデンドロ内の時間で  
もまだ一カ月くらいしか経ってないんだから、まだパーティーの指揮  
を完璧にこなせる人なんていないよ……………それにお兄ちゃんなら大  
抵の事は上手くこなすだろうし、何よりそうした方が良い気がしたん  
だよね」

成る程、ミカがそう感じたのなら俺がリーダーをやった方がいい  
な。

「じゃあ、前衛がミカとアリアさん・トリムさん・フォルテスラさん・

シャルカさんのラフムで、後衛は俺とエルザちゃん・セリカさん・シャルカさんで、タイムモンスターはエルザちゃんが指示を出して遊撃を頼む。……とりあえずそういう布陣で、何回か戦闘をこなして不都合があった場合には修正する。あと、今日組んだばかりのパーティーなので俺は最低限しか指示を出さないから、基本的には各々の判断で行動してくれ。……これでいいか？ 何か意見があるなら言ってくれ」

「うん、それでいいんじゃないかな！」

「はい、大丈夫です」

「私も問題ありません」

「ああ、俺もそれで構わない………今日初めて組むパーティーに完璧は求めないさ、もっと気楽に行こうレントくん」

フォルテスラさん………そうだな、少し深刻に考え過ぎていたみたいだ。ミカの勘でもこのメンバーならなんとかかなると言っていたし大丈夫だろう。

「じゃあ今からクエストスタートだ！」

こうして俺達の指名クエストが始まった。

## へノズ森林の調査と前哨戦

■へノズ森林の奥地 ???

『GUUUUU』

タリナイ

『GUUUUU』

血ガタリナイ

『GUUUUU!!?』

ワガ剣ニササゲル血ガタリナイ!

ヤハリ、イクラザコヲ切ツテモタイシタタシニハナラヌ。モツトツ

ヨイモノヲ切ラナクテハ。

……アノ六人ノニンゲンドモハナカナカ切りガイガアツタ。

マタ、アノヨウナニンゲンドモガコナイダロウカ。

コノ剣ヲモツテカラ、ワレハ絶大ナチカラヲエタ!

……モハヤワレハアノヨウナアノヨウナチイサナ群ヲスベル

ダケノワイシヨウナ存在デハナイ!!?

マア、アノモノタチモサイゴハワガ剣ノカテニナレタノダカラホン

モウダロウ……

ソウ……コノ剣ノチカラデ、ワレハコノセカイデ唯一ノソング

イ……ユニーク・ボス・モンスター。『ゴリドン』ニナツタノダカ

ラ!!?



□へノズ森林の奥地 グレイト・ハンター【大狩人】レント

「じゃあ、フォルテスラさんとシャルカさんはよく一緒にパーティーを組んでいるんですか?」

「ああ、最初は野良のパーティーで偶々組んだだけだったがシャルカとは妙に気が合ってたね、それ以来よく一緒にクエストをこなしたりしているよ」

「ええ、私もフォルテスラとは何故か気が合いました、それに私とラフ

ムだけだと攻撃力が足りないのでアタッカーが居てくれると助かるんですよ。……………それで、レントくんはいつもミカちゃんやエルザちゃんとパーティーを組んでいるんですか？」

「いえ、ミカは実の妹なのでいつも組んでいます。エルザちゃんはフレンドではありませんがたまにしか組んでいませんね。今回のクエストでも一緒になったのは偶然です。お二人はどうなんですか？」

「俺とシャルカは二人揃ってギルドからクエストの依頼を受けた。他にも、何人かよく組んでいるへマスターは居るんだが都合がつかなくてな……………それに、このクエストを受ければティアンの被害を減らせると思ったからな」

「あと報酬も良かったですしね」

俺はへノズ森林の奥地を歩きながら、フォルテスラさんやシャルカさんとこのクエストを受けた訳やお互いのパーティーメンバーの事などについて話している。

やっぱり男同士だと気軽に話せていいな！……………俺がデンドロで話してきた相手って、ミカを始めとしてアイラさん・エルザちゃん・月夜さんと女性が多かったからなあ。

えっ、ミカ？ ミカならエルザちゃんやネイリングちゃん達とガールズトークしてるよ……………その姦しさに居心地が悪くなったから、こうやって男同士で話しているってのもある。

「しかし、さっきから随分と緩い空気になっているな」

「まあ、ギスギスするよりもいいのでは？ 出て来るモンスターもほとんど瞬殺出来ていますし」

「俺も《生物索敵》を使って警戒していますが特に反応はありませんからね。他にも、周辺を警戒しているヴェルフやウオズがいますが特に異常は無いみたいですし」

この森の奥地に入ってから出てきたモンスターは、殆どが前衛のミカやアリアさんやフォルテスラさんにすぐに倒されてしまっていた。

たまに現れる少し強いモンスターも物理攻撃無効を持つラフムを突破出来ず、その間に他のメンバーに総攻撃されて倒されていた。

でも、流石にそろそろ注意を促しておくか……………この森の状況は



明らかにおかしいしな。

「はい！ 全員あんまり気を緩め過ぎないようにしろよ、この森に異常が起きているのは明らかだからな」

「えっ？ この森の奥地に入ってから対して強いモンスターと遭遇してませんか？」

「だからだよエルザちゃん、へノズ森林の奥地にしてはモンスターが弱すぎるし少なすぎるからな」

「成る程な……俺達がこうやって楽に行動できているのがそもそもおかしいのか……」

「そういう事です、フォルテスラさん」

俺の言葉に皆が納得したらしく、全員武器を構えて（ネイリングちゃんも剣形態になってフォルテスラさんの手に収まっていた）辺りを警戒しつつ進むようになった。

……しばらくすると周辺を警戒していたヴェルフやウオズが声をあげ始めた……俺の《生物索敵》にも反応があったな。

「全員構えて！ 向こうから何かきます!!？」

反応があつた方向の森の中から出てきたのは、体長が五メートルぐらいあるカブトムシに似た姿のモンスターだった……頭の上には【デミドラグストライクピートル亜竜突撃兜虫】の文字がある。

「亜竜級のモンスターか！ 全員気をつけろ!!？」

『GIGIGIGI!』

こうして俺達と【亜竜突撃兜虫】との戦いが始まった。



■へノズ森林の奥地 ???

フム……マダコノ森ニノコツテイタ虫ケラト、ミヨウナニンゲンドモガ戦イヲハジメタカ。

アノ虫ケラモワガ剣ノカテニスルツモリダツタノダガナ。

……マアイイ、コノ戦イニカッタモノヲワガ剣ノカテニスレバヨイダケヨ……



□〈へノズ森林〉奥地 【戦棍士<sup>メイス・ストライカー</sup>】ミカ

『G I G I G I G I!』

おつといきなり【亜竜突撃兜虫】が突っ込んできたね! どうやらその名前の通り突撃が得意みたい。

……でも、こつちには物理攻撃にはめっぽう強い壁役がいるんだよね。

「抑えろ! ラフム!!? 《エンチャント・ストレングス》《エンチャント・アジリティ》!」

『BO・BO・BO!!?』

その突撃をシャルカさんの単体バフを受けたラフムが受け止めた。その際相手のツノがラフムの身体を貫通するが、身体が流動する泥で出来ているラフムにはダメージがなく、そのまま強化されたSTRとAGIを使って泥の身体を動かして相手を絡め取り動きを封じた。

やっぱり物理攻撃無効の流体って強いよね! 相手が物理攻撃し出来ないなら大体完封出来るし!

『G I G I G I G I!』

「《タイムーズコマンド・アタック》《タイムーズコマンド・スピード》! アリア! トリム! 行って!!?」

「はいっ! 《スラッシュエッジ》!!?」

「わかった! 《魔蟲切り》!!?」

「俺達も行くぞ、ネイ! 《オーヴァーブレード》《スラッシュエッジ》!!?」

「じゃあ私も行くかな! 《インパクトストライク》!!?」

動きが止まった相手に私達アタッカーのアクティブスキルが次々突き刺さっていき、相手のHPが一気に減って身体にもいくつも傷がついた。

特に、フォルテスラさんとネイリングちゃんの攻撃は一撃で相手の足を切り飛ばしていた……大物相手ならまかせて! とネイリ

ングちゃんが言ったただけはあるね。

すると、相手が背中中の羽根を広げて飛び立とうとしていた……まあ虫だから空も飛べるよね。

「空を飛ばせるつもりはないぞ《モンスター・ハント》 魔蟲 《ハンティングスナイプ》！」

「アーシー、お願い《ロックランス》！」

『KYUUUU!』

『GIGIGIGI』

そこへ、お兄ちゃんの指定した種族のモンスターへの特効スキルが上乗せされたアクティブスキルと、アーシーちゃんの岩の槍を放つ地属性魔法が襲いかかり、相手の二枚の羽根を貫いて飛行出来なくさせた。

飛べなくなつたと分かつた相手はさらに激しく暴れるが、身体に絡みついたラフムを振り解くことは出来ないでいるようだ。

「今だー！ 一気に畳み掛けるぞ《ハンティングアロー》!!?」

「《トライスラッシュ》!!?」

「《スマッシュメイス》!!?」

「《オーヴァー・エッジ》《スラッシュ》!!?」

そこにお兄ちゃんの矢・アリアさんの連続攻撃・私の「ギガス」による一撃・そしてトドメにフォルテスさんの刀身を大きく伸ばしたネイリングちゃんによる一閃が相手の胴体部の甲殻の隙間に直撃し、その身体を半ばから断ち斬った。



■へノズ森林 奥地 ???

……………アノミヨウナニンゲンドモガ勝ツタカ。

……………ナラバワガ剣ノカテニナツテモラウトシヨウ。

……………マズハアノ女カラダ……………



□〈ヘノズ森林〉奥地 【大狩人】 レント

フォルテスラさんの一撃によって胴体を真つ二つにされた【亜竜突撃兜虫】は、しばらく痙攣したのちに光の塵になっていった。

「お疲れ様ですフォルテスラさん、見事な一閃でしたね」

「いや、あれはシャルカのラフムが抑えていてくれたから出来たことだ……………それに他のメンバーの攻撃によるダメージで動きが鈍っていたからな。……………それと、アイツが落とした【宝櫃】はどうする？」

「それはフォルテスラさんが持っていてください。クエストが終わった後に他のドロップアイテムと一緒に分配しましょう」

「わかった、では今は俺が持つておこう」

周りを見てみると、一戦を終えたからか弛緩した空気が流れていた……………一人を……………ミカを除いて。

「どうしたミカ……………何か感じたのか？」

「うんお兄ちゃん……………来るよ」

「っ！ 全員周囲を警戒！ 何か来るぞ！！？」

俺のその言葉に他の皆が、武器を構え直して周囲を警戒し始める。

……………これまで索敵を担当していたから俺の言葉をすぐに信じてくれたよ、ミカの直感は説明するのが難しいから助かったな。

「さて、何が来るかry「エルザちゃん！！？」っミカ！！？」

すると、いきなりミカがエルザちゃんの名前を叫びながら駆け出した……………そのすぐ後に森の中から一つの影が飛び出して、エルザちゃんに襲いかかった！

『《ハンティンググスナイプ》！！？』

『ウインドカッター K I I ————！！？』

『G A U ！！？』

その影に向かって俺のアクティブスキルとウオズの風魔法が放たれ、さらにそこにヴェルフが牙を剥き襲い掛かった。

だが、その影は右手に持っていた剣で矢と風魔法を払い飛ばし、飛びかかったヴェルフを剣を持っていない左腕で打ちはらって、そのま

ま真つ直ぐにエルザちゃんに向かつていった。

『KYUUUU!!?』  
アース・ウォール

「マスター!!?」

しかし、稼いだ時間を使ってアシーの地属性魔法がその影を囲むようにして大きな壁を作り出し、その隙にセリカさんがエルザちゃんを抱えてその場を離脱した。

「エルザちゃん! 大丈夫!?」

「マスター! 無事ですか!!?」

「はっはい! 私は大丈夫です……でもヴェルフが……」

『KUUN』

「回復させます 《ソードヒール》!」

弾き飛ばされたヴェルフも大したダメージではないらしく、セリカさんの回復魔法で完治していた。

そして、その間に他のメンバーも集まって土壁の向こう側にいる謎の影を警戒していた。

「一体何者なんでしょうか?」

『マスター、アイツなんか凄い嫌な感じがする……』

「ああ俺もだネイ、奴からは異様な気配を感じる……もしやこの《ノズ森林》の異常の原因かもしれん」

「その可能性が高いでしょうね、明らかな異常ですし」

そんな話をしていると目の前の壁が向こう側から砕け散り、その中から一体のモンスターが現れた。

『GUUU』

「……………ゴブリン?」

そのモンスターの外見は身長二メートル程のゴブリンの姿をしており、その手には禍々しい存在感を放つ一本の剣が握られ、さらに腰にも一本の剣がさげており、その目は怪しげな赤い光を湛えていた………そして、その頭上には今まで見たことがない形式の名前が浮かんでいた。

「【魔刃悪鬼 ゴリドン】?」

「まさか……………  
ユニーク・ボス・モンスター  
〈U B M〉か!!?」

以前、アイラさんから聞いた話ではへUBMとは世界で一体しか存在しない文字通りユニークなモンスターであり、特異な固有能力や高いステータスを持つらしい。その戦闘力はカンストしたティアンのパーティーを壊滅させる事も珍しくは無い程だという。

……なるほど、この森にモンスターが殆どいなかったのはコイツが全部切ったからかな？ あの剣もなんか凄そうだ、以前マリイさんの店で見た高性能な装備以上の気配を感じる……鑑定してみると「ヴァルシオン」という銘の非常に高い装備補正を持つ剣で、スキルは高レベルの《破損耐性》があるだけだった。

後、腰にさげている剣も鑑定して見たがただの《ステイルソード》だった。

『GUUUUAAAAAAAA!!?』

まるで俺達の言葉に“その通りだ”と答えるように、目の前のへUBM……【魔刃悪鬼 ゴリドン】は吠えてそのまま俺達に襲いかかってきた。

……これが俺とミカの初めてのへUBM戦だった。

# V S 〈U B M〉

□ 〈ヘノズ森林〉奥地 【戦棍士<sup>メイス・ストライカー</sup>】 ミカ

『GUUUUUUU!!?』

「防げ！ ラフム!!?」

『BO・BO・BO!』

私達に向かつて剣を振りかざして突っ込んで来た「魔刃悪鬼 ゴリドン」を、シャルカさんのラフムが私達を庇う様にして迎え撃つ。

相手のAGIはこちらよりも大分早いようである。振るわれるその剣先は霞んで見える程だったが、『物理攻撃無効』のスキルを持つ泥のゴレムであるラフムにダメージを与える事は出来ていない様だ。

……だが、これで終わる様なら<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>へU B Mなどは呼ばれないらしい。

『GUUUUUUU!』

『BO・BO・BO!』

「ラフム!? くっ 《エンチャント・エンデュランス》!!?」

「流石にまずいな 《ハンティングスナイプ》!」

攻撃が効かないと判断するや否や「ゴリドン」は、剣に炎を纏わせるアクティブスキルを使いラフムを切り裂いた。

……幸いな事に泥のゴレムであるラフムに対して、炎による攻撃は効果が今一つだったらしくダメージは少なかつた様だ。すぐにシャルカさんがEND単体バフをかけてダメージを減らし、お兄ちゃんの支援射撃を相手が躲して距離を取った隙に体制を立て直した。

……よし、私も前に出よう。直接戦えばさつきから感じている違和感の正体が解るだろうからね。

「お兄ちゃん、私も前に出るよ」

「わかった! ……前衛は前に出てくれ! 多分次からはラフムを無視してくるぞ!!?」

『GUUUU!』

お兄ちゃんの言葉通りに「ゴリドン」は攻撃が大して効かないラフ

ムを無視することにしたらしく、高いAGIを使ってラフムを躲し後衛のシャルカさんを狙って来た。

……だが、その行動を直感で先読みしていた私は、相手の進行方向に先回りしてそのままアクティブスキルを叩き込んだ。

「《スマツシユメイス》」

『GUUUU』

「やっぱりそっちを狙うよな《ハンティングアロー》！」

私の不意打ち気味に放たれたアクティブスキルは相手の剣で受け止められるが、僅かに体制が崩れたところにお兄ちゃんの援護射撃が突き刺さった。

……やっぱり強いね、ステータスは大体亜竜級の三倍ぐらいかな。後、違和感の正体もあの剣と打ち合った時に大体解った。

そして、私達が稼いだ時間を使って他の前衛メンバーも来たみたいだね。

「《テイマーズコマンド・デフェンス》アリア、トリム！ ウオズ《ウインドカッター》、アーシー《ロックグレイヴ》!!？」

『KIIII』

『ロックグレイヴ』

「了解！ 防御は任せて!!？」

「私は攻撃です《トライスラツシユ》!!？」

エルザちゃんの指示によってウオズの風の刃が「ゴルドン」を牽制し、その隙にアーシーちゃんが地面から石の槍を出す地属性魔法で相手を打ち据えダメージを与えた。

その隙に接近したアリアさんとトリムちゃんに向けて相手が剣を振るうものの、エルザちゃんからの防御バフを受けたトリムちゃんがその攻撃を吹き飛ばされながらも盾で受け止めて、そこにアリアさんが三連撃を打ち込んだ。

「今です！ ラフム！ 抑え込みなさい!!？」

『BO・BO・BO!!？』

「よし動きが止まったね、ここは足を狙おうか《インパクトストライク》！」



「行くぞ！　ネイ!!?」

『オツケー！　マスター《オーヴァー・ブレード》!!?』

「《スラッシュエッジ》!!?」

怯んだ相手に追いついたラフムが後ろから絡みつき動きを止め、そこに私のアクティブスキルが放たれ相手の足を砕いた。

そこに、フォルテスラさんとネイリングちゃんが亜竜級モンスターをも両断するスキルを放った。

しかし……

『GUUUUU!!?』

「なにっ！　……ぐわっ!!?」

『マスター!!?』

その攻撃は【ゴリドン】の身体を少し切り裂いたところで止まっており、それに動揺したフォルテスラさんを剣で弾き飛ばし、そのままラフムを振り払った相手はすぐさま後方に飛び退いた。

「くっ、どういう事だ!!? 《看破》しても防御スキルやENDバフがある様には見えなかったが……!」

『マスター、やっぱりアイツ変だよ！　なんだかよくわからないけど……とにかくなんか変!』

「ですがミカさんの攻撃は効いている様です。あの足なら先程の様な動きは……」

『GUUUUU!!?』

そんな事を言ったシャルカさんの目の前で【ゴリドン】が大声で叫びだした。

……すると相手が光に包まれると共に、その傷があつという間に治っていく…… 《看破》で見たらHPも回復している様だね。

「そんな……」

「《看破》で見えてみましたが《超回復》というスキルがありました、おそらくそれが原因でしょう。他に該当しそうなスキルはありませんでしたし……」

「だが、MPとSPもそれ相応に減っている！　このまま攻め続ければ勝てるはずだ!!?」

その言葉に皆が希望を持ったみたいだけど……その方法じゃ勝てないんだよね。

……すると、お兄ちゃんがフォルテスラさんに話しかけた。

「すみませんフォルテスラさん、差し支えなければさつきアイツに使ったネイリングのスキルを教えてくださいませんか？」

「……？ ああ、さつき使った《オーヴァー・ブレード》は『選択した攻撃対象の素のENDをネイリングの攻撃力に加算する』スキルだ。……だが、さつきは何故かアイツには効かなかったな……？」

「成る程……そっちが効かずにミカの攻撃が効いたって事は……そういう事か……ミカ！ 危険度が高いのはどっちだ？」

「さつき打ち合った時の感覚だと、圧倒的に剣の方だよお兄ちゃん」

「それじゃあ確定だな……あとはどういうタイプかだが……それはこれから確かめるか」

そんな私達の会話に他のメンバーは疑問符を浮かべていた……まあ私の直感には他人には理解され辛いし、お兄ちゃんもいざって時には頭が異様にキレるから他から見たときは分かりにくいしねえ……

「皆、頼みがある……アイツの動き、特に剣を持っている腕の動きを止めて欲しい。その隙に俺の切り札の一つをアイツに打ち込む」

「それでアイツを倒せるのか？」

「……少なくともアイツの能力のカラクリは見抜けると思っています」

「カラクリと言っても……ヤツの能力は全て看破できていますよ？」

「いや待てシャルカ、俺もアイツの能力には違和感を抱いている……それに、ネイもさつきからアイツから変な感じがしているらしい。ここはレントくんへの指示に従おう」

「ありがとうございます、フォルテスラさん………来ます!!？」

『GUUUUUUU!!??』

お兄ちゃんの言葉と同時に「ゴリドン」がこっちに突っ込んで来た……どうやら傷は完全に治ったらしい。

「防げ！ ラフム！」







散った。



〔〈UBM〉【心蝕魔刃 ヴァルシオン】が討伐されました〕

【MVPを選出します】

【【レント】がMVPに選出されました】

【【レント】にMVP特典【心身護刃 ヴァルシオン】を贈与します】

砕け散った【心蝕魔刃 ヴァルシオン】が光の塵になると共に、

今のアナウンスが告げられた。

それと共に、俺の下に一つの【宝櫃】が贈与された……………〈UB

M〉は倒すと特典武器とも呼ばれる特別なアイテムを落とすらしく、それはその戦いで最も活躍した者に贈られると聞いたが、今回は俺がMVPに選ばれたらしい。

……………ちよつと叩いてみるか。

「MVPおめでどうお兄ちゃん、やっと終わったね……………って何叩いてるの？」

「……………また偽装しているんじゃないかと思ってな」

「いや〜そこまで疑わなくてもいいでしょ……………大丈夫、私の勘でも【ヴァルシオン】はちゃんとやられたって出てるから！」

どうやら本当に倒されたらしい……………流石に疑いすぎたか。

しかし今回の戦いは大分綱渡りだったな、特にダメージを受けたヤツがあそこまで動揺したからその隙をつけた訳だし……………もし、動揺せずに普通に戦われていたらもっと苦戦していただろう。俺のスキルも一日一度だけだからな。

……………そこにフォルテスラさんが話しかけてきた。

「MVPおめでどうレントくん。今回の敵は君がいなければ倒せなかつただろう」

「いえ、皆が相手の動きを抑えてくれていたお陰です……………それで要件はアレのことですか？」

「ああ……………あのゴブリンのことだ」

そちらを見ると【ヴァルシオン】に操られていた【ホブゴブリン・ソードマスター】が目を瞑って座り込んでいた。

……ヤツを倒した後、すぐに限界だったラフムとアーシーちゃん拘束魔法が外れてあのゴブリンは自由になったのだが、そこで逃げるでもこちらに襲い掛かるでも無くその場に座り込んでしまったのだ。

……その行動に面食らった俺達は激戦の疲労もあって、何かするタイミングを逃してしまったのだった。

「…………正直、あそこまで無抵抗の相手を斬るのは気が咎めるしな……………」

「そうだな……………っ！」

すると、いきなり目を開いたゴブリンは腰の剣を引き抜いてこちらに構えてきた！

それに対して俺達はすぐに迎え撃つ姿勢をとるが、ゴブリンはそのまま動かなかった…………その目には先程までの狂気は一切なかった。

「一体何のつもりでしょうか……………とりあえず全員にバフを……………」

「いや待てシャルカ……………ここは俺一人で相手をする……………行くぞ、ネイ」

「……………わかったよ、マスター」

迎え撃とうとしたシャルカさんを止め、フォルテスラさんが既に满身創痕のゴブリンの前に出た。

【剣士】フォルテスラだ……………一騎打ちで相手をしよう」

『GUUUUー！』

……………そしてフォルテスラと【ホブゴブリン・ソードマスター】の決闘が始まった。

『……………G A A A A A !!?』

『《オーヴァー・ブレード》!!?』

『《スラッシュ》!!?』

……………決着は一瞬だった。

ゴブリンの剣はフォルテスラさんには当たらず、フォルテスラさんの剣はゴブリンの胴を薙いでいた。

『……………』

……………そのまま【ホブゴブリン・ソードマスター】は光の塵になり天に登っていった。

「……………終わったねお兄ちゃん」

「……………そうだな」

こうして、俺とミカの初めての〈UBM〉戦は終わったのだった。



## 達成報告と打ち上げ

□王都アルテア冒険者ギルド

ダレイト・ハンター【大狩人】レント

「ユニーク・ボス・モンスタ」  
「へU B M」を倒した!??.....ゴホン！ 失礼しました。

.....詳しいお話を聞かせて貰っても?」

「はい、わかりました。まずは.....」

その後、へUBM「心蝕魔刃 ヴアルシオン」を倒した俺達はそのまま王都に引き返し、冒険者ギルドでアイラさんに調査結果の報告をしていた。

.....その際、へUBM関係については特に念入りに問い正されたが、俺が得た「剣型のペンダント」の逸話級特典武器「心身護刃 ヴアルシオン」の存在が決め手となり納得してもらえたようだ。

しかし、名前からして武器かと思っただがアクセサリーなんだよな【ヴァルシオン】。

「.....成る程、報告はわかりました。.....しかし本当にへUBM」を倒してしまうとは.....」

「今回は運が良かったんですよ。相手とこっちの能力が噛みあっていいましたし。それに多分へUBM」としては経験不足だったんでしょう、特典武器を見ると逸話級だったみたいですから」

「.....普通は逸話級相手でも、多少運と相性が良かろうが勝てないものなのですが.....やはりへマスター」と言う存在は規格外ですな」

実際、物理攻撃が効かず相手を拘束出来るシャルカさんのラフム、地属性の強力な拘束魔法が使えたエルザちゃんのアーシー、そしてジャイアントキリング大物食いに長けたフォルテスラさんとネイリングちゃんが居なければ倒すことは出来なかっただろう。俺とミカだけじゃ相手の動きを封じられず、オリジナルスキル切り札を当てられなかったらうからな。

.....後でミカに聞いた話だと、偽装を見破れず先に【ホブゴブリン・ソードマスター】を倒していた場合、高確率で詰んでいたらしいしな。どうも【ヴァルシオン】にはまだ切り札があったようだ.....まあ、それも使われなければ意味は無いけどな。

やはりミカの直感は初見殺し相手には天敵だな。「ヴァルシオン」も、もう少し偽装の使い方や立ち回りが上手かったら、あそこまであつさり倒される事は無かつただろうに。

「さて、〈UBM〉の発見に加えてその討伐までしてもらった以上、特別報酬は相当上乗せしなければなりませんね、何かご要望はありますか?」

「ん——俺は特典武具も得たし特に要望は無いかな……皆はどうする?」

「私も今そんなに欲しいものがあるわけじゃ無いし……お金の<sup>リル</sup>上乗せでいいんじゃないかな」

「あつ、私もそれでお願います!」

「俺もそれで構わないが……シャルカはどうする?」

「私もリルの上乗せで、それが一番面倒が無さそうですし」

その後アイラさんと話しあつた結果、元々の報酬の十万里ルに特別報酬の四十万里ルを上乗せし、合計五十万里ルが俺達にそれぞれ支払われる事になった。

……報酬が多すぎではないかとアイラさんに聞いたところ、「今回の【ヴァルシオン】はベテラン冒険者のパーティーを壊滅させていますし、存在が発覚していれば相応の額の懸賞金がついたでしょう。それに異常の調査どころか、その原因を解決した事も考えるところ。しろ安いぐらいです。……今回のクエストは調査依頼だったので上乗せ出来る報酬はこれが限界でした、申し訳ありません。ですが、今回の件で貴方達の冒険者ギルドで受けられるクエストは大幅に増えました。また、この件は他のギルドや騎士団の方へも伝えられるので、貴方達の王都での覚えは大分良くなるでしょう」とのこと。

「クエスト達成の報酬を支払ったので、今回のクエストは以上となります。今後も調査は続けられますが、〈UBM〉が討伐された事で異常は解決したと思われれますから騎士団の方だけで大丈夫でしょう。……最後に冒険者ギルドの職員として、そして王都に住むティアンの一人としてお礼を言わせてもらいます……今回の異常を解決してくださり本当にありがとうございます」

そうして、俺達の指名クエストは終わりを迎えたのだった。

◇

冒険者ギルドを出ると、フォルテスラさんが話しかけてきた。

「レントくん、ミカちゃん、エルザちゃん、せっかくだからクエスト達成を祝して皆で打ち上げに行かないか？」

「打ち上げ？」

「ああ、俺とシャルカはよくクエストを達成したらパーティーメンバーと一緒に打ち上げをするんだ。それに、今回は〈UBM〉を倒したりもしたからな。それでどうだ？」

打ち上げかあ……俺とミカはそう言う事はあんまりしないからな……いつもクエストが終わったら、適当に王都をぶらついた後口グアウトしてたからなあ。

「俺は別にいいですけど……ミカはどうする？」

「私も別にいいよ、面白そうだし！ エルザちゃんは？」

「お二人が行くなら私も行きます。……たくさんお金が手に入ったから懐にも余裕がありますし……」

「じゃあ皆で打ち上げに行こうか」

こうして、俺達はフォルテスラさんの誘いで打ち上げに向かう事になった。

◇◇◇

□王都アルテア食事処〈蜜熊亭〉  
【戦<sup>メイス・ストライカー</sup>棍士】ミカ

「それでは！ 指名クエスト達成と〈UBM〉討伐を祝して、カンパーイ!!？」

「カンパーイ！」

私の音頭と共に打ち上げが開始された！

周りを見てみると、お兄ちゃんはフォルテスラさんやシャルカさんと一緒に、男同士で話したりご飯を食べたりしていた……私とお

兄ちゃんはお酒が飲める年齢じゃないしね。

エルザちゃんを見てみると、自分もご飯を食べながらタイムモンスターにも食事を与えていた（この店はタイムモンスターOKだそうだ）……………後で聞いた話だと一番食費がかかるのはアーシーちゃんで、高価な鉱石や金属などを好むのだと、遠い目をして言っていた……………強力なモンスターの分燃費も悪いらしい。

他には、ネイリングちゃんと「ワルキューレ」の三姉妹が話し込んでいた。どうも女性型の「エンブリオ」同士で色々話をしているようだ……………あと、人型の「エンブリオ」には特有の食癖があるらしく、「ワルキューレ」の三姉妹はエルザちゃんと同じものしか食べず、ネイリングちゃんは一口で食べられないものは一口サイズにカットしなければ食べないらしい。「エンブリオ」って本当に不思議だね。

さて、私はどうしようかな……………あっそうだ、ちよつと気になっていた事があるんだよね。

「そういえばお兄ちゃん、手に入れた特典武具ってどんな性能をしているの?」

「ん? ……ああ、こんな性能だったぞ」

「心身護刃 ヴァルシオン」

エビソードアームズ  
〈逸話級武具〉

担い手の精神を縛り肉体に強大な力を与える魔刃の概念を具現化した逸品。

装備者の魔力・技力を増大させ精神系状態異常への耐性を与えると共に、各種能力を増加させ魔力・技力を吸収し隠蔽・回復の能力を強化する。

※譲渡・売却不可アイテム

※装備レベル制限なし

・装備補正

MP + 「着用者の合計レベル」×5

SP + 「着用者の合計レベル」×5

精神系状態異常耐性 + (「着用者の合計レベル」÷10) %

・装備スキル

《強化護刃》

《吸命転換》

《陰装護刃》

《陽装護刃》

「《強化護刃》は着用者の合計レベル分だけSTR・END・AGI・DEX・LUCを増加させて、《吸命転換》は自身が与えたダメージの二十分の一の数値だけMP・SPを回復させる、それで《陰装護刃》は自身の偽装・隠蔽系のスキルを強化して、《陽装護刃》は自身の回復系スキルを強化出来るみたいだな」

「ふーん、流石は特典武器だけあって既存のアクセサリとは桁の違う性能だね」

特典武器は獲得者に合わせてアジャストされるって聞いたから、殆どの数値で合計レベルを参照しているのはレベルが上がりやすいお兄ちゃんに合わせた結果かな？

そんな話をしていると、フォルテスラさんが話しかけてきた。

「二人は今後も王都で活動して行くのかい？」

「んー今のところはそうですけど……フォルテスラさんはどこか行くんですか？」

「ああ、俺とシャルカはこれからギデオンに行こうと思っている。………実は前から決闘に興味があつてね、ギデオンは“決闘都市”と呼ばれる程の決闘のメッカだそうだから一度行って見たかったんだ。それに、今回のクエストでまとまった金が入ったしね」

「んー、そうですね！ 私も他の街が見てみたいになりました!!？」

この無限に広がる世界のことを思いながら、私達の〈Infinitesimal Dendrogram〉は続いていくのだった……………



【孤狼群影 フェイウル】

最終到達レベル：37

討伐MVP：【壊屋】クラッシュヤー シュウ・スターリング Lv48（合計レベル：48）

〈エンブリオ〉：【戦神砲 バルドル】

MVP特典：逸話級【すーぱーきぐるみしりーず ふえいうる】

【絶界虎 クローザー】

最終到達レベル：58

討伐MVP：【闘士】グラディエーター フィガロ Lv46（合計レベル：46）

〈エンブリオ〉：【獅星赤心 コル・レオニス】

MVP特典：伝説級【絶界布 クローザー】

【心蝕魔刃 ヴアルシオン】

最終到達レベル：46

討伐MVP：【大狩人】レントLv32（合計レベル：132）

〈エンブリオ〉：【百芸万職 ルー】

MVP特典：逸話級【心身護刃 ヴアルシオン】

「……………ふむ、これは予想外の結果になったな」

そう呟くのは〈Infinite Dendrogram〉を管理する十三体の管理AIの一人……………〈UBM〉担当・管理AI四号「ジャバウォック」である。

今、彼が見ているのは最近の〈UBM〉の討伐記録であり、そこには十を越える〈マスター〉による討伐記録が映し出されていた。

「地球の〈マスター〉達への最初の試練として、開始地点周辺での〈UBM〉投下又は作成する計画だったが、まさかこれほど多く討伐されるとは……………」

今回の計画の都合上、そこまで強い個体は投入されなかったとはいえ、〈UBM〉は一番下の逸話級であれど同レベルのボスモンスターよりも強力である。なので、当初の予定では〈UBM〉と遭遇して窮地に陥る、又は敗北した〈マスター〉達の成長と〈エンブリオ〉の進化を促すカンフル剤としての計画だった。

だが、〈UBM〉と遭遇した〈マスター〉達は、その才能や仲間との

連携、或いはへエンブリオの特殊な能力でそれらを討伐していった。  
……まあ、中にはティアンの超級職などに討伐された例もあり、計画前は多くがそうなる事も予想されていたが……

「……………まあいい、むしろこれは嬉しい誤算と言う奴だろう。やはり苦戦とドラマの末に宝物を得る、それこそが英雄ヒロイック叙事詩というもの。私も今回の計画の為にへUBMを作った甲斐があったと言うものだ。……それに地球のへマスター達が思っていた以上に優秀な事も解った、これでこの先にも期待が持てるだろう」

そうジャバウオックは満足そうな表情で頷いた。

「……………だが、そう解った以上、今後投入するへUBMはより強力なモノにしなければならぬ……………そうだな、生物に寄生し自己再生・自己増殖・自己進化を繰り返す粘菌型のへUBMなどはどうだろうか」

「バイオなハザードはやめてー」

ジャバウオックが最終的に惑星を覆い尽くしたり、全生物の滅亡とかやりそうなへUBMの思いつきを口に出すと、それに応える声があった。

いつの間にか、ジャバウオックの背後に猫型のマスコットが存在していた。そのマスコット——管理A I十三号 “チエシャ” は同僚に向かつて声をかけた。

「取り返しのつかない様なヤツはへSUBMだけで十分だよ。それにもう地球のへマスターが来ちゃったから、今までの対処法は殆ど使えなくなってるんだからねー」

「熟知している。それで、何の様だ十三号」

「んーちよつと王国の方で気になる話を聞いてね……………へノズ森林で起きたへマスターとへUBMの戦いのログを見せてほしいんだー」

「……………ああ、これだな」

そこには五人のへマスターと「心蝕魔刃 ヴァルシオン」の戦いの光景が映し出されていた。

この「ヴァルシオン」はジャバウオックがデザインしたモンスター

であり、使いこなせそうなモンスターの近くに投下したのも彼である。

生物を殺害する程に強くなる特性と、強力な精神支配の能力からそれなりに成長する個体だと見込んでいたのだが……………

「ふむ……………成る程、偽装スキルの不備を見破り支配対象の動きを拘束した上で、へエンブリオ〉によって強化されたスキルで倒したのか……………確かに偽装スキルを使いこなすには「ヴァルシオン」は経験不足だった様だな。……………それで、この記録がどうしたんだ十三号、こう言つてはあれだがMVPに選ばれた彼は真つ当な方法でへUBM〉を攻略しているぞ」

「あー気になっているのはMVPの彼じゃなくて、その妹さんの方なんだよねー」

「ん？……………そちらも特に不自然な点は見られないが……………」

「……………彼女のチュートリアルを担当したのは僕なんだけど、その時にこつちが何か言う前に真つ先に言われたんだ……………このへInfinitive Dendrogram〉は本当にゲームなのか」つてねー」

「……………ほう？」

改めて記録を見ると、彼女は敵の攻撃を全て先読みしている様だった。さらに、一度打ち合っただけで「ヴァルシオン」が本体だと気付いていた。

「彼女にどうしてそう思ったのか聞いて見たけど、昔から勤が良くて、なんとなくそんな気がした」つて言っただけだからね……………でも、僕は彼女と似たチカラを持っている人達を知ってたからねー」

「……………特殊<sup>ヴァンガード</sup>超級職【先導者】、確かその資格者には、危険を何となく探知する才能がある<sup>と聞いたことがあるな</sup>。だが、彼女はへマスタ〉である以上特殊超級職には就けないだろう？」

「そうだねー。……………ああ、僕が彼女をどうしようとかは思つてないよ……………でも、僕<sup>管理AI</sup>達の中には融通が利かないのがいるからー」

「セキリユティ担当か、確かに十号なら敵は轢き潰す以外の選択肢は



取らないだろうな。実際、不正アクセスを試みようとした地球の異能者達は潰されている」

「アイツは色々加減が利かない……というより加減する気が無いからねー。だからちよつと気になってねー」

「そこまで心配する必要はないと思うわよ」

突然聴こえてきたその声に二人が振り向くと、そこには一人の女性  
がいた。

彼女——アバター管理担当・管理AI一号“アリス”は二人に向  
かって告げた。

「『先導者』の資質自体はただのセンススキルだから、〈マスター〉が似た才能を持っていても不思議じゃないわ。それに彼女からは異能の反応は見られなかったし、彼女達の行動ログを見ても今のところは普通のプレイヤーとしてこのゲームを楽しむつもりの様だから、特に問題は無いと思うわよ」

「その才能に関しては、あくまでただの直感の延長線上にあるものだからな。それに特殊な才能を持つ〈マスター〉は何人かいる。情報の取り扱いに関しても、情報収集に特化した〈エンブリオ〉が産まれるなどの可能性も議論した上で問題は無いと判断された筈だ」

「……………そうだねー、少し気を回しすぎたみたいだねー」

「まあ、〈Infinite Dendrogram〉はまだ始まったばかりだから、色々ごたつきはあるのはしょうがないわ」

「むしろ、正規の方法でログインしているならば、その様な才能の持ち主は歓迎するべきであろう。……その様な者達ならいずれは〈エンブリオ〉を〈超級〉……或いはその先まで進化させる可能性も高いだろうしな。……………何にせよ楽しみながら強くなればいい、この世界は  
彼等にとっては最初から最後までゲームなのだからな」

## そうだ、ギデオン行こう 第四形態と旅行準備

□王都アルテア サモナー【召喚師】レント

「お兄ちゃん！ 旅に出ようよ!!?」

「いきなり何を言いだすんだ？」

指名クエストと ユニーク・ボス・モンスターへU B Mとの戦いが終わって現実では約五

日、こちらでは半月程した頃にミカが突如そんなことを言い出した。

ちなみに グレイト・ハンター【大狩人】はカンスト出来たので、今は面白そうだと思う

た【召喚師】のジョブに就いている。

「だって、この前フォルテスラさんが王都を出て別の街に行くって  
言ってたから、私もどこかに行きたくなっただもん！」

「つまり、王国の別の街に行きたいってことか。だったら初めからそ  
う言え。……まあ、俺も他の街を見てみたいとは思っていたし別  
にいいぞ。で、どこに行きたいんだ？」

「うーん、フォルテスラさんは王都南のギデオンって街に行くって  
言ってたし、私もそこに行つて見たいなく。なんか決闘が盛んらしい  
し！」

「決闘ね……聞いた話だと、この世界の決闘は “死んでも死なない”  
なんだってな」

何でも、決闘が行われるコロシウムでは特殊な結界が張つてあるら  
しく、その結界の中で起きたことは、例えば人が死んだとしても結界を  
出れば元通りになるらしい。

……まあ、そんな結界が無いと、命が一つしかないティアンは  
迂闊に決闘も出来ないだろうからな。

「あと、決闘に勝つたら賞金とかも貰えるらしいよ！」

「ふーん……で、お前は決闘をやりたいのか？ まあ、お前なら結構い  
いセン行くんじゃないか？」

「どうだろうねー、まずは実際の決闘を見てからかな。私のレベルも  
まだ低いし」

……そうは言っているが、ミカの直感是一对一の決闘の様な状況では非常に有効である。

何せ攻撃は全て先読みされる上、奇襲・不意打ちの類は一切通じず、更に相手の切り札すらもおおよそ看破してのけてしまうのがミカの直感である。それを突破するには単純にミカの処理能力スベツクを上回る必要があり、さらに「エンブリオ」である「ギガス」がステータス補正に特化しているため、ミカが対応出来る範囲がより広がっているのもそれに拍車を掛けている。

実際、俺もミカ相手に戦って勝つのは難しいだろう……対戦ゲームとかでも俺の勝率は三割ぐらいだからな。それにコイツは直感以外の能力も普通に高いから、単純に腕前で上回ることも難しいし。

……まあ、この世界なら広範囲攻撃スキルで決闘場全てを攻撃するとか、解つていてもどうしようもない程に理不尽なスキルとかで攻略される可能性もあるか？

「それに私達の「エンブリオ」も第四形態に進化して凄く強くなったし、そろそろ行動範囲を広げてもいい頃だと思っただ！」

「「エンブリオ」は第三形態までは下級、第四形態からは上級「エンブリオ」と呼ばれている様だからな。……この国に元からいた「マスター」が言っていた話だそうだが」

実際、ミカの「ギガス」はスキルこそレベルが一つ上がったただだが、装備としての性能は倍近くになった。さらに、ステータス補正もこれまでの進化の際と比べても遥かに多く上がっており、HP・STR・END・AGIの補正がAに届く程だった。

……それに対して俺の「ルー」は……  
「俺の「エンブリオ」は上級に進化しても大して強化されてないんだよなあ……」

「イヤイヤ、お兄ちゃんの「エンブリオ」は今、掲示板とかで話題の必殺スキルを覚えたじゃない！ それもかなりチートっぽいヤツ!!？」  
「その覚えた必殺スキルである『我は万の職能ルに通ず』が今のところは意味のないスキルじゃ無ければなあ……なんか前にもこんな事を言った気がするんだが……」

俺のへエンブリオ〈「百芸万職 ルー」の必殺スキル《我は万の職能に通ず》は常時発動型のスキルで、その効果は自身が就くことの出来るジョブ枠の大幅拡張である。

第四形態の現在では、二十個の下級職と十五個の上級職に追加で就くことが出来る様になっており、元からのジョブ枠と合わせるとその最大合計レベルは三千に達する。

……ジョブレベル制のゲームで、最大レベルが増える事が凄く強い事なのは解っているんだが……

「レベルが五百にも達していない今の俺には意味の無い必殺スキル、という事になるんだよな……ステータス補正も皆無だし。……まあ、《光神エクスペリエンスフリースターの恩寵》のレベルが四になって補正が+250%になったり、《百芸創主スキルマイスター》で素材に出来るスキルが四つに増えたりしたから全く強くなっていない訳では無いが……あと、TYPEがテリトリーからルールってのに変わってたな」

「私もTYPEがエルダーアームズに変わってたね、掲示板とかだと上級になったらカテゴリーが上位のものに変わる事があるって情報が出てたっけ。……まあ、お兄ちゃんのへエンブリオ〈は大器晩成型みたいだしね、そのうち役に立つよ！ と言うかそれでステータス補正まで高かったら完全にブツ壊れだし。……それに特典武器の【ヴァルシオン】とも相性が良いでしょ?」

「そうだな、そう言うへエンブリオ〈なんだから仕方がないか。……そうすると今後はどんなジョブビルドにするかだな」

「え? 今就けるジョブに片っ端から就けばいいんじゃない? お兄ちゃんのへエンブリオ〈ならジョブビルドなんて如何とでもなるでしょ?」

成る程、そう言う考え方も有りか……確かに今の俺なら下級職をカンストさせるのはそこまで難しくは無いし、レベルが上がれば【ヴァルシオン】の補正も上がって行くからな。

……さてと、今後のジョブ構成も目処がついた事だし本題に戻るか。

「それで、確かギデオンに行くと言う話だったが、一体どうやって行く

んだ?」

「え?」

そう、俺が言うのとミカはポカンとした表情を浮かべた。

「だから移動手段の話だ、まさか徒歩で行く訳では無いだろう?」

「……………考えてなかった。……………お兄ちゃんよろしく!」

「はあ……………。まあ、ちょうど当てがあるから別に良いんだがな。

……………とりあえず、マリイさんのところで準備をするぞ」

「オツケー! お兄ちゃん!」

そういう訳で、俺達は旅行の準備の為にマリイさんのお店に行く事になったのだった。



□◀マリイの雑貨屋▶

ストロング・メイス・ストライカー  
【剛 戦 棍 士】ミカ

「はい、これが中古の小型馬車ね。お値段は三万リルになるわ」

「ありがとうございます、マリイさん」

あれからマリイさんのお店に来た私達は、旅行の準備として中古品の小型の馬車を買ったのだった……………馬車だけじゃ動けないけど、お兄ちゃんには何か考えがあるみたい。

「それじゃあ、他に必要なアイテムを買っていくぞ」

「分かったよ」

そうお兄ちゃんに言われたので、私は各種消費アイテムと《着衣交換》スキル付きの私服を買うことにした……………この世界では街中で鎧をつけていても特には咎められないけど、せつかく遠出に行くんだからオシヤレとかもしたいしね!

お兄ちゃんはMPポーションなどを買いつつ、今後のジョブレベル上げの為に使い捨てるのメインジョブ変更アイテムである「ジョブクリスタル」を見ていたんだけど……………

「使い捨てアイテムなのに高いな【ジョブクリスタル】、一個数万はするんだが。……………マリイさん、使い捨てじゃない【ジョブクリスタル】とかは無いですか?」

「うーん、『ジョブクリスタル』自体がサブジョブのレベルを上げている時に、メインジョブのスキルが必要になった緊急時の為に持つておくアイテムだから使い捨てで十分なのよねえ」

「そうなんですか……「まあ、ウチにはあるんだけど」……あるんですか!?」

「ええ、倉庫に仕舞ってあったはずだからちよつと待つてね」

そう言ったマリイさんは店の奥に行き、しばらくして戻ってきた時には手に「先端にクリスタルの付いた長さ五十センチくらいの杖”を持つていた。」

「これは『ジョブクリスタル・ロッド』と言う杖で、装備スキルに装備者のメインジョブを変更する『ジョブチェンジ』のスキルが付いているわ。………値段は十五万リルぐらいでいいかしら」

「『ジョブクリスタル』の値段と比べると、かなり安いんですがいいんですか?」

「ええ、さつきも言った通り『ジョブクリスタル』は使い捨てで十分だから、この杖には需要が無くて倉庫の肥やしになってたからね。………それにこの杖は昔、私が作った物だから必要としてくれる人のもとにあった方が私としても嬉しいわ」

「………分かりました、じゃあそれを買わせていただきます」

「ええ、お買い上げありがとうございますね」

………さて! コレで準備が終わったしようやく旅に出れるね!!?



□王都アルテア南門前 【召喚師】 レント

あのあと、俺は色々なギルドをハシゴして様々なジョブに就くだけ就いた。

就いたジョブは、まず狩人派生で条件を満たしていた【弓狩人】

【毒狩人】ボイスン・ハンター 【罨狩人】トラップ・ハンター 【夜行狩人】ナイト・ハンター、司祭派生で条件を満たしていた

上級職の【司教】ビショップと派生下級職の【祓魔師】エクソシスト、後は有用そうなスキル

が手に入る【弓手】アーチャー【闘士】グラディエーター【騎兵】ライダー【盗賊】バンディット【魔術師】メイジ【付与術師】エンチャンター  
と言ったところである。

「流石に下級職を全部埋めると、今後取りたいジョブが出てきた時に困るからこのくらいでいいか」

「イヤイヤお兄ちゃん一気に取りすぎでしょ、ジョブビルドとか完全に無視してるよね……まあ提案したのは私だけだよ」

「別に構わないだろ、まだ下級職の空きは十個以上あるしな。………お前もクエストの届け物は持ったか？」

「うん、ちゃんとアイテムボックスに入れておいたよ。これをギデオンのギルドに届ければいいんだよね」

この届け物は旅の準備が終わった後、アイラさんに王都を出る事を伝えるに冒険者ギルドに行った時に、彼女から「ギデオンに行くならついでに受けていかないか」と斡旋されたクエストの配達物である。

何でも、以前の生態系の変動のせいで王都と他の街の交通量が減ってしまったので、この手の配達系クエストが冒険者ギルドに結構溜まってしまっているのだとか。

「………ところでお兄ちゃん。いい加減に移動手段について話してくれてもいいと思うんだけど」

「そうだな。………まあ見たほうが早いだろう………《召喚》サモン——

【ホースゴーレム】

その言葉と共に俺は銅色をした馬型のゴーレムを召喚した。

「おおー！ お兄ちゃんこれは？」

「コイツは俺の召喚モンスター【ホースゴーレム】だ。【召喚師】に就いてから《召喚契約》コントラクトしてな」

ちなみに召喚師ギルドの人曰く『輸送用の召喚モンスターで戦闘能力はあまり高くないので、最初の召喚モンスターとしてはハズレ』との事………まあ、月一召喚ガチャが面白そうだから就いて見ただけだし、ちょうど良い感じの移動手段になった（後付け）から別に良いんだけどね！

………とりあえず、召喚されたブロンに馬車を取り付けて行く。「よしっ！ 出来たね、ステータスのお陰か思ったより楽だったね。」

「……ところでお兄ちゃん、この仔の名前はなんて言うの?」

「名前? ……じゃあ、色から取って『ブロン』で良いだろう」

「わかったよお兄ちゃん! ハイよーブロン!!?」

「動かすのは俺だけだな」

こうして俺達のギテオンまでの旅路が始まったのだった。



## ギデオンへの道中

□〈ヘネクス平原〉

ストロング・メイス・ストライカー  
【剛 戦 棍 士】ミカ

あの後、私達は〈サウダ山道〉特にトラブルに巻き込まれることも無く抜け、平地が続く〈ヘネクス平原〉に入ったところだった。

道が険しかったさつきまでと比べると大分楽になったね、後は道なりに進めばギデオンに着くみたいだし。

「この辺りのモンスターなら、今の私達なら特に問題は無かったね！」  
「そうだな。……………しかし、『ヴァルシオン』の《吸命転換》は召喚モンスターの攻撃では発揮されなかったし、『毒』によるダメージにも発揮されなかったな。だが、傷痕系状態異常による即死ダメージには発揮されていた……………おそらく、装備者自身の行った攻撃の瞬間のダメージにのみ適応されているのだろう」

どうもそうみたいなんだよね、召喚モンスターを大量に呼び出して減ったMPを『ヴァルシオン』で回復、みたいな事は出来ないみたい。「このままのんびり周りの景色楽しみながら、ギデオンまでの旅をしよう……………なーんて事が出来れば良かったんだけどねー」

「《殺気感知》と《気配察知》に反応あり、《生物索敵》だと数は二十四匹、方向は右からか……………ああ、一匹だけ反応がデカイのがいるな」

そう言うお兄ちゃんの言葉に従って右を見てみると、二十四匹の赤い狼の群れがこちらに向かって来るところだった。

頭上の名前を見てみると『ブレイズウルフ』と表示されており、一匹だけいる大きな赤い狼の頭上にはデミドラグフレイズウルフ『亜竜炎狼』の表示があった。「アイツらは確か炎を吐いてくるんだったか、馬車が燃やされるのは避けたいな。……………ブロン、馬車を連れて離れていてくれ。ミカ、こっちから仕掛けるぞ」

「わかったよお兄ちゃん。せつかく買ったばかりの馬車を燃やされたくないからね！」

そうして私達は馬車から降りて、『亜竜炎狼』率いる狼の群れとの戦いを始めた。

「まずは先制攻撃だな、《モンスター・ハント》『魔獣』《ハンティン

グスナイプ》！」

『G A A ! ? ？』

まず、お兄ちゃんの放った矢が一匹目の「ブレイズウルフ」の眉間に直撃してそのHPをゼロにした。

………確か狩人系統の《ハンティング》系アクティブスキルには、共通して急所に当たった時のダメージ増加特性があったっけ。まあ眉間に一撃なら傷痕系の状態異常も込みで大体死ぬよね。

さて、その攻撃で群れの動きが僅かに乱れるも、「亜竜炎狼」が一吠えするだけで元の陣形を取り戻した………これは、あのリーダーを潰さないとダメだね。

「お兄ちゃん、突っ込むから援護をよろしく！ 《瞬間装着》！」

「わかった、《ハンティングアロー》《パラライズアロー》《ポイズンアロー》《スリーピングアロー》!!?。」

『『G A ! ? ？』』

私がレベル二の《火炎耐性》スキルがあるアクセサリ「火除けの指輪」を装備してから狼の群れに向かう傍で、お兄ちゃんのアクティブスキルが次々と敵に突き刺さり仕留めるか、又は【麻痺】【毒】【強制睡眠】の各種状態異常に落とし込んでいく。

………これは、お兄ちゃんが以前に就いていた【大狩人】<sup>グレイト・ハンター</sup>の奥義である、パッシブスキル《ハンティング・アーツ》の“自身の攻撃時、傷痕・病毒・制限系状態異常の発生確率及び効果を上昇させる”効果によるものも大きい。

これで流石に敵の陣形は崩れたが、リーダーは怯まずに大きく息を吸い込んだ………火炎ブレスか！

『G A A A A A A A !!?』

「《ストライク・ブラスト》!!?。」

敵のリーダーが吐いた火炎ブレスに対し、私が【剛戦棍土】で覚えたメイスから衝撃波を放つアクティブスキルがぶつかりその威力を大きく落とした。

………この《ストライク・ブラスト》の威力と攻撃範囲は自身の攻撃力によって決定する。《エンブリオ》が上級に進化し、上級職に就



らに一匹を仕留め、その隙に後ろから飛び掛かってきた相手を《自動装填》した矢を逆手に持ち変えて突き刺す事で怯ませ、回し蹴りで蹴り飛ばした上でアクティブスキルで撃ち抜いた。

「……………うん、人の事をチートだ規格外だと言うけど、お兄ちゃんも大概なんだよねえ……………ていうか何？ 今のアメコミ映画見たいなアクション!?!? 私はあんな事出来ないからね。」

「……………おっと、お兄ちゃんの逸般人っぷりに呆れている場合じゃないね！ さつきと残りを倒そう！」

リーダーを失って烏合の集と化していた【ブレイズウルフ】は、それから間も無く掃討された。



□〈ヘネクス平原〉【召喚師】レント

「よし、やっと片付いたか……………とりあえず回復するぞ《サードヒール》」  
「ありがとう、お兄ちゃん。今の私達なら亜竜級も安定して狩れる様になったね！」

確かに、最初の頃と比べると俺達も大分強くなったみたいだな。初日はあれだけ亜竜級相手に苦労したのに、今では楽に倒せている。

……………そんな事を考えていると、さつきからこつちを見ていたヤツの気配がこちらに向かって来るのを感知した。そちらの方向を見ると武装した三人の男女がいた。

「ミカ？」

「……………今のところあの人達からは危険は感じないよ」

「そうか……………そこの人達！ 一体俺達に何の用ですか？」

「ああ、待て待て！ 俺達はお前達に危害を加えるつもりはないぞ！

ただ【ブレイズウルフ】の群れと戦っている奴らがいたから様子を  
見に来ただけだ」

そう言うのは、三人の中央に居た“牛の顔を模した黒い軽鎧”をつけた大柄な男だった。その右には狩人風の装備を身につけた長身の女性がおり、左側には魔術師風のローブを着た小柄な女性がいた。

……三人ともテイアンみたいだが《看破》して見るとレベルが高く、一部見えないステータスもあるし装備も高性能だな。

「ガイツ、それでは言葉が足りない……うちのリーダーが失礼した。私はレダ・マーチ、冒険者パーティー〈黒牛戦団〉のメンバーで、今はとある商人のギデオンまでの護衛のクエストを受けている。その途中で【亜竜炎狼】に率いられた【ブレイズウルフ】を見つけ、貴方達がすぐにやられたらこちらに来る可能性もあったから様子を見に来たところ」

「その商人の護衛はいいんですか？」

「ん？ ああ、残りのメンバーを残しているしな。それに亜竜級のボスに率いられた【ブレイズウルフ】の群れを下手に近づけると、その商人の乗った馬車が燃やされる事も考えられたからこちらから打つて出る事にしたんだ。まあ、無駄足だったみたいだがな。……たった二人であの群れを苦もなく殲滅するとは、流石は〈マスター〉ってところか……おっと自己紹介がまだだったか、俺はガイツ・ランド、〈黒牛戦団〉のリーダーをしている」

……ミカの反応を見ると、特に嘘をついていたり害意があるわけではなさそうだな……やっぱり《真偽判定》は取った方がいいな、確か《盗賊》か《罨狩人》で取れたっけ。

「俺はレント、こつちが妹のミカで二人とも〈マスター〉です」

「えっ！ レントさんとミカさんですか!?!? ……あつすみませんでしたが、私はメリア・ローランと言います。ひよつとして以前冒険者ギルドで指名クエストを受けた〈マスター〉ではありませんか?」

「確かに以前指名クエストは受けましたけど……ひよつとしてアイラさんやマリイさんの御身内で?」

「はい、その二人は私の姉と母です」

マリイさんからはアイラさんの他にも娘が二人いるとは聞いていたけど、まさかこんな所で遭遇するとはな。

……すると、その言葉を聞いたガイツさんの雰囲気は少し変わった。

「……じゃあ〈ノズ森林〉の〈U B M〉を倒した〈マスター〉つ

ユニーク・ボス・モンスター

てのはあんた達か」

「はい、そうです。他にもメンバーはいましたが」

「そうか……この道を進んでいるって事はあんた達はギデオンに行くつもりなんだよな。だったら俺達と一緒に行かないか？ 数が多い方が野盗にも襲われにくいし………それにあんた達と話したい事があるんだ」

「……………どうするミカ？」

「んー、別にいいんじゃない？ そっちの方が安全そうだし」

こうして俺達はギデオンまでの残りの道中、冒険者パーティーへ黒牛戦団に同行する事になった。



あの後、ガイツさんのパーティーと合流した俺達は、とりあえず他の人達に挨拶していった。

まず、へ黒牛戦団のサブリーダーである眼鏡をかけた細身の男性、アッシュ・トルハさん。曰く「同行に関しては構いません。あと、ウチのリーダーが無理を言ったようで申し訳ありません……ですが、どうも貴方達に少し思うところがあるみたいなので、どうかリーダーの話聞いてあげて下さい」と言っていた。

次にへ黒牛戦団のメンバーで大柄でスキンヘッドの男性、レオン・ダストさん。曰く「ほお、お前達が最近増え始めたというへマスタールか。あの炎狼の群れを二人で倒したのなら実力は心配いらんな、短い間だがよろしく頼むぞ！」とのこと……普通にいい人だった。そして、最後のメンバーであるシスター風の衣服を着用した女性、ニア・フローラさん。曰く「私は回復魔法が使えるので、怪我をしたら言っして下さいね」だそうだった。

あと、彼等が護衛していた商人の「アレハンドロ」さんにも挨拶した。曰く「護衛にあの伝説のへマスターが加わってくれるなら頼もしいですね！ ギデオンに来たら是非、私共の『アレハンドロ商会』に立ち寄って下さい、歓迎しますよ」とのこと……中々強かな人らしい。

……………挨拶が終わった後、俺達は話があるというガイツさんの下に行った。

「それで、お話があるとのことですが」

「ああ、だがその前に礼を言わせてくれ……先輩の仇をとってくれて感謝する」

詳しい話を聞くと、以前のクエストの時に聞いた〈ノズ森林〉で消息を絶ったパーティーのリーダーに、彼は新人冒険者時代にとっても世話になっていたらしい。

そのため、異変の原因となった〈UBM〉を討伐した〈マスター〉には一度礼を言っておきたかったとのこと。

……………特に警戒する様な話じゃなかったな。普通に皆さんいい人そうだし。

「あの時は騎士団やギルドの通告を無視して、森に突っ込もうとするガイツを止めるのが大変だった」

「おい、レダー！ それは今する様な話じゃねーだろ（汗）」

「……………でもやっぱり〈マスター〉というのは色々規格外ですね。あの【猫神】で良く分かっていたつもりでしたけど」

「メリアさんは【猫神】について詳しいんですか？」

「私よりもリーダーの方が詳しいですよ、何せアルター王国決闘ランキング第二位ですから」

何でもガイツさんは王国第二位の決闘ランカーとして、第一位の【猫神】トム・キャットと何度も戦っているらしい。

「ま、〈マスター〉の理不尽さはこの身をもってよく分かっているからな。ほとんど下級職のパーティーで〈UBM〉を討伐することもあり得るだろう」

「そのトム・キャットという〈マスター〉はどう言う人なんですか？」

「うーむ、俺も試合に時以外にはあまり話す機会がないからなあ………そんなにヤツの事について知りたいなら、近くに俺とトム・キャットの試合があるから見に来たらどうだ？」

「……………そうですね、見に行こうと思います」

さて、ギデオンでやる事が増えたな……………楽しみだ。



その後、俺達は特にトラブルに巻き込まれることも無く進んで行き、時折現れるモンスターも俺やミカと「黒牛戦団」の皆さんですぐに倒してそのままギデオンの到着した。

「今日は色々話を聞かせてもらってありがとうな！俺とヤツの試合も見にきてくれよ！」

「はい、こちらこそありがとうございました」

そうして、俺達は〈黒牛戦団〉の皆さんと別れて、クエストを達成するためにギデオンのギルドに向かった。

「さて、あとはこの荷物をギルドに届ければクエストは完了だね」

「それが終わったらとりあえず休むぞ、流星に移動に一日も掛かったから疲れた」

「そうだねーじゃあ明日からギデオン観光をしようよ」

「あと、ガイツさんの試合のチケットの入手もな」

さて、とりあえずさっさとクエストを済ませるか。



## ギデオン観光とガチャ

□決闘都市ギデオン 【召喚師<sup>サモナー</sup>】 レント

「いや〜ここギデオンは活気があるね、お兄ちゃん！」

「そうだな、南のレジエンダリアに近いからか、色々な人種の人もいるしな」

あれからギルドに荷物を渡してクエストを達成した俺達は、一旦ログアウトして一眠りし、次の日に再びデンドロにログインした。

そして、まずはガイツさんとトム・キャットの決闘のチケットを購入した。

「一般席だけど手に入って良かったね、お兄ちゃん。えーとこっちの時間で明日、中央闘技場でやるんだっけ？」

「ああ、何せ決闘ランキング第二位と第一位の試合だからな。……………それまではこのギデオンを観光しよう」

「そうだね……………ん？」

そうやって適当にぶらついていると、どうもミカが何かに気付いた様子だ。

そちらを見ると、そこには黒い犬……………あるいは狼の着ぐるみを着た人がいた。

「おーい！ その着ぐるみの人、ひよつとしてシユウさんじゃない？」

「ん？ おお、ミカちゃんとレントくんだワン、久しぶりだワン」

「久しぶりだねーシユウさん、着ぐるみ変えたんだ？ それって特典武器？」

「……………ああ、色々あってな。その口ぶりだとミカちゃんもユニーク・ボス・モンスターへU B M」と戦ったワン？」

「うん、特典武器はお兄ちゃんが手に入れたけどね」

『おー、レントくん凄いワン』

「いえ、色々上手く噛みあっていただけなので」

この人はシユウ・スターリングさん。ミカのフレンドで、曰く非常に複雑な事情があつて着ぐるみを着ているとのこと。

……まあ、デンドロは自由だからな、どんなネタプレイも他人に迷惑をかけなければ許容されるだろう。

「ところで、シユウさんも明日の決闘を見に来たの？」

『そうだワン。……この国に以前からいたって言うへマスターの事も気になってきたからなワン』

「じゃあ、今日これから一緒にギデオンを観光しない？ 私達も明日の決闘まで暇だから、これから観光するんだ」

『別に構わないワン。ちようど気分転換したいところだったしワン。俺は前にもギデオンに来た事があるから案内するワン』

「ありがとーシユウさん！」

「ありがとございます、シユウさん」

こうして、俺達はシユウさんと一緒にギデオンを周る事になった。



『じゃあミカちゃんはもう三職目の上級職ワン、早いワン。俺はまだ二職目の【破壊者】ワン』

デストロイヤー

二職目の【破壊者】ワン』

「そうかな？ お兄ちゃんとか上級職カンストして、今四職目だし」

「俺のへエンブリオはレベル上げに向いているからな」

『それでも凄く早いワン。………ついたワン、ここがへアレハンドロ商会だワン』

俺達は昨日出会ったアレハンドロさんの店にやってきていた。俺とミカは道中消費した各種アイテムを買いに、シユウさんはドロップアイテムを売るのが目的である。

ちようど店にいたアレハンドロさんに挨拶しつつ、商品を見ていく。

「王都の店とはやっぱり品揃えが違うね」

「ああ、決闘都市にある店だからか、それともレジエンダリアに近いからか特殊効果のある装備品が多いな」

「いや、二人共お目が高い。その通りです、当商会ではレジエンダリアから仕入れた希少なマジックアイテムも販売しております」

『高性能なアクセサリが売っているのは嬉しいワ』

「……………着ぐるみは全身装備だから、他にはアクセサリぐらいしか着けられないからな。」

「そうして消耗品を買い揃えつつ店内を見てみると、とある場所に人が集まっているのが見えた……………あれは、ガチャ？」

「お兄ちゃん！ ガチャがあるよ！」

「そうだな……………すみません、あのガチャは一体なんなんですか？」

ガチャについて店員さんに聞くと、あれは元々〈墓標迷宮〉で出土したレアアイテムで投入した金銭を供物にして100倍から1/100の価値のアイテムを何処からか召喚する物らしい。そして、この店で買い物をした客だけが回せる取り決めになっているとのこと。

「……………ちなみにこのガチャは少し前に購入したもので、前の所有者はガチャの回しすぎで破産したとか。」

「お兄ちゃん、せっかくだし回そうよ！ とりあえず十万里ルで!!？」

「……………一回だけだぞ」

「わかってるよー、シウウさんはどうする？」

『あー、俺はやめとくワ。今は懐に余裕が無いし……………それに、俺がこういうのをやると大当たりか大外れの二択になるワ』

「あー成る程ね」

この人もミカと同じで規格外側の人間だろうからね、それも多分オールマイティに突き抜けてるタイプ……………そう言う人達って運氣とかもなんかおかしい事が多いし。ガチャ回したら呪いのネタアイテムとか出そう。

それじゃあ列に並ぶか。

『どんなアイテムが出るんだろ楽しみだね。ガチャは回すまでのこの瞬間がいいんだよね…………………………むうう……………』

「どうした？ なんかいきなり不機嫌になったが」

「……………お兄ちゃん、ガチャは何が出るのかが分からないから楽しいんだけど……………当たり前が出ると解っていると面白さが損なわれると思わない？」

「……………また何か感じたのか？」

「うん……………このガチャは回せて……………」

「……………じゃあガチャ回すのはやめるか？」

「いや回しとく……………遠い勘に従わないとロクなことにならないし。」

「……………はあ、私の勘って危険察知がメインだから、こう言うのには普通反応しないんだけどなあ……………」

「……………ミカの勘も大概融通が効かないところがあるからな。」

「さて、そうこうしているうちに俺達の番になった様だ。」

「こうなったらお兄ちゃんのガチャに期待だよ！ さあ！ 十万里ル突っ込んで大当たりか大外れを引くのだ!!？」

「……………そんなに期待されてもなあ」

「まあ、金には余裕があるし一回ぐらいなら十万里ル突っ込んで大丈夫か……………おっ出たな、えーと書いてある文字は「C」だから、等価値の十万里ルのアイテムか。」

「十万入れて十万の価値のアイテムが出たんだから当たりの部類か」

「何が入っているんだろううね！ 【墓標迷宮通行許可証】とか（笑笑）」

「おいバカやめろ……………えーと【ライトニング・デスジャベリン】ね、投げ槍だから狩人系統の技能で使えなくはないし、今のレベルなら装備出来るから当たりだな。効果はMPを込めると着弾時に電撃を放つみたいだな……………あと、決して手に持ったままスキルを使わないでくださいって書かれているな」

「うーん、普通に当たりだね。面白く無いなー」

「ならお前が大当たりを出せ。勘では何か出るって話なんだろう？」

「そうだねー、じゃあ十万里ル突っ込んで回そうか」

「そう言つてミカがガチャに十万里ルを入れて回すと……………そこからは虹色の鉱石で出来た「S」と書かれたカプセルが出てきた。」

「俺達以外の周りの店員さんや客が凄いどよめいている。」

「おー、凄い豪華なカプセルが出たね」

「そりゃあ最高ランクのカプセルだからな。確か100倍の価値だから一千万リルのアイテムか……………なんか周りが凄いコツチ見てるし早く開けたらどうだ？」

「わかったー……………【尾竜剣鎧 ドラグテイル】ね……………!!？」

カプセルから出てきたのは竜の顔を模した鎧で、背中には剣の様なパーツが付いていた………ていうか、その特殊な命名の仕方はひよっとして特典武器じゃないか？ ミカも顔を引きつらせているし。

周りの客も何人かが気がついたようだし………その想像できる由来やミカの反応を見る限り、少し面倒そうな物みたいだな。

「お兄ちゃん、詳しい話は人がいないところでしょう。シユウさんも来て」

「わかった」

『わかったワン』

俺達は足早にその場を離れていった。

………ちなみにガチャの方からは「俺はガチャを回すぞ〜！ ジョジョ〇〜〜!!?」「当たりが！ 出るまで！ 回すのを！ やめない!!?」「リルツ、リルが溶ける〜〜!!?」「今のは乱数調整だからっ！ 次は出るはず………!!?」「ガチャア………！ ガチャア………!!?」………みたいな声が聞こえてきた。

………やっぱりガチャの闇は深いな………



□決闘都市ギデオン

ストロング・メイス・ストライカー  
【剛 戦 棍 士】ミカ

あのあと、店を出た私達はこの「ドラグテイル」の事を話し合う為に人気の無いところに来ていた………二人もこの鎧の問題には気づいているみたいだね。

「さてミカ、その鎧は特典武器だな」

「うん………しかも死んだティアンの人が持っていた物みたい」

『やっぱりそう言う物だったかワン。………それが知られると、特典武器持つてるティアン殺しに走るヤツが出て来る可能性があるな』『そうなんだよね………特典武器持つてるティアンは強い人しかないだろうし、さらにガチャで「S」のカプセルだす確率はかなり低いからそんなバカな事をする人は早々いないと思うんだけど………』

「テイアンの人死んだら特典武器も消滅するって話は聞いていたが……回収してガチャに突っ込むとか色々雑過ぎないか？」管理A1 運営

『同感だワン。……まあ、当てちゃった物はしょうがないワン。あとは色々落ち着くのを待つしかないワン』

「そうだな、だからあまり気にしすぎるなよミカ。……それでその鎧の性能はどんな感じなんだ」

「……ありがとう、二人共。……この鎧の性能はこんな感じだよー」

【尾竜剣鎧 ドラグテイル】

エンシェントレジンエンダリアームス  
〈古代伝説級武器〉

強力な剣尾を持つ竜王の概念を具現化した至宝。

極めて高い硬度を持つと共に、伸縮自在の剣尾を有している。

・装備補正

攻撃力+1500

防御力+1500

STR+50%

END+50%

AGI+50%

・装備スキル

《竜尾剣》

《??》※未開放スキル

……改めて見ると凄いい性能だね、お兄ちゃんの「ヴァルシオン」と比べても総合的には桁外れの性能だし、ランクが二つ違うとここまですべて性能が違うんだ……でも、装備枠で上半身と外套の二つの枠を使うみたい。あと、まだ使えないのスキルもあるし。

……元になった「UBM」はどんなスペックだったんだろう、あとそれを倒したテイアンの人も。

「逸話級と古代伝説級だどこまで性能が違うのか」

『俺の「ふえいうる」よりも総合性能はかなり高いワンね』

「まあ、当てちゃった物はしょうがないし有り難く使わせて貰うけど……どこで試そうかな、あんまり人目につきたく無いし」

『それなら心配いらぬワ。ここギデオンにある闘技場は、試合をやっていない時には結界を使った模擬戦の為のレンタルが出来るワ。結界には不可視化の設定が出来るから人目も気にしないでいいワ』

「じゃあ空いている闘技場に行こうか、お兄ちゃんちよつと付き合ってくれろ？」

「わかった、そのぐらいならいいぞ」

『俺も付き合うワ』

◇

それから、私達は今日空いている決闘都市六番街の第六闘技場に来ていた。

『ついたワ。ここが今日空いている第六闘技場だワ』

「確か決闘場には特殊な結界が張ってあって、その決闘が終わったら結界内で起きた事は全て無かった事になるんだったか」

「そうみたいだね……………ん？ あれは…………？」

闘技場の近くまで行くと、そこにはフォルテスさんとネイちゃんと言ハルカさんがおり、見知らぬ男性と話しているようだった。

「おーい！ フォルテスさんにネイちゃんにシャルカさん久しぶり〜！」

『おーす、ファイガ公、久しぶりワ』

「ああ、ミカちゃんにレントくん。久しぶりだね」

「あ、シュウ。久しぶりだね」

あれ？ あつちの男の人はシュウさんの知り合いなのかな？

「ふむ、なんかお互いの知り合いに会ったみたいだし、改めて自己紹介した方が良さそうだな。…………俺はレントと言います、コツチは妹のミカでフォルテスさん達とは以前一緒にパーティーを組んだ事があります」

「レントの妹のミカです！ フォルテスさん達とはお兄ちゃんと一緒にパーティーを組んだ事があるって、シュウさんとは友達です！」

『シユウ・スターリングだワン。ミカちゃんとファイガ公とは友達だワン』

「俺はフォルテスラと言う、こっちは俺のヘエンブリオのネイリング。シャルカは俺のパーティメンバーでレントくん達とは以前に一緒に戦った事がある。あとこいつはファイガロと言って、最近知り合つてよく決闘をしている」

「メイデン with エルダーアームズのネイリングだよ！ よろしくね！」

「僕はファイガロ。シユウとは友達で、フォルテスラとはよく決闘をしているんだ」

「私はシャルカと言います。フォルテスラ達の付き添いですね」

ふーん、ファイガロさんって言うんだ、シユウさんの友達でフォルテスラさんの決闘仲間みたいだね。あと、ネイちゃんもエルダーアームズになったんだ。

とりあえず、挨拶も終わった私達はお互いが闘技場に来た目的を話し合った。フォルテスラさん達は普通に決闘をしに来たみたい。こっちの事情も説明すると彼等も納得したみたい。

「成る程……そう言う事情なら決闘場を使った方がいいか。ところでミカちゃんは誰と決闘するつもりかな？」

「とりあえずお兄ちゃんに頼みたいと思います。いいよねお兄ちゃん？」

「ああ、別に構わないぞ」

「そうか……しかしレントくんとミカちゃんの決闘か、少し見てみたい気もするな」

「私も二人の戦いは見てみたいな！」

「見るのは構わないけど……結界は不可視化するつもりだし……」

「あの結界は確か特定の人間だけに見えるようにする設定も出来たはずですよ」

あれれー？ なんだか妙な話になって来たぞ〜？

「えーと、ほら！ ファイガロさんのことは……」

「僕は構わないよ。決闘は闘うのも観るのも好きだからね。……………」



それに、二人共凄く強そうだから楽しみだよ」

『あー、ファイガ公は脳筋だけど悪いやつじゃないから大丈夫だワン』

そうして、なし崩し的に私とお兄ちゃんの衆人環視による決闘が決まったのだった。

## レントVSミカ

□決闘都市六番街・第六闘技場 【召喚師<sup>サモナー</sup>】レント

今、俺とミカは闘技場の上で向かいあっている。

その周りには、フォルテスラさん達が妙に期待を込めた目でこっちを見ていた。

「はあ……当初はお前がガチャで当てた特典武具の性能を確かめるだけだったのに……どうしてこうなった」

「あはは……まあいいじゃない。せつかくだから派手にやろうよ、お兄ちゃん」

「ギャラリーもそれがお望みの様だしな。……本気でやるぞ」

俺はさつきガチャで当てた【ライトニング・デスジャベリン】を取り出し、もう片方の手に弓を持って準備を整える。ミカも【尾竜剣鎧ドラグテイル】を装備し【ギガース】を手にとってこちらに構えた。

………デンドロでミカと戦うのは初めてだな。さて、どうするか……

『では僭越ながら決闘の合図はこの俺、シュウ・スターリングが努めさせていただくワン。………それでは、試合開始イ!!?』

その妙に芝居がかったシュウさんの合図と同時に俺は、

《《<sup>ブリュリーナック</sup>空想秘奥》》《ハンティングシュート・改》》

「ツ!!?」

手に持った【ライトニング・デスジャベリン】をさつき作ったオリジナルスキル——《ハンティングスロー》《ハンティングシュート》《投擲技能》《パラライズスロー》を組み合わせクールタイムを二十四時間に引き上げた（名前は良いのが思いつかなかった）スキル——に《空想秘奥》を重ね掛けして投げ飛ばした。

だが、事前にそれを察知したミカは咄嗟に後ろに跳びのき、【ギガース】を盾代わりに地面に突き立てた。

………そして、放たれた槍が狙い通りに地面に突立ち………ス  
キル《死雷放電》が発動した。

ガアアア——アアアン!!?——

槍が着弾した場所から全方位に強力な雷撃が放たれるが、ミカは突き立てた「ギガース」をアース替わりにしていた為、与えたダメージはそこまですでは無かった。

「……………手に持って使つてはいけない投げ槍だから、全方位攻撃系のスキルだと思つていたが予想以上の威力だな。スキルの威力は込めたMPと着弾時の攻撃力で決定するから、アクティブスキルを併用すれば威力は上がると言う考えは当たりらしいな。」

「……………だが、槍自体はスキルの威力に耐えきれずに壊れてしまったよ。うだ。値段と釣り合っていない威力だと思つたら、使い捨てに近い武器だつたらしい……………試合が終わつたら全てが元に戻る闘技場で試せてよかつたな。」

「ちよつとお兄ちゃん！ この試合は私の特典武具の性能を試す為のものじゃなかつたっけ!?？」

「《ソードヒール》、お前が派手にやれと言つたんだろ。それにこの程度でお前を倒せるなんて思つていない《パラライズアロー》、《ポイズンアロー》、《スリーピングアロー》！」

「ちよおお!!??」

武器を弓に切り替えると、そのままアクティブスキルと通常の攻撃を組み合わせてミカに矢を射かけていく。

「……………まあ、こんな攻撃がミカに通じる筈も無く、全て避けられるか「ギガース」を盾替わりにして防がれている……………動きが良くなつているな、特典武具のステータス補正の効果か。」

「もー！ ならこつちも特典武具使っちゃうもんね！……………行けっ!!??」

「チイツー！」

すると、ミカの装備している「ドラグテイル」の背中に付いている剣が鎧を離れて……………いや、鎧と剣は尻尾の様なものによつて繋がっており、それを伸ばす事で剣をこちらに飛ばして来た。これがあの鎧のスキル《竜尾剣》らしいな、文字通りの能力だ。

こちらにかなりの速度で飛んで来る《竜尾剣》をなんとか避けて反撃の矢を放つが、ミカには容易く避けられた……………だが、その間《竜

尾剣》は動かなかったもので、どうやらマニュアル操作で動かさなければならぬ上に剣と自身の同時操作はまだ出来ないらしい。

まあ、手に入ったばかりで、しかも本人にアジャストされているわけではないからな。

「しかし、もう完全に例の主人公機の最終形態みたいだな。……………お前は一体どこを目指しているんだ？」

「そんなの知らないよー。文句なら特典武器やガチャを管理している人達に言っよー！」

そう適当に茶化してみたが、実際ミカに中・遠距離攻撃の手段が出来るのはかなり強いな。【ギガース】のスキルも装備さえしていれば、本体以外での攻撃にも適応されていた筈だし（以前スライムを踏み潰して倒していたのを見た）

……………戦っている今は厄介極まりないがな。まだ扱いきれていないから、ギリギリ何とかなっているが。

「そろそろどうにかしないとジリ貧だな……………《セイクリッド・アロー》!!?」

「《ストライク・ブラスト》!!? シツ！」

俺の放った二発目のオリジナルスキルをミカはメイスから放った衝撃波で軌道をそらし、カウンターで《竜尾剣》放って来るが……………こっちはフェイクで本命は接近戦か。

「《召喚》——ブロン、行け！」

「邪魔ー 《スマッシュメイス》！」

俺は飛んで来た《竜尾剣》をギリギリで避け、向かって来たミカに對して【ホースゴーレム】のブロンを召喚しけしかける……………が、直接戦闘能力の低いブロンは直ぐにミカのメイスに叩き潰された。

……………だが動きは止まったな。

「《トリニティ・アロー》!!?」

「ツッ！ クウツ!!?」

そして放たれた本日三回目のオリジナルスキル——《パラライズアロー》《ポイズンアロー》《スリーピングアロー》《ハンティング・アーツ》を組み合わせクールタイムを二十四時間に引き上げた状態異常特

化で威力も相応にある矢——をミカはとっさに【ギガス】を盾にして防いだが、威力に押され……………ていない!?!?

……………しまった!?!? さつき外した《竜尾剣》を地面に突き刺してアーカー替わりにしたのか!

そして、ミカは尾を縮める勢いを利用してそのままこっちに突っ込んで来た!

「この鎧の剣、意外と応用が効くみたいだね!?!? あともうS.P.殆ど残ってないでしょ!?!?」

「チー! 《瞬間装備》《ハンティングシユート》!?!?」

ミカに攻撃が殆ど当たらないから、【ヴァルシオン】の《吸命転換》があまり機能していないからな!

向かって来たミカに対してなけなしのS.P.でアクティブスキルを使い短剣に装備を切り替え、腰に下げていた投げナイフを投擲するが【ギガス】で払いのけられる。

そのまま、ミカに接近された俺は短剣での防戦を試みるが……………

「《ハンティングエツジ》!?!?」

「《ウエポンブレイカー》! これで終わり! 《アーマーブレイカー》!?!?」

「ひびぶつっ!」

最後のS.P.を使ってアクティブスキルを使い斬りかかる……………が、どうも先読みされいた様でこちらの攻撃の軌道上に置かれていたミカの武器破壊型のスキルにより、俺の短剣と腕が破壊された。

そして、そのまま上段から打ち下ろされた装備防御低下効果付きのアクティブスキルで、俺は叩き潰されて敗北した。



□決闘都市六番街・第六闘技場 ストロング・メイイス・ストラライカー 【剛 戦 棍 士】ミカ

「イエーイー! アイムウイナー!」

「負けたか。正直、今の手札じゃどう頑張ってもミカの直感を突破できないな。……………しかし潰されても結果を出れば元どおりか、凄

な闘技場」

ほんとにねー、お兄ちゃん潰れてたのに完全に元に戻ってるよ。この結界一体どういう理屈でできているんだろう？

そんな風に私達が闘技場の凄さに感心していると、ギャラリーの皆さんがこつちに来ていた。

「レントくんミカちゃん、二人共良い試合だったよ。あと、闘技場の仕様は初めてなら驚くのも無理はない、俺も驚いたしね」

『いやー、なかなか派手な試合だったワン』

「やつぱり二人共凄く強かったね。どうだい？ この後、僕とも決闘しないかい？」

なんか、皆さん私とお兄ちゃんの決闘の様子を口々に褒めて来るなあ。私としてはお兄ちゃんに終始攻められっぱなしで、「ドラグテイル」も上手く扱えなかったし色々課題が残る結果だったんだけど。

あとファイガロさんには決闘に誘われた……………この人、実は結構なバトルマニアなのかな？

「俺は遠慮しておく……………結界の中とはいえデンドロで死ぬのは初めてだから少し疲れた」

「私も一戦して疲れたから、しばらくはいいかな」

「そうか、残念だな……………じゃあフォルテスラ、一緒に決闘しないかい？」

「ああいいぞ。俺も二人の決闘を見て身体を動かしたいと思っていたところだ」

そんな感じで、ファイガロさんとフォルテスラさんは闘技場に向かっていった。

やつぱりファイガロさんはバトルマニアみたいだね、あとフォルテスラさんも……………

『ファイガ公の脳筋バトルマニアっぷりは何時もの事だからほつとけばいいワン』

「それに付き合っているフォルテスラも、最近どんどん決闘好きになっっていますからね」

「……………まあ、結界の中なら全力で戦えるから、決闘を好む気持ちも

分からなくはないかな。死んでも死なないし」

「初手から、切り札を連発してきたお兄ちゃんが言うと言説力が違うね」

お兄ちゃんのオリジナルスキルみたいな重いコストや長いクールタイムを持つスキルでも、決闘が終わって結界から出ればそれらも無かった事になるからね。普段は試し難いスキルを試すのにも決闘場は有効じゃないかな。

「それで？ その『ドラグテイル』の使い心地はどうだったんだ？ 当初はそれが目的だっただろ？」

「いや、お兄ちゃんが初手から殺しにきたからガチな戦いになったんじゃない！」

「えっ？ お前があのだくらいでやられる訳がないだろ？ 初手は牽制のつもりだったし」

『いやー実に信頼し合っている兄妹ワン（棒）』

「もー！ シュウウさんまで！ ……まあ使い勝手は良かったかな、ステータス補正もいい感じだったし。でも《竜尾剣》はマニュアル操作だから、自分が戦いながら動かすには少し時間がかかるかな」

実際、使った感触だと色々応用が利きそうだったからね《竜尾剣》。他には攻撃力がSTRと装備攻撃力の合算だけど、多分単純なパワーも私のSTRの同値かな。さつきも《竜尾剣》で自分を引つ張る事が出来たし、上手く使えばワイヤーアクションもどきみたいなことも出来るかも。

あと、お兄ちゃんの普通のアクティブスキルを受けても傷一つつかなかったことから、鎧自体の強度も相当高いみたい。

『それで二人はこれからどうするワン？』

「んー、まだ闘技場のレンタル時間は残ってるし、もうちょつと戦おうかな。『ドラグテイル』にも慣れておきたいし。お兄ちゃんは？」

「俺は試したいことは大体やり終わったからもういいかな」

「じゃあ、あの二人が戦い終わったら勝負を挑んでみようかな」

この後、私はフォルテスラさん・フィガロさんとそれぞれ一回ずつ戦って一勝一敗、フォルテスラさんにはなんとか勝てたがフィガロさ

んには負けてしまった。

フォルテスラさんとの決闘では特典武器のお陰でステータスで上回っていた為、勘によって先読み出来た攻撃を防ぐか避けるかが出来たのが大きかったね。それでも彼の剣技はかなり鋭く何度か危ない時もあった。そう言う攻撃は【ドラグテイル】で受けたりしたけど、特に傷はつかなかったから相当頑丈みたいだね。

あと、後半武器破壊スキルでネイちゃんを壊しちやっただけど、結果を出たら元どおりになっていたから良かったよ。……………まあ、ネイちゃんは凄い悔しそうな目で私の【ギガス】を見てたけど。

フィガロさんとは、ステータスで上回っているこっちの攻撃を彼は徹底的に回避してきて、あっちの攻撃も最初は私の勘を突破出来なくて持久戦になった。向こうも特典武器を持っていたらしく沢山の刃を飛ばして来たり、球状の結界を展開してきたりした。特に球状の結界が厄介で、【ギガス】の《バリアブレイカー》を乗せたアクティブスキルでもヒビが入っただけで壊れなかった。

そうやって戦闘時間が長くなると、どんどんフィガロさんのステータスが上がって行って、最終的に勘でも対処仕切れなくなっただけでそのまま負けちゃった。多分、戦闘時間に比例して強化みたいなエンブリオなのかな？

……………その決闘が終わった後、闘技場のレンタル時間が終わったのでそのまま解散となった。



「今日はいい決闘だったね、またやろう」

「今日は負けてしまったが、次はリベンジさせてもらう」

「うー！ 次は負けないからね!!？」

「あはは……まあ、またいつかという事で」

そう言う感じで私とお兄ちゃんは皆と別れたのだった……………最後までネイちゃんはこっちを睨んでいたけど……………

あと、皆も明日のガイツさんとトム・キャットの試合は見に行くら



しい。今現在、王国で一番強いへマスターの事は皆気になっていてみたいだね。

「しかし、お前がタイマンで負けるとはな。やはりデンドロのへエンブリオは恐ろしいな」

「そうだねー、あと特典武具も。……デンドロってゲームとしては完全にバランスを無視してるよね」

「まあ、始めからへエンブリオと言うユニークを売りにしているからな。先着一名の『超級職』ってのもあるみたいだしな」

「ま、ネットゲじや大なり小なり先発有利だからね」

そんな話をしながら私達は明日の試合に想いを馳せるのだった。

## 決闘王者防衛戦

□決闘都市ギデオン・中央闘技場 【召喚師<sup>サモナー</sup>】レント

「いや、人がいっぱいいるね、この中央闘技場もほぼ満席だよ！」  
「そりゃあ決闘ランキング第二位と第一位……このアルター王国  
トップ2の試合だからな」

今、俺達はガイツさんとトム・キャットの試合を観に中央闘技場に  
来ていた。周りを見てみると多くの人がこの闘技場に詰めかけてい  
た。

やはり、このギデオンでもトップクラスのイベントなのだろうな、  
決闘ランキング第二位と第一位の試合は。

「さっきのセミイベントもレベルが高かったからね。本命の試合も  
楽しみだよ」

「アルター王国の決闘のレベルは西方三国一らしいからな」

実際、先程の試合もかなりレベルが高かった。ジョブのレベルだけ  
では無く、自身の戦闘技術や戦術も非常に高くて実に参考になった。

また、闘技場の結界には中の時間の進みを緩やかにする機能もある  
らしく、AGIが低い観客でも試合を楽しめるようになってい  
るよう  
だ。

「あと、試合の賭けもやってたね」

「確かオッズはガイツさんが10倍ぐらいで、チャンピオンのトム・  
キャットが1.2倍だったな。……決闘ランキング一位と二位  
の賭けにしては随分差があったが」

「チャンピオンがよっぽど強いのか……あるいはへエンブリオ<sup>ン</sup>が  
とんでもない性能なのか、かな？」

闘技場の受付カウンターでは、競技の参加エントリーの他にも試合  
の勝敗を当てるギャンブルも行われていた。そこでのオッズは大幅  
にガイツさんが不利と言う内容だった。

……少し戦っているところを見た感じだとガイツさんも相当  
強いと思ったのだが、それでもこれだけオッズに差があるということ  
は、ミカの言う通りトム・キャットの実力がとんでもないのか、ヘマス

ター」として有しているへエンブリオ」がヤバイのか、だろう。

ちなみに俺達はギャンブルには参加しなかった……………昨日のガチャで結構散財してしまったからな、しばらくギャンブルは控えることにしたのである。

「それも、これから始まる試合を見れば分かるだろう」

「そうだね……………あつ、始まるみたいだよ」

見ると、会場のざわめきが少しずつ鎮まっていた……………どうやら試合開始の時間になったようだ。

『会場の皆様！ お待たせいたしました！ 只今より本日のメインイベント！ 決闘ランキング第二位！ ガイツ・ランド対決闘ランキング第一位！ チャンピオン、トム・キャットの試合……………決闘王者防衛戦を開始いたします!!?』

そのアナウンスと同時に会場は歓声に包まれた。

『まずは東の門！ 挑戦者の入場です！ 冒険者パーティーへ黒牛戦団」リーダーにして決闘ランキング第二位！ 〃黒牛〃の二つ名を持つコンバージョン・グラディエーター【連装闘士】ガイツ・ランドオオー!!?』

そのアナウンスと観客の歓声と共にガイツさんが入場してきた。

その装備はパーティー名や二つ名の由来になっている牛を模した黒い軽鎧を身につけて、手には槍を持っていた。

『そして西の門！ チャンピオンの入場です！ アルター王国決闘ランキング第一位！ 最近が増えて来ましたが、あの伝説のへマスター」！ 〃化猫屋敷〃【猫神】ザ・リンクストム・キャットオオー——!!?』

すると先程以上の歓声の中を歩いて来たのは頭に猫を乗せ、目を前髪で隠している青年だった。

「ふーん、アレが以前から王国にいたって言うへマスター」か……………中々奇抜な格好だねー」

「まあ、へマスター」だしな。……………あの猫はへエンブリオ」か?」そして両者は舞台の上に立ち、ウィンドウを展開した……………あれは結界の設定ウィンドウで、試合直前にルールを確認し両者合意の上で戦闘を開始するらしい。

『今日こそは勝たせたもらうぜ、トム』

『悪いけど、そう簡単に負けてあげる訳にはいかないな』

二人はそんな会話をしたあと設定を終えて開始位置に着き、それぞれの準備を終えて結界が起動された……………どうやら始まるようだ。

『それでは本日のメインイベント！ 決闘王者防衛戦……………試合開始イ!!?』

そのアナウンスにより試合が開始される……………と同時に、

『《ランスシユート》！ 《ラピッドアロー》』

『おっと……………ッ！』

ガイツさんがアクティブスキルを使って手に持った槍を投擲し、トムが減速状態の結界内でも姿が霞む様に見える程の速度でそれを回避した……………がその槍が途中で爆発した……………あの槍は俺の持っている「ライトニング・デスジャベリン」の同類か、しかも時間経過でスキルが発動するタイプの。

しかし、その爆発もトムはその速度を持って回避し、頭の上の猫を遠くに放り投げていた……………が、そこに武器を弓に切り替えていたガイツさんの連射が襲いかかる。

『疾ツ……………いざいざ躍らん』グリマルキン『猫八色』』

『チィー… 《ブラストアロー》！』

それらの矢をトムはあるものは避け、あるものは手に持った剣で弾いていくが、その矢の中には先程の槍と同じで着弾時や時間経過でスキルを発動するタイプの物が混ざっている様で、ガイツさんはそれらを的確に使い分ける事でAGIに勝るトムに少しずつダメージを与えていった……………が、その間にトムの「ヘンブリオ」のスキルが行使された。

そこに、アクティブスキルにより衝撃波を纏った矢が直撃するが、トムは猫に姿を変えて『ぶにゃー』と鳴いて消えていった。

『倒された? ……いや違うね』

『さつき放り投げられた猫の方で何か……………』

そちらを見ると猫が変形しトムと同じ姿になっていた……………ただでなく、そのトムが二人に増殖した。

『《スナイプアロー》！』

『疾ッ!』

ガイツさんはすぐにそちらにも矢を放つが、二人のうち一人がその矢を弾きもう一人はすぐに距離を取った。

そして、一人が応戦している間に距離を取った側が二人、さらに四人と増えていき、瞬く間に応戦している者も含めて八人のトムが舞台の上に現れていた。

「分身? でもさっき分身する前にの本体もやられていたし……」

「おそらく本体を複数作るスキルだろう。さっき『グリマルキン』と言っていたから必殺スキルかな」

「じゃあ……あれって八人同時に倒さないとダメなんじゃない?」

舞台の上では八人のトムのうち四人が近接武器を持ちガイツさんに突っ込み、残り四人が弓や投剣で援護射撃をしていた。そしてそれから全員が最初の本体と同じ速度で動いていた。

ガイツさんは遠距離攻撃をかわし武器を剣や槍に持ち替えて応戦しているが、人数差とAGIの差で少しずつダメージを負っている。

「これはひどい、決闘ランカーって殆どが一对一の戦いに特化してるよね? 八人同時に倒すのは厳しくない?」

「そうだな……それに【猫神】は超級職、相応のステータスを持っているから上級職のテイアンでは相手をするのはきついかな? むしろ、人数とステータスで負けている相手にこれだけ持ち堪えられているガイツさんの技量は凄まじいな」

今も、斬りかかってきたトムの一人をカウンターの《レーザーブレード》のスキルで斬り捨てるが、そのまま猫になって消えてしまい、すぐに遠距離にいたトムの一人が分裂し再び八人に戻った。

「……丁寧に分身のうちの一体だけは、常にガイツさんの攻撃範囲の外に置いてあるね」

「技量ならガイツさんが勝っているんだが、トム・キャットの技量も決して低くはない。………というか八人同時制御とかどうやっているんだ? オートで動かしている訳ではないみたいだし」

「実は管理AIが動かしてるんじゃない?」

そんな会話をしている間にも、ガイツさんはどんどん追い詰められていった。先程から何人かのトムを倒してはいるが、その度に増殖されており数を減らすことが出来ていない。

ガイツさんが装備している鎧は特典武器でありHPとSPの自動回復スキルがあるらしく、それが無ければもう終わっていただろう。「でも、まだ何かあるかな?」

「ああ、ガイツさんは諦めている様子がないし……………トム・キャットもそれを警戒して慎重策を取っている様だな」

だが痺れを切らしたのか、それとも早めに決着をつけたかったのか、後衛のトムのうち二人が近接武器に持ち替え前衛に回り、そのまま六人でガイツさんに仕掛けていった。

それに対し、ガイツさんは一本の剣を取り出した。

『《サンダースラッシュ》!』

『『ぶにゃー』』

その剣でアクティブスキルを発動させると、雷を纏った刀身が伸びて近くにいたトムをまとめて三人切り裂いた。

そして、これまで以上の速さで残りのトムに斬りかかっていく。

『《レーザーブレード》! 《ランスシユート》! 《フィフス・スラッシュ》!』

『ぶにゃー』『ぶにゃー』『ぶにゃー』

そのまま周りにいたトムを伸ばした光剣、もう片方の手から投げた槍、伸ばした刀身による五連続斬撃で倒していく。

「お兄ちゃん、あの剣はひよつとして特典武器?」

「おそろくな……………効果は刀身の伸長とAGIの増加かな」

会場の間人も驚いているところを見ると、今回初めて使った武器なのだろう。

……………しかし……………

「相手の増殖速度の方が早い……………というか、さっきより早くなつてない?」

「おそらく、今まで増殖速度を少し落としていたんじゃないか?」

……………それも、ガイツさんや観客の反応から考えてこれまでの試合

全てで」

「……………切り札を隠していたのはガイツさんだけじゃ無かったみたいだね」

ガイツさんの切り札に対し、トムが取った対処法はシンプルなものだった……………本気で増殖させた分身達を、片っ端から突っ込ませて肉壁にしたのである。

それらの分身達に、ガイツさんはアクティブスキルと特典武器を使って対処していくが、相手の増殖速度を上回ることが出来ない様だ。

「今はなんとか対処しているが……………」

「うん、あれだけ使っていれば、そろそろ切れるね」

そうして戦ううちに、ある時からガイツさんがアクティブスキルを使えなくなつた……………SP切れである。

相手のSPが切れたと判断したトムは一気に攻勢を強めていく。ガイツさんも応戦していくが、今までアクティブスキルを使ってかろうじて凌いでいた相手にスキルなしで戦えるはずも無く……………

『『疾ツ!!?』』』

『グハッ!』

……………最後は三人のトムの剣に身体を貫かれて敗北した。

『試合終了オオ——！ 勝者は王者トム・キャット！ やはり決闘王者の壁は厚かつたああ——!!?』

本日のメインイベント・決闘王者防衛戦は、チャンピオン、トム・キャットの勝利で終わったのだった。



□決闘都市ギデオン

ストロング・メイスイ・ストライカー  
【剛 戦 棍 土】ミカ

決闘の観戦を終えた私とお兄ちゃんは、その余韻に浸りながらギデオンの街を歩いていた。

「いや、今回の試合は凄かったね！ ………………しっかし、トム・キャットのあのへエンブリオ、どうやったら攻略出来るんだろう?」

「ふむ……………広範囲攻撃でまとめて倒すか、相手より圧倒的に高いステータスで増殖速度を上回るとかかな。あとはスキルそのものを封印するとか、へエンブリオや特典武器次第ではそう言う事も可能だろう」

やっぱりそんな感じになるよねー。私の【ギガース】じゃ相性が悪いかな、防御スキルは破れても回復系は効果範囲外だし。

むしろ、そういう相手はお兄ちゃんの方が、後々どうにか出来る様になりそう。

「そういえばフォルテスラさんやフィガロさんは、決闘ランカーを指すって言ってたよ」

「そうなのか……………じゃあ、いつかはあの二人の戦いを中央闘技場で観れる時も来るのかねえ」

「そうだといいねー」

……………私の勘でもそう言う未来は解らないからね、今から楽しみだよ！

「で？ お前は決闘ランカーは目指さないのか？」

「うーん、フォルテスラさんやフィガロさんとの決闘は楽しかったけど……………やっぱり私は一つの国に留まらず、この世界のもっと色んなところを見てみたいかな！」

「……………そうか、それもいいだろうな。……………その時は俺も付き合おう、他の国やこの世界の事も個人的に気になってるしな」

「ありがとうね、お兄ちゃん！……………と言っても、この世界で旅するには相応の実力が求めたいだからね！ もっと強くなならないと！」

「そうだな、じゃあ明日からはレベリングでもするか。俺も就けるだけ就いた下級職のレベルを上げなければならぬからな。……………」

あと、各ジョブの上級職への転職条件も調べないとな」

「お兄ちゃん、レベル上げるジョブがめっちゃ多いからねー」

「はあー、どこかにジョブの転職条件が簡単にわかる様なアイテムは落ちていないものか……………」

「そんなアイテムなら強いモンスタードロップ品だろうし、落ちて



はいないんじゃない？」  
そんな会話をしながら、私達はギデオンを歩いていった。

## 番外編 エルザちゃんのとある一日

□アルター王国・王都アルテア 【高位従魔師<sup>ハイ・テイマー</sup>】エルザ・ウインドベル

「えーと、待ち合わせ場所はここ、王都の噴水前だったね」

今、私はリアル<sup>リアル</sup>の友人とデンドロ口内で合流する為に、王都の噴水前に来ています。

この中央通りの大噴水はセーブポイントの一つであり、場所もわかりやすいのでへマスターの間でもよく待ち合わせに使われています。「マスター、今日はあちらでのご友人と一緒にモンスターを狩りに行くと言う話でしたね」

「そうだよ、アリア。あと、デンドロ口で知り合った生産職のへマスターも一緒に連れてくるって言ってたよ」

彼女はストロング・ソードマン【剛 剣 士】のアリア。私のへエンブリオソードマン【代行神騎 ワルキューレ】の一人で、その長女です。

以前までは下級職の【剣士】だったのですが、私が上級職になると同じ時期に条件を満たして上級職に転職しました。

「成る程、今回はその彼女達と一緒に行動するんですね」

「でも、生産職って事はあんまり戦闘力は高くないから護衛が必要かな?」

「……………へエンブリオ」次第では必要ないかも……………」

……………最初に話したのは【ワルキューレ】次女のセリカ。今のジョブはレシヨツプ【司教】に就いています……………彼女一人で教会のジョブクエストを受けて貰ったりして、転職条件をクリアしました。

次に話したのは三女のトリム。今は下級職の【盾士<sup>シールド</sup>】に就いています……………騎士系の上級職の転職には騎士団からの紹介などが必要だったので、条件を満たせませんでした。

最後に話したのは四女のフィーネ。彼女は【ワルキューレ】が第四形態に進化した時に生まれた、緑色の髪をした大人しめの性格の子です。ジョブは【魔術師<sup>メイジ</sup>】で、まだレベルは低いですが後方支援をしっかりとやってくれています。

〈エンブリオ〉が上級に進化した時にTYPEもガードナーからレギオンに変わり、更にもう一つスキルを覚えましたが……………あ！来たみたいですね。

「おーい！ エルザ〜！」

「こつちですよ、ターニヤ」

彼女はターニヤ・メリアム。私のリアルでの友人で、デンドロでは生産職の「ニードル・マイスター裁縫職人」をやっています。

そして、その後ろには金髪でメガネをかけた小柄な男性と、赤髪で長身の男性がいました……………彼らがターニヤの生産職仲間なのでしょうか？

「今回はこつちのお願いを聞いてくれてありがとうね！ エルザ。あつ！ 紹介するね、この二人がデンドロの生産職仲間小さい方がで小さい方が錬金術師のエドワード、デカイ方が鍛冶師のゲンジね！」

「メタリカル・アルケミスト治金錬金術師」のエドワードだ」

「ワシは「ハイ・ブラックスミス高位鍛冶師」のゲンジじゃ。今日はよろしく頼むぞ」

「高位従魔師」のエルザ・ウインドベルです。彼女たちは私の〈エンブリオ〉の「ワルキューレ」達です」

お互い自己紹介も終えましたし、今回はこのメンバーで冒険をするんですね。ターニヤが生産職なので、あまり一緒にデンドロをプレイする機会が無いので楽しみです。

……………あれ？ 何かエドワードさんがこつちを見えていますね。

「今回の目的は、主に亜竜級モンスターを狩って素材を集める事なんだが……………ターニヤ、この子で大丈夫なのか？」

「何よー！ エルザの実力を疑うっていうの！ エルザはこつちじゃ超強いんだからね!!？」

……………ああ、成る程。エドワードさんはそのことを心配していませんですね……………私が弱いのは事実なので、そんなに睨まないであげてください、アリア。

「大丈夫ですよ。私達は、亜竜級ぐらいなら安定して狩れますから」  
「そ、そうか……………じゃあ今回の報酬の確認をするぞ。まず素材系アイテムは全てこちらに、装備系アイテムはそちらが欲しいものが

あった場合はそちらが優先で、余ったものは売って四人で分ける。そして俺達が得たアイテムに応じて、こちらが作った各種アイテムを格安でそちらに売る………と言うことでいいか?」

「はい、それで構いません」

「別にタダであけても良いのに」

「いや、流石にそれは無理じゃろ。というか以前、生産に派手に失敗して素材を大量に無くしたから、こんな狩りをする事になったんじゃないから」

「そうだった………ごめんねーエルザ、迷惑かけちゃつて……」

「大丈夫ですよ。私もターニャと一緒に冒険出来るのが楽しみですから」

「………ありがとう！ エルザく!!?」

そう言いながら、ターニャが抱きついて来ました。後ろでは、二人が呆れたような目で見ていますが………

さて、今回の狩場はヘイースター平原の先にある、亜竜級モンスターがそれなりの頻度で出現する森、ヘフォロー森林でしたね。

「じゃあ私達はジョブを戦闘用に変えるから、それから出発ね!」

「はい、行きましょう!」

そうして、私達は王都を発ったのです。



『PYUUUU!!?』

「《ティマーズコマンド・アタック》《ティマーズコマンド・デイフェンス》《ティマーズコマンド・スピード》アーシーは壁ゴレムでリーダーを、ヴェルフとウオズはフィーネと周りの取り巻きを、皆もお願い」

私達は今、目的地のヘフォロー森林でリーダーの亜竜級モンスター【ジャイアント・ホーンラビット】に率いられた【ホーンラビット】の群れと戦っています。

ちなみに【ホーンラビット】の見た目は【パシラビット】に長いツ

ノが生えただけの姿ですが、ステータスは大幅に上がっているの油断すると串刺しにされます。

……やはり、念じただけで指示が伝わる【ワルキューレ】達と、言葉で指示を出さなければならぬタイムモンスター達とは若干指示にズレが出ますね。

「承知 《スクエア・スラッシュ》！」

「はい 《ホーリーランス》！」

「オツケー 《シールドスタンス》！」

「…… 《ファイアーボール》！」

『召喚——マッドゴーレム  
KYUUUUU!』

『テンベスト・エッジ  
KI——!』

『GAU!』

まず、突っ込んで来たリーダーをアーシーが作った泥のゴーレム——この前見たシャルカさんの【ラフム】を参考に作ったようです、流石に能力は大きく劣りますが——を壁にして勢いを鈍らせ、トリムがスキルを使って防御力を上げた盾で受け止めます。

そこにアリアが斬り込み、セリカが【司教】の聖属性攻撃魔法を打ち込みます。そうやって怯んだところに、泥ゴーレムが纏わりつき動きを封じました。

取り巻きの方は【スカウト・デミドラグウルフ】のヴェルフと【テンプルスト・デミドラグイーグル】のウオズ——二人とも最近亜竜級に進化しました——がフィーネの魔法の援護を受けて殲滅しています。

まあ、このぐらいの相手なら問題ないですね。……さて、あつちはどうでしょうか？

「【クロートー】 《運命の縦糸》！ 行くわよ 《斬糸》!!?。」

『————!』

『PYUUU?..?』

ターニヤの蚕型ガードナーの《エンブリオ》、【天系紡蚕 クロートー】の吐いた白い糸が取り巻きの一匹を絡め取り【拘束】の状態異常にして、そこを彼女が戦闘用のサブジョブである【繰糸士】のスキルで攻撃しています。

「《メタル・トランスレイト》、ゲンジ！」

「おう！ 《スマツシユハンマー》！」

『PYUUU!?!?』

エドワードさんの《エンブリオ》、【幻想冶金 オレイカルコス】のスキルにより取り巻きの身体の一部が金属化しました。それで動けなくなったところをゲンジさんが【戦鎚士】のスキルを使って倒していきます。

……ちなみに、ゲンジさんの【改訂工房 ヘパイストス】は完全な生産型の《エンブリオ》なので、戦闘には使えないらしいです。「あちらは大丈夫そうですし……こちらこそそろそろ終わりそうですね」

こちらはすでに周りの取り巻きを相当し終わり、拘束されたりーダーもアリアの剣とアーシーの魔法で倒されるところでした。

……さて、良いアイテムを落としてくれると良いんですが。

◇

「ふむ、ドロップアイテムは【巨大角兎の毛皮】と換金アイテムですか………毛皮の方は素材アイテムなので渡しておきますね」

「あ、ああ………しかし、亜竜級をああも簡単に倒すとは実力は本当だったのだな………先程は疑ってすまなかった」

「別に気にしていませんよ。私が弱いのは事実ですし」

ドロップアイテムを渡すと、先程の事でエドワードさんが謝って来ました。別に気にしてはいませんので……アリア、そのドヤ顔はやめなさい。

「いやいや亜竜級をあんなにあっさり狩れる《マスター》なんて早々いないよ!!?」

「確かにのう、ワシらは取り巻きのおこぼれを倒しただけじゃったしの」

「生産職なら仕方がないですよ。それに、亜竜級を倒せる《マスター》は探せば結構いると思いますよ」

ミカさんとか、レントさんとか、フォルテスラさんとか、シャルカさんとか、あと最近知りあつたキャサリン金剛さんとか………あんまり珍しくは無いですよ。

………そんな話をしていると、急にヴェルフが唸り始めた。ヴェルフは進化したおかげで感知能力が大幅に上がっているので、何か感じ取ったのでしょうか。

『GUUUUー!』

「………成る程。皆さん気をつけて下さい! あちらから何か来ます!!?」

ヴェルフが指し示しと方向を見ると、一体の羽の生えた白い竜がこちらに走ってくるどころでした………名前を見てみると「シャイン・デミドラゴン」となっています。

しかし、よく見たら相当なダメージを負っているようです。天竜種でありながら飛べていませんし………それに、何かから追われているようです。

「また亜竜級のモンスター!!?」

「いえ、こちらではありません! その向こうから来ます!!?」

そして「シャイン・デミドラゴン」の向こう側から現れたのは、全長五十メートル程の巨大なムカデ型のモンスターだった。

「【ドラグワーム】……純竜級モンスターですか。この辺りにはいないはずの種ですし、はぐれでしょうか」

「それよりもどうするの! こっちに向かってくるんだけど!!?」

「応戦しましょう。というか、あと三十秒くらいでここに辿り着くので逃げられません」

「それは………だが、出来るのか?」

「………必殺スキルを使います。皆さんは援護をお願いします。………皆、準備して」

私がそう言うと、全員が応戦の準備を始めました………さて、今回は三人なのでチャージ時間は十五秒ですね。

そうしていると、こちらに向かってきた「シャイン・デミドラゴン」が私達の横を通り過ぎ………そのまま力尽きて倒れました。

『KYUUU……………』

「えーと、このドラゴンはどうするっ？」

「今は構っている余裕はないので……………とりあえずポーションを与えておきましょう。傷が治れば自分で逃げるでしょうし」

そう言つて、倒れたドラゴンにポーションを振りかけておく。そうすると、多少は元気になったようだ。

「傷が治ったらさっさと逃げて下さいね。……………来ます！」

『GIIIEEEEEAAAAAAAA!!?』

そうして、目の前には「ドラグワーム」が迫り……………私の必殺スキルのチャージ時間が終了した。

「《神軍騎行・合一戦姫》……………トリム!!?」

「わかった！ 《シールドパライ》!!?」

『GEEEEAAAA!!?』

相手の目の前に飛び出したトリムとヴェルフが「融合」し、そのまま眼前の「ドラグワーム」をスキルで弾き飛ばした。

……………これが私の「エンブリオ」の必殺スキル《神軍騎行・合一戦姫》の効果、「ワルキューレ」一人と自身のティムモンスター一体を融合させる”ことです。

このスキルにより今の彼女達のステータスは、自分と融合したティムモンスターのものを足し合わせた数値が基本ステータスになっており、そこに《魔物強化》や各々のジョブスキルなどの各種バフスキルが乗ること、今の彼女達は純竜級に匹敵するステータスを持ち、さらに融合したそれぞれのスキルも全て使うことが出来ます。

また、事前のチャージ時間は融合させる「ワルキューレ」一人につき五秒掛かるので、今回は三人の「ワルキューレ」を融合させる為に十五秒チャージしました。

「アリア！ セリカ！」

「《テンペストクロウ》《スラッシュエッジ》!!?」

「《魔法威力拡大》《魔法多重発動》《グラウンド・ホルダー》!!?」

『GEEEEAAAA!!?』

ウオズと融合したアリアが背中の翼を広げて飛び、風を纏った剣で



「ドラグワーム」を斬り裂いた。そして、アーシーと融合したセリカが地面から十本を超える数の巨大な腕を生やし相手を拘束した。

「……………この必殺スキルの持続時間は私の合計レベルを十倍し、それを融合させた「ワルキューレ」の数で割ったものなので、合計レベル126の私では持続時間は約四百秒程。さらに、使用後のクールタイムが効果時間の三十倍かかってしまいます。」

また、スキルのデメリットとしてチャージ開始から効果終了まで、私は一切の戦闘行動及び他のアクティブスキルの行使が不可能になっていきます……………まあ、私が戦えなくても特に支障はありませんし、アクティブスキルは事前に使っておけばいいのですが。

「クローター」《運命の横糸》……………触れた相手を一定確率で「呪縛」するスキルだけど、やっぱり純竜クラスには効きが悪いね。あつ！この糸は味方には当たらないから大丈夫だよ」

「《メタル・トランスレイト》……………さつきから足の関節を金属化させているが足が多すぎるな。だが、胴体部を金属化すると攻撃の邪魔になるしな……………」

「ワシはああいう相手には出来ることが無いのお……………エルザ嬢の肉壁になるぐらいか？」

「《ボトムレスピット》……………今の私のレベルでは嫌がらせにかなりません……………最悪マスターを連れて逃げましょう……………」

他の皆も各々の能力で援護してくれているが……………やはりあれだけの巨体の純竜級、HPは相当多いようですね。

……………時間内に倒しきれれるでしょうか？ 私がそう思案していると……………」

『G A A A A A !!?』

『G E E E A A A A ??』

いきなり後ろから光線が放たれ「ドラグワーム」の顔面に突き刺さりました……………後ろを見ると、先程の「シャイン・デミドラゴン」がブレスを打った体勢でこちらを見ていました。

……………どうやら、あのブレスで甲殻の一部が砕けたようです。

「皆！ あそこのヒビを狙って!!?」

「了解！ 《ウルフクロ》！ 《シールドバツシュ》！」

「《魔法威力拡大》《ロック・ジャベリン》!!?」

『GEEEEAAAA!?!?』

トリムの攻撃が相手の体勢を崩すと、セリカのほぼ全てのMPを籠めた攻撃魔法が甲殻のヒビに突き刺さりました。

それにより砕けた部分に向けて、アリアが飛翔しました。

「《パイル・ブレード》！ ……これで終わりです 《テンペスト・エツジ》!!?」

『GEEEEEEEEAAAAAA!!?!?』

彼女のアクティブスキルにより放たれた突きが【ドラグワーム】の頭に突き刺さり……………その剣を介して相手の身体の内側で風属性の攻撃魔法が吹き荒れた。

……………その結果、【ドラグワーム】は脳を破壊され息絶えたのでした。

◇

「ふう、なんとか倒せましたね。 ……さて」

……………私は先程からずっとこちらを見ていた【シャイン・デミドラゴン】に近づいて、右手を差し出しました。

「あなたを一目見た時からピンと来ていました。 ……私達と一緒に来ませんか？」

『……………KYU!』

差し出したその手に、彼女は鼻先で触れました……………どうやらOKのようですね。

「では《従属契約》……………よし、貴女の名前は“セレナ”です。これからよろしく願いますね！」

『KYU!』

「では一旦【ジュエル】に入っていて下さい。セリカのMPがまだ回復していないので、貴女の傷を治せませんから」

そうして、私は新しく仲間になったセレナを【ジュエル】にしまい、

皆の元に戻って行きました。

「お疲れ〜エルザ！……………しかしタイムってあんなふうにするんだね〜初めて見たよ！」

「普通はあんなふうにあっさりとはいかないんですけどね。……………」

「あっ！勝手にタイムしてしまっつてすみませんでした」

「別に良いって！誰も文句を言う人はいないよ〜……………ねえ？」

「そうだな。今回はエルザさんに助けられたし、そのぐらいは別に構わないさ」

「あの竜には助けられたしの。あのまま倒すのは気が引けたわい」

他の皆の時と同じようにピンときたので、ついタイムしてしまいましたが……………皆さん納得してくれて良かったです。

そうしていると、アリアが手に一つの【宝櫃】を持ってきました。

「マスター、先程の【ドラグワーム】からドロップしたアイテムです」

「ありがとうございます……………中身は【純竜甲虫の甲殻】……………これは素材アイテムなのでターニャ達に渡しましょう。もう一つは……………【適職診断カタログ】？」

このアイテムは、色々なジョブの情報が載っているカタログのようです。さらにいくつかの質問をする事で、その人が今就けるジョブの中で一番合っているものを検索する機能もあるようです。

……………これは良いですね。私は【ワルキューレ】達のジョブも考えなければならぬので、これがあれば大分便利そうです。

「あの、この【適職診断カタログ】を貰いたいのですが……………」

「良いよ良いよ！あのモンスターを倒したのはエルザだし、素材アイテムの方は貰ったからね！」

「そうだな……………しかし、これだけの素材が手に入るとはな。これは報酬の方も奮発しなければなるまい」

「そうじゃの、腕がなるわい！エルザ嬢も楽しみにしてくれい」  
「分かりました。楽しみにしていますね」

新しく出来る装備に思いを馳せながら、私達の今日の狩りは終わったのでした。

## 兄妹の現実と遊戯の話

### 〈レーヴ果樹園〉と〈月世の会〉

□アルター王国・王都アルテア グラディエーター【闘士】レント

俺達が〈Infinite Dendrogram〉を始めてから現実では約一ヶ月、デンドロ内の時間では三ヶ月ぐらいが経った。

その間に俺は【召喚師】サモナー【魔術師】メイジ【司教】ビショップ【罨狩人】トラップ・ハンター【弓手】アーチャーをカンストし、今は近接能力の上昇と装備枠拡張スキル狙いで【闘士】のジョブのレベルを上げている。

……………このレベルの上がり方は、この一ヶ月半レベルリングに集中していた事と、実力が上がってより上位の狩場を選べるようになった事、そして【召喚師】【魔術師】のスキルによりモンスターの殲滅能力が上がった事が大きいな。

「レベルもようやく五百を超えたことだし、なかなか順調だな」

「ていうか順調過ぎるぐらいでしょ。やっぱりお兄ちゃんの必殺スキルはチート過ぎない？」

「……………実を言うと、俺の〈エンブリオ〉の必殺スキル《我は万の職能に通ず》にはデメリットもあるんだよな」

「えっ！ 聞いてないよ!?!？」

「言っていないからな……………自分の〈エンブリオ〉のデメリットはあまり話すものじゃないし。それに、そのデメリットは今は特に効果が無いものだったからな」

……………俺の【ルー】の必殺スキルの効果欄には、注意書きとして二つのデメリットが表記されていた。その内容は〃【ルー】のこれ以降の進化時における新規のスキル取得不可〃及び〃ステータス補正をオールゼロにする〃である。

……………流石に、これだけのスキルを持っていてなんのデメリットも無し、とは行かなかつたらしい。

「ん……………でもそれってあんまりデメリットになって無くない？」

「だから言わなかつた、という事もあるんだがな。……………実際、ス

テータス補正は有って無い様なものだったし、そのステータスもジョブを取っていけば何とでもなるしな」

「だからこそ、そういうデメリットが選ばれたんじゃない？」

オリジナルスキル作成  
《百芸創主》と「ヴァルシオン」があるし」

「『ヴァルシオン』はともかく《百芸創主》<sup>スキルマイスター</sup>は使い勝手があまり良くないんだがな。……………ただスキルを二つ組み合わせただけだと、基本となったスキルと比べて、威力二割増し、消費MP・SP二倍”とかになるし。ちなみに三つだと威力三割増し・消費三倍、四つだと威力四割増し・消費四倍という感じになるな」

「……………意外と燃費悪かったんだね。お兄ちゃんはもつとオリジナルスキルでブイブイ言わせてるイメージがあっただけど」

「それは《空想秘奥》<sup>ブリューナク</sup>と併用したり、クールタイム二十四時間みたいな極端なデメリットを付けて威力と燃費の釣り合いを取っているからだな」

むしろ、そのぐらいのデメリットを付けないと威力と燃費の釣り合いが取れないのだが……………どうも汎用性を高めたせいで、作れるスキルの強度が低くなっているみたいだ。

また、この二ヶ月程《百芸創主》のスキルの組み合わせを色々試したところ、組み合わせ次第ではむしろ弱体化する事もわかった……………光と闇が合わさり最強に見える、みたいなことは出来ないらしい。

他にはスキルを一つだけ入れて、そのパラメータを調整することも出来る様だが。

「まあ、お兄ちゃんなら上手く使いこなせるし大丈夫じゃない？へエ  
ンブリオは〈マスター〉のパーソナルに合わせて成長するんだし、お兄ちゃんならそれでも問題無いからそういうスキルになったんだと思うよ」

「そうかもな。……………それよりも上級職の転職条件の方が問題なんだよなあ」

……………この世界において上級職に就くには、それぞれ個別の条件を満たさなければならぬ。

なので多くの上級職に就くためには、それらの条件を一つ一つ調べて上でその条件を満たさなければならぬのだが……その為それぞれジョブクエストを達成したり、専門ギルドの人達に条件を聞いて回ったりと正直言って凄く大変である。

……また、エルザちゃんから自身が今現在就けるジョブの情報が分かる【適職診断カタログ】なる神アイテムがある、と聞いた俺はそのカタログを求め亜竜級以上のモンスターを狩ったり、〈墓標迷宮〉に潜ったりしたのだが……

「【適職診断カタログ】が手に入らない……狩人系統のドロップ上昇スキル機能してないんじゃないか？」

「これは完全に物欲センサーに引っかけかかってるね、お兄ちゃん」

ぐざぎざ……司祭系統のステータスと【ヴァルシオン】の補正でLUC値も上がっている筈なのに……!!？」

「まあ、エルザちゃんも頼めば貸してくれるって言ってたし、別にいいじゃない」

「それはそれとして、一冊手に入れたかったんだがなあ……」

「うーん……これだけ愚痴ってるって事は、大分落ち込んでいるねー。

これは気晴らしが必要かな？ ……お兄ちゃん！ 今日気分転換に【レムの実】狩りに行こうよ！」

「レムの実狩り？ 【レムの実】を落とすモンスターなんていたか？」

「そっちの狩りじゃないよ！ 王都の近くにヘレーヴ果樹園っていうところがあるからそこに行こうって話だよ。五千リル払えば果実が取り放題なんだってさ」

ああ、そっちの狩りか……いかな、最近モンスターばかり狩っていたからどうしても思考がそっち寄りになってしまう。

……これは、確かに気分転換が必要かな。

「わかった。じゃあ今日はその〈ヘレーヴ果樹園〉に行こうか」

「オツケー！ 私、レムの実大好きなんだ！」

……今回は、ミカに気を使われてしまったようだな。



□へレーヴ果樹園〈【戦棍鬼】メイス・オーガミカ

やって来ましたへレーヴ果樹園！ 王都で最大の果樹園だけあって、レムの実のほかにも沢山の種類の果実があるね。

………ちなみに、私も以前まで就いていた【剛戦棍士】ストロング・メイス・ストライカーを

カンストして、戦棍士系統のもう一つの上級職である【戦棍鬼】に今は就いている。普通に【戦棍士】を強化した感じの【剛戦棍士】と違って、【戦棍鬼】は主にメイスに属性を纏わせるタイプや連続攻撃系、攻撃した相手に一定確率で【麻痺】や【硬直】などの状態異常を与えるアクティブスキルなどを覚えたりする、やや癖のある上級職みたい。

さて、とりあえず受け付けの人に入場料の五千リルを支払って、私は果樹園に入っていった。

「これが五千リルで取り放題はお得だよ！」

「取り放題といっても、事前に渡された小型アイテムボックスに入る分までだからな。あと取っていい果実かどうかも、事前に渡された専用の鑑定アイテムで識別しなければならぬ。当然時間制限もあるし」

「うん、わかってるよ。そのあたりで上手くバランスを取っているみたいだしね」

じゃあ、その辺りに気をつけて果実を取っていかうか。

周りを見ると、果実を取っているティアンの人達が結構いるね、それに王都の外にあるせいか、警備の人達も沢山いるみたいだし。

………でもへマスターは殆ど居ないみたい、まあこういう所に来るへマスターは少数派だよ。

「とりあえず【レムの実】はどこに生えているのかな？」

「案内板によるとあっちみたいだよ」

お兄ちゃんに言われて案内板を見ると『レムの実畑↓五〇〇メートル』と書かれていた。ちなみにこっちの一メートルは現実の一メートルに相当するみたい………実にわかりやすいね！

◇

しばらく歩いていると、看板の通りレムの実畑が見えてきた  
……。でも、そこには既に沢山の人達が居た。

「結構人がいるねー。さすが『レムの実』、大人気だね」

「……………あそこにいる人達、よく見ると全員左手に紋章があるみたいだから〈マスター〉だな」

「本当だ、〈マスター〉が集団でこんなところに来るのは珍しいね、果物狩りツアーでもやってるのかな？ ……………あと、なんか全員同じマークを付けているね、『三日月と閉じた目』かな？」

「ん？ 確かあのマークは…………」

お兄ちゃんが何か思い出そうとしたところで、向こうの集団の一人の黒髪の美女がこつちに声をかけてきた……………確か、あの人は扶桑月夜さんだったかな？

「おー、レントくんにミカちゃんやん、久しぶりやね」

「月夜さんもお久しぶりですね。今日は後ろの皆さんと果物狩りに…………」

「そうやえー、うちのクランのメンバーから希望者連れて来たんや」

「月夜さん、克蘭作ったんですか？」

「最近作ったんや、うちがオーナーしとる〈月世の会〉っちゅー克蘭なんやけどな」

「……………お兄ちゃん、〈月世の会〉って現実にある宗教団体の名前じゃなかったっけ？」

「ああ、そうだ。……………成る程、どこかで見覚えがあると思ったら、

『三日月と閉じた目』は〈月世の会〉のシンボルマークだったな」

……………〈月世の会〉は現実に存在する宗教団体で、確か現実逃避系の教義を掲げてたっけ。

「その〈月世の会〉で合つとるよ。うちの教義は『枷に囚われた肉体より離れ、真なる魂の世界に赴く』と『自由なる世界で、己の魂の赴くままに自由を謳歌せよ』やからね、信者の多くにデンドロを勧めとるんや。ちなみにうちはオーナー兼教主なんよ」

「……………お兄ちゃん、デンドロに現実の宗教団体が進出して来たん



「だけど……」

「ふふふー、このクランを足掛かりにいずれはこの王国を手中に収めるのが目標なんよー!」

「なんか、暗黒宗教の教主みたいなこと言ってるよ!」

「いや、さすがに冗談だろう……多分。……それにへ月世の会は確か医療分野にも関わりがあった筈だ、それも終末医療系ターミナルケアの方にな。それならデンドロに進出していても特におかしくは無いだろう」

あ、成る程。デンドロは「現実から五感を移せる完全なVRMMO」だからね、医療方面での需要も当然あるか。

実際、そういう用途のための「病室にいなながら旅行できるVR」みたいなのも前からあった筈だし。

そんな話をしていると、月夜さんが少し驚いた表情でこつちを見ていた。

「へー、レントくん詳しいなあ。うちらが……というより、うちの家が病院の経営もやっとなって知ってる人はあまりおらへんのやけど」

「……以前にたまたまへ月世の会について知る機会があっただけです。それにへ月世の会」の情報自体は特に秘匿されている訳ではないですからね、調べればその発端も含めて普通にわかります。……というか、デンドロで実名プレイとか大丈夫なんですか?」  
「うちらはクリーンな宗教団体&医療法人やからな! あと本名プレイに関しては、うちらはこのデンドロを『真なる魂の世界』としとるから、教主であるうち自身が実践せんといかんからな。……今回果物狩りも、戦闘は苦手だけでもっと色んな場所を見てみたい信者の為に企画したもののやからな」

……月夜さん、普通に良いオーナー兼教主だったよ。最初は暗黒宗教の教主みたいな気がしたけど、気のせいだったみたいだね。

「でも、作ったばかりのクランやからまだまだ人手不足でなあ。……だから新規クランメンバーは大募集中やで、二人もうちのクランに入らん?」

「んー、今のところはどこかのクランに入るつもりは無いですね」  
「私も今はいいかなー」

「そっかー、残念やなあー。……………気が変わったならいつでも言っ  
てや、歓迎するで。……………ほならなー」

そう言つて、月夜さんはクランメンバーの下に戻っていった。

とりあえず私も果物を探しに行こうと思った……………が、その前に  
ちよつと聞いておこうか。

「……………お兄ちゃん、〈月世の会〉について知ったのってあの事故で  
入院した時の事？」

「……………ああ」

「……………あんまり私に気を使わなくても良いよ。さつきも月夜さん  
の本名の事を持ちだして無理矢理話を変えたでしょ、お兄ちゃんネチ  
ケットには厳しい方だから、普段はあんまり相手のリアルの事は言わ  
ない様にしてるからね」

「……………そうだな、少し気を使いすぎたみたいだな」

「そうだよ！ この世界はゲームだからあんまり気を使わなくても良  
いからね！」

「分かった。……………じゃあ果実狩りを再開するか」

「うん！」

こうして、私達は果樹園での果実狩りに戻って行ったのだった。



■ ???

「…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I  
……………」

ソレは元々は一匹の小さな毒虫だった。

「…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I  
……………」

ソレが生まれた場所は、周りにある植物がほぼ全て非常に高い毒性  
を持っているという非常に危険な環境だった。

それ故に、その場所に生きる者達は強力な毒を持ち、あるいは毒に対する耐性を持っていた。それらの能力により周りの毒性の植物や、他の毒を持つモンスターの落とす毒入りの食材を喰らって生きるのが当たり前前の場所だった。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I ……………』

ソレもそこに住んでいたモンスターの一匹であり、強いて他のモンスターとの違いといえば体内に入った毒を自身の栄養に変えるスキルを生まれつき持っていた事と、少しだけ他のモンスターより賢くて学習能力が高かった事ぐらいである。

……………ソレは、ある時は瀕死のモンスターを倒して落とした食材を喰らい、またある時は強いモンスターを誘導して同士討ちにし、そして強大なモンスターが現れ自身に危険が迫った時には逃げながら姿を隠し、さらには周りのモンスターをよく観察して有用そうなスキルがあれば自分も使える様にしたりもした。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I ……………』

そうしているうちに、ソレは経験値を得て成長・進化し亜竜級となり、そしてさらに進化し純竜級のモンスターとなった。

だが、ソレが今までのやり方を変えることはなかった。……………なぜならソレは自分が強くなった事は把握していたが、自身より弱い者が自身を倒す事が出来るということを決めた。……………自分の狩りによって知っていたからだ。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I ……………』

しかしながら、進化によって強化されたステータスとスキルによって、今までよりも効率的に狩りが出来るようになったので、ソレはこれまでよりも経験値稼ぎとスキル習得に力を入れる様になった。

そして、その近辺で自身が最も強くなった時にとある変化があった。

〔(U) B (M) 認定条件をクリアしたモンスターが発生〕

【(過去に類似個体なしと確認。〈UBM〉担当管理AIに通知)】

【(〈UBM〉担当管理AIより承諾通知)】

【(対象を〈UBM〉に認定)】

【(対象に能力増強・死後特典化機能を付与)】

【(対象を逸話級——【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】と命名します)】

ソレは〈UBM〉【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】となったのだった。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I

……………』

しかし、ソレ……………【ラーゼクター】は自身が以前見た強大なモンスターと同類となった事を把握したが、特に今までと行動を変えることは無かった。

ただ、少しだけ狩りを行う範囲を広げることにし、……………今までの毒ばかりの狩場があまり良いところではないことを知った。外の毒の無いところで狩りをする方が獲物も多く遥かに効率が良かったのである。

なので、彼は本格的に狩場を移すことにしたのだった。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I

……………』

狩場を移すと経験値稼ぎの効率はかなり良くなり、〈UBM〉としての位階もあっさりと伝説級に上がった。

また、経験値を稼ぐには人間を狩るのが最も効率がいいことも知った。だが人間の強さは個体差が大きく、村や町などを襲うのはリスクが高いと判断し、そこから出てきたほどほどの数の人間を狩るのが最もリスクとリターンが釣り合うとも考えた。

『…………… K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I K I T I

……………』

そして、今【ラーゼクター】はアルター王国・王都アルテア近郊にある〈レーヴ果樹園〉にいる人間に狙いを定めていた。

……………だが、戦える人間もそれなりの数いると感知したので、彼はいくつか策を講じて狩りをすることにした。

## V S 【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】

□〈ヘレーヴ果樹園〉

グラディエーター  
【闘士】レント

「いや、結構いっぱい果物が取れたね、お兄ちゃん」

「そうだな、【レムの実】以外にも桃っぽい【ピモの実】とか、イチゴっぽい【チェゴの実】とかあったな」

「見た目は現実の果物に似てるけど、味はかなり違ってているから面白いよね」

あれから俺達は順調に果物狩りを進め、貰った小型アイテムボックスが八割ぐらい埋まったところで、制限時間が来そうだったので切り上げることにした。

「とりあえずこれで果物狩りは終わりだな。じゃあ果樹園の係員に精算して貰おうか」

「そうだねー……………ん？」

突然、ミカの表情がとても厳しいものに変わった……………これはまた何かを感じとったんだな。

「どうした？……………何か感じたんだな？」

「うん、この果樹園に危険が迫っているみたい……………多分このままだと、此処に居る人達が大勢犠牲になると思う」

「そうか、原因はわかるか？」

「そこまではまだ解らないな……………」

「わかった。じゃあ俺が周囲を調べるさ……………《超広域脅威生物索敵》」

俺は《生物索敵》《殺気感知》《危険察知》《千里眼》を組み合わせた、広い範囲で脅威となるぐらい強い生物を索敵するオリジナルスキルを使った。

すると、確かにこの果樹園に近づいてくる複数のモンスターの反応を感知した。

「確かにこの果樹園に近づいてくるモンスターがいるな、数は五十ぐらい……………亜竜級も三体ほど混じっているな」

「ふーん……………多分そっちは本命じゃないかな？」

「まあ、今の俺達だけでも時間をかければ対処出来そうな数だからな。  
……………とりあえず係員の人に伝えに行こう」

そうして、俺達はこの異変を係員の人に伝える為に急いで走っていった。



この事を伝えにいった係員達は、すでに果樹園内の人達を避難させ始めていた。どうやら果樹園を警備していた人達がモンスターに気づいていたようで、すでに王都の騎士団にも連絡が行っているらしい。

そして、それと同時に果樹園付近にいた戦える人間に迫り来るモンスターへの迎撃や、避難する人達の護衛が依頼された。

当然、園内にいた俺達や月夜さん達へ月世の会〳〵のメンバーにも依頼が出された。

「レントくんはミカちゃん、なんか妙な事に巻き込まれたなあ」

「月夜さん、貴女達も依頼を受けたんですか？」

「そうやえー。といっても今<sup>〳〵の会</sup>うちらの中で戦えるメンバーは、うちと影やん含めてもパーティー1個分ぐらいやからなあ。……………あーでも、こんなことになるんやったらシジマ達とか連れてくれば良かったわー」

「……………月夜さん達はモンスターの迎撃の依頼を受けるんですか？」

「そうなるなあ。まあ、亜竜級含むモンスター五十体ぐらいならうちと影やんがおればどうとでもなるからなー。……………レントくん達ははどうするん？」

「……………俺達は避難する人達の護衛に回ろうと思います」

「ふーん、そっかー。……………そつちには<sup>〳〵の会</sup>うちらの非戦闘系メンバーも護衛に回つとるからよろしゅうな」

そう言った月夜さんは、へ月世の会〳〵のメンバーと共にモンスターの迎撃に向かっていった。

「……………これで良かったんだな？」

「うん、迫っているモンスター達は月夜さん達がいれば問題ないし、……………でも……………」

そう言ったミカ表情が曇っていった。……………これは……………

「護衛する俺達の方が危険……………いや、俺達の身に危険が及ぶのか」

「うん。……………多分この後、私達は確実に死ぬと思う……………」

「……………だが、そうしないと避難する人達が大勢犠牲になる、と……………」

ミカが落ち込んでるのはそれが原因か。……………こいつにとって  
は、身内を自分の勤で犠牲にするのはまだ少しトラウマになってるな  
……………

「あまり気にするなよ、この世界では俺達は死んでも二十四時間ログ  
インできなくなるだけだ。それよりもティアンの命を優先するのは  
特に文句はないぞ」

「それは分かってるんだけどねー。そういう結果になると解っていると  
流石に気分が滅入るよ。……………やっぱり、こつちの世界での遠い  
勤はなんかおかしいな、普通は危険には近づかない様に反応するの  
に」

「……………多分、こつちの俺達は不死身のへマスターだからな。自分  
の危険よりも身近な不幸を防ぐことを優先しているんじゃないか？」  
「……………んー、そうかもしれない」

……………あるいはそちらの方が自分の心を守れるから、ということ  
なのかもしれないがな……………

【クエスト【護衛——レーヴ果樹園・王都間 難易度：八】が発生しま  
した】

【クエスト詳細はクエスト画面を〆ご確認ください】

……………じゃあ、クエストスタートだ。



□果樹園・王都間道中 メイス・オーガ【戦棍鬼】ミカ

あれから、私達は果樹園内の一般ティアンの護衛として王都に向

かっていた。

今のところ道中では何も起きていないけど……私の勘だと、そろそろ襲撃が来るはず。

「お兄ちゃん、そろそろ来るよ」

「俺の索敵系スキルには反応が無いが、相当隠密に優れている敵の様なな」

さて、どこから来るか、………下か！

「お兄ちゃん下！ あと【快癒万能薬<sup>エリクショナル</sup>】と耐毒！」

「分かった！ ……『テトキシケイトゾーン』！ 全員敵襲です！！？」

お兄ちゃんが一定範囲内の病毒系状態異常を緩和するスキルを使い、さらに他の人達に敵が来たと伝えていく。

その間に私は一本だけ持っていた【快癒万能薬】を飲み干し、勘が示した方向へと走っていく……すると、その方向の地面の下から蠍の尾の様なものが生えてきて、その先端から紫色をした瘴気が私達に向かって勢いよく吹き出してきた。

「そこか！ 《グラウンド・ストライク》！！？」

その尾に向けて私は【ストロング・メイスイストライカー剛戦棍士】の奥義——地面を叩き、その際に発生する衝撃波で地上にいる敵を攻撃するスキル——でと叩き込んだ。

その攻撃は地上に出ている尾を叩き潰し、その衝撃波で地下にいた敵にもダメージを与えた……この奥義、衝撃波の範囲が広くて味方も巻き込みやすいから使い勝手が悪かったんだけど、こういう使い方もあるんだよね。

……その攻撃に対して、相手は即座に私から距離を取って地上に出てきた。

「【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】ユニーク・ボス・モンスターへU B Mか……」

『…………… K I T T I 』  
そのへU B Mの【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】の姿は、身長約二メートルの人型をしている黒い魔蟲のモンスターだった。

でも、コイツから感じる危険度は以前戦った【ヴァルシオン】より



も遙かに上だね。今はこちらを警戒しているのか様子を見ているが………あるいは【快癒万能薬】の時間切れを狙っているのかな？

さて、お兄ちゃんと避難している人達の方は………

「《デトキシケーション》………チー！ 【猛毒】 【魔毒】 【魂毒】 【衰弱】 【酩酊】 【麻痺】 の六重状態異常だど!!? しかも【司教】<sup>ビショップ</sup>のスキルでも効果を緩和するのがやつとの強度か!!?」

「………ここは私が！ 【快癒万能薬】 セット！ 《皆癒の霊杯》!!?」

お兄ちゃんが避難民達の解毒に苦戦していると、へ月世の会へのメンバーの一人が手に持った杯に【快癒万能薬】を入れて振り撒いた。

………すると、状態異常に苦しんでいた人達がみるみるうちに回復していった。

「これで状態異常は治った筈です！」

「ありがとうございます！ へ月世の会への皆さんは避難民を連れて急いで王都へ、ここは俺とミカで食い止めます。……… 【快癒万能薬】の効果が切れるまでは足止めしてみせます」

「!!? ……分かりました、ご武運を!!?」

そうしてへ月世の会の人達は避難民を連れて王都へ急いでいった………と、やっぱりそう来るよね。

『…………… K I T I 』

「私達を無視出来るとも? 《ストライク・ブラスト》！」

「ここに奇襲して来たんだから、そう来るよな 《モンスター・ハント》

《魔蟲》 《スプリット・アロー》！」

私達を無視して避難民の方に向かおうとした【ラーゼクター】に対し、その行動を先読みしていた私はその進行方向上に【ドラグテイル】の《竜尾剣》を伸ばして牽制し、さらにメイスから衝撃波を放った。

さらに、お兄ちゃんの【弓手】<sup>アーチャー</sup>のアクティブスキルにより十本程に分裂する矢がヤツに襲いかかった………が、

『K I E !!?』

それらの攻撃をヤツは超音速機動で全て回避し、一旦距離を取った。

……とりあえず避難民からは引き離れたかな。

「……………今《看破》したが、アイツも六重状態異常にかかっているな」「それである機動、状態異常無効……………いや効果の反転かな？」

だとすると【猛毒】【魔毒】【魂毒】はそれぞれHP・MP・SP回復、【衰弱】がステータス倍加、【酩酊】が感覚の研ぎ澄まし、【麻痺】がAGIの上昇になるかな？ ……………だとしたらあの動きにも納得だね。

そうしていると【ラーゼクター】の方に変化があった。……………潰された蠍っぽい尾が再び生え、右手からは蠍の鎌、左手からは蜂の針が生えたのである。

そして、改めてこちらに向き直った。……………なるほど、避難民を追うのをやめた代わりにこつちを確実に殺しに来るか。

『……………KIE！』

「また毒ガス！ ……いや、目くらまし……………横か！」

「……………《透視》ターゲット 魔蟲 《アンチ・モンスター・スナイプ》！」

まずヤツは口から大量の瘴気を噴射し、それに身を隠して私の横から右手の鎌で斬りかかってきた。

それを私はかろうじて【ギガース】で防ぐもののSTR差で弾き飛ばされ……………そこに《透視》スキルでヤツを捕捉したお兄ちゃんの矢が襲いかかった。

……………だが、

『KIE！』

「がっ！ ………………《ブリーズ》！」

「お兄ちゃん!? ……チイ!!?」

その攻撃をヤツは容易く躲し、反撃として左手の針を飛ばしてお兄ちゃんの肩に突き刺した。それでもお兄ちゃんは風魔法を使って毒ガスを晴らし、目視出来た相手に私が《竜尾剣》を複雑に動かしてフェイントを入れつつ放つ。

だが、ヤツはそれもあっさり躲して距離を取った。……………やっぱりAGIが違い過ぎるね、私のAGIは補正込みで三千ぐらい、お

兄ちゃんは二千ぐらいだから攻撃を当てるのもままならない。

ヤツも決して深追いせずに引き気味に戦って来るから、このままだと【快癒万能薬】の時間切れになるね。

そして、多分次は……………

『K I E E！』

「お兄ちゃん！……………クツ!?？」

「……………ま、弱った方を狙うよな……………《瞬間装備》」

やっぱり、ヤツは負傷したお兄ちゃんを先に狙う事にした様だ。

さらに私の方にも尻尾から直径十メートル程の蜘蛛の巣のような網を、何発も発射して牽制してくる。その網は何とか躲けたものの、そのせいで私は足止めされお兄ちゃんのフォローには行けなくなつた。

向かって来るヤツに対しお兄ちゃんは「ライトニング・デスジャベリン」を取り出して迎撃の構えを見せて……………突然、ヤツの足が地面に沈み込んだ。

『K I E E!?』

《《空想秘奥》》《ライトニング・シユート》!!?」

それは、お兄ちゃんトラップ・ハンダーの【罠狩人】の罠系スキルと地属性魔法を組み合わせたオ리지ナルスキルによる罠だった。

そこに間髪入れず、投擲系スキルと雷属性魔法を組み合わせたオ리지ナルスキルで槍を投擲した。……………あれは以前に私との決闘で使ったものの強化版で、仮に避けても地面に突き立った時に発生する雷撃でダメージを与えられる。

……………筈だったが、

『K I E E E!!?』

「何ッ!?……………ゴハア!!?」

「お兄ちゃん!?」

その投擲をヤツは右手の鎌をその槍の側面に沿わせることで、明後日の方向に受け流したのである。

その際に鎌は砕けたもののヤツは意に介さず即座に拘束を抜け出し、再び生やした左手の針に禍々しい瘴気を纏わせて技後硬直で動け

ないお兄ちゃんに即座に接近し、その胸を貫いた。

……………そして、お兄ちゃんは顔の穴全てから血を撒き散らして絶命した。

【パーティーメンバー〈ヘレント〉が死亡しました】

【蘇生可能時間経過】

【〈ヘレント〉はデスペナルティによりログアウトしました】

そんなアナウンスがお兄ちゃんの死<sup>デスペナルティ</sup>を伝えてくる。……………解つてはいたけど、やっぱりちよつと辛いかな……………

『K I E！』

「感傷にも浸らせては……………くれないよね!!？」

お兄ちゃんを仕留めたヤツは即座に右手の鎌を再生させ、さらに左手の針も右手と同じ様な鎌に変化させて、それらから複数の斬撃波を放つて来た。

それを私は勘による危険感知で先読みして回避するか、【ギガース】や【ドラグテイル】で受ける事であらうじて凌ぐものの、その隙にヤツはこちらに接近してきた。

『K A A！……………K I E！』

「また毒……………いや！ 酸の霧!?!? ……………それに網まで!!?!？」

接近してきたヤツは、口から強酸性の霧を吐き出してこちらの逃げ道を減らしに来た。さらに私が回避した方向に向かって、さつきも使った蜘蛛の巣状の網まで投げかけて来る。

これは完全にこっちの処理能力を圧迫しにきているね。……………というか、さつきからこちらへの対処がいちいち的確すぎ！ ステータスでもスキルでも上回られている相手にそんな事やられると本当にどうしようも無いんだけど!?!?!

そんな事を繰り返しているうちに、私の身体には少しずつダメージが蓄積されていった……………そろそろ【快癒万能薬】の効果時間が切れるね。

「こうなったら覚悟を決めるしかないか。……………疾ッ!」

『K I E！』

私はヤツに向けて《竜尾剣》を突っ込ませ、さらに自分自身もヤツ

に向かって突撃した。

それに対しヤツは《竜尾剣》を弾き飛ばし、さらにヤツと私の間に酸の霧を壁の様に噴射した。そして今まで隠していた五本目・六本目の副腕を鎌を生やしながら展開して、その合計四本の鎌から大量の斬撃波を放って来た。

それらの攻撃により私は全身を焼かれ、右腕と左足を斬り裂かれその場で動きを止めてしまい、そこに接近してきたヤツの斬撃が私の首を薙ぎ……

『《インパクト・ストライク》!!?』

『GAA!』

その斬撃を装備していた【救命のブローチ】が碎けるのを代償にして防ぐと同時に、片手で放ったカウンターのアクティブスキルをヤツに叩き込み吹き飛ばした。

……この【ギガース】は《エンブリオ》、私には重さを感じさせないから片手で使う事も出来るんだよね。……でも、

「流石に……二発目の攻撃はどう……しようも無かつ……たね……」

先程、私は副腕を使って時間差で放たれた斬撃で腰部の鎧の無い部分を斬り裂かれており、そのまま地面に倒れ伏した。

……身体は半分以上は斬り裂かれているみたいだから、もうすぐ死ぬかな。

(でも、目的は果たせたみたいだし、構わないかな……)

そんな私の目には、王都から全速力で離れていく【ラーゼクター】の姿が映っていた。

【クエスト【護衛——レーヴ果樹園・王都間】を達成しました】

……そのアナウンスに安堵しつつ、私はこのゲームで初のデスペナルティを受けたのだった。

【致死ダメージ】

【パーティー全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】



■【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】

『…………… K I T T I ……………』

今、王都から全速力で離れていく【ラーゼクター】は、今回の狩りは完全に失敗だったと思っていた。

本来の標的だった人間達は、すでに街から出てきた人間達と合流していた。その人間達の中には、今の負傷した自分が戦うには危険な程の実力を持つ相手もいた。

なので、彼はその人間達が自身を狩ろうとする前に、全力でこの場を離脱することにしたのだった。

『…………… K I T T I K I T T I ……………』

また、彼は今回の狩りの失敗の原因は、左手に痣を持つ人間の能力を見誤っていた事だとも考えていた。

特に先程戦った二人には最初の奇襲を見破られたことに始まり、自身がやろうとしていた事の殆どを潰されてしまう形になった。

それに仕留めた時に得られる経験値も人間の割には少なかったの  
で、そういう意味でも割りに合わない相手だった。

……………自分達の様<sup>モンスター</sup>に死んだ後に光の塵になったことが関係しているのか、とも考えたが答えは出なかった。

『…………… K I T T I K I T T I K I T T I ……………』

今回の狩りで得たことは、街の側にいる人間達を狩るのはリスクが高すぎる事と、“痣持ち”の人間は標的としては割りに合わないという情報ぐらいだったな。

……………そんな事を考えつつ、彼は隠密系スキルを使って近くの森の中に消えていった。

## 兄妹の現実の話

□二〇四三年 加藤蓮かとうれん

「……………ッ!!?」

あの「ラーゼクター」に胸を貫かれて身体の中に強力な毒を注ぎ込まれ絶命した後、俺——本名・加藤蓮、デンドロでのアバター名はレント——の意識は現実の自室に戻って来ていた。

「……………成る程、これがデスペナルティか……………」

とりあえず意識ははつきりしているし、デスペナ直前まであちらで何が起きたのかも覚えている。

最後のデスペナルティを告げるアナウンスも聞いたし、デンドロの機器の横のディスプレイには「ペナルティ期間中です。あと23時間56分47秒」と表示されていた。

「……………美希はまだあちらか。……………だが、長くは持たないだろうな……………」

まだ、あちらで「ラーゼクター」と戦っているであろう妹——本名・加藤美希、アバター名はミカ——の事を考えつつ、今回の戦闘を振り返ってみた。

「今回の敗因だが……………単純に地力が足りなすぎたな」

実際、こちらを圧倒的に上回るステータス・スキル・技術を持つ相手に正面から挑めば当然敗北する、という簡単な話ではあるのだがな。

……………まあ、今回の目的はティアンの人達を逃がすことであり、俺達が死ぬのは想定内だったが……………

「とはいえ、あそこまであっさりやられたのは悔しいし……………何より、美希に俺の死ぬところを見せてしまったからな。……………昔の事故のトラウマが甦らなければいいんだが……………」

……………今から五年程前の話である。ある日、両親が福引きで海外旅行のチケットを当てて家族みんなで旅行に行こうとしたのだが、美希だけはその旅行には行きたくない和大泣きし出したのだ。

仕方なく美希を叔父夫婦に預け、俺と両親だけで旅行に行ったのだ

が………そこで乗っていた飛行機が事故で墜落して両親は死亡、俺も生死の境を彷徨う重傷を負った。

………今思えば美希はその直感で事故の事が解っていたのだろうが、当時は俺も両親もその事は知らなかった。それにまだ幼かった美希自身もこれまで命の危険などに会わなかったからか、自分が何を感じ取っているのかが解っていなかったのだから仕方がないのだが………

「当時はかなり酷かったからな………『自分は解っていたのだから、止められた筈だ』とか言つて塞ぎ込んでいたし………」

まあ、その後は奇跡的に回復した俺と叔父夫婦の尽力で、どうにか今の様に持ち直せたのだが。

ちなみにその後、身寄りを無くした俺達を叔父夫婦は引き取つてくれて、とても良くしてくれたので本当に彼らには頭が上がらない。

また、後遺症としてたまに少し身体が痺れる事もあり、そのせいで以前までやっていた弓道も辞める事になったが、あれだけの重傷から回復出来たのだから些細な事だろう。日常生活には支障は無いし。

あと、〈月世の会〉について知ったのは、病院でのリハビリの時に知り合った人がたまたま信者で、その人から〈月世の会〉の成り立ちなどを聞き、少し調べた事があるからである。

………それはいいとして、問題は………

「直感で悲劇が解つてしまうせいで、あちら側に過剰に感情移入してしまう事なんだがな。………その為に〈Infinite Denrogram〉の事は世界だワールドと解ついても遊戯ゲームとして扱おう、と言つたんだが………」

………もし割り切れない様ならば、その時は………

そんな事を考えていると部屋のドアがノックされ、廊下から美希の声が聞こえて来た。

「お兄ちゃん、生きてるー、部屋入ってもいいー?」

「アスペナしたばかりだが生きてるぞ。………今、鍵を開ける」

扉を開けるとそこには妹の美希がいて、そのまま俺の部屋に入ってきた。………ちなみにアバターよりも二十センチ以上背が低い。



「…………お兄ちゃん、なんか今失礼な事を考えなかった？」

「…………いや、別に考えて無いぞ…………それより何の用だ？」

「…………まだ小五だし、成長期だからすぐ大きくなるし…………つと。まず、お兄ちゃんのデスペナ後のことを報告に来たよ」

「で？ どうだったんだ？」

「私もデスペナしたけど、最後に「ラーゼクター」は王都から離れて行ったのが見えたし、クエスト達成のアナウンスもあったから、多分ティアンの犠牲をゼロにする目的は果たせたかな」

「そうか…………とりあえず最低限の目的は達成出来たか」

…………あとは、美希がどう思っているかだが…………

「言つとくけど、私は〈Infinite Dendrogram〉を辞める気は無いからね。…………どうせお兄ちゃんの事だし、私が昔の事故の時の事を思い出したりしてないか、とか気にしてたんでしょ」

「うぐっ！」

…………大体その通りだから、ぐうの音も出ない…………

「お兄ちゃんは色々私に気を使いすぎ！ もう昔の事故の事は立ち直ったし、自分の勘の事も今では冗談に出来るぐらいには割りきってるから大丈夫だよ！ ……それにあの世界でなら、私がこんな力を持った事にも意味があったと納得出来るような気がするし…………」

「美希…………」

「別に私が力を持った意味なんてモノは、特に何も無いんだろうとは分かってはいるけどさ。……………無限の可能性”を謳うあの世界でなら、それに“納得”が出来る気がするんだ」

「…………分かった、そこまで言うなら俺からは何も言わない。

……………だが」

「分かってるよ。……………私が生きる世界はあくまでこつち現実、あつちデンドロはゲームとして扱う、でしょっ？」

「そういう事だ」

あの世界だと、現実とゲームのバランスが崩れる人は絶対出てくるだろうからな……………美希が直感のせいである可能性は十分

あつたし。

だが、少し気を回しすぎていた様だな。……………美希にはもう俺の庇護は必要無いか、……………少し寂しい気もするな。

……………さて、湿っぽい話はこれで終わりにするか。

「で？ デスペナが明けたらどうする？ 『ラーゼクター』にリベンジでもするか？」

「うーん……………負けたのは悔しかったし、もう一度戦う機会があるならリベンジするけど、こつちから積極的に狙いに行くほどじゃ無いかな。アイツは人間に対して悪意を持っている訳では無かったしね」  
「まあそうだな。どちらかという狩りの獲物として見ている感じだった。……………それに今の俺達では地力が足りん。ステータスはレベルを上げればいいが、技術面に関しては俺はそこまで才能がある訳では無いからな」

「……………お兄ちゃんが才能が無いって言ったら色々な人に怒られると思うけど……………」

そうは言っても、俺は全方面にそこそこ優秀ぐらいの才能しか無いからな。規格外の才能を持つ相手にはその分野でどうしても一步劣る。

……………何より、その一步が規格外とそうで無い者との絶対的に差になるからな。

「だが、技術は時間をかけて磨けばいいし、才能の差もあちらでなら補うことも出来る。……………その為の『ルール』だからな」

「……………お兄ちゃんの『ルール』はそういう方向性だね。私の場合『ギガス』の特性が高いステータス補正だから、上級職までじゃその本領を發揮出来ないし……………やっぱり超級職を目指そうか。噂では戦棍士系統の超級職はロストしているみたいだし」

デンドロはまだまだ始まったばかりだからな、強くなる方法はいくらでもある。



「ところでお兄ちゃん。流石に気づいてるよね？」

「ああ……」

美希に言われるまでも無く、その部屋の開いた扉の隙間から見える少女からの視線には気づいていた。

「じ——……………」

「え、えーと……何の用かな？ 祐美ちゃん？」

彼女は加藤祐美ちゃん。叔父夫婦の娘であり俺達の従妹にあたる子で、現在小学二年生の女の子だ。

「……………兄様と姉様だけデンドロやっていてズルいのです。私もやりたいのです。……………あと、最近あんまり構ってくれなくて寂しいのです」

「えーと……………今はデスペナ中だから、久しぶりに一緒に遊ぼうか？」

「そう言ってデスペナが開けたら、またデンドロに戻って行くのです。……………やっぱり私もプレイしたいのです」

「でも、叔母さんの許可が下りて無いだろう？」

叔母さんは祐美ちゃんがデンドロをする事をあまり良く思っておらず、ゲームをプレイする許可を出していない。

その理由も、リアルすぎる世界がまだ幼い祐美ちゃんに与える影響を懸念してのもの、という実に真つ当な理由なので俺達も正直反論しにくいのだ。

……………ちなみに美希がお目こぼしされているのは、過去の事からなるべく俺と一緒に行動させた方がいいだろうという心遣いである……………本当に彼らには頭が上がらない。

「……………別にゲームと現実の区別ぐらいつけられるのです」

「んーでも、ゲームハードが無いよね。私達のを交代で使う？」

「あうっ、そうだったのです……………デンドロのハードは今ほとんど売り切れなのです。……………それに出来れば兄様達と一緒にしたいのです」

デンドロ発売から一カ月たった今でも、デンドロのハードはほぼ売り切れ状態であり、ネットのオークションでは凄まじい値段で取り引

きざされていたりもする。

「……………一応、そのあたりは何とかなるんだが。」

「実はこんな事もあるうかと初日に予備のハードをもう一本買ってあるから、それを使えばいいんだがな」

「……………お兄ちゃん、いつの間に買ったの？ ……………しかもそれ祐美ちゃん用のでしょ」

「祐美ちゃんもやりたがる事は予想出来ていたしな。ちなみにハードは初日のプレイが終わったあとすぐに買いに行った……………確実に大ブームになると思っていたからな」

「流石なのです！ 兄様!!？」

「ハイハイ、さすおに、さすおに」

「……………正直、我ながらちよつとシスコンすぎるとは思っている。でも、叔母さんの許可無く使わせる事はしないぞ。……………一応、俺達も説得には付き合おうが……………」

「正直言つてデンドロの世界がリアルすぎて、プレイヤーの心に影響があるつてのは事実だからねー」

「うぐぐ……………父様の方は泣き落としでもすれば一発なのですが、母様の説得は難しいですね……………」

「叔父さんエ……………」

まあ、叔母さんの説得が駄目そうならデンドロやる時間を減らして、祐美ちゃんに構ったほうがいいかな……………流石にこの一カ月間、半ば廃人プレイはやり過ぎだったか。

そんな事を思っていると、祐美ちゃんが何か決意を秘めた顔をしていた。

「それにデンドロでなら、私の昔からの夢が叶うと思うのです！」

「夢？」

「はい！ デンドロには『魔法』が有ると聞きました。……………実は私は昔から『魔法少女』になってみたいと思っていたのです！ それもプリキュアみたいな!!？」

……………プリキュアね、あの日曜朝で約四十年ぐらいは続いている長寿シリーズか。

確かに祐美ちゃんは、日曜午前八時半にはテレビに齧り付くぐらいに好きなことは知ってたけど。

「確かにデンドロには魔法があるし、それを使う【魔術師】<sup>メイジ</sup>のジョブもあるけど……プリキュアやるのに必要なジョブはどちらかというと【拳士】<sup>ボクサー</sup>とかじゃない？ ……魔法（物理）系ヒロインの代表例だし」

「いや、デンドロなら魔術師系統と拳士系統の複合で【魔拳士】みたいなジョブもありそうだからそっちじゃないか？」

「チツチツチ、二人共全然分かっていないのです。プリキュ○をはじめとする魔法少女に必要なモノは、他者を思いやる優しい心なのです！ 戦い方などというものは些細な問題なのですよ!!？」

「アツハイ」

……まあ、祐美ちゃんが良いならそれで良いんじゃないかな。俺も日曜午前のヒーロー・ヒロイン達はそういうモノだと思うし。

実際、王国には仮面ライダーのロールプレイをしている人がいると噂で聞いたことがあるからな……プリキュアがいても大丈夫だろう。

……デンドロではへマスターへは自由だしな。

「あと、魔法に関しては個人的にちよつと見てみたいだけなので、自分で使えなくても別に良いのです。……それに兄様と姉様にはへ Infinite Dendrogramでやりたい事があるんですよ？ それに対して、私は足を引っ張りたくは無いです」

「祐美ちゃん……」

祐美ちゃん、やっぱりさっきの話を聞いていたのか……

「じゃあ、皆で叔母さんを説得する方法を考えるか」

「はいなのです！」

「その前に夏休みの宿題とか残っていたら、早めに終わらせたほうが良いよ。私もちよつと残っているし」

「あうう……まだ、ちよつと残っているのです……」

「宿題はさっさと終わらせておけよ」

やれやれ、デスペナ明けにデンドロ仲間が一人増えれば良いんだが

な。とりあえず現実の諸々の用事を片付けるか。

◇

あのあと、美希や祐美ちゃんの宿題や俺の大学の準備などを片付けて、仕事から帰ってきた叔父夫婦に祐美ちゃんのデンドロプレイの事を相談したのだが……………何故かあっさりと許可が下りた。

どうも、美希と祐美ちゃんの泣き落とし（偽）にあっさり陥落した叔父さんはともかく、叔母さんの方は祐美ちゃんが以前から寂しがっていた事や、俺達の様子から条件付きなら許可しても構わないと思っ  
ていたらしい。

「ようやく、念願のデンドロをプレイ出来るのです！」

「良かったねー、祐美ちゃん。まあ条件を二つ出されたけど」

「一つは『ゲームのやり過ぎで現実の事を疎かにしないこと』、もう一つは『デンドロ内では常に俺か美希と一緒に行動すること』だったな。……………まあ妥当な条件ではあるな」

「つまり、兄様と姉様のデスペナが明けるまではお預けなのです。……………確か兄様達はアルター王国に所属していましたよね、じゃあ私もそこなのです。でも他の国にも興味があるので一度行ってみたいのです。レジエンダリアとか面白そうなのです」

まあ、俺達も他の国には一度行ってみたいとは思っていたけど……………レジエンダリアかあ……………

「……………お兄ちゃん、レジエンダリアってネットの掲示板では変態が多いって話だけど、祐美ちゃんを連れて行って大丈夫かな？」

「……………まあ、あの世界なら実力があれば多少のトラブルは何とかなるだろう。……………それに、祐美ちゃんに付き纏う変態がいれば俺達で皆殺しにすれば良いだけだ」

「……………まあ、そうだよな。……………祐美ちゃんに手を出す様な輩は一人残らず潰せば良いだけだしね」

「？」

叔母さんからも任せられているし、俺達で祐美ちゃんを守らなけれ

ばな。

「とにかく！ 明日が楽しみだね!!？」

「はいなのです！」

……………今後のデンドロは少しだけ賑やかになりそうだな。

## 祐美ちゃんの初ログイン

□王都アルテア・中央通り大噴水前

グラディエーター  
【闘士】レント

あれからデスペナルティが明けた俺達は、事前に設定しておいたセーブポイントである王都の大噴水前にログインしていた。

また、祐美ちゃんも同じタイミングでログインしており、この噴水の前で待ち合わせをすることになっている。アバター名は俺達と同じ様に本名をもじって「ミュウ」とするらしい。

「デスペナ明けてもアバターの調子は問題ないかな。貴重品用のアイテムボックスも確認したけど、そっちで落とした物は無かったね。落としたのは普通のアイテムボックスの中身と、果樹園で貰った小型アイテムボックスの果物ぐらいみたいだよ。お兄ちゃんは？」

「貴重品用のアイテムボックスを確認したが、幸いな事に召喚媒体などは無事だったな。ドロップした物もそちらとほぼ同じだ」

初デスペナで少し不安だったが、とくに問題は無さそうだ。盗難対策が施された貴重品用のアイテムボックスの中身が無事だったのは良かったな。

ちなみにこのアイテムボックスに施された盗難対策は下級職のスキルを防げる程度のものである……………上級職のスキルを防げる物は非常に値段が高く買えなかった。容量もかなり少なかったしな。

また、今まで使っていた初期のアイテムボックスに適当なアイテムを入れておくランダムドロップ対策は上手く機能してみたいだな。

あとは祐美ちゃん……………もといミュウちゃんを待つだけか。

「しかし、アバターだと見分けがつくか？俺達のアバター名とこちらでの外見は教えておいたが……………」

「大丈夫だと思うよ。ミュウちゃんも私と同じ様に現実の体を成長させて、その一部を変える感じにするって言ってたからね」

確か、プリキ○アの登場人物に合わせて大体中学生ぐらいにするって言うっていたな。

「とはいえ、あんまり遅い様ならどちらかが迎えにい「レント兄様、ミカ姉様、どこですか」…………おっと、来た様だな。」



「おーい、ミュウちゃん、コツチコツチ〜！」

「あ！……………レント兄様とミカ姉様ですか？」

「そうだよ、ミュウちゃん。私が従姉のミカで、こつちがお兄ちゃんのレントだよ」

「よろしくミュウちゃん。……………それと、ようこそへInfinite Dendrogramへ」

「はい！ 兄様、姉様、これからよろしくお願いするのです!!？」

そう言ったミュウちゃんのアバターは、祐美ちゃんを中学生ぐらいに成長させ、髪を桃色にして細部を少し弄った感じだった。

そのミュウちゃんは、私達や周りを見て驚いた表情をしていた。

……………ま、初めてデンドロにログインすればそうなるだろうな、俺もそうだったし。

「兄様達から話は聞いていましたが、本当にリアリティが凄いのです。これがデンドロなのですね。……………それで、これからどうするのです？」

「とりあえず冒険者ギルドに行つて登録しよう。そうすればギルドでクエストを受けられる様になるし」

「基本的にジョブにならそこで就く事も出来るしね。ところで就くジョブはもう決まった？」

「はい、最初は【<sup>ボクサー</sup>拳士】に就こうと思うのです。これでも格闘には自信があるのです」

……………ああ、そういえばミュウちゃんはあっちでは空手をやっていたな。それも小さな大会で優勝するぐらい。

この子も才能的にはミカと同じ天災児枠だしな……………やっぱり俺の周り天災児多くないか？

「そうか。じゃあ早速冒険者ギルドに行こうか」

「はいなのです！」

こうして、俺達はミュウちゃんを伴って冒険者ギルドに行くことになったのだった。



「ここが冒険者ギルドだよ、ミュウちゃん」

「おー！ 凄いファンタジーな感じなのです！」

さて、実に初々しい反応をしているミュウちゃんを連れて、私達はギルドの受付に訪れた。受付嬢はお馴染みのアイラさんだ。

「すみませんアイラさん、今日は俺達の従妹を連れて来たのでギルドに登録したいのですが」

「ミュウと言うのです、よろしくお願いしますのです」

「はいわかりました、ミュウ様ですね、登録しました。……………それと、お二人もご無事で何よりです」

おや、俺達が「ラーゼクター」に殺された事はギルドにも伝わっているのか。

……………じゃあ、あの事件の事も聞いておくか。

「まあ、私達は不死身の〈マスター〉だからね。……………それよりも〈レーヴ果樹園〉から逃げて来た人達はどうなったか知ってます？」

「はい、避難した人達はお二人が〈U B M〉の足止めをしている

ユニーク・ボス・モンスター

間に、連絡を受けて王都から果樹園に向かう途中の騎士団に保護されたので全員無事です。また果樹園の方での戦闘でも死者は出ていませんでした。あと、お二人が交戦した〈UBM〉【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】はその場から逃亡した様で、騎士団が周囲を搜索しても見つからなかった様です」

「なるほど、じゃあティアンに死者は出なかったのですね。なら良かったです」

本当にデスペナになってまで戦った甲斐があったな。

「それとお二人には護衛クエストの報酬があるので後で受け取りに行ってください、と果樹園の経営者がギルドの方に伝言を残していききましたよ。受け取る場所は王都内に果樹園の施設があるので、地図を出しておきます。後でそこに行ってください」

「わかりました。後で向かいます」

報酬は素直に嬉しいな。【ラーゼクター】との戦いでは俺もミカも【快癒万能薬】や【救命のブローチ】【ライトニング・デスジャベリン】

などを消費したし、補填になればいいんだが。

「……………さてと、とりあえずミュウちゃんをジョブに就かせようか。」

「それじゃあアイラさん、ミュウちゃんをジョブに就かせるために冒険者ギルドのジョブクリスタルを使わせてもらいます。……………そういうえば、このクリスタルで【拳士】のジョブに就く事は出来ましたっけ？」

「はい、冒険者ギルドにあるジョブクリスタルでは【拳士】のジョブにも就く事が出来ますよ。あと、ギルドに登録した人であれば誰でも使える物なので、気楽にご利用ください」

「わかりました。ありがとうございます」

そうしてミュウちゃんを【拳士】のジョブに就けて、他にも初心者用の討伐クエストをいくつか受けた俺達はギルドを後にした。

「それじゃあ次はミュウちゃんの装備を買いに行こうか！ お金は私達が出すし」

「ありがとうございますのです。お金は後できちんと利子を付けて返すのです」

「いやー、別に返さなくてもいいけど……………」

「それはダメなのです！ 姉様達にあまり迷惑はかけられないのです。……………それに母様からも、こちらで色々な事を学んで来なさいと言われたのです。だから借りたお金はきっちり返すのです」

「これに関してはミュウちゃんの方が正論だな。お金の貸し借りはきっちりしておいた方がいい」

「うーん……………分かった。でも、無利子で良いからね！」

さて、ここからは別行動にした方がいいかな……………この二人の買い物は長いし。

「じゃあ俺はクエストの報酬を受け取りに、アイラさんに言われた所に行ってくるぞ。……………ミカ、ミュウちゃんの事は任せた」

「オツケー！ 任されたよ!!? ……………そうだ、私の果樹園のアイテムボックスも渡しておくから返しておいてねー」

「いってらっしゃいなのです、兄様」

こうして二人と別れた俺は、報酬を受け取りに王都にある果樹園の施設に向かったのだった。



□ヘイースター平原◇ メイス・オーガ【戦棍鬼】ミカ

あれからお兄ちゃんと別れたあと、マリイさんの雑貨屋でミュウちゃんに合った初心者拳士用の籠手などの装備と各種消費アイテムを買った私達は、初心者用の狩場の一つであるヘイースター平原◇でミュウちゃんの初戦闘を行うことにした。

………このモンスターの強さならミュウちゃんに何かあっても、今の私なら問題無く対処出来るしね。

「では、これからミュウちゃんにはデンドロでの初戦闘をやってもらいます。えーと、視点はリアル視点だったっけ?」

「はい、姉様達と同じにしました」

「じゃあ気をつけてね、デンドロのモンスターは超リアルだから初戦闘で辞めちゃう人も多いし、無理はしちやダメだよ?」

「分かったのです」

ちようど視線を向けた先には一匹の【リトルゴブリン】がいたので、アレとミュウちゃんを戦わせてみようか。

「それじゃあ、あそこに【リトルゴブリン】がいるし戦ってみようか」「はい! ……では勝負なのです!!?」

そう宣言したミュウちゃんが【リトルゴブリン】に戦いを挑んで行った。

………実に新鮮だね、私もお兄ちゃんも『開幕奇襲上等、戦闘中に御託を言う暇があったら攻撃する』みたいな思考だからなあ。

『GEE!』

「疾ッ!」

まず、振り下ろされた相手の爪をミュウちゃんは完全に見切って紙一重で回避し、そのままカウンターのストレートを顔面に叩き込んだ。

さらに、その攻撃で怯んだ相手の腹に中段蹴りを放ち体制を崩し、そこに上から拳を打ち下ろして地面に叩きつけ、そのまま「リトルゴブリン」は光の塵になった。

「……………うん、特に心配する必要は無かったね。確かお兄ちゃんも『祐美ちゃんの格闘の才能は普通に俺よりも上だ』とか言ってたしね。姉様〜！ 倒したのです〜！」

「……………あーうん、じゃあこのままギルドで受けた討伐クエストをやっ行ってこうか」

「分かったのです〜！」

そのまま私達は〈ヘイースター平原〉での狩りを続行するのだった。



「せいっ！ はあ！ 《ストレート》！」

『G I A A ! ? ? 』

今、ミュウちゃんの拳撃からのアクティブスキルでまた一体の「リトルゴブリン」が光の塵になった。

「……………あのあとミュウちゃんは、この〈ヘイースター平原〉にいたモンスターに片っ端から戦いを挑み、それら全てを容易く撃破していった。」

ちなみに私はそれを後ろから見ていただけである……………いや、私に参加しちゃうとミュウちゃんに経験値が入らないからね！ しようがないよね！

「姉様、これで冒険者ギルドで受けたクエストは全部クリア出来ました」

「……………はっ！ そっそうだね、じゃあ一旦王都に戻ってクエストの清算をしようか」

「分かったのです。……………そういえば、私の〈エンブリオ〉はいつ生まれるのでしょうか？」

そう言いながら、ミュウちゃんは左手の籠手を外して第0形態の〈エンブリオ〉を見ていた。

「うーん、私とお兄ちゃんはログインしてから一時間ぐらいで孵化したけど、掲示板とかの情報だと孵化まで半日から一日かかったっていう情報もあったから、大分個人差があるみたいだよ。まあ、そのうち孵化するから気長に待てばいいよ」

「はい、分かったのです……………えっ!?!?」

そう言った側からミュウちゃんの〈エンブリオ〉が光だした……………実にタイムリーだね。

「姉様!?!? なんか光っているのです!?!?」

「良かったね、ミュウちゃん。〈エンブリオ〉が生まれるみたいだよ」  
「姉様すごい冷静なのです!?!?」

そりゃあ、以前にお兄ちゃんを見てるからね。

……………そうしているうちにだんだんと光は収まっていき、光が消えるとそこには一つの影があった。

「……………あなたが私の〈エンブリオ〉……………なのですか?」

『そうだよマスター。僕の名前は【支援妖精 フェアリー】、マスターを援ける為のTYPE:ガードナーの〈エンブリオ〉だよ。以後よろしくね』

それは大きさは三十センチ程で四足歩行の……………えーと、何とゆうか……………犬と猫と兎とフェレットを足して割ったような……………何とも言葉にするのが難しい感じの謎生物だった。

……………ていうか、あれって……………

「……………凄いです!?!? まるでプリキュアの妖精みたいなのです!?!?」

「そう、そんな感じ!」

『この外見でマスターに喜んで貰えるのなら嬉しいかな』

日曜午前八時半に日本全国のテレビで出てきて、小さな女の子によく目撃されてそんな生き物だね!

……………まあ、〈エンブリオ〉は〈マスター〉のパーソナルに由来するからね。ミュウちゃんが喜んでいいんじゃないかな。

「ミュウちゃん、とりあえず【フェアリー】の能力を確認してみたら?」  
「分かったのです……………こんな感じだったのです」

【支援妖精 フェアリー】

TYPE：ガードナー

到達形態：I

HP補正：F

MP補正：G

SP補正：G

STR補正：E

END補正：E

DEX補正：G

AGI補正：D

LUC補正：F

『保有スキル』

《エール・オブ・ザ・ブレッシング》Lv 1：

マスターの右手・左手の装備枠が空いている場合、マスターのSTR・END・AGIを10%上昇させ、魔法系の被ダメージを10%軽減する。

このスキルはマスターの一定距離以内にいなければ効果が発揮されない。

パッシブスキル

《マジカル・ラーニング》：

魔法系スキル発動の目撃時に低確率（1%）でそのスキルを習得する。

このスキルで習得した魔法スキルのレベルは1になる。

パッシブスキル

「ふーむ、名前通り〈マスター〉の支援特化ガードナーって感じかな。まあ、ラーニングする魔法次第では分からないけど。……………あと、私とお兄ちゃん以外には自分の〈エンブリオ〉の能力は教えない様だね。弱点が分かっちゃうと対策を取られるからね」

『この場合の弱点は僕が狙われる事かな。僕自身のステータスはMP特化ではAGIが少し高いぐらい、HP・STR・ENDは壊滅的だから直接戦闘は出来ないしね。……………まだ魔法もラーニング

出来てないから、高いMPも宝の持ち腐れだし』

そうなんだよねー。普通ガードナー系の〈エンブリオ〉は〈マスター〉を守る能力を持つことが多いんだけど、ミュウちゃんの「フェアリー」は〈マスター〉が前に出て〈エンブリオ〉が後方から支援するタイプみたいだし。

「大丈夫なのですよ、フェイ！」 これでも腕っぷしには自信があるのです!!?」

『……………えーつと、フェイ”って僕のこと?』

「はい！ 愛称なのです！ ……………私にフェイを守りますから、フェイも私を助けてほしいのです」

『! ……………分かったよマスター、僕はキミを援ける為の〈エンブリオ〉だからね。 ……………だからこれからよろしくね “ミュウ”』

「はいなのです!!?」

……………うん、二人共仲が良くて何よりだよ。これなら問題なさそうだね。

私もお兄ちゃんも〈エンブリオ〉と意思疎通なんて出来ないからちよつと羨ましいかも。

「魔法のラーニングに関しては問題無いよ。お兄ちゃんが大量の魔法系ジョブに就けばいいだけだし、すぐに色々な魔法を使える様になるよー!」

「そうなのです！ 兄様なら何とかしてくれるのです!」

『……………じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな』

「それじゃあ王都でお兄ちゃんと合流しようか!」

そうして、私達は新しい仲間のフェイちゃんを連れて王都に戻って行った。



## 兄妹の遊戯の話

□王都アルテア グラディエーター 【闘士】レント

「というわけで、こちらがミュウちゃんの〈エンブリオ〉のフェイちゃんです！」

「なのです！」

『初めましてお兄さん。僕はミュウの〈エンブリオ〉でTYPEガードナーの「支援妖精 フェアリー」、愛称はフェイと言います。よろしくね』

「ああ、よろしく。……………それとミカ、これがお前の分の報酬だ」「ありがとー、お兄ちゃん。……………つて随分多いね」

あれから、二人と別れて果樹園の経営者に会いに行った俺は、そこで<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>UB Mを足止めして避難民を無事に王都まで送り届けた事を手放しに感謝された。

さらにクエストの報酬にもかなり色を付けて貰った。曰く、〈UB M〉の襲撃を受けたのに被害が驚く程少なかった事に対するお礼を込めた分とのこと。これで今回の損害の補填も十分出来るだろう。

ちなみに月夜さんを初めとする〈月世の会〉の活躍で、果樹園の方にも被害はほとんど無かったので近く運営を再開出来るらしい。

……………その諸々が終わったあと、ミカとミュウちゃんに合流したのだが……………

「それでミュウちゃんの〈エンブリオ〉……………フェイのラーニングスキルの為に魔法を見せてほしいと」

「そうなのです、兄様。……………お願い出来るでしょうか？」

『僕からも頼む、今のままじゃ僕はミュウの力にはなれないんだ』

「……………別に魔法を使うことは構わないぞ。俺もスキルレベルは上げたいからな」

正直、色々なジョブに就き過ぎたせいで、個々のスキルレベルがあまり上がっていないからな。

……………それにデンドロの魔法は結構応用が利きそうだし、ジョブを魔法系で埋めるのもありだろう。物理的なステータスは「ヴァルシ

オン」で補えるし、上級職の魔法なら範囲攻撃も出来るみたいだからレベル上げも捗るだろう。

「それで次はどこに行くんだ？」

「んー、特に捻らずに次の〈ヘノズ森林〉でいいんじゃないかな。ミュウちゃんもそれでいい？」

「はい！ 早く強くなって借金を返すのです！」

「別に無利子・無期限だからそんなに焦らなくてもいいよ。お金もこの世界でなら亜竜級モンスターでも狩ればすぐに稼げるし」

確かに亜竜級以上のモンスターを狩ると出てくる【宝櫃】の中身を売れば、纏まった金が入るがな。

……………とりあえず、ミュウちゃんもやる気みたいだし〈ヘノズ森林〉に行こうか。



「疾ッ！ 《ストレート》！ 《アッパー》！」

「…………《ファイアーボール》…………《マッドクラップ》」

『『G A A A !! ?』』

ミュウちゃんの放ったパンチが【テイルウルフ】の鼻先に直撃し、それに怯んだ相手にアクティブスキルの連続攻撃が叩き込まれ相手は光の塵になった。【拳士】<sup>ボクサー</sup>の初期スキルは威力が低い代わりに、出が早く連続で使えるようだ。

そこに死角からもう一体が襲いかかってくるが、俺が放った火球に焼き尽くされた。さらに群れの他の相手を地属性魔法で足止めする。

『『G A A A !』』

『『ミュウ！ 《ウインドカッター》！』』

「ナイスです、フェイ！ 《ジャブ》！ 《ストレート》！」

俺が足止めしなかった【テイルウルフ】二匹の内一匹ををフェイがラーニングした風魔法で切り裂き、もう一体にミュウちゃんの連続攻撃が突き刺さった。

うん、割と早めにラーニングが成功したのは良かったな。覚えた魔

法はまだ一つだけだが、基本的に乱数に対しては試行回数で解決出来るし……リアルラック？ 知らない子ですね。

「二人の連携もいい感じだしな《ホワイトランス》」

『G A A A !!?』

そう言いながら、足止めされている相手の一匹に《詠唱》付きの魔法を放って倒しておく。

………そういえば《詠唱》とかも魔法系アクティブスキルに含まれるのかね？ 今後はもう少し多用してみるか。

「よし！ 残りも倒すのです!!?」

『分かったよ、ミュウ！』

「気をつけてなー、とりあえず痺れておけ《エレクトリカルスタン》」  
残りの敵にミュウちゃんが突っ込んで行くので、その援護として相手を【麻痺】させる雷属性魔法を《詠唱》付きで撃っておく。

………【闘士】がカンストしたら、次は【付与術師】にするか。その方がウチの妹達のゴリゴリの前衛二人援護もしやすくなるだろうし、フェイのラーニング先としても合っているだろう。

◇

「ふうー、やっとかたずいたのです」

「はい、お疲れ様。じゃあ回復するぞ《ファーストヒール》」

あれから【テイルルルフ】の群れを倒し終わった俺は、負傷したミュウちゃんに回復魔法をかけておいた。

『あつ、今新しいスキルを覚えたみたい……《詠唱》だつて』

「すごいのですフェイ！ これで二つ目なのです！」

「ふーん、やつぱり《詠唱》とかも魔法系スキルに含まれるのか」

しかし、この短時間で二つ目とは………いや、乱数とは偏るモノだしな！ よくある事だし!!?」

「はーい、お兄ちゃんとミュウちゃんとフェイちゃんおつかれ〜」

「なんだミカ、居たのか」

「居たよ！ さつきからずっと！ 大体、私が参加したら一瞬で終

わっちやうでしよ!?!?」

ちなみに、ミカはさつきからずっと後方で周辺の警戒をしていた。こいつの戦い方は加減とか出来ないからな。

「冗談だ、あんまり怒るな………ん?」

「どうしたのです、兄様?」

「だれか来るみたいだね」

先程から発動させていた索敵系スキルに反応があった。この反応は人間、数は四人かな。

まあ、ミカが特に警戒していないところを見ると、こちらへの悪意は無いみたいだがな。

………そして現れたのは、

「おー、レントくんにミカちゃんやん。久しぶりー……でも無いな。アツチじゃ一日ぶりぐらいやし」

以前、果樹園で別れて以来になる月夜さんが、そのへエンブリオのカグヤさん、秘書の月影さん、あと初対面の白髪の中学生ぐらいの女の子を引き連れていたのだった。



□へノズ森林〉【戦棍鬼】メイス・オーガミカ

私達が森の中で出会ったのは、へ月世の会〳のオーナー月夜さん御一行だった。

「先日ぶりですね、月夜さん。それにカグヤさんと月影さんも………とところで、皆さんはここで何を?」

「今日始めたばかり初心者チュートリアルや。うちのクランはその教養上みんな現実視やからね、初日の戦闘だけは他のメンバーで面倒を見ることになつとるんや。デンドロで戦闘がしたくても、実際にモンスターと戦えるかどうかは分からんからな。………そつちもそうやろ?」

「まあそんな感じだね。親戚の子が今日デンドロを始めたから面倒を見てるんだよ」

「はじめまして、レント兄様とミカ姉様の従妹のミュウなのです。よろしくお願いするのです。こっちは私のへエンブリオのフェイなのです」

『ミュウのへエンブリオ、TYPEガードナーのフェイだよ。よろしくね』

そう言つて、ミュウちゃん達は月夜さん達に自己紹介をした………まあ、ミュウちゃんには面倒を見るとか殆どいらなかったけどね。

「これはぐ丁寧にもな。うちは扶桑月夜、克蘭へ月世の会のカグヤと秘書の影やん、そしてこの子が克蘭メンバーでミュウちゃんと同じ今日始めたばっかの葵ちゃんや、仲良うしたってや」

「月夜のへエンブリオ、TYPEメイデンwithワールドのカグヤよ、よろしくお願いするわね」

「秘書の月影永仕郎と申します」

「……日向葵です………」

そうやって、向こうも自己紹介を返してくれた。

………とところで、さつきからずっと葵ちゃんがミュウちゃんの方………正確にはそのへエンブリオのフェイちゃんの方を見てるんだけど………」

「？ フェイがどうかしたのです？」

「………可愛い………プリキュアの妖精みたい………」

「!!? ……分かるのですか!!?」

「………毎週日曜午前八時半からの三十分を楽しみに日々を生きている………」

「………同士なのです!!?」

ミュウちゃんと葵ちゃんはガツチリと握手をして、そのままプリキュアの事について語り合い始めた。

………私もプリキュアは嫌いじゃないけど、さすがに会話がデープ過ぎてついていけないかなあ。

なんか今も葵ちゃんが「………妖精型ガードナー羨ましい。私の

は愛でるとか出来ないし……」とか言ってるし、ミュウちゃんも「じゃあフェイを触ってみるのです?」と返してるね。

それでミュウちゃんがフェイちゃんを葵ちゃんに差し出した………なんか物凄いモフモフされているね。

「………まあ、友達が増えるのは良いことやしな」

「………そうですね」

その光景をお兄ちゃんや月夜さん達も生暖かい目で見てるね………まあ、仲良くなれたのは良いことだと思うよ、うん。

「………さて、とりあえずこの前はうちのクランメンバーを助けてくれてありがとうな。スズキ達も礼を言っとったでー」

「いえ、俺達は自分のクエストを達成しただけですから。それに、へ月世の会への皆さんが居なければティアンの犠牲をゼロにする事は出来なかつたでしょうし」

「それでも、うちのクランメンバーを二人が助けてくれた事は変わりないからな。礼は言っとくでー」

やっぱり、月夜さんはクランオーナーとしては凄く良い人だよね………よし。

「それじゃあ月夜さん、私達とフレンド登録しませんか? クランには入れないですけど、友達にはなれると思います!」

「………ええよ、じゃあフレンド登録しよかー」

こうして私達と月夜さん達は<sup>フレンド</sup>友達になった。

………ちなみに月影さんからは「お三方、今回は本当にありがとうございました」と改めて礼を言われたりもした。

「それで、これからミカちゃん達はどうするん? うちらはもう王都に帰ろうと思うとるんやけど」

「そうですね………私達はまだ少し狩りを続けようと思います。それで良いよね、お兄ちゃん、ミュウちゃん?」

「ああ………お前はまだ暴れ足りないだろうからな」

「私も良いですよ、姉様」

そう! 正直さつきからずつと見ていただけだったからフラストレーションが溜まってるんだよ!!?

「そーかー、じゃあここでお別れやなー。……………ほらー、葵ちゃんもいつまでもモフつとらんとそろそろ返したり」

「……………分かった……………」

そう言つて、葵ちゃんはモフられ続けてへ口へ口になったフェイちゃんをミュウちゃんに返した。

……………フェイちゃん大丈夫かな？

「それじゃあまたなー。借りはいつか返すでー」

「……………またね」

「はい！ 今度は一緒に遊ぼうなのです!!？」

そうして、私達と月夜さん達は別れたのだった。

「さてー！ これからは私も暴れさせてもらおうよ！ ちよつと色々溜まってるし!!？」

「好きにしろ。……………ミュウちゃんは俺の側を離れないように」

「はいなのです、兄様」

さて、じゃあ森の奥の方のレベルが高い狩場でひと暴れしようか!!  
?



「ふうー、大分スッキリしたね！」

「……………そりゃあ、あれだけ暴れればな……………」

「姉様凄かったのです。モンスター達が次々と消し飛んでいったのです」

「それにドロップも良いのが落ちたよ！ ……………お兄ちゃんが探してた【適職診断カタログ】とかね！」

「……………ああ、そうだな……………」

いやー、やっぱり派手に暴れるのは気持ちいいね！ 【戦棍鬼】のスキルもいくつか試して見たけど、なかなか使えたり。

……………デスペナからのモヤモヤした気持ちも大分晴れたよ。

「それでミュウちゃん。初めてのデンドロは楽しかった？」

「はいなのです！ 新しい友達も出来ましたし……………何より兄様と

姉様の凄いところが見れたのが良かったです」

「まあ、モンスターをあれだけ消し飛ばしていればな」

そうお兄ちゃんが言うと、ミュウちゃんは首を横に振った。

「それもそうなのですがちよつと違うのです。……………兄様と姉様はこの世界で沢山の人と出会っていて、その人たちと仲良くなったり助けたりしているところが凄いと思ったのです！」

「っー」

……………そっか、ミュウちゃんはそんな風に思ってくれたんだ……………なら、色々頑張つて来た甲斐があったかな。

気づいたら、私はミュウちゃんを思いっきり抱きしめていた。

「ありがとうね、ミュウちゃん。……………お陰でモヤモヤして気持ちも晴れたよ」

「……………はいなのです……………」

……………やっぱり、ちよつとお兄ちゃんが目の前で死んだ事には少し思うところがあったんだけど……………もう大丈夫かな。

「そう言ってくれるなら、俺もハードを買っておいた甲斐があったかな。……………ありがとう、ミュウちゃん。そして、改めてようこそへ Infinite Dendrogramへ、これから一緒にこのゲームを楽しもう」

「……………はいなのです!!？」

こうして、私達のへ Infinite Dendrogramへに新しい仲間が加わったのだった。



## 三兄妹のデンドロ日和 兄の新ジョブ

□王都アルテア 【魔石職人】ジエム・マイスター レント

「というわけで、『魔石職人』に就いてみただぞ」

「いやちよつと待ってお兄ちゃん、いきなり過ぎてわけわかんないよ。大体この前これから魔法系のジョブに就くって言ってなかったっけ？」

「広義の意味で『魔石職人』も魔法系と言えなくもないだろう。それに戦闘中は【付与術師】エンチャンターとかをメインジョブにしているしな」

「ちゃんと戦闘中はフェイのラーニングも兼ねて、各種魔法で前衛<sup>妹</sup>二人を支援している。」

「そのおかげで俺の魔法系スキルのレベルも上がったし、フェイもかなりの数の魔法をラーニング出来たしな。」

「……………兄様、姉様はどうして生産職に就いたのかを聞きたいのだと思いますよ」

「そうだよ！ お兄ちゃん！」

「ふむ、その理由については単純に俺は色々ジョブに就けるから生産職にも就いてみたかったというのが一つ。もう一つは資金稼ぎだな……………最近は何マスターの数も増えて実力も上がったから、討伐系のクエストも受けにくくなったからな」

「実際、何マスター達にとって各種討伐系クエストは大人気なので競争率も当然高い。」

「まあ、ゲームの中でもお使いやお手伝いなどの地味なクエストをやりたいがる人は少ないだろうしな。」

「他にも、最近は何マスター達があまりにも多くのモンスターを狩り過ぎたために、モンスターの数が大幅に減少した狩場もあると聞くので、狩り以外にも収入源があった方がいいと考えたのだ。」

「うーん、確かに最近は何狩りもやり辛くなったよねー。アイラさんもモンスターの大幅な減少で狩り場が大分変わってきたって言ったた

し」

「うむ、おかげででミュウちゃんのレベリングもちよつと遅めだ」

「そうなのですか？」

「まあ、私達の時と比べるとねー」

特に王都周辺の中級者用狩場のモンスター減少が一番酷いな。狩場に行ったらへマスター達にモンスターを求めてひしめいていた、なんて事もあったしな。

「この世界にはちゃんと生態系があるからねー。モンスターがリポツプするのは神造ダンジョン内だけだし」

「そうだな……………やはりミュウちゃん用の【墓標迷宮探索許可証】はあるかな？ 市場価格は十万里ル程だし買えなくはないが…………」

「あうう……………また借金が増えるのです…………」

以前貸した装備品の代金も返し終わったばかりだから……………次の王国の【墓標迷宮探索許可証】が手に入るクエストはいつだったかな？

そんな事を考えていると、暗めになった空気を変える為にフェイが話しかけてきた。

『そういえば、お兄さんはどうして生産職の中から【魔石職人】を選んだんだい？』

「ああ、この世界の生産職を色々調べてみたところ、俺のへエンブリオと一番シナジーがありそうだったからだな」

「えっ！ お兄ちゃんジョブのシナジーなんて考えてたの？！？」

失礼な、これでも各種ジョブの事はちゃんと調べているんだが……………まあ、以前闇雲に色々取った事も確かにあったが……………。

「ゴホン！……………【魔石職人】のジョブは文字通り各種【ジェム】を作る為のジョブだ」

「あの兄様、ジェムとはなんなのですか？」

「【ジェム】というのは簡単に言えば、魔法を発動出来る使い捨てのマジックアイテムだな。中に込めておいた魔法を一度だけ使う事が出来る」

「それは知ってるけど……………それがどうシナジーするの？」

「まずこの【ジエム】の値段なんだが、下級職で覚えられる魔法なら千  
リル程度なんだが……………上級職の、それも奥義クラスの魔法だと数  
十万里ルはするんだよな」

「……………どうしてそんなに値段が違うのです？」

「これに関しては【魔石職人】のスキル《魔石生成》が、自分が覚えて  
いる魔法を【ジエム】に込めるスキルなのが原因なんだよな」

要するに下級の魔法のジエムを作りたければ【魔術師<sup>メイジ</sup>】などの魔法  
系下級職と【魔石職人】に就いていけば良い。だが上級職の奥義が込  
められたジエムを作りたければ、当然自分がその奥義を使える必要が  
ある。

さらにデンドロの生産系スキルは『生産物をDEXやスキルレベル  
などを基準にして、何%かの確率で作ることが出来る』という感じの  
ものであり、強力なアイテムを作る場合はその確率も低くなってい  
く。

その確率を上げたければ下級職の【魔石職人】だけでなく上級職の  
ハイ・ジエム・マイスター  
【高位魔石職人】に就き、生産スキルのレベルを上げる必要も出て来る  
のだ。

……………そして、この世界の人間が就ける上級職の数は基本的に最  
大二つである。それにティアンには適正とレベル上限という問題も  
ある。

『成る程ね、上級職の奥義の【ジエム】が高いのは、そもそも作れる人  
間が少ないからか』

「そういう事。供給が少なく需要が多ければ値段が跳ね上がる、とい  
う当たり前の話だ。まあ【高位魔石職人】になると他人の魔法を【ジエ  
ム】に込める事も出来るらしいが……………人手や成功確率の問題で数  
を作る事は出来ないみたいだしな」

「……………でも、お兄ちゃんの必殺スキルなら複数の魔法系上級職と  
【高位魔石職人】に就けるから、そのあたりの問題は解決出来る」と

「理論上はな。……………まあ、上級職の奥義が込められた【ジエム】を  
一つ作るにしても数万リルは必要らしいから、そう上手くはいかない  
だろうがな」

それでもお金を稼ぐことは出来るだろうし、俺はメインジョブに依らずにジョブスキルを使えるからジョブクエストでレベル上げも出来る。

「なので、これからは狩りをしていない時には生産活動に勤しむ予定だからよろしく。生産スキルのレベルも上げたいし」

「……………まあ、そういう事なら分かったよ」

「分かったのです」

「それじゃあ、俺はこれから魔石職人ギルドで以前受けたクエスト達成の報告と、新しいジョブクエストを受けに行くから」

「いつの間に……………じゃあミュウちゃん、私達はどうする?」

「うーん……………この王都の事をまだ詳しく知らないので、観光とかを試してみたいのです」

「分かったよ。この王都アルテアのお勧めスポットを案内してあげるよ!」

そうして俺はミカ達と別れて、魔石職人ギルドに向かったのだった。



「さて、とりあえず魔術師ギルドに着いたな。……………しかし、本当に大きいな」

あれからミカ達と別れた俺は王都アルテアの魔術師ギルドに来ていた。

ちなみに魔石職人ギルドはこの魔術師ギルドの一角に存在しており、この魔術師ギルドは司祭系以外の魔法系のギルドを一纏めにしたものらしい。

王都には「魔法最強」とも呼ばれる「大賢者」がいる事もあって、この王都アルテアの魔術師ギルドは王国最大の魔術師ギルドでもあるようだ。

……………そんな事を考えている内に魔石職人ギルドに着いた。他の場所と比べるとやや人は少ないが、王国最大の魔術師ギルドだけ

あつてそれなりの人がおり、様々な魔石の販売も行われていた。

「クエスト達成の報告にきました。こちらが納品する魔石です」

「はい……………確かに受け取りました。こちらが報酬になります」

そうして、俺は受付嬢さんから報酬を受け取ったが……………やっぱ  
り少ないな。

……………今回、俺が受けたクエストはギルドから素材を貰い、その  
素材に指定された下級の魔法を込めるというものである。そして報  
酬は納品した【ジエム】の分だけ払われ、生産に失敗し素材がロスト  
した場合はそこから差し引かれる。

まだスキルレベルが低く、生産に失敗した数も多い俺では報酬も少  
ないという訳である……………まあ、このクエスト自体が新人【魔石職  
人】を鍛える為のクエストなので差し引かれる額は少なめだが。

それに【ヴァルシオン】の補正や五百を超えるレベルによるDEX  
値から、普通の新人【魔石職人】と比べると失敗する回数も少ないし。  
「次はこのクエストを受けます」

「かしこまりました。……………こちらが素材になります、指定された  
期限までに納品してください」

さてとクエストも受けたしギルドの作業場を借り「おお、レントの  
坊や来ていたのかい」この声は……………。

「こんにちはミレーヌさん」

「ああ、こんにちは。レントの坊やはジョブクエストかい？」

「ええ、今クエストを受けたところですよ」

彼女はミレーヌさん、この魔石職人ギルドのギルドマスターであ  
る。俺が【魔石職人】に転職しに来た時に偶々出会い、以後何故か俺  
の事を気にかけてくれている。

曰く、『今、各ギルドで優秀なへマスターの取り込み合戦が行われ  
ているから唾をつけておく事にしたのさ。それにアンタの事はマ  
リイから聞いていたし』との事。どうもマリイさんとは昔からの友人  
らしい。

「それで、要件は何ですか？へマスターの困い方なら以前に言いま  
したけど」

「ああ、『へマスター』は自由だから下手に束縛するよりも高い報酬で釣った方がいい』って話は分かったし、実際役に立ったけどねえ………そもそも【魔石職人】を志すへマスター」が少ないんだよ」  
「……………まあ、へマスター」の多くが戦闘型ですしね。それに【魔石職人】自体【魔術師<sup>メイジ</sup>】系の副業みたいなイメージがありますし」  
「実際、ウチの人員も不足気味でねえ。特に上級職の魔法の【ジエム】は常に需要と供給が釣り合っていない状態さ。他の魔術師系や生産系ギルドがへマスター」を上手く取り込んでやってる話を聞いたからね、うちもそれにあやかりたいんだよ。……………それで、何か良いアイデアはないかい？」

また無理難題をおっしやる……………まあ、

「へマスター」の目を【魔石職人】に向けさせる手はありますけどね」  
「あるのかい!?」……………正直言つて世間話のつもりだったんだけど」

「多くのへマスター」は「強さ」を求めていますし、魔法をノーコスト・ノータイムで放てる【ジエム】は強いアイテムですからやり様は有ります。……………最近流行りの『最強ビルド論』に乗っかりましょう」  
デンドロ発売から現実で約一カ月、今へマスター」達の間では「どの様なジョブビルドが最強か」という『最強ビルド論』が巻き起こっていた。

基本的にへマスター」が就けるジョブ数は下級職六つ・上級職二つなので、そういう論争が起きるのはゲームなら当たり前の事であり……………そこでこう囁けば良い。

『『大量の【ジエム】を事前に作っておいて、戦闘時にそれらを投げまくれば強い』とね。強いて言うなら「【ジエム】生成貯蔵連打理論」ですかね」

「成る程、そうしてへマスター」達の間で【ジエム】を使うのが流行れば、ここに来るへマスター」も増えるか」

「はい。……………ただし、そう遠からずに廃れる理論でしょうから早めに広める事をお勧めします」

この理論の欠点は、限りあるジョブ枠を生成職で埋める為にステー

タスが低くなる事である。

合計レベル五百

うちの妹達の様な前衛系の「マスター」ならカンストすればAGIが五千ぐら音速いになる事も多いだろうし、そうなれば投げる前に潰される事になるだろう。

「……………そもそも上級職までの『最強ビルド論』なんてモノは、千差万別の「エンブリオ」や規格外な超級職があるデンドロではあまり意味のないものなんだがな。」

「……………そう分かっていて広めるのかい？」

「別に嘘はついていませんし、AGI差やコストパフォーマンスをどうにか出来る手段があれば十分強い理論ですから。それにその理論を聞いてどうするのかは各々の自由です」

「まあ、確かにそうだね。……………【魔石職人】や【ジエム】の宣伝文句ぐらいにはなるか」

実際、こちらからはそういうビルド論もあると提案するだけだしな。

それにミュウちゃんのフェイみたいな魔法ラーニング系の「エンブリオ」とかなら相性も良いだろうし、そういう「マスター」なら既に思いついている者もいるだろう。

「ま、今回の話も色々参考にさせて貰うよ。あんたも複数の上級職の魔法の【ジエム】を生産出来る様に頑張りな」

「……………俺の「エンブリオ」の事は話していませんよね？」

「ん？ ああ、あんた複数のギルドで様々なジョブに就いて、いくつものジョブクエストを受けている「マスター」がいるってそれなりに有名だよ。その上、わざわざ魔石職人ギルドに来た事も考えれば予測はつくさね。……………あんたなら超級職にもすぐに就けるんじゃないかい？」

「……………下級職や上級職ならともかく、超級職に就くのは非常に難しいですよ」

「ふーん……………まずは【高位魔石職人】になれる様に頑張りな、期待してるよ」

そう言って、ミレーヌさんは去っていった。

……俺もさつきとクエストをこなして、スキルレベルを上げようか。生産用のオリジナルスキルも試したいし。

◇

あの後、クエストの「魔石」を生産した俺は休憩も兼ねて考え事をしながら王都をぶらついていた。

(本当にミレーヌさんは鋭いな、流石はギルドマスターってところか。お陰で危うく「ルー」の必殺スキル……の妹達にも明かしていない最後のデメリットがバレるかと思ったよ。……この世界には《真偽判定》があるから隠し事にも気を使うな)

そうして俺はステータスウインドウを開き、「ルー」の必殺スキルの効果を見た。

《我は万の職能ルに通ず》：

20個の下級職と15個の上級職に追加で就く事が出来る様になり、就いた事のあるジョブに由来する超級職に就く事が出来なくなる。

※この「エンブリオ」の以降の進化時に新しいスキルを取得出来なくなる。

※この「エンブリオ」のステータス補正は0になる。  
パッシブスキル

(ミカへの説明の時も※マークの部分注意書きに二つのデメリットが書かれていると言ったが、本文にデメリットが書かれていないとは言つて無いしな) 嘘は言っていない、本当のことも言つて無いけど、という《真偽判定》を誤魔化す手法である。

……ミカの直感相手ではあまり意味が無いが、アレは危険感知がメインだから明かしても良いデメリットを話すことで誤魔化せた。(……万の職能に通じてても一芸を極める事が出来ない、というのは俺の「エンブリオ」らしくて中々皮肉が効いているな)

そう、やや自嘲気味な事を考えてみる……我ながら面倒なパーソナルをしているよ。



(うちの妹二人の才能ならそう遠からずに超級職に就くことが出来るだろう。その時にあまり気を使われたく無いしな。……………天災児達の前で「頼れるお兄ちゃん」でいるのも大変だ。……………とりあえずジョブに由来しない超級職でも探しますかね)

まあ、自分でも下らない意地だとは思うけど……………やっぱり、あの二人の前では兄として振る舞いたいんだよな。

## 妹達と人探し

□王都アルテア 【戦棍鬼<sup>メイス・オーガ</sup>】ミカ

あの後、お兄ちゃんと別れた私とミュウちゃん達は王都アルテアの様々な所を見て回っていた。

「この王都は本当に活気がありますね、姉様」

「まあ、このアルター王国の首都だからね」

『騎士の国と言うだけあって巡回している騎士もよく見るね』

ミュウちゃん達も中々楽しんでくれているみたいだ。この王都アルテアはまさにファンタジーな街並みだから見応えがあるしね。

それに、騎士団の人達が定期的に見回っているみたいだから治安もいいし、過ごしやすい所だよ。

……………そうやって、しばらくぶらついていると見覚えのある人に出会った。

「あつ！ 葵ちゃんなのです！ 久しぶりなのです」

「……………ミュウちゃん、久しぶり……………」

そこにいたのはミュウちゃんの同好の士……………もといフレンドひなたあおいの日向葵ちゃんだった。

そして、その隣には五歳ぐらいの幼女と高校生ぐらいの女騎士がいた……………二人共左手に紋章が無いから多分ティアンだね。

「ところで一体何をしているのです？ そちらの二人は？」

「……………今はこの子……………レファイちゃんのお姉さんを探している。

……………コツチの女性は聞き込みをしていて、事情を話したら手伝ってくれた……………」

成る程、人探しの最中だったんだね。するとと女騎士が葵ちゃんに話しかけてきた。

「あの、葵さんこちらの方達は…………？」

「……………この二人は私のフレンドの〈マスター〉、信頼出来る……………」

「初めましてミュウと言うのです」

『僕はフェイ、ミュウの〈エンプリオ〉だよ』

「ミュウちゃんの従姉のミカです」

「そうですか、お二人ともへマスター〜なんですね……………申し遅れました、私は第一騎士団所属の騎士リリアーナ・グランドリアといいます」



あれから、彼女達……特にレフィちゃんの休憩を兼ねてその辺りの喫茶店で詳しい話を聞く事になった。

まず、急に逸れたお姉さん——名前はリファさんと言うらしい——を探していたレフィちゃんを、たまたま葵ちゃんが見つけて一緒に探す事になったらしい。

そして、とりあえず近くを巡回していた騎士達に聞き込みをしたらしくて、その中の一人のリリアーナさんが人探しの為に同行する事になった様だ。

ちなみに、他の騎士達も手分けして探しているとのこと。

「成る程、事情は大体分かったのです、そういうことなら私達も協力するのですよ。……………何より、プリキュアを目指す者として困っている子を放つては置けないのです！」

「……………流石は同士、そう言ってくれると思っていた……………」

そうして二人は硬い握手を交わした……………まあ、手伝うことに関しては構わないけどさ。

……………それに遠い勘にも少し反応があったし。

【クエスト【探し人——レフィ・シユタイン 難易度：四】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

協力を申し入れるとそんなアナウンスがあった……………難易度が四ねえ。

「ちよつとりリアーナさん、こっちに」

「何でしょうか？」

私はミュウちゃん達から少し離れたところにリリアーナさんと呼んだ。

「さつき受けたクエストの難易度が四だったんだけど……これは明らかに高すぎるよね。普通の人探しの依頼なら二以上にはならないだろうし……何か事情があるんですか？」

「……それをどうして私に？」

「強いて言うなら勘です。……あと、迷子の案内にしては騎士団の動きが少し大仰かなと思いました。……まあ、話す気が無いならそれでも良いですけど」

「……分かりました、お話します」

リリアーナさん曰く、最近王都で行方不明者が何件か出ており王都警備担当の第一騎士団はその調査をしていたらしい。

この件も行方不明事件に関わりがある可能性があるとして、既に騎士団の方で調査が進められているようだ。

また、リリアーナさんがレフィちゃんについているのは、人探しの手伝いの他にも彼女が二次被害にあって行方不明にならない様にする護衛も兼ねているとのこと。

「ふーん、成る程ねー。……だから難易度が四なのか」

「はい……騎士団にいる捜索に特化したジョブの持ち主でも行方不明者は見つかっていません」

ただの人探しにはならないみたいだね……とりあえずレフィちゃんに少し話を聞いてみるかな。

「レフィちゃん、お姉さんが居なくなった時のことを詳しく聞かせてくれないかな？」

「……私とお姉ちゃんが買い物に行っている時、みんながよく使っている路地裏で近道しようとしたの。……お姉ちゃんが路地裏に入って姿が見えなくなつて……あとを追いかけたらいなくなつていたの……」

「……そして、そこに私が通りかかって今に至るという感じ……」  
ふーん……じゃあ次はリリアーナさんに聞いてみよう。

「探索系のジョブの持ち主でも見つけられなかったという事ですけど、具体的にどんな感じだったか分かりますか？」

「途中までは追跡出来ても、あるところから反応が途切れるという話

らしいです」

ほーん、そんな感じなのか……………。

「ふーん、成る程ね」

「何か分かったんですか？」

「いや？ 全然さっぱり」

そう言うのと、私以外の全員がずっこけた……………しようがないじゃん、こう言う推理とかはどちらかと言うとお兄ちゃんの担当だし。

そもそも、私はミステリものには致命的に向いてないし。

「……………あの意味深な質問は一体……………」

「単に状況を確認しただけだよ？」

「姉様……………どうしてリファさんが消えたのとかは解らないのですか？」

「検討もつかないね。……………それに方法を考えるのはあんまり意味がないだろうし」

この世界にあるジョブスキルやエンブリオの事などを考えると、一人を消す方法なんていくらでもあるだろうしね。

どちらかと言うと動機の方を考えるべきだと思うけど……………今回は情報が少な過ぎてどうしようもないし。

……………まあ、私には特に問題にならないけど。

「じゃあ、お姉さんを探しに行こうか」

「いや、さつき何もわからないと言ったじゃ無いですか。それとも闇雲に探すんですか？」

「大丈夫だよリリアーナさん。確かに行方不明事件の事とかお姉さんの事とかは分からないけど……………これからどうすれば良いのかだけは解るからね」

やっぱり私にミステリものは向いてないね……………何せ、醍醐味の過程が分からず答えだけが解ってしまうのだから。

◇

そうして私達はお姉さんが姿を消した路地裏に来ており、そこには

二人の騎士が見張りをしていた。

「リリアーナさん、あの騎士達は？」

「あれはリヒト団長の指示です。行方不明者が最後に目撃された地点に見張りを立たせておくと。あと必ず二人以上で行動しろとも」

へー、リヒト団長かアイラさんのお父さんで、デンドロ初日に私が出会った騎士何だよね。あれ以来会う機会がなかったけど、本当に優秀みたいだね。

……………見張りは行方不明者の姿が見えなくなったただけなのを想定して、二人以上での行動は騎士達が消えるのを防ぐ為かな？

「お疲れ様です。何か変化はありましたか？」

「リリアーナ殿。いえ、何も変わりはありませんでした……………そちらの方達は？」

「行方不明になったこの子のお姉さんを探しているへマスターです。というわけでこの路地裏を調べさせて貰いますね。あ！レフィちゃんはここでこの騎士の人達と一緒にいてね……………大丈夫！お姉さんが必ず私達が連れて帰ってくるから！……………そう言うわけでこの子の事をよろしくお願いしますね。じゃあ行こう」

「ええ……………」

とりあえず色々まくし立てて騎士達を煙に巻きつつ、レフィちゃんを彼等に預けて路地裏に入って行く……………私の勘は説明が難しいし、ここは巻きで行こう。

すると、他の皆さんも急いで後を追ってきた。

「ミカさん！ 一体どういう事何ですか、説明して下さい！」

「ごめんねー、リリアーナさん。私の勘はこうすればいいって解るだけだから説明が難しくして」

「勘？ それがあなたのへエンブリオへ何ですか？」

「いや、これは生まれつき持っているものですよつと。……………ああ、みんなも戦闘準備をしないとね、多分荒事になるから」

「……………お願いなのです、姉様の言う通りにして下さい。……………姉様の勘は必ずあたるのです」

そうして私は《着衣交換》で戦闘用の装備に切り替え、ミュウちゃ

んも戦闘準備をし始めた。

……………それを見たリリアーナさんと葵ちゃんも準備してくれたね。

「さて、最近解放された『ドラグテイル』の第二スキルのお披露目と行こうか。……………《竜意圏》！」

そのスキルを起動すると、私を中心とした半径約二百メートル四方の物体の位置が手に取る様に分かった。

……………これが『ドラグテイル』の第二スキル《竜意圏》の効果、『自身を中心とする装着者の合計レベル×1メートルの範囲内の物体の位置を把握』する能力である。

まあ、物体の位置を把握することがメインのスキルで、識別能力は生物か非生物かを区別出来るぐらいなのだが……………今回は例外みたい。

「ふーん、成る程こうなるのか……………その壁だね」

本来なら物体の正確な形状すら把握出来るスキルなのだが……………今は路地の壁の一部分から僅かにノイズが走っている様に感じる。

……………そして、私は『ギガス』を担ぎながらその場所に向かっていった。

「ああ、三人共ちよつと離れててねー、危ないから」

「一体何をやる気なんですか、ミカさん？」

「んー、私は扉の鍵を持っていないから、手っ取り早くマスターキーで開けちやおうかなつとね……………《チャージインパクト》!!？」

ノイズが走っている壁に、私が放ったチャージ時間に応じて威力を引き上げる戦棍士系統のスキルが突き刺さり……………その壁に重なる様にして存在していた特殊な空間が砕け散った。

……………《マスター》の力で無理矢理こじ開けたからマスターキー……………なんちゃって。

「なっー！」

「……………どわあ!?？」

「よっつと」

そして、その砕けた空間から五人の男性と一人の眠らされて縛られた女性が飛び出てきた……………あの女性がリファさんだね。

私はすぐにリファさんをキャッチして、男達から距離を取ってみんなに合流した。

「はい、葵ちゃん。お探しのお姉さんだよ、ちよつと預かっておいて」  
「……………は、はい……………」

「それよりミカさん！ あの男達は……………!?!?」

「んー？ 多分、王都連続誘拐事件の主犯とかじゃない？」

正直言つて細かいところは解らないけど……………まあ、縛られた女性と一緒に居たんだからギルティでしょ。

あと、出て来た男達のうち二人の左手には紋章があつた……………  
へマスターへ二人、ティアン三人か。

そんな事を考えていると、へマスターへの一人が喚きだした。

「クソツ！ どうして俺の「アガルタ」が!?!?」

「空間を隔絶させるへエンブリオへがあるなら、空間を破壊するへエンブリオへがあつても不思議じゃないでしょー」

まあ、私も【ギガース】が空間まで破壊出来る事は今初めて知つたけどね。

「さてと、大人しく無抵抗で捕まるなら酷いことはしないよ？」

「チー！ 相手は女四人だ！ やつちまえ!!?」

私が投降を呼びかけると、もう一人のへマスターへがそんな事を言つた……………じゃあ、残念だけど酷い事になるね。

「へマスターへ二人は私がかするから、皆はティアンの方をよろしくね……………《アクセラレイション》《パラライズ・ストライク》」

「ミカさん!?!?」

まず、アクセサリーの効果でAGIを上昇させた私は最初に喚いていた方に接近して、【戦棍鬼】で覚えた攻撃した相手をその衝撃で【麻痺】させるスキルを使い足を薙いだ。

「ガアア!?!?」

その結果、相手の両足は粉々に砕けていた……………いやしようがないでしょ、今の私のSTRは各種補正込みで八千は超えるし。そこに



《ストライク・ペネトレーション》とかの効果を含めるとどうしてもこ  
うなるんだよ。

……まあ「麻痺」にはなってるし、もう動けないから別に良い  
よね。

「クソッ！ 役立たずが！ 《天衣迷彩》！」

もう一人の男がそう言うのと、その姿が一瞬にして消え去った  
……成る程ね、隠密系の「エンブリオ」か。自分だけじゃなく他  
人の姿も消せるなら誘拐にも使えるかな。

……ただ、

「私には丸見えなんだよね。《竜尾剣》」

「何イ!?？」

展開したままの《竜意圏》には全力で逃げようとする姿がはつきり  
と写っていたので、《竜尾剣》を伸ばしてその片足を切断した。

そうして相手が倒れ込んだところに剣尾を操作して、残っているも  
う片足を貫き地面に縫い付けた……これでログアウトも出来な  
いでしょ。

……さて、後はティアンの方だね。そう思っただけ振り向くと、

「ヒイイ!?？」

「ごめんなさいイ!!？」

「騎士様ア！ 投降するので命だけはお助けをオオ!?？」

私がそちらを向いた瞬間、一人は腰を抜かし、もう一人は地面にう  
ずくまり、最後の一人に至ってはリアーナさんに泣きついていた  
……あれえ？

「……どういう……事だ……？」

「……どうもこうも無く当然……」

「……姉様、目の前であんな残虐ファイトを見せられたら、心が折  
れるのも無理はないかと……」

『正直、無理もないね』

えー、殺さない様に手加減したのに。問答無用でミンチとかには  
してないのに。

「リアーナ殿！ これは一体何が!?？」

「え、えーと……これはですね……」

すると、さつき見張り騎士の一人が路地裏に駆け込んで来た……流石にこれだけ騒ぎを起こせば気づくよね。

じゃあ、この〈マスター〉達はどうするかな、と考えていると……その二人の身体が光の粒子に変わり、代わりに大量のアイテムがばら撒かれた。

「自害したんだ。……まあ、〈マスター〉を拘束し続けるのは難しいし、これで良いかな」

◇

その後、リリアーナさんからの連絡を受けた騎士団の人達がすぐに駆けつけて、三人の誘拐犯は御用となった。

そして……

「お姉ちゃん！」

「レフィー！」

レフィーちゃんトリファさんの姉妹も無事再開する事が出来たのだった……やっぱり姉妹は一緒に居ないとね。

……そんな事を考えている私に一人の人物が近づいてきた。

「やあミュウくん、久しぶりだね。……今回は行方不明事件を解決してくれて感謝する」

「リヒトさんも久しぶりですね。今回は人探しのクエストを受けたついでだったので、そんなに気にしなくて良いですよ」

そう、私とお兄ちゃんがこの世界で初めて会ったティアン、アルター王国第一騎士団の団長リヒトさんである。

「それでも、君達が騎士団が調べていた事件を解決した事に変わりは無いからね。騎士団としても何もしない訳にはいかないよ。後で報酬を用意しよう、何か要望はあるかな？」

「別に私は特に欲しい物は無いので、普通にお金とかで良いですよ。……二人はどうする？」

とりあえずミュウちゃんと葵ちゃんにも聞いてみた。

「……………いえ姉様……………私は今回本当に何もしていないので……………」  
「……………私も……………」

「んー、そんなに気にしなくていいのに。私だって今回は適当に【ギガス】を振り回したただけだし。……………それにこういうのは相手の顔を建てる事も必要だから、何か受け取った方がいいよ?」

実際、リリアーナさんが協力していたとは言え、事件を解決したへマスター達に何もしないのは騎士団としても肩身が狭いだろうし。

「……………じゃあ【墓標迷宮探索許可証】が欲しいのです」

「……………私もそれで……………」

「分かった、【許可証】二枚と金一封を用意しよう。後で騎士団の詰所で受け取ってくれ」

そう言うのと、リヒトさんは騎士達の元に戻っていった。

……………そして入れ替わりにレフィちゃんがこつちに来た。

「あのー 今日はお姉ちゃんを助けてくれて本当にありがとうございます  
ました! その……………これはお礼です」

すると彼女は私達に三つの花束を手渡した。

「えつと……………うちはお花屋さんをやってるので……………その、こんな物しかないけど……………」

「いや、十分だよレフィちゃん」

「とても嬉しいのです!」

「……………うん、とても綺麗……………」

そうして私達はその花束を受け取った。

【クエスト【探し人——レフィ・シュタイン】を達成しました】  
クエストも達成したし、今回はこれで一件落着いて事だ!

## 〈墓標迷宮〉パートⅡ

□王都アルテア墓地区画 【付与術師<sup>エンチャンター</sup>】 レント

「おー、ここが〈墓標迷宮〉なのですね。実に雰囲気が出ているのです」  
『確かに名前負けはしていないね』

どうも、先日俺が魔石職人ギルドに行っている間に妹達は何かの事件を解決したらしく、その報酬としてミュウちゃんは騎士団から「墓標迷宮探索許可証」を受け取ったらしい。

故に、せっかく貰ったのだからと三人で〈墓標迷宮〉を訪れたのだった。

「葵ちゃんも誘ったのですが、予定が合わなかったのは残念なのです」  
「まあ、人にはそれぞれ予定があるから仕方ないだろう」

「そうそう。……………今回はミュウちゃんがいるから最初からだよね？」

「ああ、ボス部屋へのワープはボスを倒した人間以外は使えないからな」

今回は〈墓標迷宮〉初めてのミュウちゃんがいるので最初からの攻略になる。

……………まあ、今の俺達が五階層までで苦戦する事は無いだろう。

「じゃあ行きましようなのです！ 第二形態に進化したフェイの力を  
見せるのですよー！」

『ああ、任せてくれミュウ！』

こうしてミュウちゃんにとつては初めての、俺とミカにとつては何  
回目かの〈墓標迷宮〉探索が始まった。



「《ホーリーランス》」

「《ソニックファースト》！」

「《インフェルノ・ストライク》！ ……………よしっ！ ボス撃破！」

そして今、俺達は第五階層のボス「スカルレス・セブンハンド・カツ

トラス」を倒したところである……いや、ここまでボス以外は俺が適当に聖属性魔法を使うだけでも突破出来るからな。

それにミュウちゃんも、フェイのスキルのレベルが上がった事でステータスとラーニングした魔法の効果が上がっているので、道中の雑魚相手になら特に問題は無かったし……強いて言うならミュウちゃんがゾンビを素手で殴るのを嫌がったぐらいだな。

「あつ！ 兄様、今の戦闘で【拳士<sup>ボクサー</sup>】がレベル五十になったのです」「そうか、おめでどうミュウちゃん。ここに来る前に次のジョブには就いてきたんだよな？」

「はい、兄様に言われていたので【格闘家<sup>グラップラー</sup>】に就いておきました」

「じゃあ、この【ジョブクリスタル・ロッド】でメインジョブを変更するといい」

そう言つて俺はミュウちゃんに【ロッド】を手渡した……ちなみに俺も道中【付与術師】をカンストしたので、メインジョブを【祓魔師<sup>エクソシスト</sup>】に切り替えている。

そうしていると、ミカがドロップアイテムを回収してこちらにやってきた。

「ミュウちゃん、面白いアイテムが落ちたからあげるよ、【身代わり竜鱗】つてやつ」

「良いのですか？」

「うん。私は攻撃にはほとんど当たらないし……良いよねお兄ちゃん？」

「ああ。その手のアイテムは前衛のお前達で持っていればいだろう」

「ありがとうございます。……でも、新スキルを使う場面は中々来ないので」

『しようがないよミュウ。僕の覚えた新スキルは使い所が難しいからね』

確かにミュウちゃんの新スキルは色々と使用後にデメリットがあるからな、その分効果は強力だが。

さて、準備が終わったところで第六階層に降りるか。



「さて、〈墓標迷宮〉の様相は五階層毎に変わるからな。ここからはア  
ンデットは出ない」

「じゃあ何が出るのです?」

「それは……………あいつらだ」

通路の先から現れたのは「リトルストーンゴーレム」と「ファイア  
エレメンタル」の集団だった。

……………そう、この第六階層からはエレメンタル系モンスターの巢  
窟である。物理防御に長けたゴーレム系と魔法攻撃に長けたエレメ  
ンタル系のモンスターが徒党を組んで来るので、上の階と比べると難  
易度がかなり上がっている。

また、この階層からはランダムトラップが増えるので、感知・罨解  
除スキルが無いと酷い目にあう事になる。

「ミカとミュウちゃんはゴーレムを、フェイは俺とエレメンタルを《ア  
クアバレット》」

「オツケー《竜尾剣》《スマツシユメイス》!」

「分かったのです《ストライクフィスト》!」

『分かった《ウインドカッター》!』

まず、俺の放った《詠唱》付きの水魔法が「ファイアエレメンタル」  
を一体消し去った。そこにミカが剣尾を伸ばしてゴーレムの一体を  
貫き、もう一体をメイスで砕いた。

さらにミュウちゃんがゴーレムの一体を一撃の威力が高い格闘ス  
キルで殴り飛ばし、フェイが風魔法でエレメンタルの一体を倒した。

……………まだモンスターのステータス自体は五階層までのものに  
毛が生えたぐらいだからな、今の俺達ならそう苦戦はしないか。

「とはいえエレメンタルに魔法を撃たれたら厄介だしな、先に潰すか  
《ウォーターランス》」

俺は残りのエレメンタルを《詠唱》付きの水の槍で一掃した。

そうした事で魔法を警戒する必要が無くなった妹達の動きが良く

なり、その後ゴーレムを倒すのにさして時間はかからなかった。



■〈墓標迷宮〉???

ソレは〈墓標迷宮〉の様々な階層を完全に無音で徘徊していた。

『……………』

ソレが創造主ジャバウオックから与えられた役割は、この迷宮に來た人間を始末する事であつた。

『……………』

その為にソレの身体は人間が使う武器や魔法を受け付けず、この迷宮の壁や床をすり抜ける事が出来た。

更にその両手の刃で付けた傷は、ソレが生きて近くにいる間は決して癒えないという特性もあつた。

『……………』

今もソレは自身の同類たるエレメンタルのモンスターがいる階層を徘徊しており、そこにいた三人の人間を獲物として狙っていた。

『……………』

……………ソレはまず自身にとって最も脅威になる人間を先に始末しようとしていた。



□〈墓標迷宮〉【戦棍鬼メイス・オーガ】ミカ

あの後、第六・七階層を順調に探索し終えた私達は第八階層を歩いていた。

モンスターに関してはエレメンタル系を先に倒せばなんとかなるし、トラップも私の直感とお兄ちゃんの【罠狩人トラップ・ハンター】のスキルで対応できるしね。

「〈墓標迷宮〉に潜るのは初めてでしたが、中々変わったところですね」「神造ダンジョンはねく。運営管理AIが作ったモノだからか、デンドロにし

てはゲームっぽいからそう感じるのかもね。……………ん？」

……………おっと、久しぶりに直感にかなり危険な反応があったね。このあたりの階層には稀に亜竜級のモンスターも徘徊してるって話だけど、そんなレベルじゃないね……………これは「ラーゼクター」の時のやつに近いかな？

「お兄ちゃん、何か来るよ……………それも、かなり危険なヤツ。《竜意圏》」

「全員、全集警戒！ 《召喚》——バルンガ、ブロン」

「分かったのです！」

「分かった！」

その言葉と共に、お兄ちゃんは武器を弓に持ち替え本気の装備になり、「ホースゴーレム」のブロンと「バルーンゴーレム」のバルンガを召喚して周辺を警戒させた。

そして、ミュウちゃんとフェイちゃんも真剣な表情で周りを警戒し始めた。

私の《竜意圏》にも怪しい反応は無いけど、直感では危険が来ると言っているね……………来た！

「ミュウちゃん右！ 《竜尾剣》！」

『……………！』

「《ストライクフィスト》！」

ミュウちゃんの右側の壁を擦り抜けて現れた影が放った斬撃を、それを先読みしていた私の剣尾が迎撃した。

その迎撃に怯んだ相手に、ミュウちゃんは威力に長けたアクティブスキルによる拳を放ち、相手を吹き飛ばしつつ距離を取った。

『ミュウ！ 《ファイアーボール》！』

「《ハンティングスナイプ》！」

『……………』

そこにフェイちゃんの火球とお兄ちゃんの矢が放たれた……………が、放たれた火球と矢は相手にあたらず擦り抜けてしまった。

『魔法が擦り抜けた？！』

「じゃあ行け、お前たち。……………俺の矢も擦り抜けたが、ミュウちゃ



んの攻撃は当たっていたな……………そういう事が《オール・エンチャント・アジリテイ》！」

『……………!!?』

フエイちゃんは動揺したものの、お兄ちゃんはさして動揺せずに召喚されたモンスター達をけしかけて、更に《詠唱》付き全体AGIバフを掛けた。

だが、それらのモンスターは即座に相手に切り裂かれていった……………が、相手を観察する時間は稼いでくれたね。

「暗殺黒晶 ブラックオーツ」ユニーク・ボス・モンスターへU B Mか、神造ダンジョンにもいるんだ。あと《竜意圏》には一切反応無し」

「こちらの各種索敵スキルにも反応無し、おそらく目視でしか観測出来ないのだろう《オール・エンチャント・ストレンジス》……………あと、さっきの攻防から考えて生物以外の攻撃を擦り抜ける闇属性のモンスターじゃないか? 《オール・エンチャント・デクスタリテイ》……………闇属性ならENDは意味がないから要らないか」

「兄様達凄い冷静なのです……………でも大体分かったのです、フエイ」

『ああ……………《エンチャント・アジリテイ》』

その「ブラックオーツ」の見た目は黒い水晶を二メートルぐらいの人型にした感じで、両手は鋭い剣の様になつていた。今もその剣で向かって来たバルンガを切り裂いており、その速度は亜音速を超えている。

……………でもヤツからは音が一切しないね。光学的な観測以外は無効にして生物特攻の闇属性攻撃を使う、文字通り暗殺者つてコンセプトなのかな。

あと、ミュウちゃん達への説明中にもお兄ちゃんは《詠唱》付き全体バフを掛けていた……………相変わらずやる事に無駄がないね。

「あと、アイツの攻撃は受けたらかなり危険だと思ふ……………でも「ラーゼクター」程どうしようもないって訳じゃ無いから勝ちの目はあるよ」

「分かった。《空想秘奥》……………《オール・フィジカル・エンチャント》！」

「《アクセラレイション》《竜尾剣》！」

『……………！』

まず、お兄ちゃんがSTR・END・AGI・DEXの全体バフ魔法を合成したオリジナルスキルを強化した上で発動し、私もアクセサリーのAGI上昇スキルを使った上で、その速度が音速に達した剣尾を放った。

これが私とお兄ちゃんが編み出した《UBM》対策の1つ、ステータスで上回られたなら更にステータスを強化すれば良い”作戦である！……………正直、作戦とは言えないぐらい脳筋な方法だとは分かっているけどね。

しかし、ヤツも最初の攻防で私の攻撃は擦り抜けられないと判断したのか、その剣尾を回避した……………先にフェイちゃんの単体バフを受けたミュウちゃんが接近していた。

『《エコー・オブ・トウワイス》！』

「《ソニックファースト》！」

『……………!?』

それをヤツは迎撃しようとしたが……………その直前にフェイちゃんが使った新スキルの効果で急に加速したミュウちゃんにタイミングをズラされ、そのまま速度重視のアクティブスキルによる攻撃が直撃した。

これがフェイちゃんが第二形態になって覚えた固有スキル《エコー・オブ・トウワイス》の効果——五分間の間、自身にかかっているバフ効果を倍にする効果である。それによりステータスが強化されたミュウちゃんは、自身の技術もあって亜音速以上で動く相手にも攻撃を当てられるようになっていた。

ただし、このスキルには一時間のクールタイムが設定されており、更に効果終了時、自身に掛かっているアクティブスキルによるバフ効果を無効にするデメリットがあるので使いどころを選ぶものになっている。

……………おっと、不利だと判断したからか床を透過して逃げようとしているね。そうはさせないけど。

「逃がさないよ」

『……………』

それを先読みしていた私は《竜尾剣》を引き戻してヤツを背後から串刺しにし、「ギガース」のスキルで透過の発動を無効化した。

……………最近、私の直感の精度や範囲が上昇しているみたいなんだよね。それがアバターのステータスやスキルの所為なのか、それともこの世界での経験によって直感自体が成長している所為なのかは分からないけど……………まあ、思う所が色々あるけど今は頼りにさせて貰うよ。

そうして、そのまま剣尾を絡めて無理矢理こちら側に引つ張りつつ、私もヤツに向けて突っ込んだ。

『……………!?』

「《インフェルノ・ストライク》！」

剣尾に引つ張られて完全に体制が崩れたヤツは、それでもこちららに向かつて両手の剣を振るってきた。

だが、その軌道を全て先読みした私には当たらず、逆に私が放った豪炎を纏わせた「ギガース」に殴られその半身を砕かれた。

……………やっぱり技量は対した事ないね。あの「ラーゼクター」みたいに私が先読みする事すら織り込み済みで対処出来る訳じゃ無い。

そして砕かれ拘束から外れたヤツは床に転がり……………そのまま床の中に沈み込んだ。

……………逃げようとしているみたいだね、読めてるけど。

「《グラウンド・ストライク》！」

『……………!?』

私は即座にヤツが沈み込んだ場所に、叩いた部分から衝撃波を徹す【剛戦棍土】の奥義を打ち込んだ。

……………その攻撃に身体が砕けていた【ブラックオーツ】は耐えられなかったみたいで、

【UBM】【暗殺黒晶 ブラックオーツ】が討伐されました

【MVPを選出します】

【ミカ】がMVPに選出されました

【ミカ】にMVP特典【黒晶耳飾 ブラックオーツ】を贈与します」  
そのアナウンスにより【ブラックオーツ】の討伐が私達に知らされたのだった。



「おー、初MVPだ。やったぜ」

「ハイハイ、おめでとさん。まあ今回はお前の独壇場だったしな」

「おめでとうなのです、姉様」

『おめでとうミカさん』

まあ今回は相手との相性が良かったから、特に苦戦する事は無かったかな。奇襲も特殊防衛も私には意味が無いし。

……………とりあえずゲットした特典武器の性能を確認しようか！

……………ふむふむ……………。

「えつと逸話級武器でアクセサリーのイヤリングだね。装備補正はAGIにプラス30%。スキルは《闇纏》と《不治呪瘡》ってのがあるね」

イヤリングとしては黒い水晶が付いた二つひと組のやつで、耳に穴を開けないお肌に優しいタイプだね。

スキルの《闇纏》は、SPを消費して装備者への生物による直接干渉以外の攻撃・効果を最大十秒間だけ透過できる様になるみたい。でもクールタイムが十分間もあるから使い所が重要な。

もう一つの《不治呪瘡》は、装備者の攻撃を受けた相手に【再生阻害】の呪怨系状態異常を与えるアクティブスキルだね。SPを消費して一定の時間、自身に効果を付与出来るみたい。

「中々いい感じだね！ 特にAGIの上昇は有り難いよ」

「それは良かったな。……………で、これからどうする？」

「うーん……………正直結構疲れたから今日はこれで終わりにしたいな。特典武器を手に入れたしね。ミュウちゃんは？」

「私もしばらくスキルが使えないので、今日はこれ終わりで良いので

す」

「それじゃあ今日はもう終わりにするか。さつさと地上に戻るぞ」

そうして話し合った結果、私達は〈墓標迷宮〉を出て地上に戻ることにになった。

## 兄の超級職

□王都アルテア 「ジエム・マイスター魔石職人」レント

本日、俺は王都で「魔石職人」としてのジョブクエストをやり終わって、適当な喫茶店で妹達と一緒にくつろいでいた。

……もうそろそろ「魔石職人」もカンスト出来そうだし、その上級職の「ハイ・ジエム・マイスター高位魔石職人」の転職条件もいくつか満たしてきたから順調だな。

今はお茶菓子を食べ終わって、《スキルマイスター百芸創主》の各種調整や試験的な新スキルの作製を行っていた……このスキルを覚えてから暇さえあればオリジナルスキルの開発と調整を行ってきたから、ほとんど日課みたいになってるな。

「それで？ もうそろそろ夏休みは終わりそうだが、現実の方の準備はいいのか？ 宿題とか」

「宿題は大体終わってるし、新学期の準備も順調だよ」

「私も大丈夫なのです。……ただ、デンドロをやる時間は減ると思うのです……」

「それはしょうがない。リアル優先だしな」

『そうだよ、ミュウ』

俺も夏季休講が終わって大学が始まるから、ログイン時間が減るだろうしな。

……うーむ、このスキルはコッチの調整の方がいいか……？  
むしろコッチのスキルを組み合わせて……。

「お兄ちゃん、本当にマメにスキル開発するねー」

「正直、組み合わせと調整範囲が多すぎて終わりが見えないからな。こういうのは徹底して試行回数を重ねないと」

「兄様は本当にマメなのです」

……本音を言うと、こうやって地道に細かい努力を重ねて行かないとすぐに妹達天災児に置いて行かれるから、何だがな。

……少し話を変えるか。

「ところでミカ、先日手に入れた特典武具の使い心地はどうなんだ？」

「うーん、AGI補正はいい感じなんだけどねー。……………スキルの方はモンスター相手じゃ強さを感じずらいかな。どちらかにという対人や強敵相手に真価を發揮するタイプかな？」

まあ、モンスターは生身での攻撃がメインだから《闇纏》は使いにくいだろうし、ミカの場合雑魚はほぼ一撃で倒してしまうから【再生阻害】が活きる場面も少ないか。

……………とは言っても、ミカに緊急回避スキルとか組み合わせちゃいけないモノの筆頭だしなあ。お陰で広域殲滅系の魔法もほぼ効かなくなつたし。

もう一つの《不治呪瘴》も【ギガース】で対応出来なかつた回復系能力を妨害出来るから相性は良いだろう。

そんなことを考えていると、ミュウちゃんが話出した。

「やっぱり兄様と姉様は凄いです。それにこの前のユニーク・ボス・モンスターへU B Mの相手の戦いでも私はあまり活躍出来ませんでしたのです。……………私も二人の足を引っ張らない様にもっと強くならなければいけないのです！」

『その意気だよミュウ！ 僕も第三形態に進化出来たしこれからだよ！』

そんな感じでミュウちゃんとフェイが決意を新たにしていた……………いや、ステータスで圧倒的に勝る【ブラックオーツ】相手に当たり前のように攻撃を当てていた様な……………？

あと、第三形態に進化したフェイだが新しいスキルは覚え、既存スキルの強化とステータス補正の上昇のみの変化となっている……………自身にバフをかけて戦うミュウちゃんにとっては、バフの元になるステータスを上げた方が有効だからそういう進化になったんだろう。

「いや〜ミュウちゃん、燃えてるね〜」

「……………そう言うなら、これからレベリングも兼ねて〈墓標迷宮〉にでも行くか？」

五階層までは俺の【エクソシスト祓魔師】のアンデッド特攻スキルと聖属性魔法で余裕だし、十階層のボスの純竜級モンスター【ガーディアン・エレ

メンタルゴーレム」もミカなら余裕で粉碎出来るから、経験値稼ぎの場所としては丁度いいしな。

そう考えつつ、俺はオリジナルスキルの開発と調整を終わらせた  
……………のだが、

【武術系・魔法系・生産系を含むオリジナルスキルの五十種類開発を達成しました】

【条件解放により【ザ・スキル 技神】への転職クエストが解放されました】

【詳細は各種クリスタルでご確認ください】

……………突如、そんなアナウンスが俺の元に届いた。

「……………フアツ!?？」

「うおう！ ビックリした〜。……………どうしたのお兄ちゃん？」

「一体どうしたのです兄様!?？」

えー……………とー……………、って周りが凄くこつちを見てるな  
……………驚いて変な声出たからな……………。

「……………とりあえずさっさと会計を済ませてここを離れるぞ」

「は、はい……………」

「お騒がせしました〜」

俺達は周りから奇異の視線を向けられながら、慌てて喫茶店から出て行った。



喫茶店から出た俺達は急いで人気の無いところに集まっていた。

「それでお兄ちゃん、本当に何があったの？ あんな変な声を出すなんて只事じゃないでしょ」

「……………本当にどうしたのです？ 兄様」

「ああ。……………さっき急に『ザ・スキル 超級職の転職条件を満たしました』というアナウンスがあつてな……………それでつい驚いてあんな声を出してしまつたんだ。……………驚かせて悪かつたな」

何分、超級職について悩んでいたから余計に驚いてしまつたしな……………。



「えーと……………とりあえずおめでとうなのです？ 兄様」

「……………なんか妙にあつさり達成出来たね。超級職つてもつと就くのが難しいものだと思つてたけど。……………それで？ どんな条件だったの？」

「条件は『武術系・魔法系・生産系含むオリジナルスキル五十種類開発を達成』だったな。……………正直、これは《百芸創主》の仕様上のバグじゃないのか？」

本来オリジナルスキルと言うのは、才能があるテイアンが一生に一つ作れるかどうかのものだと聞いている。それを武術系・魔法系・生産系含めて五十種類開発すると言う条件は、確かに難易度としては非常に高いモノだと言えるだろう。

だが、俺の《百芸創主》で作られたスキルは《空想秘奥》……………ブリューナクジョブに由来するスキルを強化するスキルの効果の適応範囲内になる。それは逆に言えば《百芸創主》で作られたスキルは、どんなものであれジョブ由来のオリジナルスキルとして扱われる特性があるのではないだろうか。

「そのせいで、今までの《百芸創主》によるスキルの開発と調整が、『オリジナルスキルを開発した』とシステムに認識されたのではないか？ ……本来ならあんなショボいスキルがオリジナルスキルとして認められないと思うしな」

「んー、そう考えれば辻褄が合わなくもないかな？」

「でも、そういうのは修正されたりしないのです？」

……………まあ、普通のゲームなら修正案かもしれないがな。

「この《Infinite Dendrogram》でそういう修正とかは無だと思うよ」

「そうだな。……………そもそもこのゲームに修正というシステムがあるのかも怪しいしな……………」

「？」

「まあ特に気にすることは無いって事だよ」

……………まあ、俺達には特に関係の無い話だろうしな。

「とりあえず、せつかく条件満たしたんだしさっさと取っっちゃえば？」

「……………まだ、転職の試練があるから取れるとは限らないんだが……………」

「兄様ならきつと大丈夫なのです！」

「それに試練を受けるだけならタダだしね、もっと気楽に行けば？  
所詮私達にとってはゲームのジョブだしねー」

……………まあそれもそうか。以前から気にしていた超級職の事だから少し神経質になっていた様だな。

「じゃあちよつと超級職の試練を受けに行ってくるよ」

「いつてらつしやーい」

「頑張つてなのですー」

『頑張つてねー』



とりあえず俺はあまり人が来ない冒険者ギルドのジョブクリスタルに来ていた。

……………各種クリスタルとアナウンスでは言っていたから、おそらくどのクリスタルでもいいと思うんだが。

「……………成る程、これでいいみたいだな」

クリスタルに触れて就けるジョブに一覧を見ると、その中に【技神】の選択肢もあった。

……………だが、他のジョブと違って色が薄いな、まだ条件を全て満たしていないからか？

とりあえずその選択肢に触れてみると、

【転職の試練に挑みますか？】

という表示が出た。

「Yesで」

そう答えると俺は奇妙な空間に飛ばされていた。

「……」

そこには目の前に大きな決闘場の様なものがあつた……………といふよりギデオンで見た舞台にそっくりだな。

そして、そのそばには一つの石版があり、そこにはこう記されていた。

【先代【技神】の再現体を決闘で打倒する、又は生産において【技神】の同等以上の作品を造り提示せよ】

【成功すれば、次代の【技神】の座を与える】

【失敗すれば、次に試練を受けられるのは一カ月後である】

【決闘か生産かを選び舞台へ上がれ】

「……………成る程ね。まあ技の神と言うぐらいだし、相応しい技術<sup>スキル</sup>を証明しろという試練なのは当然か。……………決闘で」

俺の生産技能なんて少し【ジエム】が作れるぐらいだからな、まだ決闘の方がいいだろう。

そうして、俺は戦闘用の装備に変更してから舞台に上がった。

「それで相手は……………?」

すると舞台の反対側に腰に一本の刀を挿した壮年の男性が現れた。

……………この時点で俺はこの先の展開を察してしまった。

(あ、これ無r)

次の瞬間、その男性の刀に添えられた手がほんの僅かに霞んだ様に見える……………気付いた時には、既に俺の身体はコマ切れにされていた。



「ウボアあああ……………」

「……………え、えーと……………大丈夫ですか兄様」

「転職の試練に失敗したの?」

あの後、試練に失敗した俺は冒険者ギルドの一角にある机で突っ伏していた。幸いなことに試練の空間はギデオンの闘技場と同じ仕組みだったのでデスペナはしていないが。

……………いや、あんなバグっぽい方法で条件を満たしたから試練に失敗することは想定していたし、今回はどんな試練なのか様子見するぐらいのつもりだったんだけど……………。

「…………正直【技神】に就くの無理じゃね？」

「そんなに難しい試練だったの？」

「…………まあ、改めて【技神】の転職条件を考えれば、ああいう難易度なものも納得なんだが…………」

つまりへエンブリオ〉などというズルが出来ないティアンが【技神】に就くことがどういう意味なのか、という事何だよなあ。

「才能があるティアンが一生に一つ作れればいいオリジナルスキルを、五十種類以上作った圧倒的に規格外な才能の持ち主が先代【技神】という訳だ」

「…………そんなに凄い人だったのです？」

「……………これでも俺はお前達も含めてそれなりの数の規格外な才能の持ち主を見てきたつもりだが……………先代【技神】ははつきり言ってケタが違う」

正直、俺程度ではその才能を測る事すら出来ないレベルだ。はつきり言って勝ちの目が微塵も無い。

……………ちなみに最後、コマ切れにされながらも《看破》を使ってみたらレベルもステータスも全て見えなかった。

「お兄ちゃんはまだレベルを上げられるけど……………」

「……………俺があと何千何万レベルを上げても勝てる気がしない」

「じゃあ生産の方はどうなんです？」

「……………先代【技神】が持っていた刀からは古代伝説級武具の【ドラグテイル】を遥かに超える威圧感を感じた……………おそらく先代【技神】が自分で作った刀、という展開だろうな」

結論、戦闘でも生産でも勝ちの目が無い。

……………へエンブリオ〉によるインチキによって、なんちゃってオリジナルスキルを作った程度で就かせる気など無い！……………という鋼の意思を感じる……………

「……………じゃあ兄様は【技神】を諦めるのです？」

「いや、これからも挑戦は続けていこうと思う……………この世界でなら何か才能を覆す方法があるかもしれないし」

「お兄ちゃんは負けず嫌いだからね」

あの先代【技神】を倒すにはそれ以上の才能を持っているか、才能が意味をなさない様な圧倒的な理不尽が必要だろうか。

……………俺の【ルー】にはそういう理不尽さがある様なへエンブリオではないしな。今後の進化時に新規スキルを習得出来ないのも足を引つ張っているし。

やっぱり魔法かな、それも自分が死んだ瞬間に闘技場全体を消し飛ばす感じのやつとか。それと【リア・ソルジャー殿兵】の《ラスト・スタンド》や【デス・ソルジャー死兵】の《ラスト・コマンド》を組み合わせて……………いや、上級職までのスキルにそこまでの威力のものは無いか。

じゃあ、《百芸創主》だけでは難しいし……………どうせ【技神】を目指すならへエンブリオに頼らないオリジナルスキルの自力作成にも挑戦してみるか？ ミレーユさんもある程度熟練した魔術師ならスキルに頼らない魔法の調整が出来ると言っていたし……………。

「まあ、色々試行錯誤してみよう。まずはレベリングだな、とりあえずジョブ枠を全て埋めよう。それとへエンブリオのさらなる進化に、あと技術の錬成も必要かな」

「その意気だよお兄ちゃん。まだまだデンドロの先は長いよ！」

「そうなのです！ みんなでもっと強くなるのですよ！」

……………今までは妹達の面倒を見る事がメインでデンドロをやつて来たが、どうせなら俺自身も明確な目標があつた方がゲームは楽しめるだろう。

考えてみれば規格外な才能を持つ人間に勝つ事は昔からの目標だったしな。あの事故以来色々割り切つて……………いや、諦めてしまったがこの世界でなら多少無茶をしても大丈夫だろう。

「そうだな。これからは【技神】への転職を目指して頑張ってみるとするか！」

……………これが俺にとって、このへInfinite Dendrogramで初めて自分自身の明確な目標を持った瞬間だった。

## 兄妹と生産職

□王都アルテア 【紅蓮術師】パイロマンサー レント

あの【技神】ザ・スキル 転職クエスト失敗から、俺はレベリングや各種クエストの受注などを行い戦力強化に励んだ。

その結果、メインジョブにしていた【祓魔師】エクソシストと〈墓標迷宮〉を探索する為の【盗賊】バンデイトのレベルをカンストさせて、更に条件を満たせた念願の魔術師系の上級職【紅蓮術師】に就くことも出来た。

他にも魔石職人ギルドのクエストを積極的にこなしていった結果、【魔石職人】ジエム・マイスターのレベルもカンストし【高位魔石職人】ハイ・ジエム・マイスターに転職することも出来たのだった。

………そこまで出来た時点で夏季休講が終わり、大学が始まったのである。

「まあ、学校が始まる前にそこまで出来たのは上出来だったかな」

「学校が始まっちゃったら、これまでみたいな準廃人プレイは出来ないしねー」

「なのです」

………流石に大学をサボってデンドロプレイ、なんて事は人として駄目だからな。大学に通わせて貰っている叔父さん達にも申し訳が立たないし。

「それに大学が始まって、デンドロプレイに悪いことばかりではないさ。………大学の同期生でデンドロをやっている人と知り合いになれたりしたからな。この夏季休講でデンドロをやり始めたヤツは結構いたし」

「それで、今はその知り合いになった人に会いに行ってるわけなのですかね？」

「ああ、その人はこの王都アルテアでエドワードと言う名前の錬金術師をやっているらしくてな。他の生産職の〈マスター〉達とクランを作って商売をやっているから機会があれば訪れてくれ、と言われたかな」

何より生産系〈マスター〉と繋がりが持てれば、装備面やアイテム

面で色々と便利だろうからな。

「……………ちなみに大学でデンドロのサークルを作ろうかという話もあったが、今は保留にしている。」

「私も生産系の〈ハマスター〉と知り合いになるのは悪くはないと思うよ」

「そういうこと。……………向こうも顧客を確保したいだろうしwin-winの関係というやつだな」

「……………兄様はデンドロ友達が出来て良かったですね」

「そつちは違うのか？」

そう聞くと、二人は凄く微妙そうな表情を浮かべた。

「……………夏休みの間にデンドロをプレイしてみた、って子は結構居ただけどねー」

「……………その多くが最初の戦闘で怖くなって辞めてしまったそうなのです」

「……………成る程な」

「……………ああ、この二人が天災児だから忘れていたが、確かに普通の小学生にデンドロの戦闘はキツイか。」

「でも続けている子もいたから、そういう子達とは友達になったよ。まあ、所属国はレジエンダリアやグランバロアや黄河だったけど」

「私のクラスメイトにも、天地所属でデンドロをやっている男の子がいたので友達になったのです。何でも、剣術をやっているので天地は肌に合っているらしいのです」

まあ、デンドロ関係で妹達に新しい友達が出来たのは良いことだろう。今後機会があれば他の国に行ってみるのも良いかもしれないな。……………さて、確かこの辺りだと聞いたのだが。

「クランの名前は〈プロデューズ・ビルド〉だったかな。皆もそう言う看板とかを探してくれ」

「分かったのです」

『分かったよ』

「……………でも、この辺り大分人気が少ない？」

「……………人気の多い場所を借りられる様な金が無いらしいからな」

実際、言われた場所を訪れてみると……………こう言ってはあれだが王都の中でも寂れた場所だった。

……………この世界で自分の店舗を持つのは大変だろうからな、特に此方に居られるのが不定期なへマスターにとっては。

そうやってしばらく探し回ってみるが……………。

「……………見つからないのです」

「もう少し詳しい場所を聞いておけば良かったか？」

「うーん……………あつ！」

正直見つからない様ならば大学で改めて場所を聞こうかと思いつめた時、ミカが何かを見つけた様だ。

その視線の先を見ると、そこには六人の女性が歩いており、そのうち四人は同じ顔をしていた。

……………彼女達は……………。

「エルザちゃんだ！ 久しぶり〜」

「えっ！ ミカさん、レントさん。お久しぶりです！」

「ん？ エルザの知り合いかな？」

やはりエルザちゃんと、そのへエンブリオである「ワルキューレ」達だったか。最後に見た時より一人増えているな、おそらく進化したからだろう。

あと、一人初対面の女性が一緒にいるな。

「……………姉様。こちらの人達は一体誰なのです？」

「ああ！ ミユウちゃんは初めて会うんだったね。この子はエルザちゃん、私とお兄ちゃんの友達だよ」

「始めまして、エルザ・ウインドベルと申します。彼女達は私のへエンブリオの「ワルキューレ」です。……………あとこちらは私の友人のターニャです」

「始めまして！ ターニャ・メリアムだよ。……………ふーん、貴方達がエルザがよく話していたレントさんとミカさんなんだね〜。色々話を聞いてるよ〜」

「ちよつと！ ターニャ！」

そう言いながら、エルザちゃんの友人だというターニャちゃんは俺



とミカの事をニヤニヤしながら見つめていた……………一体どんな話を聞いたのやら、妙に顔を赤くしたエルザちゃんが彼女に縋り付いているし……………。

……………とりあえず俺達も自己紹介しておくか。

「始めまして、ミカです。よろしくね、ターニヤちゃん！」

「ミカの兄のレントです」

「ミカ姉様とレント兄様の従妹のミュウなのです。コッチは私のヘエンブリオのフェイなのです」

『ミュウのヘエンブリオのフェイだよ、よろしくね』

……………そうやって一通りの自己紹介を済ませたところで、エルザちゃんがこちらに質問してきた。

「そう言えば、皆さんはどうしてこんな所にいるんですか？」

「ああ、この辺りにあると言われたへプロデュース・ビルドという生産クランを探しているんだが……………」

「え？ ウチのクランに何か用があるんですか？」

そう言ったのはターニヤちゃんだった……………どうもエドワードの生産仲間の一人は彼女だったらしい。

なので、ここに来る前の事情を一通り彼女に話してみると。

「成る程ねー。そう言う事なら私がクランのホームまで案内するよ！」

私達も丁度向かうところだったしね」

「有り難い、そうしてくれると助かる」

「お礼はウチのクランで買い物でもしてくれればいいよー……………出来ればそのまま固定客になってくれると嬉しいなー」

そうして俺達はターニヤちゃんの案内でへプロデュース・ビルドのホームに向かう事になった……………固定客になるかどうかは商品の内容次第だが。



「はい、ついたよー。ここが私達のクランへプロデュース・ビルドのホーム（仮）だよー」

「……………随分と分かりにくいところにあるな……………」

そのホームはさつき探していた場所から、更に路地裏をいくつか曲がったところにあつた……………正直、分かりにくすぎる。

……………一応、外の看板には「プロデュース・ビルド」の名前が書いてあつたが……………外観はかなりボロい。

「いや、ウチはまだ克蘭メンバー三人の零細克蘭だからね。王都の表通りの土地とかは高すぎて買えなくて……………ここも賃貸だし」

「でも、三人共良い人達ですし、作っている物も高性能なんですよ」

「成る程、このデンドロで生産職をやるのも色々大変みたいだな」

「そーなんだよねー。……………おーい！ エドワードくあんたの客を連れてきたわよ」

そう言いながらターニヤちゃんはホームの中に入つて行つたので、俺達も続いて行つた。

外と違つて中は割と綺麗に片付けられており、中にあつた机にはメガネを掛けた青年とガタイのいい男性が座つていた。

「ん？ ターニヤ、客だと？」

「そうよ。……………アンタ客を連れてくるんだつたらホームの場所ぐらいしつかりと教えておきなさいよね！」

「ようエドワード。大学で話したと思うがレントだ。こっちは妹のミカとミュウちゃん」

「……………ひよつとして加と……………じゃなくてレントか。こちらでは始めましてだな」

「なんじゃエドワードの知り合いか？ わしはゲンジ、この二人と同じ「プロデュース・ビルド」のメンバーじゃ」

そうして俺達はお互いに自己紹介をして、それぞれの関係を確認しあつた……………しかし、エドワードとエルザちゃんがこちらでは知り合いだったとはね、妙な偶然もあるものだな。

そうして話し合う内にミカとターニヤちゃんがどうも意気投合したらしく、他の女子達と一緒に話し込み始めてしまった。

流石にあそこに混ざるのは無理だな……………と言うわけで、同じ様

に居心地悪そうにしていたエドワードとゲンジさんと話すことにした。

「それで一体何をしに来た……………って聞くまでもないか」

「ああ、大学で言った通りどんな物を扱っているのか興味があつてな、ちよつと見に来たんだ……………商品を買うかどうかは実物を見てから判断するがな」

「ああ、是非そうしてくれ。……………後悔はさせんよ」

そう言つて、エドワードはアイテムボックスからいくつかの装備を取り出した……………ふむ、金属製の武器・防具か。

鑑定してみると、どれも結構な性能で見たこともない特殊なスキルが有るものもいくつもあった。

「俺とゲンジが扱っているのは主に金属製の装備だ。俺はへエンブリオのスキルで特殊な性質を持つ金属を作れるし、ゲンジは生産物の能力を改変出来るからティアンには作れない様な物もあるぞ」

「それは凄いが……………そんなにあつさり自分のへエンブリオの特性を明かしても良いのか？」

「……………実を言つて克蘭の経営が結構キツくてな、正直商品を売るのに手段を選んでいられん。……………へエンブリオで作ったオリジナル金属」と言えば聞こえはいいが、要は既存の【レシピ】では使いにくいと言う事でもあるからな」

「ゴイツやターニャの作った素材は生産に使うにも手間いるからう。素材の性質をしっかりと理解しておかんと失敗するし。……………以前はへマスターが作ったという物珍しさもあつて素材も売れておつたが、その事が広まった今は殆ど売れんしの」

……………俺も【ジェム】を作るから知っているが、生産活動では【レシピ】によつて決められた素材・工程・スキルを使って作るのが一般的である。

そこから外れたアレンジをしたければ本人の技術やセンス、何より高いスキルレベルが必要になり……………それらが足りなければ高確率で失敗するだろう。

「そういう訳で、俺達へプロデューズ・ビルドは特殊な性質を持った

製品の少数生産やオーダーメイドをメインにしている。……………どうせ規格品や量産品では「マスター」はティアンには勝てないしな」「この世界にはキッチンと流通と言う概念が存在するからな。……………俺達「マスター」は所詮異邦人、今の時点では生産は出来ても工業は無理だからな」

「そう言う事だ。他にも色々あるから、気に入った物があれば是非買って行ってくれ……………本当に頼む」

「クランオーナーも大変じゃのー」

「……………他人事じゃないんだがなあ」

……………以前月夜さんに会った時も思ったが、クランを運営する立場のクランオーナーって本当に大変なんだな。

……………とりあえず製品を見ていくか、以前買った【鑑定師のモノクル】を装備してつと。

「ふーん……………高レベルの《炎熱耐性》と《電撃耐性》付きの鎧とか、切りつけた相手の位置を感知する《血臭追跡》スキルが付いた剣とか結構面白いのがあるな」

「とりあえず此処に出したのは売り物になりそうな物だけだからな。……………失敗作には酷いものもあるが」

「着けた人間のHPを吸い取って耐久性を回復させる鎧とかの。別に呪われている訳でなくてそういう機能があるだけだったから、どうしようもなかったからの」

そんな話を聞きながら製品を見て行くと……………一つの短剣が目に入った。

【シエルメタル・ショートソード】

特殊な異能で金属化した甲蟲の甲殻を素材にして作られた短剣。

甲殻の強度を金属化で上昇させているので非常に頑丈で、守りに長けた強力なスキルを有するが装備者にも相応の力量を要求する。

・ 装備補正

攻撃力+400

防御力+300

・ 装備スキル

《END増加》Lv8

《HP自動回復》Lv8

《物理ダメージ軽減》Lv8

《破損耐性》Lv5

※装備制限：合計レベル700以上・STR1000以上・AGI2000以上・DEX2000以上

……これは凄いな、短剣なのに攻撃力補正も防御力補正も超高いし、スキルも防御向きだが強力な物が揃っている。

「この短剣は……？」

「ん？ ……それか、売り物じゃ無いんだが間違えて出してしまったみたいだな」

「売り物じゃ無いのか？」

「ああ……この短剣は今の俺とゲンジが、最大でどれだけの性能のアイテムを作り出せるかを試す為に作った試作品だな」

曰く、この短剣は以前手に入れた純竜級モンスター【ドラグワーム】の素材をエドワードが金属化させて、更にゲンジさんのへエンブリオの固有スキルで限界まで強化した物らしい。

「とにかく性能を上げる為に色々やって、それは上手くいった………上手く行き過ぎたんだが」

「ワシのへエンブリオの固有スキルで性能を上げる為に、装備制限を大量に付けてしまったからのお。誰も装備できんのじゃ」

「………いくら強力でも合計レベル七百以上が条件ではな……要求ステータスも高いし」

成る程、確かに普通なら超級職にでも就かなければ装備出来ないだろうが……俺なら問題ないな。

「………この【シエルメタル・ショートソード】を買いたいのだが、売ってくれるか？」

「良いのか？ ……いくら強くても装備できないのでは……」

「問題ない。俺はへエンブリオの能力で普通よりレベルが高いからな、装備条件は既に満たしている」

「だが、これは純竜級の素材をいくつか使っているからかなり値段が

高いぞ。大体百万リルぐらい……」

「百万リルで良いのか、安いな」

そう言つて、俺は机の上に百万リルを置いた。それを見た二人は目を丸くしていた………これでも色々なクエストを達成しているから、金はそれなりに持っているんだよな。

それに【高位魔石職人】になつたお陰で、上級職【司教】<sup>ピシヨツプ</sup>の魔法の【ジエム】を安定して作成出来るようになったからな。これを魔石職人ギルドが結構いい値段で引き取ってくれるのだ………【司教】と【魔石職人】<sup>ジエム・マイスター</sup>を両方取っている人は少なくて、高位回復魔法の【ジエム】は中々出回らないみたいだし。

「………確かに百万リルあるな………分かつた、持っていけ。………しかし、よくもまあこんな大金をポンと出せるな」

「ああ………今後も色々装備のことで、このギルドには世話になりたいからな。俺なら装備の合計レベル制限はほぼ無視出来るし、出来れば今度オーダーメイドの装備とかも作って欲しい」

「………分かつた！ 今後もよろしく頼む！」

「そこまで褒められるとは職人冥利に尽きるの。………ワシからもよろしく頼む」

「………これが今後長く世話になる生産クラン、へプロデューサー・ピルド」と俺の出会いだった。

## ミュウの冒険

□王都アルテア冒険者ギルド

マーシャル・アーティスト  
【武闘家】ミュウ

こんにちは、ミュウなのです。今日も学校を終えた私と姉様は二人でデンドロのプレイを始め、今は冒険者ギルドで受けられそうなクエストを探しているのです。

ちなみに兄様は大学の方で予定があるという事で、今日は一緒じゃないのです………やっぱり小学生の私や姉様と大学生の兄様では時間が合わない時も多いのです。

………兄様がいないと〈墓標迷宮〉に探索は少し厳しくなるのです。主にアンデッドと罾への対処で。

「それに最近お兄ちゃん、ソロで行動する事が多くなっているしねー。何でも魔石職人ギルドの方で面倒な依頼を受けたからー、とか言っていたけど」

「まあ、兄様には兄様の予定があるから仕方がないですよ。それに私も上級職に転職出来ましたしフェイも第四形態に進化しましたから、もう姉様達の足を引っ張る事は無いのです!」

『僕も上級へエンブリオになって必殺スキルを覚えたしね!』

………まあ、使用後のクールタイムが長いから使い所が難しいけど』

「そうなのです! まず私はグラップラー【格闘家】をカンストして、その上級職である【武闘家】に就く事が出来たのです。

格闘家系統の上級職である【武闘家】は徒手格闘時にステータスを上げるアクティブ・パッシブの各種バフスキルを覚えるのです。その特性はフェイが新しく覚えた必殺スキルとの相性もいいから、かなりの戦力強化になったのです!

………まあ、その代わり攻撃用のアクティブスキルは強力なものをあまり覚えず、最大スキルレベルも低いですが、そこは技術でカバー出来るので問題無いのです。

「でも良いなく、お兄ちゃんとミュウちゃんは必殺スキルを習得出来て。以前聞いた話だとエルザちゃんも習得したって話だしー

「……………なんか置いていかれた気がするなあ」

「……………姉様は必殺スキルなんて無くても十分過ぎるぐらいに強いと思うのです。……………そもそも特典武具を二つも持っている時点で私達の中ではダントツで最強なのです」

『確かにね。……………普通に【ガーディアン・エレメンタルゴーレム】を粉碎していたし』

実際、今の私や兄様が一对一で姉様と戦えば高確率で敗北するので

す。  
その反則的な直感と圧倒的なステータス、更に特典武具の能力が合わさった姉様は純竜級のモンスターですら余裕で屠りさるのです。……………私や兄様がソロでは倒すのが難しい【ガーディアン・エレメンタルゴーレム】も、姉様の前では即座にミスリル素材に変わりますし。

あと現在就いている【斥候<sup>スカウト</sup>】のジョブのお陰なのか、最近ますます危険察知に磨きがかかっているのです。

「さてと、そろそろ受けるクエストを決めないとね。何か良いの無いかなあ」

「……………それならこの【王都・トルネ村間街道の【ブラックウルフ】の群れの討伐】のクエストはどう？ ……………討伐系のクエストの中でも交通の維持も含まれているから報酬も良いし…………」

「成る程、確かに他の討伐系と比べても報酬が良いのです。……………って、葵ちゃん！ ……いつの間に!!？」

そう言つて私達にクエストを提案してきたのは、私の同士でありフレンドの日向葵ちゃんでした。

……………本当にいつの間にか近くに居たのです…………。

「……………私もちよつと冒険者ギルドにクエストを受けに行つて、偶々ミュウ達は目に入ったから声をかけただけ……………それより久し振りにフェイをモフラせて欲しい」

「良いですよ。フェイも上級エンブリオになってから肌ざわりが良くなりましたのです」

『いやー。ちよつとミュウ待つて……………ああ!!？』



そう言うのと即座に葵ちゃんをフェイをモフモフし出したのです……相変わらず二人は仲が良いのです。

「ふーん。……最近の生態系の変化で王都周辺の街道に出るモンスターが増えてきたから、定期的にこう言うクエストが出されているみたいだね。……まあ王都とトルネ村間の街道は利用する人が少ないからか、他と所と比べて報酬は少ないけど」

「でも、普通の討伐系クエストと比べれば報酬も比較的良いみたいですし、何より人助けになるのです！」

「……討伐する範囲はそこそこ広いし一人だとキツイから、一緒にやりたいんだけど……ダメかな？」

「大丈夫なのです！一緒にやろうなのです！」

「他に良さそうなクエストも無いから別に良いよー」

そういうわけで【王都・トルネ村間街道の【ブラックウルフ】の群れの討伐】……クエストスタートなのです！



「《インパクト・ストライク》！」

「《気功闘法》《ストレート》！」

『G A A A !!?』

そうして今、私達は王都からトルネ村に続く街道の近くで十数匹程度の【ブラックウルフ】の群れと戦っているのです。

まず姉様のメイスによる一撃が一匹の狼を叩き潰し、もう一匹を私が【武闘家】のアクティブスキルで自身にバフをかけた上で殴り倒しました。

「……《フレイムフィスト》」

『《ヒート・ジャベリン》！』

『G A A A !!?』

すぐ近くでは敵陣に突っ込んだ葵ちゃんが炎を纏わせたパンチ——  
拳士系統と魔術師系統の複合下級職【魔<sup>マジック</sup>拳<sup>ボクサー</sup>士】のスキル——で狼の一匹を倒し、その後ろから飛び掛かってきた敵をフェイが葵ちゃん



そんな事を考えていると遠くの方から悲鳴が聞こえて来たのです。

「……………悲鳴？」

「姉様！」

「うん、行こうかみんな。……………あとミユウちゃんは現場に着いたら必殺スキルを使うことになるだろうから準備をしておいてね」

「分かったのです！」

「分かったよ！」

そうして私達は悲鳴が聞こえた場所に駆け出して行ったのでした。

◇

『『G A A A !!?』』』

「ヒイイイ〜ッ!?」

『クツ！ 数が多過ぎる!!?』

悲鳴が聞こえた場所にたどり着いた私達が見たものは、三十四匹以上の「ブラックウルフ」に囲まれて横転した馬車と、それに乗っていたらしい数人の人間、そして彼らを守って戦っているフルフェイスの兜を被った一人の男性でした。

……………あの戦っている人は多分「ヘマスター」だと思います。……………だって兜のデザインがプリキ○アの三十分後に放送している仮面ライダーにそっくりですし、その近くに「ヘエンブリオ」らしきバイクが置いてあるのです。

あと、ティアンの方にも武装した人が二人程居ましたが、怪我をして倒れているのです……………その彼らを守っているので仮面ライダーさん（仮）は苦戦しているようなのです。

「私がああ群れを殲滅するから二人はティアンの人達の怪我の治療と護衛をお願い。……………それとこの後本隊が来るだろうから、ミユウちゃんはその時点で必殺スキルの発動を」

「分かったのです！」

「……………了解」

『分かった！』

「お願いね！……《竜尾剣》《テンペスト・スマッシュ》！」

そう言った姉様は、背中の剣尾を伸ばしてティアンの人達に襲い掛かろうとしていた「ブラックウルフ」を切り裂き、そのまま群れの中に飛び込み風を纏ったメイスでもって敵を馬車から離れた所へ吹き飛ばしていききました。

……その隙に私達は残りの敵を蹴散らしつつ馬車の方に近づきました。

『君達は……！』

「通りすがりのへマスターなのです、覚えておくのです！ フェイ！」

『《フォースヒール》！』

「………とりあえずズズキさん謹製のポーションを使おう……」

「おお……！」「傷が……？」

フェイの上級回復魔法と葵ちゃんのポーションが傷ついた人達を治していくのです。

………そして、そうしている間に姉様が周りの敵を殲滅し終わっていたのです。

『助けてくれて感謝する。……俺はマスクド・ライザー、この辺りをパトロールしていたら彼等がモンスターに襲われているのを見かけて助けに入ったのだが………何分相手の数が多くてな……』

「礼なら後で受け取るよ。………それにまだ終わっていないし………ミユウちゃん」

「《気功闘法》《アクセラレイション》《ブーステッドパワー》《ディフェンスアップ》」

『《エンチャント・ストレンジス》《エンチャント・エンデュランス》《エンチャント・アジリティ》』

『一体何を………ッ？！』

私とフェイは仮面ライダーさん………ライザーさんの話を聞きつつも姉様に言われた通りに、必殺スキル発動の準備として私に各種アイテムや魔法などによる单体ステータスバフを掛けていったのです。

………その行動を訝しんでいたライザーさんも迫ってくる気配

に気づいた様なのです……………気配がした方向からは五十匹を越える数の「ブラックウルフ」と、それを指揮するリーダーがいたのです。『純竜ドラグダークネスウルフ闇狼!?だど!?? ……それに「デミドラグブラックウルフ亜竜黒狼」が三体もか!!?』  
「なっ!!?」「そんな……………」

純竜級モンスターと、それに率いられた亜竜級モンスター三体の出現にティアンに人達の顔は絶望に染まりました。

……………向こうの足はかなり早いので、ティアンの人達を守るためには早急に一匹残らず殲滅する必要がありますのです。

なので姉様はすぐに指示を出して行きました。

「ライザーさんは私達とパーティーを組んでアイツらの殲滅。ボスは私が倒すから三人は「デミドラグ亜竜黒狼」をお願い。ティアンの皆さんはなるべく一箇所に固まって動かないように、戦える二人は皆さんの護衛に集中してください。……………時間が無いので急いで!!?」

『あ、ああー!』

「わっ分かりました!」

姉様の指示にパニックになり掛けていたティアンの人達が従って行きます……………こういう時には強く言ってしまうと言う事を聞かせられますからね、流石です姉様。

【マスキド・ライザーからパーティー加入申請が届きました】

【パーティー加入を許可しますか? Yes/No】

当然Yesなのです……………これで準備は整ったのです。

「ミュウちゃん、お願い」

『《エコー・オブ・トウワイズ》……………ミュウ!』

「行くのです! フェイ!」

そして最後に自身に掛かっている全てのバフ効果を倍加させて、フェイが私の肩に乗り……………私とフェイの必殺スキルが発動したのです。

『《我等ラフェが成るは光の使者リ》!!?』

その宣言と共に私とフェイが一つとなったのです。その姿は髪の毛とフェイと同じ色のメッシュがかかり、瞳も片方がフェイと同じ色をした私の姿なのです。

……………これが私達の必殺スキルの効果である『私とフェイを融合させる事』なのです。この状態になるとステータスが私とフェイのものをそれぞれ合計したものになり、スキルも二人が使えるものは全て使える様になるのです。

……………まあ、フェイのステータスはMP以外はAGIが少し高いぐらいですし、私が物理アタッカーなのでMPが低い事もあって自身自身の戦力はさして上がりませんが……………メインの能力はこれでは無いのです。

「それじゃあ行くね……………疾ツ!!?」

『『G A A A ! ? ? 』』』

そう言っただけで姉様が超音速機動で群れに突っ込んで行き、敵を文字通り蹴散らして行ったのです。

……………これが私達の必殺スキル第二の効果、『自身に掛かっている全てのバフ効果をパーティーメンバー全員に適用させる』事なのです。

この効果により私に掛かっていた強力なバフ効果が私より圧倒的に高い基礎ステータスを持つ姉様にも適用され、そのステータスはAGIが一万に迫り、STRに至っては二万を優に越えるのです。

……………そんな光景を見た【亜竜黒狼】の一匹が姉様に襲いかかって行きますが……………、

「邪魔、《スマッシュユメイス》」

『GA……………』

それを先読みしていた姉様が無造作に放ったスキルによって瞬時にミンチにされ、そのまま姉様は【純竜闇狼】に向かって行きました……………正直、姉様一人でいいんじゃないでしょうか。

「……………おっと！ そんな事を考えている余裕は無いのです……………二人共、姉様のお陰で敵は浮き足立っているのが今がチャンスなのです。このスキルの効果は五分しか持たないので早めに決着をつけるのです！」

「分かった……………【亜竜黒狼】の一体は私が倒すから、ミュウは護衛をお願い……………ミュウのバフが切れたら詰むし……………」

『それなら、もう一体は俺が請け負おう。……行くぞ！ ヘルモード！……』《ストーム・ダッシュ》!!?』

そう言ったライザーさんは自身の「エンブリオ」であるバイクに乗り、スキルを発動して上で敵の群れに突っ込んで行ったのです。

スキルの効果もあつてか、道中の「ブラックウルフ」達を片っ端から弾き飛ばしながら「亜竜黒狼」に向かって行きました。

……そして、それに気付いた「亜竜黒狼」がライザーさんに飛び掛かってきたのです。

『G A A A !!?』

『ムッ！……トウツ!!?』

しかし、それを見たライザーさんは乗っていたバイクを足場にして同じ様に跳躍したのです。

『《ライザーアアキイイック》!!?』

『G A A A A A !? ?』

そしてそのままバイクの加速と跳躍の勢いを上乗せした跳び蹴りが「亜竜黒狼」に突き刺さったのです。

………凄いです！ 生ライダーキックとか初めて見たのです！ しかもバイクから跳躍してのコンボ技なのです!!?』

当然、その必殺のキックを受けた「亜竜黒狼」は跡形も無く爆散したのです！（してません。普通に倒されて光の塵になっただけです

by フェイ)

「………時間が無いから出し惜しみはしない………」サンシャイン・アップソーブション『日 天 吸 蓄』

解放………全力全開『フレイルムフィスト』

『G A A A !』

葵ちゃんの方を見ると、さつき見た時よりも十倍以上大きな炎を纏わせたパンチで「亜竜黒狼」を焼き払っていたのです。

………やっぱりああい属性があつた方が魔法少女らしいのです………しかし！ 必殺スキル使用中の私はフェイが覚えている魔法も使えるのですよ!!?』

と、言うわけで「ブラックウルフ」達が馬車に近づいて来るまで少し時間があるので、魔法を使って攻撃するのです。

「……ッキュアアップ・ラパパッ！ 《マッドクラブ》！ ……ッル  
パッチ・マジック・タッチ・ゴーッ！ 《ウインドカッター》！ ……  
「マジ・マジ・マジカ」！ 《ファイアーボール》！」

『《ヒート・ジャベリン》 ……ミユウ、今の《詠唱》は？』

「私が知ってる魔法の呪文なのですよ？ ……やっぱり『リリカル・マジカル』とかの方が良かったんです？」

『 ……ミユウの好きにすればいいんじゃないかな ……』

そんな会話をしつつ、敵の群れに向かって魔法を打ち込んでいきます ……ちなみに融合中も私とフェイは別々に意識があるので、今みたいにスキルを二人で並行して使うことも可能なのです。

……どうやら敵のボスと姉様の戦いもそろそろ決着がつきそうなのです。

「これで終わりだよ！」

『！ ……G A A A A !!?..』

姉様が【純竜闇狼】にトドメを刺そうと突っ込んで行くと、それを待っていた相手が今まで温存していた闇属性のブレスを放ったのです。

……それを相手に向かって走っていた姉様は避ける事が出来ずに飲み込まれ ……、

「《インフェルノ・ストライク》!!?..」

『!?!?..』

それすらも先読みしていた姉様は特典武具【ブラックオーツ】のスキル《闇纏》でブレスを透過して突破し、それに動揺した相手に炎を纏ったメイスによる攻撃を叩き込み粉碎しました。



あれからボスを失って烏合の集と化した【ブラックウルフ】の群れは間もなく討伐されました。

そして私達はそのままティアンの人達をトルネ村まで護衛しました。どうも王都からトルネ村に向かう途中で襲われた様なのです。



『今回は本当に助かった。君達が来てくれたお陰でテイアンに犠牲が  
出ずに済んだよ』

「いえいえ、どういたしまして」

「……………たまたま通りすがっただけだから……………」

「へマスターへ 同士は助け合いなのです」

どうもライザーさんは日課のパトロールの最中に、あの馬車が襲わ  
れている場面に遭遇したようなのです……………やっぱり良い人なの  
です。

……………どうやら姉様も同じ事を思ったようなのです。

「じゃあライザーさん、私達とフレンド登録しませんか？」

『俺とかい？』

「はい！ 日夜パトロールをして人々の為に戦っているライザーさん  
は凄くカッコ良かったのです！ だから友達になりたいのです!!？」

『！……………分かった。じゃあフレンド登録をしようか……………今  
回は本当にありがとう』

こうして、また一人私にこのへ Infinite Dendrog  
ram での友達が増えたのでした。

## 兄の挑戦・へマスター杯 戦いの前・回想

□決闘都市ギデオンの第三闘技場 【高位ハイ・ジエム・マイスター魔石職人】レント

俺がへInfinite Dendrogramを始めてから現実では二カ月、こちらの世界では半年程経ったある日。俺ことレントは決闘都市ギデオンの第三闘技場、その決闘の舞台に繋がる東門の前に立っていた。

『会場の皆様あ！ お待たせいたしましたあ！ 只今よりギデオンの決闘トーナメント、へマスター杯の第一回戦を開催いたします!!?』  
そのアナウンスの後に会場の方からかなりの歓声が聞こえてくる……流石に決闘王者防衛戦程じゃないが結構な人が観にきているみたいだな。

『このへマスター杯は文字通りへマスターのみが参加するトーナメントです！ ……今から約半年程前、これまでは伝説の中の存在だと思われてきたへマスターが世界中に現れた事は皆さんも記憶に新しい事でしょう！ このトーナメントにはその中から選ばれた十六人のへマスターが参加し、その力を競い合うのです!!?』

そう、俺は何故かそのへマスター杯に選手として参加する事になってしまったのだ。

……事の始まりは、デンドロ口内で約二週間程前に遡る……。



「へマスター杯、ですか？」

「ああ、大体二週間後にギデオンで開かれる予定だから、アンタには魔術師系ギルドの推薦枠で、私達魔石職人ギルドの代表として出てもらいたいのさ」

ある日のこと、俺はいつも通り魔石職人ギルドでクエストをこなし

ていたのだが……突然ギルドマスターのミレーヌさんに呼び出されて、今度ギデオンで行われる「マスター」杯とやらへの出場を打診されたのだった。

「しかし、何でそんな「マスター杯」なんて開くことになったんです？ それに魔石職人ギルドは生産系のギルドでしたよね？」

「……………まず「マスター杯」に関しては以前から王宮の方で話し合われていた、この国でのティアンと「マスター」の関係についての会議でそういう話が出たのさ」

ミレーヌさん曰く、こちらの時間で半年程前から急速に増えた「マスター」達によつて、この王国で良くも悪くも様々な問題が起きていた。

そこで、今後王国が「マスター」達とどう付き合っていくべきかを話し合う会議が開かれる事になった。その会議には王族・貴族・騎士団だけでなく、普段から「マスター」達がよく利用している各ギルドからも参加者を募つたらしい。

「その会議に魔石職人ギルドの代表として私が出席したわけさ。王宮にいる【大賢者】様には昔世話になった事があるしね。……………その会議で一般ティアンと「マスター」の間に割りと大きな溝がある事が問題視されたんだよ」

要するに奇行に走る「マスター」や犯罪行為を行う「マスター」のせいで一般のティアンが「マスター」達に抱く印象が悪くなっている、という話が出た様だ。

そこで、この国の王様が一般ティアンに対する「マスター」達への印象を良くすることは出来ないかと参加者に聞いたらしい。

……………まあ、ティアンと「マスター」の関係の悪化はこの王国にとつてはデメリットでしかないからな。

「「マスター」にも良い悪いがあるつて事を分かっているティアンもいるけど、今のところ大部分のティアンはそうじゃないからねえ」

「まあ「マスター」が増え始めてからまだそんなに時間は経っていませんし、人はどうしても悪い方に目が向くものですから」

「そういう訳で色々話し合ったんだが……………そこで【大賢者】様がこ

んな提案をしたのさ「へマスター」同士で戦う決闘トーナメントなどを開いたらどうでしょう」とね」

その【大賢者】曰く、『王国が主体になってその様な催し物を開けば、王国とへマスター」の関係は良好であると一般の民衆に示すことができます。そうすれば王国の民達もへマスター」達の事を受け入れ易くなる筈でしょう』との事。

また『殆どのへマスター」は戦いを生業にしている様ですし、決闘トーナメントという形式であれば参加する者も多いと思われれます。更にその大会で上位に入った者に高い報酬を支払えば、へマスター」達が王国に向ける心象も良くなるでしょう』とも言ったらしい。

「その提案に国王様とギデオンの領主様、他の貴族達も賛成してね、そんなこんなでへマスター杯」の開催が決まったのさ」

「成る程……………それで何故俺に？俺は決闘とかには出ていませんが」

「それについては大会に出場するへマスター」達は実力と信頼を兼ね備えている者を選ぶほう、という話になってね。各ギルドからもそういう「マスター」が居れば推薦してほしいと言われたんだよ。……………それに【大賢者】様が『普段決闘をやっているへマスター」だけでなく、他にも色々なへマスター」の戦いが観れた方がトーナメントも盛り上がるだろう』と言ったからねえ。お陰で魔術師系のギルドにいるあの方の徒弟達が張り切っちゃって」

確かに、普段決闘の試合で見れない様なへマスター」が居た方がトーナメントは盛り上がるだろうが……………

「別にミレーヌさんはそんなにやる気には見えませんが」

「まあ私はあの方には昔世話になった事はあるが、別に徒弟って言うほどでもないしねえ。……………それにあの方にとって本当の意味で弟子と言える人間は、王国には一人しか居ないだろうしね」

「？それは一体……………」

「ああ、すまないね。……………ちよつと独り言が漏れてしまったよ、忘れとくれ。……………アンタを推薦した理由だが、まず一つにこの魔石職人ギルドで戦えるへマスター」がアンタぐらいしか居なかったのさ」

まあ【魔石職人】は生産系のジョブだからな。戦いも出来る人間はあまり多くないだろうけど。

「それと二つ目は以前アンタが言っていた『【ジエム】生成貯蔵連打理論』だっけ？ その宣伝をしてほしいのさ」

「……………大会で【ジエム】を使って勝ち進め、と？」

「そういう事。アンタが考えた理論なんだから、アンタが一番実践しやすいだろう？ ……………あれから中々【魔石職人】を目指すへマスタアが増えなくてね、トーナメントに乗っかってうちのギルドの宣伝をしたんだよ」

「まあ、へマスタア達の間で『最強ビルド論』が本格的に流行りだすには、もう少し時間が必要ですし……………」

今の最強ビルド論はまだ、こんなジョブビルドが強いのではないか」という案が出ている段階で、それが本格的に流行りだすにはこのゲームのジョブやへエンブリオの情報があ程度出揃ってからだろうからな。

……………しかし、ミレーヌさんの主目的は魔石職人ギルドの宣伝か。確かに大会で【ジエム】を使って好成绩を残せば宣伝にはなるだろうが……………」

「今の俺だと『【ジエム】生成貯蔵連打理論』を行うのは難しいですよ。……………まだ【高位魔石職人】になっただばかりで強力な【ジエム】を殆ど貯蔵出来ていませんし」

そもそも俺が【ジエム】を作るのは魔石職人ギルドの納品クエストの時ぐらいだからな。自分で使う用の【ジエム】も多少は貯めているが、実戦で【ジエム】を投げまくれる程じゃない。

……………それにまだ上級職の奥義クラスのジエムは作れないし。

「ああ、それなら問題ないよ。……………今回の推薦は魔石職人ギルドのギルドマスターである私からのクエスト、ということになっていく。だから、その報酬を前払いで支払うからねえ……………ほれ」

「これは腕輪……………型のアイテムボックスですか？」

「そうさ。それも即時放出機能付きのね、戦闘で【ジエム】を使うなら必須のアイテムさ。……………まあ報酬のメインはその中身だけどね」

「そう言われてその腕輪の中身を見ると……………これは……………」

「……………これはトーナメントのルール上大丈夫何ですか？」

「トーナメントのルールは普段やっている決闘と同じだからねえ。消費型アイテムで使用禁止なのは身代わり系か回復系のヤツだけさ。」

「……………回復魔法以外の【ジエム】なら使い放題だよ」

「そういう意味ではなく……………こんな大量の【ジエム】を推薦した選手に渡すのは大丈夫なんですか？」

「そう、アイテムボックスの中に入っていたのは各種魔法が込められた【ジエム】だったのだ。」

「しかも上級職の奥義が込められた【ジエム】もいくつかある……………この中身だけでも一千万リル以上するんじゃないか？」

「ん？ 魔石職人ギルドのギルドマスターがクエストの報酬に【ジエム】を使う事に何の問題があるんだい？ ……………それに中身は大会で上位に入った時用の追加報酬と、今は参考資料として貸しているだけの上級職奥義入り【ジエム】さ。だからトーナメントが終わって一回戦負けとかしたら全部返してもらおうよ。……………そういう訳で中身は消費しないでくれよ？」

「……………要するに借りた【ジエム】を消費さえしなければどう使ってもいいと」

「そういう事さ。……………例えば決闘の結界内部で使うとかなら別に構わないよ。あの結界は試合終了後に消費したアイテムも含めて全て元どおりになるからねえ」

「そう言ったミレーヌさんは実にイイ笑顔を浮かべていた……………完全に決闘の結界の仕様を悪用しているよなあ。」

「分かりました、そのクエストをお受けします。……………それでトーナメント中はどの程度【ジエム】を使えばよろしいのですか？」

「せっかくのお祭りだからなるべく派手に使ってほしいけど、それで負けたら元も子もないからねえ。……………そのあたりの判断はあなたに任せるよ」

「承知しました」

「……………さて、出場すると決めた以上全力で取り組まなければな

……まずは新しいジョブの取得からかな。

「クエスト〔ヘマスター杯〕での魔石職人ギルドの宣伝 難易度・四」が発生しました」

「クエスト詳細はクエスト画面を」確認ください」

◇

と、そんな事があつてこの「ヘマスター杯」に出ることになったのである。回想終わり。

（それから結構大変だったなあ。……特にレベリングが）

クエストを受けた俺は、まず「ジエム」生成貯蔵連打理論と相性の良いいくつかのジョブを取り、それらのジョブや「紅蓮術師」のレベル上げに「墓標迷宮」をソロでマラソンした……そのお陰で合計レベルが千を超えたりしたが。

また、その時に同じ様にソロで「墓標迷宮」に潜っていたファイガロさんに再会したりもした……その時の話だと彼やフォルテスラさんも今回の「ヘマスター杯」に出場するらしい。

……幸いな事にトーナメント表を見ると彼らは反対のブロックだったので、決勝まで行かなければ当たる事は無いようだ。

（あとはエドワード達「プロデュース・ビルド」にオーダーメイドの装備を頼んだり……）

更に今まで溜め込んだ資金や素材を放出して、「プロデュース・ビルド」にオーダーメイドの装備を発注した。

彼らもトーナメントで自分達が作った装備が活躍すれば良い宣伝になると、張り切つて高性能な装備を作ってくれた……その分値段も高かついたが

（お陰で今の俺は素寒貧なんだよなあ。……正直、上位入賞の報酬が無いとかなりキツイ）

ま、まあ今回のクエストが上手く行けば王国での「ジエム」の需要はかなり上がる筈だし、そうすれば作った「ジエム」を売って金を稼げる筈だし（汗）

(宣伝の為にわざわざメインジョブを【高位魔石職人】にしたしな)

それにミレーヌさんは魔石職人ギルドの宣伝の為に、俺の事を【高位魔石職人】をやっているへマスターだと言って今回のトーナメントに推薦したらしい……………お陰で今回のトーナメント唯一の生産職と無駄に注目を浴びている。

……………俺は《オールスキル全技能》のお陰でメインジョブの変更によって戦力が変わる事は無いんだが。

(そのせいで優勝者予想の賭けでは俺の倍率が凄く高くなっていたしな)

今回のトーナメントのギャンブルは一試合毎に行われる勝敗予想と、このトーナメントの優勝者を予想するものの二種類が存在する……………そして、その内の優勝者予想の倍率は主に事前の評価によって決められるのだ。

ミカ曰く「お兄ちゃんが生産職とか詐欺の類いだよね。……………私は当然お兄ちゃんに賭けたけど」との事……………ちやつかりしている。

ちなみにミレーヌさん曰く、「うちのギルドの【高位魔石職人】のへマスターだとは言ったが、生産を専門にしているとは一言も言っていないしねえ。周りが勝手に勘違いしたただだよ……………私もアンタに賭けたからね。頑張ってくれよ」とイイ笑顔で言われた……………貴女、絶対確信犯ですよね？

(他にもミカに手伝いを頼んで、闘技場の結界内で貸してもらった【ジェム】の性能を確認したり、自分でも【ジェム】を生産したりもしたし……………出来る事は殆どやったな)

『それでは選手の入場です!!?』

……………どうやら試合開始の時間の様だな。

「……………ま、やるからには全力で行かないとな」

こうして俺のへマスター杯が幕を開けたのだった。



## 第一回戦・ガードナー獣戦士理論

□決闘都市ギデオンの第三闘技場

クラッシュヤー  
【壊屋】ミカ

「おおー！　ここが闘技場なのですね！　凄く大きいのです！」

『そうだね、ミュウ』

「ちなみに前行った中央闘技場はもつと大きかったよー」

今、私達は〈マスター杯〉に出るお兄ちゃんのお陰の為にギデオンの第三闘技場にきています。

……………ちなみに応援に来たのは私とミュウちゃんだけでは無くて……………。

「ギデオンの闘技場には初めて入りましたが……………凄いい人ですね」

「本当にねー。今までは資金不足でこういう所には来れなかったけど、これもレントさんのお陰だよ……………いっぱいオーダーメイドの装備を頼んでくれたからね」

「ああ……………レントの要望通りに、それもこのトーナメントに間に合う様に作るのはかなり大変だったかな」

「だが満足いくレベルの物は作れたしの……………それに儂等の作った装備が、この様な大きな催し物で活躍できるのには心が踊るわい」

そう、エルザちゃんと〈プロデュース・ビルド〉の皆さんもお兄ちゃんのお陰に来てくれたんだよ。

特に〈プロデュース・ビルド〉の皆さんは、自分達が作った装備が活躍する場面が見たい様でかなり盛り上がっているね。

『それでは選手の入場です！』

おっ、始まるみたいだね。

『まずは東の門から選手の入場です！……………魔術師ギルドからの推薦であり、なんと今回のトーナメント唯一の生産職！

ハイ・ジエム・マイスター  
【高位魔石職人】レントオオ——!!?』

そのアナウンスと会場からの歓声、更には入場用の音楽と共に東の門からお兄ちゃんが現れた……………前の決闘王者防衛戦より派手じゃない？　これも〈マスター〉の影響かな？

「兄様〜！　頑張つてなのです〜!!?」

「頑張つてレントさ〜ん！ 出来れば私の作った装備を活躍させてね〜！ あと今回の賭けで私のポケットマネーの半分を賭けちやつたからね〜。勝つてくれないと今後の生活が〜（泣）」

ミユウちゃんとターニャちゃんも声援を挙げている……………ターニャちゃんのは少し違う気もするけど。

……………すると頭を抱えたエルザちゃんが質問して来た。

「もう、ターニャだったら……………しかし、レントさんは生産職になつたんですか？」

「ん〜お兄ちゃんは【ジエム】の生産もやってるけど、メインは戦闘だよ……………今回は魔石職人ギルドの宣伝も兼ねているから、メインジョブを【高位魔石職人】にしているみたいだけど」

……………まあ、お兄ちゃんにとってメインジョブなんて大して意味は無いからね。相手の油断を誘う意味も兼ねて生産職つて事にしてるんじゃない。

「しかし、レントは今回のトーナメントでどこまでやれるんだ？」

……………色々と準備をしていたのは知っているが

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ、エドワードさん……………今のお兄ちゃんはかなり強いですし」

闘技場でお兄ちゃんの各種調整に付き合っただけ……………このトーナメントに限定すればかなりいい所までいけるんじゃないかな？

……………そんな事を考えていると、再びアナウンスが聞こえて来た。

『続いて西の門から入場です！……………このギデオンでの決闘ランキングを破竹の勢いで駆け上がっている期待の女戦士！ヒースト・オーガ【獣戦鬼】アマンダ・ヴァイオレンスウウ〜!!?』

アナウンスと共に現れたのは髪をポニーテールにした長身の女性だった。

彼女が現れると共に会場からは先程以上の歓声が巻き起こつた……………ギデオンの決闘に出場している以上、この街ではお兄ちゃんよりも有名だよ。

「ムムム、名前に兄様の相手はいきなり強敵そうなのです。………とところで【獣戦鬼】とは一体どういうジョブなんでしょうかな？」

「うーん、私も知らないなあ」

「………確か【獣戦鬼】は獣戦士系統の上級職ですね」

「知っているのか！ エルザちゃん!!？」

私とミュウちゃんが相手の聞きなれない相手のジョブについて話している、エルザちゃんがそのジョブについて教えてくれた。

「【獣戦士】ジャガーマンはタイムモンスターと一緒に戦う事を得意としているジョブだったはずです。………ジョブとしてはステータスの伸びも低く、スキルも従属キャパシティ内のモンスター一体の元々のステータスを、レベルに応じた割合だけ自身に加算する《獣心憑依》というスキルしか覚えません」

「………モンスターのステータスを自身に足せるんだったら結構強いんじゃない？」

「そうでもないです。………獣戦士系統の最大の欠点は従属キャパシティが異常に低い事です。なので強力なモンスターをキャパシティに収めたければ、それ以外のジョブを全て従魔師系統で埋める必要があります」

その結果として獣戦士系統は戦闘用のアクティブスキルを覚えられず、中途半端な前衛と従魔師にしかねないとの事………ティアンの場合では。

「でもへマスターへなら………正確にはとあるタイプのへエンブリオへを持つへマスターへなら、その欠点は克服出来るよね？」

「はい………おそらく彼女もそうなんでしょう」

「………ああ!!？ 成る程なのです！」

………これはお兄ちゃん、最初から厄介な相手に当たっちゃったかな？



□決闘都市ギデオン・第三闘技場

【高位魔石職人】ハイジエム・マイスターレント

今、俺は対戦相手のアマンダさんと決闘開始前の各種ルール確認を行っていた。

「それで？ メインジョブは生産職のままでもいいのかい？」

「……………今回は魔石職人として来ているので」

「ふーん……………まあ、相手が何であろうと全力で戦うだけさ」

そう言つて、ルール確認を終えた彼女は試合の開始地点へと歩いて行った……………少しは油断してくれると思つたが、そうはいかないか。

……………とりあえず俺も開始地点に戻つて行き、お互いに指定の場所に立った。

「……………来な！ 【ベヒーモス】!!?」

『G A A A !!?』

その言葉と共に彼女が紋章から呼び出したのは、全長五メートル程の四足歩行の魔獣だった……………やはりガードナーの〈エンブリオ〉か。

（何せガードナーは従属キャパシティがゼロだからな。……………従属キャパシティが少ない獣戦士系統の弱点が機能していない）

その上で彼女自身も槍を取り出して戦闘態勢を取つた……………従属キャパシティが必要無いからサブに戦闘用のジョブを入れる事も出来るよなあ。

あのガードナーのステータスも純竜級モンスターと同等かそれ以上だろうし。

（差し詰め『ガードナー獣戦士理論』かな。……………〈エンブリオ〉がガードナーである必要がある事以外はお手軽で強いビルドだし、これは今後凄く流行るだろうなあ）

そんな事を考えつつ、俺も戦闘の準備をしていった……………と言つても今回は魔石職人として戦うから、武器は装備せずにターニヤちゃんに作ってもらつた手套を両手に着けて、ミレーヌさんから貰つた腕輪型アイテムボックスを右手首に嵌めているぐらいだが。

……………そうしてひと通りの準備を終えると試合開始の時間が近

づいてきたようだ。

『それでは〈マスター杯〉第一回戦………試合開始イイ!!?』

その宣言と共に彼女達はこちらに向かって駆け出そうとし  
………。

「〈クイツクスロー〉」

それよりも早く、俺が新しく就いた【投手】<sup>ピッチャー</sup>のスキル——アイテムボックスから投擲用アイテムを即座に手元に呼び出して投げるスキル——によって【ジェム】〈タイダルウェイブ〉が彼女達に放たれた。

そして放たれた【ジェム】は、即座にその込められた魔法——  
【蒼海術師】<sup>ハイドロマンサー</sup>が使用する大津波を起こして敵を押し流す魔法——を解放した。

「なっ!??」

『GA!』

いきなり発生した大津波に対し、彼女のガードナーである【ベヒーモス】はその身体を盾にしてマスターを庇った。

………そうして相手の足が止まった隙に、俺はアイテムボックスから【ジェム】〈ストームウォール〉——【翠風術師】<sup>エアロマンサー</sup>が使用する相手に暴風を持続的に吹かせる魔法が込められた物——を取り出して投げ放った。

『GUUU!』

「ぐうう! 動けない……」

その結果、彼女達は大波と暴風に晒されて、その動きを完全に止めていた………この二つの魔法は効果範囲や持続時間に優れているが、威力自体は低い足止め用の魔法だ。

………そして、俺は【ジェム】〈ホワイト・フィールド〉——

【白氷術師】<sup>ヘイルマンサー</sup>の奥義が込められた物——を取り出し、

【空想秘奥】<sup>ブリュリーナク</sup>〈パワースロー・ジェム〉

スキルによる強化を施した上で、オリジナルスキル——【投手】の高威力投擲スキル〈パワースロー〉と【魔石職人】の【ジェム】強化系スキルを合成した、投げた【ジェム】の効果強化するスキル——を使って彼女に向けて投げつけた。

その【ジエム】は風に乗って彼女達の元まで飛んでいき……………着弾した場所を中心とする球状の空間を凍結させた。

『G A A A A A!』

「キヤアアア!」

その空間の中にいた彼女達は、あらかじめ濡れていた事もあり瞬時に凍りついていた。

……………だが、ガードナーの方にはダメージを与えられており【凍結】もしているようだが、彼女の方を《看破》してみるとHPが全く減っておらず状態異常にも掛かっていなかった。

「防御スキル……………いや、ガードナーがダメージや状態異常を肩代わりしているのか……………《フォースヒール》……………じゃあガードナーを先に潰そうか……………《バラージスロー》」

なので減ったHPを魔法で回復させつつ、手套の《自動装弾》機能を使って両手にそれぞれ四つずつの【ジエム】《ロックジャベリン》と【ジエム】《ライトニングランス》を取り出し、複数個の物体を一斉に投擲するスキルを使って投げつけた。

……………ターニヤちゃんに作って貰った、各種射撃・投擲補助スキルの付いた【射手の手套】はいい感じだな。高い金を払った甲斐があった。

『G A A A A A!?!?』

「ベファイ?!?」

「ふむ……………《召喚》——バルンガ」

投げた【ジエム】から岩と雷の槍が開放され、その全てが相手のガードナーに突き刺さった。

……………さて、流石にそろそろ反撃してくると思うから、壁役の【バルンゴレム】を出しておくか。

「チー! 《スパイラル・ジャベリン》!!?!?」

「おっと」

これ以上のダメージはマズイと判断したのか、ガードナーの前に出てきた彼女は反撃として手に持った槍を投げ放った。

その槍はスキルの効果で高速回転しており、壁にしたバルンガを

あつさり突き破る程の速度と貫通力を持っていたが、反撃を予期していた俺は回避する事ができた……………今の俺のAGIは「ヴァルシオン」をはじめとする各種装備補正も込みで四千はあるので、超音速の攻撃でも来ることが分かっているれば問題無く回避出来る。

……………さて、ダメージを肩代わりするということは、マスター諸共攻撃すれば「エンブリオ」に与えるダメージは倍になるよな。

「《ロング・ファストシユート》」

俺は即座に「ジエム」《ヴァイオレット・デイスチャージ》——

【紫電術師】エレクトロマンサーの奥義が込められた物——を取り出して、射程強化・弾速強化の投擲スキルを合成したオリジナルスキルを使って投げつけた。

……………その【ジエム】は亜音速を超える速度で彼女達の近くの地面に着弾して、

ガガアアアアアアアア——ツン!!?

「キヤアアアアアア!!?」

『G A A A A A A A A A!!?』

そこから放たれた大出力の紫電が彼女達を飲み込んだ……………とはいえ「エンブリオ」には《看破》が効かないから、どのくらいHPが減ったのかが分からないしな。

……………とりあえず【紅蓮術師】バイロマンサーの奥義が込められた、【ジエム】《クリムゾン・スフィア》（自作）を四個程取り出してつと。

「《バラージ・シユート》」

「えっ☒ちよっ!!?」

電撃が収まったところを見計らって、それらを彼女に向かって《バラージスロー》をベースとして弾速を上げたオリジナルスキルを使って投げつけた。

ドドドドオオオオオオオオ——オオオオン!!?

「キヤアアアアア——ツ！」

電撃で痺れて動けなくなっていた彼女にそれを躲す事は出来ず、炸裂した四発の《クリムゾン・スフィア》に飲み込まれそのHPはゼロになった……………よく見たらガードナーは既に消えていたし四個も

使う必要は無かったかな？

……まあ、決闘だし別にいいか。身代わり系や復活系のスキルとかを隠し持っているかも知れないし。

『……………し、試合終了おお——！ 勝者は【高位魔石職人】のレント選手！ 各種【ジエム】を駆使しての華麗な戦術で事前の下馬評を覆しての勝利です!!?』

……………どうやらちゃんと倒せたみたいだな。とりあえず【ジエム】も使いまくったし依頼は達成出来ただろう。

◇

試合終了後、結界の効果で復活したアマンダさんがこちらに話しかけてきた。

「いや〜。負けた負けた。まさかここまで手も足も出ないとわね〜。アンタ強いじゃんか!」

「……………いえ、最初の足止めが上手くいったのが大きかっただけですよ。貴女達が分散していればこうは上手く行かなかったでしょう」  
「あく、やっぱり最初は散開した方が良かったかな。……………ああべ  
ファイ、今回はアタシの指示ミスだからそんなに落ち込むんじゃないよ」

『GUUUU』

何の用かと思っただが、ただ少し話をしに来ただけだったようだ……………普通にいい人だし。

……………正直、今回の俺の戦い方は【ジエム<sup>貴い物</sup>】を大量に投げつけて相手を殲滅する、というちょっとアレな戦い方だからなあ。

「次からの試合も頑張りなよ。……………アンタに賭ければ儲かりそうだし」

「ありがとうございます。……………損はさせませんよ」

……………こうして、俺はどうかへマスター杯の第一回戦を突破出来たのだった。



## 第二回戦・メタゲーム

□決闘都市ギデオン・第三闘技場 【高位ハイ・ジエム・マイスター魔石職人】レント

どうにか第一回戦を勝ち抜く事が出来た俺は第二回戦に駒を進める事になり、今は出場者の待機場所である東門の前で試合が始まるのを待っていた。

………ちなみに一回戦が終わった後にミレーヌさんが会いに来て「中々良い戦いだつたよ。特に【ジエム】を上手く使って相手を封殺していたところとかね。お陰で魔石職人の宣伝は大分いい感じだからこの調子で頼むよ。………結果次第では報酬も上乘せするしね」と言われたりした。

「………アレもあの人なりの激励の言葉だったのかねえ。………お？」

そんな事を呟いていると、会場の方からアナウンスが聞こえて来た。

『それでは第二回戦の始まりです！ ……まず東門！ 第一回戦ではその華麗な【ジエム】捌きで事前の予想を覆し勝利した【高位魔石職人】レント選手の入場ですっ!!?』

そのアナウンスと共に門をくぐり舞台上上がると、会場がかなり大きな歓声に包まれた………【魔石職人ジエム・マイスター】の宣伝は中々上手くいっているかな？

『続いて西門から！ ……第一回戦ではその特異なへエンブリオングレイト・マジック・ファイターの効果によつて対戦相手を封殺し、決闘ランキングでもかなりの順位にいるへマスター！ ……クランへ月世の会のメンバー』

【大魔戦士】タチバナ・カケル選手です!!?』  
そんなアナウンスが聞こえると共に、西門から黒髪黒目の男性が現れた………へ月世の会のメンバーならじゃあ俺の事も知っているかな。

………そして舞台の中央でルール確認をしていると、対戦相手のタチバナさんが話しかけてきた。

「君がレントくんだね。ウチのオーナーからは色々話を聞いている

よ……………今日は良い試合にしよう」

「(ちん)そ、良い試合にしましょう」

色々も含む事がありそうな笑顔でそんな感じの事を言われた。月夜さん達に一体どんな話を聞かされたのやら……………多分、俺が生産職ではない事もバレているかな？

(さて、どう戦うか……………とりあえず初手で上級魔法の【ジエム】を叩き込んで様子見をするか)

……………そんな事を考えつつ、俺は試合の開始位置についた。

『それでは！ 第二回戦、試合開始イ!!?』

そのアナウンスと同時に俺は【ジエム】《ホワイト・フィールド》を取り出して投げつける……………のと、ほぼ同時に相手も《エンブリオ》のスキルを行使した。

「《クイックスロー》」

「《絶対平等決闘場》!!?」

そして俺の投げた【ジエム】が効果を発揮するよりも早く、彼が発動したスキルの効果によつて結界内は眩い光に包まれた。



□決闘都市ギデオン・第三闘技場 クラッシュヤー 【壊屋】ミカ

「なんか凄い光なのです、葵ちゃん！」

「……………アレはタチバナさんの《エンブリオ》の必殺スキル……………効果は詳しくは話せないけど、見ていれば分かる……………」

お兄ちゃんの第二回戦を観戦していた私達は、試合開始直後に使われた対戦相手のスキルの光に目を奪われていた。

……………ちなみに葵ちゃんは同じ《月世の会》メンバーの試合という事で会場に来ていたらしく、いつのまにかミュウちゃんの隣に座っていた……………本当にいつのまにか居たんだよね、私も気づかなかつたよ。

さて、葵ちゃんの発言だと相手に必殺スキルらしい光が消えて、そこに見えたものは舞台を円形に囲むようにして配置されて高さ数

メートル程の壁だった。

『壁……いや、〃コロッセウム〃と書いていたし円形闘技場か。………TYPEキヤツスルの〈エンブリオ〉だな』

珍しい戦闘型のキヤツスル………お兄ちゃんの言葉を借りれば円形闘技場の〈エンブリオ〉みたいだね。

………それよりも問題なのは相手の足元に転がっている【ジエム】の事だね。

「………お兄ちゃんの投げた【ジエム】が発動していないね」

「本当だ！………不良品かな？」

「そんな訳ないだろう……おそらく、これが相手の〈エンブリオ〉の能力なのだろう」

そんなターニヤちゃんの疑問に答えた訳では無いのだろうが、対戦相手のタチバナさんが話し出した。

『今、俺の〈エンブリオ〉【コロッセウム】の中では、スキルハンディキャップ・デュエル《禁則決闘》の効果で〃消費アイテムの使用〃及び〃魔法スキルの使用〃が禁止されている』

「成る程、そのせいで【ジエム】が発動しなかったのか」

「………でも、なんで話したのです？」

確かにね。相手が混乱している隙に攻撃すれば良いのに。

『ちなみに俺がこの事を話したのは、それがスキルの維持条件だからだ。………そうしなければ短時間でスキルの効果が消えてしまうからな』

『………成る程、大体分かった』

そう言ったお兄ちゃん是一本の短剣を取り出した………アレは以前〈プロデュース・ビルド〉で買った【シエルメタル・ショートソード】だね。

それに対して相手のタチバナさんも長剣を構えた。

「………って、ヤバイじゃん！今のレントさん【ジエム】も魔法も使えないって事でしょ!?!?」

「それだけじゃないね。………多分、矢も消費アイテムだから弓も使えないんじゃないかな」

上手くお兄ちゃんをメタって来てるね……………〈月世の会〉のメンバーならお兄ちゃんの普段の戦い方ぐらいは知っているか。

『レントくん、君の戦い方はオーナーや他のメンバーから聞いている……………主に弓と魔法を使って戦う後方支援型の〈マスター〉だよね……………だからその二つを封じさせてもらった』

『まあ、メタを張るなら悪くない選択だな……………この試合では依頼を達成出来ないな』

やや残念そうな顔をしたお兄ちゃんはもう一本の短剣を取り出した……………あつちは見た事ないね。

『ほう、儂等が作った「ミスリル・ショートソード」の方も使うか』  
「出番があつて良かったな……………このまま「ジエム」を投げるだけになると思っていたし」

「二人共のんびりしすぎでしょ！ レントさん大ピンチじゃない……………一回戦で手に入った賭け金、全部レントさんに突っ込んだのに!!？」

「……………ターニヤ、ちょっと黙っていきましょうか？」

大負けのピンチに騒ぎ出したターニヤちゃんを、エルザちゃんが物凄いい笑顔で黙らせました……………これから、エルザちゃんは怒らせない様にしよう。

……………そんな事を考えていると葵ちゃんが話しかけてきた。

「……………二人は随分と落ち着いているね……………？」

「私達はそんなに大金をかけている訳じゃないしねー」

「それに、兄様ならこのぐらいなんて事は無いのです！」

そう言いつつ舞台の方を見ていくと、お兄ちゃんとタチバナさんが斬り結んでいるところだった。

『はあっ！ 《スラツシユエツジ》！』

『《ダガーパライ》……………《スリーピング・ファンク》』

そこでは相手が放ったアクティブスキルによる斬撃を右手に持った「シエルメタル・ショートソード」で弾き飛ばし、カウンターに左手の「ミスリル・ショートソード」での斬撃を繰り出しているお兄ちゃんの姿があった。

「兄様は普段は私達の援護の為に弓や魔法を中心に戦ってくれていますが……別に近接戦闘を苦手としている訳じゃ無いのです」

「お兄ちゃんはあらゆる事を人並み以上にこなせるからねー」

お兄ちゃんをよく私やミュウちゃんの事を「天災児」とか言うけど……自分だって昔は「神童」とか「天才児」って呼ばれてたんだよねー。

……そもそも、私は総合的にお兄ちゃんを上回る才能の持ち主なんて殆ど見た事がないからねー……強いて言うならシユウさんぐらいかな？

「へエンブリオ」の能力を含めると、ウチのお兄ちゃんに苦手な事っていうのは無いからね。……メタは凄いい貼りにくいよ」



□決闘都市ギデオン・第三闘技場 【高位魔石職人】レント

「《パラライズ・フアング》」

「くっ!?」

俺はタチバナさんの斬撃を右手の「シエルメタル・ショートソード」で捌き、左手の「ミスリル・ショートソード」を使ったアクティブスキル——【盗賊】<sup>バンディット</sup>の相手を麻痺させる短剣用スキル——で斬りつけた。

……この「ミスリル・ショートソード」もいい感じだな。「シエルメタル・ショートソード」と違って攻撃重視に調整してあるし、この剣を使った状態異常スキルを強化する《状態異常強化》のスキルも付いているから【狩人】<sup>ハンター</sup>や【盗賊】のスキルとも相性が良い。

……今は効果を発揮しなかったが所詮は乱数だから！俺が【狩人】のジョブを取っていると知っていたらポピュラーな状態異常には対策を取っているはずだし！

「魔法と弓がメインじゃなかったのか!?」《スクエア・エッジ》！

「よっ！ とっ！ とっ！ と！ ……弓兵や魔術師や魔石職人だって状況次第では剣を使って戦う事もあるだろう……よっ！」

質問と共に放たれた相手の四連続の斬撃を右手の短剣で捌きつつ、反撃に左手の短剣で斬撃を放ちながら適当にどこかで聞いた事の様な様な答えを返した……………やっぱり、全体的なステータスは特典<sup>【ヴァルシオン】</sup>武具のお陰でこつちが上回っているな。

……………相手のジョブビルドは魔法と物理の両刀型、それはつまり物理的なステータスにおいてはそれに特化した相手と比べれば劣ると言う事……………まあへエンブリオの能力で物理と魔法のうち相手が得意な方を封じて、その逆の相手が苦手な部分で戦う為のビルドなんだろうけど。

「悪いが俺は近接戦闘も出来るぞ……………《ポイズン・フアング》！」

「グウツ！……………クソツ！【毒】か！」

やや動揺している相手に左手の短剣を使ったアクティブスキル——【盗賊】の毒の追加効果がある短剣用スキル——で斬りつけて、【毒】の状態異常を入れる事に成功した……………でも【毒】は固定ダメージの状態異常だから、このレベルの戦いだと大した効果はないんだよなあ。

（技術面でも決して弱くはないんだが、ミュウちゃんやフィガロさんやフォルテスラさん達みたいに飛び抜けてはいないな……………精々が直感抜きのミカと同じぐらいか）

……………さて、相手に状態異常が入ったお陰で動揺が広がっているから一気に攻めようか。

「《ラピッド・フアング》！」

「くっ！……………《パワースラッシュ》！」

「《ダガーパライ》！」

俺が放った左手の短剣による連続斬撃を相手はなんとか回避して、そのまま反撃の斬撃を打ち込んできたが、それを再び右手の短剣で弾き飛ばした……………あとは武器性能の差も大きいかな、今まで溜め込んできた金を殆ど使った甲斐はあった。

……………おっ、剣を弾いた衝撃で相手の体勢が崩れたな。

「《トリニティ・フアング》！」

「グウツ！？」

なので相手の体勢が崩れた所に、左手の短剣によるオリジナルスキル——【盗賊】で覚えた【毒】【麻痺】【強制睡眠】の状態異常を与え、短剣用スキルを融合させたもの——で斬りつけた……………。罹っているのは【毒】だけか、やっぱり【麻痺】と【睡眠】には対策を取っているな。

……………あんまり長引かせて相手が冷静さを取り戻すと、近接用のスキルの差でこっちが不利になるかもしれないからな。とりあえず左手の短剣で切り込む……………、

《ハイド・スロー》

「ガアツ!? 目がっ!!?」

フリをして右手の短剣を【投手】ピッチャーのスキル——威力・射程が低い代わりに投擲動作・投擲軌道を隠蔽するアクティブスキル——で投げつけて相手の左目を潰した……………。やはり消費アイテムの使用が禁じられただけで、装備している武器を投げる事までは禁じられていないか。

……………初めからずっと左手の【ミスリル・ショートソード】のみを攻撃に使って、攻撃時に右手の【シエルメタル・ショートソード】を相手の意識から外す作戦は上手くいった様だな。

さて、悪いが死角が出来た以上そちら側から攻めさせてもらおうか。

《瞬間装備》

「くっ! 死角から……………!」

俺は《瞬間装備》でアイテムボックスから短槍を取り出して、相手の死角になった左側に回り込んで攻め立てた。

それを嫌がった相手は一旦距離を取ったが……………。投擲が出来る相手に、しかも片目が潰れて遠近感が狂っている状態でそれは悪手だろう。

《空想秘奥》ブリュリーナック 《ハンティング・シユート》

「グハアツ!??」

なので容赦なく右手に短槍を空想秘奥スキルで強化した上で投擲し、相手の腹部に風穴を開けた。

……まだHPが残っているが、そのまま放置しておけば【出血】や【内臓欠損】で死ぬだろう。

「ぐっ……ウオオオオオオ!!?」

「むっ」

それを相手も分かっているのか、最後の力を振り絞って雄叫びをあげながらこちらに突っ込んできた。

……このまま逃げ続ければAGI差で捕まる事は無いし、先に相手が倒れるだろうが……流石にそれは興行的な見栄えに問題がありすぎるしなあ。

それにそういう根性のある相手は嫌いじゃないし……迎え撃とう。

「《スラツシユエツジイ》!!?」

「《ミスデイレクシヨ》……《ハンティング・エツジ》!」

その大上段から放たれた相手の斬撃を、俺は【盗賊】のアクティブスキル——自身の位置情報を僅かにズラすもの——を使って紙一重で躲し、そのままカウンターの斬撃で相手の首を跳ね飛ばした。

『……し、試合終了オオオ——!!? 勝者は【高位魔石職人】のレ

ント選手! 【ジェム】を封じられて窮地に陥ったと思われましたが、短剣を用いた近接戦闘でタチバナ選手を下しました!!? ……

ていうか本当に【魔石職人】なんですよね!!?』

「……今のメインジョブは【高位魔石職人】です」

……嘘はついていないよ……嘘はね。

◇

試合が終わった後、俺とタチバナさんは少し話をしていた。

「今回は完敗だったよ。……やはり情報収集が足りなかったのが敗因だったか」

「いえ、流石に【ジェム】と魔法と弓が使えなかったのはきつかったですよ」

……実を言うと封印されたのが“パッシブスキル”だったら



詰んでいたんだよな。必殺スキル無しだと俺は雑魚になるし。

「しかし、オーナーは大丈夫かな。……………克蘭ホームを買う為の資金稼ぎとして、俺の優勝にかなりの額のリルを賭けていたようだから」

「……………それはご愁傷様です、としか言えませぬね」

なんか賭けの半券をばら撒いて喚いている月夜さんと、それを見てニコニコ笑っている月影さんの姿が浮かんだが……………気のせいだろう。

「まあ賭けたのは自分のポケットマネーだし、そこまで問題にはならないだろう。……………オーナーが何かやらかすのは割といつもの事だし」

「……………そうなんですか」

……………思っていたよりも随分と愉快的克蘭なんだな、へ月世の会◇って……………。

「俺に勝ったんだからこのまま優勝を目指して、次の試合からも頑張ってくれよ。……………オーナーは君の優勝にも賭けていた筈だし」

「……………なるべく頑張ります」

……………とりあえずこれで準決勝進出だな！

## 準決勝・テンプレミラーマッチ

□決闘都市ギデオン・中央大闘技場

クラッシュヤー  
【壊屋】ミカ

ただいま、私達は決闘都市ギデオン最大の闘技場である中央大闘技場に来ています。この「ハマスター杯」の準決勝からの三試合はここで行われる事になっていいるんだよね。

私達もあらかじめトーナメントのチケットを全試合分買っておいたから、残り三試合も観戦する為にここに来たんだけど………そこで思わぬ人達と合流してしまったんだよね。

「さーて影やん、頑張つてレントくんを応援するえー。………レントくんに優勝してもらわんと、今日の賭け分の損失を取り戻せへんからな」

「そうですね。ご友人を応援するのは良い事でしょう」

そう言っているのは「月世の会」オーナーの月夜さんと秘書の月影さんである。この中央大闘技場に来た時にたまたま出会って、一緒に観戦する事になったんだよね。

………試合前にお兄ちゃんにも会って、アドバイスや激励の言葉をかけてくれたんだけど………。

「ククク………レントくんにはウチら<sup>月世の会</sup>が集めた他の対戦相手の情報を全て渡したからなあ………生産職（笑）扱いだつた所為で高くなつとつたレントくんのオッズなら、今日の負け分を含めてもお釣りが来るわあ………」

『………この女狐、アドバイスや応援する理由が不純過ぎるワン………』

………結構黒い事を言っている月夜さんにつっこんでいるのは、以前と同じ犬の着ぐるみを着たシユウさんだ。

どうも友人であるフィガロさんの応援の為にシユウさんも今回のトーナメントを観戦していたらしく、たまたま私達の近くの観客席にいたのでこちらも一緒に観戦する事になったのである。

ちなみにフィガロさんもこのトーナメントを勝ち抜いており、お兄ちゃんの試合の後に同じく勝ち抜いてるフォルテスラさんと準決勝

を戦う事になっています。

「そう言えば、シユウさんはこの大会には出なかったの？ 結構いいセン行けそうなのに」

『んー、俺は決闘とかはあんまりやってないからワンね』

「まあ、常時着ぐるみな不審へマスターへ筆頭のクマヤンが、有力テイアンからの推薦とか貰える訳ないしなー（笑笑）」

『俺だって好きで常時着ぐるみな訳じゃねーワン!!?』

……………どうもこの二人は以前からの知り合いのようで、出会った時からこんな感じの煽り合いをしているんだよね。

まあ、お互いに憎まれ口を叩いてはいるけども、そこまで険悪な関係という訳でも無いみたい……………腐れ縁の悪友みたいな感じ？

そんな会話をしていると、お兄ちゃんが出場する準決勝第一試合の始まりを知らせるアナウンスが聞こえてきた。

『皆さん！ 大変お待たせしました！ これよりへマスター杯へ準決勝第一試合を開始いたします!!?』

すると会場が大歓声に包まれた。やっぱり準決勝ともなると盛り上がりが違うね。

『まずは東門から選手の入場です！ ……………魔石職人ギルドからの推薦でやってきた今大会唯一の生産職！ 多数の高位魔法【ジエム】を使いこなしながらも、決闘常連のへマスターへすら降す卓越した近接戦闘技能を持つオールラウンダー！ 【高位魔石職人】ハイ・ジエム・マイスターのレント選手です!!?』

そのアナウンスによる紹介と共に東の門からお兄ちゃんが入場してきた。声援を送る観客に手を振っていたりしてるね。

……………まあ、お兄ちゃんは昔よく大会とかに出ていたから今更このぐらいで緊張なんてしないよねー。

『続いて西門から！ ……………冒険者ギルドの推薦によって今大会に出場し、数多のスキルを使い、更に剣と魔法を駆使して対戦手を降してきた、こちらにもまたオールラウンダーのへマスターへ！ マジックソードマスター』

【魔 剣 聖】オリーシユ・テンプレート選手の入場です!!?』  
その紹介と共に現れたのは長身で銀髪オッドアイのへマスターへの

男性だった……………え、えーつと……………。

「……………どこから突っ込めばいいんだ……………」

「テンプレオリ主ロールプレイヤーとか、完全にネタ枠の〈マスター〉やよねー」

……………正直、私が色々ツツコミ所のある〈マスター〉の登場に困惑していると、月夜さんが相手選手に対する実を射たコメントをしてくれた。

「……………と言うか推薦枠なんだね、あの人」

「私達〈月世の会〉が調べたところによると、普段は冒険者ギルドでさまざまなクエストを受けたり、市井のティアン達と積極的に交流したりしているようですね。……………なのでギルドからの信頼も厚いでしょう」

「同じネタ枠でもクマヤんより信頼度は上やねーwww」

『うっせーワン！ それに最近子供達にお菓子を配ったりしているから、いい着ぐるみの〈マスター〉として認知されている筈だワン!!?』

外見と名前は完全にネタ枠だけど、行動は非常に真つ当な〈マスター〉みたいだね……………まあ、この世界に“テンプレオリ主”なんて言う概念は無いから、ティアンには普通の良い〈マスター〉にしか見えないだろうし。

『やあ、君がレントくんだよな？ 王都の冒険者ギルドでは色々話を聞いているよ。今日はいい試合にしよう！』

『あ、ああ……………』

お兄ちゃんがルール確認をしていると、対戦相手のオリーシユ氏がすごく爽やかな笑顔で話しかけていた。

……………言っている事とやっている事は凄いまともなのに、元ネタを知っているとギャグにしか見えない……………！

「ところで月夜さん、あのオリーシユさんは一体どう言う戦い方をするのですか?」

「ん……………これまでの二試合を見ると、数多くのスキルを使って戦う万能型の〈マスター〉みたいやね」

「事前の調査によると複数のモンスターが使うようなスキルを使って戦っている、と言う情報があったのでモンスターのスキルをラーニング出来る〈エンブリオ〉だと思われます」

「なるほどー。……………テンプレオリ主で良くあるラーニング系スキルか」

まあ、〈エンブリオ〉は〈マスター〉のパーソナルから産まれるからね……………でも！ テンプレオリ主度ならお兄ちゃんも負けてない筈だし!!？

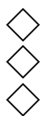
「となると……………万能型同士のミラーマッチになるかな？」

『手札の使い方と地力の強さで勝敗が左右されるワンね』

「でも、対戦相手の強化変身系必殺スキルと思われる能力の情報は渡しとるからな。レントくんならなんとかなるやろ」

二人の会話が凄く真面目なものになってる。どうやら試合が始まるみたいだね。

『それでは！ 準決勝第一試合……………試合開始イ!!？』



□決闘都市ギデオン・中央大闘技場 【高位魔石職人】レント

『それでは！ 準決勝第一試合……………試合開始イ!!？』

「〈クイックスロー〉」

「〈ウインドブレス〉！」

試合開始と同時に俺は【ジェムー〈ストームウォール〉】を投擲し、相手のオリーシュ氏は手のひらから風のブレスを放った。

その結果として解放された暴風は放たれた風のブレスに突き破られた……………《ストームウォール》は威力自体は低いからな。

(普通に良い戦術だな。初手が妨害系の魔法なら吹き飛ばせるし、攻撃系でも【ジェム】そのものを吹き飛ばして防御出来る。……………名前と見た目はネタまみれだけど、準決勝に上がって来ただけあって普通に強いな)

そして相手は風のブレスで暴風が相殺されたところから突っ込ん

できた。そこ以外は暴風圏だから、おそらく次の手は遠距離攻撃で牽制かな。

「《真空刃》！」

「《バラージ・スロー》」

予想通り相手は剣を振って複数の風の刃を飛ばしてきた。それに対して俺は八つの【ジエム】《ヒート・ジャベリン》を投げ放った。

……………投げた【ジエム】は即座に炎の槍に変わり、いくつかは風の刃に相殺されたものの残りが相手に向かって飛んで行った。

「くっ！ 《グラランド・ウォール》！」

相手は飛んできた炎の槍をスキルによって作り上げた土で出来た半球状の防壁で防いだ……………回避じゃ無くて防御を選んだか。

なので【ジエム】《ホワイト・フィールド》を取り出して、ジエム強化投擲オリジナルスキルを使って投げつけた。

「《パワースロー・ジエム》」

「くううっ！！？」

放たれた【ジエム】は相手の防壁を含む球状の空間を凍結させた……………土で出来ている以上、前は見えないだろうからな。

……………今の内に相手のステータスを見ておくか。

「《透視》《看破》……………成る程、メインジョブのレベルが百を超えているな」

おそらく上級職のレベル上限を外す固有スキルだろう……………それによる高いステータスとラーニングした各種耐性系スキルのお陰か、ダメージは思った以上に少ないな。

（俺と違ってちゃんとステータス補正もあるみたいだし、各種スキルによる補正も含めると俺よりもステータスは上か。……………だがこつちにはスキルと違ってノータイムで効果を発揮する【ジエム】があるし、このまま投げ続ければこちらが勝つな）

月夜さんには感謝しなければな、事前に情報が分かっている分戦術が立てやすいな。あとは必殺スキルをどのタイミングで使ってくるかだが。

……………何せ、相手はこれまでの二試合で必殺スキルを使ってから

十分以内で勝負を決めているからな。

「くっ……やはり冒険者ギルドで聞いていた通り相当な凄腕の様だね。……だがっ！俺も推薦してくれたギルドのみんなや応援してくれている人達の為にも！ここで負ける訳にはいかない!!？」  
「そ、そうか……今の内に色々仕込みをしておくか……《トラップ……》……《召喚》——バルンガ・ゴレムス・ブレイズ」

なんか凄いカッコいい事を言っているが、元ネタを知っているとギャグにしか見えんな……とりあえず今の内にオリジナルスキルによる罠を仕掛けて、召喚モンスターも出しておこう。

召喚したのはいつもの「バルーンゴレム」のバルンガに、新しく契約した「ウッドゴレム」のゴレムスと「エクスプロード・エレメントル」のブレイズである。

そして、自身と召喚モンスターを全体強化バフの魔法が込められた【ジェム】を使って強化していき、ゴレムスにはとある物を持たせておく。

「いくぞっ！これが俺とみんなの絆の力だ！

《英雄の輝きは絆の光なり》!!？」

《自動装弾》……疾っ！

……無駄にカッコいい事を言いながら必殺スキルを使った相手に対し、俺は【ジェム】《ライトニング・ジャベリン》と【ジェム】《フリーズ・ジャベリン》をそれぞれ四つずつ取り出して投げつけた。投げられた【ジェム】は雷と氷の槍となって相手に襲いかかったが……オリーシユ氏はそれらの攻撃を超音速で振るわれた剣で全て斬り払ってしまった。

「無駄だっ！今の俺にはその程度の攻撃は効かない!!？」

《看破》……レベルが大幅に上昇しているのか!!？」

必殺スキルを発動し黄金のオーラに包まれたオリーシユ氏を《看破》してみると、メインジョブである【魔剣聖】のレベルが五百以上になっていた……レベルを短時間だけ大幅に上昇させる必要スキルかな？

これだけの強化スキルだからデメリットもありそうだが……

時間制限とかならともかく事前コストなどのデメリットなら決闘では踏み倒せるからな。

「いくぞっ!!?」《猪突猛進》!

「くっ!」《ロング・ファストシユート》!

加速系スキルを使いこちら突っ込んでくる相手に対し、俺は高速長射程投擲のオリジナルスキルで「ジェムー《ヴァイオレット・デイスチャージ》」を投げつけた。

「甘い!」《アクセラレイション》! 《ブリーズ》!

「何っ!」……くそっ! バルンガっ行け!!?」

だが、速度強化スキルを追加発動し「ジェム」に接近したオリーシユ氏は、それを風魔法を使ってを発動前に他所へ吹き飛ばした……その結果「ジェム」はあらぬところで電撃をまき散らした。

とりあえず俺はバルンガをけしかけて時間を稼ごうとする……ちよつと焦ったフリをしつつ。

「無駄だ!」絆の力を得た俺がその程度のモンスターに止められるとでも……何イ!!?」

バルンガを斬り捨てようとしたオリーシユ氏は、事前に仕掛けてあった《トラップ・マッドクラップ》に引っかかりその足を泥の中に沈めた……バルンガは浮いているから引っかからないしな。

(情報通り、必殺スキルを使ってからは短時間で勝負を決める為に突っ込んできたな……このオリジナルスキルは指定した範囲に敵が入ってきた時に発動するスキルだから、相手の行動を読んで仕掛ける必要があつたしな)

……相手の行動を誘導する為に、そのロールプレイに合わせて「焦った敵」の演技もしてみたが、あんまりこういうのは俺の好みじゃないな。

「《バラージ・シユート》」

そこに間髪入れず「ジェムー《マッドプール》」「ジェムー《グランドホルダー》」「ジェムー《フリーズバインド》」「ジェムー《アクアネット》」などの各種拘束魔法入りの「ジェム」を投擲しその動きを縛った。



……………これで少しの時間は動けないだろうし、準備しておいた戦術が使えるな。

「さて、そんなに絆が好きなら、俺と召喚獣達の絆の力を見せてやろう……………行け、お前達」

その言葉と共に、まずバルンガがオリーシユ氏に纏わり付いてその動きを止め、その隙にゴレムスが相手に接近して持たせておいたアイテムを破壊した。

そのアイテム……………小型のアイテムボックスが破壊された事により、中に入っていた炎魔法が込められた大量の【ジエム】がばら撒かれた。

……………さて、俺が新しく契約した召喚モンスター【エクスペロド・エレメンタル】は炎属性のエレメンタルであり……………基本的に自爆攻撃に特化した召喚モンスターである。

「……………まあ、召喚モンスターこいつらの仕事は碎ける事なんだが」

俺がその場を離れると同時に、自爆モンスターであるブレイズが大量の炎属性【ジエム】がばら撒かれたところで爆発した。

ドツガガガアアアアアアアア——アアアン!!?

その爆発に周りの炎属性【ジエム】が誘爆して大爆発を起こした……………【ウツドゴレム】はステータス自体はそこまで高くはないが、今の様に複雑な戦術も取れる器用さがあるから、こういう戦術とは相性が良い。

「ちなみに、あの【ジエム】の中身はほとんどが範囲攻撃魔法の《エクスペロジョン》であり、奥義の《クリムゾン・スファイア》もいくつか入っていたのだが」

「ぐううう……………ま、まだまだ……………」

あの爆発を食らったオリーシユ氏は全身に【火傷】を負って、身体の一部は【炭化】しながらもかろうじて生きていた……………やっばり炎熱耐性系のスキルも持っていたか。

……………だが、それも想定済みだ。

「《詠唱》終了……………《空想秘奥》ブリューナク《クリムゾン・スファイア》」

俺はダメージで動きが鈍くなっていた相手に、事前に各種詠唱と空想秘奥スキルで

強化しておいた《クリムゾン・スファイア》を叩き込んだ……………俺が  
戦闘中に喋るのは、殆どが《詠唱》している時だからな。

「ぬわああアアアア——!!?」

その超強化された火球を食らったオリーシユ氏は断末魔の叫びを  
上げて消し飛んだ……………あの叫び声を聞くと、なんかこっちが凄い  
悪役の様に感じるんだが……………。

『しっ試合終了オオ——!!? 勝者は「高位魔石職人」のレント選手！

その容赦の無い戦術でオリーシユ選手を消し飛ばしましたくく!!  
?』

……………やっぱり、俺の方が悪役に見えるかなあ。



「今回は俺の完敗だったよ。……………俺に勝った君なら決勝戦も勝て  
るはずだ、応援しているよ！」

「は、はあ……………」

そう言っつて、オリーシユ氏は爽やかに去っていった……………最後まで  
でテンプレオリ主ロールは崩さなかったな……………。

(今回は月夜さんの事前情報があったから、相手を上手く嵌める事が  
出来たな……………あとで礼は言っておくかな?)

次の準決勝はフィガロさんとフォルテスラさんの試合か……………  
さて、どうなるかな。

## 決勝戦・VSファイガロ

□決闘都市ギデオン・中央大闘技場

ハイ・ジエム・マイスター  
【高位魔石職人】レント

「……………成る程、勝ったのはファイガロさんか」

準決勝第二試合、ファイガロさんとフォルテスラさんという見知った二人の戦いで、勝ったのはファイガロさんだった……………とは言え紙一重の差であり、どちらが勝ってもおかしくない実に見応えのある試合だった。

……………正直、俺の戦いは遠距離から【ジエム】を連打するか、作戦で嵌め殺しにするかだからあんまり見応えがなあ……………

「それはともかくとして、決勝の相手はファイガロさんになったわけだ。……………以前のミカとの戦いで、彼のへエンブリオの能力はおおよそ見当がついているが……………」

あの戦いでファイガロさんはミカの直感を上回る為に戦闘時間を引き延ばして自身のステータスを上げ、かつ最期の詰めでは装備の大半を外して速度を更に上げていた。

……………これらの事から彼のへエンブリオは「戦闘時間比例の装備品強化」と「装備数に反比例した装備品の強化」と推測される。

（単純なステータス強化なら装備品を外す必要はないし、へエンブリオの能力は大体テーマが決まっているからな。……………問題はファイガロさん自身の戦闘センスの方なんだが……………）

彼の戦闘センスは間違いなく規格外の領域にある。それとへエンブリオとジョブのシナジーによる高い汎用性もあって、間違いなくこれまで戦ってきた相手の中では最強だろう。

（規格外の才能の持ち主というのは、コッチの予想をあっさり超えてくるからなあ……………事前に立てた作戦は全部上手くいかないぐらいを想定するべきだな）

とりあえず短剣二本は腰に挿しておいて、へプロデュース・ビルドの皆さんに作ってもらった【鋼老樹の複合弓】も装備しておこう。もう魔石職人の宣伝の依頼は十分こなし、決勝戦ぐらいは今の全力で行こうか。

……………基本的な方針は超短期決戦で、勝ち負けはともかく三分以内に決着をつけよう。それ以上時間をかけたら100%負けるだろうし。

「あとは出たとこ勝負かな。……そろそろ時間か」

『これより！ 〈マスター杯〉決勝戦を開始いたします!!?』

……………会場の方から聞こえてきたアナウンスに答えて、俺は決勝戦の舞台に上がっていった。

◇

そして今、俺は舞台の中央でフィガロさんとルールの確認をしていた。

「久しぶりだねレントくん。……キミとは以前戦えなかったからね、楽しみだよ」

「……………魔石職人の宣伝は終わったので、決勝戦は今の全力で相手をお願いしますよ」

「……………へえ、それは本当に楽しみだね」

そう言ったフィガロさんはとても凄絶な笑顔を浮かべていた……………前から思っていたけど、この人って物凄い脳筋バトルマニアだよな……………

……………それだけの言葉を交わして、俺たちはルールの確認を終えて試合開始地点に着いた。

『……………それでは！ 〈マスター杯〉決勝戦……………試合開始イ!!?』

その宣言と同時にフィガロさんは弓を取り出して、こちらに矢を射かけた。それに対し俺は「ジェムー〈ストーム・ウォール〉」を三つ取り出し、それをその場で起動して暴風の壁を作り上げた。

……………更に俺も即座に弓を構えて、矢——当たった相手に麻痺効果をもたらす【麻痺蠍の矢】——を番えた。

「疾ッ！……………ッ!!?」

「〈スプリット・アロー〉！」

彼の放った矢は暴風の壁に遮られてこちらには届かず、俺の放った

矢は追い風を受けつつ分裂して襲いかかった。

………本来《ストーム・ウォール》は、こうやって自分に有利な条件を作る為の魔法だからな。

「《パラライズアロー》《スリーピングアロー》《ポイズンアロー》！」  
更に俺は状態異常効果のある矢とスキルを駆使して、彼に次々と矢を射かけていく。

………状態異常を警戒して一つでも装備枠を潰してくれれば御の字なんだが……。

「チイツ！……セエイ!!?」

だが、彼は襲いかかる矢に対して武器を斧に変更して、それから放たれた暴風で全ての矢を弾き飛ばした。

（あの斧は準決勝でも見た物だな。鑑定したら【旋嵐斧 フルゴール】という特典武器だったか………まさか！）

その本来の用途を思い出した俺は、即座に【ジエム】《エメラルド・バースト》——【エアロマンサー翠風術師】の奥義である極大の豪風を起こす魔法が込められた物——を取り出した。

………それとほぼ同時に彼はいくつかの装備を外した上で、その斧を大きく振りかぶった。

「《ブリューナク空想秘奥》《パワージエム・スロー》!!?」  
「ジャアツ!!?」

彼はそのまま【フルゴール】を全力で投擲し、それとほぼ同時に俺もスキルによる強化を施した上で【ジエム】強化投擲オリジナルスキルを使用した。

………そして嵐を纏った斧と【ジエム】から解放された豪風がぶつかって、舞台全体に暴風が吹き荒れた。

（これでは弓は射りづらいし、暴風の壁も全て吹き散らされたな。まさか接近する為だけに特典武器を使い捨てにするとは………どうも彼は初めから長期戦なんて考えていないらしい。………長期戦狙いで引き気味に戦ってくれたなら、その隙をつけたんだが）

そのフィガロさんは弾き飛ばされた特典武器に一瞥もくれず、暴風が吹き荒れる中を高速で移動してこちらに向かってきた………多分、風

除けのアクセサリーとかを使っているな。

……だが、確かに弓は使い難くなったが使いなくなった訳ではないな。

「《トリニティ・アロー》！」

「！ チツ!!？」

俺は《自動装填》スキルで【風除けの矢】を取り出して、三重状態異常のオリジナルスキルでもって射ち放った。

……《ストーム・ウォール》を使う以上、当然そういう矢も買ひ揃えてある。それに加えて手套と弓とジョブスキルにある《弾道安定》系のスキルを持つてすれば、風によるブレは最小限に抑えられる。

あとは風の流れを読んで射かければいい……これでも弓には多少の自信があるのでこのくらいは出来る。

「《ラピッドアロー》《ハンティングアロー》！」

「疾ツ!!？」

そうやって俺が各種スキルを使って次々と射かける矢を彼はある時は手に持った双剣で撃ち払い、またある時は体捌きで躲していく……こうもあっさり対応されると自信を無くすなあ。

だが、風も弱まってきたし……何より彼の足を止めることは出来たので、俺は四つの【ジェム】《ライトニング・ジャベリン》を取り出して投げ放った。更にそれに隠すようにとあるアイテムを即時投擲スキルを使って投げつけた。

「《バラージスロー》！ ……《クイックスロー》」

「疾イツ!!？」

投げられた四つの【ジェム】に対してフィガロさんは武器を鎖に切り替えて伸長させて、それらが発動する前に全て打ち払った。その結果放たれた雷の槍はあらぬ方向へと飛んで行った。

そして、それに隠していた最後の一つにも気づいて同じ様に打ち払おうとして……その【ジェム】ではないただの【閃光弾】が起動した。

「ツ!!？」

「《バラージ・シュート》！」

事前に目を閉じていた俺と違い、彼は直にその光を見てしまったの

で一瞬その動きが止まってしまった。

……その隙に俺は弓を手放して、『ジエムー《クリムゾン・スファイア》』を八つ取り出して投げつけた。

ドガガガアアアアアアアア——アアン!!?

解放された【ジエム】から放たれた爆炎がフィガロさんがいた場所  
一帯を焼き払った……それを見た俺は即座に《透視》スキルを使いつつ、『ジエムー《マッドプール》』と【ジエムー《マッドクラップ》』、更に【ジエムー《グランドホルダー》』を取り出した。

……《透視》スキルを使った俺の目には、予想通り以前見た黒い球体に包まれた彼の姿が見えた。

（やっぱりそのスキルで防いで来たか……それをどうやって使わせるかが問題だったんだよな）

そんな事を考えつつ、爆炎が収まり次第取り出した【ジエム】を片っ端から投げ込んで彼の周りを泥で沈め、更に土で出来た腕で黒い球体を掴もうとした……あらゆる攻撃を遮断する結界ならば攻撃以外で対応すれば良い。

……《マッドクラップ》もその上位魔法である《マッドプール》も、足を踏み込んだ相手を拘束する効果があるから動きを多少は封じられる筈だ。あとは相手がどう対応するのだが……。

「シッ！」

「そう来るか……《ロング・ファストシュート》！」

迫る《グランドホルダー》に対してフィガロさんは即座にスキルを解除して、その土の腕を足場代わりにして空中に飛び上がった……まあ、上に上がるか泥の上を走れる装備にするかの二択は予想していた。

なので、俺は手放した弓を拾いつつ【ジエムー《ホワイト・フィールド》』を空中にいる彼に向けて投げつけた。

「《断命絶界陣》！」

「！ チッ!!?」

それに対してフィガロさんは特典武器のスキルと思われるもので空中に剣の様な物を作って、それを足場にして泥の外に移動しつつ、

そのうちの一本を飛ばして俺が投げた【ジエム】を撃ち抜いた。

それにより俺と彼の間で《ホワイト・フィールド》が起動したので、俺は急いで距離を取りつつ弓を構えた……が、凍結して白く染まった空間から伸びてきた鎖に持つていた弓を絡め取られた。

「ツ!!?」 《高速召喚》ーバルンガ!!?」

慌てて持つていた弓を鎖が伸びてきた方向に投げ飛ばし、即時召喚のスキルでバルンガを呼び出して壁にした。

……その直後、凍結した空間を突き破って手持ち武器とブーツとアークセサリーのみを装備したフィガロさんが飛び出してきた。

(装備数反比例強化で魔法や凍結の耐性を上げて突っ切つて来たのか! ……でも、こんな大会でパンツ一丁になるとかバカじゃないのこの人!?)

そんな事を考えつつも俺は【ジエム】《ヴァイオレット・デイスチャージ》を取り出すが、彼は向かっていったバルンガを躲してこちらに突っ込んできた。

更に、こちらに鎖を放つて牽制し、距離を取らせないようにしてきた。

(……この距離じゃ広域攻撃の【ジエム】を使ったら自分も巻き込んでしまうな……じゃあ、俺ごと吹き飛ばすか)

俺は飛んできた鎖を開いた手で掴み取り、そのまま全力で引つ張つて彼をこちら側に引き寄せ……それと同時に逆の手に持つていた【ジエム】を地面に叩きつけて大電撃を発生させた。

ガガアアアアアアア——アアン!!?

発生した大電撃は俺ごとフィガロさんを飲み込んだ。スキルの効果でHPが半分になっていた俺は、その電撃に耐えられず死ぬ……寸前で新しく取っていた【リア・ソルジャー殿兵】の《ラスト・スタンド》の効果でHPが1だけ残った。

……とはいえ、このままでは数秒後に死ぬが……。

「《クイック・リヴァイヴ》!!?」

すぐに俺は回復型のオリジナルスキル——《ラスト・スタンド》と回復魔法スキルを組み合わせた、HPが1の時だけ使える即時高速回



復魔法スキル——で、HPを三割ほど回復させた……対策装備を着けていたとはいえ、【麻痺】しなかったのは運が良かったな。

当然、魔法耐性装備を着けていたフィガロさんも生きているが、大電撃の衝撃でその動きは止まっていた……装備が少ないという事はステータスは下がっている筈だから、今ならこちらの行動の方が早い。

「《瞬間装備》《ハンティング・シユート》！」

「!?？ クウツ!!?！」

俺はすぐに投槍を取り出して投げつけたが、彼はギリギリで身体を反らしたのでその肩を扶るだけに終わった。

そして、すぐに彼は《瞬間装着》で装備を身に纏いこちらに迫って来た……ここまで距離を詰められると【ジエム】は使う暇がないので、俺は短剣二本を抜いて迎え撃った。

「■■■■■■■■!!?！」

「!??！」

フィガロさんがこちらに迫る瞬間、その表情が狂相に染まりステータスが大幅に上昇した……【狂戦士】系の《フィジカルバーサーク》か！ 確かステータスの大幅な上昇と引き換えにアクティブスキルの使用と肉体の制御を失うスキルだったな。

だが、その剣閃は狂戦士のものでは無く一流の剣士のそれだった……おそらく、なんらかのスキルで制御不能のデメリットは消しているか。

「■■■■■■■■■■!！」

「《ダガーパライ》! 《ハンティングエッジ》！」

狂化されたステータスから放たれる斬撃を、俺はアクティブスキルを使ってどうにか凌いで行く。

……だが、接近戦の技量は向こうがやや上の様で、更にステータスまで上回られているので徐々に押されていった。

「■■■■■■■■!!?！」

「グウツ!??！」

そして、ついに彼の斬撃を凌ぎきれずに左腕を切り飛ばされてし

まった。

……両手で辛うじて凌げていた相手を片手でどうにかできる筈もなく、そのまま俺は彼に切り捨てられる……。

『……………』

「■■!?？」

寸前にその動きが止まった……彼の後ろから迫って来ていたバルンガに羽交い締めにされたのである。

……どうにか、まだ召喚したままだったバルンガの近くまで誘導できたみたいだ……勝機はココしかない!

『《ピアースフアング》!!?？」

動きを止められたファイガロさんに向けて、俺は彼の心臓に向けて残った右腕の短剣で突きを放った。

その突きは彼が装備していた軽鎧を貫いてその肉を穿ち……心臓に達したところで止まってしまった。

(ツ!?? ……まさかこの人の《エンブリオ》は心臓型の……)

「■■!!?？」

その驚愕で一瞬止まってしまった隙をファイガロさんが見逃すはずもなく、止まった短剣を蹴り上げて跳ね飛ばされたので、俺は慌てて距離をとって『ジエム』を取り出そうとした。

……だが、彼は蹴り上げた勢いのままバック宙してバルンガの拘束を振り解き、そのままバルンガを蹴り飛ばして足場代わりにし、こちらに勢いよく飛び込んで来た。

「ツ!??？」

「■■■■!!?？」

短剣を跳ね飛ばされ体勢を崩していた俺はそれを避ける事は出来ず、すれ違い様に首を跳ね飛ばされていた。

……流石に首を跳ね飛ばされたら『ラスト・スタンド』も意味が無いな……俺の負けか。

『……………試合終了オオオオ!!?？ 短いながらも壮絶な死闘を制したのは

ストロング・グラディエーター

【剛 闘 士】ファイガロ選手!!?？ ここに《マスター杯》の優勝者が決まりましたああ!!?？」

……………こうして俺の〈ハマスター杯〉の最終戦績は準優勝という事になったのだった。



□決闘都市ギデオン・中央大闘技場 クラッシュヤー【壊屋】ミカ

『お疲れ様、いい試合だったよ』

『こちらこそ、ありがとうございます』

決闘戦が終わってお兄ちゃんとフィガロさんは握手を交わしつつ、互いの健闘を労っていた……………うん、実に良い大会だったね。

「アバ……………!!? 負けたく……………!!? あの露出プリンス……………!!?」

「ギヤア……………!!? 全額擦った……………!!?」

……………賭けに負けて喚いている月夜さんとターニヤちゃんは放置の方向で。

「……………うちのターニヤが煩くてすまん……………」

「……………こちらこそ、うちのオーナーが申し訳ない……………」

……………エドワードさんと葵ちゃんを始めとした周りの関係者も呆れているね……………。

……………月影さんは相変わらずニコニコしてるけど……………。

「結局、兄様は準優勝だったのです」

「まあ、決闘専門じゃない割には健闘したんじゃない? ………………目的の方は達成出来たみたいだし」

あれだけ派手に【ジエム】を使って勝ち進めば、魔石職人の宣伝という目的は達成出来たでしょう。

……………とはいえ……………。

「……………シュウさん、ヘエンブリオの特性上仕方ないとはいえ、フィガロさんが大会とかで脱衣するのは色々問題があるんじゃない……………」

『……………フィガ公は基本的に脳筋の天然だからな。……………後で性能が高くて汎用性のある下半身装備を身につけておけ、と念入りに言っておくワ』

……………まあ、フィガロさんの脱衣癖は友人であるシュウさんがな

んとかしてくるでしょう。

とりあえず「マスター杯」もこれで終わりだね……………そうだ、この後お兄ちゃんに以前から考えていたことについて相談してみようか。



□■中央大闘技場 【大賢者】

中央大闘技場のVIP席の一つ、そこにはアルター王国国王を始めとして、その護衛の近衛騎士団団長などの王国の主要人物達が「マスター杯」を観戦していた。

そこでは決勝戦が終わった後、出場した「マスター」達の健闘を讃える話や今後の王国と「マスター」の関係についての話をしており、彼……………【大賢者】もそれらの話に加わっていたが……………内心では別の事を考えていた。

（劣化「化身」の発生と増加から約半年、それだけの時間で彼等の戦闘能力は熟練のティアンと同等かそれ以上……………おおよそ想定内だな）

元々、この大会を提案した理由は、王国のご意見番として意見を求められた時について劣化「化身」の戦力調査も出来ると思いい提案しただけであり、そこまで重要視はしてはいなかった。

更に王国における戦闘能力上位の劣化「化身」の実力も、その不死性や「エンブリオ」の事を考慮してもおおよそ想定範囲……………むしろ想定よりも低いぐらいであった。

（あのインフィニットクラスの「化身」供には遠く及ばず、スペリオルクラスにも至っていないのが今の劣化「化身」の実力か……………だが、この成長速度ならいずれスペリオルクラスに至る者は出てくるだろうな）

その事も含めて劣化「化身」増加時に立てた予想の範囲内ではあるが……………問題はその数と「エンブリオ」の多様性……………そしてどの程度「化身」の制御下にあるか、である。

(もし、今いる劣化<sup>△マ</sup>“化身”<sup>△タ↓</sup>達が全て敵に回れば十分すぎる脅威になるが……………おそらく彼等は完全に“化身”<sup>△マ</sup> 供の制御下にある訳ではない)

実際、劣化<sup>△マ</sup>“化身”<sup>△タ↓</sup>がこの世界に現れてからの行動は千差万別であり、それら全てが“化身”<sup>△マ</sup> 供の制御下にあるとは考え辛い。

おそらく“化身”<sup>△マ</sup> 供は劣化<sup>△マ</sup>“化身”<sup>△タ↓</sup>達を使って二千年越しの詰めに入るつもりであり、その為に彼等を自由に行っているのだろうが……………。

(……………うまくいけばスペリオルクラスの劣化<sup>△マ</sup>“化身”<sup>△タ↓</sup>をこちら側に引き込む事も……………いや、流石にそれは早計だな。……………今後 彼等の調査は“化身”<sup>△マ</sup> 供にどこまでの行動が許されているのかを中心に調べるべきか)

……………この世界の打ち手の一人である【大賢者】は今後の行動を決めた後に王国関係者との会話に戻っていった。

## アルター王国一周旅行・まずは南へ 大会の後・準備と出発

□決闘都市ギデオン クラッシュヤー【壊屋】ミカ

あのへマスター杯が終わった後、私はお兄ちゃんとミュウちゃんにとある話を持ちかけていた。

「このアルター王国を見て回りたくない？」

「そうだよ、お兄ちゃん。……………ほら、せっかくアルター王国にいるのに、私達が活動しているのって王都とギデオンだけじゃない？ だからこの国の他の街とかも見て回りたくないだよ」

これは以前から考えていたことで、ミュウちゃんの事とかがあったから保留していたんだよね。

もうミュウちゃんのレベルも上がってデンドロにも慣れてきたし、そろそろ本格的に色々な所を見て回ってもいい頃だと思うんだよ。

「いいと思うのです、姉様！ 私も色んなところを見てみたいのです！！？」

『ミュウがそうしたいなら僕も構わないよ。それに今の僕達なら二人の足を引っ張る事は無いだろうし』

ミュウちゃんとフェイは賛成してくれたみたいだね……………確かに、今の二人なら亜竜級モンスターでも余裕を持って相手に出来るだろうしね。

「俺も別に構わないが……………どういうルートにするつもりなんだ？……………まさか、また俺頼みとかは言わないよな」

「今回はちゃんと考えてきたよ……………とりあえずこのギデオンから西に出て、そこから時計周りにこの国を一周する感じのルートで行こうと思うんだけど……………」

このアルター王国は大体中心ぐらいに王都があつて、それを囲む様に様々な街があるからそんな感じで行けば色々な所を見て回れると思っただよね。

「……………まあいいんじゃないか？ それで。細かいルートは後々決

めていけば良いし……………俺達なら多少無茶なルートでも問題は無いだろうしな」

「その辺りは不死身の〈マスター〉の特権だよー」

モンスターが跋扈するこの世界では旅行するのも割と命懸けだけど、高い戦闘能力を持っていて、尚且つ不死身の〈マスター〉なら気楽に行けるしね。

……………そんな話をしていると、ミュウちゃんが疑問の声を発した。

「……………ところで、この世界を見て回るのはとても楽しみなのですが、ここでの旅行にはどういう準備が必要なのでしょう？」

「ふむ……………主に食料や移動手段、後はキャンプ用具とかがあればいいだろう。この世界にはアイテムボックスがあるから、その手の準備は現実よりも簡単なな。……………俺達は〈マスター〉だからログアウトも出来るし」

「まあ、一番必要なのは戦闘能力なんだけどねー」  
「成る程、分かったのです」

移動手段に関しては以前手に入れた【ホースゴーレム】のブロンと小型の馬車があるから問題無いかな。後はキャンプ用具と食料を買い込んで……………ああ、長期の旅行なら時間経過遅延機能のついたアイテムボックスも必要だね。

「改めて考えてみると意外とお金が掛かるかも？ 特にアイテムボックスが」

「……………あれ高いからなあ。……………まあ、長期の旅行ならそれなりの資金は必要だから、今ギデオンで流行りの【ジエム】を作成するジエム・マイスター【魔石職人】のジョブクエストで資金を稼ぐかな」

「流行らせたのはお兄ちゃんだけどねー」

お兄ちゃんが〈マスター杯〉で【ジエム】を派手に使って好成绩を収めた所為で、今ギデオンでは決闘をやっている〈マスター〉を中心とした人達の間で高位魔法【ジエム】がバカ売れしているのである。

その為、この魔石職人ギルドでは高位魔法【ジエム】が枯渇してしまっており、その作成クエストには困らなくなっている様だ。

「何せ『ジエムー〈クリムゾン・スファイア〉』を作るだけでぼろ儲けだからな。今のギデオンで資金を稼ぐのには苦労しない」

「へマスター」なら数十万リル稼ぐ人も結構いるしね。……………じゃあ資金稼ぎはお兄ちゃんに任せるよ」

「分かった。……………今の『ジエム』ブームは一過性のものだから遠からず廃れるだろうし、今のうちに稼げるだけ稼いでおこうと思っただしな」

「それじゃあ姉様、私達は食料品を買いえばいいのです？」

「そうだね。それと時間経過遅延機能付きアイテムボックスもね」

そういう訳で長期間の旅行に向けての準備をする為にお兄ちゃんは資金稼ぎ、私とミュウちゃんは食料品などを入れるための時間経過遅延機能付きアイテムボックスを買いに行く事になったのだった。



それで私とミュウちゃんは時間経過遅延機能付きのアイテムボックスをかう為に、以前にも来た事がある〈アレハンドロ商会〉に来ています。

「こうして見ると王都のお店とは結構品揃えが違うのです」

「このギデオンはレジェンダリアに近いからね、そこから輸入したマジックアイテムとかが豊富みたいだよ」

『本当だね、王都では見た事の無いアイテムが結構あるよ』

このお店の品揃えを見てミュウちゃんとフェイちゃんは感心している様だ……………私も以前初めてギデオンに来た時は似た様なものだったねー。

「じゃあ面白い物が終わったらギデオンの観光でもしようか」

「良いですね！ 楽しみなのです!!？」

そんな話をしつつ、私達はアイテムボックスが売っている場所までやってきた。

「……………結構いっぱい種類があるのです。しかもどれも高いのです……………」



「まあ、アイテムボックスって高いものは数千万リルぐらいするからねー。……………とりあえず基本的に食料とかは現地調達する予定なので、容量は一番少ないやつにしようか」

『……………それでも百万リルぐらいするみたいだけどね』

フエイちゃんの言う通り、時間経過遅延機能付きのアイテムボックスは一番容量の少なくて(初期に貰ったやつ of 十分の一ぐらい)、その機能に特化したポーチ型のやつでも百二十万リルぐらいだった……………今の私達なら問題無く払える金額だけど。

……………まあ、別に未開の地に行くとかではないんだし、携帯食料を入れるぐらいしか使う予定は無いからこれでいいでしょう。

「さて、アイテムボックスはこれで良いとして、二人は他に何か欲しい物はあるかな?」

「そうですね……………アクセサリーとかを見てみたいです。ここなら王都には無い魔法のアクセサリーとかがありそうなのですし、フェイが装備できるアクセサリーとかもあるかもしれないのです」

『僕にかい? ……………まあ、魔法発動を補助するアクセサリーとかは欲しいけど……………へエンブリオ〕が装備できるアクセサリーってあるのかな?』

「んー……………ガードナーは基本的にティムモンスターと同じ扱いだから、専用のやつなら大丈夫じゃないかな? ……ほとんどのアクセサリーには装備制限が無かった筈だし」

「とりあえず行ってみるのです!」



そういう訳で私達はアクセサリー売り場にやってきた。決闘都市にあるお店だけあつて戦闘に使えるアクセサリーが豊富にあるね。

……………さてさて、お目当ての物はあるかなつと……………

「ふむふむ……………あつ! この【魔導獣の輪】なんてどうかな? 非人間範疇生物専用装備でMPに対して補正が付いて、更に《魔法効果上昇》や《MP自動回復》のスキルも付いているよ!」

「おお！ 良い感じなのです！ それに一番小さいやつならフェイでも装備出来そうなのです」

『確かに良さそうだね。特にMPが上がるのは有り難いよ、何せいくらあっても足りないからね』

そんな感じで一通りの買い物が終わらせた私達は、この店のとあるところに来ていた……………そう『ガチャ』が置いてあるところである。……………このデンドロにガチャなんてあったのです？」

「実はあるんだよねー。……………正確に言うて入れたリルに応じた価値のアイテムをランダムで召喚する物みたいだけだね。この店では買い物をした客だけが使える事になってるんだよ」

このデンドロでのガチャはこれで二回目……………今回は私の『遠い勘』も働いていないから、純粹に楽しめるね！

『ふーん……………客寄せの施設として使っているんだね』  
「成る程なのです。……………ところで姉様はいくらで回すつもりなのです？」

「当然最大の十万里ルだよ！ お金にはまだ余裕があるしね」

そんな話をしているうちに私達の順番が回って来たので、ガチャに十万里ルを突っ込んで回そうか。

……………『B』か。当たりだね」

「えーと、この場合は百万リルの価値があるアイテムが中に入っている、ということなのです？」

「そうだね。……………正確には百万リル前後ぐらいの価値の物だけだね」

とりあえず出てきたカプセルを開けると……………えええ……………。

……………『ジェムー《クリムゾン・スフィア》』って……………。確かに数十万里ルの価値がある物だから『B』だろうけどさあ。……………お兄ちゃんなら数万リルで作れるよねこれ……………」

「えーっと……………ドンマイなのです」

まさかこんなタイムリーなアイテムが当たるとは。十万里ル支払って数十万里ルの物が当たったんだから、十分得してる筈なんだけど……………なんか凄い損した気分……………。

「さて！ 次は私の番なのです、とりあえず十万リル入れてみるのです」

「……………別に最大額入れなくても良いんだけど……………」

私はそう言ったんだけど、ミュウちゃんはさつきと十万リルをガチャに入れて回してしまった。

……………そして、出てきたカプセルに書かれていたのは『C』の文字だった。

『C』は入れた額と当価値……………この場合は十万リルのアイテムが入っているんですね。とりあえず開けてみるのです……………これは【騎馬民族のお守り】というアクセサリのようなのです」

詳しく効果を見てみると、どうやら《騎乗》スキルのレベルを＋１するアクセサリだった。

「私は乗り物に乗ったりはしないので使い事は無さそうなのです」

「じゃあ、それはお兄ちゃん渡せばいいんじゃない？ 基本的に馬車を動かすのはお兄ちゃんだし」

「それではこれは兄様へのお土産という事にするのです」

使い道がある物が出たという意味では、ミュウちゃんのガチャ結果は当たりかな……………出た物の価値は上の筈なのになんか負けた気がする……………」

「さて！ 買い物も終わったし、この街の観光にでも行こうか！」

「はいなのです!!？」

こうして私達はギデオンの観光に繰り出したのだった。



□決闘都市ギデオン西門前 【騎兵】ライダー レント

ミカがアルター王国一周旅行に行きたいと言ってから、デンドロ内で大体一週間ぐらい経った。

その間に一通りの準備を整えた俺達は、まずギデオンの南西にある〈ニッサ辺境伯領〉という場所に向かう事になった。

ちなみに俺は馬車を運転しやすくする為にメインジョブを【騎兵】

に変えている。

「とりあえず当面の資金もある程度用意出来たし、準備はこれで良いだろう」

「ある程度って……お兄ちゃん、この一週間で軽く五百万リルぐらい稼いでいなかったっけ？」

「まあ、この一週間【ジエム】《クリムゾン・スフィア》ばかり作っていたからな」

一個数十万リルの【ジエム】を二十個くらい作って売れば、そのぐらいは稼げるからな……やはり、この世界だと生産系のジョブの方が金を稼げるな。

それに魔石職人ギルドのジョブクエストを多数達成したお陰でハイ・ジエム・マイスター【高位魔石職人】もカンスト出来たし、新しい上級職として【黒土術師】ランドマンサーにも就く事が出来たからな。

「……それに《マスター杯》で準優勝したお陰でかなり悪目立ちしてしまったからな、なるべくさっさとギデオンを離れたいし」

「確かにクランへの勧誘とかは結構あったねー。フォルテスラさんの《バビロニア戦闘団》にも勧誘されたりしたし」

「そのぐらいなら別に良いのですが……たまにしつこい人もいるのです」

デンドロが始まってそれなりに時間が経ったからか、《マスター》が中心となったクランがいくつも作られる様になっており、まだクランに入っていない有名な《マスター》の勧誘も頻繁に起こる様になっていた。

「……基本的に俺達はクランには入る気は無いので丁重にお断りしており、フォルテスラさんなどのまともな《マスター》はそれで終わりなのだが……」

「まあ、ネットゲである以上はそういう連中も一定数いるのはしようがないんだが……言い掛かりを付けてまで絡んで来るのはやめてほしいんだがな」

「そーだよねー。……ああでも、お兄ちゃんに対して『両手に花のハーレム野郎』とか言ってきた人がいた時には笑えたねー」

「このデンドロはゲームなのでアバターを弄っていれば実年齢が分からないし、見た目で兄妹だとかが分かりにくいのです」

『まあ、事情を知らなければ『両手に花』に見えるよね』

コッチは笑い事じゃ無かったんだが………大体なぜ小学生の妹妹二人と一緒にいて、そんな事を言われなければならないんだ。

………まあ、言い掛かりを付けて来る連中ぐらいなら適当にあしらうんだが……。

「実力行使に出て来るバカがいたのは、悪い意味で予想外だったな………それも街中で」

「本当にねー。………しかもミュウちゃんに手を出そうとするとは………やっぱり潰しておくべきだったかな」

「姉様、流石に街中の目立つ所でスプラッタはやめて下さいなのです。………それに、その方々は私が全員倒してしまいましたし」

『あつという間に全員【気絶】してたね』

そう、適当にあしらっていたら何を勘違いしたのか、勧誘して来た連中の一グループが実力行使に出ようとしたのである………しかもミュウちゃんに。

流石にそんな連中に容赦をしてやる義理は無く、ミカと二人で皆殺しにしようと思ったのだが………その前にミュウちゃんによって全員投げ飛ばされて、更に《当身》をくらって【気絶】してしまったので未遂に終わっている。

「二人共、私を気遣ってくれるのは嬉しいのですが、やりすぎは良く無いのです………特に街中では。例え罪に問われなくても周りの人達に迷惑がかかるのです」

「はーい。………でもミュウちゃんがやってるのは空手だったよね、あの投げ技はスキル？」

「二応【格闘家】<sup>グラップラー</sup>で覚えたスキルに《投げ技能》がありますがほとんど自力ですね。以前少しだけ柔道や合気道の投げ技を見た事があるので、それを真似しただけなのです」

「………確かミュウちゃんは一度見た体術ならほぼ完全に模倣出来るんだっただな」

「はいなのです。……………と言っても所詮は側だけ真似しただけのものなので、ちゃんと修練を積んだ人のものには遠く及ばないのです」  
そうだった、この子も天災児だった……………最近は『デンドロのアバター』での動き方も完全にマスターしたのです』とも言っていたしな。

……………流石にへマスター〜とはいえ、街中で死人を出したら騒動になるからこの方が良かったか。

まあ、そんな感じで少々悪目立ちしてしまった為、さっさとギデオンを出て行く事にしたのだ。

「さて！　じゃあ気分を切り替えてアルター王国一周旅行に出発するとしますか！」

「『おー！』」

こうして俺達のアルター王国一周旅行が始まったのだった。

## へニツサ辺境伯領〉・遭遇

□ニツサ辺境伯領前 【騎兵<sup>ライダー</sup>】 レント

あれからギデオンを出た俺達は馬車を街道沿いに走らせていき、日が暮れた頃にはへニツサ辺境伯領〉へ入る事が出来た。

「いやー、すっかり暗くなっちゃったね」

「これでも道中殆どモンスターに襲われなかったから、ペースは早い方だろう」

「襲ってきたモンスターもそこまで強くは無かったです………魔法を使うものが多かったですが」

『まあ、魔法自体は下級職レベルだったけど、モンスターの強さ自体も亜竜級以下つてところだったしね』

俺達の辿ったのはギデオン西の〈ジャンド草原〉を抜けて、南西にあるへサウダーテ森林〉を通ってへニツサ辺境伯領〉まで向かうルートだった。

事前の情報ではこのルート上にいるモンスターが殆どが亜竜級以下のものであり、ギデオンから辺境伯領に向かうルートの中では一番無難であり、テイアンも普通に使っているという話だったので実際に問題無く通過できた。

とはいえレジエンダリアに近い森林地帯だからか、魔法を使うモンスターが比較的多いのが特徴だった………まあ、モンスター自体は弱かったのである程度の実力があれば問題が無いルートの様だったが。

「とりあえず、このペースなら今晚中に街に着くだろう」

「フーン、そっかー、じゃあ今日は野宿とかはしなくて済むか………ん？」

そんな話をしているとミカが何か感じ取ったのか、急に明後日の方向を向いた。

「……お兄ちゃん、あつちから何か来るよ。………多分敵」

「《生物索敵》には反応が無いが………いや《瘴気感知》の方には反応があったな。………全員戦闘準備」





『いくよミュウ……《ホーリー・ブレッシング》!』

「ゾンビはあまり殴りたくは無いのですが……そうも言ってられないのです! 《ソニックフィスト》《ラピッドフィスト》《回し蹴り》!」  
更にフェイが俺からラーニングした聖属性エンチャント魔法をミュウちゃんに掛けて、そのバフを受けた彼女が敵アンデッドを次々と格闘で倒していく……《ホーリー・ブレッシング》は攻撃に聖属性を付与する効果に加えて、自身を不浄から守る効果もあるのでゾンビを素手で殴っても汚れないのである。

「あんまり無理はしない様にね……《テンペスト・ストライク》!」  
そしてミカが暴風を纏った「ギガース」でゾンビ共を纏めて消しとばしていく……確かに、いくら再生能力の高いアンデッドでもミンチにされれば殆ど再生しないのだが……。

「おいコラ! ミカ!!? あんまり肉片を飛び散らすんじゃない!」

「ちよつ! 姉様、こつちに飛んできたのです!!?」

「あつ!!? ごめーん!!? っていうか思ったより脆いよコイツら!!」

その暴風の所為で、砕け散ったゾンビの肉片が飛び散る事さえ無ければいい戦術だったんだが……少しデバフが効き過ぎたか。

「しょうがないな……二人共、下がっている! ……《ホーリー・バースト》!!?」

『僕もやるよ……《ホーリー・バースト》!』

止む終えずやや混乱していた二人を下がらせて、俺とフェイの聖属性広域攻撃魔法で敵アンデッド共を吹き飛ばす事にした。

『『『『』』』』』  
俺達から放たれた聖なる光の奔流は、残りのアンデッド達を纏めて消しとばし浄化した。

「ふう………とりあえずこれで片付いたかな」

「………最初からそれで吹き飛ばしておけば良かったんじゃない?」

「仕方ないだろう、相手の詳細が分からなかったから弱体化を優先させただから」

『それに下級職の広域攻撃魔法だから威力は低いしね』

だが、あれだけ弱体化を重ねれば問題無く撃破出来た様だがな  
……………正直、最初から聖属性魔法で攻撃していても倒せた気もする  
が、それは言わなくてもいいだろう。

「ところで俺の各種探知系スキルには、敵の反応は無いが……………  
そつちはどうだ、ミカ？」

「うーん……………これといった危険はもう無いみたいだよ。ミュウ  
ちゃんは？」

「私も特に視線とか殺気とかは感じないのです」

俺達三人の各種索敵能力に引つかからないという事は、ここら辺に  
はもう敵は居ない様だな。ちなみに視線や気配を感じ取れるのは  
ミュウちゃんのリアルスキルである（一応《殺気感知》《気配察知》も  
覚えているがレベルは低い）

曰く「相手が攻撃してくる前に殺気とか気配とかを感じるのです。  
それを読めば相手が攻撃する位置とかも大体読めますよね？」とのこ  
と……………いや、普通そんな事あっさり分からないから、ミュウちゃんの  
戦闘センスが頭抜けているだけだから。

「でも、なんでこんなところにアンデッドが？ この辺にアンデッド  
が発生する場所なんてあったっけ？」

「事前に調べた時にはそんな情報は無かったが……………とりあえず  
さつさと街に入ろう、そこでなら情報を得ることも出来るだろうさ」  
俺達は急いで戦闘の後始末を終えると、すぐに街に向かった。

……………幸いな事にこれ以降は何事も無く普通に街に着くことが  
出来たので、俺達は旅の疲れを癒す為に一旦ログアウトする事にした。



□ニツサ辺境伯領・冒険者ギルド クラッシュヤー【壊屋】ミカ

あれから私達は現実で三日程、デンドロでは一週間ぐらいこのニツ  
サ辺境伯領に滞在していた。ここニツサ辺境伯領アルター王国とレ  
ジエンダリアの国境付近にある為か、ギデオンと比べても亜人の数が  
多いようだった。

更にその街並みはレジエンダリアの影響を強く受けているのか、王国の他の街よりもファンタジーな感じで、売っている物もレジエンダリア産のマジックアイテムが多かった。

「……………そして今まで私達はこの街を観光したり、冒険者ギルドのクエストを受けたりしつつ、手分けしてこの街に来た時に遭遇したアンデッドの情報を集めていた。」

「とりあえず今まで集めた情報を纏めよう……………冒険者ギルドの職員からの情報によると、ここ最近夜になるとアンデッドモンスターが出没する様になったみたいだな」

「街の人達も、今まではこの辺りにアンデッドなんて滅多に出なかったのに、ここ最近はよく見かける様になったって言ってたね」

街の人達の証言を纏めると、どうもアンデッドが頻繁に目撃され出したのはここ最近の事の様だね。

「実際、冒険者ギルドのクエストでも『夜間に出没するアンデッドモンスター討伐』のクエストが出ていたのです」

『僕達も何度か受けているよね』

その際に出て来る奴らは、その殆どがこの辺りに居る弱いモンスターがアンデッド化したものであり、アンデッド化した事により耐久力は上がっていたがそれ以外の能力はむしろ下がっていたので倒す事自体は簡単だった。

……………だが、そのアンデッド達には一つの厄介な能力があつて……………。

「……………まさか、アンデッドに殺された死体までアンデッド化するなんてね。まさかのバイオなハザード方式とは」

「幸いな事にアンデッド自体は弱いので被害はそこまで広がってはいない様なのですが……………」

「……………冒険者ギルドではこの辺りに高位のアンデッドモンスターが住み着いた可能性もある」として現在調査中らしいがな」

高位のアンデッドモンスターの中には死体をアンデッドに変えて使役するモノもいて、更に極一部のモノには今回の様にアンデッド化を伝染させるスキルを持つモノもいる様だ。この世界ではアンデッ

ド化を伝染させるスキルを持つアンデッドは特級の危険生物に指定されており、その情報や討伐には相当な額の懸賞金がかけられている程みたい。

「……………その可能性も考慮して、現在この領の騎士団と冒険者ギルドで調査が進められており、更に王都に居る近衛騎士団が派遣されているという話もあるみたいだね。此処が王国の端にある所為か、捜索に参加している「マスター」は少ないみたいだけど。」

「まあ、俺達は所詮外様、通りすがりの「マスター」だからな。……………自分達が巻き込まれたならともかく、この街の問題に関しては基本的に蚊帳の外だ」

「そうなんだけどねー。……………このまま放置しておくとなぜい事になる気がするんだよね」

「……………そう、この街に来てから何度かアンデッドと戦っているうちに、私の『遠い勘』が『早くこの問題を解決した方がいい』と警告を発し始めたのである。」

「姉様の勘に反応があつたのですか、だとすると何か行動を起こさなければいけませんね。……………ところで姉様、どうすればいいのかわからないのですか?」

「問題はそこなんだよねー。……………『このまま調査を続行した方がいい』って感じじゃないんだよね」

私の『遠い勘』は、正直言つて自分でもどういふモノなのかわかっていないのでかなりムラがあり、前回の誘拐事件の時の様に明確な行動の指針が出る事もあれば、今回の様に曖昧な感じで伝わる事も多い。

「……………むしろ明確な指針が出る事は少なく、そういう場合は大体事件の核心に近づいた時に『近い勘』として出る事が多いんだよね。『ふむ、じゃあ少し考え方を変えてみよう……………この世界でのアンデッドの発生原因は基本的に二種類ある、自然発生するか誰かが作るかだ」

「えーつと、前者が怨念のある場所の死体がアンデッドになる事とかで、後者が【死霊術師<sup>ネクロマンサー</sup>】のスキルで死体を加工して作る感じだっけ?」

「大体そんな感じだ。……………実際はもつと細かい分類があるみたいだが、俺も詳しい訳じゃないしその辺りは置いておく。……………そしてアンデッドは基本的に日の光の下では大幅に弱体化する特性を持っている」

まあ、真昼間にバリバリ動くアンデッドはあんまり居ないよね……………ああ、成る程ね。

「兄様、それはつまり原因がどうあれアンデッドが発生する場所は日の光が刺さない場所、という事ですか？」

「まあそういう事だ。……………普通ならこんな当たり前の事をわざわざ確認しても意味が無いんだが、ミカの直感なら“なぜ”や“なに”や“どうして”が分からなくても“どこで”“ぐらいは分かるだろう”……………要するに、この辺りにある日中の間に光が刺さない場所を片っ端から調べて、その中で私の直感が反応したところにこの騒動の原因があるって事？」

「そうだ。……………正直調査方法としては下の下だが、この街に来たばかりの俺達に出来る事はそのぐらいだろう」

……………まあ、私達にコネもツテもない以上足で探すしかないよね。

「とりあえず、この冒険者ギルドにある資料や地図を調べてみよう。……………それでミカの直感に引っかかってくれればよし、そうでなければここら辺を回って足で探す、という感じで行こう」

「『はい』」



そうして資料や地図を漁る事小一時間……………とある資料に目を通した時にピンと来た。

「へサウダーテ霊林……………多分ここかな、“ここに行った方がいい”って出てるし」

「ふむ……………へサウダーテ霊林はこの領内にある自然ダンジョンみたいだな」

自然ダンジョンとはこの世界において、神運営が作った神造ダンジョン以外の自然に出来たダンジョンの事である。

「この〈サウダーテ霊林〉は〈サウダーテ森林〉の一部がダンジョン化した物の様な」

どうやら地形的な問題で通常よりも空間の魔力濃度が非常に高い所為で、植生やそこに住むモンスターが変質している為に自然ダンジョンとして扱われている様だ。

更に空間の魔力濃度が高い所為で隣国レジエンダリアの森と同じく、魔法現象が自然発生する〈アクシデントサークル〉が起きる事もある、と資料には書かれている

「鬱蒼とした森だから昼間でもあまり光が刺さないみたいだし、多分ここに原因があるみたいだよ」

「侵入自体は制限されていないから、入る事自体は出来るみたいだな」  
「とはいえ、自然ダンジョンの中でも難易度がそこそ高いいみたいなのです」

資料を詳しく見ると周りの森と比べてモンスターのレベルも高い上に、〈アクシデントサークル〉まで起きる可能性がある以上対策は必須だしね。

でも、ここでしか取れない植物の採取以来もあるから入る人もそこそこいて、中の事も結構詳しく書いてあるみたい。

「とりあえず準備を整えて〈サウダーテ霊林〉に行ってみるか」

「そうだね。……………それに自然ダンジョンにも一度行って見たかったしね」

「神造墓標ダン迷宮ジョンには何度か行った事がありますが、自然ダンジョンは初めてなので楽しみなのです」

「まあ、ダンジョン攻略はゲームの楽しみの一つだからな」

こうして、私達は自然ダンジョン〈サウダーテ霊林〉の攻略に向かう事になったのだった。

〈サウダーテ霊林〉・堕ちた【冥王】

?? 〈サウダーテ霊林〉???

『……………実験はおおよそ上手く行っているな。……………この森の魔力溜まりと、中心にある霊木を利用する術式の調整も終了した』

自然ダンジョン〈サウダーテ霊林〉の中心部、そこには一本の巨大な霊木があり、その根元には一つの影があった。

(……………我が研究成果……………完全な死者蘇生の術式に必要な魔力、それを集める為にこの森にある魔力を収束させる術式は、その触媒としてこの森で最も古く巨大な霊木を使う事によって完成した)

……………そして影の周囲には霊木を中心とした大型の魔法陣が敷かれていた。

(術式の試運転によるモンスターのアンデッド化は上手く行った……………最初、術式の調整不足でアンデッド化させたモンスターが制御を外れて森の外に出て行くこともあったが……………問題は無いな、制御出来ているアンデッドだけでも侵入者の迎撃は出来る)

……………男は元々レジエンダリアの森に住んで居た一人の【死霊術師<sup>ネクロマンサー</sup>】であり、同時に植物の研究をしている【森司祭<sup>ドルイド</sup>】でもあった。

以前までは、その技術を使ってレジエンダリアの森の中に彷徨う死霊を成仏させるなどして暮らしており、その清廉な人格からその集落の人間からの人望も得ていた。そしていつの日か妻を娶り、子を成し、仲睦まじい家族として暮らしていたのだが……………

『嗚呼、ようやくだ……………ようやくもう一度お前たちに会う事ができる……………』

ある日、男が何時ものように森での仕事を終えて家に帰ってくると……………そこにはモンスターに襲われて壊滅している集落と、そこに住んでいた人々の死体、そして自身が愛した妻子の息絶えた姿だった……………ここまではよくある悲劇なのだが、そこには二つの不運があった。

まず一つ目の不運は、その集落を襲ったモンスターは殺した生物の

魂を喰らい力を得るスキルを持った<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>へU B Mでであり、最高位の死霊術師だった男でも妻子の魂を見つける事が出来なかったこと。

そして、もう一つの不運は男には術師としての規格外な才能があった事……死霊術師系統<sup>キング・オブ・タルタロス</sup>超級職【冥王】に就いていた事である。

(ようやくここまで来た……レジェンダリアで【アムニール】を奪った所為で指名手配されて、殺された時にはどうなるかと思っただが)

その後、家族を失いその魂にすら会うことが出来ずに悲嘆に暮れた男は、いつの日からか完全な死者蘇生の術式の開発に乗り出した……その為だけに男は超級職としての力をもつて様々な非道を成しながら。

……そして、ついにはレジェンダリアの戦略物資でもある【アムニール】を強奪した事で、<sup>テイターニア</sup>【妖精女王】を始めとする複数の超級職と交戦し殺される事になった。

『……だが【アムニール】を触媒にした術式で死者の蘇生が可能だと自分自身で証明出来たのは不幸中の幸いだったな』

しかし彼は死に際に持っていた【アムニール】を触媒にして、念の為に準備していた死者蘇生の術式を使う事によって生前以上の力を得て蘇った。更に、その事に相手が動揺した隙について使役していたアンデッドを全て囚にする事で、その場からの逃走にも成功してしまっただ。

『まあ、お陰でレジェンダリアからは出ざるをえなかったが……この森の魔力溜まりと【アムニール】にこそ劣るが十分な魔力を宿すこの霊木があれば儀式を実行する事が出来る。……待っていてくれ、二人とも、もうすぐみんなで永遠の時を生きる事が出来る……』  
そうして男……狂った【冥王】の成れの果て【ハイエンド・タルタロス・リッチ】は、自身が完全な死者蘇生の術式だと思っている儀式を進めていった。

……自身の名前はおろか、かつて愛した妻子の顔と名前も思い出せない程に狂い果てたまま……。





ところ、とりあえず辺りからアンデッドは居なくなっている様だな。  
「やれやれ、ようやく片付いたね。……………しっかし、数が多過ぎるよ」

「……………それだけでなく、この森の奥には行かせたく無い様な動きをしていたのです」

確かに、この森のゾンビ達は外に居た連中の様に生者に対して無差別に襲いかかるのでは無く、明確に森に來た侵入者を迎え撃つ様な動きをしていた。

「やはり此処にアンデッド騒ぎの原因があると見て間違い無さそうだな。……………それでミカ、そっちはどうだ？」

「この森に入ってから危険な感じは増してるね。……………むしろ、このまま森の奥に行かないとマズイ気がするよ」

……………ミカがそう言っているという事は、なるべく早く森の奥に行く必要があるな。

とは言え、これだけの数のアンデッドに妨害されると、どうしても進行速度は遅れてしまうか。

「では、どうするのです？ 私とフェイの必殺スキルで全体強化して無理矢理突破しますか？」

「それだと時間が足りないからダメだよ。……………それに、ミュウちゃん達の必殺スキルはこの森の奥で使わなければいけない気がするから」

「じゃあ全体バフを掛けて、なるべくモンスターとの戦闘を最小限にする形で突破するか？」

だが、まだダンジョンの序盤なのにこれだけのモンスターがいるとなると、先に進むのも相当な時間がかかりそうだな。このアンデッド系モンスターは耳が良い上に、生者を感じする能力が備わっている様だから隠密して進むのにも限度があるしな……………。

『とりあえず、このまま進むしかないかな？』

「んー……………多分それで大丈夫だと思うよ。……………むしろ早く行き過ぎても問題がある感じ？」

「成る程……………じゃあ、森の奥の問題を解決する為に余力を残しな

がら、このまま進もう」

こうして、俺達は森の更に奥に足を踏み入れていった。



□へサウダーテ霊林〈クラッシュヤー【壊屋】ミカ

そのまま私達はお兄ちゃんとフェイちゃんのAGI全体バフを受けながら、足の遅いアンデッドをなるべく無視しつつ戦闘を最小限にして森の奥へ進んでいった。

『此処の連中もアンデッド化のお陰で動き自体は鈍くなっているから、振りきって進む事自体は出来るみたいだね』

「……………というか、さつきからアンデッドの数が少なくなってきたいるのです?」

「ふむ……………アンデッドの数が減っていると言うよりは、他のところに行っている感じか?」

「多分、お兄ちゃんの言う通りだね。この森には私達以外にも侵入者が居るみたいな感じもするよ」

でも、私の直感は『先に進め』と出ているし、その方が被害が少なくななりそうな気がする。

……………その人達には悪いけど囧になって貰おう。その方がお互いにとって危険が少ないみたいだし、

「とりあえず今のうちに先に進もう、この事件は早めに解決した方がいいみたいだし」

「そうか……………つと、前方からアンデッド、しかも結構強そうだし」  
そんな話をしているうちにお兄ちゃんが敵を感知したみたい。私の直感でもそこそこ危険なモンスターだと出ているね。

『……………!!?』

「結構デカイな……………【フォレストオーガゾンビ】に取り巻きの【フォレストゴブリンゾンビ】が何体か。……………確か【フォレストオーガ】は亜竜級のモンスターだった筈だし、どうもこちらに気づいている様だから避けて進むのは無理だな……………さつきと倒すぞ《ピュリファイ・ア

ンデッド」

こちらに結構な速さで向かってきた「フォレストオーガ・ゾンビ」に  
対して、お兄ちゃんは《詠唱》で強化した《ピュリファイ・アンデツ  
ド》を放ち取り巻きのゴブリンを浄化しつつ、オーガの動きを鈍らせ  
た。

『僕もやるよ……《ホーリーライト》！』

「足を止めるのです 《ブラストナックル》！」

続いてフェイちゃんが魔法で光の玉を出して相手の動きを更に鈍  
らせ、ミュウちゃんがスキル《ブラストナックル》によって拳から放つ  
衝撃波でその足を砕いて転ばせた。

『……』

『ホーリー・ブレッシング……ミカ！』

「悪いけど時間が無いからね、さっさと沈んでもらうよ《インパクト  
ストライク》！」

倒れた相手にお兄ちゃんの聖属性エンチャントを受けた私が、アク  
ティブスキル込みで「ギガス」を振り下ろしてその身体を粉碎して  
消滅させた。

……お兄ちゃんとフェイちゃんが聖属性魔法でアンデッドの  
動きを封じつつ私達にバフを掛けて、私とミュウちゃんが前衛で敵を  
倒すと、うここままでがこの森での鉄板戦闘スタイルなんだよね。此  
処のアンデッドはただ向かって来るだけでスキルとかも殆ど使って  
来ないから、亜竜級の相手でも倒す事自体は簡単なんだけど……。

『……』

「チツ……戦闘音を聞きつけて周辺のアンデッド共がこっちに向かっ  
て来るぞ!!?」

「ああ……厄介すぎるよコイツら!!?」

そう、此処のアンデッドは音に敏感な為、戦闘を行っていると周り  
の連中が一時によって来るんだよね。アンデッドは弱いけどしぶと  
いから、今みたいな亜竜級アンデッドと戦ったらどうしても音が出る  
し。なるべく余力を残していきたいから連戦は避けたいんだけど  
……。

「ええい！ 《ホーリーライト》 一角だけ残せ！ 《ホーリー・バースト》！」

『分かった！ 《ホーリー・バースト》！』

『？？？？』

それに対してお兄ちゃんは《ホーリーライト》による光の玉を追加で出してアンデッド達の動きを鈍らせ、聖属性範囲攻撃魔法《ホーリーバースト》で右から来る敵を消し飛ばし、フェイちゃんも同じ魔法で左から来る敵を浄化する。

「ミュウちゃん、前を開けるよ！ 《ストライク・バースト》！ 《竜尾

剣》！」

『はいなのです！ 《ブラストナックル》！』

『？？？？』

更に前から来る敵を私が【ギガス】から放った衝撃波と【ドラグテイル】の《竜尾剣》で排除して、ミュウちゃんも衝撃波で敵を吹き飛ばして前方の道を開けた。

「お兄ちゃん！ 道が空いたよ！！？」

「よし！ そのまま突っ切れ！！？ あと足止めに【ジエム】を投げろ！！

？ 《アース・ウォール》！！？」

『？？？？』

私達はそのまますきに、後方から来るアンデッド達はお兄ちゃんが【黒土術師】の魔法で土の壁を作って足止めする。更に私やミュウちゃんもお兄ちゃんから貰った【ジエム】《マッドクラップ》や【ジエム】《ランドウォール》を投げて、向かって来るアンデッド達の足止めをする。

………とまあ、こんな感じで此処まで無理矢理突破して来たんだよね。

「よし！ 突っ切るぞー！」

そのまま私達はアンデッド達を置き去りにして、森の奥に走っていった。



「《サンクチュアリ》……ふう、なんとか撒いたか。……だが、そろそろMPや【ジエム】がきついんだが……」

『……………正直、かなり疲れて来たね……………』

「……………こういうのなんて言うのです？ ……RTA?」

どうにかアンデットの群れを振りきった私達はお兄ちゃんの《サンクチュアリ》——アンデット避けの結果を展開する聖属性魔法、結果を動かす事は出来ないので移動中は使用不可——の中で一休みしていた。

……………《マスター》の中でもかなり高いステータスを持つ私達でも、これだけの強行軍は流石に疲れるね。お兄ちゃんやフェイちゃんは今日何本目かの【MPポーション】を煽っているし、ミュウちゃんもその辺の木に寄りかかって息を整えている。此処のアンデット達はある程度距離を取れば、こちらを追ってこないのは不幸中の幸いだったね。

「そんな皆に朗報だよ。……………多分これが最後の休憩で、そろそろ目的地に着くみたいだから、今の内にしっかりと休んで置いてね。」

「!……………そうか、やっとか……………」

無茶な強行軍をしただけあって、どうにか間に合ったみたいない感じだね。

「それで？ 他に何かあるのか？」

「うーん……………しばらくの間は此処で休憩しておいた方がいい気がするのと、お兄ちゃんの攻撃魔法が入った【ジエム】を私やミュウちゃんに渡しておいた方が良い気がするぐらいかな」

「分かった、じゃあ【ジエム】をいくつか渡しておこう」

「はいなのです」

こうして私達は最後の休憩をしつつ、この先での戦闘への準備をするのだった。

## 〈サウダーテ霊林〉・VS 屍冥王樹

?? 〈サウダーテ霊林〉 「ハイエンド・タルタロス・リッチ」

『……………ようやくだ……………ようやく儀式の準備は整った……………』

自然ダンジョン〈サウダーテ霊林〉の奥深く、そこにある巨大な魔

法陣の中心にある霊木の下で堕ちた「冥キング・オブ・タルタロス王」…………… 「ハイエ

ンド・タルタロス・リッチ」は彼にとつての完全な死者蘇生の準備を  
終えていた。

『……………待っていてくれ……………お前たち……………すぐに永遠の命を与えて  
やれる……………』

そう言つて、彼は懐からアイテムボックス……………彼の妻子の遺体  
が入った【棺桶】を取り出し、魔法陣の指定の場所へと設置した。

『……………さあ……………死者蘇生の儀式を始めよう……………』

そう言つた彼は霊木に触れながら儀式魔法発動の為の呪文を詠唱  
し始め、その呪文に呼応して魔法陣と霊木が光を放ち、魔法陣に刻ま  
れた術式に従つて周囲の魔力を吸収し始めた。

『……………』

呪文の詠唱が進むと共に魔法陣と霊木の光が強まり、吸収した膨大  
な魔力を使って魔法陣に刻まれた術式が効果を発揮した……………順  
調に儀式を進めている様に見える彼だが、そこで二つのイレギュラー  
があった。

まず一つ目はこの魔法陣に刻まれた術式は『あらゆるモノを知性の  
あるアンデッドにする術式』であり、彼はそれによつて妻子の遺体を  
アンデッド化させようとしていたのだが……………魔法陣の特性上、そ  
の術式の効果範囲内には触媒である霊木が入っていた事。

そしてもう一つは彼が狂気の中で作り上げたその術式が、彼が思う  
以上の効果を持っていた事……………膨大な魔力を抱えながらもモン  
スター化しなかった程に安定していた樹齢数百年の霊木を即座にア  
ンデッド化させてしまう程の効果があつた事である。

……………生前の彼ならばそれらの不備にも事前にも気付く事が出来  
たが、今のモンスターとなり狂い果てた彼はそんな事にすら気付く事





【(過去に類似個体なしと確認。〈UBM〉担当管理AIに通知)】

【(〈UBM〉担当管理AIより承諾通知)】

【(対象を〈UBM〉に認定)】

【(対象に能力増強・死後特典化機能を付与)】

【(対象を逸話級——【屍冥王樹 ハデスルード】と命名します)】

そうして生まれた【屍冥王樹 ハデスルード】には、たった一つの意思しか残っていなかった……『皆と共に永遠を生きる』という意思だけが。

……故に【ハデスルード】はその意思に従って行動する。

『……』  
まず【ハデスルード】は〈UBM〉化した事により動かす事が出来る様になった枝や根を触手の様に伸ばして周辺にあつた木々に接触し、自身のスキルの一つ《冥樹屍変》を行使した……すると接触していた枝や根から禍々しいオーラが木々に流れ込み、それらの木々は即座にアンデッド化していった。

そのスキル《冥樹屍変》は魔法陣に刻まれていたアンデッド化の術式とアンデッド吸収の術式が統合され、〈UBM〉化と共に【ハデスルード】の固有スキルとなったものであり……その効果は自身に接触している生物に呪詛を流しこむ事でアンデッド化させ、更にアンデッドを吸収して自身を拡張・強化するスキルである。

『……』  
その効果により周辺の木々がアンデッド……【ハデスルード】と化し、更にそれらが周辺の木々をアンデッド化させる事で【ハデスルード】の体積はどんどん増えていき、それに合わせてHPとMPが上昇していく。

また、それと同時に第二スキル《魔力集積》——魔法陣の周辺魔力吸収スキルが【ハデスルード】の固有スキル化したモノ——によって周辺の魔力を吸収して、スキルにより消費したMPを回復していった。

『……』  
……そうして【ハデスルード】は残されたたった一つの思いに

従い、へサウダーテ霊林を呑み込んでいく……………皆と全てを吸収して  
同じ永【ハデスルード遠】にする為生に……………



□へサウダーテ霊林〈【黒土術師ランドマンサー】レント

あれから休憩と各種準備を終えた俺達は、再びへサウダーテ霊林奥  
地へ出発しようとしていた。

……………その時、森の奥からいきなり膨大な量の魔力が溢れるのを  
感知した。

「!?? ……これは魔力か?」

『……………しかも相当な大きさの魔力だね』

「……………この森全体が騒めいているみたいなのです」

「なんか凄いゾワゾワするね」

それは魔法系のジョブに就いている俺や魔法に特化したガード  
ナーであるフェイだけでなく、ミカやミュウちゃんでも感知出来る程  
の魔力だった……………これは急いだ方がいいかな。

「先を急ぐぞ……………流石にこれはヤバそうだ」

「そうだね……………私の勘でも『早く森の奥に行った方がいい』って出てる  
し」

「それでは急ぐのです」

そうして俺達は全速力で森の奥に向かって行った。



森の奥についた俺達が見たモノは禍々しいオーラを放つ巨大樹木  
と、その周りで同じオーラを放つ木々の姿だった。そして全ての木々  
の頭上には同じ文字が表示されていた。

「《透視》《千里眼》……………【屍冥王樹 ハデスルード】……………《UBM》の  
樹木型アンデッドか?」

『……………この禍々しいオーラを放つ木々の全てが《UBM》みたいだね』

「しかもコレ、周りの普通の木々もどんどん変質させているのです」  
「コレは……どうも早めに倒さないと手が付けられなくなる気がするよ」

確かに、このままへサウダーテ霊林へ全体がへUBMへ化したら、俺達ではどうしようも無くなるだろう。

……だが、あの「ハデスロード」はどうも先程発生したばかりの様で、変質されている木々の範囲もまだ狭かった。なので今ならまだ俺達でも何とかなるかもしれない。

「……ミュウちゃんとフェイは必殺スキルの準備を、多分あの巨大樹木が大元だろうから、周りの木々を「ジエム」とかで破壊しつつあそこまで突っ込むぞ……」《ファイジカル・ブースター》

「分かったのです……」《気功闘法》

『了解……』《ホーリー・ブレッツシング》

「うん……多分それで大丈夫だと思うよ。ミュウちゃんの必殺スキルの時間内に倒す必要があるみたいだけど」

俺は皆に指示を出すと同時にミュウちゃんにSTR・END・AGI・DEXを上昇させるオリジナル単体バフスキルを掛け、ミュウちゃんとフェイも各種単体バフをかけて行く……ミュウちゃんにはあらかじめ作っておいた単体バフ魔法の各種「ジエム」を渡してあるから、それも使っていく。

……だが、そうしているうちに向こうも俺達に気付いた様で、何体かのこの森で見かけた種類のアンデッドが木々と触手の様なもので繋がれた状態でこちらに向かってきた。

『『『』』』』

「えっ……何あの有線ゾンビ共は。しかも名前が全部「ハデスロード」だし」

「おそろくアレもヤツの一部なんだろう……多分この森にいたアンデッドを取り込んだんじゃないか？……MPを温存したいから「ジエム」も使って……」《ピュリファイ・アンデッド》！

「とりあえず迎撃するよ」《ストライク・ブラスト》！ 《竜尾剣》！  
向かってきた有線アンデッドに対して俺は「ジエム」《ホーリーラ

イト』を使つて光の玉を出し、更に《詠唱》で強化した浄化魔法を放つてその一部を消滅させた。

更にミカがメイスからの衝撃波でアンデッドを砕き、背中から伸ばした剣尾で斬り裂いていく……が、それらの損壊はすぐに修復された。

「ええ、嘘オ！」

「……修復能力付きか。……だが、先程からの魔力の流れは……まさか周辺の魔力を吸収しているのか？」

『『『『』』』』』

……どうも《魔力感知》で感じ取ったところ、あの〈UBM〉は周辺の魔力を吸収している様で、それによつて修復能力を使つていると思われる。

だが、アンデッドだからか浄化によつて消滅したものは修復が遅いようだな……よし、アレを使うか。

『バフは掛け終わったよ！』

「よし、すぐに必殺スキルを。それとミカ、アイツは周囲の魔力を吸収している様だから《アクシデントサークル》対策アイテム【ジエムー《マナ・デイフュージョン》】を使い」

「分かつたのです 《我等が成るは光の使者》！ 《エコー・オブ・トウ

ワイズ》!!？」

「オツガー、これだね！ …… 《サークル・インパクト》！」

『『『『』』』』』

まず…… ミユウちゃんが必殺スキルによつてフェイと融合し、倍加した各種バフ効果が俺達全員に掛かった。

そして、俺の指示を受けたミカは「ジエムー《マナ・デイフュージョン》を砕き周辺の魔力を拡散させ、掛かったバフによつて可能になった超音速機動で敵を薙ぎ払い……再生は遅々として進まなかった。

……どうやら周辺の魔力を拡散させて、聖属性付与の攻撃をすれば再生はかなり遅らせられるらしいな。

「よし！ ……このまま本体のところまで突っ切るぞ!!？ 《バラージスロー》！」

「《ヒート・ジャベリン》！」

『《ホーリー・ジャベリン》！』

そして俺は前方に向けて八つの「ジエムー《エクスペロージョン》」を投げ込み、それによって起こった爆発で侵食された木々を吹き飛ばした。更にミュウちゃんも炎の槍と光の槍を放つて木々を破壊していく。

……だが、相手も黙っている気は無い様で、侵食された木々から禍々いオーラを弾丸にしてこちらに放ってきた。

『「『』」』

「呪怨系攻撃来るぞ！ 《カース・レジスト》！」

「《心頭滅却》！」

『《ホーリーライト》！』

「《闇纏》！」

俺は即座に呪怨耐性バフをミュウちゃんに掛けて、彼女も自身の状態異常耐性を上昇させるスキルを使った……攻撃の速度は亜音速にも届いていないから超音速機動が出来る今の俺達なら避けられるし、その余波も強化された耐性バフでレジスト出来るな。

……そしてミカは「ブラックオーツ」のスキルでその攻撃をすり抜けて、木々の方へ突っ込んで行った。

「《闇纏》解除！ 《インフェルノ・ストライク》!!?」

「前方以外の木々を妨害する！ 《ロック・グレイブ》！」

『《ロック・グレイブ》！』

接近したミカは炎を纏ったメイスで前方の木々を消し飛ばして道を開き、前方以外には俺とフェイの魔法によって大量の石の槍が地面から生えてその動きを妨害した。

……だが、相手は残りの木々から触手の様なモノを出して開けた道を塞こうとしてきた。

『「『』」』

「このまま行くぞ、触手は各々で対処！ 《ブレイズ・バースト》！」

『《ブレイズ・バースト》！』

「《プラスチック》！」

『《ホーリー・バースト》!』

そのまま前方に突っ込んだ俺は炎の奔流を放ち、前方の触手を焼き払った。そして二人も各々の攻撃や【ジエム】で触手を破壊しつつ前進していった……どうやら触手の量はそれ程多くは無い様だし、速度も亜音速にも届かない様だからこのまま突っ切れるな。

『……………そして触手を突破した俺達は、どうにか【ハデスルード】の本体と思われる巨木の元にたどり着いた。』

『……………加減に消し飛べ……《空想秘奥》《セイクリッド・スフィア》!』

『……………番最初に着いた俺は、その禍々しい巨木に向けて強化したオリジナルスキルによる黄金の火球——《クリムゾン・スフィア》をベースに聖属性魔法を合成した、火属性・聖属性複合広域攻撃魔法——を叩き込んだ。』

『……………放たれた火球は周辺の侵食された木々ごと【ハデスルード】を焼くが……その巨大な幹へのダメージは人の形をした禍々しいウロを中に展開された結界によつて阻まれた。』

『……………アツ、防御を固めていたか』

『……………その巨木は枝葉こそ消滅していたが、幹の部分は丸々残っていた。更に周辺の魔力を吸収して急速に自身を再生させている………とりあえず【ジエム】《マナ・ディフュージョン》を使い、周辺魔力を拡散させる事で再生を妨害しておく。』

……………今の攻撃を防いで来るとなると、俺では撃破は難しいな。

『……………という訳で、二人とも頼んだ』

『オツケー………ミュウちゃん、道は作るから《竜尾剣》!』

『分かったのです』

俺の指示に応え、まずミカが《竜尾剣》を射出して《エンブリオ》のスキルによつて結界を破壊して、そのまま剣尾で【ハデスルード】を貫いた。

そして、ミュウちゃんが巨木と繋がった剣尾のワイヤー部分を駆け上り【ハデスルード】に接近した………どうやら相手は魔力を再生と防

御に回していた様で、彼女の接近を迎撃する事は出来ていなかった。

「《真撃》《インパクトフィスト》!!?」

『《クリムゾン・スフィア》!!?』

『!?!?』

「そのまま【ハデスルード】に接近したミュウちゃんは【武闘家】の奥義——次に使う格闘系アクティブスキルの威力・効果を三倍にするスキル——で強化された拳撃で人型のウロを砕き、その直後にフェイが逆の手から最大威力の《クリムゾン・スフィア》を放って巨木の上部を消し飛ばした。

……その反動でミュウちゃんが距離を取ると、それと入れ替わる様にミカが前に出て巨木の消し飛ばされた部分に飛び乗った。

「これ以上再生されない様にキチンと砕いておくよ! 《グラウンド・ストライク》!!?」

『!?!?』

そして、足場に使っていた【ハデスルード】に向かって渾身の一撃を叩き込み、残りの【ハデスルード】本体を粉々に破壊した。

「よしっ! 勝った! 第三部完!!?」

「悪いが、それはまだ早いみたいだぞ。……周りの木々がまだ【ハデスルード】のままだ」

「本体を破壊したのにまだ生きていますか?!?」

何と、本体を破壊しても侵食された木々の上には【ハデスルード】の文字があった……だが、動きや再生速度は大幅に鈍っているみたいだな。

「どうやら大分弱っているみたいだし、このまま周りの木々を破壊するぞ。再生速度が落ちている今なら破壊しきれる筈だ……《エクスプロージョン》!」

「分かったのです、みんなで手分けして破壊しましょう! ……《ブレイズ・バースト》!」

『……もうあんまりMPは残って無いんだけど……《ヒート・ジャベリン》!」

「もう! 本当に面倒くさいねコイツ! ……この前ガチャで当てた

【ジエムー《クリムゾン・スファイア》をくらえ!!?】

それから全員で魔法や【ジエム】を使って、侵食された周りの木々を破壊していった………幸いな事にあの巨木を破壊されると再生能力や攻撃能力が大幅に弱体化する様で、木々を破壊するのに大して苦労はしなかった。

だが、周辺のアンデッドがこの騒ぎを聞きつけてこちらに向かってきたりしたので、【ハデスルード】に吸収されない様に倒す必要があった事は面倒だったが。



〔UBM〕【屍冥王樹 ハデスルード】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【【ミユウ】がMVPに選出されました】

【【ミユウ】にMVP特典【冥樹靈冠 ハデスルード】を贈与します】  
俺達がせつせと木々を破壊して周辺を更地になると、突然〔UBM〕の討伐アナウンスが流れて来たので、それによつて俺達は【ハデスルード】討伐が完了した事を認識した。

「あー！ 疲れた。しばらくゾンビは見たくないよ。今回は最初から最後までRTAだったね」

「……………まあ、そうしなければ倒せなかっただろうからな」

「……………実に厄介な相手だったのです……………」

『……………もうMPが空だよ……………』

実際、俺達の到着が後一時間遅れていれば【ハデスルード】を倒しきるのは不可能だっただろう……………コイツはそれだけの相手だった。

……………そうして、俺達が強行軍の疲れから休んでいると……………。

『……………ありがとう……………』

……………何処からか、そんな声が聞こえた気がした……………。

「……………何故、あんなモンスターが此処に居たのでしょうか？」

「さーねー……………私達に出来る事は手の届く範囲の悲劇を防ぐ事



ぐらいだから、既に起こってしまった悲劇はどうしようもないし」「俺達は所詮通りすがりのヘマスター」だからな。……………今回は被害が大きくならない内に問題を解決出来たから、それでいいだろう」……………こうして、俺達のヘサウダーテ霊林」探索行は終わったのだった。

## 〈ニツサ辺境伯領〉・事件の後、次への準備

□ 〈サウダーテ霊林〉

クラッシュヤー 【壊屋】ミカ

あの 〈U B M〉

ユニーク・ボス・モンスター 【屍冥王樹

ハデスルード】との戦いを終えた

私達は、それまでの強行軍の疲労もあつてしばらくの間その場で休んでいた。

………ちなみに周辺の木々の殆どを破壊した為、周りは殆ど更地である。お兄ちゃんが《サンクチュアリ》を張っているお陰でアンデッドは近づいて来ないけど。

「そういうえばミュウちゃん、初討伐MVPと特典武具おめでとー」

「ありがとうございます。………でも、何故私がMVPになったのでしょうか？ 多分兄様の方が多くダメージを与えていましたよね？」

「………おそらく、与えたダメージ量が俺達三人で分散していたから、全体バフと本体撃破の功績で選ばれたんじゃないか？」

『成る程』

実際、ミュウちゃんとフェイちゃんの必殺スキルによる強化が無ければ、あれだけ早く倒すのは無理だっただろうしね。

………あの「ハデスルード」は、時間を掛ければ手が付けられなくなるタイプの〈UBM〉だっただろうし。

「ところでミュウちゃん、手に入れた特典武具はどんな効果なのかな？」

「えーつと……【冥樹霊冠 ハデスルード】という装備で、分類は頭装備のサークレットみたいなのです」

そう言つてミュウちゃんが取り出したのは枝と蔦で出来たサークレットで、所々飾りとして葉っぱが付いていて額の部分には花が咲いているデザインだった………あの禍々しい樹とは似ても似つかぬ、かなり綺麗なデザインだね。

「………それで、効果はこんな感じなのですが……」

【冥樹霊冠 ハデスルード】

エピソードアイテム  
〈逸話級武具〉

狂った妄念によつて堕ちた霊樹の概念を具現化した逸品。

装着者の魔力を大幅に増幅すると共に、周辺の魔力を吸収して装着者の魔力に変換する。

※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限なし

・装備補正

MP + 50%

防御力 + 10

・装備スキル

《魔力集積》

《霊環付与》

「高いMPへの補正に魔力回復のパッシブスキルである《魔力集積》、更に一人にHPの継続回復と時間経過による状態異常回復効果を付与する《霊環付与》のアクティブスキルがあつて、確かに強いのですが……私は魔法系じゃないので装備してもあまり意味がないです」

ミュウちゃんはそう言つて「ハデスルード」を手に乗せつつ、少し困つた顔をしていた。

「……確かにこの装備は魔法使い系の装備だね……これは多分……」

「……………この装備つてミュウちゃんじゃなくて、フェイちゃんにアジャストされた装備じゃないのかな？」

「フェイにですか？ ……でも、サイズが合わないのですよ？」

確かにミュウちゃんが手に持っていた「ハデスルード」は、大体人の頭につけられるぐらいのサイズだった。

「……………フェイちゃんの大きさは三十センチぐらいだから、このままなら装備出来るサイズじゃないね。」

「とりあえず試してみたらどうだ？ ……俺の予想が正しければ、その特典武器は両方に装備出来る様にアジャストされていると思うんだが」

「やってみるのです。……フェイ、コッチに来てください」

『分かったよ』

そうしてミュウちゃんがフェイちゃんの頭に「ハデスルード」を近

づけると、その大きさがみるみるうちに小さくなってフェイちゃんの頭にピッタリなサイズに変化した。

「やったのです！ 装備出来たのです!!?」

『……………これは凄い装備だね。魔力が物凄く増えたし、今も急速に魔力が回復しているよ』

「良かったね、ミュウちゃん、フェイちゃん」

「やっぱりサイズ調整機能付きだったか。……………ミュウちゃんの必殺スキルにアジャストすればそうなるだろうしな」

お兄ちゃんの言う通り、普段はフェイちゃんが装備しておいて、必殺スキルを使った時はミュウちゃんに合わせたサイズになるんだろうね。

私の【ドラグテイル】もサイズを調整する機能があるみたいだから、特典武器のアジャストは結構気が効くみたい……………まあ、私のはガチャで当たった物だから、以前の装備者が身体のサイズを変えられたりしたんだろうけど。

「もう一つのスキルも……………確か持続回復効果ならフェイちゃんのスキルの効果範囲内だったよね?」

『うん、〃一定時間の間回復効果を付与する〃みたいな効果ならバフ効果と判定されるよ。……………普通の回復魔法は無理だけどね』

「これで私達も特典武器ゲットなのです！ ようやく兄様と姉様に並べたのですよ!!?」

「……………良かったな、ミュウちゃん」

とても喜んでいるミュウちゃんに、お兄ちゃんと私はやや苦笑いを浮かべた……………今までのミュウちゃんでも相当強かったもんね、特に対人戦では。

……………この【ハデスルード】も相当強い装備だし、ミュウちゃん達が私達の中で一番強いなんて事も普通にあり得るしね。

「さてと、じゃあ大分回復したし休憩を終わりにして帰る」一体なんだ! この惨状は!?!……………ん?」

私達が休憩を終わりにして帰ろうとした時に、いきなり森の方から人の声がした。

そちらを見ると二十人ぐらいの人達が森を抜けて来るところだった……格好は色々だけど、騎士っぽい格好をしている人が割と多いみたいだね。

……その騎士の一団の中に居た一人の女性が、更地になった森の中にいる私達を見つけて話しかけてきた。

「……この惨状を作ったのは君達か？」

「えーっと……まあ、そうですね……」

「……それは森の中にアンデッドを放ったのも君達か？」

「それは違います。むしろ俺達はこの事件を解決した方ですよ」

その騎士の女性は警戒しながらお兄ちゃんに色々と問いただしている……まあ、彼らからすればアンデッドが彷徨く森を抜けたらいきなり森の奥地が更地になっていて、そこに怪しげな人間がいたら警戒するのも無理はないよね。

……幸いな事にその騎士の女性は他の人と比べたら冷静であり、お兄ちゃんも無難に受け答えしているから冤罪とかにはならないでしょう。この世界には《真偽判定》のスキルもあるし。

「……ん？ その紋章はへマスターの……ひよつとして『レントさん』と『ミカさん』ですか？」

「ええ、俺はへマスターのレントで、あっちが妹のミカですが……」  
ふむ？ どうやら彼女は私とお兄ちゃんのことを知っているみたいだね……そういえば彼女の顔立ちには見覚えが……。

……そう考えていると、彼女は改めて自己紹介をしてきた。

「申し遅れました、私はアルター王国近衛騎士団に所属しているリイ・ローランと申します。お二人の事は両親と姉……アイラ・ローランから聞いています」

どうも、リヒトさんとマリイさんの娘さんだったみたい……私達はローラン一家とは何かと縁があるみたいだね。

◇

「……成る程、そういう事でしたか。……しかしへUBMを

たった三人で倒すとは、へマスター〜というのは規格外な存在ですね」  
「まあ、あの【ハデスルード】は生まれたてだったみたいなのでなんとかなりました。……………もし、もう少し成長していたら不味かつたでしょうが」

あれから私達はリリイさんの質問に答えて、ここで何があつたのかやどうしてここに来たのかを話していた。最初は警戒していた人達も私達の言葉に《真偽判定》は反応しなかった事や、ミュウちゃんの特典武器【冥樹靈冠 ハデスルード】を見せた事によつて納得して貰えた。

ちなみに、どうして此処に来たのかについては「勘で何となく此処が怪しいと思つて来てみたら、偶々へUBM〜と遭遇しました」と言つたら、少し唾然とされたけど「……………へマスター〜とは本当に規格外な存在ですね」という感じで納得してくれた……………便利だねへマスター〜という立場は。

「とりあえず改めて礼を言います。……………この領と王国を襲う危機を排除してください、本当にありがとうございますございました」

「いえ、俺達は偶々此処に來ただけですから」

「それでも礼は言わせて下さい。……………話を聞く限り、おそらく私達では倒し切れなかつたでしょうし」

やっぱり、この世界でへUBM〜を倒すというのは相当に重い事みたいだね。最初はへマスター〜という事で不信感を抱いていた人も、私達の話が事実だと分かつたらそういった感情は無くなって、感謝や敬意の視線を送る人も出てきたぐらいだし。

……………まあ、それよりも畏怖や何かおかしなモノを見る視線の方が多かつたけど。「あのアンデッドの群れを突破してそのままへUBM〜を倒すとか、やっぱりへマスター〜はとんでもないな」とか「へマスター〜は色々おかしい……………主に隣レジエンタリアの国の連中とか」などと言う話が聞こえてきたし。

「それで出来ればこの後私達について来て欲しいのですが、よろしいでしょうか？」

「……………それは一体何故ですか？」

「私達は特級危険生物らしきアンデッドの調査の為にこの森に来ていたので、この後に此処で起きた事について領主に報告をしなければならぬのです。……………出来れば、そこで当事者である貴方達に此処で起きた事について詳しく話をして貰いたいです。……………おそろく報酬も出るでしょう」

「そういう事なら構いませんよ。……………二人もいいか？」

「別にいいよ、報酬も貰えるみたいだし」

「大丈夫なのです」

こうして私達はリリイさんについて行って、此処で起きた事について色々と言言をする事になった……………幸いな事にこの森のアンデッドは私達とリリイさん達が殆ど倒してしまっていた為、帰り道は行きの時と比べれば楽に進む事が出来たけど。



「あく、やっと終わったよ」

「思ったよりも色々聞かれたな。……………特にアンデッドを作った〈UBM〉発生の原因となったと思われる存在については」

あの後、〈サウダーテ霊林〉を出た私達はそのまま此処の領主であるニッサ辺境伯の屋敷の行つて、あの森の奥で何があったのかを詳しく話す事になったのだが……………その際、〈UBM〉【屍冥王樹 ハデスルード】の事に関しては大体納得して貰ったのだけど、その【ハデスルード】発生の原因については色々な事を根掘り葉掘り聞かれたのだ。まあ、質疑応答は殆どお兄ちゃんがやってくれたけど。

……………どうもあの森に居た時にリリイさん達も【ハデスルード】が生まれた時の異常な魔力を感知していたらしく、その事などから『この領内にアンデッドを放ち〈UBM〉が生まれる原因を作ったモノがいる』と考えている様なんだよね。

『まあ、この事件の直接の原因だしね。詳しく知っておきたいと思うのはしょうがないよ』

「……………私達は〈UBM〉が生まれた後に来たから、よく分からない

い」としか答えられなかったのですが」

まあ、私達は本当に何も知らないし、現場で何か見なかったかを聞かれてもあの時は「ハデスロード」との戦闘に集中していたからね。何かあったとしても、あの辺一帯は更地にしちゃったから何も残っていないし。

「……………そんな事を考えていると、お兄ちゃんが質問して来た。

「……………それで、この事件は本当にこれで終わったんだよね？」

「うん。……………少なくとも私の直感に反応する様な危険はこの辺りには無いと思うよ」

あの「ハデスロード」を倒した時点で私の『遠い勘』は反応しなくなったからね……………多分、この事件の原因はもうこの世界には居ないんだろうし。

まあ、アンデッドはまだ残っているみたいだけど、私の勘が反応しないからそこまでの危険はもう無いみたいだし。

「なら良いか。……………俺達に出来る事はもう無い様だし、後のことは此処の領主やリリイさん達の仕事だしな」

「そうだねー。報酬も沢山貰ったし、これにて一件落着という事で良いでしょうー！」

ちなみに報酬に関しては通常の特級危険生物に掛かっていた懸賞金に加えて、今回「UBM」を倒した事からそこかなりの額が上乘せされて渡された。

お陰で「サウダーテ霊林」探索の準備に使ったお金や、「ハデスロード」との戦いで使った「ジェム」の分が補填出来たとお兄ちゃんが喜んでいたね。

「……………それにしても、旅行の始まりからいきなり騒動に「アンデッド祭り」とは運が無いな」

「私は特典武器を手に入れられたので、そこまで残念では無いですが」「僕達もだいぶ強くなったよね」

「この世界<sup>ゲーム</sup>ならではの旅行イベントだとも思おうよ。お陰で私も【壊屋】をカンスト出来たし」

……………まあ、しばらくアンデッドは見たく無いけどね……………。



「まあ、強行軍のお陰でレベルはだいぶ上がったがな。……………それで、次はなんのジョブに就くつもりなんだ？」

「とりあえず【ドラグテイル】強化を目的にして【アーミー・ファイター鎧戦士】に就くつもりだよ。このジョブの鎧強化系スキルは、鎧さえつけていればサブジョブに入れていても使えるし」

「偶々ガチャで当てた【ドラグテイル】だけれど、今ではすっかり私のメインウエポンだからね。ここらでサブジョブ枠を使って強化しておくのもいいでしょう。」

「姉様もジョブレベル五百のカンスト目前ですね。私も頑張らなければなのです！」

「まあ、デンドロ口初日組にはもうカンストした人も結構いるみたいだけれどね。……………それが終わったら超級職に就かないとだけど」

「……………そもそも就けるのか？ 超級職に就くのは言うほど簡単じゃないぞ」

「うーん、月一で先代【技神】さんに瞬殺されているお兄ちゃんが言うのと説得力が違うね。」

……………でも、私だって初めてデスペナしたあの日から、メイス・ストライカー【戦棍士】系統の超級職に就くために直感をフル稼働させてまでして色々調べて来たんだよ。

「戦棍士系統超級職【キング・オブ・メイス戦棍王】は、今現在就いている人が確認出来ない空位の超級職みたいで、転職条件もロストしているみたい」

「……………それだと転職するのは難しいのでは？」

「そうでもないよー。むしろ超級職は先着一名だからね、現在就いている人がいなければ条件を満たす事が出来れば就けるし。……………先に就いている人がいると譲って貰うか、あるいは殺してでも奪い取るぐらいしか出来ないしね。当然、私は後者をやる気なんて無いけど」

「当たり前だ。……………というか、肝心の転職条件が分からなければ意味がないだろう」

「ふっふっふー。実はそうでも無いんだよなあ……………実は此処に来てからとある物を見つけたんだよね。」

「戦棍王」は今現在就いている人が居なくても、過去に就いていた人はいたみたいなんだよね。……………そういう訳で、昔の【戦棍王】に関わる手記がこちらになります」

「あっさり出して来たのです!?？」

「……………随分と準備がいいな……………いや、ギデオンから南に行こうと言ったのはお前だったな」

「そういう事。ギデオンから南に行こうと思ったのは私がなんとなくそう思ったからだしね」

実は、旅行をしようと思った最後のきっかけは、ギデオンで超級職について調べている時にお約束の『遠い勘』が発動したからなんだよね。ちなみにこの手記は事件の調査をしている最中に、この街の古本屋で見つけた物です。

「それで？ その手記に転職条件が載っていたのか？」

「いや、読めた範囲だとこの手記は当時の【戦棍王】さんの従者が書いた物みたいで、主人の様子を書いた日記みたいな物なんだよね」

この手記には当時の【戦棍王】さんの事を『誰よりも戦棍を用いた技に長けていた』とか『強大なモンスターを戦棍の一撃で粉碎した』などと書かれていて、その末に【戦棍王】の力を得たとも書かれていた。「今後も解読は進めるつもりだけど、多分転職条件がそのまま書かれているって訳では無いみたい。……………私にとってはそれで十分だけどね」

「……………まあ、お前の直感なら何とでもなるだろうな」

「姉様ですしね」

とりあえず、この手記に書かれている【戦棍王】さんの行動から転職条件の予想をいくつか立てて、その中から直感が反応するものややっていけばいいしね……………いずれ私に【戦棍王】のジョブが必要になるのなら、それでどうにかなる筈だし。

「さて！ この街でやる事はもう無いと思うし、後はアンデッド騒ぎでイマイチ楽しめなかった観光でもしますか！」

「それと次の旅行の準備もな。次の行き先は北にあるヘブリティス伯爵領」だったな」

「予定ならそうなっているのです」

『じゃあ観光もしつつ、次の旅行の準備もしようか』

こうして私達は残りの日程で△ニツサ辺境伯領△の観光を楽しんだのだった。

## 番外編 〈月世の会〉・日向葵

□王都アルテア

マジックフィーストマスター  
【魔 拳 聖】日向葵

どうもこんにちは日向葵です。今日も中学校が終わったのでデンドロにログインしました。

……ちなみに私はリアルでは病弱アルビノ美少女（自称）ですが、ちゃんと日光対策をすれば外出する事は出来るので学校には通っています。最も通院する事も多いので、学校を休む事は多いけど。

後、デンドロは面倒な日光対策をせずとも日の光の下に出られると考えた両親が買ってくれた物で、今ではすっかりハマってしまった。

「……………さて、今日はどうしようか「おーい、葵ちゃん」な。とりあえず冒険者ギルドでクエストでも「無視!?!」……………何ですか、月夜さん」

今日の予定を考えていた私に声を掛けたのは、我等が〈月世の会〉のオーナー扶桑月夜さんである。そして、その後ろには彼女のへエンブリオであるカグヤさんと秘書の月島さんがいつも通り控えていた。

実は自宅の近くに現実の〈月世の会〉の本拠地がある事とよく通院している病院が〈月世の会〉と関わりが深いところだったので、私と月夜さん・月影さんは現実でも面識があり、それが縁でデンドロのクラン〈月世の会〉に入る事になった……………入った入信したのはデンドロの中だけで現実では入信してないけど。

「偶々見かけたから声掛けただけだよ。……………それにしても〃月夜さん〃 つちゆうのは他人行儀やなあ。あつち現実みために〃月夜お姉ちゃん〃と〃それで何の様なんですか、月影さん〃スルー!?!」

何か妄言を喚き始めたオーナーを無視して、私は月影さんに用件を聞いた……………ちなみに初めて会った時から、現実での彼女の呼び方は〃月夜さん〃オンリーである。

「特に用はありませんよ。月夜様が言った通り偶々声を掛けただけで」

「そうやえ、暇だったから声掛けただけや」

「……………以前の〈マスター杯〉での賭けで、ポケットマネーをほぼ全

額擦ったのに暇なんですね」

「グハアアア!!？」

そんな感じに返答したらオーナーは地面に突っ伏した……………傷は深いぞ、がっかりしろ。

後、王都にへ月世の会へのクランホームを建てる為の資金稼ぎは、その事情からデンドロ廃人と化しているクランメンバーのお陰で順調に進んでいる。故に、そう遠くない内にクランホームがこの王都に建つ事になるだろう……………オーナーが破産しようが関係無く。

「……………だから負けを取り戻す為に、ポケットマネー残り全部賭けるのはやめろと言った」

「此も止めたのだけれど……………」

「だってなあ、上手く行けばクランホーム建てるの早くなると思うたんやもん……………」

まあ、オーナーがこの王都にクランホームを建てようと急ごうとする理由については分からなくもないが。

……………このへ月世の会へにはその成り立ちからへInfinite Dendrogramの世界を「真なる魂の世界」だと思ってる……………そう思わなければ現実で生きる気力を失ってしまう人達が多く所属している。なので、オーナーはそんな人達がこの世界でちゃんと生きる事が出来る様に、このアルター王国にへ月世の会の確固とした勢力基盤を築こうとしており、王国へマスターへの初期開始地点である王都アルテアにクランホームを建設する事もその一環なのである。

「……………そもそも、このデンドロはまだ始まったばかりで、クランホームの建設にも相応の手間がかかるのは分かりきっていたはず。オーナーだけではなんとか出来ない問題なのだからもう少し周りを頼るといい」

「……………葵ちゃん……………やっぱり月夜お姉ちゃんと「却下」ええ……………」

このオーナーは何だかんだと言っても、へ月世の会へとそこに所属している人間の事を真摯に考えているので非常に人望があるのだ。な

のでクランメンバーもオーナーの要望には可能な限り答えようとしており、今回のクランホーム建設にもメンバー全員が全力で取り組んでいる。

「……まあ、このオーナーは偶に訳の分からない事をやらかしたりもするが、前述の理由から余程の事が無い限りは生暖かい目ですルーしている。」

「……………私はこれからレベリングと資金稼ぎを兼ねて、冒険者ギルドでクエストを受けに行こうと思っているけど……………」

「じゃあ、うちらも一緒にいくえー。……………お金は稼いでおきたいし、うちもそろそろカンスト合計レベル500になるするからレベリングもしたいし」

「……………確か司祭系統超級職の条件には『司祭系ジョブで合計レベル500』の条件があつたか」

「そうやえー。……………今後の事を考えると司祭系統超級職には就いておきたいしな」

医療関係に回復魔法の使い手が占める割合が多いこの世界において、司祭系統超級職……………部位欠損すら直せる超級回復魔法が使えるジョブの価値は非常に高い。それこそ王族クラスのティアンでもその意見を無視は出来ない程に。

……………だからこそ、うちのオーナーはアルター王国での〈月世の会〉地位向上と、王国との交渉カード確保の為に〔女教皇〕ハイプリエステスへの転職を狙っているのだ。うちのクランは側から見れば『最近増え始めた〈マスター〉が作って急速に勢力を拡大している怪しげな宗教組織』なので、このまま勢力を拡大し続ければ王国の方から何らかの圧力がかかる可能性が高いし。

ちなみにもう一つの条件である『カンスト〔司祭〕プリースト千人の署名』に関しては、私を含むクランメンバーが〔司祭〕と取る事で何とかしようとしている……………〈マスター〉が万能のジョブ適正がある事と、〈月世の会〉カネとコネの力で大量のデンドロハードを買い込める事を利用した力技である。

「じゃあ、冒険者ギルドまで行こか、受けるクエストは葵ちゃんに任せるで。後、他にも暇そうなメンバー何人か誘えへんかな」

「……………他のメンバーは資金稼ぎに忙しいと思うけど……………」  
まあ、〈月世の会〉の廃人集団なら何人かは捕まるかな。



というわけで、やってきました〈サウダ山道〉。今回は最近此処で増え始めたゴブリンの群れを討伐して、王都・ギデオン間の交通ルートを正常化するクエストを受けてきました。

そして、今回のパーティーメンバーは広域デバフと回復魔法を使う我等がオーナー月夜さんと、対人・中距離戦闘に長け状況次第では広域殲滅も出来る月影さん、そして光や熱に強い基本前衛の私……………以上。

「……………結局、誰も捕まらへんかったわ……………」

「今回は残念ながら間が悪かった様ですね」

「……………みんな資金稼ぎに全力で頑張っているからね」

うちの廃人メンバーなら何人かは捕まると思っていたんだけど……………どうも現在ログインしているメンバーが全員、資金稼ぎなど用事で忙しく誰も暇では無かった様なのだ。王都のクエストは競争率も高いから、遠くで出稼ぎに行っているメンバーも多いし。

うちの教義は『真なる魂の世界で自由を謳歌する』みたいな感じだから、普段はメンバー全員割と自由にやっているんだよね。

「ぐぬぬ……………いつの日か〈月世の会〉の勢力が拡大した暁には、シンボルマークを描いた装備で統一したメンバーを従えて物凄い大物っぽい雰囲気が登場したる……………」

「そんな日が来れば良いですね」

「……………まあ、うちのメンバーは割とノリがいいから、オーナーの提案なら結構乗ってくれるだろうけど」

「それは一体どういう状況なのかしら？」

……………多分、オーナーが暇だからと適当な相手に難癖付けて〈月世の会〉を動かした時じゃないかな？

「……………それで、クエストはこれで良かったの？ この数でゴブリ

ンの群れの討伐は面倒だと思っけど」

「まあ、うちと影やんがおれば数だけの相手ならどうとでもなるしな。……それに報酬も良かったし」

まあ確かにオーナーの《月面徐算結界》と月影さんの必殺スキルの相性は非常にいいからね、ゴブリンの群れぐらいなんとかなるか。

……そうして山道を進んでいるうちに小高い丘に差し掛かった時、索敵担当の月影さんが目的のゴブリンを見つけた様だ。

「おっ、影やんゴブリン見つけたん？」

「はい、ゴブリンは見つけましたが……群れではなく数は五匹程度、しかも何かから逃げている様ですね」

月影さんに言われて丘の下の方を見てみると、確かに五匹程のゴブリンが何かから逃げる様にして走っていた。そして、そのゴブリン達の動きは妙に遅く時折ふらついていた。

「……………ダメージを負っている？ それとも……………」

「んー、あれは多分状態異常やないかな」

「……………おそらく月夜様の言う通りでしょう。ゴブリンが逃げてきた方向をご覧ください」

そう言われてゴブリンが逃げてきた方向を見ると、そこに生えていた木々が次々と枯れていく光景が目映った。

……………そして、その先から一匹の禍々しい瘴気を纏った巨大な蛇が現れた。

「あれは【ハイ・キング・バジリスク】やね。…………成る程な、ゴブリンはあれから逃げとつたんか」

「猛毒を撒き散らして周辺を汚染する性質から、王国では特級の危険生物に指定されている【キング・バジリスク】の上位種ですね」

「一体なぜこんな所に……………」

二人の言う通り、その蛇…………【ハイ・キング・バジリスク】が進行して来たルート上周辺の植物は全て枯れ果てていた。当然、あの辺りに居たゴブリンの群れなどひとたまりもないだろう、先程逃げてきたゴブリン達も既に息絶えている様だし。

「この感じやと、うちのターゲットのゴブリンの群れは壊滅やろな。」



「……それで、どうするん葵ちゃん?」

「……………私?」

「せやでー。……今回うちらは葵ちゃんに付き合っつてここまで来たからな、どうするかは葵ちゃんが決めたらええで」

そう言ったオーナーはややイタズラっぽい表情を浮かべて私に問いかけてきた……………まったく、この人は面白そうな事を見つけるとすぐにこうなる。

「……………アレを倒そう。このままだと周辺の被害が酷い事になるだろうし、これ以上の被害は減らしたい。それに特級危険生物の【キング・バジリスク】には常時懸賞金が掛かっていた筈」

「分かったで、まあ今回の目的は資金稼ぎやからな。……………獲物のゴブリンが居なくなった以上、アレには落とし前をつけて貰おか」

「分かったわ」

「了解しました、葵さん」

オーナーはイイ笑顔を浮かべて私の意見に同意し、カグヤさんも頷き、月影さんはいつもの笑顔で首肯した……………どうも今回、オーナーと月影さんは私の反応を見て楽しんでる節があるなあ。

「で、どやって倒すん?」

「……………三人は毒が届かない距離からアレの動きを妨害してほしい、その際に私が接近して必殺スキルを使って消し飛ばす」

「ま、猛毒撒き散らすアレ相手に長期戦なんてする必要はあらへんからな。……………でも、葵ちゃんの必殺スキルなら遠間から打ち込んでも十分ちゃう?」

「……………私の必殺スキルは見かけほど有効射程が長くないし、前回使用してからのチャージ量にも不安がある」

「成る程な。とりあえず毒耐性はあげとくで、《デトキシケイト・ヴェイル》……………これで短時間ならあの猛毒の空間の中でも大丈夫な筈や」

私の作戦に同意したオーナーが、【司教】<sup>ピショツク</sup>の病毒耐性上昇スキルを掛けてくれた……………これで問題は無い、どうせ戦闘は一瞬で終わる。

「……………ありがとう。……………じゃあ三人共援護よろしく」

「任せとき」

「ええ」

「承知しました」

礼を言った私は「ハイ・キング・バジリスク」の猛毒の範囲内に入らない様に注意しつつ丘を駆け下り、そのまま相手の進行方向に回り込んだ。

……これで目の前はヤツと汚染された土地だけになるから射線の関係上この位置の方がいい、

「……さて、行くか」

『SYAAAAA!!?』

いきなり目の前に現れた相手を警戒して一瞬動きを止めたヤツを尻目に、私は一気に接近して距離を詰めた。

……無防備に接近してきた私に対して、ヤツは即座に猛毒を撒き散らしながら迎撃の姿勢を取ろうとしたが……。

「《月面徐算結果・薄明》」

「《<sup>エル</sup>てまねくカゲとシ<sup>ケイニツヒ</sup>》」

『SYAAAAA!!?』

その瞬間、突如周囲一帯が『曇り空の夜』に変わり、細く注ぐ月光が「ハイ・キング・バジリスク」を照らし、それとほぼ同時に『夜』によって周囲に出来た影が無数の手となってヤツを拘束した。

……これが《月世の会》クランオーナー扶桑月夜の《エンブリオ》である「カグヤ」のスキル《月面徐算結果》……効果範囲内の敵の能力を六分の一にする驚異の『夜』である。今回は相手の能力を考慮して、徐算対象をステータス一つのみ絞る代わりにレジストが困難になる《薄明》でSTRを六分の一にしている様だ。

更に効果範囲内が『夜』になる為、月影さんの《エンブリオ》の周囲の影を操る必殺スキルの効果を最大限に活かす事が出来る……本当にこの二人の《エンブリオ》は相性がいい。

『SYAAAAA!!? SYAAAAA!!?』

影の腕に囚われた「ハイ・キング・バジリスク」は身を悶えさせながら必死に抜け出そうとするが、STAが大幅に減っているので拘束から逃れる事は出来ず……その間に接近した私はヤツに右手を向け



《デトキシケイト・ゾーン》

そう言ったオーナーは熱線の効果範囲から外れていた土地の汚染を、【司教】の一定範囲内を解毒するスキルで浄化していた……これは……？

「……………何をしているのオーナー？」

「見ての通り汚染された土地の浄化や。……………さつき葵ちゃんが『これ以上の被害を減らしたい』って言うと思ったやろ。だから二次被害を減らす為に浄化しとるんや……今回は葵ちゃんの指示に従うって言うたからな」

そう言っただけでオーナーは汚染された土地を浄化していった……………こういう所があるから、この人は克蘭メンバーから慕われているんだよね……………

「分かった、私も手伝う」

「此も手伝うわ」

「当然、私もお手伝いしましょう」

こうして私達は可能な限り周辺の汚染を浄化していった。

◇

あの後、一通りの浄化作業を終えた私達は「ハイ・キング・バジリスク」討伐の懸賞金をもらう為に冒険者ギルドへ向かった……………のだが……………

「いやー、今日は中々楽しかったわ。懸賞金のたつぷりと頂いたし、お陰でビンボー生活ともおさらばや！」

「……………そりゃあ、あそこまでゴネればね……………」

「ゴネたんちやうで、正当な交渉の結果や」

……………そこでうちのオーナーは討伐対象であるゴブリンが倒されていた事や周辺を浄化した事などを理由にして、冒険者ギルドの担当者にあの手この手でゴネまくり、通常の三倍以上の懸賞金を手に入れたのだ。

……………最後の方は担当者が涙目になってたし……………

「……………何故このオーナーはせっかく上がった好感度を速攻でドブに投げ捨てるのだろうか」

「此もそういう所は直した方がいいと思うわ」

「まあ、それが月夜様ですから」

「……………みんな酷ない？ 今回うち結構頑張ったと思うんやけど……………」

まあ、王国の〈ヘマスター〉によるクランの中でも、将来確実にトツプになるであろう〈月世の会〉のオーナーが綺麗事だけでは成り立たない事は分かるけどね……………うちのクランはその特性上ログイン時間の長い〈ヘマスター〉が非常に多いから、他のクランと比べても将来的な総戦力は頭一つ上になるだろうから。

……………そうなれば私達を利用しようとする王国<sup>王族</sup>のテイアン<sup>貴族</sup>は必ず出て来るだろうし、それが正当な交渉や取引の結果ならともかく、世界派ばかりのうちのメンバーのあり方に付け込む様なやり口で来る事も考えられる。

そんな事はこの世界を『真なる魂の世界』とする以上は絶対に認められないからこそ、〈月世の会〉オーナーとしての交渉では厳しくせざるを得ない事は分かるのだが……………。

「……………将来、気に入った人に初対面でやらかして好感度がマイナスになって、更にえげつない交渉の内容がその人にバレて好感度が中々上がらない事態になりそうな気がする……………」

「何その具体的すぎる予感!?？」

……………とりあえず、やらかしはもう少し自重した方がいいと思う。

## アルター王国一周旅行・西の海 へブリテイス伯爵領〉・現状確認

□へブリテイス伯爵領〉【ウイザード魔導師】レント

あれから俺達はへニツサ辺境伯領〉での観光を終えた後に、一通りの準備を整えてから次の目的地であるへブリテイス伯爵領〉へ向かう事にした。幸いな事に道中いきなり大量のアンデッドに遭遇したり、唐突にへU ユニーク・ボス・モンスター B M〉が襲撃を仕掛けてくる様な事も無く実に平和な旅路だった。

今は到着したこの領の領主が住む街へブリテイス〉に滞在しながら、この街の観光したり時折冒険者ギルドのクエストを受けたりして旅行を満喫していた。街で話を聞いていると領主であるブリテイス伯爵は善政を敷いており、領内も平和で領民にも慕われているみたいだ、

「いや、何事も無く実に平和だね。この街も穏やかな雰囲気観光にはもってこいだし」

「この領内には港町もあるみたいなので、魚介料理が美味しいのです」  
『本当に美味しいね』

妹二人とフエイもブリテイスの平和な様子には満足している様だ  
………ちなみに今居るところはこの街にあるレストランの一つで、  
ミウウちゃんが言う通り魚介料理がうまい。

………そんな事を考えつつ料理に舌鼓を打っていると、同じく料理を食べていたミカが最近あったとある出来事について聞いて来た。  
「それでお兄ちゃん、第五形態に進化したへエンブリオ〉の調子はどう？」

「どうと言われても、特に使い心地は変わってないな」

実はこの領に着いてからしばらくして俺達が適当な宿に泊まって休憩を取った後にいつも通りオリジナルスキルの開発をしていたら、いつのまにか【ルー】の到達形態が『V』になっていたのだ。

………前回進化したのがプレイを始めてからデンドロ内で一ヶ

月半ぐらい経った頃、現実では八月始めの頃で、今は現実では九月後半だから現実では約二ヶ月、デンドロ内では半年ぐらい掛かっているのだな。やはりへエンブリオが上級に進化すると進化速度が大幅に遅くなるという話は本当らしい。

「いいなーお兄ちゃん。私は進化まだなのに」

「と言っても、知っての通り俺のへエンブリオは進化しても戦闘能力が大幅に強化される訳じゃないしな」

実際、俺の「ルー」が第五形態に進化した時の変化はエクスペリエンス・ブースター《光神の恩寵》のレベルが五になって獲得経験値が+300%になった事と、スキルマイスター《百芸創主》でオリジナルスキル作成に使えるジョブスキルの数が五個になった事、そして必殺スキル《我は万の職能に通ず》によって就く事が出来るジョブの数が下級職が十個・上級職が五個だけ増えた事である。

ちなみに必殺スキルの強化により、今現在俺が就けるジョブの数は下級職三十六個・上級職二十二個で、合計ジョブレベルは四千まで上げる事が出来る様になっている………が、それはつまりジョブを取ってレベルを上げなければ強くはなれないという事だ。

「それでも強化された事にかわりはないでしょー。……今までの進化は私と同時期だったのにいきなり差がついたね」

「私は兄様達よりもデンドロを始めたのは遅かったので仕方がないのですが………やっぱ羨ましいのです」

『うーん………今までの感覚からすると僕の進化にはもう少しかかる気がするかな?』

「まあ、へエンブリオの成長には個人差があるみたいだから。……それに俺の場合は必殺スキルのデメリットによる進化時の能力拡張制限があるからな、多分その影響で進化が早まっているんじゃないか?」

俺の「ルー」はそのデメリットの所為で進化時に既存スキルの強化しか出来なくなっているからな。その分だけ進化しやすくなっているのではないかと思うのだが。

………それに今はへエンブリオの進化よりも悩んでいる事がある

るからな……。

「今は【ジエム】生成の方が問題なんだよな」

「何で？ お金が足りないとか？」

「……………私達も兄様の【ジエム】にはお世話になっているので、少しぐらいは出しますよ？」

「あーいや、そうじゃなくてだな……最近《百芸創主》で作ったオリジナル魔法スキルを【ジエム】に込める実験をしているんだが、どうも上手くいかなくてな」

これまでの戦いで魔法を即時発動出来る【ジエム】は相当有用であると考えた俺は、オリジナル魔法スキルを【ジエム】に込める事が出来ないかと色々試していたのだ。

……………【ジエム】での発動なら消費MPやクールタイムの問題は無視出来るから、オリジナル魔法スキルが大分使いやすくなると思っただけが……。

「出来なかったの？」

「いや、へエンブリオで作ったオリジナル魔法スキルを【ジエム】に込める事は不可能ではないんだが……成功率に問題があつてな」

まず俺は手始めに魔法スキル一つだけを《百芸創主》のオリジナルスキル作成スロットに入れて、消費MPとクールタイムを引き上げて威力を上げた魔法を作った。そして、それを【ジエム】に込めてみたら、成功率自体はやや下がったものの見事に成功したのだ……まあ、これに関しては事前にミレーヌさんから『ベテランのティアン職人なら魔法の術式を【ジエム】に合わせて改造して込める事が出来る』と聞いていたので成功するとは思っていたが。

そして次に複数のスキルを合成して作ったオリジナル魔法スキルを【ジエム】に込めようとしたのだが………途端に成功率が下がったのだ。どうもオリジナル魔法スキルに使うスキルの数が増えると成功率が大きく下がる様だった。

……………そして自分で上級魔法【ジエム】を作るには、一つにつき数万リルは掛かってしまう。

「まあ、成功率が下がるのは予想の範囲内だったが………今の段階



では成功率が低すぎてコストパフォーマンスが合わないな。もう少し【ジエム】生成の為の各種スキルレベルを上げないと使い物にはならないだろう」

「魔法スキル一っだけの方は使えるのでは？」

「そつちだと《百芸創主》で使うオリジナルスキルのスロットとジョブスキルを潰す事になるから俺自身の戦闘能力が落ちるな。強力な魔法スキルは自分で使うオリジナルスキルの方に回したいし。………とりあえず、今後はもつと魔法系のジョブを取って、更にこの世界の魔法についての理解を深めていく必要があるそうだ。その為【呪術師】ソウサライや【魔導師】のジョブも取ったからな」

俺が新しく取った【魔導師】は主に魔法拡張スキルや魔法を感知・解析するスキルなどを覚えるジョブで、多くの魔法を習得出来る【魔術師】メイジと違い魔法スキル自体を補助・研究する事に長けている。また【呪術師】に関しては呪いのアイテムを作るスキル《クリエイト・カース・オブジェクト》が狙いで取った。

………一応、以前ミレーヌさんからこの世界の魔法についての基本ぐらいいは教えて貰っているし、旅行に行く前に彼女から魔法に関する資料本を買った（買わされた）ので今後も魔法に対する研鑽は積んでいくつもりだが。

「俺の現状はこんなところだが……そつちはどうなんだ、ミカ？」  
「私？」

「ほら、以前【戦棍王】キング・オブ・メイムに関わる手記を見つけたと言っていただろう。あれはどうなったんだ？」

俺の質問への回答は終わったので、今度はこちらからミカに対して気になっていた事を聞いてみた。



□へブリティス伯爵領〈【鎧戰士】アーマーファイターミカ

お兄ちゃんが以前手に入れた【戦棍王】に従者の手記について聞いてきたね。やっぱり気になるよね〜。

「実を言うと解説と転職条件の絞り込みについては大体終わっているよ」

「本当なのですか?」

「うん、幸いな事に内容は私でも読む事が出来たしね。……………この【戦棍王】さんが活躍していたのは、今から大体六百年ぐらい前の事みたい」

この手記によると【戦棍王】に就いていた“彼”はとある傭兵団の団長をしていたらしく、その実力と人格から傭兵団のメンバーにも慕われていたらしい。その傭兵団は結構長い歴史を持っていた様で、組織として真つ当だったので民草からも慕われており、その団長は代々【戦棍王】のジョブを継いでいたと書かれていた。

この手記に書かれていた彼は合計ジョブレベル五百に至る才能を持ち、戦棍士系統の上級職である【ストロング・メイス・ストライカー剛 戦 棍 士】と【メイス・オーガ戦棍鬼】のジョブを極めていたそうだ。更に超級職に就く前から純竜級のモンスターをメイスの一撃で倒す程の戦闘センスを持っていたので、前团长から【戦棍王】のジョブを継承したと書かれていた。

「それから、その“彼”は前团长以上の実力を発揮してこの傭兵団を更に躍進させて、その後一つの国の専属傭兵団になったらいいよ」

「ほー、順風満帆に進んでいる感じだな」

「その【戦棍王】さんがその国のお姫様といい関係になったとかも書かれているね」

「おー！ ロマンスなのですね!」

「だったら良かったんだけどね。……………その後、その国は当時急速に勢力を強めていた【霸王】と呼ばれる人物が率いていた国と戦争になったみたい…………」

戦争が始まってしまったので、その国の軍隊と【戦棍王】さんが率いていた傭兵団が迎撃に向かった。そして、そこで見たものは……………たった一人で戦場に立つ【霸王】の姿だったらしい。

……………そして、その【霸王】が剣を一振りすると、迎撃に出た人間は【戦棍王】さんを含めてほぼ全て消滅したと書かれていた。

「ええ。……………いくらなんでも比喩表現ですよね?」

「私もそう思ったかったんだけど……勘によるとどうも本当っぽいんだよね。……この【霸王】は今から約六百年前、この世界を二分する程の大国を率いていたと伝わっている様だし」

「……先代【技神】の例からしても、この世界にはデタラメに強いティアンがいる事もある様だな」

「そうみたいだね。……幸いな事はこの話が六百年前って事ぐらいかな」

流石の【霸王】様も六百年は生きられない……よね？　なんか凄いな予感がするけど……。

ちなみにこの手記はここで終わっており、書くのも憚れるのか【霸王】の詳細や登場人物の個人名などは意図的に書かれていない様だ。

「ふーん、そこまで聞くと少し読んでみたい気もするな」

「じゃあ読んでみる？　ハイこれ」

お兄ちゃんが手記を読んでみたいと言ったので、アイテムボックスから【戦棍王に纏わる手記】を取り出して渡した。

それを手に取ったお兄ちゃんはパラパラと読み進めていくが……次第にその表情が訝しいものになっていった。

「……ミカ、本当にこの手記であっているのか？　主人万歳みたいな事しか書かれていなくて【戦棍王】のせの字も出ていないんだが」

「え!?　そんな事ないでしょ。だって表題にも【戦棍王に纏わる手記】って書いてあるじゃない」

「……姉様、この本の表題には【我が主人に捧ぐ讃歌】と書かれていますよ?」

「え?」

……あつれれ、おつかしいぞ。なんかお互いの証言が食い違っているね。

「ふむ《鑑定眼》《魔力視》《術式解析》……駄目か。まだ低レベルの俺のスキルでは何も分からないな。……なら《空想秘奥》<sup>ブリューナク</sup>《鑑定眼》

……やはり、この手記は高度な隠蔽が掛かっているな。おそらく、条件を満たした者にしか本当の文章を読む事が出来ない偽装が掛かっているんだろう」

「えっ!?? マジで!??」

「ああ、マジだ。……………本来の題名が【戦棍王に纏わる手記】ならば、おそらく条件は『【剛戦棍士】と【戦棍鬼】に就いている』とかだろうな」

「……………道理でロストジョブのヒントになる本が古本屋にバラ売りされている訳だ」

この手記を買おうとした時、お店の人に変な目で見られたのはそのせいかな。

……………しかし、手記にこれだけの高度な隠蔽が掛かっているとは思わなかったね。或いは【霸王】の目を誤魔化すために必要だったのか。

「とりあえず、これは俺達には読めない様だから返しておくぞ。……………それで、超級職の転職条件の方はどうなんだ?」

「うん、この手記の著者さんも転職条件の詳細については知らなかったみたいだけど、当時の【戦棍王】さんの行動や傭兵団の中にあつた転職条件の噂とかは載っていたからね。そこから勘で導き出された条件は『【剛戦棍士】【戦棍鬼】のカンスト及び全スキル取得』と『メイスで純竜級以上のモンスターを一撃でHPの大部分を削って一定数撃破』だと思うよ」

手記の中では『彼はメイスにおける全てのジョブスキルを極めている』とか、先代団長から【戦棍王】の継承をする時に『屈強なモンスターを戦棍の一撃で討伐せよ』と言われていたと書かれていたからね。

その描写を見てから色々条件を考えていくうちに、直感が『これらの条件を満たした方がいい』と出たし、この条件で間違いないと思う。「それに一つ目の条件は既に満たしているよ」

「姉様早いのです!??」  
「まあ、戦棍士系統のジョブスキルは全部取っておいた方がいい気がしていたしね」

ちなみに【剛戦棍士】の奥義《グラウンド・ストライク》の取得条件は『メイスで亜竜級以上のモンスターのHPを50%以上削って倒

す』で、『戦棍鬼』の奥義《インフェルノ・ストライク》の取得条件は『メイスの一撃のみで100体以上の相手を倒す』とかだった。それ以外のスキルも取得条件があるものが結構あったけど全て取得済み。「それじゃあ、これから純竜級のモンスターはお前に譲ればいいか?」「そうしてくれると助かるね。……………条件的に一人で倒さないとダメだと思うから、バフ効果の【ジエム】が欲しいかな」「分かった、いくつか作っておこう」

「ありがとうね、お兄ちゃん。お代を出すからさ」

これでなんとか超級職へ転職する目処がついたよ……………私の『遠い勘』では、なるべく早く就いていた方がいい”って出てるしね。これからは冒険者ギルドとかで純竜級モンスターの討伐依頼を受けていく事になるかな。

まあ、旅行を楽しみつつ条件を満たしていこうか……………なんとなくそれでいける気がするし。

「とりあえず次はこの領の港町に行くって事でいいかな?」

「はい! それでいいのです! ……………海水浴とか出来ます?」

「うーん、この国の気候は温暖だから出来なくはないけど……………水中だと人間は弱いからね」

「この世界ではその手のアウトドアはあまり発達していないから……………モンスターが居る所為で命がけになるし」

……………山や海や空にモンスターが跋扈するこの世界で、アウトドアや旅行をするには圧倒的な実力か膨大な資金が必要だからね……………

「……………やっぱりそうですよね。分かってはいたのです」

「まあ、浜辺で遊ぶぐらいなら問題無いと思うよ?」

『ドンマイ、ミユウ』

こんな感じで、私達は旅行を楽しんでいたのだった。

## 〈ブリテイス伯爵領〉・港町ウエレン

□ 〈ブリテイス伯爵領〉港町ウエレン 【蒼海術師】 レント 【ハイドロマンサー】

俺達はあれから〈ブリテイス伯爵領〉内を探索しつつ、領内にある港町ウエレンにやって来ていた………ちなみに道中 【魔導師】 【ウイザード】 はカンストしたので、これから海沿いに進む事を考慮して水属性特化の 【蒼海術師】 に就いておいた。

ちなみにミユウちゃんも 【拳 聖】 【フィストマスター】 をカンストして、新しい下級職の 【蹴 士】 【キックストライカー】 に就いている。

「潮の香りがするのです！」

『これが海なんだね。僕は初めて見るよ』

「港町だからね。ちなみにこの港町に面している海は〈西海〉って言うらしいよ」

「この大陸の西側にある海だからな。あとこの港町に面している海には強いモンスターはあまりいなくて、だからこそ漁業が盛んらしいぞ」

と言うよりも、強いモンスターがあまり出ない海域だからこそ、この場所に港町を作ったみたいだな。

「さて、とりあえず観光をしつつ、この付近の純竜級モンスターの情報を探そうか。この領内での道中で何体かは倒せたけど、まだ転職条件を満たすには足りないしね」

「……………純竜級のモンスターはなかなか遭遇しないからな」

「見つかるの良いですね、姉様」

ミカが 【戦 棍 王】 【キング・オブ・メイス】 の転職条件を解き明かした後、俺達は冒険者ギルドなどで〈ブリテイス伯爵領〉内の純竜級モンスターの情報を集めて、その討伐依頼を受けたりしていた。また、その転職条件のためにミカは一人で純竜級モンスターと戦わなければならないので、単体バフ魔法などの 【ジエム】 をはじめとした各種アクセサリやアイテムを買い集め入念に準備をしておいた。

ある時は街周辺に現れた 【アーマード・ドラゴン】 の討伐依頼において、ミカは相手の手足をへし折った上で頭部を〈インフェルノ・ス

トライク』で消し飛ばした。またある時は農村近くで目撃された  
ドラッグブラッドベア  
【純竜血熊】を、拘束魔法が込められた【ジエム】で動きを封じてか  
ら『ギガント・ストライク』で叩き潰したりもした。

……………今のミカのSTRは各種補正込みで一万をゆうに超える  
から、純竜級モンスターとてアクティブスキルを急所に当てられれば  
一撃で倒す事は難しくくない。むしろ純竜級モンスターを見つかる方  
が苦勞する程だ。

「あく、どこかに純竜級モンスターの群れとか居ないかな？」

「……………流石に群れで来られると条件を満たすのは難しいだろう」

「それに純竜級モンスターの群れとか、この世界の人達にとっては大  
事件ですよ」

「分かつてるよ、言つて見ただけ。とりあえずこの観光と聞き込み  
を始めようか……………私の勘だと何かある気がするし」

「どうやら、ミカはまた何か感じ取つたらしい……………また面倒な  
ユニーク・ボス・モンスター  
へU B M」じゃないだろうな。

「じゃあ手分けして聞き込みをしてみるか。とりあえず三時間後に此  
処に集合で、何かあったら「テレパシーカフス」を使つてくれ」

「『はい』」

そうして俺達は三手に別れて聞き込みを開始した。



俺は妹達と別れてからしばらく街を歩きながら、いくつかの店を  
めぐつて買い物しながら聞き込みを進めていた。

……………そして今は道端の魚の揚げ物買い食いしつつ、それを売つ  
ていた露店のおばちゃんに話を聞いていた。

「……………この揚げ物美味しいですね」

「そうだろう！ これでもこの道で三十年はやっているからね。

……………でも、最近は魚の在庫が少し不安でねえ」

「何かあったんですか？」

「……………実は、最近この近くの海に厄介なモンスターが住み着いた

みたいなんだよ」

「……詳しく話を聞くと、一週間ぐらい前からこの海に何処からか迷い込んできた強力なモンスターが住み着いてしまい、そのせいでしばらくこの漁師達が海に出られない日が続いている様なのだ。「冒険者ギルドなどへの依頼とかは？」」

「ここには冒険者ギルドなんて無いからねえ。……たまに出てくるモンスターもウチの漁師達が退治してしまうから、冒険者も仕事が無くて殆ど寄り付かないからさ」

「……この世界における【漁師】フィッシュマンのジョブは海版の【狩人】ハンターとも言うべき戦闘職であり、モンスターがウヨウヨしている海での活動を仕事としている漁師達はそこらの冒険者よりも強いらしい。更に、この世界での操船では水魔法や風魔法を使う事もあるため、魔法系のジョブである【蒼海術師】や【翠風術師】エアロマンサーに就いている人も少数だがいる様だ。

「……しかし、それだけ腕が立つ漁師達でも対処出来ないモンスターが住み着いたと」

「そうみたいなんだよねえ。ウチの漁師達も頑張っているみたいだし、領主様にもこの問題について知らせたみたいけど………解決するのはいつになる事やら」

「……成る程、ミカが言っていた予感はこの事かな。とりあえず話を聞かせてくれたおぼちゃんに礼を言っ、ミカとミュウちゃんに「テレパシーカフス」を使って連絡を取った。

「色々聞き込みを試みたが、どうもこの近辺の海に厄介なモンスターが住み着いたという話を聞いたぞ」

「こつちでも似た様な話を聞いたのです。街の人達も困っているみたいなのです」

『私は港の漁師の人達に話を聞いたよ。どうも結構被害が出ているみたい………それでお兄ちゃん、どうも怪我をしたり毒に侵された漁師の人がいるみたいだから治療出来ないかな？』

「どうやら、ミカが一番この事件の核心に近づいているらしい………あいつの直感を考えれば当然だが。」



「分かった。じゃあ合流場所は港に変更するか？」

『そうしてくれると助かるよ』

『こつちも了解したのです』

連絡を終えた俺は怪我人の治療の為に急いで港の方まで走っていった。



□〈ブリテイス伯爵領〉港町ウエレン アーチャーファイター【鎧戦士】ミカ

『〈デトキシケイト・ゾーン〉……《魔法威力拡大》〈デトキシケイション〉』

『《魔法威力拡大》〈フォースヒール〉』

「「「おおー」」」

私からの連絡を受けて駆けつけてくれたお兄ちゃんとフェイちゃんが、怪我や毒で苦しんでいた漁師の人達を次々と治療していった。どうもこの街には回復魔法を使える人はいても、上級職である【司教】ビショップなどに就いている人は居なかったみたい。

………一通りの治療を終えると、この街の漁師達のリーダー格であるフアーガスさんがお礼を言ってきた。

「助かったぜ、嬢ちゃん達。生憎と薬は殆ど切らしちまってたからな、この礼は後できっちりさせて貰うぜ。………しっかし、ヘマスター〈ってのは凄えもんだな、あつという間に治っちまった」

「お兄ちゃん達は上級職の回復魔法が使えますから」

後、この世界での魔法の効果は最大MP量と使用したMP量に比例するから、各々の〈エンブリオ〉の特性のお陰でMP量がもの凄いい二人の魔法効果は高いしね。

「………それで？ この辺りの海に強力なモンスターが住み着いたと聞きましたけど、一体どんなモンスターなんですか？」

「………まあ、嬢ちゃん達になら話してもいいか。………今、ここ  
の海に住み着いたのは【デッドリー・オーシャン・スライム】ってやつだよ」

詳しく話を聞くと、ある日突然その【デッドリー・オーシャン・スライム】が現れて、この辺りの海に居た他のモンスターを食い荒らしていったらしい。更には海に出ていた漁師達にも襲いかかってきて、彼等もどうにか迎撃しようとしたのだが……。

「結果はご覧の有様よ。……………何せスライムだから物理攻撃は効かねえし、強力な【溶解毒】と【腐食】の状態異常をばら撒く上に【オーシャン・スライム】種特有の再生能力まで健在と来た」  
「成る程ね〜」

漁師達のメインの攻撃手段は物理攻撃であり、数少ない魔法も【蒼海術師】や【翠風術師】などの水・風属性攻撃だったのでスライムの《液状生命体》とは相性が悪く、更には漁船を【腐食】させられて移動もままならなくなつた様だ。その上、相手は周辺の海水を吸収して自身の体積<sup>H P</sup>を回復させる事まで出来るという。

……………ちなみに【オーシャン・スライム】種は基本的に海水を吸収して生活しているだけで他の生物を襲わない無害なモンスターであり、むしろ汚染された海水を積極的に吸収して無害化してくれる有益なモンスターの筈だと言う。

「だが、極稀に汚染された海水を吸収し過ぎて無害化しきれず、自身が猛毒を持つ様に変異してしまう事があるらしい。更にタチの悪い事に、そうなつちまつた【オーシャン・スライム】は他の生物を積極的に襲う様になるって話だ。……………まあ、これはウチの爺様から聞いた話なんだがな」

「……………それはまた厄介な……………」

……………デンドロのスライムは物理攻撃無効な上、HP<sup>II</sup>体積だから身体の大部分を消滅させるまで生き続けられる最強クラスの種族だからね。その上に強力な状態異常に加え、海でなら実質的に無限回復可能とか下手なへUBM<sup>▽</sup>より厄介なんじゃ……………。

「うーん……………出来れば海で戦いたくないタイプのモンスターだね。お兄ちゃんどうしようか?」

「……………とりあえず周辺の海ごと凍らせた上で、お前が砕けばいいんじゃないか? お前の【ギガース】なら相手がスライムでも関係な

いだろう」

確かに、私の「ギガス」のスキル《バリアブレイカー》込みの攻撃をスライムに打ち込んだ場合《液状生命体》を無視してHPを削れるから、攻撃力さえ足りていれば相手の体積をそのまま消し飛ばせるんだよね。

……………私達がそんな話をしていると、ファーガスさんがやや驚いた様に聞いて来た。

「……………嬢ちゃん達、まさかあいつを倒そうとしているんじゃないか……」  
「厳密に言えば、倒す手段は無い話をしてるんですけどね。……………俺達には海上での移動手段がないので、討伐には貴方達の協力が必要ですが」

「私達をそのスライムの下まで連れて行ってくれるなら、多分倒す事は出来ると思うよ」

私とお兄ちゃんの言葉にファーガスさんはしばし考え込んだ後、意を決した様に顔を上げた。

「分かった、嬢ちゃん達にあのスライムの討伐を依頼しよう。……………ウチの領主様にも連絡はしたが、この騎士達であのスライムを倒すのは難しいだろうしな。当然、討伐の報酬は出さず」「分かりました、その依頼をお受けします」

「クエスト【討伐——【デッドリー・オーシャン・スライム】 難易度：七】が発生しました」

「クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください」  
それじゃあ、クエストスタートだね！



あれから私達とファーガスさんは一隻の小舟（漁船の殆どは【腐食】して修理が必要だった）に乗って【デッドリー・オーシャン・スライム】が出没する海域に向かって行った。

ちなみに操船しているのはファーガスさん、曰く「今動ける人間はもう俺ぐらいしかないからな。なに、これでも《操船》のジョブス

キルは持つてる」との事。

「あのスライムは餌が多い場所に住み着いているからな！ この時期のこの辺りには餌になるモンスターが沢山いるからな！」

「はーい！ …………… 流石は漁師さん、私達じゃ場所の特定は無理だったね」

「俺達に漁の専門知識は無いからな」

この海の事はここの漁師さんが一番よく知っているだろうからね。それに私達では船を動かす事は出来ないから、海上の移動には制限が出来るし…………… 一応、今後の事も考えて短時間の間だけ水上歩行が可能とするアクセサリーをファーガスさんから借りておいたけど。

「それで、作戦はどうするのです？」

「ミュウちゃんがバフを掛けて、俺が凍らせて、ミカが砕く…………… 以上」

『シンプルだね……………』

「まあ、無限回復するヤツに長期戦なんてやってられないからね。…………… それに何かされる前に潰すのが一番効率がいいだろうし」

この世界での戦闘は初見殺しとメタの応酬だからね。だから、戦闘にすらさせずに初手で相手を倒して何もさせない事が一番重要なんだよね。

「問題は【ジェムー《ホワイト・フィールド》】が一つしかないからチャンスは一度だけだという事と、最初の奇襲でこの船が沈められる事なんだが……………」

「うん、最初の奇襲は私が感知するよ。…………… ファーガスさん！ 事前に説明した通りをお願いしますね！」

「ああ！ 分かってるよー！」

今回の作戦の為に、彼には事前に私が勘で敵の接近を感知出来ると話してある…………… 理由に関しては「へマスター」だから」でゴリ押ししたけどね。幸い漁師さん達に《真偽判定》持ちの人がいたから信じてもらえて、『へマスター』はすごいな』という感じで納得して貰えた。

…………… そうして暫く海上を進んでいると、私の勘が敵の接近を伝えて来た。方向は…………… 真下か！

「ファーガスさん！ 真下から来ます!!？」

「分かった！」

『《我等が成るは光の使者》《エコー・オブ・トウワイス》！』

『《フィジカル・ブースター》』

私の警告と同時にファーガスさんが船の舵を勢いよく切りその場から離脱し、ミュウちゃんとフェイちゃんが必殺スキルで融合した。更にお兄ちゃんが融合したミュウちゃんに単体バフを掛けた上で、アイテムボックスから「ジエムー《ホワイト・フィールド》」を取り出していた。

……それらの行動が終わった時、先程まで船が通っていた海中から赤黒い巨大なスライムが姿を現した。

『!!??』

「早速で悪いが凍っておけ 《空想秘奥》《パワースロー・ジエム》！」

その「デッドリー・オーシャン・スライム」が海上に現れた瞬間に、そこに向かってお兄ちゃんが「ジエム」強化投擲スキルでもって「ジエムー《ホワイト・フィールド》」を投げつけた。そのジエムがスライムに当たった瞬間に白い球状の凍結領域が展開され、それが晴れた時には周辺の海域ごとスライムは完全に凍結していた。

「《アクア・ウオーキング》」

「姉様！」

「分かってる。じゃあ行ってくるよ」

更にお兄ちゃんはミュウちゃんに水上歩行を可能にする「蒼海術師」の魔法を掛けて、その効果がミュウちゃんの必殺スキルによって私にも伝播した。それを確認した私は海に飛び込み、事前に付けておいた水上歩行用のアクセサリーの効果と合わせ、可能な限りの速度で海上を走って氷漬けにされたスライムの下まで向かって行った。

しかし、海上には波があるから結構走りにくいね……だったら一気に跳んで行こう。

「《竜尾剣》！」

私は背の剣尾を伸ばし、氷漬けにされているスライムの天辺に突き刺して全力で跳躍し、更に剣尾を縮めて自身の身体をスライムの下ま

で引つ張っていった。そのまま剣尾をワイヤー代わりにして跳んでいき、スライムの頭上に着地した。

「よつと！……まだ完全には凍結していないみたいだね。……でも、これで終わりだよ《不治呪瘴》《グラウンド・ストライク》!!?」  
そして、私は念の為に特典武器【ブラックオーツ】の攻撃対象に【再生阻害】を与えるスキル使った上で、外側だけ氷漬けにされているスライムに全力で【ギガース】を振り下ろした。その防<sub>液状</sub>御<sub>生命体</sub>スキルを無視する一撃はスライムの凍っている部分を砕き、中の凍っていない部分にも伝播した衝撃波によってダメージを与え、そのHP<sub>体積</sub>を消し飛ばした。

その結果【デッドリー・オーシャン・スライム】は光の塵となり砕かれた氷の粒と共に宙を舞い上がった………これなら《不治呪瘴》は要らなかつたかな？

「よし！ 上手く片付いたね。………しかし、意外と綺麗な光景になったねえ」

相手の討伐を確認した私は、光と氷の粒が舞う海上を歩いて船まで戻っていった。



「野郎ども！ 今日には宴だあ!!?」

『うおおオオオオ!!?』

あれから依頼を達成した私達は漁師の皆さんに誘われて、【デッドリー・オーシャン・スライム】討伐祝いの宴に参加する事になった。出された料理は港町らしい海鮮料理で、漁師らしい大雑把なものだったけど結構美味しかった（お酒も勧められたけど、私達三人とも未成年だったので断った）

ちなみに討伐が終わって港町に帰った時に、ちようどここに來たばかりのこの領の騎士達に遭遇したりもした。既に【デッドリー・オーシャン・スライム】が討伐されたと知るとポカンとした顔になったが、「領民の治療やこの領を襲った脅威を討伐してくれて感謝する」と

言ってくれた………実質無駄骨になったのに、特にそんな様子を見せずに感謝してくれるとかいい人達だったね。ここの領主が領民から慕われるのも分かる気がするよ。

………そんな事を考えていると、ファーガスさんが話しかけてきた。

「よう嬢ちゃん、今回は本当に色々助かったぜ。………報酬に関しては領主様とも相談して、後でしっかりと払うぜ」

「いえいえ、どういたしまして。………私達がアレを倒さなかったら被害が酷いことになる事が解っていたので」

………さつき来た騎士達じゃ、あのスライムには勝てなかっただろうし。

「フーン、そういえば最初に俺達のところに来た時も、負傷した人間を見ずに『このままじゃ後遺症が残る人が出ますよ』とか言ってたな。

………なあ嬢ちゃん、その勘は生まれつきのものなのかい？」

「？ ……そうですよ」

「………ウチの爺様は元々グランバロアの人間でな、その所為か海に関する色々な話を知っていて俺も昔色んな話を聞かされたんだが………その中にグランバロアという国を興した人物についての話もあつたんだ。………その人物は生まれつき直感に優れていて、どの様な先の見えない航路でも常に皆を導いていたんだとよ、嬢ちゃんを見ていたらそんな昔話を思い出しちゃった」

「………へえ、なかなか興味深い話ですね」

「あと、生まれつきそういう事が出来る人間は特殊超級職【先導者】ヴァンガードに就く資格があつた、という話もしていたが正直言って眉唾物だな。………おっと、つまんねえ話を聞かせちゃったな」

「いえ、面白かったですよ」

そのまま話を終えたファーガスさんは立ち去っていった………フーン。

「………【先導者】ねえ………いつかグランバロアに行く機会があつたら調べてみようかな？」

………もしかしたら、私の生まれつきのこの力について何か分か

るかもしれないしね……。



〈水精洞窟〉・そして超級職へ……

□ブリティス伯爵領・〈水精洞窟〉

【蒼海術師<sup>ハイドロマンサー</sup>】レント

「さて、やって来ました自然ダンジョン〈水精洞窟〉！ 今日こそ超級職の転職条件を満たすよ！」

「頑張つて下さい、姉様」

『頑張つてね』

「しかし、ブリティス伯爵には感謝しないとな。………何せ、報酬のオマケにミカの要求した情報までくれたんだから」

以前、港町ウエレンで「デッドリー・オーシャン・スライム」を倒した俺達は、その討伐依頼の報酬を受け取る為に領主であるブリティス伯爵の下に向かったのである………ウエレンの人達はスライムから受けた被害が酷くて報酬を出す余裕がなかったもので、代わりにブリティス伯爵が支払ってくれるという話になったのだ。

そこでミカは呆れた事に「お金とか要らないのでこの領周辺の純竜級以上のモンスターの所在地の情報を下さい！」と言ったのだ。その要望に対して、ブリティス伯爵は報酬の一部として領内の有害なボスモンスターの情報をくれたのだ。

曰く「領内の有害なモンスターを討伐してくれるならば此方としても嬉しいので。何より貴方達の実力と人格なら問題ないでしょう」との事。スゴくい人だよなあ、ブリティス伯爵。

「まあ、俺達の王国での行動を調べた上で渡しても構わない情報を寄越したんだらうがな」

「ブリティス伯爵、有能だね！ ……理由はどうあれ有力な情報ばかりだったから、コッチとしても有り難かったしね」

その情報の中でも私の目的を達成するのに丁度良いと思われたのが、領内を流れる河川の近くにあったこの「自然ダンジョン」〈水精洞窟〉である。

………かつて、この洞窟は光熱エネルギー減衰の特性を宿す【マナファイア水晶】や水属性を宿す【アクエリア水晶】などの鉱物が採掘される場所で、モンスターもほぼ居ない為に採掘者も多く訪れる場所

だったのだが、今はとある理由で自然ダンジョンと化し立ち入りが非常に難しくなっているのだ。

「ここが自然ダンジョンと化したのはユニーク・ボス・モンスター〈U B M〉が縄張りの一つにしているからでしたね。確か「魔鉱蚯蚓 アニワザム」という鉱石を食らうワーム型のモンスターでしたか」

「その【アニワザム】という〈UBM〉がここの水晶を気に入って、その固有スキルによってこの洞窟を自然ダンジョンにしてしまったらしいよ」

「……………以前には討伐隊も組まれたが返り討ちにあつて、このダンジョンに入った少数の〈マスター〉もほぼやられているみたいだな」  
そう、この〈水精洞窟〉はこの付近でもトップクラスの難易度を持つ自然ダンジョンなのである。その理由とは……………。

『『KYAAAAAAAA!!?』』

「おっ、出て来たね。【アクエリア・エレメンタル】が三体か。三人共下がっていてね」

「《看破》してみたが三体共亜竜級だ、今はお前のターゲットじゃ無いから気をつけろよ」

『……………このエレメンタルは【アニワザム】が召喚したモノなんだよね』

出て来たのは半透明の身体で、身長150cmぐらいの人型をしたエレメンタルモンスターだった。そう、〈UBM〉【アニワザム】の能力の一つは『捕食した鉱石の特性を持つエレメンタルモンスターを生成・使役出来る』というものである。

この洞窟で採掘される【アクエリア水晶】は水属性を宿す鉱石なので、ここに居るのは水属性のエレメンタルになる。更に、それらのエレメンタルが【マナファイア水晶】の光熱エネルギーの減衰特性によって、強固な光熱耐性・レジスト系スキルを得ているのである。

……………ちなみに上位のエレメンタルは自身の身体を司る属性と同じにする《精霊体》というスキルを持っており、水属性のエレメンタルなら身体が水になって物理攻撃が効かなくなるのだ。つまり、ここに居るエレメンタルは『物理攻撃無効・光熱エネルギー攻撃耐性』を

持っているという事になる。

「……………改めて考えてみると酷いダンジョンだな。普通のゲームなら修正案件だろうが……………」

「まあ、私には関係ないけどね 《竜尾剣》」

『『KYAAAAAAA!!??』『』』

ミカは「ドラグテイル」の剣尾を伸ばして、目の前の「アクエリア・エレメンタル」の身体の端を切り裂いて、僅かにHPを減らしていた……………防御をスキルに頼る相手に対しては、とことん強いのがミカの「エンブリオ」だからな。

だが、ミカは相手のHPを僅かに減らただけでそれ以上の攻撃はしなかった……………というのも、ここのエレメンタルにはとある特性があり……………」

『『KYAAAAAAA!』『』』

「お、来るかな?」

何と、ダメージを受けた三体の「アクエリア・エレメンタル」はその身を融け合わせ一つとなった……………そう「アニワザム」が生成したエレメンタルは窮地に陥ると合体して、より上位のエレメンタルに進化する特性を持っているのだ!

『KYAAAAAAA!!?』『』

生まれて合体モンスター「グレーター・アクエリア・エレメンタル」は身長3メートル程の人型をしていて、その能力は完全に純竜級上位の力を持っていた。

合体したソイツは、その力でもって俺達侵入者を排除しようとする……………よりも前に、合体中の無防備な時に接近していたミカの攻撃を受けてしまった。

「はい、お疲れ様 《アストラル・ブレイカー》!」

『!?? KYAAAAAaaa……………』『』

そのスキル《アストラル・ブレイカー》——【戦棍鬼】の非実体対象に対して特効効果があるスキル——の一撃によって【グレーター・アクエリア・エレメンタル】は跡形も無く消し飛んだ。

基本的にこいつらみたいな非実体系エレメンタルのステータスは、

魔法を使う為のMPに特化している……つまり、HPやENDは純竜級モンスターとしてはかなり低いのだ。

特に物理無効や属性耐性を持つ此処のエレメンタルはHPやENDといった余計なステータスは上げていない様で、ミカの防御スキルをほぼ無視出来る「ギガス」でなら一撃で撃破する事も難しくはない。

「やっぱり予想通りだね。……此処のエレメンタルなら一撃で倒せるし、何より合体して純竜級のモンスターになってくれるから転職条件を簡単に満たせるよ！」

そう、今回この自然ダンジョンに来た目的は『ミカになら簡単に倒せる上位純竜級エレメンタルと遭遇出来る此処で、モンスターを倒して超級職の転職条件を満たそう』という事である。

……ちなみにこのエレメンタル達はへUBMのスキルで作られたモノだからか、倒してもアイテムをドロップせず経験値もほぼ貰えない様だ。

「というわけで、そーれ、ガツチャンコ！」

そんな気の抜ける声と共に、ミカはその辺りにあつた水晶を砕いた……すると、その行動に反応してダンジョン内に居た「アクエリア・エレメンタル」がミカに向かって来た。

『『KYAAAAA!』』

「うん、此処のエレメンタルは水晶に手を出す相手を積極的に狙って来ると言う情報は本当だったみたいだね。……今度はバフも掛けてつと。さーて！ 狩るぞー！」

俺が渡した単体バフ魔法の「ジエム」などを使って自身を強化したミカは、向かって来た「アクエリア・エレメンタル」との戦闘を開始した。ちなみに転職条件はソロで戦う事が条件らしいので、俺達はパーティーを解除して離れた所でミカに万が一の事があつた場合の救出役として待機している。

……しかし、これは……。

「……………RPGでよくあるやつですね。経験値稼ぎの為にワザと仲間を呼ばせて延々と倒し続けるやつなのです」

「……………むしろ、ワザと合体させてドロップアイテム狙うやつじゃないか？」

『側から見てみると結構シニールだね』

VRだと大分アレな光景になるな……………いつの時代も人間がやる事は変わらないんだなあ……………

◇

それから、ミカと【アクエリア・エレメンタル】の戦闘は続いていた。

『KYAAAAAAAAA!!?』

「甘いよ《闇纏》！」

今も【グレーター・アクエリア・エレメンタル】が大威力の水流を放ち、ミカはそれを【ブラックオーツ】のスキルを使ってで擦り抜けて一気に距離を詰めているところだ。

……………最初の方は合体した時の隙を狙い打ちにされていた相手だが、今では学習したのか初めから純竜級モンスターになった状態で戦いを挑んでいた。まあ、ミカは『合体させる手間が省けた』と言っていたが……………

「《インフェルノ・ストライク》!!?」

『!?? KYAAAAAAAAa a a……………』

そのまま接近して《闇纏》を解除したミカが、豪炎を纏うメイスの一撃で【グレーター・アクエリア・エレメンタル】を消し飛ばした……………さて、これで何体目だったかなあ。

「しかし、これだけ暴れて大丈夫なのでしょうか? ………………此処は古代伝説級《UBM》の縄張りですよね?」

「正確に言うとな【アニワザム】のいくつかある縄張りの一つらしいがな。……………一つの縄張りに現れるのは年に一度ぐらいらしいし、基本的に人間に興味が無いのか人里を襲ったりはしない様だから、直接遭遇しない限りは古代伝説級の中でも危険度はかなり低いみたいだな」

古代伝説級へUBM〕【魔鉱蚯蚓 アニワザム】はアルター王国近辺にあるいくつかの希少鉱石が存在する鉱山などに、自身が生成したエレメンタルを配置して自然ダンジョンにしている様だ。

だが、縄張りを荒らされたり鉱石を採掘されたりしても、それを理由にして人間を積極的に襲ったりはせず、再度エレメンタルを配置するだけで済ませているらしい。

……………もつとも、食事中にたまたま遭遇してしまった人間は躊躇なく葬っている様なので、単に人間に興味が無いだけなのだろうが。

「それにミカの直感が反応していない以上、此処での戦闘行動は特に問題はないんだろうさ」

「そうですよね」

そのミカは、今も一体の【グレーター・アクエリア・エレメンタル】を撲殺していた……………アレもかなり強いモンスターなんだが、防御スキル特化型だからミカとの相性が最悪なんだよな。

……………そんな事を考えていると、敵を倒し終わったミカが突然その動きを止め虚空を見つめていた。

「ん？ ……………よつしやあアアア!!？」 キング・オブ・メイス【戦棍王】の転職条件ク

リアアアア!!？」

ミカはそんな事を叫びながらガッツポーズをしていた……………さつき見ていたのは転職条件クリアのアナウンスだった様だな。

「いやー、長く苦しい道のりだったよ」

「……………転職条件が明らかになってから、デンドロ内で一カ月ぐらいしか経っていないが」

「……………モンスターとの戦いも一方的な蹂躪ばかりだったのです」

『……………長くも苦しくもないよね?』

……………それは未だに転職の試練をクリア出来ない俺への嫌味か? そう思ったのだが、どうもミカは転職条件を満たした事でかなりハイになっている様だ。

「あははー! ……………あと、アナウンスには【戦棍王】じゃなくて

メイス・プリンセス

【戦棍姫】って書かれていたね。どうも超級職は就く人間の性別に

よって名前が若干変わる事もあるみたい!」

「そうなのですね。……あと姉様……」

「それに！ さつきステータスを見たら【ギガース】が第五形態に進化していたんだよ！ ……そしてなんと！ どうとう私も必殺スキルを覚えたんだよ!!?」

「そうか。それは色々おめでとうと言いたいんだが………とりあえず後ろを見ろ」

「へ？ 後ろ?」

「……………そうやってハイテンションになっているミカの後ろでは、今まで散々倒して来た【アクエリア・エレメンタル】の団体様がこちらを凝視していたのだ。

「……………えーっと、もう此処には用が無いので見逃してくr『KY A A A A A A A A A A!!?』』』る訳ないですよね!?!?」

「……………あれだけ暴ればなあ」

「……………あちらも流石に怒るのです」

『当然だね』

その後、俺達は襲いかかって来た【アクエリア・エレメンタル】達をどうにか退けつつ、急いで〈水精洞窟〉から脱出したのだった。



□〈ブリティス伯爵領〉【戦棍鬼】ミカ

あれからなんとか街まで帰ってきた私は、休憩もそこそこに【戦棍姫】転職の為に戦棍士系統に転職可能なジョブクリスタルまでやって来た。

ちなみに道中とダンジョン内での戦闘で【アーマーファイター鎧戦士】はカンストしたため、今はメインジョブを全力で戦える【戦棍鬼】に変更している。「さて、やりますか」

そうやって私はジョブクリスタルに触れた。転職可能なジョブの一覧には確かに【戦棍姫】の文字があったが、お兄ちゃんが言っていた通り他のジョブと比べて色が薄いね。

その選択肢に触れると……………。

【転職の試練に挑みますか？】

という表示がなされたので、当然『Yes』を選ぶ。

……………その直後、私は妙な空間に飛ばされており、目の前には円形の舞台があった。

「ふむん、闘技場かな。お兄ちゃんと同じだね。…………脇の石版になにか書かれているね」

そこにはこう書かれていた。

【制限時間以内に試練の番人を撃破せよ】

【成功すれば、次代の【戦棍姫】の座を与える】

【失敗すれば、次に試練を受けられるのは一カ月後である】

「……………成る程。よく見ると闘技場の外縁部にはデカイ砂時計が置いてあるね。今は止まっているけど多分私が舞台上上がったら砂が落ち始めて、落ち切ったら終了って感じかな」

試練の内容を把握した私はさっさと舞台上上がったいった。

……………そして、その反対側には5メートル程の大きさの金属製ゴーレムが鎮座していた。

「…………【トライアル・アダマンタイト・ゴーレム】か…………あれを倒せばいいっぽいね。砂時計も動き始めたし、さっさと始めようか」

私は【ギガース】を構えて【トライアル・アダマンタイト・ゴーレム】に突っ込んで行った。それに反応した相手もこちらに向けて拳を振り下ろして来るが、その速度は遅く軌道も直感で先読み出来るので、容易く回避してその足を殴りつけた。

……………だが、殴った足は大きなヒビこそ入ったが砕く事は出来ず、相手はこちらに反撃の蹴りを叩き込んで来たので、私は一旦距離を取った。

（…………第五形態に進化してステータス補正と【ギガース】の攻撃力が上がっている私の攻撃を受けても、あれだけしかダメージを与えられないという事は、多分END一万は超えているね）

そこで砂時計を見ると砂は少しずつ落ちていたが、まだ上の砂はタップリと残っていた。



(制限時間は大体三十分ぐらいかな? ……お兄ちゃんの話からすると転職の試練はティアンが受ける事しか想定されていない様だし、アクティブスキルを使って攻撃すれば余裕を持って期限内に倒しきれると思うけど……)

おそらく、あの高E.N.Dを持つゴーレムの攻撃をかいくぐり的確にアクティブスキルを当てて倒すか、どこかにあるコアを砕くとかみたいな事を想定した試練なんだろうけど……。

(……うん、ここは多少のリスクを覚悟してでも確実に試練をクリアしようか)

どう考えた私は……。

「ギガース」

……先程覚えた【激災棍　ギガース】の必殺スキルを行使した。



「……………よしっ! 【戦棍姫】ゲット!!?」

その後、必殺スキルを使った私は【トライアル・アダマンタイト・ゴーレム】を粉々に砕いて見事に試練を突破し、無事に超級職【戦棍姫】に転職する事が出来たのだった。

「しかし、この舞台が決闘の闘技場と同じ様に、戦いが終わったらリセットされる仕様で助かったよ。……必殺スキルのデメリットからデスペナになる事は覚悟してたからね」

……………私の【ギガース】の必殺スキルは確かに強力なんだけど、使用後にはほぼ確実にデスペナルティになるのが問題だね。

「……………空いている最後の下級職には【死兵】でも取ろうかな? 相性は悪くないとは思うけど……………とりあえずは超級職のレベルをある程度上げてからでいいか」

……………そう考えて、私は試練の空間を後にしたのだった。

## 〈キオーラ伯爵領〉・各種考察と食事情

□ 〈ブリテイス伯爵領〉【蒼海術師】<sup>ハイドロマンサー</sup> レント

あれから、「戦棍姫」の転職条件を満たしたミカが転職の試練を受けに行ったので、俺はミュウちゃんと一緒にその辺の適当な喫茶店で待っていた。

……………そうしてしばらく待っていると、とても嬉しそうな表情を浮かべたミカが店内に入ってきて来たので、俺はミカが騒ぎ出さない内に席へと誘導しておいた。

席に着いたミカは適当なお菓子と飲み物を頼んだ後、俺達に転職の試練の結果を話して来た。

「と、言うわけでメイス・プリンセス【戦棍姫】に転職して来ました〜！」

「超級職転職おめでとうなのです姉様！ パチパチ〜！」

『パチパチ〜』

「パチパチ〜」

そう言つて喜色満面のミカに、俺達はとりあえず拍手をして祝つておいた……………まあ、表情を見れば上手くいったのは分かりきつていたけどな。

……………そうだ、超級職に就いた人間を見るのは初めてだしどんな感じなのか聞いてみるか。

「ところで【戦棍姫】にはどういう能力があるんだ？」

「ん？ ……えーっと、まだレベルを上げていないからステータスはよく分からないけど、スキルは一つだけあったよ。……………《アンブレイカブル・メイス》って言う装備しているメイスの耐久力を上昇させるパッシブスキルみたいだね。……………超級職のスキルの割にはなかなか地味だね」

「まあまあ姉様、今後レベルを上げていけば他のスキルも覚えますよ」

ふーん……………まあ、まだレベルも上げていない以上はそんなものだよな。

……………とりあえず、ミカも無事に超級職に就けたから次の予定を確認するかな。

「今後の予定だが、この後は北にあるヘキオーラ伯爵領に行くつて事で間違いはないな」

「それで良いよ。私も【戦棍姫】のレベルを上げたいしね」

「じゃあ、道中はモンスタアの多そうなところを通るのですか？」

「それも良いかもね！」

ふむ、妹二人は今後の予定について話し合っているが……。

「盛り上がっているところ悪いが……今日はプレイ時間がもうないから、この後はログアウトして晩飯だ。………旅行は明日のログインからスタートだな」

「………おっと、もうそんな時間か。コツチデンドロに居ると時間の感覚が狂うよね」

「いつも時間の確認をしてくれる兄様には感謝なのです。………でも、この後晩御飯なら喫茶店に入ったのは失敗だったかもですか？」

『結構いっぱい食べてたよねミユウ』

確かに、ログアウトした後でも腹が膨れた感覚は残るからなあ。ネットで見したが、その事を利用した『デンドロダイエツト』とか言うものもあるらしいし。

………そんな事を考えていると、ミカが頼んだお菓子を食べながら応えていた。

「別に良いんじゃない？ どうせコツチでいくら食べても現実の身体が太る訳じゃないんだし」

「そうですね！ デンドロではいくらお菓子を食べても大丈夫ですよね！」

「………現実の身体には影響が無くても、コツチのアバターが太るかもしれないがな」

俺が少し気になった事を言うと、妹二人の食べる動作がぴたりと停止した。

「………お兄ちゃん、お菓子を食べている時にそんな事を言わないでほしいよ……」

「悪い悪い。………まあ、アバターが太るかどうかは分からないし、仮に太るとしてもキッチンと運動すれば良いだけだから問題は無いだ

ろう。ここに居る全員、戦闘とかで激しく動いているしな」

「……………まあ、デンドロアバターの運動量は現実よりも遥かに多いですからね」

実際、デンドロ内でも空腹を感じる事を考えれば運動時にアバターのカロリーを消費しているのは間違いないだろうし、戦闘時の運動量を考えれば多少お菓子を食べ過ぎたぐらいなら大丈夫だろう……………よっぽど食べすぎない限りは。

「じゃあ、運動せずに食べ過ぎで激太りしたアバターのへマスターとかも居るのかな？」

「可能性はあるだろう、どんなプレイをすればそうなるのかは知らないが……………体脂肪率を攻撃力に変換するへエンブリオンを持つへマスターとかかね？」

そんな下らない話をしつつ食事を終えた俺達は、会計を済ませてこの日のデンドロを終えたのだった。

◇

そして次の日、各々の学校を終えてからデンドロにログインした俺達はへブリテイス伯爵領で一通りの準備を終えてから、次の目的地であるへキオーラ伯爵領へ向かっていた。

……………そしてその際、レベリングを兼ねて街道からやや外れた道を進んでいたのだが……………

『『『BUMOOOOO!!?』』』』』

「《タイダルウェイブ》！」

今、俺はこちらに突っ込んで来た【バイオレンス・ファング・ボア】の群れに対して《タイダルウェイブ》——【蒼海術師】の大津波を起こす魔法——を放って足止めをしていた……………これまで襲ってくるモンスターを倒しつつ進んでいたのだが、へキオーラ伯爵領に入ったところで運悪くコイツらの群れに遭遇してしまったのだ。

……………なので、今は妹達と手分けしてコイツの討伐を行っていた。

「《マッドプール》！」

『『『BUMOOOOO!?!?』』』』』

大津波で足止めされている【バイオレンス・フアング・ボア】達に対し、俺は《マッドプール》——広範囲の地面を泥状にして相手の動きを封じる【黒土術師<sup>ランドマンサー</sup>】の魔法——を使った。

……………先に放った大津波のお陰で、地面がぬかるんでいたからか効き目がいいな。

「とりあえず埋まっておけ《アースイーター》！」

『『『BUMOOOOO……………?!?』』』』』

泥にはまって動けなくなっている相手に対して、俺は《アースイーター》——地面に穴を開けて相手を落としてから、穴を開けるのに使った土を穴の中に流し込んでダメージ与えつつ生き埋めにする魔法——を使って土葬した。

……………この魔法は発動は少し遅いが、相手をダメージで仕留めきれなくても状態異常の【窒息】で大体始末出来るから使いやすい。

「やはり、地上では【黒土術師】の魔法は使い勝手が良いな。……………さて、

あの二人は《サークルインパクト》！」『『BUMOOOOO!?!?』』』

……………心配する必要はないな」

そちらを見ると、ミカが【ギガース】を振り回して複数体の【バイオレンス・フアング・ボア】を薙ぎ払っていた……………よく見ると、突っ込んで来た相手をそのまま打ち返していたりもしているしあつちは放置でもいいか。

……………じゃあミュウちゃんの方はと言うと……………。

「《ローキック》！ 《ストームアッパー》！ 《ハイキック》！」

『BUMOO! BUMOO! BUMOOO!?!?』

そこには突っ込んで来た【バイオレンス・フアング・ボア】を下段蹴りで迎撃して転ばせ、体勢が崩れた相手をアッパーで打ち上げ、落ちてきた相手を上段蹴りで仕留めるミュウちゃんの姿があつた……………：ミュウちゃんは【蹴<sup>キック</sup> 土】に転職してから、よく蹴りも併用する様になったので連続攻撃のキレが凄い事になっているんだよなあ。

……………そんなミュウちゃんに向かってまた一体の【バイオレンス・

フアング・ボア」が突っ込んで来たが……。

『《ブレイズ・バースト》！』

『BUMOOOOO!?!?』

そいつは、ミュウちゃんの近くにいたフェイの放った魔法による炎によつて焼き尽くされていた……あの二人の連携も良い感じになつて来たよな。今もお互いの死角をカバーし合う形で立ち回っているし。

……初めの方はミュウちゃんの機動にフェイが付いてこれなかったり、逆にミュウちゃんがフェイの魔法の射線に入ったりする事もあったけど、今はそんな事も無くなったしな。

「さて、俺も掃討を続けますか……《ハイドロ・スプラッシュ》！」  
『BUMOOOOO!?!?』

とりあえず俺は考え事を一時中断して、自分に向かって突っ込んで来た「バイオレンス・フアング・ボア」に向けて《ハイドロ・スプラッシュ》——高圧水流を放出して相手を攻撃する【蒼海術師】の魔法——を放つて吹き飛ばした……今後の事も考えるとなるべく魔法を使つてスキルレベルを上げないとな。

◇◇◇

□〈ヘキオーラ伯爵領〉【戦棍姫】ミカ

それからしばらくした後、私達は【バイオレンス・フアング・ボア】の群れを掃討する事に成功していた。しかし、倒す事自体は簡単だったけど『バイオレンス』の名の通り群れの仲間が倒されても意に介さず向かつてくるので実に面倒な相手だったね。

………とりあえず、全員で手分けしてドロップしたアイテムを回収しようか。大量に落ちているから回収が面倒なんだよねえ。

「いや、ようやく片付いたね。………少し街道を外れるだけでモンスターの群れに遭遇するなんて、やっぱりデンドロの野外は地獄だぜ」

「まあ、今ぐらいの群れに遭遇する事は割とよくある事だしな」

「私達も、この旅の最中に何度もモンスターの群れを掃討していますからね。……………この世界でアウトドアが流行らないはずなのです」  
『アウトドア料理なんてしたらモンスターが寄ってくる事もあるしね』

フエイちゃんの言う通り、この世界においては野外で料理を行う際には、周囲のモンスターなど気をつけなければならない事が多いんだよね。なので、この旅行の道中の食事はほとんどが携帯食になってしまっているのだ。

「でも、やっぱり毎回携帯食っていうのは味気ないよね。……………というわけで、お兄ちゃん次の食事でなんか作って〜」

「……………俺が作るのか？」

「だって、私の料理の腕なんて家庭科の授業で卵焼き焦がすレベルだし。ああ、周辺の敵の排除なら任せてくれても良いよ！」

「……………私も姉様と同じ様な感じなのです。……………しゅ、周辺の敵は一掃出来るのです！」

『それしか出来ないだけなんだけどね』

……………ウチの女子メンバーは完全に戦闘特化だからね。それに、お兄ちゃんの作る料理はすごく美味しいし。

と、そんな話をしている間にドロップアイテムの回収は終わったみたい、その後は戦闘後のお約束であるステータス確認だね。

「おっと、今の戦闘で【蒼海術師】がカンストしたな。……………とりあえずメインジョブは、以前に取るだけ取ってそのまま【弓狩人<sup>ボウ・ハンター</sup>】にでもしておくか」

お兄ちゃんはアイテムボックスから【ジョブクリスタル・ロッド】を取り出してメインジョブを【弓狩人】に変更していた……………そういうえば、最近は魔法ばかりで弓はあんまり使っていなかったね、お兄ちゃん。

「あ、私もさっきの戦闘で【蹴士】がカンストしたのです。やっぱり上級職二つを埋めていると、残りの下級職のレベル上げは楽ですね。

……………後一応、街を出る前に【蹴拳士<sup>キックボックス</sup>】に就いておいたのです」

「じゃあ【ジョブクリスタル・ロッド】を使うか？……………ああでも、

装備スキル《ジョブチェンジ》のクールタイムは十分だからもう少し待ってくれ」

「分かったのです。……………そういえば姉様、超級職の使い心地はどうですか？」

装備スキルのクールタイムのせいで手持ち無沙汰になったミュウちゃんも、同じ様にステータスを確認していた私に質問してきた。

「うん、流石に『超級職』なんて言うぐらいだからステータスの伸びは凄いよ。一レベル上がる際のステータスも上級職と比べると三倍以上だしね」

「それはすごいな。……………それでレベルの上限が無いんだから、完全にゲームバランスが崩壊しているよな」

「そうだねー。……………まあ、このデンドロにゲームバランスなんて物が存在するのかわかっても怪しいけどね」

このデンドロでは、どうも意図的に桁の違う強さが設定されている感じがするしね。

……………そんな感じでステータスの方は申し分ないんだけど……………  
「でも、スキルの《アンブレイカブル・メイス》の方はイマイチ有り難みを感じられないんだよねえ。……………どうも、上昇するのは頑丈さだけで攻撃力とかが上がる訳じゃないみたいだし、元々【ギガース】は私のSTRで振り回してもヒビ一つ入らないぐらいには頑丈だしね」  
「成る程。まあ、パッシブスキルならノーコストで常時発動している訳だから別に損はないんじゃないか？ ……………俺なんて、まともに使っていないスキルが大量にあるし」

「私は結構満遍なく使っていますよ、兄様ならそうなりますよね」  
……………お兄ちゃんは大量のジョブに就いているから、どうしても使うスキルは偏るよね。ミュウちゃんの場合はジョブを格闘系で統一しているし、アクティブスキルによる連続攻撃を得意としているから、私達の中では一番無駄無く取得したスキルを使っているんじゃないかな。

私も戦棍士系統のスキル以外はほとんど使わないし。強いて言うなら【アーマーファイター鎧戦士】のパッシブスキル《鎧強化》ぐらいかな？ このジョ



ブには他にも一時的にENDを倍加させる《アーマーガード》とか、各種耐性を上昇させるアクティブスキルがあるんだけど、私は直感で攻撃をほとんど回避出来るからほぼ使わないし。

「私も【壊屋】<sup>クラッシュヤー</sup>とか、取ったはいいいけどスキルはまったく使っていないし。……………まあ、元々STRを上げる為に就いたジョブだから、超級職のレベルが上がって他に良さそうなスキルを覚える下級職が見つかったら真つ先にジョブリセットされる候補かな」

「まあ、兄様の様な例外でもない限りジョブ構成は悩みますよね」

「そうだねー。……………それに多分、この《アンブレイカブル・メイス》は今後【戦棍姫】のレベルを上げて、他のスキルを覚えた時に初めて役に立つスキルだと思うんだよね」

それに、武器が壊れにくくなるのは私の必殺スキルとの相性も悪くないしね……………まあ、それ以前にデメリットが酷すぎて使い勝手が悪すぎるんだけど……………。

……………そんな話をしていると、フェイちゃんが少し真剣な表情を浮かべていた。

『そういえば、僕もラーニングした魔法を結構使っているけど……………どうも、ラーニングした魔法が増える程にスキルレベルの上がりが遅くなっている気がするんだよね』

「そうなのですか？」

『うん。最初の方と比べると、ラーニングした魔法のスキルレベルが一から二に上がる時間が伸びているし』

「ふむ……………おそらく汎用性の高いラーニングスキルのデメリットの様なものではないか？ 俺の《百芸創主》<sup>スキルマイスター</sup>の燃費みたいに、汎用性の高いスキルにはそのどこかにしわ寄せが来る様だし」

成る程……………まあ、私の【ギガース】がデメリット無しの一芸特化型だから、へエンブリオ〜っていうのはそういうものなのかもしれないね。

『スキル欄には標記されていないデメリットって感じみたいだね』

「そうだな。……………俺の《光神》<sup>エクスペリエンス・プースター</sup>の恩寵もどうやらモンスターにしか効果が無く、ジョブクエストとかには対応していないみたいだ

し」

「そうなの？ お兄ちゃん」

「ああ。このデンドロでは経験値が明確に表示される訳ではないから、ジヨブクエストを多く受ける様になった最近まで気づかなかつたがな。……………このデンドロにはマスクデータが多過ぎる……………」

「どうも、スキル欄っていうのは本当に最低限の事しか書かれていないみたい……………この様子だと、私の《アンブレイカブル・メイス》も単純な強度を上げるスキルじゃないかもね。

「……………おっと、ミュウちゃん【ジヨブクリスタル・ロッド】のクルタイムが終わったから使ってもいいぞ」

「ありがとうございます、兄様」

「そう言つて、お兄ちゃんはミュウちゃんに水晶の付いた杖を手渡し……………さて、時間潰しの話はこんなところかな。

「さて！ 一通りの事後処理も終わったし旅行を再開するとしてしましうか」

「そうだな。……………レベリングを兼ねているから思った以上に時間がかかっているしな」

「それはしようがないのです」

『元々そう言う予定だったしね』

「そう言つて、私達はお兄ちゃんが運転する馬車に乗つてレベリングを兼ねた旅行を続けたのだった……………途中、思った以上にモンスタ―と遭遇してしまつて、一日のログイン時間が切れて何度かログアウトしてしまつたけどね。」

◇

「おー！ ようやく街が見えてきたね。あそこが《港湾都市キオーラ》か！」

「あれから旅を続ける事暫く、私達はようやくこの《キオーラ伯爵領》でもっとも大きな街、《港湾都市キオーラ》に到着していた。

「この領は主にグランバロアなどとの海上交易が盛んに行われてお

り、だからこの〈港湾都市キオーラ〉は以前立ち寄ったウエレンと比べても遥かに大きな港を中心とする都市になっているみたい。

「それにしても、思ったより時間が掛かってしまったのです」

「街道を通らなかつた所為で何度かモンスターの群れと遭遇したからな」

「お陰でレベルは上がったけどねー。……………お兄ちゃんの料理が食べられなかつたのは残念だけど」

「仕方がないだろう。……………流石に調理器具や調味料なしで料理は作れないぞ」

『そう言えば携帯食ばかりでその手のアイテムは買ってなかつたよね』

そうなんだよねー。時間経過遅延機能付きアイテムボックスとか携帯食料とか野宿用のテントとか各種マジックアイテムは買ってただけど、その手の料理用アイテムは買い忘れていたんだよね……………私もミュウちゃんも料理出来ないからすっかり忘れてたよ……………。

「まあ、調理器具とかはあの街で買えばいいし、なんなら下級職に【料理人】でも取ろうか？」

「料理スキルがあると、料理を食べた時にバフが乗るみたいだしいいんじゃないかな？」

「兄様ならジョブ枠に余裕がありますしね！」

お兄ちゃんに任せておけば大体何とかなるしね！

『自分達が料理するとは言わないんだね』

「……………それは言わない約束だよフェイちゃん……………」

そんな会話をしつつ、私達は〈港湾都市キオーラ〉に入っていたのだった。

## 〈キオーラ伯爵領〉・海水浴：前編

□ 港湾都市キオーラ 【高位付与術師】 レント 【ハイ・エンチャンター】

あれから、港湾都市キオーラに到着してからしばらくの間、俺達は普通にクエストや観光などを楽しんでいた………幸いな事に、これまでと違ってその間は特にトラブルは起きなかったしな。

ちなみに、俺は長く取りっぱなしで放置していた【弓狩人】と 【ボイスン・ハンター】 【毒狩人】をカンストさせて、エンチャント魔法を使い続けていたお陰で条件を満たしていた【高位付与術師】のジョブに就いていた。

また、少し前からの単独レベリングで亜竜級以下のモンスターがアイテムを落とさなくなったので、どうも《光神の恩寵》はアイテムのリソースを経験値に回しているらしい事が分かってしまった………なので、今後アイテムが欲しい時はスキルをオフにするか、店や妹達から買い取る事になりそうだ。

………と、そんな事を考えていると………

「と、言うわけで海に行こうよ!」

「だから、どういう訳だ」

唐突にミカがそんな事を言い出した………コイツは直感で先が読めてしまう所為か、過程をすっ飛ばして結果だけを話す癖があるからなあ。

………とりあえず、ミカの話の詳細を聞くとしようか。

「ああ、ごめんごめん。………実はこの街を観光していた時、近くに海水浴が出来るビーチがあるって話を聞いたからそこに行ってみようって事なんだよ」

「そういう事でしたか。………でも、この世界での海水浴は命がけになるのでは?」

「そのあたりは大丈夫みたいだよ。何でもモンスターが少ない砂浜に、更にモンスター避けの結界を張っているみたいだし………その分、少し入場料がかかるみたいだね。そもそも、海の強いモンスターは浅瀬にはあまり居ないみたいだし」

詳しく話を聞くと、その海水浴場は前キオーラ伯爵がレジャー施設

として作ったものだったが、この世界のテイアンが持つアウトドアへの忌避感や結界の維持費がかかる事などから、ほとんど使われる事が無く長い間機能停止の上で閉鎖されていたらしい……だが、この世界に多くの「マスター」が現れ、更にいくらかの「マスター」達が海でのアウトドア目的でこの領に訪れる様になつてからはその評価が一変したようだ。

……この領に来た「マスター」達が海でのアウトドアを目的にしていると知った現キオーラ伯爵は閉鎖されていた海水浴場を解放し、更にその「マスター」達に周辺のモンスターの討伐や解放時間中の海水浴場の警護を依頼したのだ。

「成る程。まあ、不死身の「マスター」なら危険性はある程度無視出来るからな」

「海水浴場の警護もそんなにガチガチな依頼じゃなくて、暇な時間は海で遊んでもいいみたいなゆるい依頼らしいから、遊びながら報酬を貰えるって結構人気の依頼みたい」

「……モンスターの襲撃があつた時に、腕っ節のある「マスター」が居ればそれだけで十分な警護になるしな」

「そういう事。……その分ある程度の実力と信用のある「マスター」じゃないと受けられない依頼みただけど」

『それは当然だね。遊んでばかりで依頼をサボる様な人間には任せられないだろうし』

つまり、ミカはその海水浴場に行きたいという事だな………まあ、ミュウちゃんも海水浴とかを楽しみにしていた様だしな。

「分かった。じゃあ水着とかを準備してから、その海水浴場に行こうか」

「そこは大丈夫だよお兄ちゃん！　こんな事もあろうかと、この旅行に出る前にターニヤちゃんに頼んで三人分の水着を作つて貰つていたからね！」

「せっかく作つて貰つた水着が無駄にならずに済んだのです！」

……ああ成る程ね、ミュウちゃんが海でのアウトドアを楽しみにしていたのはそれが理由か。

だが……。

「使うか分からない水着は用意して、キャンプ用の調理器具は買い忘れたんだな」

「……………(汗)」

俺のその言葉に対し、妹二人は冷や汗を流しつつ目を逸らした……………この街で調理器具は買い揃えたから別にいいんだが、やはりこの二人にもちゃんと料理を覚えてもらうべきかな？

「と、とりあえず海水浴場にレッツゴー！」

「お、おー！」

「……………やれやれ」

そういう訳で、俺達はへきオーラ伯爵領へにある海水浴場に向かう事になったのだった。



「さて！ やって来ました海水浴場！」

「おー！ 海なのです！」

あれから俺達はへきオーラ伯爵領へにある海水浴場に来て、入場料金(へマスターへ前提だからかそこそこ高かった)を払い水着に着替えて(《着衣交換》スキルで一瞬)浜辺に足を踏み入れていた。周りを見てみるとそれなりの数の人が居て、その多くはへマスターであり結構賑やかな感じだな。海の家みたいな屋台も並んでいるし。

……………そんな風に見ていると、ミカが来ている水着をで見せびらかしながらこちらに話しかけて来た。

「それで？ どうかなお兄ちゃん？」

「ああ、二人共その水着がよく似合っているよ。……………ターニヤちゃんはいいいセンスしてるよ」

「ありがとうございますので兄様。ターニヤさんに作って貰った甲斐があったのです！」

『良かったね、ミユウ』

ちなみにミカの水着は白地に赤い花の模様のビキニとタンクトツ

プ、確かこの組み合わせでタンキニと言うんだったかな？ ミュウちゃんはピンク色のフリル付きワンピースタイプの水着だった………え？ 俺？ 俺は普通の黒い海パンだが？ 男の水着姿など需要が無かろう。

ちなみにこの水着には《着衣交換》を始めとして《水泳》《潜水》などの装備スキルが付いている無駄にハイスペックな代物であり、そのデザインも他の人が着ている店売りの水着と比べても明らかに手が込んでいた………ターニヤちゃん気合いを入れ過ぎだろう。

「それじゃあ早速泳ごうかミュウちゃん！」

「はいなのです！ ……兄様はどうしますか？」

「せっかくだし、俺も少し泳ごうかな。………ああそれと、はしゃぐのは良いが他の人に迷惑をかけない様にな。何かあったら【テレパシーカフス（防水仕様）】で連絡する様に」

「分かってるって。じゃあ行って来まーす！」

そう言って妹二人とフェイは海に駆け出していき、それに続いて俺もゆつくりと海に向かって歩いて行った。



「プハア！ ……しかしながら、海で泳ぐのなんて随分と久しぶりだな」

それからしばらくの間、俺は姦しく遊んでいる妹達と別れて、色々な事を試しつつ海を泳いでいた。しかし、俺も人並み程度には泳げるのだが、やはり水中だとアバターのステータスを持ってしても動きが大幅に鈍るな。

試しに【蒼海術師<sup>ハイドロマンサー</sup>】のスキルである《ウォーターブリージング》――

――水中で息継ぎをせずに長時間行動出来る様になる魔法――や《アンダーウォーター・アクション》――水中での行動に補正が掛かる魔法――なども使ってみたが、それらのスキルを重ね掛けしても水中では亜竜級のモンスターにすら勝つ事は難しいだろう。

「やはり、水中戦闘用のジョブも取るべきかな？ 水中だとスキル発

動宣言も出来ないし」

まあ、水中でのスキル発動宣言が出来る様になる装備やジョブスキルとかもあるみたいだが………それでもやはり、ジョブスキルで《水泳》や《潜水》は取っておいた方がいいか？ 【漁師<sup>フィッシャーマン</sup>】や【海賊<sup>パイレーツ</sup>】とかで。この街には港があるし、それらのジョブに転職出来るクリスタルもあるだろう。

………そんな事を考えつつ、更に沖まで泳いでいくと紐で繋がれた沢山のブイの様な物が見えてきた。

「………おっと。これ以上沖には行けないみたいだな」

どうやら、あのブイがモンスター避けの結界装置みたいだな。この海水浴場に入る時に見た看板にも『沖にある結界装置の向こうには絶対に出ないでください！ もし出た場合には命の保証はしません』と書かれていたし。

「まあ、試したい事は一通り試し終わったし、そろそろ岸まで戻るか」  
そうして、俺はさっさとUターンして岸まで泳いで行った。

◇

………  
そうしてしばらく泳いで行って、ようやく浜辺が見えてきたのだが

「ん？ アレはウチの妹二人と………あのチャラ男どもは何だ」

スキル《千里眼》と使って浜辺の方を見ると、ウチの妹二人が高校生ぐらいのチャラ男二人（左手に紋章がある事から「マスター」の様だ）に話し掛けられているところだった。

よく見るとチャラ男A・Bは品性に欠ける軽薄な雰囲気（※兄視点です）で、妹二人はやや困った顔をしていた………ナンパかな？

「やれやれ、小学生の妹をナンパとかしないでほしいんだが。………アバターは中学生ぐらいだが」

まあ、二人のアバターは結構美少女な現実の姿をそのまま中学生ぐらいに成長させたものな上、ターニヤちゃん謹製の気合いの入った水着のせいでだいぶ目立つからなあ。



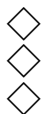
「とはいえ、保護者としては小学生の妹に声を掛ける連中に何もしない訳にも行かないかな。……………公衆の面前だし骨の二・三本ぐらいで済ませてやるか」

少し《看破》してみたところ、あのチャラ男どもは一応合計レベルをカンストはしているみたいだが……………その程度の相手にウチの妹二人が直接どうこうされる事は無いだろうし。

……………今のミカは装備やスキルが無くてもそこらのカンストヘマスターぐらいならミンチに出来るし、ミュウちゃんは対人格闘においては多少のレベル差なんて関係無いだろうし。

「……………なんか、別の意味でさっさと止めた方が良い気がして来たな」

……………と言うわけで、俺は急いで浜辺まで泳いで行ったのだった。



□ 港湾都市キオーラ・海水浴場 【戦棍姫】メイス・プリンセス ミカ

あれから、お兄ちゃんが沖まで泳いで行ったのを見送った私達は、とりあえず三人で海の浅い所を泳いだり砂浜でキャツキャウフフと遊んだりしていたのだが……………そこで高校生ぐらいの男の人二人に声を掛けられたのだ。

「ねーねー、その彼女達！ ちよつと俺達と一緒に遊ばなーい！」

「危ない事なんて無いって！ 俺らこれでもチョー強いし！」

「えーつと……………」

「はあ……………」

うーむ……………これは『ナンパ』というヤツかな？ 流石に現実でナンパなんてされた事は無いからちよつと驚いちゃうね。

……………まあ、現実で小学生の私達をナンパする様な人がいたら、即ポリスメン案件だけどさ。

「(どうしましょう姉様。……………一応、悪意や害意の類は無いみたいですが)」

『(どうする? ……焼いちやう?)』

「(公衆の面前で流石にそれは……。私の直感でも危険性は無いみたいだし、やんわり断るしか無いんじゃないかな)」

それに何というか……。こう、すごく背伸びしている感じがするんだよね。多分、実年齢はアバターほど高くないんじゃないかな?」

「……あと、この二人顔や雰囲気がよく似ているから兄弟かな?」  
「えーと、私達一応連れがいるので……」

「大丈夫大丈夫! 俺らこれでもレベルカンストしてるからさ!」  
「(レベルにおいて兄様には勝てないと思いますが)」

『(というか、目の前にいるミカちゃんが超級職に就いている気づいていないみたいだけど)』

「どうやら、デンドロでカンストして強くなったと思って少し舞い上がっているみたいだね……。流石に公衆の面前でいきなり暴力に訴えるのは気が咎めるし。」

「……それに、どうやらお兄ちゃんが戻って来たみたいだね。」

「おい、そのチャラ男A・B、ウチの小学生の妹二人に何の用かな?」

「「チャラ男!?!? ってか小学生!?!?」」

「リアルでは小学生だよ」

「なのです」

と、言うわけでお連れ様のお兄ちゃんが登場です……。まあ、私達へのナンパをどうにかするには、リアルの年齢を明かすのが一番手っ取り早いしねえ。

いきなりのカミングアウトにチャラ男さん達(仮)は動揺しだした。

「小学生かよ! ……っていうか、あっちの男はひよつとして、  
万能者”か!?!?”」

「それって〈マスター杯〉でアイツを倒した……。!?!?」

「……アンタたち、そこで何をしているんだい?」

何故かお兄ちゃんを見てもの凄く動揺している二人だったが、その後ろから一人の女性が声を掛けた事によってピタリと黙った……。確か彼女は〈マスター杯〉の一回戦でお兄ちゃんと戦ったアマンダ・ヴァイオレンスさんだったかな。

……………そのアマンダさんを見たお兄ちゃんが、ニヤリと笑って問いかけた。

「おや、アマンダさん。そのナンパ男二人とは知り合いで？」

「げっ!?？」

「……………ああ、だいたい分かったよ……………ベファイ」

『GAU』

「ぎゃああ!?？」

お兄ちゃんのその言葉を聞いたアマンダさんが、紋章から試合で見たガードナーのへエンブリオ——確か【ベヒーモス】って言う名前だったかな? ——を出して、その前足に二人を強めに握らせた。

「どうやら、ウチのバカどもが迷惑をかけたみたいだね。……………全く、たかがカンストしたぐらいで調子に乗ってナンパとか馬鹿じゃないのかい? そんなんだから決闘で私に一度も勝てないんだよ」

「お前みたいなリアルアマゾネスと一緒にすゝぎゃああ!?？」

「リアルでもデンドロでも周りの女子がお前みたいなアマゾネスしかいゝぎゃああ!?？」

何か口答えしようとした二人を、アマンダさんは【ベヒーモス】に更に強めに握らせる事で黙らせた……………普段の力関係が目に見えれば様だね。

……………そうしてしばらくの間眺めていると、アマンダさんが謝罪してきた。

「レントさん、それに嬢ちゃん達、今回はウチのバカどもが済まなかったね」

「いえ、別に実害も無かったですし」

「特に気にしてはいないのです」

「この二人がそう言っているのなら、俺からは特に何も無いですよ」

「ありがとうね、そう言ってくれると助かるよ。……………さあ! さっさと行くよ!」

そして、そのままアマンダさんとベヒーモスは去って言った……………あの二人はさっさからずっと黙っているけど、多分【気絶】しているね。

「多分、あの三人の実年齢は中学生ぐらいかな? ……まあ、私達みたいな美少女を見たら少しはつちやけちやうのもしようがないよね!」

「はいはい。……………それで、ミュウちゃんは大丈夫だったか?」

「悪意とかは無かったので大丈夫でしたよ、兄様」

「私はスルーかお兄ちゃん」

まあ、特に問題無く終わったから良かったけど……………もし、彼等に悪意があつたら砂浜にミンチが二つ出来ていたし。

「さて、そろそろ昼だな。……………とりあえず腹が減つたし、何か飯でも食べに行くか?」

「そういえば、此処には屋台があるみたいだから行ってみようよ」

「いいですね!」

そういう訳で、私達は気分を切り替えて早めの昼食を取る事にしたのだった。



「おお、結構いっぱいやってるね」

「焼きそば、焼きトウモロコシ、おでん…………と色々な屋台があるので」

私達が屋台のある場所に行くと、そこには様々な食べ物売られていた……………どれも海水浴場でありそうなメニューだね。

ちなみに調理している人の左手には紋章があつたから、此処の屋台は全部へマスターがやっているみたいだね。

「とりあえず何か買ってみようか。……………すいませーん! 焼きトウモロコシ三つください!」

「はいよー!」

ちょうど焼きトウモロコシの屋台に客が居なかつたので、三つ程買って(海水浴場価格なのか少し高かつた)食べてみた。ちなみにフエイちゃんはミュウちゃんのを分けて貰って食べているよ。

……………そして、食べてみた感想は……………。

「……………普通だね」

「……………普通だな」

「……………普通なのです」

『……………普通かな?』

その焼きトウモロコシは特に美味しくも不味くもない普通の味だった……………この世界の料理にはスキルの補正が乗るから、平均的には現実の物より美味しいんだけど。作っている人のジョブを《看破》してみると【高位料理人<sup>ハイ・コック</sup>】だったけど……………?

……………そんな風に疑問に思っていると、焼きトウモロコシを作っている人が話しかけて来た。

「嬢ちゃん、どうやら味が普通な事に疑問を抱いている様だな。

……………実は此処の屋台では海水浴場感を出すために、あえて味を普通ぐらいに調整しているのさ!」

「は、はあ……………」

「ちなみに食材は良いものを使っているから、料理バフの効果は高いぞ。……………いや〜料理バフの効果を維持しつつ、味を普通に留める調整には苦労したぜ」

……………なんか無駄に凝っていて、ある意味すごいけどさ。確かに料理バフも一時間の間HPが自動回復するって言う強力なものだけ……………。

私達がそんな風に考えていると、それを察したのか料理人さんが話しかけてきた。

「もし、美味しい飯が食べたいんだったら焼きそばの屋台に行くといいぞ。……………実は、今回飛び入り参加してきたカニの着ぐるみを着た《マスター》がめっちゃ美味しい焼きそばを作ってるからな」

「カニの着ぐるみ? ってまさか……………」

……………その、海水浴場で着ぐるみを着る様な奇特的な《マスター》に、なんか凄い心当たりがあるんだけど……………。

## へキオーラ伯爵領〉・海水浴：後編

□へキオーラ伯爵領〉海水浴場 メイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

先程、焼きトウモロコシ屋の青年から『物凄い美味しい焼きそばを作るカニの着ぐるみを着た男』の情報を手に入れた私達は、とりあえずその屋台の所まで行ってみることにしたのだけど……。

『カ〜ニカニカニカニカニカニカニ〜!!? 一皿百リルカニ〜!』

そこにあつたのは、カニの着ぐるみがハサミになっている腕で器用にヘラを持って、鉄板の上に乗っている大量の海鮮食材と焼きそばを凄い勢いで調理している光景だった。

……………と、言うか……………。

「……………あれって、シユウさんだよね?」

「ああ……………《看破》したところ、ステータス欄には『シユウ・スターリング』と書かれていたから間違いないだろう」

まあ、ここに来る前から何となくシユウさんではないかと思っていたけれど……………こんな海水浴場でまで着ぐるみを装備しなければならぬへマスターなんて、リアルバレしてしまう彼以外他に心当たりがないしなあ。

「以前に見た着ぐるみとは違いますね。……………海用に変えたのでしょうか?」

「さあ? ……でも、以前着ていた着ぐるみって特典武器らしいよ」

「《鑑定眼》で見たとところ、あのカニの着ぐるみも特典武器みたいだな。

【はいぱーきぐるみしりーず うえのきゃんさー】という装備みたいだ」

ああ、成る程ね。だからハサミでヘラを持つなんて事も出来るのかな。

……………それにしても……………。

「……………なんか凄く良い匂いがするね」

「確かに、とても美味しそうなのです」

『凄い行列も出来ているしね』

フエイちゃんの言う通り、シユウさんのいる屋台には行列が出来るぐらい多くの客が訪れていた。

「……………そして、それらの客達はシユウさんの作った焼きそばを一心不乱に食していた。」

「ここまでくると、味の方も気になって来るな。……………とりあえず並んでみるか」

「そうだねー」

「そうですね！ とても美味しそうなので、楽しみなのです！」

そういう訳で、私達はシユウさんの作った焼きそばを食べる為に屋台の列に並ぶ事にしたのだった。



私達が列に並んでからしばらく経って、ようやく順番が回ってきた……………どうも、私達が列の最後みたいだね。

『いらっしやいカニ〜。……………つて、ミカちゃん達カニ。久しぶりカニ』

「シユウさんも久しぶりだね。……………ところで、なんでこんなところで焼きそばなんて売ってるの？」

『見ての通りバイトカニ。ちよつとした資金稼ぎカニよ』

「いや、シユウさんならモンスター倒した方が手っ取り早いのでは？ 確か討伐ランカーでしたよね？」

そう、以前王国のランキング表を見たところ、シユウさんは討伐ランキングの上位30位以内に入っていた筈なんだけど……………。

『あー、今はちよつと都合が悪くてバルドルが使えないカニ。だからバイトしているカニよ』

「フーン。……………おつと、とりあえずその話は一旦置いといてと、焼きそば三つくださいな」

『はいはいカニカニ。……………お待ちどう様カニ〜！ 焼きそば三つカニ。……………ちなみに、これが本日最後の焼きそばカニよ、丁度食材全部使えてよかったカニ』

そう言つて、シユウさんは着ぐるみのハサミを器用に使い、お皿に乗せた三つの焼きそばを渡してきた……………本当にあのハサミは一旦どうなっているのだろうか？

……………とりあえず、代金を渡して……………。

「それじゃあ、いただきまーす！……………なにこれ美味っ！」

「……………本当に美味しいな」

「……………こんなに美味しい焼きそばは今まで食べた事がないのです！」

『……………本当に美味しいね。……………僕が今までこの世界で食べた料理の中でも一番美味いんだけど……………』

『そう言つてくれると嬉しいカニ』

その焼きそばは、有り得ないぐらいに超ヤバイ感じに美味しかった……………あまりの美味さにちよつと語彙力が低下するぐらい。

「……………シユウさんって料理人系のジョブとか取つてたっけ？」

『俺は料理人系のジョブは取つてないカニ。取つてるのは戦闘系のジョブだけカニ』

確かに、この料理にはバフ効果とかは付いていないみたいだし、シユウさんの言つている事は本当みたいだね。

「……………という事は、この料理の腕はリアルスキルか。……………本当にとんでもないな」

「本当、お兄ちゃんの言う通りとんでもないね。……………前々から規格外な人だとは思つていたけど、ここまでとはねー」

『照れるカニ〜』

そんなこんなしているうちに私達は焼きそばを食べ終わり、シユウさんは屋台の上を片付け終わっていた……………この世界にはアイテムボックスがあるから片付けが早いね。

……………どうやらシユウさんの今日のバイトが休憩になった様なので、私はさっきの質問の続きを聞いてみる事にした。

「そういえば、さっきの続きだけどバルドルはどうしたの？」

『……………あー、ちよつと厄介なへU ユニーク・ボス・モンスター B Mと戦つてな、その戦



闘で受けたダメージがまだ回復していないんだカニ』

「それって、その着ぐるみのヤツですか？」

『そうカニ。……………そいつは【毒霧泡蟹 ヴェノキャンサー】って言う【溶解毒】と【腐食】の複合状態異常をもたらす霧を操るへUBM＜だったカニ。そいつが原因で周辺の川や海が汚染されていたって話だから、俺は討伐依頼を受けてどうにか倒せはしたカニが…………』

曰く、その【ヴェノキャンサー】は常に猛毒の霧を自身の周囲に展開していたので接近する事は難しかったらしい。更に遠距離攻撃も砲弾を溶かされて軌道を逸らされるか、身体に纏った泡で威力を落とされたりするので、硬い甲殻を持ちENDが高い相手には決定打にはならなかった様だ。

……………そこでシウさんは、可能な限りの砲弾を撃ち込んで周囲の泡と霧を減らしつつ、陸上戦艦モードのバルドルを全速力で相手に突っ込ませたらしい。

そのまま砲撃で動きが止まった相手に大質量の体当たりをぶちかましてダメージを与え、更にいくつかの着ぐるみ特典武器を犠牲にして猛毒の霧を突破したシウさんがゼロ距離から攻撃して倒したとの事。

『その時のダメージでバルドルは現在修復中、しかもへUBM＜のスキルによるものだからか治りも遅いカニ。それに加えて持っていた着ぐるみも全滅した所為で危うく身バレするところだったカニ。』

……………特典武器で着ぐるみが出るように祈ったのは初めてカニ』

「えーつと……………お疲れ様です」

どうやら、このカニ着ぐるみは凄い苦勞の果てに手に入れた物だった様だ。

……………そんな事を考えていると、シウさんが更にテンションの低い声で愚痴り出した。

『……………それだけならまだ良かったんだが、毒霧に突っ込んだ時に着ぐるみと一緒にアイテムボックスまで溶かされて中身がばら撒かれてな…………。当然その中身も溶かされて全滅、使用したバルドルの弾代と合わせて今の俺のS Pは完全にゼロカニ…………』

「ええーつと……………本当にぐ愁傷様です」

訂正、カニ着ぐるみだけじゃ割に合わないぐらいに踏んだり蹴ったりだね。

……………一通り愚痴って気が晴れたのか、シユウさんはテンションを元に戻して話し出した。

『一応、依頼の報酬も貰ったんだがそれでも損失分には足りなかったカニ。だから、こうやって地道なバイトに励んでいるカニ。バルドルが居ないと狩りも効率が悪いし、もう合計レベルはカンストしてしまったカニ』

「成る程ね。……………じゃあ、今は資金稼ぎをしつつ超級職を探している最中なのかな？」

『そんな感じカニ』

フーン……………ああ、そう言えば【戦棍王に関する手記】に面白い情報が載ってたね。

「確かシユウさんのメイソジョブは壊屋系統だったよね？……………」

実は、キング・オブ・デストロイ【破壊王】に関するちよつとした情報があるんだけど」

『えっ!? マジカニ!?』

「うん、マジ。……………私はもう超級職に就いちゃったし、美味しい焼きそばのお礼に教えてあげてもいいよ」

『……………ミカちゃんもう超級職に就いたカニ?』

おや、そつちに驚くんだ。シユウさんとかならあつさり就けそうな気もするけど。

「ひよつとして、へマスターで今現在超級職に就いている人って相当珍しいかな?」

『……………俺が知っている限り、フィガ公やあの女狐もまだだった筈カニ。……………今現在へマスターで超級職に就いているのは、俺が知っている限りアイツぐらいだしな』

「ほほう。……………という事は、超級職の情報って実はかなり希少なのかな?」

『そりやそうカニ。……………先着一名の座だからな、下手をすると情

報だけで膨大な金が動いたり死人が出たりするカニ』

「……………これは、お手軽に話しちゃダメな情報だったかな？」

「まあ、この世界でなら超級職一人で国家間のパワーバランスが崩れる、なんて事もありそうだしな」

「私も格闘家系統の超級職の情報を探しているのですが、どうもロストしている様なので全然見つからないのです」

『ロストしている超級職の情報をあっさり見つけられるのなんて、ミカちゃんぐらいじゃないかな？』

『正直、焼きそばのお礼程度で貰う様なモノじゃないカニ』

お兄ちゃん達にもそんな事を言われてしまった……………あの手記って実はかなりヤバイ代物だったのかな？

……………だって、あっさり見つかったし……………。

『俺としても【破壊王】の情報が欲しいのは山々だが、あいにく今は持ち合わせがないカニ』

「……………それじゃあ貸し一つとかでいいよ、それに本当に大した情報じゃないしね。……………今から六百年前の“三強時代”に【破壊王】に就いたティアンが居たっていう事ぐらいだし」

あの手記には【戦棍王】率いる傭兵団が遭遇した、何人かの超級職を持つティアンの事が少しだけ書かれていたんだよね。

その中でも【破壊王】の事は『その一撃で城壁を破壊した』とか『伝説級のモンスターを拳の一撃で撃破した』みたいな事しか書かれていなかったんだよ。

「だから、本当に大した情報じゃないんだよ」

『いや、十分希少な情報カニ。特に“六百年前に【破壊王】に就いたティアンが居た”という情報は大きいカニね。後で〈D I N〉か〈w i k i 編集部〉の連中を当たってみるかニ。……………この貸しは後でしつかり返すカニ』

とりあえず、これで良かったかな？……………今後はもう少し情報の取り扱いには気を付けよう……………。



□へキオーラ伯爵領 海水浴場 【高位付与術師】ハイ・エンチャンター レント

あれから、休憩が終わったシユウさんと別れた俺達は再び海で遊ぶ事にした……………と言っても、俺とは妹二人のテンションにはついて行けなかったので砂浜にビニールシートを引き、そこで休んでいたのだが。

……………そうしていると、人が近づいてくる気配がした。

「ああ、いたいた。おーい！ レント君」

「ん？ ……ああ、アマンダさん、どうしたんですか？」

俺に声を掛けて来たのは先程別れたアマンダさんだった……………その後ろにはさつきさつきのチャラ男二人が居たが。

「いや、ウチのバカ二人がまだ謝って居なかつたんでね、謝らせに来たんだよ。……………ほら！ さつきと謝りな!!？」

「はイイ！ 俺はサク・ウッドベルと言います！ 先程は妹さん達に不埒な声を掛けて誠に申し訳ありませんでしたアア!!？」

「はイイ！ 俺はボウ・ウッドベルと言います！ 先程は妹さん達に不埒な声を掛けて誠に申し訳ありませんでしたアア!!？」

「あ、ああ……………」

と、そんな感じで、彼等は声を揃えて腰を九十度曲げて謝って来た……………さつきとは明らかに態度が違いすぎるんだが……………。

「まあ、妹達も特に気にして居ないし、ちゃんと謝ってくれたのだからそれでいいよ」

「ありがとうございますウウ！」

そう言ったら、また声を揃えて頭を下げて来た……………いったい、どれだけアマンダさんに絞られたのやら、普段の力関係が僥ばれるな。

「それで妹さん達はどうしたんだい？ あの子達にも謝らせたいんだけど」

「あの二人なら沖の方に『あ、お兄ちゃん？ なんか海の方から面倒くさいのが来そうなんだけど』……………分かった、少し探してみる」

そうやってアマンダさんと話していると、いきなり「テレパシーカ

フス(防水仕様)にミカから連絡が入った………また何か感じ取つたらしいな。

『《広域脅威生物索敵・改三》………ふむ、海の方からミカ達に向かって何か来るか？ 相手が水中だと分かりにくいな』

とりあえず、索敵用のオリジナルスキルなどで海側を探ってみるが、このスキルでは水中にいる対象を正確に感知する事は難しい様だ。

………だが、大雑把に報告と現在の移動方向ぐらいはなんとか分かるかな。

『どうお兄ちゃん。何か分かった？』

「ああ、多分結界の外から何か来ているみたいだな。あと、幸いな事にお前たちの方に向かってる様だぞ」

『それは良かった。手間が省けるね』

そう言ったミカ達は《着衣交換》スキルなどで戦闘用の装備に切り替えた………ちなみに海上戦闘になりそうなので装備は最低限、更に水上歩行が可能になるアクセサリを着けている。

そして俺も【射手の手套】と【鋼老樹の複合弓】を装備しておいた………ら、俺達のその行動に疑問を思ったアマンダさん達が問いかけてきた。

「ちよつと、いきなり武装しだして一体なんなんだい？」

「ああ、妹達から連絡があつてね。どうも海の方から招かれざる客が来ている様です……《千里眼》」

すると、沖にある結界の外側の水中に巨大な影が見えた………そして、すぐにその影の主は海上に姿を現し、眼前にあつた結界を食い破った。

『GYAAAAA OOOO!!?』

「ふむ【アクア・ドラゴン】……水属性のドラゴンか。流星にあの結界も、純竜級モンスターの攻撃は防げないみたいだな」

首長竜の様な外見をした【アクア・ドラゴン】は結界を即座に食い破り、そのままかなりの速度で水上を泳いでちょうど近くにいたウチの妹二人に襲いかかろうとしていた。

「ちよっ！ 妹さん達ピンチですよ!?!?」

「早く助けないと!?!?」

「んー、別にピンチではないんだが。《空想秘奥》<sup>ブリューナク</sup>《カーズド・アロー》」  
何か喚きだした兄弟を尻目に、俺は強化したオリジナルスキル——  
呪術系スキルと弓系スキルを合成した、当たった相手に【呪縛】の状  
態異常を与えるスキル——を敵に向かって放った。

……………呪術系スキルって即座に使えるヤツの射程は大体短いか  
らな、それを補う為に作ったスキルだったが早速役に立ってくれた。

『GYAAAAA!?!?』

「よし！ 当たったな。…………あとは任せたぞ」

『オツケー任せられた』

突き刺さった矢は即座にその効果を発揮し、【アクア・ドラゴン】に  
【呪縛】の状態異常を与えてその動きを封じた。

……………まあ、純竜級のモンスターだからあまり長い時間は拘束出  
来ないだろうが、あの二人にとってはそれで十分だろう。

『《真撃》《ストーム・アッパー》!』

『GAAAAA!?!?』

動きが止まった相手に向かってミュウちゃんが海上を走って即座  
に接近し、その顎に向けて強化したアッパーを叩き込んで頭をかち上  
げた。

……………ちなみにミュウちゃんはバランス感覚も図抜けているか  
ら、波が激しい海上での全力疾走とかも普通に出来るみたいだ。

『《竜尾剣》!』

『GAAAAA!?!?』

そうやって怯んだ【アクア・ドラゴン】に向けて、ミカが【ドラグ  
テイル】の剣尾を伸ばしてその背に突き刺した。

そして、そのまま飛び上がりつつ剣尾を巻き戻し、相手の背中部分  
に着地した……………どうも以前スライムに同じ事をやった時、そのワ  
イヤーション擬きに味をしめたみたいだな。

『悪いけど、コッチは海水浴を楽しみたいからここで消えてもらおうよ  
! 《ギガント・ストライク》!』

『GAA!?!? ……………』

背中に乗ったミカがそのまま首の付け根部分にメイスを振り下ろし、その部分の肉体を跡形も無く消し飛ばした……………各種補正込みでSTR二万越えの今のミカが本気で殴れば、純竜級だろうがああなるからなあ。

……………あと、その光景を見たアマンダさん達三人はポカンとした表情を浮かべていた。

『お兄ちゃん、片付いたよー』

『ご苦労様。……………見ての通り、あの二人は俺より強いぞ』

「へえ、すごいねえ」

「は、ハイ……………」

そう言った俺に対しアマンダさんが関心して、他の二人はただ頷いていた。



「多少のトラブルはあったけど、楽しかったね海水浴!」

「そうですね! いっぱい泳げて良かったのです!」

『焼きそばも美味しかったしね!』

「まあ、お前達がそれでいいならそれでいいさ」

それからしばらくして終了時間になったので、俺達は海水浴場を後にしていた……………あの後、ウッドベル兄弟は妹二人に全力で謝っていたが。

「別に私達は失って気にしていないんだから、あそこまで謝らなくても良いのにねえ」

「そうですね」

「……………お前達の実力を知ればああもなるだろうよ」

『確かにね』

ちなみに、あの三人とはミカの提案でフレンドになっておいた。

「しかし、あの二人を見て思ったんだが、名前に名字とかを入れておいた方が良かったか? その方が兄妹だと分かりやすいだろうし」

「うーん、私達ってゲームの名前は適当に決めるタイプだからなあ。  
……………最初は直感で何となく買って見たんだけど、まさかここまで  
のモノだとは思わなかったし」

確かに最初はそんな感じだったなあ……………もうちよつと真剣に  
考えておけばよかったかな？

「後、残念な事ですがこのゲームで名前の変更は出来ないみたいなの  
です」

『後悔先に立たずってヤツだね』

「全くだねえ。……………さて、そろそろ次の街に行くところかな？

次の目的地は〈城塞都市クレームル〉だったっけ？」

「その予定だな」

……………と、そんな事を話しながら俺達は帰路についたのだった。



## 番外編 とあるモヒカン達のその後

□へカルチエラタン伯爵領へカルチエラタン  
【盾 巨 人】モヒカン・デイシグマ

シールド・ジャイアント

俺の名前はモヒカン・デイシグマ、その名の通りへモヒカン・リーグに所属しているへマスターだ。今は王国の北東にへカルチエラタンという街をホームタウンにして、相棒の【紅蓮術師】パイロマンサーボッチーと共に日課である街中の清掃活動に勤しんでいる。

……………すると向こうから、巡回中のこの領の騎士が歩いてきた。

「あ！ デイシグマさん、ボッチーさん、お疲れ様です！」

「お疲れ様です！ お二人ともいつもありがとうございます！」

「例は要らないぜ。日々の福祉活動は我々へモヒカン・リーグの基本方針だからな」

このように此処のティアンの騎士団とも、今ではこうやって親しげに挨拶をするぐらいに仲良くなっていた。

「……………ふう、やっぱり人に感謝されるのは気分が良いもんだな、ボッチー」

「ああ、そうだな。……………しかし、へマスターを片っ端からPKする為にデンドロを始めた俺達が、今ではすっかり福祉活動家だな」

「お前の場合はへマスターというよりカップル狙いだっただけだな」

そう、俺達は元々へマスター専門のPKになる為にこのデンドロを始めたのだ……………正確には、俺達がデンドロを買ったすぐ後に彼女にフラれたボッチーが、腹いせにデンドロ内の男女カップルへマスターをPKしようとしていて、それに俺が便乗した形になるが。このモヒカンアバターもPKロールの為に設定したものだしな。

……………そんな感じで始めたPK活動も最初の方は俺とボッチーのへエンブリオの相性の良さや、まだデンドロが発売して間もない頃だったので他のへマスター達がゲームに慣れていない事もあり、かなり上手くいっていたのだが……………

「……………まあ、俺達は所詮井の中の蛙だったって事だな」

「世の中上には上がいる、という事だな。……………一時の激情で他人

に迷惑を掛けるのは良くない、という事でもあるが」

「何度かPKを繰り返して調子に乗っていた俺達とはある男女ペアの〈マスター〉をPKしようと襲い掛かり……………その結果、文字通り手も足も出ずに叩き潰されてしまったのだ。」

……………ちなみに後から聞いた話によるとその二人は兄妹で、後にアルター王国の準〈超級〉に数えられる程の〈マスター〉だったのだが。

「それ以来、俺達は完全に頭が冷えてPKからは足を洗った訳だが」「やはりゲームの中とは言え、八つ当たりは良くないな。……………彼女はまた見つければ良いんだ、幸いな事にこのデンドロには出会いが溢れているしな！」

それからは元に戻ったボッチーが「デンドロで新しい彼女を見つけよう！」と言い出し、俺もそれに付き合っただけで普通にこのゲームをプレイしていたのだ。

そんな中、現実のデンドロネット掲示板で『モヒカンだけで集まったクランとか面白そうじゃね。活動方針は敢えての慈善事業で』というレスを見かけて、それに答える形で俺は〈モヒカン・リーグ〉に入り今に至ると言う話さ。

……………ちなみにボッチーは一緒にパーティーを組んではくれるが、〈モヒカン・リーグ〉には入っていない。曰く「髪型をモヒカンにするのはちよつと……………只でさえ変な名前なのに……………」とのこと。

ボッチーは一時の激情で変な名前を付けてしまっただけでめっちゃ後悔しているからな、このデンドロでは改名とか出来ないし。

「やっぱり、他人を傷つけるよりも他人から感謝される方が気分が良いしな！」

「そうだな。……………それに、そういうプレイスタイルの方が出会いが多いし、女性にも好印象を与えられるしな」

「相変わらずだなあ。……………それに、この世界のティアンは正直NPCとはもう思えないからな」

「確かにそうだな。……………ところで、今度この領の外れにある天地風温泉旅館のシャリーリーさんに声を掛けようと思うのだが……………」

「……………ボツチーは本当に相変わらずだなあ……………ん？」

「どうした？ デイシグマ？」

「いや、向こうから誰かが走って来るな。あれは……………この領の騎士の一人か？」

そこに見たのは一人の騎士が何か焦った雰囲気でこちらに……………正確にはさつき挨拶をして騎士達の方に全力で走って来る光景だった。

「ほっ報告！ 街の外を巡回していた騎士達が純竜級モンスターに遭遇！ 至急援軍をお願いします！」

「なにいり？」

……………どうやら緊急事態の様だな。この領に騎士団はお世辞にも実力が高いとは言えないし、ティアンだけで対処する場合には多くの犠牲が出るだろうな。

「デイシグマ」

「ああ。……………すみません、話は聞いたが俺達が力を貸そうか？」

「ん？ ……おお！ 貴方達はデイシグマさんとボツチーさん！」

……………お願いします、へマスターとしてのお二人の力をお貸してください！」

そう言つて、壮年の騎士は深々と頭を下げてきた……………この領の騎士達は実力は高くないかもしれないが、新参の俺達へマスターに頭を下げてまでこのへカルチエラタンを守ろうとしているから凄いやなあ。

……………そんな彼等だからこそ、俺達はこの領をホームタウンにして、此処を守るために力を貸そうと思つたんだがな。

「分かつたぜ、任せな！」

「助かります。……………君、彼等を急いで現場まで案内するんだ！」

「ハイ！ こちらです！」

そして俺達はさつき走ってきた騎士に案内されて、純竜級モンスターが現れたという現場まで向かう事になった。

【クエスト「モンスターに襲われた騎士の救出 難易度・五」が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

よしっ！ それじゃあ救出クエストを始めるか！

◇

それからしばらく走って行くと、遠くの方から戦闘音が聞こえてきた。

「この先ですー！」

「分かったー！」

俺達は急いでその音がする場所に向かった……そして、そこで見たものは何人かの騎士達が巨大な二本の角を持つ四足歩行のドラゴンと戦っている光景だった。

『GYAAAAA!!?』

「「グワアアー！」」

そのドラゴンの頭上には「デュアルホーン・グランドドラゴン」という名前が表示されており、その二本の角でもって周りの騎士達を次々と薙ぎ払っていた……騎士達は負傷はしており倒れている者もいるようだが、幸いな事にーまだ一人も死んではない様だ。

……そう思ったのも束の間、ヤツはその二本角で負傷して動きが鈍っている騎士達を串刺しにしようと突っ込んできた！

「チッ！ ベンヌ、奴を騎士達から引き離せ！ 《ハイ・エンチャント・アジリテイ》！」

『KIEEEEE!』

『GYAAAAA!!?』

それを見たポッチーが自身の《エンブリオ》である青い炎を纏った鳥型ガードナー【爆炎再誕 ベンヌ】を呼び出し、サブジョブの【高位付与術師】のAGI強化魔法を掛けて「デュアルホーン・グランドドラゴン」に突っ込ませた。

突っ込んだベンヌはポッチーの指示通りにヤツの周りを飛び回って、その身体から出る炎で視界を制限することでその動きを牽制していた。

「ええい！ 騎士達が近すぎてベンヌのスキルが使えん！ 純竜級の

地竜相手にスキル無しでは牽制しか出来んぞ！」

「俺達が前に出るから、お前は負傷した騎士達の救助しな！ なるべく此処から遠ざけろよ！」

「了解しました！ ぐ武運を！」

そうこうしている間にも、ヤツは周りを飛び回るペンヌを弾き飛ばし、負傷した騎士達の方に向かおうとしていた。

なので俺は自身の「ヘエンブリオ」である青い大盾型の「青壁銅盾アイアス」を取り出して、ヤツの元まで全速力で走って行き……。

「オラア！ 喰らいな！ 《ストロングホールド・プレッシャー》！」

『GYAAAAAAAAA!?!?』

防御力を攻撃力に変換する「盾巨人」のスキルを乗せた「アイアス」で、その横つ面をぶん殴った！

……………だが……………。

『GYAAAAAAAAA!』

「おうおう、元氣そうじゃねえか」

その一撃はヤツを僅かによるめかせただけで、対してHPを削る事も出来なかった……流石に純竜級の地竜相手に、タンクビルドの俺の攻撃は対して効かねえよなあ。

……まあ、目的は俺にヘイトを向けさせる事だからこれでいいんだがな。

「ほーら、こつちだドン亀」

『GYAAAAAAAAA!』

攻撃された事に怒ったのか、ヤツは二本の角を俺に向けて全力で突進して来た。

その突進はいくらタンクビルドでENDが高い俺でも、まともを受けなければ大ダメージを負うだろう……まともを受ければな。

「待ってたゼエ！ 《七の青壁》！」  
セブン・シャッター

『! GYAAAAAU?!?』

その「デュアルホーン・グラントドラゴン」にとつての必殺の突進は、俺の目の前に現れた青色をした光の壁にぶつかった事によって止められていた……この光の壁こそが俺の「アイアス」のスキルである

《七の青壁》、相手の攻撃を防ぐ光の壁を展開するスキルである。

今見たとおり、この壁の強度は純竜級モンスターの攻撃を容易く防ぐ事が出来る程に高く、よっぽどの相手でも無い限りは砕く事は出来ないのだ。

……とは言え欠点として、この《七の青壁》はストック制のスキルでそのストック数は名前通り七つしか無く、更にストック一つを回復するのにデンドロ口内時間で三十分程掛かってしまうので連戦には向いていないんだがな。

まあ、今はストックは七つ全部あるので……こんな事も出来たりするがな。

『《七の青壁》！ 《七の青壁》！ 《七の青壁》 エ!!? 』

『GYU、GYUAAA!?!?』

突進が止められて動きが止まっていたヤツに対し、俺は更にストックを三つ消費してその左右を後ろにも光の壁を展開してヤツを閉じ込める四角形の檻を作り上げた。

……最初はただ自分の目の前に展開するしかなかった《七の青壁》も、【アイアス】が進化して俺自身も経験を積んだ今なら光の壁を任意の場所・角度で展開する事も出来る様になったんだぜ。

『GYUAAA AAA AAA?!?』

「そんな闇雲な攻撃で俺のスキルは破れねえよ、地竜種なら空も飛べねえだろうしな。……まあ、一応強度を上げておくかレッドシヤッター《鋼の赤壁》」

自分の周りの壁を壊そうと暴れ回る【デュアルホーン・グランドドラゴン】を尻目に、俺は空いているストック数に応じて《七の青壁》の色を赤くして強度を上昇させるスキル《鋼の赤壁》を使用した。

……コイツの攻撃事態は青のままでも防げるだろうが、ポッチーの攻撃に対しては強度を上げとかねえと破られるかもしれないしな。

「今だ！ ポッチーやれっ！」

「分かっている、ベンヌー！」

『KIEEEEE!』

俺の合図に答えてポッチーがベンヌに指示を出し、檻の空いている上部分から閉じ込められたヤツに向かって突っ込ませた。



「さて、怪我した騎士達の面倒でも見てやるか」

「ああ、騎士達の救出がクエスト内容だからな。……………とは言え、俺の回復魔法は【司祭】<sup>プリースト</sup>の魔法だけだから応急処置ぐらいしか出来んな」

この後、俺達は負傷した騎士達の応急処置を行い、彼等を街まで連れて行った。

幸いな事に騎士達の中で死者は一人も出ず、俺達は無事にクエストを達成したのだった。

◇

「デイングマさん、ボッチーさん、今回は騎士達を助けて頂き、本当にありがとうございました」

「別に礼なんて言う必要はねえよ。貰<sup>クエスト報酬</sup>うもんはキツチリ貰っているからな」

騎士達を街に送り届けクエストの達成報酬を受け取った後、俺達は今日最初に挨拶した壮年の騎士に礼を言われていた。

「それでも、お礼は言わせてください。……………貴方達、善良なヘマスターがこの街に居てくれるお陰で、この近辺でのモンスターによる被害は大幅に減りました。……………私達カルチエラタンの騎士にとつて、その事はどれだけの礼を尽くしても足りない程の事なのです。……………改めて、本当にありがとうございました」

そう言つてその騎士は去つていった……………確か、此処の領主様は、その昔強力なモンスターに夫と産まれたばかりの子供を殺されたんだっただか……………。

「ふむ、彼等にも色々と思う事があるのだろうか。……………それはそれとして、今回助けた騎士達の中に女性が居なかつたのは残念だったな」

「……………お前は本当にブレねえなあ……………」

まあ、PKやつてた頃よりも今の方が遥かに楽しいし、これはこれで良いのかもしれないがな。



## 番外編 ヘプロデユース・ビルドへの今

□〈ヘアルター王国〉王都アルテア スピン・マイスター【紡績職人】ターニャ・メリアム

はい、私はターニャ・メリアム、この〈Infinite Program〉をプレイしている〈マスター〉の一人で、今はプロデユース・ビルドへって言う小さな生産系クランで活動しているの。でも最近王都に小さなクランホームを買う事も出来し、新しいメンバーも入ったりしてクラン運営は結構順調なんだよ。

「そんな私は、今はクランホームの一角で絶賛依頼品を生産中〜」  
「……………何故、いきなり虚空に向かって話しかけているんだ？」

……………生産中の私に問いかけてきたのは、この〈プロデユース・ビルド〉のオーナーを務めている ハイ・メタラジカル・アルケミスト【高位冶金錬金術師】のエドワード、メガネを掛けている男性で主に金属素材の生産を担当している〈マスター〉だ。

「何って、無言で黙々と生産するのは私のキャラじゃないし〜。じゃあ、続けるよクローター……………いーとーまきまき、いーとーまきまき、ひーてひーてとんとんとん」

『KYUUU』

そんな感じで適当に返事をしつつ、私は目の前にいる体長1メートルぐらいの蚕から出る糸を紡績用の道具に巻き取って、素材アイテムを作っていた……………この蚕こそが私の〈エンブリオ〉【天糸紡蚕 クローター】である。

このクローターは蚕型のガードナーで、アイテムを捕食してそのアイテムと同じ性質を持つ糸を生成する《天糸紡ぎ》と言うスキルを持っており、それと私のメインジョブである紡績師系統上級職【紡績職人】の糸素材を作るスキル《紡績》を組み合わせることで、現在特殊な糸素材を生産中なのだ。

「しかし【紡績師】スピンワーカーに就いてからは、クローターで作れる糸の質が大幅に上がったよね〜。やっぱりジョブと〈エンブリオ〉のシナジーは重要だね」

『KYUI!』

うんうん、クロトーも喜んでる様だね。

以前まではクロトーの出した糸を使って【裁縫師<sup>ニードルワーカー</sup>】のジョブスキルで装備を作ったりしていただけたけど、今はジョブスキルでクロトーが作る糸の質を上げたりする各種調整が出来る様になって大分生産の幅が広がったし。

「まあ、色々と調整が効く様になってからはワシらの作った素材も売れる様になって来たからもう」

「でしょ。最近は何の生産系へマスターへ素材を卸す事も増えてきたしね。……………ゲンジのへエンブリオのお陰で生産の成功率も高いからね」

そう言ってくれたのは、この克蘭のメンバーの一人である<sup>メタル・マイスター</sup>【彫金職人】のゲンジだった。

ちなみに、今私達がいるのは克蘭ホーム内の空き地に展開されているゲンジのへエンブリオである工房……………TYPEキャットスルルール【改訂工房 ヘパイストス】の中である。

……………この【ヘパイストス】には《プロダクション・エンハンスメント》という内部で行われた生産系ジョブスキルの数字表記を三倍化させるスキルを持っており、その効果はゲンジとパーティーを組んでいる者にも有効なのだ。

「……………確かに、一時は素材が全く売れない時期もあったが、今は生産系へマスターの質が上がったお陰でそこそこ売れる様にはなったな」

「私達が作る素材は特殊な性質を持っているせいで、既存の【レシピ】にアレンジを加えなければ使えないからねー」

「せっかくの特殊な素材も、それを扱う技術がなければ意味がないからもう」

そうだねー……………つと。

「よし、完成。……………てれれれ〜! 【亜竜伸縮蛇の糸束】〜!」

『KYUUU!』

この糸は身体を自在の伸び縮みさせる亜竜級モンスター【エラス

ティック・デミドラグスネーク」の素材を使って作った物で、そのスキルである《伸縮自在》の特性が宿っているのだ。

……まあ、今回は事前に用意した「レシピ」通りの生産だから割と簡単なんだけど。

「これで私が担当する素材は出来たよ。………そっちは？」

「ああ、こちらも問題はない。【グレーター・トレント】の素材である【大魔樹の完全遺骸】、その一部を金属化させた【大魔樹のインゴット】を用意してある」

「ちなみに、そのインゴットはワシが今回の依頼品の金属パーツに加工済みじゃ」

クランオーナーのエドワードは「幻想冶金 オレイカルコス」という非金属を金属化するトリトリ系へのエンブリオンを持っており、そのスキル《ファンタジー・メタル・ワーキング》により非金属アイテムを特殊な金属素材へと変換する事が出来るのだ。

ちなみに【大魔樹の完全遺骸】は、ウチのお得意様の一人である私のリアフレのエルザから買い取った物だ………あの子、リアルラックが高いからレアドロップをポンポン落とすんだよね。

………当然高くついたけど、いくつかの高性能装備をタダで作って上げた代わりに値段はまけてもらったよ。

「おーい、オーナー。コッチも【大魔樹の完全遺骸】の加工が終わったよ」

「ああ、ぐっ苦労様ワカバ」

そうして声を掛けてきたのは背の小さい男の子のへマスターウッドマイスター【木工職人】のアカイ・ワカバ。最近ウチのクランに入ってくれたへマスターの一人で、主に木材系の生産を担当してるよ。

………ちなみにクラン入りした理由は『金属化された木材なんて珍しい物を扱っているから興味を持ちました』との事。特殊な素材の生産はウチのクランの目玉だからね。

「それで？ 今回、ワカバ君の依頼の報酬は【大魔樹の完全遺骸】の残りで良かったの？」

「はい、それで頼みます。………植物系純竜級モンスターの完全遺

骸なんてなかなか手に入らないですからね、出来ればストックしておきたいんですよ」

「……………彼の【九製界樹 イグドラシル】はTYPEフォートレスのへエンブリオで、植物系アイテムの遺伝情報をストックし、それらと同じ性質を持つ植物系素材を複製し生産できるのである。」

ただし、植物の生産には複製元のスペックに応じてそれなりに時間がかかり、一度に生産出来る植物の種類は九種類と決まっているらしい。

また、生産する植物はただ複製するだけでなくその性能を強化したり、別の性質を付加したりも出来るとの事。

「それで、今回の依頼品は複合弓でしたね」

「うん、そうだよ。……………以前、私達が作った弓を見て気に入ってくれた人がいてね、その人がオーダーメイドの弓を注文してくれたんだ」

「そして、今回はワカバが居なかったから俺が金属化させた樹木だけを使ったが、今回は同じ素材をそれぞれ金属・非金属状態で組み合わせる複合弓を作る事になっている」

「……………私達へプロデュース・ビルドではへエンブリオを使って作った特殊な素材を使って生産する事が多く、その際それらの素材をどう使うか、既存の【レシピ】にどうアレンジを加えればより良い物が作れるのかなどをこれまで色々と研究して来たんだよね。」

それで分かった事の一つにへエンブリオで性質を変えた素材でも、元が同じ素材同士を使えば生産の成功率が高くなり、素材が持っている性質をそのまま強化したスキルが付きやすいという事があった。

「今回の依頼主の要望の一つに『数が少なくても強力なスキルのついた弓がほしい』というものがあったからな」

「色々な素材を使うと装備スキルは多くなるけど、個々のスキルレベルは下がる事が多いからのう」

「そうですね。……………しかし、こうも純竜級モンスターの素材をこゝうも簡単に加工出来るとは、ゲンジさんと彼女のへエンブリオの効果は凄まじいですね」

……………実は新しくこのクラン入りした〈ハマスター〉はもう一人居  
て、その子は自分の仕事を終えて工房隅で熟睡中「いやー照れるねー」  
……………訂正、もう起きてたみたい。

「起きたのか、マキア」

「はい、おはようございますオーナー。……………今回のレシピは【複  
合弓のレシピ】をベースに皆さんが【大魔樹の完全遺骸】などを使っ  
て作った素材に対応した【大魔鋼樹の複合弓のレシピ】で、更にスキ  
ル《成功の秘》のお陰で生産成功率が上がってるので、ゲンジさんの  
〈エンブリオ〉と併用すれば成功率は八割超えると思いますよー」

彼女が最近ウチのクラン入りしたもう一人の〈ハマスター〉  
【高位製図工<sup>ハイ・ドラフトマン</sup>】のマキア・マジカちゃん、メガネを掛けた女の子だよ。

彼女の【図面昇華 ゴブニユ】は生産に使う【レシピ】を改造する  
ことが出来るTYPERULEの〈エンブリオ〉で、それに【レシピ】を  
作る事に特化した製図工系統のジョブスキルを組み合わせる事によ  
って、私達が使う特殊な素材に対応した【レシピ】を作りあげてく  
れたのだ。更にその【レシピ】を使った生産スキル効果上昇や生産物  
性能上昇などのパッシブスキルも有している。

……………一応【レシピ】のアレンジは上級の生産職なら可能だけど、  
彼女の【ゴブニユ】による【レシピ】改造範囲はその比ではなく…………。  
「後は出来たパーツをターニヤちゃんとゲンジさんとワカバ君のジョ  
ブスキルで組み合わせさせて弓を作ってー、ゲンジさんの〈エンブリオ〉の  
スキルを使って仕上げをするまでが今回の【レシピ】の工程ですなー」  
「……………他者の〈エンブリオ〉のスキルまで【レシピ】に書き込める  
とは、相変わらず凄い〈エンブリオ〉じゃのう」  
「普通の【レシピ】では精々対応するジョブスキルぐらいしか乗ってい  
ないしね」

……………そう、彼女の【ゴブニユ】による【レシピ】改造は、効果  
さえ把握していれば他者の〈エンブリオ〉の生産系スキルすらも【レ  
シピ】内の生産工程に組み込む事が出来るのだ。

なので、今回の【大魔鋼樹の複合弓のレシピ】には私やエドワード  
の〈エンブリオ〉による素材生産も【レシピ】内の生産工程に組み込

まれているので、そのスキル効果や生産物の質も上昇している。

「それじゃあさっさと組み立てちゃいましょー」

「分かった、私は糸を使って弓の弦を張るよ」

「それじゃあワシはワカバと一緒に弓身を組み立てるか」

「オツケー」

そういう訳で、残りの【レシピ】の工程を進めて行く………と言っても、ここから先のジョブスキルの行使は殆どが【レシピ】によって自動化されているので直ぐに終わるけど。

………ちなみに最初手動で作業していたのは、最近買った紡績用のアイテムを使った方が質の良い糸が作れるからなんだけどね。

そうやって私達は作業を進めていき……。

「よーし！ 出来た〜！ 【大魔鋼樹の複合弓】〜！」

「ふむ……装備攻撃力・防御力共に【レシピ】の予定よりも高いから大成功だな」

「装備スキルも【貫通射撃】【射撃威力上昇】【矢速上昇】が高レベルで揃っているし、オマケに【破損耐性】と【盗難防御】のスキルもあるから依頼通りだね」

「後はワシが《プロダクト・リビルド》で調整するだけじゃの」

ゲンジの【ヘパイストス】には《プロダクト・リビルド》と言う自身、および自身とパーティーを組んでいる人間が工房内で作った生産物の効果がある程度変更出来るスキルである………今回は、その効果により装備制限を追加して各種装備性能を上昇させる予定になっているね。

また、この効果が使えるアイテムは工房内で作ってから外に出るおらず、作ってから二十四時間経過していない物に限るけど。

「さて………装備制限を合計レベル500以上にして装備攻撃力を上げて………STR2000以上とDEX1500以上の条件を付けて《射撃威力上昇》のスキルレベルを上るかのう………後、メインジョブが【グラディエーター闘士】系限定になる様にして【矢速上昇】のスキルレベルを上げてと………よし！ 今回の依頼主の要望ならこんなもんじやろう」

「どうやら調整も終わったみたいだね……………これで依頼の品は完成したから後は依頼主が取りに来るのを待つだけですかね。」

「しっかし、これだけの品物が随分と簡単に作れる様になったもんだね。これもマキアちゃんの【レシピ】のお陰かな？」

「いやーそれほどでもー……………まあ、このゲームの生産活動はジョブスキルを使つてさっさと作れるのが良いところですからー。【レシピ】を使えば殆ど自動化出来ますしー、楽で良いですよー」

「でも、マキアさんの【レシピ】が便利すぎて、やり甲斐が少し薄くなっている気がしますけどね」

うーん、その辺りは色々個人差があるかな。

……………マキアちゃんは生産が好きだけど面倒くさがりだから【レシピ】による自動生産がいいみたいだし、ワカバ君が手作業で作る事も好きみたいだからね。

「でもー、結構専用の【レシピ】を作るのも大変なんですよー。今回も何度か書き直しましたしー」

「まあ、クランとしての仕事の時は全員の能力をフルに使つて、個人で生産する時には各々の好きにすれば良いんじゃないかな？」

「一応、それがこのクランの基本方針だからな……………あと、個人的生産で他のクランメンバーの力を借りたい時はちゃんと話し合う事だ」

そんな感じで、クランオーナーのエドワードがきっちり纏めてくれたね。

「確か完成品を依頼主が受け取りに来るのは明日じゃったな」

「ああ、その予定だ……………とりあえず、これで今回の依頼は終わりだな。きょうのところはこれで解散だ、お疲れ様ー」

「『お疲れ様ー！』」



そんなこんなでその翌日、私はクランホームに依頼品を持って一人で待機していた……………他のみんなは用事があつてログイン出来な

いみたいだから、今日は私が店番なんだよね。

……そうして、クロートーと一緒に糸を紡ぎつつ店番をしていると一人の客がホームを訪れた。

「やあ、こんにちは。依頼した品を取りに来ただけど、出来てるかな？」

「いらつしやいませ〜。……はい、依頼品は出来上がっていますよファイガロさん」

そう、彼が今回の依頼主である【ストロング・グラディエーター剛 闘 士】のファイガロさん。彼はこのアルター王国で決闘ランキングに入っている凄腕のヘマスター〜なんだよ。

今回は以前へマスター杯〜で戦ったレントさんがウチで作られた弓を使っていたので、その事が縁でウチにオーダーメイドの依頼をして来たみたい。

「こちらが今回の依頼品である【大魔鋼樹の複合弓】です」

「ありがとうございます。……うん、これは良い弓だね。……これが代金だよ、また頼むかもしれないからよろしくね」

「ありがとうございます！」

やっぱり、自分達が作った作品が評価されるのは嬉しいものだね！

……しかし、この弓はかなり高い代物なんだけど、流石は王国トップクラスのヘマスター〜だけあってあっさり大金を支払うね。「それじゃあ、僕はこれから弓の試し撃ちも兼ねてへ墓標迷宮〜に行くよ〜」

「お気をつけて〜」

そう言って、ファイガロさんは去っていった……これで、今回の依頼は無事完了となったのだった。

「さて！ みんなが来るまでは生産活動に勤しみますかね！」

『KYUUUUU!』

……このへプロデュース・ビルド〜は小さなクランだけど、今は結構楽しくやっています。



## アルター王国一周旅行・城塞都市クレーミル 出発準備と危険との遭遇

□へキオーラ伯爵領＜冒険者ギルド メイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

海水浴を楽しんでからしばらく、私達は次の目的地であるクレーミルへ行く為の準備を一通り終えて、今は冒険者ギルドに来ています。

……ここで何をしているのかというと、一つ目が道中達成出来そうなクエストを見繕っている事、そしてもう一つがへキオーラ伯爵領＜周辺からクレーミルまでの情報収集なんだよね。

「……………ふむ、討伐系には特に良さそうなクエストは無いかな。ミュウちゃんそっちは？」

「配達系は結構報酬の高いクエストがあるので……………どうも、キオーラからクレーミル間でへマスター＜の野盗が出ているのが原因みたいですね」

『野盗達の名前はへオーヴァー・デンジャラス・ブリゲイト＜……………ネーミングセンスに関してはノーコメントで』

「それだけじゃなくて、何体かの ユニーク・ボス・モンスターへU B M＜も確認されているみたいだね。……………えーと【颯封獅虎 ヴエンライガー】【磁改奇馬

マグネトローベ】【毒霧泡蟹 ヴエノキヤンサー】……………は討伐済みか。確かシウウさんが倒したやつだね」

……………とまあこのように、デンドロの屋外は危険がいっぱいだからね。旅行する際にも事前の情報収集は結構重要なんだよ。

「まあ、へU B M＜に道中遭遇する事は早々無い……………とも言い切れないからね」

「姉様の直感がありますからね」

「そうだねー……………今日は「旅に出てもいい」とは出ているけど、道中で急に何か解るかもしれないし」

私の直感には基本的には危険を回避する方向で働くんだけど……………この世界だと周辺の悲劇を防ぐ方向にも働く事があるからね。状況次第ではへU B M＜相手に戦う事もあるかもしれないし。

「…………でも、私の遠い勘は結構ムラがあるからね…………。」

「じゃあいいんじゃないか？ 〈UBM〉はともかく〈マスター〉の山

賊団は対処が楽ではあるし、そこまで気にしなくてもいいだろう」

「返り討ちにすれば良いだけだしね」

「そうですね」

まあ、ティアンの山賊だと対処がだいぶ面倒になるけどね…………

ミュウちゃんの教育に悪いから皆殺しにする訳にもいかないし。

…………ちよつと物騒な空気になってしまったので、それを变える

為かミュウちゃんが明るい調子で話してきた。

「私も新ジョブの『護身術家』に着きましたし、対人戦なら任せ

て下さい！」

「へえ、それはどんなジョブなんだ？」

護身術って名前からして、自分の身を守るためのジョブとかかな？

「はい、主に危険に近づかない様にする為の《危険察知》《殺気感知》《真偽判定》《索敵》や、襲いかかってきた相手がどういう人物なのかを把握する《看破》《鑑定眼》、更に危険から逃れる為の《逃走》《護身打撃》《護身投擲》スキルなどを覚えますね。後、アクティブスキルとしては《目潰し》《金的蹴り》や《肘打ち》《膝蹴り》など相手の急所を狙うか組み付かれた時の対処に使うものを覚えますね」

「…………まあ、護身術っていうのは基本的にそういうものだからな…………どうやら思った以上に現実的なジョブみたいだね…………。」

「そうですね、私は各種汎用スキルを目当てに取りましたが……………そもそも、護身術というのは“危険から逃れる術”であつて“襲ってきた相手を返り討ちにする術”ではありませんから」

『ミュウ…………』

そう言ったミュウちゃんの表情は少し寂しそうな表情をしていた……………そうだった、ミュウちゃんもとある事情があつて自分の才能がそこまで好きじゃなかったね…………。

……………ええい！ なんか更に空気が暗くなつたぞ！ なんとか空気を变えないと！

「ま、まあ！ 今の私達なら多少の危険はなんとかなるでしょう！ 私も【戦棍姫】の第二スキルを覚えたしね！」

「そうだな！ 俺も戦闘用の【ジエム】を作り溜めしておいたし！」  
……………そんな私達の慌てぶりが可笑しかったのか、ミュウちゃんはクスクス笑いだした。

「……………ありがとうございます、兄様、姉様、もうそんなに気にしないで大丈夫なのですよ」

『それに僕も第五形態に進化したからね！ TYPEもガーディアンになってスキルも一つ増えたし！ ……………まあ、相変わらず制限とクールタイムが厳しくて使いどころの限られるスキルで、それ以外には僕のMPとステータス補正が少し上がったぐらいだけど』

そう、つい先日フェイちゃんは第五形態に進化したのだ。その際に新しいスキルも覚えてミュウちゃん曰く『制限とクールタイムがキツイのですが、威力はかなりのものなのです！』との事。

……………さて、かなり話が脱線したけど、そろそろ話を元に戻して道中受けるクエストを決めようか。

「……………ところで道中受けるクエストはどうしますか？」

「そうだな……………ここは鉄板のキオーラからクレールミルへの冒険者ギルド配達物の移送でいいんじゃないか？」

「なんのひねりの無いクエストだけど、無難にそれでいいんじゃない？」

『報酬も良いしね』

今はキオーラからクレールミルの間に山賊団やへUBM<が確認されているせいでこの手のクエストは結構いっぱいあるし、報酬もかなり高めに設定されているみたい。

……………その分、難易度もそれなりに高く設定されておりギルドランクが高くないと受けられないものもあるが、これでも私達は結構色々な依頼を達成しているからギルドランクもそれなりに高いので問題ないんだけどね。

「それじゃあこの【配達依頼——クレールミル冒険者ギルド ギルド間配送】のクエストを受けてから出発するか」

「いいよー」

「おっけーなのです」

そういう訳で、私達はクエストを受注して依頼の配達物を受け取った……誰がこの配達物を持つのかについては、話し合いの結果【盗賊】のスキル《盗難防御》を持つお兄ちゃんのアイテムボックスに入れる事になった

そうして一通りの準備を終えた私達は、馬車に乗って一路「城塞都市クレール」へと向かう事になったのだった。

◇

港湾都市キオーラを出発してからしばらく、私達は道中出るモンスタ―を問題なく蹴散らしながらクレールに向かっていた。

……そしてその途中、周りにまばらな木々がある林道に差し掛かった時、私の直感がこの先にある何かに反応しだした。

「……………んー？」

「どうしたミカ。……………また何か感じ取ったのか？」

「今度は何なんですか、姉様」

私が虚空を眺めながら訝しげな表情を浮かべていると、それにすぐに気付いた二人が馬車を止めてどうしたのかと問いかけてきた……………二人共察しがいいね。

……………その問いにすぐ答えたいのは山々なんだけど、私の直感言葉にするのは難しいんだよなあ……………

「うーん。……………多分、このまま先に進むと私達に危険が訪れると思う……………」

「それじゃあ道を変えた方がいいか？」

お兄ちゃんはそう言ってくれるけど……………今回の遠い勘は「ただ危険を避ければいい」みたいな単純なものじゃないみたい。

「でも……………この先の危険を乗り越えられれば得られるモノがあるかも……………」

「では、このまま先に行った方がいいのです？」

「それがどうも、ここで解決しないと悲劇が起きるって感じじゃないと思うんだよね」

この先の危険を避けるか、それとも危険に飛び込んで何かを得るかって感じかな……………どうも、今回の遠い勘はかなり曖昧な感じらしいね。

「ふむ……………ミカ、この先の危険は俺達でどうにかなるモノなのか？」

「ムムム……………何とかならない事も無いけど、コツチに犠牲が出る可能性もあるかな。……………それに、クエストの達成や三人揃ったのクレーミル到着も難しくなるかも」

「どうやら、このデンドロであったこれまでの事件と違って、必ずしも私達が解決する必要が無いタイプの事件みたいだね。」

「……………成る程、つまり得られるモノがあるからと言ってクエストや旅行予定を変えてまで危険に飛び込む必要があるか、と言う話か」「うん、そんな感じ」

ちなみに危険を避けた場合には、何事も無くクレーミルに着いてクエストを達成出来るらしい。

……………そんな風に私とお兄ちゃんが悩んでいると、突然ミュウちゃんが顔を上げて言った。

「……………この先へ進みましょう、兄様、姉様」

「ミュウちゃん……………」

「私達がこの〈Infinite Dendrogram〉をやっているのは、この世界で自分達の才能と向き合う為なのです。……………だから、危険に立ち向かわずにここで逃げるのは良くないと思うのです」

……………私達三人には一つの共通点がある。それは『他者より秀でた才能がありながら、その自分の才能が嫌いなこと』だ。

一応、私は自分の才能についてはある程度割り切っているつもりだけど……………やっぱり、心の何処かでは『何故』と言う気持ちがあるんだよ。

明言はしていないけどお兄ちゃんやミュウちゃんも同じ様に、この

世界で自分の才能に向き合うきっかけを探しているんだよね……。

「……………そうだな、ミュウちゃんの言う通りだな。……………それにゲームをプレイするならば、リスクに尻込みせず求めるモノに向けて突っ走っていくのが正しい楽しみ方だろうよ」

「そうだね！ せっかくのゲームなんだからどんどん挑戦していかないといー！」

「そうなのですー！」

確かに、ちよーつとシリアスに考えすぎたね……………せっかくのゲームなんだし、安全策をとらずにもっと楽しんでもいいよね！

……………それに、今の方が危険をどうにか出来る可能性は高い気がするしね。

「じゃあ、この先に進むとして……………準備はどうすればいい？」

「そうだね……………馬車は仕舞って徒歩で行った方がいいかな？ あとは拘束系と回復系の【ジエム】を私達にちよーだい」

「分かった」

それでお兄ちゃんが馬車を仕舞い召喚モンスターのブロンを召喚解除して、更にいくつかの【ジエム】を私とミュウちゃんに渡してくれた。

「さて、準備はこれでいいか」

「はい兄様！ ……………目標は誰もデスペナにならずにクレールミルにたどり着く事ですー！」

『頑張ろう、ミュウー！』

「よーし！ 頑張ろうー！」

こうして、準備を終えた私達はそのまま危険の待つ林道を歩いていった。



そうして林道をしばらく歩いてみると、後ろから嫌な感じがした……………どうやらミュウちゃんは気付いているみたいなので【テレパシーカフス】を使って相談する事にした。

『なーんか、後ろから嫌な感じがするんだけど……』

『はい、先程から尾けられていますね。この視線のネチツこさからしておそらく相手は人間、件の野盗だと思います』

『こちらの索敵系スキルでは後ろには反応が無いな。おそらく何らかの隠密系スキルを使っているんだろう。……向こうの出方を見るまでもう少し歩くぞ』

お兄ちゃんに言われた通り、後ろに気づいていないフリをしつつ歩いていくと、前方の森からから人の気配がした。

『……あと、前方に人が十一人いるな。コッチは隠す気は無いらしい』  
『あからさまにこちらに害意を向けているので《殺気感知》にも反応がありますね』

『という事は、後ろを隠す為の囷かな？ ……じゃあ、後ろに気付いていないフリをして声を掛けてみるよ』「……その辺の人達！ いったい何の様かな？」

そんな風に私が声を上げると、前方の森から十人程の男達が姿を現した……全員左手に紋章があるから《マスター》だね。

……そして、その中に居たり《ダー》役と思わしき全身を黒服に包んだ長髪の男がこちらに話しかけてきた。

「お初にお目にかかります《マスター杯》の準優勝者である 《万能者》レント、そしてその妹の【戦棍姫】ミカ。 ……私達はPKクラン《オーヴァー・デンジャラス・ブリゲイト》、そして私はそのオーナーであるシュバルツ・ブラックと申します」

「……随分と黒そうな名前だな」『どうする？ 先制攻撃で潰すか？』

「アバター名は人の自由だしいいんじゃない？」『うーん、それはやめた方がいいかも。……というか、コイツらが 《私達に襲い掛かる危険》 かって訳ではなさそうだし』

「《ダーク》や《ノワール》が付いていないからまだ黒くないと思うのです」『それでは、本当の危険が来るまで適当に時間を稼ぎましょうか。……あと、後ろの相手には私が対処するのです』

相手の黒黒さん（仮称）の話に適当に答えながら、私達は【カフス】

を使って今後の行動方針を話し合っていく。

……ちなみに、その適当な返答を聞いた黒黒さんはイラついているのか顔を引きつらせていた。

「……………と、とにかく！ 貴方達には私達の名を高める為の生贄になつてもらいます！」

「ふーん」『リーダー以外の視線が俺達の後ろの方に向いているから奇襲がバレバレなんだが…………』

「へーん」『あと、連中の後ろの見えないところで何かしているヤツもいるね。身体で隠しているみたいだけど露骨すぎ』

「ほーん」『後ろの相手が攻撃の意を見せ始めたので少し下がるのです』

そんな感じで適当な相槌を打って相手を煽りつつ、さりげなくミュウちゃんが後ろに下がったので私とお兄ちゃんはそれを庇うようなフリをして前に出た。

……………それはそれとして、あのオデブ（略）メンバーは戦術は悪くないんだけど技術がいまひとつだね。正直、リーダーの黒黒さん以外はあんまり強くなさそう。

「ギギギ……………そ、そんな余裕な態度を取って居られるのも今のうちですよー！」

「別に余裕って訳じゃ無いんだけどねー」『本命の危険はもうそろそろ来るみたいだし』

「煽り耐性無いな」『そうか、とりあえずいつでも動けるようにはしておくか』

「実に面倒くさいのです」『後ろのヤツが私を狙っている様なので対処しますね』

適当に返答しつつ本命の危険に備えていると、黒黒さんが表情を消して、おそらくへエンブリオであるう木製つぼい槍を取り出した……………怒りすぎて一周回って冷静になったのかな？

そして、それに合わせる様に他のオデブのメンバーも各々の武器を構えた。

「……………分かりました、もうお喋りはいいでしょう。……………貴様等を



俺の槍の錆にしてやろう！」

「《スニーク・レイド》！」

黒黒さんが派手な動作で剣を振りかざしつつ声を張り上げるとほぼ同時に、背後にいたオデブメンバーがミュウちゃんに奇襲を仕掛けた……いきなり態度を変えた事も、自分に注意を引きつけて後ろからの奇襲を成功させ易くする為みたいだし、実は結構冷静だね。

……でも、ミュウちゃんを狙った事自体が最大の悪手なんだけどねえ。

「よつと」

「なっ!?」

その背後から首筋を狙った一撃を、ミュウちゃんは後ろを見る事すらせずに僅かに身を逸らすだけの動きで躲し……。

「《目潰し》」

「ギャア!?」

「《金的蹴り》」

「アゴォ!?」

そして、そのまま後ろを向いたミュウちゃんは手をチヨキの形にして相手の目に突き刺し、それに怯んだ相手の懐に潜り込んでその股間を全力で蹴り上げた……ちなみに《目潰し》の追加効果は一定時間の【盲目】、《金的蹴り》は攻撃対象が男性の場合だけ高確率で【硬直】の状態異常に出来るらしい。

「ふう……とりあえず片付いたのです」

「アースウダナー……」

なんか一仕事終えてドヤ顔しているミュウちゃんを見て、オデブメンバー（とお兄ちゃん）がめっちゃ引いてるんだけど……。

ちなみに奇襲してきた相手は地面に倒れこんでピクピクと痙攣している……このゲームでは痛覚無効があるから【硬直】の状態異常で動けないだけだと思うんだけど、なかなか酷い絵面だね。

「…………ハッ！　だ、だが、まだ手は残っている！　やれ！」

「あ、ああ！　《クリムゾン・スフィア》！」

流星はクランオーナーと言うべきか、オデブメンバーの中でいち早

く立ち直った黒黒さんが後ろで準備をしていたメンバーに指示を出した。

指示されたメンバーはどうか動揺から立ち直り、他のメンバーの前に出てきて手に持った杖から巨大な火球をこちらに向けて撃ち放った………普通の《クリムゾン・スフィア》と比べても倍ぐらい大きいね。多分、魔法発動隠蔽と魔法威力増大の《エンブリオ》かな？

………それに対し、こちらは私が一人で前に出て、とあるスキルを使いながら「ギガース」でその火球を殴りつけた。

「《エフェクトバナツシュ》！」

「なあ？？」

そのスキル効果が載った「ギガース」を叩きつけられた火球は跡形も無く消え去った………これが「戦棍姫」の第二スキル《エフェクトバナツシュ》——相手のスキルをメイスで殴る事でそのスキル効果を無効化するスキル——である。

更に無効化したスキルを一定時間封印する効果もあるので、相手はしばらくは《クリムゾン・スフィア》は使えなくなる。

「………戦術としては悪くなかったけど、ちよつと<sup>スベリオルジョブ</sup>超級職っていうのを舐めすぎかな」

「くそッ！」

私の挑発に対して黒黒さんは顔を怒りに歪めながら悪態をついていた………他のメンバーも二連続の奇襲をあつさり凌がれた所為で傍目にも分かるぐらいに動揺してるね。

さて、私の直感だとそろそろ………っ！ 上から！

『上から来る！ 後ろに飛んで！』

『はいー！』

『分かった！』

その直感に従い私は「カフス」を使って二人に指示を出してそのまま全力で後方に飛び、指示を受けた二人も同じ様に後方に飛んだ。

「一体何を？ ……ッ!?? 全員敵しゅドガアアアアアアアア——  
——アアアン!!」

その行動を訝しむ黒黒さんだったが、その直後に反応した《危険察知》に気付いて他のメンバーに指示を出そうとし……………その声は上空から先程まで私が居た場所に放たれた青白い閃光が地面に着弾した音によつて掻き消された。

……………私は直ぐに自分が見たモノを二人に伝えた。

『あの光、AGIが一万近くある私の目でも追えないぐらいの速度……………超超音速で何かを撃ち出されたみたい』

『成る程。……………そして、ソレを撃つたのは上のアイツか』

そう言われてオデブメンバーの向こう側の上空を見ると、そこには機械で出来た黄金の人馬ケンタウロスが空中に立っていた……………その人型部分の左手はコの字型になっていて、そこには青白い電気が帯電しているので、おそらくあそこからさっきの攻撃を放つたらしい。

……………そして、その一本角が生えた人型部分の頭部の上には【磁改奇馬 マグネトローベ】の文字が浮かんでいた。

「UBM？？」

「そんな！ どうして……………？」

驚いているオデブメンバーを尻目に、上空の【マグネトローベ】は私達から見て彼等を挟んだ向こう側の地面に降りてきた。

地面に降り立ったヤツは私達を……………否、私を見て言葉を発した。

『劣化〃化身〃 15体確認。……………内一体ガ超級職【戦棍姫】』

その言葉と共に【マグネトローベ】はコの字型になっていた左手を開いてT字型にし、更に右手も同じ形状に変形させて、その両手から青白い光ビームサーベルの剣を展開した。

どうも発言からして私が狙いなのかな……………コイツが本来の〃私達に襲い掛かる危険〃みたいだね……………

『コレヨリ、知覚範囲内ニオケル劣化〃化身〃ノ殲滅ヲ開始シマス』

……………そうして戦闘準備を終えた【マグネトローベ】は、両手のビームサーベルを構えながら馬の下半身を全力で駆動させ勢いよくこちらに突っ込んできた。

## V S 【磁改奇馬 マグネトローベ】前編

?? 【磁改奇馬 マグネトローベ】

『劣化〃化身』15体確認。……内一体ガ超級職【戦棍姫】』

現在、とある者の指示によって最近地上に増殖し始めた劣化〃化身  
“ 供の戦力調査をしていた私——個体名【マグネトローベ】——は、偵  
察の為に空中を走行している際に超級職【メイス・プリンセス戦棍姫】に就いた劣化〃  
化身”の反応を感知し、手始めとして対象に《レイル・アクセル電磁加速》によって加  
速された金属弾を放った。

だが、その対象を含む三体の劣化〃化身”は事前にこちらの攻撃を  
察知して回避した……よって、私は対象の脅威度を上昇させると  
共に地上に降りて全力戦闘を行う事にした。

『コレヨリ、知覚範囲内ニオケル劣化〃化身”ノ殲滅ヲ開始シマス』

その宣言を人型の頭部から発すると共に、まず私は目の前に居る1  
体の劣化〃化身”を排除しようと、人型部分の両手から《プラズマ・  
ブレード》を展開し馬体部分のみで出せる全速力で奴等に接近した。

「来るぞ！ 全員散れ」マグネティック・コントロール『遅い《磁界制御》』

一団の中に居た黒服の劣化〃化身”が周りの奴等に指示を出そう  
とするが、それよりも早く私は《磁界制御》を使って急加速した  
……このスキル《磁界制御》は自身を中心とする半径約十メート  
ルの空間で磁力を発生・制御するスキルであり、今はそれによって私  
の金属製の身体を前方に弾く事で加速しているのだ（《電磁加速》には  
クールタイムがある）

そのまま浮き足立っている奴等に接近した私は両手の《プラズマ・  
ブレード》によって、まず二人の劣化〃化身”の身体を焼き切った  
……奴等もそれなりにいい防具を装備している様だが、オリハル  
コンすらも容易く溶断出来るこの《プラズマ・ブレード》にとっては  
問題にはならない。

「クソツ！ 《パワーストラッシュ》！」

「《ストーム・ステインガー》！」

「《レーザー・ブレード》！」

次の瞬間、左から斧を振りかぶった劣化「化身」が、右からは槍を構えて高速で突っ込んで来る劣化「化身」が、後ろからは光を纏わせた劣化「化身」が襲いかかってきた……中々良い連携ではあるが、武器が金属製では意味がないな。

『逸レロ』

「「ナニイ!?？」」

それらの攻撃を私は《磁界制御》によって磁力を操作して、奴等の武器の軌道を逸らす事によってその攻撃を全て自分から外した。

そのまま攻撃して来た三体を含む効果範囲内に入った劣化「化身」が装備している金属製武器を磁力によってその場から動けない様にし、両手の《プラズマ・ブレード》でまとめて焼き切った。

……その間、最初に指示を出していた黒服の劣化「化身」は私から距離を取っており、【戦棍姫】を含む三体の劣化「化身」は先程から遠巻きにこちらを観察していた。

『さて、今の攻撃で五体は消せたからこの一団の残りは五体か……効果範囲外で魔法を使おうとしている劣化「化身」が三体いるな』

なので、その三体が固まっている方向に人型部分の頭部に付いている一本のツノを向け、そこを基点にして魔法を発動させた。

『《サンダー・スマツシャー》』

「「ぎゃああああアアア!?？」」

ツノから放たれた上級職の奥義に匹敵する威力の雷撃が三体の劣化「化身」を飲み込み、その準備していた魔法を霧散させた……とはいえ、三体を攻撃範囲に収める為に雷撃を拡散させた所為で仕留めきれなかったので、《磁界制御》によって加速して《プラズマ・ブレード》で三体共焼き切った。

……これで眼に映る範囲の劣化「化身」は黒服と【戦棍姫】の一団のみになった。

「クソが！ 散会しろっつったのに……。ていうか、お前達も遠巻きに見てないで手伝えよ！」

その光景を見た黒服の劣化「化身」が、その後方の【戦棍姫】を含

む三体の劣化「化身」に声をかけたが……。

「いや、いつ後ろから撃つて来るか分からない相手と共闘なんて無理だから」

「PKしに来たのに虫が良すぎるよ」

「まあ、こちらから貴方達を襲う事はしませんのです」

「チクシヨオオオ!!?」

そんな言葉を黒服の劣化「化身」に言い放った【戦棍姫】を含む三体の劣化「化身」はそのままこちらの観察に戻った……この一団とあちらは協力関係にはないらしいな。

……では、先にこの一団の残り二体を始末しようか。

「だったら俺一人でユニーク・ボス・モンスターへU B Mをブチ殺してやラア!」

そう叫んだ黒服の劣化「化身」は手に持った木製の槍を持ってこちらに襲い掛かって来た……コイツの装備は全て非金属製だから《磁界制御》は意味がないな。

……なので、私は両手の《プラズマ・ブレード》で迎撃する事にしたが……。

「クツ! そラア!」

『ム……』

黒服の劣化「化身」は私の《プラズマ・ブレード》による攻撃をギリギリとはいえ回避しながら、手に持った槍で反撃しつつこちらに接近して来たのだ……なので、私は戦い方を《磁界制御》を使った加速・急旋回などでその周囲を走り回りながら斬り込んでいく戦法に変えた。

「クソオ!」

『終ワリダ』

私のその攻撃に黒服の劣化「化身」は徐々に対応しきれなくなり、遂にはその左腕を焼き切られた……が、その瞬間、今まで姿を消していた劣化「化身」が背後から襲いかかって来た。

「《スニーク・レイド》!」

その劣化「化身」が短刀で私に斬りかかる……よりも先に、私は馬体に付いている尾を相手に向けてスキルを使用した。

『《サンダー・スマッシュ》』

「グワアアア！」

先程と違い収束されて放たれた雷撃はその劣化“化身”の身体を焼き払った……私には電磁波で周囲を索敵する《エレクトロマグネティック・サーチ》というスキルがあり、それを常時使い続けたので初めから姿を消していた劣化“化身”がいる事には気付いていたのだ。

……今まで放置していたのは、単にこちらに近づいて来るのを待っていただけである。

「良くやった！ くらえ！」

だが、その攻撃によってほんの一瞬だけ黒服の劣化“化身”から注意が逸れてしまい、その隙に奴は片手で槍の後端部分を持ち私の人型部分に突き込んで来た。

……そんな持ち方では槍の穂先が当たるだけでダメージはなはずだが、奴は会心の笑みを浮かべていた。

「取った！ 《其れは戦神を穿つ槍》！」

奴がそのスキルを使った瞬間、その槍の穂先が当たっている部分を中心に私の人型部分が消し飛んだ……どうやら、先程のスキルは敵に当たりさえすれば効果を発揮出来るスキルだった様だな。

『（……やはり“化身”は危険な存在だな。より多くのデータを集めてかの者に送らなければ）』

そんな事を馬体部分に搭載された人工知能で考えつつ、私は近接防御用スキルを使用した。

『《サンダー・カタラクト》』

「何イ!?？」

全方位に電撃を発生させる攻性防衛スキル《サンダー・カタラクト》を発動させた……このスキルは接近して来た敵を弾き飛ばす為に物理的な干渉能力を高く設定されており、主に周辺にある物理的な障害を破壊する為に使われる。

そんなスキルが直撃した黒服の劣化“化身”はダメージこそ装備していた【救命のブローチ】で無効にしたものの、その身体は電撃に

よって弾き飛ばされた。

『(人型部分の再構成を実行)』

その思った直後、私の破壊された部分から雷が迸り次の瞬間には人型部分が元どおりになっていた。

……私は元々創造主達であるとある人間の科学者によって作られたMPバッテリー付き試作型煌玉馬”であり、それをベースとした馬体に”あの者”が作成した「ハイエンド・ライトニング・エレメンタル」を人型部分として融合され生み出されたモノである。

故に雷属性のエレメンタルである人型部分は馬体部分に蓄積されたMPを消費すれば即再生可能なのだ……まあ、人型部分は外見が機械のようになっていたり頭部から声が出せるなどして、そこが本体であるかのように偽装されているが。

『消エロ』

「ガッ!?」

そして私は再生が終わった人型部分の両手から再び《プラズマ・ブレード》を展開し、黒服の劣化”化身”を頭部から真つ二つにした。

『(さて、これで黒服の一団は片付け終わったな……ッ!』

『《竜尾剣》!』

私が次は【戦棍姫】に就いた劣化”化身”の番だと考えた瞬間、その劣化”化身”の女が身につけていた鎧に付いていたワイヤー付きのブレードをこちらに超音速で射出して来た。

私は即座に《磁界制御》によってそのブレードを逸らすか、それを見た【戦棍姫】の劣化”化身”は即座に装備していた鎧を《瞬間装着》でアイテムボックス内に収納した。

『《ヒート・ジャベリン》!』

『《ホーミング・ブレイズ》!』

その直後、もう一人の劣化”化身”の女が肩に乗せている小動物(ステータスが見えないのでおそらくその女の”化身”としての異能)がこちらに向けて複数の炎の槍を放ち、最後の男の劣化”化身”も同じく火属性魔法である複数の追尾式炎弾をこちらに向けて撃ち放って来た。



『チー！』

先程の戦闘を見ていたのか、それらの魔法はこちらの馬体部分を正確に狙って来ていた………が、私は速度差から最初にこちらに到達した炎の槍を《磁力操作》で横にスライドして全弾回避し、それを追って来た追尾式炎弾を両手の《プラズマ・ブレード》で打ち払う。

「せいっ！」

「とうっ！」

「《パワージェム・スロー》！」

そこにあの劣化“化身”たちはこちらに向かって一斉に何かを投げつけて来た………あれは【ジェム】か!?!?

『クッー』

それに気付いた私はすぐさまその場から離脱しようとするも……。

ドドドガガアアアアアア———アアアン!!!

それらの【ジェム】は私の近くに来た瞬間に一斉に大爆発を引き起こした………これは火属性魔法の《エクスペロージョン》か。

『………損傷確認。………軽微、戦闘二支障ハナシ』

………その爆発を受けた私はダメージを受けたが、人型部分はMPさえあれば再生可能であり、馬体部分も内蔵された金属粒子を使つての再生で問題ない程度のダメージでしかない。

「ふーむ、流石にこんな攻撃じゃ倒せないか」

「あの〈UBM〉相当硬いですね」

「加えて再生能力持ちか………厄介だな」

そう言っている劣化“化身”達は互いにやや距離を取りつつ、こちらを油断なく見ながら戦闘の構えを取っていた………私に内蔵されている《MP蓄積バッテリー》の残量からして、全力戦闘可能時間は残り二時間程か。

『………問題ナシ。【戦棍姫】含む敵劣化“化身”トノ戦闘行動ヲ続行シマス』

全てはかつての創造主達が私に望んだ事………この世界の悪である“化身”を駆逐する為に……。



□クレールミル領内 【高位付与術師】ハイ・エンチャンター レント

今、俺達はクレールミル領内の林道で、PKクランへオーヴァー・デ  
ンジャラス・ブリゲイトを僅か一分足らずで全滅させたへUBM【磁  
改奇馬 マグネトロローベ】と相対していた。

現在、奴は先程俺達が投げた【ジエムー《エクスプロージョン》の  
爆発でダメージを負っており、今はそれを再生させているところだ  
……………なので今のうちに【テレパシーカフス】を使って妹達と状況  
を確認していこうと思う。

『まあ、彼等の尊い犠牲のお陰で奴の能力は大分明らかになったがな』  
『電撃に光の剣に磁力操作……………どれも厄介な能力だね』

『特に磁力操作が厄介なのです』

確かに、奴の磁力操作能力のお陰で俺は金属製の特典武具である  
【ヴァルシオン】を、ミカも同じく特典武具の【ドラグテイル】を外す  
事になってしまいステータスが大きく下がっているからな。

具体的に言うともミカちゃんは金属製の籠手を外しただけだが、俺は  
弓も短剣も使えないので以前ニッサ辺境伯領で買ったレジエンダリ  
ア産の木製の杖を装備しており、ミカに至ってはメイスは基本的に金  
属製なので無手になってしまっている。

……………幸いな事に俺達三人は戦闘では機動力を重視しているた  
め金属製の防具はあまり付けておらず、装備変更による戦闘能力の低  
下は最低限に抑えられているが。

『それでもステータスは下がっているしな。……………ミウちゃんは必殺  
スキルを頼む』

『分かったのです』『我等が成るは光の使者』『エコー・オブ・トウワ  
イス』

『《霊環付与》』

俺の指示でミウちゃんとフェイが融合し、更に彼女の特典武具  
【ハデスルード】の持続回復スキルが付与された……………これにより  
今ミウちゃんに掛かっている单体バフ効果が俺とミカにも効果を

及ぼす様になる。

また、事前にミュウちゃんには単体バフ魔法と炎熱・雷耐性レジスト魔法を込めた「ジエム」を使って貰っており、それらの効果も俺達に掛かってくれる筈だ。

「更に俺とミカもそれぞれ単体バフ魔法の「ジエム」を使っている上に、俺が使ったパーティー全体バフ魔法の効果もあるからな。……単体バフ魔法と全体バフ魔法は併用出来ないが、全体バフ魔法を使いなから単体バフのアイテムの使用は出来るのは良かった」

さて、これでこちらの準備は整ったな………あちらは………。

『……問題ナシ。【戦棍姫】含ム敵劣化〃化身〃トノ戦闘行動ヲ続行シマス』

………どうやら再生は終わったようだな。

その「マグネットローベ」は両手のビームサーベルを振りかざして、更に身体から青白い電撃を走らせている………？

「ヤバっ!?? 私から離れて!!」

「ツ！」

その焦った様なミカの指示に対し、俺達は即座にその場を全力で飛び退いた………次の瞬間、全身に青白い電撃を纏った「マグネットローベ」が俺達の目でも殆ど追えない様な速度でこちらに突っ込んできた。

その進路上にいたミカはとっさに「ギガス」を紋章から取り出して防御したものの、奴が超高速移動しながら振るったビームサーベルに弾き飛ばされてしまった………奴め、最初に撃ったレールガンらしきスキルを自分自身に使いやがったな！

そうやってミカを弾き飛ばしながら通り過ぎていった奴は、そのまましばらく進んだところで静止した。

「《ヒート・ジャベリン》！」

『《ブレイズ・バースト》！』

『《サンダー・カタラクト》』

そこに俺とミュウちゃん（と融合しているフェイ）は攻撃魔法を浴びせ掛けるが、奴は全方位に発生させた電撃でそれらの魔法を相殺し

た………とりあえずそのまま魔法や【ジエム】を放って奴を牽制しつつ、ミカに【カフス】で連絡を取る。

『おいミカ、無事か?』

『なんとかね。……アイツのビームサーベルを【ギガース】で防いだ時に、勢いに負けて吹き飛ばされただけだから』

『良かったのです』

………こうやって念話をしている間にも攻撃は続けているのだが、奴は磁力操作で自身を不規則に移動させたり、両手のビームサーベルでこちらの攻撃を切り払ったりしているので目立ったダメージは与えられない………更に、まれに攻撃が当たった時でもすぐさま再生されてしまうので決定打にはならない様だ。

一応、事前に俺とミュウちゃんはMPを持続回復させるポーションを使っているが、このままでは特典武器のスキルでMPの回復が出来るミュウちゃん達はともかく俺はMPが切れるだろうし、持っている【ジエム】の数にも限界がある。

『……このままだとジリ貧だからまずは接近戦を挑むぞ。狙いは馬の方、俺が最初に動きを止める』

『了解。じゃあ次に私が突っ込むよ』

『まとめて行くと電撃で一網打尽にされますからね。三方向から時間差で行きましょう』

………そうやって簡単に作戦をまとめると俺達はそれぞれ行動を起こした。

まず、俺は動きを止める為の魔法を発動させつつ、アイテムボックスから【ジエム】《アクアバインド》を四つ取り出した。

『《グランド・ホルダー》! 《バライジスロー》!』

魔法が発動した瞬間【マグネトロローベ】の周囲から土で出来た腕が四本生えてその身体を掴もうとし、更に俺が投げた四つの【ジエム】から一本ずつ水の縄が奴に向かって伸びて行く。

『ム』

だが、奴はそれらの拘束魔法を両手のビームサーベルで次々と斬り払って無効化して行った。

……とはいえ、そのせいで奴の動きは一瞬鈍ったので、その隙にミュウが【ギガース】を振りかざして奴の正面から突撃した。

「そりゃあー！」

『止マレ』

その突撃を奴はミカが振りかぶったままの【ギガース】を磁力操作で停止させる事で防ぎ、そのまま動きの止まったミカにビームサーベルを振るい……その攻撃を読んでいたミカは直前に【ギガース】を紋章の中にしまつてその一撃を回避した。

「せいっー！」

『《サンダー・カタラクト》』

無手になって奴のビームサーベルによる斬撃を掻い潜つて接近したミカはそのまま殴り掛かろうとしたが、奴の全方位電撃で吹き飛ばされた。

……まあ、ミュウちゃんの《《エール・トウ・ザ・ブレッシング》》の魔法ダメージ減少と雷耐性のお陰でダメージは大した事はなく、何より全方位攻撃を使わせるという罠としての役割は十分に果たしていた。

そして、ミカが弾き飛ばされるのとほぼ同時にミュウちゃんが奴の背後から接近した……だが、奴は尻尾をミュウちゃんに向けて魔法を発射しようとしていた。

『《サンダー・スマツシャー》』

「ッ！ 無駄なのです!!」

その尾から拡散型の電撃が放たれるが、ミュウちゃんは自身に掛かっている魔法耐性効果を頼りに電撃の中を突っ切った……しかし、ダメージは無くとも僅かにその動きは鈍ってしまった。

……そんなミュウちゃんに対して、奴はその機械の人型だった部分を解いて青白い人型の電撃に変化させた。

「なっ!?? 離脱するのです!」

『偽装解除、攻撃』

奴のその姿に危険を感じたのか、ミュウちゃんは即座にその場から飛び退いた……次の瞬間、奴はビームサーベルを展開している雷

で出来た両腕を伸ばして、背後にいるミュウちゃんに斬撃を放ってきた。

………幸い、先にその場から離脱したお陰でその攻撃はミュウちゃんに当たる事は無かった。

『《クリムゾン・スフィア》！』

『回避』

距離を取ったミュウちゃんは融合していたフェイが準備していた《クリムゾン・スフィア》を「マグネトローベ」に放つが、奴は磁力操作で宙に飛び上がりそのまま空を走って俺達から距離を取った。

………それを見た俺とミカは即座に遠距離攻撃での追撃を凶つた。

「《ストライク・ブラスト》！」

「《ロングスロー》！」

『回避困難、防御』

空を駆ける奴に対し、ミカは取り出した「ギガス」で衝撃波を放ち、俺はやや遅れて「ジェム」《クリムゾン・スフィア》を投擲した………奴はミカの衝撃波こそ回避したものの、その回避先に投擲した俺の「ジェム」は避けきれずに巻き起こった火球に飲み込まれた。

………妙だな？ これぐらいの攻撃なら奴は磁力操作による不規則な起動で回避出来た筈だが………どうやら、奴は地上よりも空中の方が動きが鈍くなるようだな。

「………と言っても、このぐらいでは仕留めきれないだろうが………！」

『《サンダー・アロー》掃射』

火球の中から出てきた奴はビームサーベルを解除した腕をこちらに向けて、そこから何十発もの雷の矢をこちらに撃ち放って来た………この矢は速度が速い上に広範囲にばら撒かれている為回避は難しいが、その威力は低いので耐性を上げている俺達には大したダメージにはならない。

………そう考えていると、奴の青白い人型の頭部に一本の金属製の角が生えている事に気づいた。

「お兄ちゃん！ 最初の攻撃来るよ!!」

「レールガンか！ 《魔力視》！」

ミカの警告を聞いた俺は《魔力視》で奴の角を注視する……………あの角から磁力のレールが伸びていてその方向は……………俺か！

『レール・アクセル・カノン《電磁加速砲》ファイア』

「チィ!!」

咄嗟に俺は身を翻すと、それとほぼ同時に奴の角が超高速で射出され先程まで俺が居た場所に突き刺さり、大爆発を起こして地面に巨大なクレーターを作り上げた。

……………その攻撃で怯む俺達を尻目に奴は再び地面に降り立ち、再度両手からビームサーベルを展開してこちらに向き直った。

『ダメージ許容範囲。再生シツツ戦闘続行』

「やれやれしづといね」『ミュウちゃん必殺スキルの残り時間は？』

「かなり硬いのです」『残り四分なのです』

……………そのミュウちゃんの答えを聞き、俺はこの戦いは相当に手間取りそうだと内心ため息をついた。

## V S 【磁改奇馬 マグネトローベ】後編

□クレールミル領内 ハイ・エンチャンター 【高位付与術師】レント

俺は現在、妹達と共に上半身が雷で出来た人型、下半身が機械の馬ユニーク・ボス・モンスターという〈U B M〉【磁改奇馬 マグネトローベ】と戦っていた。

『排除』

「チィー！ 《ヒート・ジャベリン》！」

今は地を駆けている奴の振るう十メートル程伸びた雷の腕から展開されている長さ二メートル程のビームサーベルを避け、その反撃に装備している【精霊樹の杖】から炎の槍を放ったところだ。

また、奴は上半身のもう一本の腕も同じ様に伸びており、そちらはミカの方に振るわれていた……………幸いにも腕の速度自体はAG15000以上AG15000以上亜音速度程度なので、ミュウちゃんの必殺スキルによるバフを受けた俺達なら躲せない事も無いのだが……………。

『回避』

「あー!! また逃げた！」

その炎の槍を奴は磁力を操ることで一時的に自身の身体を加速する事によって回避し、それと同時に距離を詰めようとしていた俺達から遠ざかった……………そう、腕のリーチが大幅に伸びた所為で奴に近付く事が非常に難しくなっているのだ。

更にあのビームサーベルは耐性バフを受けている俺達ですら直撃すればやられかねない威力なので、回避するしかないのも距離を詰められない事に拍車をかけている。

……………距離を取った奴に対し、一番近くにいたミュウちゃんが横合いから接近するが……………。

『《サンダー・スマッシュ》』

「くっ！」

それを奴は馬の胴体部の側面から放たれた拡散する雷撃で牽制した……………これまでの攻防から奴は身体の如何なる所からでも雷属性魔法を放てるらしい事が分かっている。

……………雷と言うのが厄介で速度が速くて避けにくい上に、耐性バ



フでダメージ自体は少なくても電撃で筋肉が萎縮するせいで僅かに動きが止まってしまふのが最も厄介だ。

今も一瞬動きが止まったミュウちゃんに対して奴は腕を伸ばしてビームサーベルを振るい、それをミュウちゃんはギリギリで回避しつつ距離を取っている。

『《ブレイズ・バースト》！』

『《ヒート・ブラスター》！』

『《サンダー・カタラクト》』

距離を取ったミュウちゃんと融合しているフェイが奴に向けて拡散する炎の砲撃を放ち、俺も【紅蓮術師<sup>バイロマンサー</sup>】の魔法の中で最も弾速が速い収束熱線魔法を放つが、奴は全方位に電撃を放つ近接防御魔法でこれらの魔法を防いだ。

……………あの全方位雷撃も厄介なんだよな。下手な範囲攻撃は防がれる上に、近づいた相手を弾き飛ばす事も出来るから距離を詰めても安心出来ん。

それでも奴の動きは止まったので、その間に超音速機動が出来るミカが接近するが…………。

『跳躍』

『ああもう！ 《ストライク・ブラスト》！』

奴は磁力操作による大跳躍で上空に移動して、そのまま宙を走り出した……………それに対してミカは【ギガス】を取り出して衝撃波を放つが、奴は宙を駆けてそれを回避した。

……………空中を移動する奴は地上と比べてやや動きが鈍る様だが、こちらはそもそも空を飛べない上に対空攻撃手段も限られているので地上戦よりもやり難い。

『《バラージ・スロー》！』

『《ロック・ジャベリン》！』

それでも何もしないよりもマシだと、俺とフェイは空を駆ける奴に対しそれぞれ複数の【ジェム《エキスプロージョン》】を岩で出来た槍を放った。

……………だが、それと同時に奴の身体に青白い電流が走り…………。

『《レイル・アクセル電磁加速》』

直後、超超音速まで加速した奴はそれらの攻撃を振り切りながらその場を離脱した……………そう、奴はあの超加速スキルを主に回避に使用し出したのだ。

あの加速スキルはチャージに少しだけ時間が掛かり使用後に僅かだが磁力操作を使えない時間が出来る様で、更にその移動方向を俺は《魔力視》、ミカは直感、ミュウちゃんは洞察力によって事前に見切る事が出来るため、攻撃に使われる場合は対処するのはそこまで難しくは無いらんだが……………今の様に回避に使われると途端に厄介になるのだ。

……………何せあの速度で離脱されると流石に追い切れないし、使用後の磁力操作不能時間も落下中に終わる程度のもので空中での回避に使った場合にはさしたる隙にはならないのである。

そうやって奴が距離を取って地面に着地した時、ミュウちゃんから【テレパシーカフス】で連絡があった。

『……………兄様、必殺スキルの残り時間は後二分なのです』

『……………そうか』

……………そう、一番の問題はこうやって時間を稼がれている所為で、ミュウちゃんの必殺スキルの制限時間が迫っている事なんだよなあ。

とりあえず、奴が自身の損傷を回復させている隙にこちらもポーションでMPなどを回復させる……………《魔法発動加速》や《魔法威力拡大》とかの魔法拡張スキルも使っているからMPの消費が非道いんだよなあ。

そして、それと同時に妹達と作戦を立てていく。

『ミカ、《エフエクトバニツシュ》で奴のスキルを封じられないか？』

『無理。あいつ【メイス・プリンセス戦棍姫】の事を知っているみたいだから、上手く間合いに入れないよ』

『ステータスに寄らない技量も相当高いですよね』

……………確かにミカに対しては雷属性魔法を殆ど使って来なかったし、常に自分が磁力操作出来る空間をミカに近づけないか逆に完全

にその範囲に入れるかしていたな。

コッチの最大戦力のミカがあまり機能していないのがキツイな、メイスという武器種は金属製の棍棒を指す物だし……………それに、ミュウちゃんの言う通り奴はスキル頼みの相手じゃないから隙も少ないし。

……………そんな事を考えているとミカがとある提案をしてきた。

『いつそ私の必殺スキルを使う?』

『…………いやダメだな。お前の必殺スキルはデスペナ確定だし、何より分かりやすいから奴が逃げに徹する可能性もある』

確かにミカの必殺スキルなら奴を叩き潰せるかも知れないが、空中を移動出来て一時的とは言え超超音速機動が出来る奴相手だと逃げられる可能性が高い。

……………今のところ俺達が奴と戦っていられるのは、奴自身がこちらに向かって来るからなのも理由の一つだからな。

『とりあえず、ミュウちゃんの必殺スキルの時間切れまでは使うなよ』

『分かったよ、お兄ちゃん』

『そうですよ姉様、デスペナしたら一緒に旅行が出来ないので!』

……………それに、これまでの戦闘で奴の動きはおおよそ見切りしましたので『す』

そう、別に俺達だつてこれまでただグダグダと戦い続けてきた訳じゃない……………これまでの戦闘では敢えて全力を出さずに相手の能力を見る事を優先して来たのだ。

……………それに再生能力がある所為で一度の攻撃で仕留めきれないと言ひ詰むし。

『時間も無いから、次の攻撃では今まで温存していた手札も全て使って仕掛けるぞ。……………狙いは奴の足だ』

奴は空中を移動する際にも“空を駆ける”という方法を使っていたから、馬の部分の足を奪えば移動速度は大きく落ちる筈だ……………問題は奴の再生能力と胴体部の装甲の頑丈さだが……………

『じゃあ、足は私が何とかするよ』

『胴体部の装甲は私とフェイの新スキルで破壊します。……………なので

フォローは任せました、兄様』

『了解。……それじゃあ行くか』

そんな感じでかなりアバウトに作戦を立てた俺達は、こちらに向かつて来る「マグネトローベ」と相対した……。……何分、あまり時間が無いんでな。

……。……それに、この二人ならこの程度の指示で十分だろうよ。

「《不治呪瘡》」

『迎撃』

まず最初にミカが特典武器（非金属製）「ブラックオーツ」が有する自分の攻撃に「再生阻害」効果を付与するスキル《不治呪瘡》を使いつつ、こちらに迫って来る奴に全速力<sup>超音速</sup>で突っ込んだ。

その一見無謀に思える突撃に対して、奴は即座にビームサーベルを展開した両手をその進行方向に置く様にしながら伸ばしてミカを斬り裂こうとする……。……全速力で突っ込んでいる以上は途中で軌道変更は出来ないと踏んでの行動だろうが……。

「《闇纏》！」

『!?!』

そのビームサーベルはミカの身体に当たらずにすり抜けた……。……直前でミカが使った「ブラックオーツ」のもう一つのスキル、魔法攻撃を含む生物以外の干渉を透過する《闇纏》の効果である。

……。……あのビームサーベルは確かに強力なスキルだが、スキルであるからこそミカならば一度は確実に突破出来る。

「っと、捕まえたよー!」

『! 排除!』

奴に接近したミカはそのまま相手の右前足に組み付いた……。……《闇纏》は生物以外の干渉を透過するスキルであり使用時には自分もスキルや武器などで他の生物に干渉出来なくなるが、それは逆に言えば生身通し（エレメンタルの肉体も生身判定）で接触する事は可能なのだ。

奴は激しく動いて組み付いたミカを引き剥がそうとするが、メイスを装備していない状態でもSTRが二万を超えるミカを引き剥がす

事は出来なかった………そしてミカは片腕で奴の足を掴んだまま、もう片方の手を引き絞り……。

「《破城槌》 イ!!」

『!!』

そのままチャージの終わった【壊屋<sup>クラッシュヤー</sup>】のスキル《破城槌》を乗せた拳を奴の足に叩き込み、その右前足を粉々に粉碎した………打撃ダメージを六倍化する代わりにチャージ時間が必要なスキルである《破城槌》を確実に当てる為に相手に組みつき、更に《闇纏》を使って電撃で弾かれ無い様にする戦術だな。

………その上、相手の損傷部分に黒いモヤの様なモノ——《不治呪瘴》のスキルエフェクト——が纏わり付いているのですぐには回復しないだろう。

『ッ離脱!』

だが、奴も足が破壊された事でミカの拘束が外れたのを見ると即座に磁力を操り跳躍してその場を離脱しつつ、片手のビームサーベルをオフにした上でその雷の腕で技後硬直で動けないミカを殴り飛ばした。

………それを見ていた俺は杖を腰に挿しつつ《瞬間装備》で弓を取り出し、それに【霊樹の矢】——付加した魔法効果を増大させるレジエンダリア産の木製矢——を番えて、奴が着地した瞬間に磁力操作範囲外からスキルを使ってその矢を放った。

「《カーズド・アロー》!」

『ガッ! コレハ……!』

呪術《カース・バインド》と弓系アクティブスキルを融合させたオリジナルスキルを使って放たれた矢は奴の人型上半身部分に命中し、その付加されたスキル効果である【呪縛】を増幅した上で奴に齎した………と言ってもへUBMである奴に対しては、ほんの一瞬だけ動きを止めるのが精々だが。

………今、奴に接近している<sup>武闘派天災児</sup>ミウちゃんはその隙を見逃す事は無かった。

「フェイ、あのスキルを」

『分かった《ミラクル・ミキシング》——《クリムゾン・スファイア》イン《シャイニング・フィスト》』

奴が動けない一瞬の隙について、ミュウちゃんは新スキルを使いな  
がらその懐に潜り込み………それに対して、動けない奴は魔法によ  
る迎撃を選択した。

『《サンダー・カタラクト》！』

「《バックステップ》」

奴が迎撃の為に発動した全方位雷撃を、ミュウちゃんはそれとほぼ  
同時に【ボクサー拳士】の《バックステップ》——後ろに一歩だけAGIを倍  
加した上で移動するスキル——を発動させる事によって回避した。

『!!』

「その範囲とタイミングはもう見切りしましたのです《ファントム・ス  
テップ》《真撃》！」

………その言葉通り、奴の雷撃はミュウちゃんの鼻先数センチの  
位置までしか届いていなかった。

そして直ぐに、ミュウちゃんは【ファイスト・マスター拳 聖】のスキルでその場に残像  
を残す程の速度で奴の懐に踏み込み、拳を握りしめながら  
【マーシャル・アーティスト武 闘 家】の奥義を使った………それに対して、奴は動ける様  
になった身体で迎撃を試みるが……。

『迎………！』

「遅い《シャイニング・フィスト》！」

奴が迎撃のビームサーベルを振るうよりも早く、ミュウちゃんの  
《シャイニング・フィスト》——光属性を纏わせた正拳突きを放つ【拳  
聖】の奥義——がその馬体部分前面に直撃し………その拳から大爆  
発が起こった。

………これがミュウちゃんとフェイの新スキル《ミラクル・ミキ  
シング》——フェイがラーニングした攻撃魔法の一つを、ミュウちゃ  
んが習得している格闘系アクティブスキルの一つに付加する——の  
効果である。

先に使った《真撃》を含めて上級職三種の奥義を重ね合わせた一撃  
の威力は凄まじく、奴の馬体部分の前半分を吹き飛ばし………その

馬体部分の腹部にあった見慣れぬ金属を溶かすだけに留まった。

「ツ!? 二重装甲ですか!?」

「コアは覆っていたか! 《瞬間装着》!」

恐らく、あの金属は話に聞く神話級金属か………それで内部にあるコア部分などを覆っているのだろう。

それを見た俺は即座に弓を放り出し、装備を《瞬間装着》によって【射手の手套】を《炎熱耐性》スキルの付いた【耐火グローブ】に切り替えた上で奴に向けて駆け出した………だが、その前に奴はまだかろうじて残っている上半身部分からビームサーベルを両手に展開した。

「ミュウちゃん!」

『ガアアアアア!!』

「グツ!?」

自身の必殺攻撃を防がれたミュウちゃんと追撃の為に接近していたミカに対して、奴は人型を成せないぐらいに崩れた上半身を全力で稼働させ、その両手に展開されていたビームサーベルを振るって二人を切り飛ばした………幸いその攻撃は二人が装備していた【救命のブローチ】によって防がれたが、攻撃の威力によって二人はそのまま吹き飛ばされた。

そして、そのまま奴はビームサーベルを仕舞い………その両手を失った前足代わりに地面に着いて態勢を整え、更に頭部を馬の様な形に変化させてそこから一本のビームサーベルを展開した。

『ガアアA A A A A A!』

「しつこい! 《空想秘奥》!」

そして、その頭部をこちらに伸ばして俺を突き刺そうとしてきた………それを避けられないと判断した俺は、空想秘奥スキルを使いつつ【ブローチ】頼りでワザと心臓がある左胸でビームサーベルを受け止めて、そのまま伸びた頭部の側面を辿って奴の元まで接近し………

「《サファイア・ライン》!」

『ガアアアアア!』

その右手から残りMPほぼ全てを注ぎ込み、更に《空想秘奥》によつ

て強化もされた《サファイア・ライン》——高圧水流によるウォーター  
カッターで相手を切り裂く【蒼海術師】ハイドロマンサーの奥義——を放って、雷の身  
体ごとコアを覆っていた雷の身体は完全に消滅した様だ。  
うじて残っていた雷の身体は完全に消滅した様だ。

『ササササ s A A A A A A A A イイイ s s s s イイイ!!』

……だが、どうやら中身までは完全に破壊出来ていない様な  
で、俺は左手に【ジエムー《クリムゾン・スフィア》】を取り出して、  
起動しながらその切れ目に押し込んだ。

「爆ぜろ」

『A A A A A A ……マ ……タ ……』

……その即時起動する様に設定してあった【ジエムー《クリム  
ゾン・スフィア》】はその絶大な火力で奴の装甲内部を焼き尽くし、そ  
のコアを完全に破壊して【マグネトローベ】を沈黙させた。



「……………ふう、やっと終わったか……………」

……………俺は沈黙した【マグネトローベ】の残骸が光の塵になるの  
を見て、ようやくこの戦いが終わった事を理解した。

〔UBM〕【磁改奇馬 マグネトローベ】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【レント】がMVPに選出されました】

【レント】にMVP特典【磁蹄騎馬 マグネトローベ】を贈与します】  
そんなアナウンスが流れたので、どうやら本当に奴は討伐出来た様  
だ……………あと、久しぶりに特典武器ゲットだぜ。

……………そんな事を考えていると向こうからミカとミュウちゃん  
とフェイ（もう五分経った）がこちらに向かってきた。

「はい、お兄ちゃんMVPおめでとく。……………つて！ お兄ちゃ  
んその手！」

「ん？ ……ああ、これか」

ミカに言われて自分の左手を見ると、そこには重度の【火傷】を負っ



た手があった………【ジエム】による自爆対策で付けていた【耐火グローブ】も焼け落ちているな。

「ふむ、ゼロ距離で《クリムゾン・スフィア》を受けたにしては大したダメージじゃないな」

「………そんな呑気なこと言わずに回復したらどうなのですか？」

「そうしたいがもうMPが無くてな……。フェイ、頼めるか？」

『了解《フォース・ヒール》』

フェイが発動した回復魔法で手の【火傷】は見る見るうちに回復して行った……。ミュウちゃんのバフのお陰で【炭化】もしなかったし、あつという間に治ったな。

「………よし、治ったな。………助かったぞフェイ」

『どういたしまして。ほかに回復がいる人は？』

「じゃあ私も頼もうかな」

「私は《霊環付与》の効果はまだ続いているのでいいのです」

そんな感じで、フェイ魔法でミカのダメージを回復していく……。まあ、ダメージ自体は全員大した事は無かったからすぐに終わったが。

「しかし、今回はかなり苦戦したのです」

「まあそうだな。………だが【ブローチ】と【ジエム】を大量消費したからしばらくは金策かな」

「そうだねー。………でも！ 全員生き残って《UBM》を倒せたんだし良かったよね！」

まあ、それは幸いだったな。お陰で旅行の予定も変えずに済むし……。何より自分達が強くなった事を実感出来たしな。

……。そんな事を考えていると、ミカがふと疑問に思った事を口にした。

「そういえば、あの【マグネトロベ】はなんでこんなところに居たんだろうね。………機械系のモンスターはドライフ皇国お隣さんの領分なイメージだけだ」

「ふむ、別にこの国にも機械系モンスターが居ない訳では無いみたいだが。………偶に見つかる先々期文明の“遺跡”の中で、昔の機械

が見つかる事があるみたいだし」

「では、この近くにそういったものがあるのでしょうか？」

うーむ、そんな話は聞いたこと無いが………或いはこの近くにまだ見つかって居ない「遺跡」があるのかもしれないな。



??とある遺跡 【??】

『磁改奇馬 マグネトローベ』の撃破を確認。それまでの劣化「化身」との戦闘データを解析……』

そこは先々期文明時代に作られ、強力な偽装が施されているため未だに地上の人間には見つかっていないとある地下遺跡………その最深部にある遺跡全体のコントロールルーム。

………そこに存在する「マグネトローベ」を〈U.B.M〉に改造し、劣化「化身」の調査を命じて地上に遣わせたモノは、今もただひたすらに自身に与えられた使命をこなしていた。

『「マグネトローベ」の戦闘データは防衛用モンスターにフィードバック。………地上に増殖を始めた劣化「化身」の強度、及びその能力の多様性は想定以上。………今後の〈ハイパーデータリンク〉による調査は、協力関係にある他の〈U.B.M〉ではなく量産型の調査用モンスターを使用する』

ソレは自身が有する〈ハイパーデータリンク〉——自身が制作したモノとの距離を無視した情報共有を可能とするスキル——で入手した「マグネトローベ」と〈マスター〉の戦闘データを解析し、そのデータを開発していた量産機に反映させていた。

………更に、今後の地上調査の為に、制作した調査用モンスター達を地上に展開していった。

『………シエルターの防衛、隠蔽機能を再確認。………可能な限りの強化を実行』

………その遺跡は、元々「化身」から人々を守る為に作られたシエルターであり、ソレもその遺跡全体を管理・防衛用、及び対「化

身“技術を研究する為の生体コンピュータだった。

だが、ソレは自立意思を持っていた為に〈UBM〉に認定されてしまったのだ。

『……………最優先事項は防衛戦力の強化、及びシエルター隠蔽機能の強化。……………ソレと並行して、地上に増加した劣化“化身”対策の技術開発を实行』

嘗てはシエルター管理用生体コンピュータだったモノ……………神話級〈UBM〉【完理全脳 アークブレイン】は、今も自身の制作目的を实行し続けている……………。

## 激戦の報酬と漸くのクレーミル

□クレーミル領内 ハイ・エンチャンター「高位付与術師」レント

突如遭遇したへU ユニーク・ボス・モンスター B M「磁改奇馬 マグネトローベ」と交戦した俺達は、激しい戦いの末どうにか誰一人として死なずに（なんかちよっかいをかけて来たどこぞのPKクランは除く）勝利する事が出来た。

ちなみに戦闘が始まった場所は林道だったのだが戦闘中に各種魔法をぶっ放した結果、周辺の木々がほとんど消し飛んでしまっていた……幸い魔法の威力が高すぎて木々が消滅しているので、火災などは起きていないようだが。

「それでも燻っている火種はあるし、消火作業はしておくか。《ウォーターシャワー》」

「そうですね。……フェイ、頼むのです」

『了解。《アクアボール》』

そういう訳で俺は広域に水をばら撒く消火用魔法を、フェイは威力を調整した水属性初歩魔法で火種を消火していく……放つにおいて山火事が起こる、なんて事もこのデンドロでは普通にあるだろうからなあ。

……しばらく消火活動を続けて、どうにか周囲の火種を消し終わった。

「……………ふう、とりあえずこんなものか」

『大体消し終わったね』

「お疲れ様、二人共。……………これって弁償とかにはならないよね？」

ミカがそう不安そうに聞いて来たが……。

「まあ大丈夫だろう……。この辺りは街から遠いから国营の森林という訳では無いし、モンスターとの戦闘がしょっちゅうあるこの世界では戦闘時における周辺の被害はある程度お目こぼしされているようだからな。……………まあ、国营の森林を跡形もなく焼き払うような事でもない限りは罰金とかにはならないと思うが」

「だよー」

「よかったです」

そういう状況でも個人的な目的ではなく、今回みたいに〈UBM〉との戦いとかなら罪になる様な事にはならない様だし……………旅に出る前にこの国の法律とかルールとかは一通り調べておいたからな。

……………さて、後始末も終わった事だし……………。

「では、今回手に入れた特典武具【磁蹄騎馬 マグネトローベ】を見てみようか」

「おー！ 待つてましたー！」

「どんな物なのでしょうか？」

そうして俺は贈与された伝説級特典武具【磁蹄騎馬 マグネトローベ】をその場に出してみると……………そこには一体の機械で出来た馬が鎮座していた。

「……………これは……………馬ですか」

「【マグネトローベ】の下半身部分に似ているね」

「装備分類は『特殊装備品』みたいだな。……………おそらく乗り物扱いなんだろう」

その特典武具【マグネトローベ】の見た目は黒色の身体に金色の装飾が入っている機械の馬で、その背には鞍の様なものがあり手綱も付いていた……………ミカの言う通りその装飾は先程戦った【磁改奇馬 マグネトローベ】の下半身部分と酷似していた。

……………最もあちらは金色の身体に黒の装飾が付いていたので、色合い的には反転した形になっている様だが。

「まあ、こちらの方がシックで俺の好みの色合いだが」

「あつちはちよつと派手過ぎるからね」

「こちらの方が兄様には似合っていると思いますよ」

ふむ、特典武具はデザインも本人にアジャストされるのかな？

……………まあ、考えても分からない事だし、とりあえず肝心のスキルの方を見ていこうか。

「……………まず《騎乗》《乗馬》スキルのレベルに応じた速度で装備者のMPを消費して地上を走る《走行》、同じく装備者のMPを消費して磁力の足場を作り空中を走れる様にする《磁蹄》、更に装備者のMPを

蓄積し、それを使って他の装備スキルを使用出来る《MP蓄積バッテリー》があるな」

「やっぱり乗り物って感じみたいですね」

「戦闘能力は低めかな？」

確かに装備補正は無いし、戦闘系のスキルもない様だが……………ん？

「……………後、表記が《??》のスキルが一つあるな」

「確かそれは装備スキルの使用に何かの条件があるタイプの表記だったね。……………私の【ドラグテイル】の《竜意圏》も最初はそうだったし」

「スキルの解放条件は何なのでしよう？」

「……………さすがに分からないな」

まあ、今のところ使えるスキルを見ると、この【マグネトローベ】は戦うというよりも俺の行動範囲を広める事がメインの特典武器の様だしな……………特に空中を移動出来る様になったのは大きい。

「……………よし、取り敢えず乗ってみるか」

「まあ、このまま見てるだけじゃねえ」

「百聞は一見にしかずとも言いますしね」

そういう訳で、俺は【マグネトローベ】の背に乗り手綱を握った……………俺の《騎乗》スキルは、今まで馬車を運転していたお陰で【ライダー騎兵】の最大スキルレベルである五になっているので、現実で乗馬などした事がない俺でも問題なく乗りこなせる筈だが……………

「よつと……………それじゃあ、少し走ってみるぞ。……………ハイヨー！」

「『行ってらっしゃーい』」

妹達に見送られながら、俺は手綱を振るい【マグネトローベ】を走らせてみる……………すると俺の指示に応えた【マグネトローベ】は勢いよく走り出した。

「……………おおー！思った以上に速度が出るなー！」

しばらくの間加速した【マグネトローベ】だが、ある速度になってからは一定の速度になった……………どうやら、これが今の最高速度ら

しいな。

「……………速度的には亜音速に満たないぐらいだが、以前に乗って来た『ブロンズ・ホースゴーレム』のブロンと比べると遥かに早く、更に乗っている感触だとパワーも大幅に上回っていきそうだな。」

「……………さして、しばらく周辺を走らせて色々確認して行く。」

「……………ふむ、MPの消費は分間で約1ぐらい、それに俺の思った通りに走ってくれんな……………特典武器だからか《騎乗》スキルのお陰かは分からないが」

「後、事前に簡単に指示を出しておいて、そのあと俺は何もせずその通りに行動させる事もやってみたが、普通に指示通り行動してくれた……………多分、この『マグネトローベ』にはある程度の自己判断が出来る知能があるみたいだな。」

「……………さて、次はお待ちかねの空中移動をやってみるか。」

……………《磁蹄》発動！

……………すると『マグネトローベ』は何も無い空中を踏み締めて空を駆け上り始めた。

「おお!! 本当に空を飛んでいるな!!」

「取り敢えず地上五十メートルぐらいまで上がり、そこから地上を眺めてみた。」

「……………絶景だな……………」

「うん、こうして空から地上を見るのは現実では出来ないからな、柄にも無く感動してしまったよ……………あの事故以来空は避けていたが、自分で飛ぶ分には我ながら案外大丈夫みたいだな。」

……………そういう訳で、俺はしばらくの間のんびりと空中散歩を楽しんでいた。

「空中でも地上と変わらない速度で走れるみたいだな……………だが、MPの消費は地上を走ると比べると約十倍ぐらい余計に消費しているな」

「……………どうも《磁蹄》は思ったよりも燃費の悪いスキルの様だな……………おそらく《MP蓄積バッテリー》で事前に大量のMPを用意しておく事が前提なんだろうが。」

……………そんな事を考えていると、地上に居る妹達から【テレパシーカフス】を介して連絡が来た。

『兄様ー、空はどんな感じなのですかー？』

『控えめに言つて最高だな。……実にいい眺めだ』

この【マグネトローベ】は実にいい特典武具だな！ 苦戦した甲斐があった。

『いいなー。私も空飛んでみたいー』

『……………それじゃあ少し一緒に飛んでみるか？ 一旦地上に戻るぞ』

……………この特典武具【マグネトローベ】は皆で戦つて勝ち取った物だからな、この光景をあまり独り占めするのは良くないだろうよ。



「イエーイ！ 絶景だぜー！」

「凄い眺めなのです！」

『本当にね！』

「だろう？」

そういう訳で、俺達はみんなで空中散歩を楽しんでいた……………ちなみに全員を【マグネトローベ】に乗せるのは馬上のスペース的に無理だったので、まず騎乗担当の俺は当然馬上に、そして話し合い結果ミュウちゃんがその後ろに乗る事になった（フェイはミュウちゃんの頭の上にしがみついている）。

……………そして余ったミカは、俺が召喚した【バルーンゴーレム】のバルンガを【マグネトローベ】と縄に繋いで、その上に乗る事で空中移動をする事になった。

「それでミカ、バランスとかは大丈夫か？」

「うん！ 大丈夫だよ。結構スペースあるし！」

まあ【バルーンゴーレム】は意外と大きいから……………それにミカの事を考慮してスピードをかなり落としているし。

「今は高さ百メートルぐらいかな？」



「そんなところですね。……………こうやって空中を移動すれば、これからの旅行の予定もかなり短縮出来るのでは？」

『少なくとも行動範囲はかなり広がりそうだね！』

「どうやら三人とも空中移動はお気にめしたみたいだな……………まあ、こちらの世界の俺達なら地上百メートルから落ちても死にはしないだろうし、こうして空中散歩も問題無く楽しめるな。

……………と、思っていたのだが……………。

「……………ん？ 《千里眼》……………三人共、話の途中で悪いが「ワイバーン」だ」

「『へ？』」

「走行中、前方数百メートル先の上空に何か飛んでいる事に気がついた俺は、ひとまず視覚強化千里スキル眼を使ってそれを確認した……………すると、それは数十匹ほどの「ワイバーン」の群れである事が分かった。

……………詳しく見てみると「ライトニング・ワイバーン」や「フレーム・ワイバーン」などの派生種らしき姿も見え、更に向こうには「ワイバーン」ではなさそうな巨大な影も見えた。

「……………本当だ、「ワイバーン」の群れだね。……………どうするお兄ちゃん？」

「一旦地上に降りるぞ。……………幸い向こうはこちらに気がついていないようだし、コッチの方が高度は低いしな」

「賛成なのです。……………空中では私は戦力になりませんし」

『まだ全力戦闘が出来る程回復してないしね』

「初めての空中戦であんな群れと戦うのは避けたいし、何よりポーションで回復しているとはいえ召喚と空中走行で俺のMPはかなり心許ない。

……………そういう訳で、俺達は急いで地上に退避する事になった。

「今の私達じゃ空中戦闘は正直キツイかな？ ……………お兄ちゃんとフェイちゃんの魔法攻撃ぐらいしか打つ手がないし」

「私や姉様はあまり役に立てそうにないのです。……………空中移動は便利だと思っただのですが」

『あの群れを見るに、この世界の空中旅行は難易度が高そうだねえ……』

「まあ、周囲を警戒しつつ一時的に空中を移動するとかなら大丈夫そうだし、行動範囲が広がるのは事実だと思うぞ」

「……………そんな話をしつつ、俺達の短い空中散歩は終わったのだった。」



□クレールミル領 メイス・フリンセス【戦棍姫】ミカ

あれから、この世界での空中移動における難易度の高さを知った私達は、取り敢えず地上に降りてクレールミルへの旅路の続きをする事になった。

ちなみに今は「マグネトローベ」でこれまで使っていた馬車を引張っており、その速度は今まで使っていた「ブロンズ・ホースゴーレム」よりも遥かに早かった。

「空中移動が出来なかったのは残念だけど、地上での移動速度がかなり早くなったのは幸いだったな。……………おそらく、この速度なら今日中にクレールミルに着けるだろう」

「今回の旅行は色々トラブルに巻き込まれたけど、どうにか予定通りに行けそうで良かったね。……………空中移動に関しては後で色々考えるって事で」

「そうですね。……………流石に今日は少し疲れしました」

ミュウちゃんもかなりお疲れの様子……………【マグネトローベ】との戦いは結構神経を削る感じだったからね、私もかなり疲れているし。

「……………そんな感じで、私達が疲れから言葉少なく道を進んでいくと……………」

「ふむ、どうやら見えてきたな。あれが城塞都市クレールミルだろう」

「……………お兄ちゃんのその言葉を聞いて前を見てみると、そこには王都にも匹敵する様な巨大な城壁がそびえ立つ街があった。」

「『城塞都市』という通称通りに凄い城塞だね」

「そうですね。……………取り敢えずさっさと中に入りましょう」

『今日は疲れたからね』

そんな感じで、大分疲れていた私達は早く街は入ろうと城壁にある門まで馬車を走らせていった……………そうして門に近づいた時、ちようどそこから出て来る二十人程の人達とばったり遭遇した。

あれ？ よく見たらその先頭には見覚えのある顔が……………。

「！ レント君、ミカちゃん、久し振りだね」

「フォルテスラさん、お久しぶりです」

そう、門から出てきたのはフォルテスラさん率いるへバビロニア戦闘団の一団だったのだ……………よく見るとシャルカさんも居るね。

おや？ その中に何処かで見た事がある様な日曜午前っぽい仮面の人が……………。

「あの……………その仮面の人はひよつとしてライザーさんですか？」

『ああ、久し振りだねミュウちゃん、ミカちゃんも』

やっぱりライザーさんだったみたいだね……………仮面とスーツが大分それっぽくなってるから一瞬分からなかったけど。

「ミカ、その日曜午前にテレビに出てきそうな人は知り合いなのか？」

「うん、あの人はマスキド・ライザーさんって言って、以前私とミュウちゃんと葵ちゃんんでクエストを受けた時に知り合ってたフレンドになったんだ。……………それで、フォルテスラさんと一緒に居るという事はへバビロニア戦闘団に入ったんですか？」

『ああ、オーナーからスカウトされてな』

「街々をパトロールして治安維持をしているへマスター」がいると聞いてね……………しかし、ライザーとミカちゃんが知り合いだったとはね」

そんな感じで旧交を温めていると、一団の中にいたサブオーナーのシャルカさんがフォルテスラさんに声を掛けた。

「オーナー、そろそろ」

「！ ああ……………済まないが俺達はこれから行くところがあってね、これで失礼するよ」

「何処かに行くんですか？」

『ああ、俺達はこれからこの近辺で目撃されている【磁改奇馬 マグネトローベ】という〈UBM〉を探して討伐しようとしていたんだ』  
……………え？

『以前ウチのパーティーがそいつに襲われてな。今回はそのリベンジに行こうとしていたところなんだ』

「あの時はオーナーが居ませんでしたし、メンバーの殆どが金属製武器を装備していた所為で全員良い様にやられましたからね。  
……………今回はその為に高い金を払ってまで非金属製装備を揃えて来ました」

「それに【マグネトローベ】によって強力な〈マスター〉が次々とやられていく所為で街にも不安が広がっているからね。その所為で他の街との行き来にも影響が出始めているし」

「……………ソ、ソウデスカー……………」

……………ヤバイ、超気まずい……………

と、取り敢えず【カフス】で……………

『どうしよう、お兄ちゃん！』

『……………えーつと……………どうしましょう？』

『流石にどうしようもないぞ。……………それに、もう《鑑定眼》を使っている人がいるから手遅れだ』

お兄ちゃんの言葉通り、彼等の中には【マグネトローベ】を凝視している人が何人かいた……………そして、その人達の内一人がこちら問いかけてきた。

「あ、あの……………その馬の名前、【磁蹄騎馬 マグネトローベ】って出ているんですけど……………？」

「…………………………」

……………その質問の直後、その場を沈黙が包み込んだ……………

「……………あー、レント君。その馬は……………？」

「……………【磁蹄騎馬 マグネトローベ】……………特典武器です……………」

『……………と言うことは……………』

「……………【磁改奇馬 マグネトローベ】はさつき私達が倒しました

……」

「『『『………』』』』」

その私の言葉と共に、再び何とも言えない沈黙がその場を包み込んだ……。

………き、気まずい！　すごい気まずいよ………！

「………そ、そうか。………と、取り敢えず！　俺達のホームタウンの脅威を取り除いてくれて助かったよ！」

「い、いえ！　偶々遭遇して運良く倒せただけですから！　お気になさらず！」

「そ、そうだね！」

「そうなのです！」

気まずい沈黙の中でいち早く気を取り戻したフォルテスラさんが、どうにか雰囲気を変えようと話しかけてきたので、私達も急いでそれに合わせて勢いよく返事をしておく。

………その間に私達はそそくさと馬車と「マグネトロベ」を仕舞っておく。

「そ、それでは、俺達は冒険者ギルドに配達クエストがあるのでこれで！」

「あ、ああ！　この街は活気があって良い街だから存分に楽しんでいくといい！」

そんな感じで無理矢理に話を切り上げつつ、私達は急いでフォルテスラさん達と別れてクレームルの中に入って行ったのだった………流石に、あれ以上一緒に居たら更に気まづくなるだけだろうしねえ……。

## ジョブクエストと掘り出し物

□城塞都市クレールミル 【レジストマンサー防護術師】レント

「……………えーっと、これで依頼にあった【ジエムー《クリムゾン・スファイア》】は全部完成つと。……………次は【ハイ・エンチャンター高位付与術師】の各種上級単体バフ【ジエム】の作成だな」

どーも、レントです。今は漸く到着した《クレールミル》で、資金稼ぎの為に一人で【ジエムマイスター魔石職人】系のジョブクエストを受けて生産活動の真つ最中である……………この前の【磁改奇馬 マグネトローベ】との戦いで【救命のブローチ】をはじめとした各種アイテムを消費してしまったので、その損失分を補填する為の資金稼ぎが必要になったんだよなあ。

……………ちなみに、ミカとミュウちゃんはクエストを受けながらモンスター狩りで資金稼ぎをしているので別行動である。

「まあ、スキルをオフにする事も出来るが……………上級魔法の【ジエム】は一つ十万リル以上と単価が高い分クエストの報酬もいいから、狩りよりもこちらの方が金稼ぎには向いているしな」

込められた魔法が使用出来る使い捨てアイテムである【ジエム】を生産するには、生産スキルを使うための【魔石職人】と込める魔法を使用出来る魔法系ジョブに就いている必要がある。

そして、上級職の魔法を【ジエム】に込める為には魔法系上級職と【ハイ・ジエムマイスター高位魔石職人】に就く必要があるので、一人の人間が作れる【ジエム】の種類は限られており、その結果として単価が高くなるのだ。

……………最も、俺は自身の《エンブリオ》の必殺スキルでジョブ枠を大幅に拡張しているので多くの上級魔法【ジエム】を生産出来るのだが。

「と言っても、この炸裂型【ジエムー《クリムゾン・スファイア》】みたいに人気のある【ジエム】は結構決まっているから、クエストで作る【ジエム】は結構決まっているんだが」

……………これは【ジエム】を生産する時には、まず使用した際どのような形式で魔法を発動させるかを設定する必要があるのが原因であ

る。

例えば「ジエムー《クリムゾン・スフィア》」の場合、起動した際に一定時間後に魔法を炸裂させる様に設定する、或いは敵に対して火球を飛ばして攻撃する様に設定するなどの細かい発動形式を決めた上で「ジエム」を作成するのだが……………一つの魔石に込められる魔法の容量は決まっており、後者の場合「敵を識別する」や「火球を真っ直ぐ飛ばす」、敵に当たった時点で炸裂させる」などの術式を組み込まなければならぬので魔石の容量を圧迫するのだ。

「当然、組み込む術式の量が少なければ魔石の容量にも余裕が出来るし、その分魔法の威力を上げることが出来るからな。……………色々な設定を組み込むと手間がかかるし、下手をすればより上位の魔石を使う必要が出てくるから値段も上がるしな」

なので、お高い上級の魔法「ジエム」においては起動後一定時間で魔法が発動する、或いは起動後何かに当たった時に魔法を発動する「ジエム」を買ってそれを投げつける使い方が人気なのだ。

上級の魔法「ジエム」を買える人間は殆どが高レベルだろうから、自前のSTRやDEXで投げつける方が射程・精度共に高いだろうしな……………ミスによる自爆には要注意だが。

「途中停止とかのセイフティ機能とかを付けても容量を圧迫するからな。……………各種単体バフ魔法の設定は即時発動かつ使用した人間のみを対象に発動する様に設定してつと……………」

この単体バフ魔法の「ジエム」や回復魔法「ジエム」も同じであり、対象指定の効果などと付けない方が魔法自体の効果は強力になるのだ。

……………基本的に使い捨ての「ジエム」の用途は緊急時の切り札として使う事が多いので、使い勝手よりも威力・効果が高い方が人気なのである。

「二期期」「ジエム」生成貯蔵連打理論」とかもそれなりに流行ったけど、そこまで大流行はしなかったな」

確かに、大量の「ジエム」を貯蔵して状況に合わせて使うのは強力な戦術なのだが……………前述した通り、買い揃える場合にはどうして

も金が掛かるのだ。

また、自分で生産する場合には、確かにコストは買い揃える場合に比べて十分の一ぐらいにまで抑えられるが……………今度はジョブが魔法系に偏るので投げる為のSTRやDEX、そして相手の動きについていく為のAGIが低くなるので投げるまでに潰されるのだ。

「使ったアイテムが戻ってくる決闘で【ジエム】投げ合戦が流行った時期もあったけど、闘技場の広さなら亜音速も出して接近するか、高威力の射撃スキルがあれば対処可能だからランキングの上の方ではほとんど見なくなつたが」

噂によると【ジエム】を投げる相手に対して決闘ランキング上位の〈マスター〉はバイクで距離を詰めたり炎で魔法ごと焼き払ったり、或いは伸びる刀身で投げる前に切り裂いたり鎖を伸ばして発動前に投げ返して自爆させたりしているらしい……………こういう対策が出来るあたり、アルター王国の決闘ランカーはレベルが高いなー。

「……………そもそも、それだけの金があるなら高級な装備を買い揃えて、自分の〈エンブリオ〉にあつた決闘用のジョブに就いた方が大体的場合は強いしな」

また、使ったアイテムが戻ってくる決闘に慣れすぎた所為で、それ以外の場所で【ジエム】の使用を躊躇ってしまい弱くなつたというのも廃れた理由の一人ではある様だが……………やっぱり、勿体ないオバケは怖いな。

……………とはいえ、戦闘で使う手札の一つとして【ジエム】を使う人は普通にいるので、その分需要もちゃんとある。

「まあ、俺も全力で戦う時には【ジエム】を使うし、使いこなせば強力な戦術なのは事実なんだが……………【ジエム】生産と相性のいい〈エンブリオ〉を持つ〈マスター〉とかも居るだろうし」

散々こき下ろしておいてアレだが、魔法をノータイムで発動出来る【ジエム】は強力なアイテムであり、俺もクエストでの生産の合間にちまちまと自分様の【ジエム】を蓄積しているしな。

……………最も俺の〈エンブリオ〉はジョブ枠拡張がメインなので、生産行動自体に何か恩恵がある訳じゃないから【ジエム】の大量生産と



かは難しいのだが。

「……………さてと、これで依頼分の【ジエム】の生産は終わったし、後は自分様に【防護術師】の各種レジスト系魔法の【ジエム】でも作って……………後は単体バフ魔法【ジエム】も作っておこうかな？ 前回の戦いでも自分で全体バフ魔法を使いつつ【ジエム】を使って自己強化とかは出来たしな」

ちなみに【防護術師】は各種レジスト系魔法を取得出来る魔術師系の下級職であり、防御の為のレジスト系魔法や各種回復系魔法は戦闘中に即時発動出来た方が便利だと思ったので取得した。

……………本来なら【高位付与術師】ハイ・エンチャンターをカンストした後は騎兵系統の上級職とかを取りたかったんだが、転職条件に『騎乗しながらの戦闘』とかが条件に入っていたので転職するのは後回しにする事にした。

その上でしばらくは街でジョブクエストで資金を稼ぎつつ、それによって獲得出来る経験値でいくつかの便利そうな下級職のレベルを上げる事にしたのだ。

「まあ、そのお陰で【カタログ】から俺と相性のいい下級職を見つける事が出来たのは良かったが。……………よし！ これで一通りの【ジエム】は作り終わったし、後はギルドに持っていくか」

◇

あの後、一通りの【ジエム】生産を終えた俺は、クレームルの魔石職人ギルドに依頼品を渡しに行っていた。

「では、依頼にあった【ジエム】《クリムゾン・スファイア》を始めとする攻撃魔法【ジエム】一式と、上級単体バフ魔法及び回復魔法【ジエム】が完成したのでお納めします」

「ありがとうございます。……………それでは依頼品を確認するのでしばらくお待ちください」

とりあえず依頼品を受付嬢さんに渡したので、俺は確認が終わるまでの時間ギルド内のロビーの椅子に座って、暇つぶしにジョブクエストの一覧が書かれた資料を見ながら待機する事になった。

旅行中は何かと金が必要だから、クエストでお金が稼げるのは嬉

しいな……………【ジエム】には一定の需要があつて、特に上級魔法の【ジエム】は供給が少ないからどこも不足しておりクエストに困る事は少ないのだが。

「レント様、依頼品の確認が終わりました」

「はい、今行きます」

「どうやら確認作業が終わつたらしいので、俺は資料を置いて受付に向かった。」

「依頼品は全て問題ありませんでした、こちらが報酬の五百万リルになります」

「ありがとうございます」

「やっぱり上級魔法【ジエム】作成依頼は資金稼ぎの効率がいいな……………その分、成功率も低くて制作時間も相応にかかるが。」

ステータスとスキルレベルが上がつたお陰で生産の成功確率の方はだいぶ良くなったが、クエストをこなすにはそれなりの数の【ジエム】を作らなければならないから制作時間の方はどうしようもないしな。

……………さて、後はどれぐらいレベルが上がつたのかを確認してみるかな。

（ふむ、いくつかの依頼を達成したから【防衛術師】のレベルは一気に上がったな。……………まあ、新しく取つた【見習】<sup>シギナー</sup>のあのスキルのお陰でもあるのだろうか）

俺が【高位付与術師】をカンストした後に転職した【見習】はかなり特殊で、何らかのジョブに就く前にその練習をする事を目的としたジョブなのである。

そして、そのジョブスキルの中にはジョブクエストを達成した際に獲得出来る経験値量とジョブクエスト実行時のスキルレベルの上がり方を増幅させる《手習い》というものがあるのだ。

……………本来ならその《手習い》は【見習】のジョブスキルなので、それ以外のジョブをメインにしている場合にはある条件を満たさない限り使用出来ないのだが……………。

（俺の【ルー】には下級職・上級職のジョブスキルをメインジョブによ

らずに使用出来る様にする《オールスキル全技能》があるからな。……………【見習】  
本来の使い方からはかなり外れるが）

まあ、お陰でジョブクエストを受けた際に取得出来る経験値やスキルレベルの上昇率を上げる事が出来るしな……………今後は、こういうクセがあつて使いにくそうなジョブも試していった方が良さそうだな。

「さて、とりあえずの資金稼ぎは終わったがどうするかな。……………しばらくは「ジエム」の制作はいいし、この街の観光でもしようかな」  
このクレーミルは城塞都市という通称があるだけあつてか、高性能な武器・防具などの装備や各種アイテムを売っている店が多いらしいので、それらを見てみるのも悪くはないだろう。



そういう訳で、俺はただいま絶賛クレーミルの街並みを観光していた……………このクレーミルは多くの店が立ち並ぶ、とても活気があるものだった。

そして、今はこの街でもかなり大きな防具屋にやってきていた……………武器に関してはエドワード達が作ってくれた弓と短剣がまだ使えるしな。

「ほう、高性能な防具が沢山置いてあるな。……………生産系ジョブに就いているティアンの数なら王国でも屈指という話本当だったみたいだな」

なんでもこのクレーミルは数百年前の防衛拠点から発展した都市であり、それ故に戦争に使う武器・防具或いは各種アイテムや食料の生産を行う施設・人員が多く居住していたので王国でもトップクラスの生産都市になっている様だ。

その上、この都市には街全体カバーできる程の範囲を持ち上級職の奥義ぐらいなら傷一つつかない強力な防御結界が張り巡らされており、元々は軍事拠点だったからか在中している騎士達の質も高いので治安も非常に良いのだ。

「……………まあ、その結界も超級職の攻撃を防げる程ではないみたいだが。……………この街も昔の戦争ではそんな感じで攻略されたみたいだし」

この世界においては超級職の単騎突撃で拠点が攻略されるのは割とよくある話の様だ……………ウチの妹の一人も現在超級職に就いているので、そのデタラメさはよくわかる。

……………つと、関係無い事を考えるのはここまでにして、商品を見ていこうか。

「とりあえず軽装の防具から見ていこうかな。……………今の俺の戦闘スタイルは魔法使い系だし、ローブとかマントとかないかな」

ふむふむ……………おつ、この鎧はステータス割合強化の補正と高レベルな装備スキルが付いていてかなりの性能だな。製作者はゾラという人みたいで、値段も相応に高いがこの性能なら当然だな……………でも、俺の戦闘スタイルには合わないかな。

コッチはタワースールドか、妹達との連携を考慮して盾役系のジョブを追加で取ってみるか？……………いや、俺より遥かに強い上にまともに攻撃が当たる自体が殆どないあの二人をわざわざ守ってやる必要はないか。

「……………おつと、どうもこういう買い物の際は関係無い商品まで見してしまうな。……………《鑑定眼》で商品を見ると色々な説明が見えるから、つつい読みましょう」

とりあえず軽装の防具が売っているエリアまで行ってみるか…………………………おつ。

「この【天威のブーツ】には、自身の合計レベル分AGIを固定値で上昇させる装備補正が付いているな。……………確かエドワードは以前『合計レベル分の固定値上昇補正が使われている装備が殆ど無く、そのせいで情報が少なくまだ作れない』と言っていたし、これは掘り出し物かな」

……………何故、この『装備者の合計レベル分の固定値上昇装備補正』が付いている装備が殆ど無いのかと言うと、この補正は装備に付加する難易度がステータスの割合上昇に次ぐ程に高いのが主な原因なの

だ。

更に超級職に就いていない人間の合計レベルが通常最大五百な上、殆どのティアンがそれ未満の最大レベルしか無い以上この補正での上昇値は最大五百止まりであり、それなら普通の固定値上昇で五百以上にするか《○○増加》の装備スキルを付ける方が遥かに簡単なのである。

また、超級職ならレベル制限はないが、そもそも超級職のステータスなら割合上昇の方がステータスが高くなるだろうしな。

「そりゃあ、最大で五百程度ステータスを上昇させる装備の値段が百万リル以上するんじゃ作る人も居なくなるよな。……………まあ、多くの下級職・上級職に付いている俺にとってはこちらの方が都合がいいんだが」

よし！ この【天威のブーツ】はお買い上げだな……………装備スキルが《拘束耐性》《麻痺耐性》《盗難防御》《破損耐性》といった、とりあえず付けておいて損はないものなのも高評価だ。

お値段は三百万リルだから問題無く買えるな……………旅行資金はまた【ジェム】を作って売ればいいし。

「……………それに、この前の戦いみたいに【ヴァルシオン】が使えなくなる場面もあるかもしれないからな。出回っている数も少ないしなるべく買っておくべきだろう」

そういう訳で、俺は【天威のブーツ】を手に入れたのだった……………後日、資金稼ぎの為に追加でジョブクエストを受ける事にもなったが。



「うむ、今日は実にいい買い物だったな。……………此処は中々いい街だ」

あの後【天威のブーツ】を買った俺は、しばらくクレミルの観光を楽しんでいた。

「……………そろそろ、一旦ミカ達に連絡しておくかな」

そして、俺はアイテムボックスから「テレパシーカフス」を取り出して妹達に連絡を入れた。

『……………あ！ お兄ちゃん？ 何か用？』

「今日のコツチの予定は大体終わったから連絡したんだよ。取り敢えず二百万ぐらい稼げたしな……………そっちは？」

『コツチも狩りはそれなりに上手く行ったよ。……………流石に一日で数百万稼ぐお兄ちゃん程じゃ無いけど』

『純竜級のモンスターを倒したりもしましたが、肝心の「救命のブローチ」は手に入りませんでしたしね。……………【健常のカメオ】は手に入りましたが』

まあ、特定のアイテムをドロップ頼りで入手するのは難しいからな……………え？ 買い物しなければ五百万リルの【ブローチ】も買えたんじゃないかって？

……………戦闘能力が上がれば【ブローチ】が必要な場面も少なくなる筈だから……………。

「まあ、そこまで焦らなくても大丈夫だろう。……………そもそも、お前達は攻撃なんて滅多に当たらないだろうに」

『それはそうだけど……………ほら！ もうすぐ「ハロウィンイベント」があるじゃない』

『イベントに備えて出来る限り準備をしておきたいのです』

……………そういえば、そんなイベントがあると公式ホームページでやっていた様な……………。

しかし、現実ではもう十月も終わりだったな……………三倍時間のデンドロをやっていると時間感覚がズレるね。

「成る程、それじゃあイベントに向けて各々準備を進めておこうか」

『そうそう！ せっかくのデンドロ公式イベントだからね！』

『楽しみなのです！』

と、そんな感じ定時連絡は終了した。

「そうだな、俺も準備をしておくかな。……………まずは、イベント時の移動範囲を広げる為に「マグネトローブ」のMPをチャージしておくかな」

おそらく今のへマスターで空中移動が出来る者は少ないだろうし、この「マグネトロベ」は大きなアドバンテージになるだろうからな。

## 番外編 エルザのクエスト・ヘイスティア鉱山

□ヘイスティア鉱山 【騎乗従魔師<sup>ライド・テイマー</sup>】エルザ・ウインドベル

こんにちは、私はこのデンドロロではないテイマーをやっているエルザ・ウインドベルです。今日はリアフレのターニャと、彼女が所属しているクラン〈プロデュース・ビルド〉のオーナーであるエドワードさんと一緒にとあるクエストを受けて、王都アルテアの東にあるヘイスティア鉱山にやってきました。

ちなみに道中はタイムモンスターの【テンペスト・デミドラグイール】のウオズを護衛にしつつ、三人で【シャイン・ドラゴン】のセレナに乗って一っ飛びでしたが……どうやら目的地に着いた様なのでセレナには降下、ウオズには周囲の警戒の指示を出しておきます。

『到着しましたよマスター』

「ありがとうございます。……二人共、もう降りていいですよ」

「はい。……いやー空の旅なんて初めてだから楽しかったね！」

「そ、そうだな……」

楽しそうにしているターニャとやや顔色を悪くしているエドワードさんが降りて来ました……どうやら、彼は空の旅があまりお気に召さなかった様ですね。

ちなみに、今私がメインジョブにしている【騎乗従魔師】はタイムモンスターへの騎乗に特化した【従魔師<sup>テイマー</sup>】の派生ジョブで、そのスキルの中には《同乗》スキル——自身のタイムモンスターの同乗者に一時的に《騎乗》スキルを与える——というものがあり、二人がセレナに騎乗出来たのはそのお陰だったりします。

「さて、此処がヘイスティア鉱山ですね。……確か、此処に何処からかやってきた謎のモンスターが住み着いたのでしたか」

「そうだよエルザ。……どうも、此処で働いているティアン<sup>ティアン</sup>の鉱夫が何者かに次々と襲われているみたいなんだよね」

「知り合いの業者や生産系ギルドの情報によるとしばらく前から襲わ



れていて、幸い死者は出ていないがそのせいで王都に入る鉱石が少なくなっているらしい」

今回受けたクエストは「ヘイスティア鉱山」で鉱夫襲撃事件の解決」というもので、彼等「プロデュース・ビルド」が以前から付き合っていた業者さんに頼まれたものです。

曰く「事件の所為でヘイスティア鉱山」からの鉱石が入って来なくなったので、「マスター」の伝手でどうにかならないか。もちろん報酬も出す」と頼まれてしまった様なのです……それで色々付き合ってもあったので断りきれず、とりあえず知り合いの「マスター」に依頼して調査に行ってみようという事になったみたいです。

……最も、「ヘイスティア鉱山」で取れる鉱石は鉄鉱石などの質が低い物が主なのであまり利用する鉱夫の数も少なく、だから事件の緊急性が低いので報酬節約の為に伝のある「マスター」に依頼したという面もあるようです。

「あそこの業者からはよく鉱石を受注しているし、鉱山が使えなくなれば生産職である俺達も困るからな」

「でも、うちで辛うじて戦闘が出来るのは私とエドワードぐらいだから流石に戦力が足りないし。……だからアルター王国討伐ランカーでもあるエルザに声を掛けたんだよ」

「……ランキングの端の方に引つ掛かっているだけですけどね」

……私が討伐ランキングに入っているのは従魔師派生の【飼育者】<sup>ブリーダー</sup>系統の《ブリーディング》——従属キャパシティ内のタイムモンスターが獲得する経験値を増幅するスキル——を覚えた所為で私のタイムモンスターと「ワルキューレ」達のレベルリングが揃ったので、どんどん狩りをしていった結果なんですけどね。

他にもセレナをタイムしたお陰で行動範囲が大幅に広がった事や、私の仲間達のレベルが上がって広域攻撃が出来る様になったのも理由になります。

「相変わらずエルザは自己評価低いね。……そもそも、実力が無ければランカーにはなれないでしょうに」

「全くだな、君はもう少しし自信を持った方がいい」

「……………分かりました、私だつて受けた依頼はキチンとこなしますよ。……………では、みんな出てきて下さい。あとウオズは今回は鉱山内での行動なので【ジュエル】に戻って、セレナは人化を」

『KUE』  
御意

『分かったわ』

私の声と共に左手の紋章から五人の同じ顔をした女性が、右手の【ジュエル】からは【スカウト・デミドラグウルフ】のヴェルフが、そして私の懐から拳大の大きさの石……………【アース・エレメンタル】のアーシーが出てきました。

この女性達が私の「エンブリオ」であるTPYEレギオン【代行神騎 ワルキューレ】です。彼女達はスキル《代行者》によって人間と同じ様にジョブに就く事が出来て、それぞれ生まれた順に長女である剣士系ジョブの前衛の通称アリア、次女で司祭系ジョブの通称セレナ、三女でタンク系ジョブの通称トリム、四女で魔術師系ジョブの通称フィーネ、五女の盗賊・斥候系ジョブの通称リーファになります。そしてウオズが【ジュエル】の中に戻り、セレナが中学生ぐらいの金髪の少女に変化しました。

「……………確か、今回この鉱山に住み着いたというモンスターは誰も見ていないのでしたね」

「そうだよ。……………だから、隠密能力が高いモンスターなんじゃないかって言われているね」

「あと、襲われた鉱夫達は『見えない何かに殴られた』とか『水流を浴びせられた』などと言っていたらしいな」

……………成る程、隠密能力の高いモンスターと狭い坑道内で戦うのは結構面倒ですね。それに水気が全く無いこの鉱山で水流ですか……………やはり外部からモンスターが入り込んだ可能性が高いですね。

事前に調べたところによるとこの鉱山内にはモンスターはあまりおらず、その能力も亜竜級に届かないものが殆どらしいですし。

「では、鉱山内での陣形を決めます。まず先頭は索敵役にヴェルフとその護衛にアリアが」

『分かった  
BAU』

「了解しましたマスター」

ヴェルフは索敵能力に特化したモンスターであり、スキル《嗅覚索敵》によって目に見えない様な相手であっても感知可能です。その分戦闘能力は亜竜級としてはやや低いですが、ワルキューレ最強のアリアが護衛につけば問題はないでしょう。

「次に中衛は私とターニャとエドワードさん、そしてその護衛をトリムとアーシーにお願いします」

「分かったよマスター」

『分かったー』

私は戦闘能力皆無ですし、ターニャとエドワードさんも基本は生産職だから護衛は必須です。壁役のトリムと各種地属性魔法によって防御に長けたアーシーを付けておけばいいでしょう。

「最後に後衛はセリカ、フィーネ、リーファ、セレナで。セリカとフィーネはいつも通り魔法で援護を、イブは主に後方の索敵を、セリカは光属性攻撃での援護の他にも後方からの奇襲に対して壁役になる事もあるかもしれないので気をつけてくださいね」

「分かりました、回復はお任せを」

「……………分かった。鉱山内だと酸素の関係で火属性は使いにくいから、【ヘイルマンサー白氷術師】の氷属性魔法をメインで使うよ」

「分かったっす。……………自分はまだ生まれただでレベルは低いっすけど頑張るっす」

「分かったわ。人化しているとステータスは少し下がるけど、まあ時間稼ぎぐらいはするわ」

セリカとフィーネの後方支援能力は問題無いですし、セレナは純竜なので人化していても短時間なら十分壁役が熟せるのでまだレベルの低いイブのフォローも大丈夫でしょう。

「ターニャ達もそれでいいですね？」

「それでいいよ。……………流石は討伐ランカー、見事な采配だね……………っというか、私達は要らなかつたかな？」

「……………支援に徹すれば大丈夫だろう。……………多分」

二人共何か言っているみたいですが問題は無い様です。  
それでは、ヘイスティア鉱山」の探索を始めましょうか。



鉱山の探索を始めてからしばらく経ち、私達は鉱山の奥にまで足を踏み入れていた……中は暗く、一応灯りもあつたが念のためセレナに光の球体を出してもらつて光源にしてあります。

ちなみに道中モンスターは殆ど出てこなくて、僅かに出てきたモンスターもすぐさまアリアが一刀両断したり、フィーネやアーシーの魔法一発で倒せるレベルの相手でしたが。

「今のところ特に異常はありませんね」

「ああ、今まで出てきたモンスターは元々この鉱山に生息していたものばかりだからな」

「いくらティアンの鉱夫でもこの程度のモンスターにやられる事は無いでしょう」

アリアの言う通り、モンスターが蔓延るこの世界において街の外で活動するにはある程度の戦闘能力は必須であり、このレベルのモンスターならティアン鉱夫でも問題なく対処出来るでしょうし。

また、これまでの道中、リーファは【盗賊】<sup>バンディット</sup>の《索敵》スキル、セリカは敵がアンデットの可能性を考慮して《邪気感知》、フィーネが《魔力感知》、アーシーは土中を索敵する魔法《グランドソナー》、ヴェルフは《嗅覚索敵》でそれぞれ周辺を探っていたのですが今のところ特に反応は無い様です。

「……………それでは先に「待って」「何かあるよー」……………おや？」

「どうしましたフィーネ、アーシー？」

「……………僅かだけど鉱石以外の魔力の反応がある《魔力視》《術式解析》」

『この辺りの鉱石に変な魔法がかかっているよー』

「……………どうやら二人は何か見つけた様ですね。」

「どんな魔法ですか？」

「……………多分感知系の魔法かな？」

『正確には一定の範囲に入って対象を感知する結界みたいー』

……………成る程、ティアンの鉱夫達が次々と襲われているのは、その結界で感知された事が原因ですか。

「……………あと、私達も多分もう感知されてる」

『主人！敵が来ます！  
BAU！ BAU！』

「全員戦闘準備！ 前方から敵です！」

そのフィーネとヴェルフの言葉を聞き、私はみんなに敵の襲撃を知らせました……………次の瞬間、前方の何も無いところから水流がこちらに向けて発射された。

「チツ！」

『BAU！』

「《カバーリング》！」

その攻撃に対し前衛のエリアとヴェルフは飛びのいて回避して、トリムが【守護者】ガーディアンのスキルを使って前に出て手に持ったタワーシールドで水流を防いだ……………が。

「ぐわっ!??!」

『BAU!??!』

次の瞬間、回避した二人は見えな~~い~~何かに殴られた様に吹き飛んだ。

「アーシーあれは!??!」

『見えない結界ー』

「不可視の結界を飛ばして相手を殴りつけてる！」

アーシーとフィーネの言葉で状況を理解したので私はタイムモンスターに次の指示を出して、更にワルキューレ達には時間節約の為に心の中で指示を出していきます。

……………まずは攻撃を防ぎつつ敵の位置を割り出しましょうか。

「セレナは前衛に上がって！ アーシーは敵の位置を教えてください！」

(トリムとエリアは防御、フィーネは敵の位置を教えて、セリカは前衛を回復、リーファは中衛に上がって後衛のガード)

「了解！」

「承知！」

「承知したわ。……あと、前方に光が歪んでいるところがあるわね」

「……多分前方、そう離れていない位置」

『隠密系の結界を張ってるー』

『《ワイド・フォースヒール》！』

「分かったつす！」

私の指示に従いトリムとセレナが前に出て水流や不可視の結界を  
防いでいき、更にダメージから復帰したアリアもそれに加わった  
……それによって負ったダメージはセリカが全体回復魔法で癒  
していく。

……どうやら、アーシー、セレナ、フィーネの情報によると前  
方に不可視の結界を纏って見えなくなっている何かがあるみたいだ  
ね……それなら！

「アーシー、砂を！」

(フィーネは大量の細かい氷の粒)

「……《ダイヤモンド・ダスト》！」

『《サンド・バインド》ー』

その指示に従いアーシーは砂で出来た手の様なものを魔法で作り  
出して前に放ち、フィーネは細かい氷の粒を無数に生成し前方にばら  
撒いた。

その結果、大量の砂と氷の粒が前の空間一帯に撒き散らされ  
……その一角にそれらの粒が無い直径一メートル程の空間が浮  
き出された。

(そこです！ アリア！)

『《レーザーブレード》！』

『！ KYUAAA!?!?』

その空間に向けてアリアが突っ込み光を纏った剣を一閃した  
……すると、そこに張られていた結界が砕け散りその中から体長  
50センチぐらいの青いネズミの様なモンスターが飛び出した。

「……【バリア・サファイアカーバンクル】ですか」

「疾っ！」

『GAU!』

『KYU!?!?』

出てきた【バリア・サファイアカーバンクル】に対しアリアが追撃の剣を振るい、それに合わせてヴェルフが飛び掛かっていった……それに対して相手はアリアの剣を飛び退いて躲し、そこに突っ込んできたヴェルフを咄嗟に展開した結界で弾いて少しよろけながらも距離を取った。

……しかし妙ですね、カーバンクル系の魔物はこの鉱山には住めない筈ですが……?

「皆さん、ちよつと気になる事があるので捕縛優先の戦い方に切り替えて下さい。……《魔物診断》」

『分かったー《マッドクラップ》ー』

「了解……《アイスバインド》」

その指示に従ってアーシーは泥で相手の足を止めて、フィーネは氷で出来た鎖を放つて相手を拘束しようとし、他のみんなも相手を倒さない程度の攻撃に切り替えた……これでも私達はテイマーギルドのモンスター納品ジョブクエストの為に多くのモンスターをテイムしているのです、この手の戦い方にはみんな慣れてるんですよ。

そして、その間に私はサブジョブである【獣<sup>ビースト</sup> 医<sup>ドクター</sup>】のスキル《魔物診断》——モンスターの健康状態を看破するスキル——で【バリア・サファイアカーバンクル】の状態を確認した……やっぱり、栄養不足による衰弱がありますね。

「《フリーズフロア》」

『《グランドホールダー》ー』

『KYUAAA!?!?』

そんな事をしている間に前衛メンバーに追い詰められた【バリア・サファイアカーバンクル】がフィーネの地面を凍らせる魔法によって足を止められ、その隙にアーシーの魔法による土の腕で地面に押さえつけられました。

ちなみに周りには剣を構えているアリアを初めとして、前衛メンバーがいつでも戦闘出来る様に待機しているのでこれで詰みですね。

相手もそれが解っているのか抵抗をやめています……………さて、これから交渉を始めようと思うのであの子の側まで行きましょうか。

「では、その【バリア・サファイアカーバンクル】さん。私はあなたを見た時にピンときたのであなたをタイムしたいと思うのですが……………ここでこのまま倒されると、私の従魔になるとどちらがいいですか？」

『KYUUUUuu……………!』

そんな感じで私は笑顔で相手に交渉を持ちかけます……………相手は少し悩んでいる様ですが、このままでは自分に未来が無い事は分かっているでしょうし、こちらに転ぶでしょう。

……………しかし、あまり恐怖を植え付け過ぎても今後に支障が出るので少し飴を与えましょうか。

「私の仲間になってくれるのなら、この【アクエリア水晶】をプレゼントしますよ」

『!……………KYUU!』

「仲間になってくれれば今後も食事に困る事はないですよ」

私がアイテムボックスから取り出したその水晶を見た相手は目を輝かせました……………カーバンクル系統のモンスターは質の高い鉱石を主食としており、この鉱山にある様な低質な鉱石ばかり食べていると体調を崩してしまう繊細なモンスターですからね。

なので、おそらく長時間この質の低い鉱石ばかり食べていたこの子の目には、この水晶はご馳走に見える事でしょう……………ちなみにこの【アクエリア水晶】はアーシーのご飯として持っていた物の一つであり、更に水属性を宿しているので同じ属性のこの子が好きそうだと思います。

『……………KYUU!』

「分かりました。では交渉成立と言う事で……………《テ従属契約ム》」

どうやら相手も了承してくれた様なのでタイムしましょう……………よし! タイム成功ですね。

……………では、約束通り【アクエリア水晶】をプレゼントしましょう。



『KYUKYUKYU!』

「よく食べていますね。……………では、あなたの名前は“ファイア”にしましょう。これからよろしくお願いしますね」

『KYUI!』

これで「バリア・サファイアカーバンクル」、改めサファイアが仲間になりました。みんなも仲良くしてあげて下さいね。

……………とりあえず、サファイアが仲間になった事をターニャとエドワードさんに伝えましょうか。

「さて、この子が交渉の結果仲間になったサファイアです。今回のクエストの目的は『ヘイスティア鉱山』の問題解決』なので、これで達成です」

「あ、ああ……………そうだな」

「……………交渉？ 脅迫じゃなくて？」

「モンスターのテイクは大体こんな感じですよ」

なんか二人がやや引いている気がしますが、テイクするには基本的にこちらの實力を見せて、テイマーの事を使えるに値する主人であると認めさせる必要がありますからね……………傷ついたモンスターを助けてそのままテイクする事もなくはないですが、そんなシチュエーションは早々ありませんし。

「……………まあ、事件を解決出来たのだからこれでいいだろう」

「そうだねー。……………しっかし、今回私達はかけらも役に立って無かったね。やっぱランカーの戦闘にはついて行けないや」

「二人共、生産職だから仕方がないと思いますよ。……………さて、クエストも終わりましたし帰りましょうか」

こうして私達はヘイスティア鉱山を後にしたのだった……………私としてはクエストを達成出来て、更に新しい仲間も増えたので実にいい一日でしたね。

……………そういえば、そろそろ公式のハロウィンイベントがあるみたいですし、少し王都を離れてみるのもいいかもしれませんね。王都の北東にあるクレールミルにでも行ってみましょうか。

## ハロウィンイベント：前編

□城塞都市クレールミル 【戦棍姫】 ミカ

「さて、そういう訳でハロウィンイベントの幕開けです！」

「なのです！」

「ハイハイ」

『元気だね』

あれからクレールミルで資金稼ぎをしていた私達は、ひとまずはそれを中止して始まったハロウィンイベントに参加する事にしたのだ。

ちなみに今回のハロウィンイベントは期間中にポップするイベントモンスターと倒して、ドロップしたアイテム（お菓子型らしい）を集めるのが主な目的になるみたい。そして、それらのアイテムはイベント終了後にさまざまな景品と交換出来るらしい。

また、高レベルのイベントボスモンスターや数は少ないがイベント限定の ユニーク・ボス・モンスター B M も配置されているらしく、そちらを狙うヘマスタールも結構いるみたい。

！……………そして、今回はもう一人パーティーメンバーが居るんだよ

「そういう訳で頑張ろうね！ エルザちゃん！」

「はい！ 頑張りますよう！」

「よろしくお願いします」

そう、今回のイベントはフレンドのエルザちゃんも一緒に参加する事になったのです！

エルザちゃんがクレールミルに来ていた時にたまたま狩りをしていた私と再会して、せっかくだから一緒にイベントに参加しようって話になったんだよね。

……………ちなみに、今こそエルザちゃんの側に居るのはアリアさんだけだけど、他の「ワルキューレ」新メンバーや彼女の新しいティムモンスター達とは既に顔合わせ済みだよ。

「しかし、エルザちゃんが討伐ランカーになってたとはね。初めて会った時と比べると見違えたよ」

「そんな、大した事はないですよ。……………みんなが倒したモンスター殫どが私の討伐カウントになってお陰で、ランキングの端の方に引っかかっているだけです」

「そこまで謙遜する事はないだろう。それに、俺達だって討伐ランキングには入っていないからな」

「そんなモンスターを仲間に行っている事自体が凄い事だと思うのです」

「そうなんだよ、しばらく会わないうちにエルザちゃんが物凄く強くなっているんだよねー。」

……………なにせ、亜竜級モンスター三体と純竜級モンスター二体を仲間に行っていて、更に「ワルキューレ」達も全員高級な装備を身につけてかなり強そうだったし。

そもそも、討伐ランキングに載っている（マスター）だって、他に私達が知っているのはシュウさんか月影さんぐらいだし……………下手するとエルザちゃん達だけで私達三人よりも強いかもしれないね。

……………そんな風に言うと、アリアさんがドヤ顔をしていた。

「ええー！ そうでしょうとも!! マスターは既にこのアルター王国においてトップクラスのテイマーと言って差し支えないでしょう！」

「アリア、あんまり大きな声で言わないで……。それを言うなら、ミカさんやレントさんも王国ではかなりの有名人でしょう？ 『アルター王国の各地で（UBM）などの強力なモンスターを次々と倒している三兄妹がいる』って話は結構聞きますよ」

「ふーん、私達ってそんなに噂になってるのか。……………知らなかったよ」

「俺達は基本的に身内でデンドロをプレイしているから、そういう噂には疎いしな。……………だが、ちゃんと俺達が兄妹だと伝わっているのは助かるな」

「これで勘違いする人も減りますね」

まあ、私達は主に私の直感の所為でいくつものトラブルに首を突っ込んでいるからね、そりゃあ噂ぐらいにはなるかな。

「……………だから、先日のPKさん達も私達を狙って来たのかなあ。  
「それにお二人には『二つ名』とかもつけられていますよ。……………レ  
ントさんは『万能者』や『戦科百般』、ミカさんには『撲殺姫』と  
か」

「ちよつと待って、厨二つぽいお兄ちゃんの方はともかく私の二つ名  
が凄い物騒なんだけど」

「オイコラ、誰が厨二だ、誰が」

私のメインジョブは【戦棍姫】であって撲殺姫じゃないよ！

「うぐぐ……………何故、そんな二つ名に……………」

「確かターニヤが言ってましたが、『笑みを浮かべながら純竜級モンス  
ターや襲いかかって来たPKを巨大なメイスで撲殺しているところ』  
などから付けられた二つ名みたいです。……………私と再会した時も  
純竜級モンスターを一撃で粉碎していました……………」

「後、ミカ殿は今現在〈マスター〉の中でも殆どいない<sup>スベリオルジョブ</sup>超級職ですか  
らね。『姫』はその辺りから取られたとか」

「成る程、ぴつたりな二つ名だな（笑）」

ぐぬぬ……………おによれ、お兄ちゃんめ……………。自分も厨二臭い二つ  
名のくせに……………。

……………確かに私は純竜級モンスターを一撃で粉碎したり、偶に襲  
い掛かって来たPK〈マスター〉を返り討ちにしたりしているけど  
さあ……………。

「こうなったら、もっと良い二つ名を考えて広めて……………」

「やめとけ。……………自分で考えた二つ名なんてどんなモノでも痛す  
ぎるだろ」

ウグウ！ 元厨二病のお兄ちゃんが言うと言説力が違うね……………。

「二つ名というのは、他人から言われるからこそ意味のあるものでは  
からね。自分で言っても間抜けなだけなのです」

「だよね……………。やっぱり、他人が話す噂はスルーするしかないか  
……………」

「それが妥当だろうな。直接の実害がない限りはそうするべきだろ  
う」

まあ、気にしてもしょうがない話だしね……あ、そうだ。

「そういえば、エルザちゃんにも何か二つ名があるの？ ランカーだし」

「えー！ えーつと、それは……「はい！ マスターには我ら「ワルキューレ」や何体もの上級モンスターを従える姿から「神軍女帝」の二つ名がありますね！」ちよつと！ アリア!?？」

私がそんな質問をすると、やや顔を引きつらせたエルザちゃんに変わって、アリアさんがもの凄いドヤ顔で答えてくれた……チツ、普通にカツコいい二つ名だったね。

「と、とりあえずこの話はここまでにして、早くハロウィンイベントを始めましょう！」

「……………まあ、そうだな。早く行かないとモンスターが狩り尽くされるかもしれないし」

やや顔を赤らめたエルザちゃんが急かしてきたので、ひとまずこの話は終わりにしてイベントを始める事にしようか……これ以上、二つ名の話をしても疲れるだけだしね。

そういう訳で、私達はクレールミルの城門から外に出たところで移動の準備を始める事にした。

「とりあえず、俺達は空を飛んで人の居ない場所でモンスターを狩る感じで行こうか」

「そうだね。……………主な狩場にはイベントモンスターと「マスター」がひしめいているみたいだし」

私達がこのイベントで有利なところは空中を移動できて行動範囲が非常に広い事だからね、その辺りを有効活用すれば結構モンスターを狩れるんじゃないかな。

「それじゃあ、私はエルザちゃんに相乗りしたいんだけど、いいかな？

お兄ちゃんの「マグネトロベ」は二人しか乗れないし」

「はい、構いませんよ。私のセレナは最大三人は乗れますし」

「では、私は兄様と一緒に行くのです」

「ああ、分かった」

と、そんな感じでさっさと準備を整えていく……………前半のグダグ

ダがウソみたいにサクサク話が進んでいくね。

……そして、私とエルザちゃんと「ワルキューレ」四女のフィーネちゃんが「シャイン・ドラゴン」のセレナちゃんに乗り、お兄ちゃんとミュウちゃんとフェイちゃんが「マグネトローベ」に騎乗して、更にエルザちゃんが空戦可能なウオズとアーシーを「ジュエル」から呼び出して準備は完了した。

「それじゃ、ハロウィンイベントに出発しようか」

「はいー」

そのお兄ちゃん言葉と共に、私達は空へと舞い上がった……：……ちなみに、空から見るとクレールミル周辺の主だった狩場は「マスター」が大量に居てとても狩りが出来る様じゃなかったの、私達は少し離れた人の居なさそうなところは行く事にした。



それからしばらく空を飛んで、周りがやや薄暗くなった頃に私達はクレールミル西側にある山岳地帯に足を踏み入れていた（ちなみにハロウィンイベントでは夜の方がイベントモンスターが出やすくなっている）。

ここはクレールミルから結構離れていて道中の地形も入り組んでいるから人は殆ど居らず、生息しているモンスターのレベルもそれなりだから、私達が狩りをするのにちょうどいい場所だと思っただんだ。

そして、私はお兄ちゃんとチームを組んでイベントモンスターと絶賛戦闘中である……：……最初は纏まって戦ってたんだけど、私達の誰かが瞬時にモンスターを倒してしまい他の人が暇になってしまおうので、三チームぐらに別れて行動した方が良いという話になったんだよ。

「《スマッシュメイス》！ 《竜尾剣》！」

『KYAAA!?!?』

「《魔法多重発動》《ホーリー・ジャベリン》！」

『……』

私は目の前にいるカボチャの頭にボロボロの黒いローブを着て、手に鎌を持って宙を舞う二体の「ジャック・オー・ランタン」というモンスターを殴り飛ばし、もう一体を背中の剣尾を射出して斬り裂いた。

その上空では「マグネトローベ」を駆るお兄ちゃんが、何匹かの「ウィル・オ・ウィスプ」という人魂型のモンスターが放つ青色の炎を回避しつつ、複数の聖属性魔法の槍を放ってそれらを貫き消滅させている。

………そうしている間にも上空にはオレンジ色で頭部がカボチャの飛竜——「パンプキン・ワイバーン」が三体、地上にはハロウィンっぽい派手な仮装をした骸骨達——「ハロウィン・スケルトン」が各種様々な武器を持ってこちらに近づいて来た。

「しかし、このイベントモンスター達はステータスは高くないけど面倒だね」

「そうだな。………なにせ、迂闊に攻撃に当たる訳にはいかないしな。《魔法多重発動》《ヒート・ジャベリン》！」

そんな会話をしつつ、お兄ちゃんは大量展開した炎の槍を「パンプキン・ワイバーン」達に打ち込み、私は弓持ちの「ハロウィン・スケルトン」が射って来る矢を躲しながら敵に突っ込んでいった。

「とりあえず吹き飛ばす！ 《テンペスト・ストライク》！」

『……』

その暴風を纏った「ギガス」の一撃が、前衛の近接武器を持っていた五体程の「ハロウィン・スケルトン」達をバラバラにして、ついでに後方から放たれる矢も吹き飛ばした。

そして敵中に突っ込んだ私は、そのまま背中の《竜尾剣》を伸ばして遠距離武器持ちのスケルトン達を引き裂いていった。

『『GYAAAAA!』』

「おっと！ 《魔法多重発動》《ボルテクス・ジャベリン》！」

………一方上空では「マグネトローベ」に乗ったお兄ちゃんが三体のワイバーンが吐く火炎を躲しながら、反撃に渦を巻いた水の槍を

五本程放って相手の身体を貫いていつていた。

そして、放たれた水の槍の内一本は一体のワイバーンの頭部を挟り、その身を光の塵へと変えた。

「さて、あと二体……上がってくれ《瞬間装備》《ハンティング・スナイプ》！」

『GYAAA!?』

更に武器を弓に変えたお兄ちゃんは「マグネトロベ」を上を走らせて二体のワイバーンの高所を取ると、そのまま身を乗り出しながら下に矢を放ち翼を挟られて動きの鈍ったワイバーンの頭部を撃ち抜き撃破した。

……だが、最後に残った一番ダメージの少ないワイバーンが勢いよく上昇してお兄ちゃんに突撃をかけて来た。

『GYAAAAA!!』

「《クイツクアロー》！」

その突撃して来たワイバーンにお兄ちゃんは迎撃の矢を放つものの、まだ慣れない馬上で放ったからかその矢は相手を射抜く事は出来なかった。

……そして矢を回避したワイバーンはその牙でお兄ちゃんを噛み砕こうとし……。

「《磁蹄》解除。《ハンティング・エッジ》」

『GYAAA!?』

その攻撃は直前に足場を消して落ちていったお兄ちゃんのすぐ上の空を切り、すぐさまお兄ちゃんは腰から短剣を逆手に持って引き抜き、攻撃を外した所為でガラ空きになった喉を切り裂いて最後のワイバーンを仕留めた。

「ふう……おっと、どうも攻撃が掠っていたみたいだな。……それに例のスキルの効果で【呪詛】がかかっているし……《デイスベル・カース》」

「おつかれ、お兄ちゃん。……それじゃイベントアイテムを回収しようか」

そんな感じで周囲の敵を全滅させた私は、イベントモンスターの共



通スキルの所為で運悪く掛かってしまった呪いを解除して降りてきたお兄ちゃんと一緒に、戦闘によって地面に散らばったイベントアイテムを拾い集めていったのだった。

◇◇◇

□クレール領内 グレイト・ライダー【大騎兵】レント

先程の戦闘が終わってから俺とミカは地上で落ちているイベントアイテムを拾い集めていた……しかし、先程の戦闘では魔法は兎も角として空中で騎乗しながらの射撃がイマイチだったな。

一応、先日転職条件を満たした【大騎兵】に就いたお陰で大分騎乗能力は上がったんだが、やはりもう少し練習が必要だな。それに騎乗時の近接戦闘ではリーチの無い短剣はかなり使い難い事は分かったし………槍でも使ってみるかな？

………と、そんな事を考えているうちに落ちたアイテムは全て拾い終わっていた。

「……さて、これで拾い終わったね。……ドロップは【ハロウィンキャンデー】と【ハロウィンクッキー】ね」

「こっちは【ハロウィンマッシュマロ】と【ハロウィンビスケット】がいくつかだな」

これらのお菓子（ちゃんと食べられるらしい）が今回集めるイベントアイテムである………ちなみに、他にも【ハロウィンチョコレート】や【ハロウィンケーキ】などいくつかの種類があり、物によってポイントが変わるらしい。

「しかし、今回のイベントモンスターの共通スキルは面倒だな、掠っただけでアウトとは」

「確かに面倒くさいよね……ランダム状態異常のスキルは」

今回のイベントモンスター達は《トリック・オア・トリート》という『ダメージを与えた相手にそれぞれ五割の確率でHPを一割回復させるか、何らかの状態異常をランダムで一つ与える』効果のパッシブスキルを持っている。

……………その効果は攻撃を掠ったりするだけでも発動する為、更にランダム性があるからかレジストも非常に困難な非常に面倒なスキルになっているのだ。

「対処するには攻撃を躲すしか無いってのは厄介だよなー。掛かった状態異常によつては大分面倒な事になるし」

「確かにな。状態異常の種類も多岐にわたるからアイテムでの回復は難しく、回復役が居ないとキツイだろうしな。……………まあ、状態異常の強度自体は低いから、最低レベルの回復魔法やアイテムでもどうにかなるのは救いだが」

ちなみに俺達は三つのチームに別れる際に、このスキル対策として回復役(俺、フェイ、「ワルキューレ」次女のセリカ)をそれぞれのチームに入れてる。

……………というか、「トリックオアトリート」ってそういう意味じゃない様な気がするが…………。

「ああ、もしかして状態異常の効果が低いのはトリツクいたずらに掛けるのかな？」

「かもしれない。……………と言っても、戦闘中に動きが僅かでも鈍るのは結構致命的なんだがな。まあ、ある程度なら自分で判断して動いてくれる【マグネトローベ】に騎乗していればそこまで問題にはならないが」

と言いながら、側に立っている【マグネトローベ】の背を撫でてみる……………どうも、この【マグネトローベ】には自分の意思がある様でただ俺の指示通りに動くのではなく、その指示された内容から今の状況にあった動きをしている様なのだ。

また、一緒に戦っているうちにその判断力は少しずつ上がっている様に感じるので、おそらくは学習機能もあると考えられる。

……………という話をミカにもしておいた。

「ふーん、じゃあ【マグネトローベ】の子には自分の意思があるんだね。……………〈U BM〉だった時は凄く〈マスター〉を敵視していたり、三人がかりでボコボコにしたりしたけど大丈夫かな？」

「……………多分、大丈夫だと思うが。……………というか、お前の直感で

も危険はないんだろ？」

「まあそうなんだけど。……………今のところ、この子からは危険は感じないよ」

「なら大丈夫だろう。一応、今まで乗って来た時にも特に悪意は感じなかったしな」

でも、一応ご機嫌とかも取っておいた方がいいか？ とりあえず、後で金属製品を手入れ出来るアイテムとかを買っておくか…………。

……………と、そんな事を考えていると「テレパシーカフス」にミュウちゃんからの連絡が届いた。

『あ、兄様？ ……どうもエルザさんがイベントボスモンスターと遭遇したらしく援護が欲しいそうなのです。私もこれから直ぐに向かうので兄様達も来てくれます？』

「ああ、分かった。すぐに向かうよ」

「オツケー！ 直ぐ行くね」

そう言ってミュウちゃんとの連絡は途切れた……………まあ、そこまです焦ってはいなかったから緊急という訳では無いみたいだし、今のエルザちゃんがへUMBへじゃないボスモンスターにあっさりやられるとは思えないしな。

……………とは言え、万が一もあるしなるべく急ぐべきだと考えた俺は、直ぐに「マグネトローベ」に乗った。そして、話を聞いていたミカも俺の後ろに飛び乗った。

「聞いたなミカ、それじゃあ行くぞ。《ライディング・アクセラレイション》」

そうして「マグネトローベ」の手綱を握った俺は、とりあえず【大騎兵】の騎乗しているモノのAGIを上昇させるアクティブスキルを使った上ですぐさま上空へと舞い上がり、全速力でエルザちゃん達が狩り場に行っている方向へと駆けて行った。

## ハロウインイベント：中編

□クレール領内 マジック・ボクサー【魔拳士】ミユウ

現在行われているハロウインイベントのモンスターを倒すためにクレール領内の外れに来た私達は、纏まって行動していると狩りの効率が悪いと言う事で三チームに分かれて行動することになり、私はエルザさんの「シャイン・ドラゴン」のセレナさんと、彼女のヘンブリオの一人であるリーファさんと一緒にチームを組む事になったのです。

そして、今は全長十メートル程の竜形態になったセレナさんが上空にいる「パンプキン・ワイバーン」の群れを足止めしている間に、他のメンバーで地上にいるイベントモンスターを狩っているのです。

「《アローレイン》！」

『『GYAAA!?』』

まず、前方にいる派手な仮装している武装した五体のゴブリン——「ハロウイン・ゴブリン」の群れに対しリーファさんが矢を上空に放つと、その矢が数十本に分裂してゴブリンの群れに降り注ぐ。

その矢によってダメージを受けたゴブリンは奇声をあげながら体勢を崩したので、私はその隙に《アクセルステップ》——数歩だけAGIを倍にするスキル——を使って奴等に接近しました。

「《ライトニング・ストレート》！」

『GYAAA!?』』

接近した私は、まず先頭にいた剣を持つゴブリンに《ライトニング・ストレート》——雷を纏った正拳突きを放つフィスト・マスタ【拳 聖】のスキル——を叩き込み、その身体を光の塵へと変えました……………ふむ、新しく就いた【魔拳士】で取得した【魔拳】——属性を纏った拳撃の威力を上昇させるパッシブスキル——のお陰か威力が上がっていますね。

……………とはいえ、その間に体勢を立て直した槍と斧を持った二体のゴブリンが、それぞれ左右から襲い掛かって来ました。

「疾ッ！ せいっ！」

『GUッ！ GYAAA!』』

なので、私はまず左から襲い掛かって来たゴブリンの槍を躲しながら《サイドステップ》——AGIを倍にして一步だけ横方向に移動するスキル——を使ってその間合いの内側に潜り込み、そのまま《肘打ち》を当てて怯ませたところに《ハイキック》の回し蹴りを相手の首に当てて頸骨を砕きました。

……ちなみに、最近漸くコツを掴んで来たので簡単な格闘系アクトイブスキルなら、技名を言わずに使う事が出来る様になったのです。

『《ヒート・ブラスター》！』

『GYAAA!?!?』

そして右から襲い掛かって来た斧持ちのゴブリンも、後方に居たフェイが放った熱線により消し飛ばされました。

……後は、後方にいる弓とメイスを持った二体のゴブリンですが……。

『《スナイプ・ショット》！』

『GYU!?!?』

弓を持った方はリーファさんが矢で眉間を撃ち抜いて倒しましたので、残りはメイスを持ったヤツ一匹だけになりました。

『GUGYAAA!!』

何と、その最後に残ったゴブリンはメイスに業火を纏わせてこちらに突っ込んで来ました……って、あれは姉様も使っているメイス・オーガインフェルノ・ストライク【戦棍鬼】の奥義ですね。あんなモノまで使えるのですか。

……そして、その豪炎を纏ったメイスが私に振り下ろされ……。

『《フロントム・ステップ》……《ハートブレイク》』

『GYA………~~⊠~~』

私がスキルを使って作った残像を霧散させるだけに終わりました……生憎とそれはもう何度も見ている技なので、姉様よりも遙かに劣るステータスしか無い相手が使った所で見切るのは容易いのです。

そのまま、私は間合いを詰めて《ハートブレイク》——心臓部分を

殴る事で相手を一定確率で即死させる【拳聖】のスキル——をゴブリンの胸に当てて、その息の根を止めました。

「……さて、これで地上の敵は片付きましたね」

「そうっすね。後は『GYAAAAA!?!?』うえっ!?!?」

地上の敵を片付けた私達の元に空から大ダメージを受けた一体の【パンピング・ワイバーン】が勢いよく落ちて来て、そのまま光の塵になりました。

「………とりあえず上空を見てみると、そこでは三体程のボロボロなワイバーンを白い竜の姿をしたセレナさんが一方的に叩きのめしていました。」

『遅い!・《レーザークロウ》! 《レーザーバイト》!』

『GYEAAAAA!』

まず、ワイバーンよりも遥かに速い速度で接近したセレナさんが光を纏った前脚の爪でその一体を引き裂き、更にもう一体を光輝く牙で噛み砕きました。

「………それを見た最後の一体は慌てて逃げようと思いますが……。」

『逃すわけじゃないでしょう? ……落ちなさい!』

『GAッ!?!? ……GUGYAAA!?!?』

セレナさんにはあっさりと追いつかれて首根っこを掴まれ、そのまま地面に叩きつけられて光の塵となったのでした………流石は光属性の純竜ですね、ワイバーン程度では相手なりませんか。

「………そのまま地上に降りたセレナさんは人型に変化してこちらに向かつて来ました。」

「ふう、あたりが暗いと《閃光集束》が使えない所為で、肉弾戦主体でやるしかないから時間がかかるわね。………そっちは片付いたかしら」

「ええ、地上の敵は全員倒したのです」

「とりあえず、辺りに敵の気配はないっすよ」

「そんな感じで、お互いの状況を確認し合います………これまで何度も一緒に戦ったお陰で、彼女達とは結構仲良くなれたのです。」

『それでダメージや状態異常を負った人はいるかい?』

「大丈夫ですよフェイ。攻撃は全て躲しましたから」

「当然問題無いわよ。あの程度の竜擬きに手傷を負う筈は無いわ」

「アタシは遠距離から撃っていただけなので大丈夫です」

皆さん特にダメージは負っていないようですね……………今回はイベントモンスタートリック・オブ・アートのスキルトリック・オブ・アートの所為でダメージを負うごとに状態異常になりますからね、回復が色々と面倒なのです。

……………全員問題無いとなったので、敵がドロップしたイベントアイテムを回収していきます。

「ふう、これで全部です。……………しかし、ミュウさん凄く強いっすね！ これまで攻撃に全く当たっていないし！」

「大した事は無いのです。……………それに、あの程度の相手の攻撃を全て躲すぐらいなら兄様や姉様でも出来るのです」

「うちのマスターもそうだけど、人間って謙遜が好きなのかしら？」

……………私の視点だと、全員そこらの人間より圧倒的に優れていると思うのだけだぞ」

……………そんな風にお喋りしていると、突如リーファさんが何かに気付いた様に顔を上げました。

「えっ！ ……分かったっす！ ……皆さん、どうやらウチのマスター達がイベントボスマンスターと遭遇して現在戦闘中みたいっす！」

ユニーク・ボス・モンスター

「U B M」ですか？」

「いえ！ 普通のボスマンスターみたいっす！」

「分かりました、直ぐに向かいましょう。…………一応、兄様にも連絡しておきましょうか」

私は「テレパシーカフス」を使って兄様に手早く事情を説明して、援軍に来てくれる様に伝えておきました。

……………その間にセレナさんは竜形態に戻っていたので、リーファさんと一緒に急いでその背に飛び乗ります。

『それじゃあ、急いで飛んで行くからしっかりと捕まってなさい！』

「はいなのです！」

そして、私達を乗せたセレナさんは全速力でエルザさん達の元へ飛

んで行ったのでした。

◇

数分程全力飛行を行うと前方数十メートル先に巨大な影が見えてきたので、セレナさんは空中にホバリングを行う事で一旦停止しました……よく見ると、その影はドラゴンの様な形をしており地上に向けて炎を吐いている様でした。

そして、地上からも魔法などによる攻撃が行われているみたいで

「見えて来たっす！ アイツは……【グレーター・パンプキンドラゴン】と言うらしいっす！」

「……確かに頭部はカボチャですね。【パンプキン・ワイバーン】の上位種でしょうか」

そいつはカボチャの様な頭部を持つ全身オレンジ色をした体長三十メートル程のドラゴン——【グレーター・パンプキンドラゴン】という名前のボスモンスターの様です。

そしてソイツは地上に向けて口から炎を吐いたり、更に闇属性っぽい黒い弾丸で放ったりしている様です……地上に居るらしいエルザさん達は障壁や土の壁でそれらの攻撃を防いでいる様ですが、結構押されている様なのです。

「あっ！ マスターから連絡っす。……出来ればあのドラゴンの翼を攻撃して飛行能力を削いで欲しいって言ってるっす！」

「分かったのです。……フェイ、ここからでも必殺スキルの効果はエルザさん達に届きますね」

『ああ。パーティーを組んでいて僕達の知覚範囲内にいればね』

私達の必殺スキルはパーティー内の使役モンスターも効果範囲に含まれるので、多くの仲間がいるエルザさんとは相性がいいでしょう。「リーファさん、必殺スキルによる各種バフを掛けるのでエルザさんに伝えて下さい」

「分かったっす！」



『《我等が成るは光の使者》《靈環付与》《エコー・オブ・トウワイズ》！』  
そして、私は必殺スキルを使いつつ各種バフスキルを自分にかけていきます……………現在エルザさん達が押されているのはイベントモンスターのスキルによる状態異常を警戒して防御に回っているからでしょうし、私の魔法耐性と「ハデスルード」の《靈環付与》掛ければ形勢は変わるでしょう。

「セレナさん、このまま突っ込んでヤツに組みついて下さい。その隙に私が翼を破壊するのです」

『まあ、これだけ強化が掛かっていたらどうにかなるわね。…………行くわよ！ 掴まってなさい！』

「え？ ……えわあアアア？？」

その言葉を聞いて慌ててしがみついたりファさんを尻目に、セレナさんは全速力で「グレーター・パンプキンドラゴン」に突撃してその身体に組み付きました……………向こうの方が三倍ぐらい大きいですが、不意をついた事と必殺スキルによる強化が合わさって一時的に相手の動きを止める事に成功しました。

……………そして、私はその隙にセレナさんの背からヤツの背に飛び乗り、その揺れる身体に合わせて上手く立ち回りつつヤツの翼の付け根まで全速力で走って行きました。

『《ミラクル・ミキシング》ー《ヒート・ブラスター》イン《シャイニング・フィスト》』

「《真撃》《シャイニング・フィスト》！」

『！ GYAAA!?!?』

私はその付け根に向けてブレード状に纏わせた光熱のエネルギーを纏わせた手刀を叩き込み、その翼を根本から両断しました。

……………ちなみに《ミラクル・ミキシング》による魔法付与の形は融合させるスキル次第ではある程度ならフェイが制御する事が出来て、今回は熱線の魔法を光の手刀に合わせてブレード状に展開した形になるのです。

『GYAAAAAAAA!?!?』

「よつと」

そして、片翼を破壊されたヤツは飛行を維持出来なくなったのか悲鳴を上げながら地面に落ちて行ったので、すぐに私もそこから跳躍して距離を取りつつ地面に降りて行きました。

「えっ！ ちょー！ おわあー！」

『全く、捕まりなさい！』

……………急に落下した所為でリーファさんが空に投げ出される事もありましたが、セレナさんが上手くキヤッチしてくれたのです。

そして、そのまま私達は地上に無事着地してエルザさんと合流し、体勢を崩していたヤツはそのまま地面に勢いよく激突しました。

「大丈夫ですか、エルザさん」

「ええ、ミュウさんが掛けてくれたバフのお陰で殆どのダメージはありませんよ。……それから、ありがとうございます、お陰で助かりました」

「回復がかなり厳しかったですからね。本当に助かりましたミュウさん」

エルザさん達の無事を確認すると、彼女とセリカさんからそんな風に御礼を言われてしまいました……………少し照れますね。

……………さて、後は地面に落ちたヤツを倒せば……………！ 殺気！！？

「エルザさん！ 伏せてー！」

「え？」

『BAWU！』

『KYU！』

急に強い殺気を感じ取った私はすぐさまエルザさんに警告を発し、それとほぼ同時に何かに気付いたヴェルフが彼女を庇い、更に「サファイア・バリアカーバンクル」のサファイアが私達を丸ごと囲む防衛結界を展開しました。

……………その次の瞬間、その結界は何かには斬り裂かれる様に割れて消滅しました。

『《魔力視》！ 《ホーリー・ブレッシング》！』

「そこですか！」

フェイが《魔力視》を使うと目の前にうっすらとした影の様なモノ

が見えたので、私は即座に《ソニックフィスト》を使って前方に踏み込みその影を殴り飛ばしました。

………手応えはありますが、この感覚は《物理攻撃無効》を持つ霊体ですね。事前にフェイが霊体に対して物理攻撃を当てられる様になる効果を持つ《ホーリー・ブレッシング》を使ってくれて助かりました。

「一体何が!?？」

「どうやら新手の様ですね」

すると、目の前の影が徐々にその輪郭をはつきりとさせて行きました………そして現れたその姿はカボチャ頭に黒いボロ切れを着て、その手には禍々しいオーラを放つ大鎌が握られていました。

………姿形は【ジャック・オー・ランタン】に似ていますが、それよりも一回り程身体が大きく、発している殺気も比べ物になりません。

その考えを裏付ける様にソイツの頭上には【ジャック・デスサイズ・キラール】の文字が浮かんでいました。

「ボスマンスターがもう一体ですか!?？」

「その様です………ねっ！」

『――』

そうして姿を現した【デスサイズ】は驚いているこちらを無視して超音速機動で接近し、大上段に構えたその大鎌を私に振り下ろし………て来たので、私は即座にその大鎌の側面を叩く事で機動を逸らし空振りさせ、そのままカウンターの《ミドルキック》を叩き込んで横に吹き飛ばしました。

しかしヤツは自分の攻撃をあっさりといなされた事に警戒したのか、一旦こちらから距離を取って様子を見始めました。

………とりあえず、今の内にエルザさんと状況の確認をしておくのです。

「ふむ、能力も知性も【ジャック・オー・ランタン】とは比べ物になりませんね。……エルザさん、あの【デスサイズ】は私とフェイだけで相手をするのです」

「それは！……いえ、分かりました。……私達があちらを仕留めるまでお願いします」

私のその言葉にエルザさんは少し同様してみたみたいですが、すぐに現在の状況を飲み込んで「デスサイズ」とは逆の方向に向かいました。……当然そちらには……。

『GYAAAAAAAAA!!』

落下のダメージから回復して怒り狂った「グレーター・パンプキンドラゴン」がいました……。現在の状況はボスモンスター二体に挟まれているので、どうしても二手に別れないといけませんからね。

「【デスサイズ】はミュウちゃんに任せ、私達はあのドラゴンを倒す事に全力を尽くしますよ！……みんな！ アイツは二分で下します！」

「了解！」

そう言って、皆さんにはつきりとした指示を出したエルザさんは、仲間達と共にドラゴンとの戦闘に入りました。

……しかし、成る程……。

「まだ会って間もない私を信じて、完全に後ろを任せてくれましたのです。……いえ、だからこそエルザさんはあれだけ多くの仲間を得ることが出来たのでしょうね」

仲間に全幅の信頼を寄せて戦闘を任せるといのはなかなか難しい事ですが、彼女は当たり前前の様にそれをやっているのです。

……それに、信頼されるというのはとても嬉しいものですからね。

「さて、それでは私もその信頼に答えなければなりません……ねっ！」

『……』

……その直後、様子を見ていた【デスサイズ】が私を無視してエルザさん達のところまで行こうとしていたので、その進行方向に《アクセル・ステップ》を使って回り込み《ジャブ》と《ストレート》を叩き込んで迎撃します。

「……言っておきますが、私を倒さない限りはあちらには行けないですよっ！」

』

私のその言葉に触発されたのか、或いは私の方を脅威に感じたのか  
ヤツは大鎌を構えてこちらに向き直りました。

どうやら、あちらも戦闘を始めた様子………それでは、こち  
らも仕合いますようか。

## ハロウインイベント：後編

□クレール領内 【高位飼育者】 エルザ・ウインドベル

『GUGYAAAAA!!!』

さて、私達の目の前には片翼をもぎ取られ怒り狂った「グレーター・パンプキンドラゴン」が雄叫びをあげています……………もう一体のボスである「ジャック・デスサイズ・キラ」はミュウさんが相手をしてくれているので、出来るだけ素早く倒す必要がありますね。

「必殺スキルを使います！ チャージは十秒、アリアとウオズ、フィーネとアーシーで！ セレナは前衛、サフィアとアーシーは遠距離攻撃を防いで下さい、ウオズとは牽制、ヴェルフは私を乗せて回避！」

「了解！」

『《クリエイト・マッドゴーレム》』

『BAWU！』

私が指示を出すと共に、まずアーシーが全長十メートル程の泥製ゴーレムを作り上げて皆を守る壁にして、更に私の考えを読み取った「ワルクューレ」達が各々のポジションについていき、そしてヴェルフが私をその背中に乗せた……………【騎乗従魔師】の《騎乗安定》——騎乗時に自身にかかる振動や空気抵抗を軽減するパッシブスキル——のお陰で、私の貧弱なステータスでも振り下ろされる事はありません。

……………その直後に眼前のドラゴンがカボチャ頭の口から大威力の火炎を吐き出して来ました。

『《ファイア・レジスト》《ワイドガード》！』

『《アース・ウォール》』

『KYUUUU！』

『《セイクリッド・サンクチュアリ》！』

その火炎に対して、前に出ていたトリムが自身の炎熱耐性を上昇させた上で防御範囲を広げるスキルを使い、後ろにいる同じ前衛アリアとセレナを火炎から庇った。更にアーシーが召喚しておいた泥製ゴーレムに加えて複数の土の壁を展開し、サフィアも広域に耐火効果

を付与した結界を展開して他のメンバーを守った。そして、セリカが念のために全員に呪怨系や闇属性の攻撃を軽減する結界を掛けていく。

……………それに、今はミュウさんが強力なバフと持続回復を掛けてくれているので、防御していればこの程度の火炎では殆どダメージを負わず、更に《トリック・オア・トリート》による軽度の状態異常も即座に治ってしまうから楽でいいですね。

「《サンダー・スラッシュ》！」

『《レーザークロー》！』

『ウインドカッター K U E E E ! 』

「《アイス・ジャベリン》！」

『G Y A A A A A A A A A A ? ? 』

そして、攻撃直後で隙だらけの相手にアリアが雷を纏った剣で斬りつけ、セレナが光属性の爪撃をみまい、ウオズが風の刃を放ち、フィーネが複数の氷の槍を放ちました。

……………現在掛かっている強力なバフ効果もあつて、それらの攻撃は相手の鱗を容易く砕いて相手に大ダメージを与えて行きます。

とはいえ、相手もボスモンスターなのでそう簡単には仕留められず、全身に禍々しいオーラを纏った上で接近していたアリアとセレナを殴り飛ばし……………その二人の動きが不自然に停止しました。

「ぐうう！ ……これは!?？」

『チツ！ 【呪縛】を掛けられたわね！』

「アーシー、足止め！」

……………どうやら、あのオーラには接触した対象に強力な【呪縛】を掛ける能力がある様です。

なので、私は直ぐにアーシーに相手の動きを止める様に指示を出し、同時に心の中で【ワルキューレ】達に足止めと【呪縛】を直してもらおう指示を出しました……………それとほぼ同時に必殺スキルのチャージ時間が終了しましたが、今の状況では発動出来ないの一旦待機させておきます。

『《グラントホールダー》』

「《スナイプ・アロー》っす！」

まず、アーシーが地面から土の腕を複数召喚してヤツを捉えてつつ、残っていた泥製ゴーレムも纏わりつかせてその動きを鈍らせ、同時にリーファが命中精度重視の矢を放ちました……………が、その攻撃はヤツには大したダメージを与えられませんでした。

……………先程と比べるとダメージの入り方が悪いので、どうやらあのオーラは被ダメージ軽減の効果もある様ですね。

主、広域攻撃が来ます！  
『BAWUBAWU！』

「サファイア、広域防御！」

……………とか考えていると、私が乗っていたヴェルフが警告を出したので、慌ててサファイアとトリムに指示を飛ばします。

その直後、ヤツは空中に大量の黒い玉を作り出してこちらに撃ちだして来ました。

『GYAAAAA！』

「《サウザンド・シャッター》！」

『KYUUUU！』

その大量の黒い弾丸を前に出たトリムが障壁を作り出してその大部分を防ぎ、残りのうち後衛や動けないアリアとセリカに向かった攻撃をサファイアが展開した障壁が受け止めました……………何発かは私がいいた方に抜きましたが、ヴェルフが事前に離脱していたので問題無く回避出来ました。

……………最近ヴェルフは《霊視》という感知系スキルの効果を上昇させるパッシブスキルを覚えたので、相手がどんな攻撃をしてくるのかも何となく解る様になっているみたいなんですよね。

「《魔法多重発動》《ティスペル・カース》！」

「《アイス・バインド》！」

そしてセリカの呪魔法が二人の【呪縛】を解除し、フィーネの魔法による氷で出来た鎖がヤツを凍らせてその動きを止めました。

……………ここですね。

「《神軍騎行・合一戦姫》！ 融合した二人を主軸に全員反撃です！」

『『了解！』』』



アリアの呪いが解かれてヤツが攻撃直後のタイミングを見計らって私は必殺スキルを使い、アリアとウオズ、フィーネとアーシーをそれぞれ融合させて反撃を開始します。

……まず、ウオズと融合したアリアが背中の翼を使い、超音速機動でヤツに向かって飛翔しました。

「《テンペスト・エッジ》！ 《クインティブル・スラッシュ》！」

『GYAAAAAAAAA!?!?』

そのまま接近したアリアは手に持った剣に強力に風を纏わせた上で五連続の剣撃を放ち、ヤツの身体を斬り裂いて行きます……反撃にヤツも手足を振り回しますが、超音速で飛行するアリアには攻撃を掠らせる事も出来ていません。

……私はアリアにそのまま攻撃を続けてヤツの注意を引きつける様に指示を出し、その隙に他のメンバーに攻撃の準備を行わせます。

「アリア！ 離脱！」

「了解！」

「《ピアース・アロー》っす！」

『GYAAAAAAAAA!?!?』

そして攻撃の準備が終わったところでアリアを離脱させ、その援護の為にアーシーが防御貫通効果を持つ矢を放ち……ヤツの目にオーラを貫通して突き刺さりました。

……ふむ、目が潰された痛みでヤツが悶え苦しんでいますね。お陰で隙が出来たのでここで攻めましょう。

「……《クリムゾン・スフィア》！」

「……《ディバイン・クロス》！」

『GYAAAAAAAAA!?!?』

アーシーと融合したフィーネが大幅に増加したMPを使って巨大な炎弾をヤツに向けて放ち、その身体の三割程度を焼き尽くし片腕を【炭化】させました。

更にセリカが【高位祓魔師<sup>ハイ・エクソシスト</sup>】の奥義である聖属性の巨大な十字架を上空に召喚して、それをヤツの背中に突き刺します……あのスキ

ルには強力な浄化効果があるのでヤツの纏っていたオーラが大分薄らぎましたね。

………私はこのまま推し切れると思ひ、次の指示を出そうとしますが……。

『<sup>キ</sup>B A W U B A W U G A U ! 』

「ッ！ 全員突撃が来ます！」

『G U U G A A A A A A ! 』

その前にヴェルフが警告を発しながらその場を離脱したので、私は即座に全員に警告を放ち………その直後にヤツは残った翼を全力で飛ばたかせて拘束を破壊し、そのままこちらに突っ込んで来ました。

『K Y U U ! K Y U U U ! 』

「やらせない！ 《カバーリング》！ 《ギガンティック・デیفエンスー》！」

『G Y A A A A A A A A ! 』

その突撃に対してファイアが障壁を複数展開しますが、勢いを僅かに鈍らせる事しか出来ずに次々と障壁を砕かれて行きます………が、その僅かに稼げた時間を使ってトリムが大盾を構えてヤツの前に立ち塞がり、「<sup>シールド・ジャイアント</sup>盾 巨人」の《ギガンティック・デیفエンスー》——盾で巨大な相手の攻撃を防ぎ易くなるスキル——を使って突撃を受け止めました。

「グヌヌヌヌヌヌ！」

『G Y A A A A A A A A ! 』

トリムは辛うじて受け止めているもののヤツの突撃の威力を殺しきれず、そのまま後ろに地面を擦りながら下がって行き……。

『《シャイニング・バースト》！ 』

「《テンペスト・チャージ》！」

『G Y A A A A A A A A ! ? 』

その直後、後方からセレナが放った光のブレスでヤツの片翼に風穴を開けて、更に上空からアリアが全身に暴風を纏ってヤツの背中に突撃してその身体を地面に叩きつけました………それによりヤツの

突進は止まったので、その隙にトリムはなんとか離脱出来た様です。  
……………大ダメージを受けて身体がボロボロになっているヤツは、  
それでも立ち上がるとうとしますが……………。

「……………《ホワイト・フィールド》！」

『GYAAAAA?!? ………………』

トリムとアリアが離脱した直後にフィーネが極大の冷気を放つて  
ヤツを凍らせてしまいました。

……………そして、離脱したアリアが急旋回してヤツの首に接近し  
……………。

『《レーザー・ブレード》！』

『！』

光を纏う剣を振り下ろしてその首を切断しました。

……………その直後、ヤツの身体は光の塵となったのでどうやら倒せ  
たみたいですね。

「マスター！ 敵の討伐を完了しました！」

「分かりました！ ……では、急いでミュウさんの援護に向かいます  
よ！」

そうして私達は急いでミュウさんと「ジャック・デスサイズ・キ  
ラー」が戦っている方へと向かいました。

「ミュウさん！ 大丈夫で……………?!?」

『「！」』

……………そこで私達は、ミュウさんが攻撃を捌き損ねて敵の大鎌に  
貫かれそうになっている光景を目の当たりにしました。

◇◇◇

□クレール領内 マジック・ボクサー【魔拳士】ミュウ

さて、ノリで仕合うと言ってみましたが、今の私はデメリットや  
クールタイムの所為で《ミラクル・ミキシング》《シャイニング・フィ  
スト》《真撃》が使えないので、目の前に大鎌を構えている「ジャック・  
デスサイズ・キラー」を倒すには少々決定力が欠けているのです。

……………なので、基本的には時間稼ぎをするつもりなのですが……  
ん？

「ッ！」

そう考えた時に私は目の前のヤツに違和感を感じ、更に何も居ない右側から殺気を感じたので咄嗟に身を伏せました。

……………その直後、私の頭上で見えない何かが薙ぎ払われる様に空間が僅かに歪んでいるのが見えました。

『《魔法威力拡大》《ホーリーライト》！』

「シュー！」

『……………』

それとほぼ同時に、私と融合したフェイが事前に準備しておいた聖属性の光源を作る魔法を使うと、その光に照らされた様に殺気を感じた方向に何かの輪郭が浮かび上がりました。

そして、私は屈んだままその影に《ハイキック》を当てて吹き飛ばし……………そこには先程まで私の目の前に居たはずの「ジャック・デスサイズ・キラール」の姿がありました。

「ふむ、分身……………いえ、幻術ですかね。《魔力視》でも見破れませんか」

『それと姿を消す隠密スキルの組み合わせかな？』

『……………』

そう、今私の目の前には所々ノイズが走っている先程までいた方と蹴り飛ばした方、合わせて二体の「ジャック・デスサイズ・キラール」がいました……………そして、ノイズが走っている方が宙に溶ける様に消滅しました。

……………おそらく、姿を消すスキルを使いながら元居た場所に幻術で自分の姿を置いてこちらに接近したのでしよう。私もファンタム・ステツプ似た様なことが出来るので反応出来ましたが、超音速機動でやられると面倒ですね。

幸い、攻撃する前後には《魔力視》や《心眼》で見破れるぐらいには効果が弱まるみたいですし、アンデッドだからか《ホーリーライト》でもスキル効果を弱められる様ですが。

『二心《ホーリーライト》は維持して、後《ピュリファイ・アンデッド》

の準備もしておくよ』

『よろしくなのです。……さてっ！』

『……』  
そうこうしているうちに、ヤツが複数の幻影を展開しながら大鎌でこちらに斬りかかって来たので、それらの斬撃を回避又は刃の側面を叩いていなしていくのです……。時折、幻影を目隠しにして来たりもしますが本体との見分けは付く上、長重武器である大鎌では振り下ろすか薙ぎ払うかしが出来ないので軌道を読むのは容易いのです。

……。最も、こちらもありの差でなかなか反撃の手が打てないのですが……。

『魔法威力拡大』《ピュリファイ・アンデッド》！』

「ここです《ライトニング・ストレート》！」

『……？』

ヤツが攻撃するタイミングでフェイが発動した対アンデッド弱体魔法によって一瞬動きが鈍ったので、その隙に私は接近してカウンターの電撃拳を叩き込む事に成功したのです。

……。……と言っても、霊体相手なので電撃によって動きが止まる事も無かったのでそのまま距離を取られ、弱体化してもボスモンスターとして相応のステータスがあるヤツを仕留めるには至りませんが。

「……。やはり、今の私では決定力に欠けますね」

『ボクが今使える攻撃魔法で仕留められるかどうかは半々かな？』

……。……弱体化しているとはいえ超音速以上の速度で動いてますし、普通に技量も結構高いので高威力の魔法を当てるにはどうにかしてヤツの動きを止める必要があるのです。

やはり、エルザさんの方が片付くまで時間を稼ぐのが良さそうですかね……。……それに、向こうの感じだともうそろそろ決着がつきそうですし。

……。……そんな感じでしたらくの間ヤツとの攻防を続けていると、あちらのドラゴンの断末魔が聞こえて来たのです。

（向こうは片付いた様ですね。……では、こちらもそろそろ状況を動

かしましようか)

『……それじゃあ、反撃の準備をしておくよ』

どうやら色々と周りの状況が動いて来た上にヤツの戦い方もおおよそ把握出来たので、これまでの防御重視の戦闘から攻撃重視の戦闘に切り替えて行くのです。

……ですが、ヤツも自分が不利な状況だと判断したのか、先程よりも激しい勢いで攻め立てて来ました。

『――！』

「疾ッ！」

私が接近して《ストレート》で殴り飛ばすと、ヤツは身を翻して反撃の横薙ぎを放ってくる様に見えるのでそれを捌こうとして……その直前、大鎌が霧散しました。

そして、横薙ぎの体制だったヤツは振り下ろしの体制に変わっており、そのままこちらに大鎌を全力で振り下ろして来たのです。

……どうやら、自分の身体に違う攻撃の仕方をする幻影を被せていたのでしょうかね。

「ミュウさん！ 大丈夫で……!?？」

『『ー』』』

どうやら、エルザさん達が来たみたいですね……と頭の隅で考えつつ、私は目の前に振り下ろされる大鎌を両手で挟み込んで受け止めました。

……なかなか上手いやり口でしたが、私は既にヤツの戦い方を把握したので殴った際感覚で相手が次どう動くかを読むぐらいは問題なく出来るのです。

なので、ワザと幻影に引っかけたフリをした上で、攻撃をギリギリまで引きつけつつ受け止めてその動きを止めたのです。

『《魔法多重発動》《ホーリー・ジャベリン》！』

『――！』

そして、攻撃を受け止められて動きが止まったヤツに向けて、フェイが至近距離から五本の聖なる光の槍を放ってその身体を貫きました。

……………ですが、大ダメージを与えたとはいえ仕留めるまでにはいかず、ヤツは後退しながら逃げようとはしますが……。

「逃す気は無いのです。……兄様が」

「《空想秘奥》《セイクリッド・アロー》」

『!?』……………

その直後、上空から放たれた聖属性を纏う矢に頭部のカボチャを撃ち抜かれたヤツはそのまま光の塵になったのです……………そして攻撃が放たれた方向の空を見ると、そこには「マグネトローベ」に乗って弓を構えた兄様とその後ろに乗る姉様がいました。

……………兄様達かエルザさん達が来るまで時間を稼ぐのが今回の戦闘の主目的でしたからね、それを忘れてはいないのです。

そして、そのまま二人は地上に降りてこちらに合流したのです。

「兄様、姉様、助かったのです」

「それはどうも。……………と言つても、俺はボロボロの相手にトドメを刺しただけだがな」

「私に至つては何もしてないしね。……………あつ！ エルザちゃんは大丈夫だった？」

「ええ大丈夫です。……………全員無事でなによりでしたね」

とりあえず、これで片付いたみたいですね……………ボスマンスタ―二体同時とか最初はどうなるかと思いましたが、何とかなつて良かったのです。

「それじゃあドロップアイテムを回収するか。……………二人は疲れているみたいだし今日はここまでにしようか？」

「そうしてくれると助かるのです」

「では、みんなも疲れていますしお言葉に甘えて」

その後、私達はボスマンスタ―がドロップした大量のイベントアイテムを回収して、そのままクレーミルに戻って行つたのです。



「……………あの、私の配分が60%と多すぎるんですが……………」

「いや、エルザちゃんとミュウちゃんはボスモンスターを倒しているし、それにエルザちゃんの場合タイムモンスターのお陰で複数人分働いているから、その分配を増やすべきだと思うんだよ」

「実際、二人が稼いだ量は俺とミカよりも遥かに多いしな。それぐらいが妥当だろう」

「……………まさか、ボスモンスターがあれだけのアイテムを落とすとは思わなかったのです」

さて、あれからクレールミルに戻って来た私達ですが今日のイベントアイテムの配分で少しもめているのです……………具体的に言うとエルザさんが『自分の配分が多すぎる』と言い、それに対して兄様と姉様が『今日の活躍から言ってもこのぐらいが妥当』と主張する感じで……………その後、色々議論は紛糾しましたが最終的にエルザさんが半分、残りの半分を私達三兄妹で分けるという感じで纏まったのです。

そして、エルザさんがログアウトする時間になったので、今日これでお開きになったのです。

「今日は一緒にイベントを回ってくれてありがとうございます！」

「うん、こっちも楽しかったよ！……………また一緒に遊ぼうね、エルザちゃん！」

「はい！ それではまた」

そう言って、エルザさんはログアウトしていきました……………いつも身内でこのデンドロを遊んでいます、やっぱり他のプレイヤーと遊ぶのも楽しいですね。

……………そんな感じで、私達はハロウィンイベントを満喫していたのです。



## 祐美の今・ミュウのクエスト

□地球・とある小学校 かとうゆみ 加藤祐美

ハロウィンも終わりこちらでの暦は11月に入った頃、私は小学校の教室で隣の席の子と共通の趣味——〈Infinite Dendrogram〉の事について話していました。

「なるほど。……では、そちらも天地の各地を旅して回っているんですね」

「ええ、各地を巡って様々な強者と仕合をしたりしていますね。天地は強者が多いので実に良い経験になっています」

各地を巡ってまでやる事が対人戦闘とは、やっぱり天地は修羅の国らしいですね……私も戦い自体は嫌いではないのですし、人間と戦う必要があるなら躊躇はしませんが、そこまで積極的にガチな対人仕合をしたいとは思いませんし。

ちなみに、クラスメイトの彼は現実でやっている剣術を活かした一撃必殺の抜刀術を使って天地でブイブイ言わせているらしいのです……まあ、彼は初めて会った時から『鞘に収まった名刀』みたいな雰囲気かしていたのでさもありなん、という感じでしたが。

「うーむ、話を聞く限り天地は凄く殺伐としているのですか？」

「んー……確かに複数の領地に分かれて争っていたり、武者達は積極的に野試合をしていたりしますが、それらにもちゃんとしたルールのようなものがありますから。戦わない者・戦う気のない者は比較的平穏に暮らしていますよ。それに武者者の実力が高い分モンスターによる被害は少ないので、街中では平和に暮らせますし」

「成る程、独特の雰囲気がある国みたいですね」

姉様はデンドロで色々な国を旅することが目標みたいですし、そう言った国ごとの違いを感じるのも旅行の醍醐味だと思うので他の国に行くのも面白そうですね。

……その後お互いの近況（彼は最近とあるPKクランにつけ狙われていて、それを毎回返り討ちにしているとか）を話し合ったり、いつかは国の外に旅に出たいと言う話をしたりしたのです。

そうしているうちに休み時間が終わったので会話を終えて授業が始まりました……。学生の本分は勉強なのでそちらを疎かにする訳にはいきませんからね。



そして放課後、私は授業が終わった後に一目散に下校してしまいました……。デンドロをやり始めてからは早く家に帰ることが多くなったのですよ。

……。ちなみに去年から始めた空手の道場にも通い続けていますが、元々週に1〜2回ぐらいしか出ておらず、更に割とゆるいところなのでそんなに生活のペースは崩れていないのです。

(まあ、私は彼みたいに自分の武を磨く事にあまり熱心にはなれませんが)

以前、師範に誘われて小さな大会に出た事もありますが、ほどほどに戦っただけであっさり優勝してしまいました……。師範には『あまりそういう大会には出たくない』と言っておいたので、それ以来は大会に出る事も無くなりましたが。

……。まあ、師範は私が自分の才能に向き合う機会を作る為に誘ってくれた事は分かっているのですが……。

(何分、同年代の相手だと基本的に勝負になりませんから、全力で手加減をしなければなりません……。熱心に空手をやっていない私が本気でやっている相手を下すのは心苦しいです……。この考え方が傲慢なものだと言うのは分かっているのですが)

……。そもそも私にとって武術というのは、生まれつきパソコンにソフトをインストールする程度の手間で覚えられるモノでしかないのです、やり甲斐とかはほとんど感じないのです。

もちろん、それだけでは精度100%のモノにしかならず、それ以上で極めるとかは出来ないのですが……。

(それ以前に、私が武術を始めた理由は自分の才能を制御する為ですからね)

別に武術自体はそこまで嫌いではないですし、本来の実力は師範以外には完璧に隠蔽しているので、道場のみんなともそれなりに上手く付き合っているのですが……やはり、全力を出せない以上はどうしても鬱憤が溜まってしまいうのです。

……デンドロをやっているのは相手を選べば全力を出しても問題ないから、というのもあります。

(……………あ)

……そうやって考え事をしながら歩いてきた所為か、前方の曲がり角から出てきた彼女に気付く事が僅かに遅れてしまいました。

「真里亞ちゃん……」

「ッ！」

曲がり角から出て来た少女は私の顔見た瞬間にその表情を恐怖に歪ませて、そのまま身を翻して走り去って行きました。

……私は彼女を追いかけようと思いましたが、その考えに反して私の足はまるでその場に縫い付けられたかの様に動きませんでした。

「……………はあ……。情けないですね……」

その自分のあまりの無様さに思わず天を仰いでしまいました……まさか恐怖で足が動かないとは。自身の肉体全てを自分の意思で制御出来る私がこのザマとは、情け無いにも程がありますね。

……その少女の名前は赤城真里亞ちゃん。私が幼稚園児だった頃からの幼馴染であり……一年前、私が自分の才能を制御出来なかった所為で、守る事が出来ずその心を傷つけてしまった少女です……。



□城塞都市クレームル 【魔拳士】マジック・ボクサー ミユウ

あの後、帰宅した私はそのままデンドロにログインして、フェイトと一緒にクレームルの街をぶらついていきます……ジョブレベルはあと一つでカンストですが、何もする気が起きませんね。

……ちなみに、兄様と姉様は私に気を使って別行動をしてくれています。

『……………ミュウ、大丈夫？』

「ええ、大丈夫ですよ。……………ただ、自分の情け無さに嫌気がさしているだけですから」

……………ああ、確かへエンブリオへはへマスターへの記憶を共有しているのでしたか。

『うん。……………だから、ミュウがあちらで何があったのかも知ってるよ。……………僕はミュウを助ける為に生まれたへエンブリオだから、こちらでは君が自分の才能に答えを見つけるまで側にいるよ』  
「……………ありがとうございます」

フェイ——【支援妖精 フェアリー】の能力特性は『他者の支援』  
……………これは他者を助けられる様な自分になりたいという私の願いと、全力を出すために他者の助けが必要になってほしいという私の自分の才能への恐怖がパーソナルになっているのです。

……………だからこそ、この問題に関してフェイは何も言いません。  
……………これは私自身が向き合わなければならない問題ですから。

「……………さて！ せっかくソロですし格闘家ギルドにでも行ってみましょうか」

『普段は三人いる所為で冒険者ギルドにしか寄っていないしね』

全員メインジョブがバラバラなので、三人で一緒にいる時にはジョブクエストとかは受けにくいですからね。



そんな感じで、私達はクレールミルの格闘家ギルドにやって来ました  
……………ここ格闘家ギルドでは格闘系ジョブ全般のジョブクエストを受ける事が出来るのです。

『……………基本的には討伐系かな。後は格闘技の指導とかあるけど……………』

「それはダメですなのです。……………私には他人に指導する能力はあ

りませんか」

何せ私にとって武術とは『出来て当たり前』のモノで、他人に教えるにしても何故出来ないのかが理解出来ないという感じになってしまうので。

「……さて、何かいい感じのクエストは……『力になれなくてすまない』『いえ、こちらは無理を言ってしまったてすみませんでした』おや？ 何か聞き覚えのある声なのです。

『どうやら、俺達では彼のお眼鏡には適わなかったようだ。……優れた格闘家を連れてくるというクエストだったから、このメンバーなら何とかなると思っただが……』

『お前達では条件を満たさない』って言われちゃったしなあ」

「だが、彼を見る事自体は出来たからな。その条件つてのが分かれば……」

「……本当にすみません。曾祖父は生前から格闘一筋で身内の私達にもよくわからない所があつて……」

格闘家ギルドの一角にいたのは一人の女性と五人程の男性でした……男性の内一人は日曜午前な仮面を着けていたのでマスクド・ライザーさんの様ですね。

……女性の方は見覚えがありませんが手に紋章が無いのでおそらくティアン、他の男性は先日この街に来た時に見た顔なのでおそらく同じ〈バビロニア戦闘団〉のメンバーでしょう。

私がそう考えている間にも彼等の話は続いていきました。

「……しかし、この王国に格闘系の高レベル〈マスター〉は他にいたか？」

「居るには居るだろうが……俺達以上っていうのは中々居ないんじゃないか？」

『そもそも、条件自体がはつきりしていないしな。……これまで情報からすると、格闘系のジョブに就いている事が姿を見る条件だと思ふんだが……ん？』

私が彼等の様子を伺って居ると、どうやらライザーさんが私に気付いた様でその仮面をこちらに向けて来ました。

……………気付かれてしまったのでとりあえず挨拶をしておくので  
す。

「お久しぶりなのですライザーさん。……………どうやら、お話の邪魔  
をしてしまった様ですみませんのです」

『いや、別に邪魔にはなっていないから気にすることは無いよ、ミュウ  
ちゃん』

「おうライザー、そっちの嬢ちゃんは知り合いか？」

私がライザーさんに挨拶をすると、他の男性の中で見覚えが無い人  
がこちらに話かけてきました。

『ビシユマル、この子は俺のフレンドの一人であるミュウちゃんだ。

……………それでコイツはビシユマル、俺と同じ決闘ランカーだよ』

「初めましてビシユマルさん、ライザーさんのフレンドのミュウなの  
です」

「おう、よろしく。……………しかし、こんな可愛い子とフレンドとはラ  
イザーも隅に置けんな」

ふむ、どうやら二人はかなり気安い関係みたいですね……………そう  
していると、ティアンの女性が何かに気が付いた様にこちらに話かけ  
て来ました。

「あの一、もしかしてあなたは「マグネトロベ」を倒したへマスター  
の一人ではありませんか？」

「？　そうですが……………貴女は？」

「申し遅れました。私はこの格闘家ギルドで受付嬢をしているマリ  
ア・グランツと申します。……………実は、貴女を名のある格闘家と見  
て頼みたいクエストがあるのですが……………」

……………そうして、私はとあるクエストについての話を聞く事にな  
ったのでした。



とりあえず、私とライザーさん達は詳しく話をする為にギルドの一  
角にあるテーブルに座る事にしました……………少し話を聞いたとこ

ろによると、ライザーさん達は彼女からクエストを受けたが失敗してしまつたらしく、それで先程の会話に繋がるみたいなのです。

「それで？ 一体どんなクエストなのです？」

「はい、今回の依頼は私事なのでギルドを通してのものではありません。スベリオルジョラん。……………実は、私の曾祖父——格闘家系統 キング・オラ・マーシャルアーツ 超級職

【武闘王】アスカ・グランツの幽霊が現れる様になつたのです」

詳しく話を聞くと、まず彼女の曾祖父のアスカ氏は王国の格闘家の頂点として名を馳せていた人物なのですが、今から十年程前に寿命でお亡くなりになつたそうなのです。

……………ですが、つい最近そのアスカ氏の幽霊が彼が生前使つていた廃道場に姿を現わす様になつたと言つたのです。

「ふむ、成る程。……………ですが、そういうのは【死霊術師】ネクロマンサーの領分では？」

「ええ、最初は私もそう思ったのでこの街の死霊術師ギルドに依頼したのですが……………私には見えている曾祖父の幽霊が死霊術師達には見る事が出来ず、彼等のスキルでもその存在を感知する事が出来なかつたのです」

そしてその時、アスカ氏の幽霊は彼女にこう告げた様なのです……………『私の武を受け継げる人間を連れてこい』と。

「そう言われて、まずは祖父や父・曾祖父の古い友人達に事情私説明して連れて行つたのですが……………父達の何人かは姿を見る事は出来たものの、曾祖父は『条件を満たしていない』と言つたきりそのまま消えてしまつたのです。……………その時、曾祖父の姿を見る事が出来たのは格闘系のジョブに就いている者だけだったので『後を継ぐ者を探しているのなら実力のある格闘家を連れてくればいいのか』と考えて、格闘家ギルドの中でも実力があつて信頼出来る人間を連れて行つたのですが、そちらも同じ結果に終わりました」

そして、これらの結果を受けて彼女は『超級職を継げる程に高い実力がある人間ならば条件を満たすのでは』と考えたそうなのです。

……………とはいえ、今の格闘家ギルドにはカンストしている人間もいながつたので……………。

「それでライザーさん達に依頼したのですね」

「はい……………伝説の〈ハマスター〉であれば或いはと思つて、このクレーミルで名高いヘバビロニア戦闘団の方達に依頼しましたが…………」  
『依頼を受けた俺達は克蘭の中で格闘系のジョブに就いている者と、たまたま遊びに来ていたビシユマルを誘つて彼女の曾祖父の元に向かったのだが……………』  
『条件を満たしていない』と言われてしまつたんだ』

「つーか、実力だけならここに居る連中が王国の格闘家の中でもトップクラスだと思うんだがなあ。決闘ランキングでも俺やライザーより上に格闘系ジョブの持ち主はいないし。……………ライザー、この子で大丈夫なのか？」

おおよその話を聞き終わると、ライザーさんの友人であると言うビシユマルさんが彼に私の実力について疑問をぶつけていました……………どうも大面倒な依頼の様ですし心配するのも当然ですがね。

……………最も、話を聞く限りでは単純な実力が条件ではない気がします。

『ビシユマル、ミュウちゃんの實力に関しては俺が保証するよ。……………それにお前も噂では聞いた事があるだろう、〃ニッサ辺境伯領ゾンビ大量発生事件〃や〃港町ウエレン猛毒スライム襲撃事件〃などの王国内で起きた事件を次々と解決している三人組の〈ハマスター〉がいると言う話を。……………彼女はその内の一人だよ』

「えっ！ マジで!?!」

「……………どんな噂が立っているのかは知りませんが、それらの事件を解決したのは私達ですね」

まあ、姉様が直感で事件を嗅ぎつけて、それらの事件を私達で片端から解決しているので、そういう噂になるのは仕方ありませんがね。……………とはいえ、私の實力を疑問視している人もいるみたいなので、ここらで一ツアピールをしておきましょうかね。

「その依頼を受ける事に関しては構わないのです。……………その条件に関しては分かりませんが、實力のある格闘家が必要というのならば



パーティーで〈U B M〉を三体系討伐をしており、其の内一つで MVP に選ばれて特典武具を手に入れた私なら該当する可能性もありますしね」

「本当ですか！　ありがとうございます！　このお礼は必ず！」

『成る程、〈U B M〉の討伐数が条件というのはあり得るか？』

「……………というか、〈U B M〉ってそんなに遭遇出来るものだったか？」

「うちのクランでの総討伐数だってそこまでは…………」

そんな感じの事を話すと、マリアさんは物凄い尊敬の眼差しでこちらを見てお礼を言ってくれて、他の人達にも私の実力のアピールが出来た様なのです……………それに、今の私にはマリアさんの頼みを断る気分にはなれませんしね…………。

さて、どうやらクエスト【曾祖父の幽霊の願いを叶える——マリア・グランツ 難易度：十】を受注出来た様ですが…………。

「しかし難易度：十とは。これは一筋縄では行きそうにありませんのです」

『ああ、恐らくアスカ氏の要望を満たす様な人間を連れて来るのが、非常に難しいからだと考えられるのだが…………』

「後、凄腕の格闘家だったって言うアスカさんの武術を継承出来るだけの技量も必要になるんじゃないか？」

ライザーさんやビシユマルさんの言う通り、アスカ氏が言う条件にはクエストの難易度が最高になる様な理由があるのでしようね。

……………もう少し情報を集めておきますか。

「さて、マリアさんに少し質問があるのですが……………そのひいお爺様は一体どんな人物だったのでしょうか？」

「はい……………私の曾祖父アスカ・グランツは一言で言えば物凄い武術馬鹿な人でした」

曰く、彼は幼い頃から様々な武術に興味を示しており、その中でも自分に才能があった格闘技をただひたすらに修練続けていたらしいのです。

そうしている中で【武闘王】のジョブに就いたり武者修業として世

界中を巡ったりしていた様で、死ぬ寸前まで武術の修練をしていたそうなのです。

「……………最も子や孫が出来てからはこのクレーミルに住む様になり、時折修業も兼ねて凶悪なモンスターを倒したりしていたので街の人達からはそれなりに慕われていたようですが。」

「それで弟子や【武闘王】のジョブを継ぐ様な後継者は居なかったのですか？」

「ええ、何でも『自身の武を極めるのに忙しい』と言って人に武術を教える事は殆ど無かった様ですし、超級職に関しても『条件を知ったところでどうにもならない類いだから』と転職条件を話す事は無かったですね。……………そんな曾祖父がどうして幽霊になってまで後継者を探しているんでしょうか……………」

「……………ふーむ、【武闘王】への転職条件とかがその条件に該当するのかもしれないですが、これではよく分かりませんね……………」

「とりあえず、そのひいお爺様の幽霊に会ってみましようか……………それでダメならまた別の方法を考えましよう」

「よろしく願います」

こうして、私は少し変わったクエストを受ける事になったのです。



そういう訳で、私達はそのアスカ氏の幽霊が出ると言う廃道場に行きつて来ました……………ちなみに、ライザーさん達も『失敗したままでは終われないし、条件についてのヒントが得られるかもしれないから』と言う理由で付いて来てくれました。

「ここが曾祖父の幽霊が出る道場です」

「ありがとうございます……………それでは、お邪魔しますです」

そう言っ、私達は道場の中に入って行きました……………中はそれなりに広く、きちんと掃除をしているのか結構綺麗な感じでした。

「……………ここに曾祖父が居るのですが……………」

「……………フェイ、何か居ますか？」

『《魔力視》や《魔力感知》も使ってるけど特に何も感じないね』

成る程、どうやらマリアさんの話は本当の様ですね……………何せ、私の目の前には黒い道着を着た半透明の老人の姿がはつきりと見えているのですから。

……………その老人は道場に入って来た私達に気付いた様でゆっくりとこちらを向きました。

「アスカお爺様、また人を連れて来ましたが……………」

「……………その少女……………条件は満たしているな……………」

こちらを向いたアスカ氏は私を見てそんな事を言いました……………どうやら、私は彼のお眼鏡に適った様ですね。

……………次の瞬間、目の前の彼が獣の様な笑みを浮かべると共に、その全身から凄まじいまでの闘気が膨れ上がり、半透明だったその輪郭が急に実体を持ち始めました。

「なっ！ お爺様!?!?」

『これは一体……………!?!?』

「どうやら条件を満たしたみたいだが……………」

その一気に様変わりした彼の姿を見た他の人達に動揺が広がりますが、その闘気を一身に受けていた私は彼を注視している……………正確には、その頭上に現れた文字に目を奪われていました。

「【武王残影 アスカ】……………！　〈UBM〉ツ!?!?」

「《黒界・技指導》」

……………その言葉と共に、私の視界は一瞬で闇に包まれました……………。

## ミュウと【アスカ】・祐美の過去

□城塞都市クレール・ミル・廃道場

マジック・ボクサー  
【魔拳士】ミュウ

目の前の闇が晴れると、そこには先程までと変わらない道場がありました……………いえ、よく見ると四方の壁が黒い結界の様なものに覆われており、どうも完全に閉じ込められている事が雰囲気です。

……………そして、私の前には先程までの老人だった時の姿と違い、三十代後半ぐらいの見た目になった【武闘王】アスカ・グランツ氏——いえ、ユニーク・ボス・モンスターへU B M 【武王残影 アスカ】が明確な実体を持って立っていました。

後、この結界の中には目の前のアスカ氏を除くと私とフェイしか居ないので、ライザーさん達は締め出されている様なのです……………とありあえず、まずは話し合いから始めましょうか。

「……………あなたは【武闘王】アスカ・グランツさんと合っているのです？」

「いかにも……………と言っても、そう呼ばれていたのは生前の事で、今は【武闘王】のジョブを失ったしがないへUBMだかな」

一応《真偽判定》を使ってみましたが嘘は付いていない様です……………何より、目の前に居る【アスカ】の一切隙の無い立ち振る舞いこそ、彼が極まった武闘家であると何より雄弁に語っています。

「……………私はあなたのひ孫であるマリアさんから『あなたの武術を受け継げる人間を連れて来てほしい』と、頼まれてここに来たのですが……………」

「ん？……………ああ、嬢ちゃんをここに閉じ込めたのは俺の武術を継承させる為で合っているぞ……………まあ、流石に何も事情を知らせないのは不義理に当たるから少し話をしようか」

……………そう言った彼は、自身がここに至るまでの経緯を説明し始めたのです。

「マリアから聞いていると思うが、俺は生前ただひたすらに武術を修練していただけた人間でな。周りの家族の事も顧みず、弟子なども取

らずに死ぬまで武術の極みを目指してそのまま寿命で死んだんだが……どうも死ぬ直前、いや死んでから『自分が生きてきた証である武術を誰かに継承させたい』と、思ってしまった様なんだよな。……生前散々好き勝手やっておいて、死んでからも性懲りもなくわがままを言う愚かな男だと笑ってくれ」

……と、彼はどこか自嘲する様に言いました。

「まあそんな訳で、死んでからようやく他人にモノを教えたいとか言う未練を持ってしまった俺は、浮遊霊として当てもなく彷徨っていたんだが……ある日、地面に変なモノが落ちているのを見つけて、それに触れてみると何故か〈UBM〉になってしまったんだ。……そして、その際に得たスキルがこの未練を晴らすのに丁度いいモノだったから、マリアに頼んで俺の武術を継承出来そうな人間を連れて来て貰ったんだよ」

成る程、大体事情は分かりましたが……まだ、疑問が残っていますね。

……すると、私のその考えを読み取ったフェイがアスカ氏に質問をぶつけました。

『じゃあ、なんでミユウを継承する相手に選んだのかな？』

「ああ、それは嬢ちゃんがこのスキル——《黒界・技指導》の発動条件を満たせる人間だったからだな」

そう答えた彼は、そのまま詳しい事情を話し始めました。

「このスキルは条件を自身と満たした相手を閉じ込めて、更に自身の生前における最盛期の肉体と最も高いレベルだった時の【武闘王】のステータスとスキルを与えらるというものでな。……そして、このスキルの対象に出来る人間の条件っていうのは【武闘王】の転職条件を満たせる人間になるんだよな」

【武闘王】の転職条件？」

私が聞き返すと、彼は「ああ」と頷いて続きを話しました。

「格闘家系統超級職【武闘王】の転職条件は『スベリオルジョブ格闘家』グラップラー【武闘家】マーシャル・アーティストを含めた格闘系ジョブのみで合計ジョブレベルを五百まで上げる』事と『それまでに格闘系以外のジョブに就かず、戦闘中に一度も武器を

装備した事が無い』事だからな。……………だから《黒界・技指導》を  
発動する為の相手に要求される条件は『格闘系ジョブにしか就いた事  
の無い最大合計レベルが五百あり、かつこれまで戦闘中に一度も武器  
を装備した事が無い人間』って事になるんだよな」

「……………成る程、なら納得したのです」

ティアンだと『最大合計レベル五百』の条件を満たせず、《マスター》  
の場合は最初に武器を支給されますからね……………最初に支給され  
た武器を装備せずに素手でモンスターと戦う様な人間は私の様に武  
器に忌避感を抱いているか、それこそよつぼどの格闘馬鹿ぐらいで  
しょうし。

……………そこまで説明し終えた彼は一気に雰囲気鋭いモノに変  
え、そのまま美しさすら感じる程に見事な構えを撮りました。

「さて、このスキルはあまり長時間展開出来ないからな、説明はここま  
でにして早速継承に入ろうか。……………ああ、このスキルの解除条件  
は俺を倒すか一定時間経過する、後は一応俺の任意でも解除出来る、  
という感じだ」

「……………継承と言って、いきなり戦闘なのですか？」

私がそう聞くと、彼はまるで全てを見透かす様な視線でこちらを見  
ながら答えました。

「悪いが、俺は生前弟子なんて取った事も無く他人に指導した経験も  
数える程だからな、こういう方法しか出来ないんだ。……………それに  
嬢ちゃん相手ならコッチの方が手っ取り早いだろう？」

「……………ふう……………分かりました。元よりそのつもりで私はここに来  
ましたし……………フエイ！」

『了解！ 《我等が成るは光の使者》《エコー・オブ・トゥワイス》《霊  
環付与》！』

彼の言葉から戦闘は不可避と考えた私は即座にフエイと融合し、更  
に自身へ可能な限りのバフを掛けていきます。

……………恐らく、こうでもしないとこの戦いはすぐに終わってしま  
うでしょうし。

「準備は終わったみたいだな。……………それじゃあ、武術の指導を始

めようか」

アスカ氏のその言葉と同時に、私と彼の武術本気の死合の指導が始まりました。



□城塞都市クレール・廃道場前 【翠風術師エアロマンサー】レント

「……………成る程、それでミュウちゃんはそのアスカ・グランツの幽霊と思われるへUBMと一緒に、この道場の内部に閉じ込められたと」  
『ああ。……………すまない、俺が彼女を巻き込んだせいでこんな事に……………』

「俺からも謝らせてくれ……………君達の妹をウチのクランで受けたクエストに巻き込んでしまったてすまなかった」

「ライザーさんもフォルテスラさんも、そんなに謝らなくてもいいですよ。そのクエストを受けるといふ選択をしたのはミュウちゃんですし」

俺達は今ミュウちゃんがへUBMに閉じ込められたという、クレールの外れにある廃道場の前にやって来ていた……………俺達がここに来たのは、ミカと二人で街をぶらついていた時にたまたまフォルテスラさんと遭遇してしばらく話していた時、彼の元にこの事件の連絡が入って来たので事情を聞いて一緒について行ったからである。

……………そして、今は内側に黒い壁が展開された道場にどうにか入れないか、連絡を受けて集まった他のへバビロニア戦闘団のメンバーが挑戦中である。

「……………くそっ！ この黒い壁傷一つつかねえ！」

「道場の方にも傷がつかない……………単に内側に結界を張っているのではなく道場自体を変質させているのか？」

「透視や解析系スキルも全滅ですな」

と、そんな感じなので、外からこの中に入るのはどうも無理そうだ……………一応、俺も【テレパシーカフス】で連絡を取ってみたが繋がらなかった。

「……………ミカ、お前のスキルで壊せるか？」

「うーん、必殺スキルと《エフェクトバニッシュ》を併用すればなんと  
か？ ……………でも、これは壊さない方がいい気がするんだよね。  
ミュウちゃんに危険な事がある感じもしないし」

……………ちなみに俺達が落ち着いているのは、連絡があつた時点で  
ミカの直感が『ミュウちゃんにはそこまで危険は無い』と示していた  
からである。

とりあえず、今回の依頼主であるマリアさんに話を聞いてみよう  
か。

「マリアさん、今回のクエストの目的はアスカ氏の武術を継承して彼  
の未練を晴らす事であっていますか？」

「え？ は、はい。……………幽霊となつて現れた曾祖父はどこか寂し  
そうな雰囲気をしていたので、それをどうにかしたかったのですが  
……………どうしてこんな事に……………」

そう言った彼女は顔をうつ向けてしまった……………まあ、そういう  
依頼ならミュウちゃんは適役かな。

……………それに、今のミュウちゃんにはこの依頼を達成することが  
必要だと思うしな。

「……………皆さん、アスカ氏の事についてはミュウちゃんに任せてく  
れませんか？」

『レントくん、それは……………』

「私からもお願いします。……………多分、今のミュウちゃんにはこれ  
が必要なんです」

俺達のその言葉に他の人達は驚いた様な表情（ライザーさんは仮面  
だが）を浮かべていたが、やがて代表のフォルテスラさんが前に出て  
言った。

「分かった、君達がそこまで言うならこの件は可能な限り彼女に任せ  
よう。……………それに、どうせ俺達の中に入る事する出来ないから  
な」

「一応、外での見張りと周辺の避難誘導はしておきますが」

「ありがとうございます、お願いします」



今回、俺達は何も出来ないが………頑張ってくれよ、ミユウちゃん。

◇◇◇

□《黒界・技指導》内部 【魔拳士】ミユウ

「ハア……ハア……ハア……」

『………ミユウ、残念だけど時間切れだよ』

その言葉と共に必殺スキルの使用時間が切れて、フェイが私から分離しました………【武王残影 アスカ】との戦いが始まってから約五分、今の私の状況は控えめに言っても酷いものでした。

………息は上がり、身体や装備はボロボロになっていて、辛うじて五体は繋がっていると云ったところです。《霊環付与》と各種バフ・回復魔法が無ければ10回は死んでいましたね。

「ふむ……やはり俺の見立て通り、嬢ちゃんの武に関する才能は凄まじいな。………はつきり言つて、俺程度とは比べ物にならない程の才覚だ」

「………これだけボロボロにされてから言われても説得力が無いのですが……」

ちなみにアスカ氏は多少の傷を負っていますが、息一つ切らさずにピンピンしています………《ミラクル・ミキシング》を使った最大威力攻撃も試しましたが、あっさりと受け流されましたし。

「それに関しては単純にステータスとスキルと経験の差だな。………俺は【武闘王】になってから数十年の歳月をかけて合計ジョブレベルを千以上まで上げていたし、更にこのジョブには《見稽古》つて言う〴〵今まで見た事のある格闘系スキルを習得出来るスキル〴〵と《武の極み》と言う〴〵自身が覚えている全ての格闘系スキルのレベルをEXまで上げる事が出来る様になる奥義〴〵があるからな」

「それはまた……」

無論、その膨大な年月に裏打ちされた技量も私を遥かに上回っており、そこにステータスといくつものレベルEXスキルまで加われば、

当然ながら今の私では勝ちの目など無いでしょう。

「……………それに、これまでの戦いから彼の体術はこの世界にあるジョブスキルを上手く使う事に特化したモノの様ですし。」

「まあ、俺が嘗て習得した他の格闘系超級職の奥義を含む、本気の攻撃を受けて五体満足なのは大したもんだよ。……………嬢ちゃんは見た日程の年齢ではないし、格闘技を始めてまだそんなに経っていないんだろ?」

「……………実年齢はこの見た目より低いですし、格闘技の方は初めて一年も経っていませんね」

私がそう言うのと彼は感心した様に頷き……………次の瞬間、その顔を真剣なモノに変えました。

「だが、それ故に気になるな……………どうして嬢ちゃんは自分の実力に枷を掛けているんだ? ……………俺には自分自身に恐怖している様に感じたが」

「それは……………」

「言いつらいんだつたら無理に聞くつもりは無いが……………この場限りとは言え俺は嬢ちゃんの師匠だからな、話ぐらいは聞くぜ」

最も、子育てとかを全て妻に任せきりのダメ人間だった俺にまともな助言とかが出来るとは思えないがな、と彼はカラカラと笑って……………しかし、その目だけは真剣な眼差しでこちらを見据えていました。

……………そうですね、やはりいつまでも過去から逃げる訳にはいかないのです。

「分かりました、お話しします。……………あれは今から一年程前のことなのです……………」

そうして、私は自分の才能を自覚して恐怖する様になったあの日の事を話し始めました。



あれは今から約一年前、私が小学校に入学してからしばらく経った

頃の話です。当時の私は武術などは学んでおらず、ごく普通の子供として生活していました……。まあ、運動能力は他の子と比べても凶抜けていたので、周りからやや浮いてしまう事もありましたが。

……。ですが、そんな私にも友人と言える相手……。真里亞ちゃんが居ました。

彼女とは幼稚園からの付き合いで、自分の才能を自覚出来ていない所為で周りからやや浮いていた私に声を掛けてくれた、私の初めての友達でした。

ある日、私と彼女は一緒に学校から帰っていたのですが、その時彼女が『ちよつとだけ近道していこうよ』と言って脇道に入っていたので、私もついて行ったのです……。学校からは『登下校には監視カメラがあるとどこを歩きなさい』と言われていましたが、私も彼女も少しぐらいなら大丈夫だろうと思ってしまうたのです。

……。今の時代、街中には監視カメラがあり警備ロボットが巡回する様になっていますが、それらにはどうしても死角というものがあり、そして悪意を持った人間が居なくなる訳でもないにも関わらず……。

その道を歩いてからしばらくした時、私は前方から嫌な気配を感じたのですが私達はそのまま前に進んでしまい……。その先でフードを被った怪しい男と遭遇しました。

私は慌てて彼女を連れて引き返そうとしましたが、それよりも早く男は手にナイフを持ってこちらに突っ込んで来ました。

……。それからの事はあまり詳しくは覚えていないのですが、気がついたら私の手には男が持っていたナイフが血まみれになって握られており……。目の前には、先程の男が全身を切り刻まれた上で血溜まりの中に沈んでいました。

今なら分かりますが、私の武術の才能は初めて武器を握った時でもその最適な使い方を理解でき、敵がどう動くかを完全に見切る事もでき、そしてその武器をどう使えば人体を的確に破壊出来るかも解ってしまう程のモノだったのです。

そして、当時の私は武術を学んでいなかったので、対人戦における

手加減などが出来ずこんな事になってしまったのです……。

それからしばらく、私は放心していましたが真里亞ちゃんの事を思い出したので後ろを向くと、そこには腰を抜かして地面に座り込んでいる彼女の姿がありました。

……私は彼女が無事に事に安心しつつ、そちらへと歩いて行き……。

「嫌！ 来ないでー！」

「え……？」

近づいて来た私に対して掛けられたのは、彼女の私に対する拒絶の声と明確な恐怖の表情でした……そして、その瞳にはナイフを持って返り血に塗れた私が映っていました……。

……まあ、彼女に男を八つ裂きにする光景を見せつけてしまっていたので、そういう反応をされるのは当然だった訳ですが……。

……その直後、私は疲労で倒れてしまったので後の事はほとんど記憶に残っていませんが、駆けつけてくれた兄様と姉様が警察と救急車を呼んでくれたらしく、相手の男は一命を取り留めました。

警察にも連れて行かれましたが、男に前科があつた事と私の年齢を考慮してお咎め無しになりました。

ですが、それ以来彼女は私に近づく事が無くなり……私も情け無い事にあの時の彼女の表情がトラウマになってしまつて、彼女に近づこうとすると身体が竦んでしまう様になってしまいました。

……所詮、私に与えられた武術の才能なんてモノは他者を傷つける事に長けるだけのモノでしかなかったのです……。

あれから一年、兄様や母様の勧めで空手を習い自分の才能を制御する事が出来る様になり、こちらの世界で全力を出して戦いながら自分の才能の意味を探し続けていますが……そんな今でも、私と彼女の関係は途切れたままなのです……。

## 祐美の決意・ミュウの継承

□ 《黒界・技指導》内部 マジック・ボクサー 【魔拳士】ミュウ

「……………これが、私が自分の才能を忌み嫌う様になった理由の全てなのです」

「成る程な」

私は過去にあった事件の事を語り、それに対してアスカ氏は特に口を挟む事は無く真剣に聴き続けていました。

……………そして、一通り聞き終わるとただ静かに頷いて言葉を紡ぎ始めました。

「一応言っておくが、嬢ちゃんの過去や友達の仕事について俺が言えることは何も無い。……………どう考えても相手の男の自業自得とか、嬢ちゃんがその友達の仕事を守ったのには変わらないとか、そんな事を無関係の俺が言ったところで大して意味は無いだろうしな」

「……………」

多分、ヘマスター達が元いた世界とこちらの世界とではだいぶ常識とかが違うだろうし、と彼は続けました……………力がある人間が敬われる事が多いこちらの世界と違って、現実の日常生活では武術の才能があってもあまり意味は無いですからね……………。

……………その後も彼は言葉を続けます。

「それに自分の才能の意味など数十年武術に生きて来て、そして死んだ俺にもさっぱり分からないからな。……………まあ、一つ言っておくなら最終的には嬢ちゃんが一步踏み出せるかどうかだろうよ」

「……………はい……………」

そう、今日だって真里亚ちゃんを捕まえて話す事ぐらいは出来たはずなのです……………彼女との関係が一年前のまま止まっているのは、偏にこれ以上自分が傷つく事を避けている私の臆病さに原因があるのでしょうか。

……………私がそんな事を考えていると、やや呆れた様にアスカ氏は首をすくめて言いました。

「何を考えているのかは分からんが、嬢ちゃんは深刻に考えすぎだと

思うぞ。……………俺が嬢ちゃんぐらいの歳の時は周りの事なんて何も考えず、自分の好きに武術の修練をしていたしな。……………さて、出来ればもう少し気の利いた事を言っただけで済んだが、武術バカで人付き合いもまともにしてこなかった俺ではこれが限界だな」

妻ならもう少しまともな助言が出来たんだがな、とアスカ氏は自嘲しながら言葉を紡ぎ……………直後にその雰囲気を一変させ、私の全身が総毛立つ程の殺気を放ち始めました。

「さて、そろそろこのスキル黒界・技指導の制限時間になりそうなんだな、ここからは拳で語るとしよう。……………今から俺が生前編み出した「武闘王」の最終奥義を嬢ちゃんに放つ。……………言っておくが、自分に枷を掛けた状態で凌げる様な技ではないからな……………一歩踏み出さなければ死ぬぞ」

「っ!」

その言葉と共に今まで構えを取っていなかったアスカ氏は、ここで初めて本気の構えを取りました……………嗚呼、これは本当に不味いですね、はつきり言っただけで生き残る未来が見えませんが……………

……………ですが、この後に及んで私の身体は自身に掛けた枷を外す事はありませんでした……………

(……………ここで、終わりです『ミュウ』……………フェイ?)

私が諦めかけたその時、私の心の中にフェイの声が響いて来ました……………これは以前モンスターからラーニングした《念話》スキルですか。

『ミュウはこのまま……………一歩も踏み出せないままでもいいの?』  
(それは……………)

私が言い淀みますが、フェイは更に言葉を重ねます。

『僕はミュウの心から生まれた、ミュウを助ける為の「エンブリオ」だから、君が思っている事を敢えて言うよ……………このまま逃げ続けるだけでは、君は一歩も前に進めない』

……………それは、私が常に心のどこかで思い続け、しかし目をそらし続けていた言葉でした。

『……………』  
〈Infinite Dendrogram〉はハマス

ター)が自由になれる場所、自分のやりたい事が出来る場所だ。だからミュウ……………君は何がしたいんだい?』

(私は……………もう逃げたくないです! 彼女からも、そして自分からも!)

私はフェイのお陰で漸く自分がやりたい事を見つけました……………私は、もう一度、真里亞ちゃんと友達になりたいのです!

……………その為には、この程度の事で躓いている暇は無いのです!

『うん……………じゃあ、もう大丈夫だね』

(はい! ……………ありがとうございます、フェイ)

そのフェイとの会話と同時に、私の中で何かが外れる音がした様な気がしました……………そして、まず私は痛覚設定をオンにして感覚を研ぎ澄ませ、更に彼の攻撃を見切る為に色覚を消してその分の脳のリソースを動体視力に回します。

……………あの事件以来出来なくなっていました、私は全力で集中する事で自身の肉体を完全に制御する事が生まれつき出来たのです。

「……………準備は出来た様だな。……………では行くぞ!」

その言葉と共に、アスカ氏は一步を踏み出しました……………今の私には彼がモノクロの世界の中でゆっくりと動いている様に見えるはずですが、その長い年月の中で極限まで研ぎ澄まされた体術の所為でコマ落ちした様な動きになっているので、このままだと次の瞬間に私が消し飛びますね。

……………なので、私は更に集中を深め彼の筋肉・血管・骨格の動きを視て、そこから攻撃の先読みをしようと試みました。

「《極撃》!」

その言葉と共に彼の右腕に何かが集まって行く様子が見えたのです……………それが何かは分かりませんが、それと彼の身体の動きから次に繰り出される攻撃は右の正拳突き、狙いは私の左胸だと分かりました。

……………なので、攻撃が放たれる直前に身を捻り……………

「っ!」

直後、放たれた彼の右拳は私の左腕の直ぐ横を通り空を切りました  
……その際、掠めた二の腕の表面が削り取られて激痛が走りまし  
たが無視して、反撃の右拳を彼に打ち込みます。

「……………見事」

……………咄嗟に放ったその拳はアスカ氏の胸を軽く叩く程度に終  
わりましたが、彼はそう一言呟くと構えを解いてこちらに向き直り話  
を始めました。

「どうやら枷は外れた様だな。……………俺の全力の一撃を凌ぐ事が出  
来た嬢ちゃんにはもう言う事は……………ん、どうした？」

「……………あ痛たたたたたっ！ 痛覚設定！ 痛覚設定！」

『わくわく！ ミュウ大丈夫！ 《ファイフスヒール》！』

彼が何か言っていますが、こちらは集中が切れた所為で抉られた左  
腕の激痛が無視出来なくなったのでそれどころではないのです  
……………せっかかない雰囲気だったのに締まりませんのです……………

その後、どうにか痛覚設定をオフにして、フェイが急いで回復魔法  
を掛けてくれたのでどうにかなりました。この世界では肉が抉れた  
ぐらいなら直ぐに治せますしね。

……………そうして今、回復した私と身体が半透明になったアスカ氏  
は向かい合っています。

「まあ、取り敢えずこれで俺の指導は終わりだ。……………これで俺の  
未練も晴れるだろうよ」

「アスカさん、その身体は……………」

……………そう会話する内にも彼の身体はどんどん薄くなつて行き  
ました。

「ん？ ……この《黒界・技指導》は制限時間までに捕えた人間を倒せ  
ないと代償に俺を成仏させる効果があるからな。……………まあ、いく  
らへU ユニーク・ボス・モンスター B M」とは言え、そこらの浮遊霊に毛が生えた程度の俺が  
こんな強力なスキルを使う為の当然の代償ってやつだな」

「ですが、あなたはその時間の殆どを私の話を聞く事に費やしていま  
したが……………」

私がそう言うと、彼は笑いながら肩をすくめて言いました。



「最初に話しただろうか？ 俺の未練ってのは『自分が生きた証として生涯研鑽し続けて来た武術を誰かに伝えたい』と言うものだったからな。……………嬢ちゃんは最初の五分で俺の武術の殆どを取得しただろう？ それで俺の目的は十分果たせたんだよ」

「……………御指導、御鞭撻の程ありがとうございます！」

そんな彼に対して、私は深々と頭を下げます。

「コツチこそありがとうございます。……………嬢ちゃんのお陰で人を教え導くという生前出来なかった事が出来たからな、お陰でやっと成仏出来るぜ。……………ああ、マリアには迷惑かけて悪かったと言っておいてくれや」

「はい、分かったのです」

……………そして殆ど見えなくなるぐらいに輪郭が薄くなったアスカさんは、笑顔のまま空気に溶ける様に消えて行きました……………

〔UBM〕〔武王残影 アスカ〕が討伐されました

〔MVPを選出します〕

〔ミュウ〕がMVPに選出されました

〔ミュウ〕にMVP特典〔武練闘布 アスカ〕を贈与します

グラップラー〔格闘家〕マーシャル・アーティスト〔武 闘 家〕を含む格闘系ジョブのみで合計レベル五百に達しました

〔条件解放により、マーシャルアーツ・プリンセス〔武 闘 姫〕への転職クエストが解放されました〕

〔詳細は格闘家系統への転職可能なクリスタルでご確認ください〕

その後、そんな二つのアナウンスが私の元に届きました。



その後、結界が解かれたので、外に居た兄様達とへバビロニア戦闘団の皆さんが道場の中に踏み込んで来ました……………彼等はへUBMとの戦闘を覚悟して来ていたのでややごたつきましたが、アスカ氏が既に倒された事を知ると落ち着きを取り戻しました。

……………取り敢えずここでは話も出来ないという事で、事情を説明

する為に私達は格闘家ギルドに向かい、その一室で詳しい説明をする事になりました。

「……………つまり、ミュウちゃんアスカさんから武術の指導を受けて、その未練を晴らして成仏させたって事？」

「はい、そうなりますね」

そして、一通りあの道場であつた事（私の過去の事などは除く）を説明し終わると他の皆さんからは感心した様な視線を向けられました。

……………まあ、その後にはマリアさんやヘバビロニア戦闘団の皆さんから一人で〈UBM〉と戦わせた事を謝られたりしましたが、貴重な経験をさせて貰った事や特典武器を手に入れた事、そして【武闘姫】の転職条件を満たせた事などを説明して（超級職の事に関しては驚かれた）別に謝る必要は無いと納得して貰いましたが。

……………ああそうそう、アスカ氏から頼まれた彼女への伝言も伝えておきましょう。

「マリアさん、アスカさんが『迷惑掛けて悪かった』と言っていましたのです」

「そうですか……………あの人は本当にもう…………。ミュウさん、曾祖父の未練を果たして頂きありがとうございます、この御礼は後で必ずします」

……………正直、アスカ氏からは本当に色々なモノを貰ったので、そこまで畏まった物は要らないと言ったのですが「身内があそこまで迷惑を掛けたのに何もしない訳には行きませんが、何より次期【武闘王】に対してのクエストで何も報酬を渡さない訳には行きません」と言われてしまいました。

後、彼女は今回動いてくれたヘバビロニア戦闘団の皆さんにも報酬を渡そうともしていましたが「自分達はクエストに失敗した上、今回は殆ど何もしていない以上は報酬など受け取る訳には行かない」と固辞された様なのです。

そうして説明を終えた後、私は超級職への転職クエストを受ける為にマリアさんの案内で格闘家ギルドのジヨブクリスタルへやって来

ました。

「これが【格闘家】に転職可能なジョブクリスタルですね。……………さて、一応メインジョブを【武闘家】にしておいてつと……。確かに兄様達の言う通り、灰色の【武闘姫】の文字が出ていますね」

「……………それでは御武運を、次代の【武闘姫】の誕生を楽しみにしています」

そのマリアさんの言葉を受けて、私は色が薄い【武闘姫】の表示に触れて、出てきた【転職の試練に挑みますか】の質問に対して「是」と答えて、その直後にどこかへと飛ばされました。

◇

飛ばされた先は兄様や姉様が言っていた通りの奇妙な空間で、目の前には闘技場の様な舞台がありました。

……………そして舞台の前にある石版に【試練の番人を打倒せよ】【成功すれば、次代の【武闘姫】の座を与える】【失敗すれば、次に試練を受けられるのは一か月後である】と書かれていました。

「ふむ、どうやら兄様や姉様と同じ戦闘系の試練の様ですね。二人の話で聞いていた通りなのです」

『それはいいんだけど……………ミュウ、さっきの戦いでボクのスキルを使ったせいでコッチは大分戦力が減ってるんだけど…………』

あ、そうでしたね、久しぶりに全力を出してテンションが上がっていたので忘れてた……………い、いえ！ それに今の私はアスカ氏との戦闘の余韻で全力の集中が出来る様になつているので、今のうちに挑んだ方がいいと思つたのですよ！ 本当ですよ！

……………それに多分、私の枷はまだ完全に外れた訳じゃないですし、おそらく今後は余程の強敵と戦っている時にしか全力を出せないと感じるのです。

「ま、まあ、一応回復はしていますし、元々はティアンが受ける事が前提のクエストですからエンブリオの力がなくても大丈夫でしょう。……………それにこちらのアバターのスペックなら、全力で集中しても

疲労で倒れる事もないでしょうし」

『いや、ミュウの全力つてそんなに危険なモノだったの？ ……………  
本当に大丈夫？』

兄様と師範からは『身体が出来上がるまでは全力は絶対に出すな』  
と言われていますが……………まあ、あの事件の時に全力を出して倒れ  
たのは、まだ小学生だった私の身体がついて来なかった所為ですし、  
こちらの現実を遥かに超える力を持つ身体ならもう一戦ぐらいは大  
丈夫でしょう。

「……………それに、アスカ氏から頂いた新しい特典武器もありますし」  
『戦力になる様な物ならいいんだけど……………』

取り敢えずこの【武練闘布 アスカ】の能力を確認しましょうか  
……………えーと、形状はマフラー……………いえ、この長さだとスカーフで  
すかね？ ……で装備枠は外套部分、防御力は10と低くてステータ  
ス補正もありませんね。

……………さて、肝心のスキルの方は二つあるみたいで……………  
「二つ目は《武練昇華》というパッシブスキルですね。効果は『装備者  
の格闘系スキルのレベルを合計ジョブレベル百につき一つ上昇させ  
る』というものですね」

『うん、普通に使えるスキルだね。それにラーニングがメインの【武闘  
姫】に就く事が出来ればかなり有用なスキルだと思うよ』

フェイもそうですがラーニング能力にはスキルを獲得すればする  
程、それらを成長させ難くなるなどのデメリットがあるみたいで  
すし、そのあたりの事も含めて私にアジャストされたのでしょ  
う……………注釈に『このスキル効果で最大スキルレベルを超える事は出  
来ない』と『レベル十からレベルEXに上げる際には五百レベル分必  
要になる』とも書かれていますね、それでも十分に強力ですね。

……………そしてもう一つのスキルは……………  
「スキル名は《ア転<sup>ス</sup>成<sup>カ</sup>練<sup>技</sup>》……………武器の名前と同じルビがあるので  
ですね。それで効果は……………成る程、これなら試練も大丈夫そうですね」  
『確かにね、ボク達にアジャストされた強力な効果だよ』

そうして憂いがなくなつた私は、早速【アスカ】を装備して試練へ

挑む為に目の前の舞台へと上がりました。

## ミユウの試練・祐美の未来

□ 転職の試練の空間

マーシャル・アーティスト  
【武闘家】ミユウ

私が試練の舞台上に上がると、十メートル程先に身長百八十センチぐらいの人間……いえ、頭上に名前表記があるので人型のモンスターですね。

……そのモンスターは全身が灰色のボディスーツの様な物に覆われていて、顔には黒い仮面が装着されていました。

「えーと、名前は……」  
「マーシャルアーツ・トライアルホムンクルス」  
ですか。……あれが、試練の番人の様ですね」

『そうみたいだね……！ 来るよ！』

次の瞬間、相手は超音速機動で十メートルの距離を一瞬でゼロにしてこちらに踏み込んで……そのまま、私の身体の中央部分に光を纏う拳を打ち放ちました。

「……ふむ、この攻撃は《シャイニング・フィスト》ですか」

『……？』

その一撃を片手で捌きつつ半身になって躲した私は追撃の風を纏った蹴りを躲し、そのまま《バックステップ》で距離を取りました。……先程距離を詰めた際に使われたのはおそらく《アクセルステップ》みたいでしたし、格闘系のジョブスキルを使えるモンスターなのでしょうか？

……まあ、取り敢えずフェイに今後の行動方針を伝えておきますか。

（今の私の調子確かめたいので、しばらくは一人で戦わせて下さい）  
『分かったよ』

そう伝えてからフェイを後ろに下げた私は、追撃を仕掛けて来た「マーシャルアーツ・トライアルホムンクルス」を迎え撃つ事にしました。

……相手はまず両方の拳から衝撃波を放ちながらこちらに接近し、距離を詰めてからは拳・蹴り・掌底・組討・投技などの各種格

闘系スキルを駆使してこちらを攻め立てて来ました。

「……………やはり、様々な種類の格闘系ジョブスキルを使えるのですね」

「……………?」

……………私はそれらの攻撃を全て捌きながら、相手の能力と今の自分の調子を確かめて行きます。

先程、アスカ氏が使った様な超級職のスキル相当の攻撃を繰り出して来ない所を見ると、使えるスキルは上級職のものに限られる様ですね……………後、スキルの種類に関しては、おそらくほぼ全ての格闘系上級職までのものが使える感じでしょうか？

「ステータスは平均数千ぐらゐは余裕でありそうなので上位純竜……………伝説級、筋肉・血管・骨格の構造はほぼ人間と同じですね」

「……………?」

総評して『上級職までの格闘系スキル全てを習得し、それら全てを伝説級ステータスで完全に運用出来る人型モンスター』と言った所でしようか……………まあ、格闘家系統超級職の試練としては妥当な相手でしょう。

……………おそらく【武闘王】の《見稽古》で使えるスキルを与える役割もあるのでしようが、普通に強敵ですね。

『……………いや、その強敵の攻撃をスキル一つ使わず完璧に捌きながら言われても説得力が無いよ、ミュウ……………』

「まあ、流石に先程まで戦っていたアスカ氏の攻撃と比べればヌルいですし……………」

……………と、そんな事を考えながらも、先程から相手の攻撃に一度たりとも当たっていない私にフェイが突っ込んで来ました。

アスカ氏の武術がこの世界に存在する格闘系ジョブスキルを最大限に活かす戦い方だったので、その遥か上位互換の戦い方を見た後だと目の前の相手の戦い方が凄くヌルく感じるんですよ……………。

そもそも、彼からこの世界のスキルを用いた戦い方を学んだ今の私にとって、ただ教科書通りにスキルを使う相手の攻撃は全て先読みする事など容易い事なのです。

「それに、人型で肉体構造も人間と同じだから攻撃を先読みしやすいですしね」

今はまだ全力での集中が続いている所為で、相手の身体の動きが筋繊維の一本一本まで見えている事も先読みを容易くしていますし。

ちなみに、以前この視点の事を兄様に話した時には『一昔前に流行了たダークファンタジー少年漫画の最強キャラみたいな能力だな』とか言われましたね……………私は特殊な呼吸法で身体能力を強化とか出来ないし、この視点も常時使える訳ではないので大幅な下位互換だと思えますが……………。

「……………おっと、そんな事を考えるのは後にしましょう……………か！」

『!??!』

くだらない考え事を中断した私は、相手が放った《ライトニング・ストレート》を躲しながら《ミドルキック》で蹴り飛ばしつつ距離を取りました。

……………流石にそろそろ集中が切れて来ましたしね。

『そりゃあ、今日あれだけの戦いを繰り返せばそうなるよ……………』

そんな事を考えたら、フェイから呆れた様な言葉を掛けられてしまいました……………今日は色々あった所為でテンションがおかしな事になっていましたからね……………。

「と、取り敢えず！ そろそろケリをつけましょうか……………フェイ！」

『了解、必殺スキルだね』

そう言った私の肩にフェイが飛び乗って必殺スキルの準備をしました……………先程の戦いで使ってしまった所為で、まだ必殺スキルのクールタイムは終わっていませんが……………。

「それでは、新しく手に入れた特典武具などの試しと行きますか……………

《転成練技》！」

『我等が成るは光の使者』《エコー・オブ・トウワイス》！』

するとクールタイムがまだ終わっていない筈の必殺スキルが発動して、私とフェイは融合しました……………これが《転成練技》の効果、『自身のスキル及び装備スキルのクールタイムをゼロにして、それら



に掛かっているデメリット効果を無効化する』事なのです。

これにより、フェイが有するスキルのクールタイムがなくなり、更に《ミラクル・ミキシング》のデメリットで使用不能になっていたスキルももう一度使える様になったのです。

……まあ、このスキル自体に二十四時間のクールタイムが課せられているので、必殺スキルをもう一度使用出来る様にするのが主な効果になります。

「さて、相手の底は知れましたしさつきと終わらせましょうか……ねっ！」

『分かったよ……《ハイ・エンチャント・ストレングス》《ハイ・エンチャント・アジリティ》！』

私はフェイのバフ魔法によってSTRとAGIを上昇させ、更に《アクセルステップ》を使って高速で相手に接近し、それに対しての迎撃を掻い潜って《ライトニング・ストレート》をその胸に打ち込みました……ふむ、《武練昇華》の効果でスキルレベルが上がっているので、大分威力が上がっていますね。

……ですが、アスカ氏の技と比べると精度や練度がまだまだ未熟なので、もっと修行が必要でしょうか。

『……その割には、相手を一方的にボコボコにしているんだけど……』

「ですから、先程底は知れたと言ったのです」

何故かフェイからは突っ込まれましたが、そもそも相手の動きがもう完全に見切れてしまっているのです、どこに打ってくるかと事前に予告されている攻撃を避けて、相手が躲せないタイミングで防げない場所にこちらの攻撃を打ち込めばいいだけです……簡単でしよう？

『うーん……そんな簡単に認めちゃいけない話な気がするけど……』

「まあいいじゃないですか。……では、そろそろ仕留めましょう

《真撃》」

私が【武闘家】の奥義を使って事で決めに来ると察したのか、相手も《真撃》を使った上で中国拳法っぽい滑る様な動きでこちらの懐に潜り込んで来ました……………成る程、先程まではあえてこちらと似た様な動きで戦い、ここぞと言う時に動きの質を変えてこちらの不意を突く戦術ですか。

……………古今東西の格闘術を収める【武闘王】に就くのならあらゆる動きに対応出来る様になれ、と言う感じですかね。

「ですが、私は一人では無いのです」

『《アース・ウォール》』

『!??.』

接近して来た相手は、そのまま地面から突き出された土の壁にぶつかってその動きを止めました……………相手が仕掛けて来るタイムミングは読めていたので、事前にそのタイムミングで魔法を使う様にとフェイに言っておいたのです。

……………融合している状態なら、私の先読みとフェイの魔法を組み合わせる連携も可能みたいですね。試しが上手く言つてよかったです。

そして私は姿勢を低くしつつ、ぶつかった衝撃で碎けた土の壁に紛れて相手の懐に潜り込み……………

「《シャイニング・フィスト》！」

『!!』

そのまま、光を纏う抜き手で相手の心臓を貫きました……………そのまま腕を引き抜くと「マーシャルアーツ・トライアルホムンクルス」は光の塵になって消滅しました。

……………そして、私はその場で一礼をしました。

「……………今の私の状態も大体分かりましたし、なかなか良い仕合でしたのです」

『……………それで、超級職には就けたのかい?』

フェイがそんな事を聞いて来たので早速自身のステータスを開いてみると、私のメインジョブはちゃんと「マーシャルアーツ・プリンセス武闘姫」になっている

ました……………どうやら無事に超級職の試練を突破出来た様ですね。  
ちなみに【武闘姫】スキル欄を見ると、《見稽古》の他にも数多くの  
格闘系ジョブスキルが記載されていました。アスカ氏からの薫陶（物  
理）のお陰ですね。

「……………このスキルも、アスカ氏が残したモノの一つなのでですね。  
……………自分の才能の意味はまだ分かりませんが、こうやって私の才  
能のお陰で残るモノもあるのですね……………」

『……………ミュウ……………』

……………よし！ 決めました。

「取り敢えず、今日は疲れたのでこのままログアウトをして……………  
多分、明日は用事が出来るのでログイン出来ないと思います」

『分かったよ。……………頑張って、ミュウ！』

そんなフェイからの声援を胸に、私は自分の過去と決着を付ける決  
意を固めてログアウトしました。



□地球 加藤祐美 かとう ゆみ

そして翌日、私は学校が終わってからとある場所へと向かいまし  
た。

「……………一年ぐらい前には良く来ていたのですが、随分と久しぶり  
に感じますね……………真里亚ちゃんの家は」

そう、今、私は真里亚ちゃんの家の前に立っているのです……………  
漸く自分の才能に一步を踏み出す事が出来たのです、だったら彼女と  
の関係にもキチンとした答えを出そうと思いついてここまで来ての  
……………。

「……………いざ、ここまで来るとやっぱり緊張しますね。……………え  
えい！ ママよなのですー！」

そんな感じで色々テンパっている私は、そのままの勢いで玄関の  
チャイムを鳴らしました。

……………私の体感時間的には凄く長く感じましたが、多分実際には

少し後にインターホンから聞き覚えのある声が聞こえて来ました。

『はい、どちら様ですか?』

「その声は……真里亞ちゃんですね。……………私です、祐美です」

私がそう告げるとインターホンから息を飲む雰囲気伝わって来ました……………正直、心が折れそうですが、ここまで来てそんな事になる訳には行かないと思った私は、更に言葉を続けました。

「お願いします、真里亞ちゃん……………もう一度だけ話したいのです」

『……………分かったよ、祐美ちゃん』

……………どうかその言葉を告げると、長い沈黙の後にそんな言葉が返って来ました。

「……………ありがとうございます」

『……………うん、すぐ行くからうちに上がって。……………私も話したいから』

そんな言葉が聞こえてからしばらくして玄関のドアが開き、そこから真里亞ちゃんが出てきました。

「……………どうぞ、上がって」

「……………はい……………」

……………お互いに凄く気まずい空気の中でしたが、私は一年ぶりに彼女の家に上がる事になりました。



そうして彼女の家のリビングに通された私は、そこにあつたソファーに座って彼女と向かい合っていました……………ちなみに彼女のお母様は仕事で出かけており、お兄様は大学だそうです。

……………さて、勢いでここまで来たのはいいのですが、何を言えればいいのか……………

「……………ごめんなさいー!」

「ふええ?」

私が何を言おうか考えていると、いきなり真里亞ちゃんが頭を下げ謝って来ました……………お、落ち着け私! こういう時は深呼吸す

るんだ！ ヒツヒツフー……って、それは違うやつなのです！

……ええい、戦闘の時には常時平静でいられる私の脳もこういう時には役立たずですね！

私が突然の事態に物凄くテンパっているのを他所に、彼女は言葉を続けました。

「……一年前のあの日、祐美ちゃんは必至で私を守ろうとしてくれたのに……私は祐美ちゃんを見て怖くなって、あなたを拒絶してしまつて……本当にごめんなさい。……あれからずっと謝りたかつたけど、ずっと勇気が出せなくて……」

「あ……」

……そうだったのでですね……彼女も私と同じ様に一步を踏み出せなかつたのですか……。

「……こちらこそ、ごめんなさいなのです。……あの日、真里亚ちゃんを怖がらせてしまつた事、そしてそれ以来ずっとあなたを避けてしまつた事……本当はすぐにお話がしたかつたのですが、どうしても勇気を持てなかつたのです……」

「祐美ちゃん……」

そうして、一年ぶりに真つ直ぐ見た彼女の顔は目に涙を滲ませている泣き笑いの様な表情でした……まあ、私も同じくそんな変な表情でしょうが。

……そして、私はこの一年間ずっと言いたかつた言葉を彼女に伝えました。

「……真里亚ちゃん、もう一度私と友達になつてほしいのです」

「……はい！」

……こうして、私達の一年間に渡るすれ違いは漸く解消されたのでした。



それから私達は、この一年間という時間を埋める様に様々な事を話し合いました。

……………そこで驚いた事に……………

「では、真里亞ちゃんも〈Infinite Dendrogram〉をやっているんですか?」

「うん。……………お兄ちゃんから現実とほぼ変わらないリアリティがあるって聞いて、どうにかしてあの時の恐怖を克服したいと思ったからやり始めたんだ」

「どうやら、そういう事らしいですね……………ちなみに、彼女が所属している国はレジエンダリアだそうです。」

「こうして祐美ちゃんともう一度友達になれたのも、あの世界で色々な事を経験したからだからね。……………特にフレンドのL.S.エルゴ・スムさんには祐美ちゃんの事を含めた色々な相談に乗って貰って、凄くお世話になったなあ」

「へえ……………」

真里亞ちゃん曰く、LSさんは初めてログインして右も左も分からなかった彼女にデンドロの事を色々教えて手助けをしてくれた人で、レジエンダリアにおける上位クランのオーナーを務めている凄人だそうです。

更に孤児院や幼年学校への募金などの慈善事業を積極的に行ったり、テイアンの子供達を守る為に〈U B M〉ユニーク・ボス・モンスタに戦いを挑むぐらい子供好きな人らしいのです。

「その戦いにはLSさんのクランのメンバーも総出で挑んでいて、私も偶々近くに居たから協力したんだ。……………まあ、その古代伝説級〈UBM〉と私の〈エンブリオ〉との相性が良かったから、私がMVPを取っちゃったんだけどね」

「じゃあ、真里亞ちゃんは特典武器を持っているのですか、凄いです。……………というか、古代伝説級とか私も倒した事がないのです」

私達が交戦した〈UBM〉は伝説級までですしね……………姉様の「ドラグテイル」はガチャ産ですし。

「でも、倒せたのはLSさん達が必死で援護してくれたから、偶然通りかかっただけの私が特典武器を手に入れちゃったのは申し訳無かったけどね」

「それでも真里亚ちゃんが凄いのは変わらないと思うのです。……私も特典武器を持っているから、MVPがただそこに居るだけで取れる様なモノではない事は知っていますのです」

ちなみにそのクラン——〈Y L N T 倶楽部〉(アルファベットの意味は知らないらしい)の人達は『無事だった子供達の笑顔こそ俺達への最大の報酬故に気にする事はありませんぞ』と言ってくれたらしいのです………凄いい人達ですね。

………レジェンダリアにはH E N T A Iが多いという話を耳にした事がありますが、そういう人達も居るみたいなので色眼鏡で見るのは辞めるべきですかね。

その後も私達は色々な話をして、気がつけば外が暗くなり始めていました。

「………おっと、どうやらもう時間みたいなのです」

「あー！ ホントだ。もうこんな時間だね」

色々な話をしたせいで、かなり時間が経ってしまっていた様ですね。……正直、あつという間にだった気もするのです。

………おっと、実はもう一つだけ彼女に言っておきたい事があったのです、

「じゃあまた明日。………今度は学校でお話しましょう」

「！ ……うん！ また明日ね！」

………こうして私達は色々なすれ違いや回り道をしながらも、漸く未来へと足を踏み出したのでした。

## 閑章 昔々のお話

先々期文明のとある技術者達の話：或いはその成れの果て

□ とある【技師】の話

……………私が「ソレ」を最初に見た時、言葉に言い表せない程の衝撃が全身を走った。

世界に名を轟かせる名工フラグマン氏が作り上げた五騎の煌玉馬の初号期【黄金之雷霆】……………その黄金の馬体が背に超級職の人間を乗せ、その名の通り雷霆を纏いながら地を駆け、天を駆けるその姿に私は憧れたのだ。

……………私はその後、どうにかして煌玉馬に関わりたいたいと思い、機械を作り整備する【技師】の道を歩み始めた……………本当は煌玉馬に乗りたいたいも思っていたが、残念ながら私には【騎兵】の才能が無かった。

幸いなことに私には【技師】としてはそこそこの才能があり、サブジョブとして【整備士】や【設計士】にも就き、努力の結果もあってどうにか上級職にも就く事が出来た……………そして、私と同じ様に煌玉馬を作りたいも思っている同士達とも出会う事が出来た。

それから仕事の傍ら煌玉馬の研究をしていた私に一つの転機が訪れた……………量産型煌玉馬の開発計画にスカウトされたのだ！

私は即座に承諾し『量産型煌玉馬開発計画』のメンバーの一人になった……………そこにはかつて知り合った同士の姿もあったので、チームにはすぐに馴染む事が出来たのは幸いだった。

煌玉馬の量産機の開発は難航したが、かのフラグマン氏からの技術協力といくつかのスポンサーに恵まれた事でどうにか初期量産型煌玉馬の開発に成功したのだった……………とはいえ、その初期量産型煌玉馬は技術レベルとコストの関係でオリジナルに搭載されていた「動力炉」と「特殊機能」を廃止して、搭乗者のMPを微量消費して地を駆けるだけの物だったので自分達にとっては満足いく出来では無



かったが……。

それでも、かのフラグマン氏が開発した作品の一つである煌玉馬を、大幅なデッドコピーとはいえ量産に成功した私達チームはは一躍有名になり、多くのスポンサーや国からの依頼も来る程だった………。最も、私達にとつて一番嬉しかった事は彼等から大量の資金援助と技術開発の協力を得られた事だったのだが。

多くの援助を受けた私達は、早速量産型煌玉馬に特殊機能を搭載する次世代量産型煌玉馬開発計画を実行に移したのだが………。これはかなり難航した。

何せ“動力炉”はフラグマン氏の秘中の秘であるため私達では開発出来ず、オリジナル煌玉馬の各種特殊機能を搭乗者のMPのみで使うには魔法系超級職クラスのMPが必要になってしまうからだ（そもそも魔法系超級職なら自前のMPで超級魔法を使った方が明らかに強いだろう）………。そこからは様々な試行錯誤の日々だった。

その一つに私が開発した事前にMPを蓄積しておける高性能バッテリーを煌玉馬に搭載するプランもあつたが、そのレベルのバッテリーを煌玉馬に搭載出来る程に小型化する作業は難航し、ようやく出来た小型バッテリーもコストや整備性などに問題を抱えた代物だったので、結局技術試験機が一機作られただけでお蔵入りになってしまったが……。



………。それらの技術開発を経て、MP変換炉の高効率化と搭載機能を飛行と簡易バリアに限定するプランでようやく次世代量産型煌玉馬の設計図とその雛型と言える機体が作れたのだが………。それと同時期に、私達でも予期せぬ事態がこの世界を襲った。

………。“化身”の襲来である。

異大陸船から現れた“化身”達は瞬く間にこの大陸を蹂躪した………。あのフラグマン氏が作り上げた煌玉竜すらも“化身”達に

は通じなかつたと聞いた時には、あまりの驚愕に私は気を失ってしまつた。

……… “化身” による蹂躪が始まつてからしばらくした時、私達メンバーもシエルターに避難する事になつたが、その際に私達は複数のチームに分かれて各々が煌玉馬の研究データを持ち、それぞれ別々のシエルターに避難する事にした……… 私達は『あのフラグマン氏の兵器すら通じなかつた “化身” には、この大陸の全戦力を持つてしても勝つ事は出来ないだろう』と考え、せめて自分達が作った量産型煌玉馬を未来に伝えようと思つたのだ。

……… 誰か一人でも “化身” から生き残る事が出来れば、後世の人間に私達が作った量産型煌玉馬のデータが伝わるかもしれないと期待して……。

私がいちチームが避難したのは大陸西側にあるシエルターの一つで、そこでは同じく避難していた技術者達が比較的多かつた……… その中でもリーダー格の人物は「大教授」の超級職に就いていた男だつた。

彼は生物工学の分野においては世界最高峰の人間——フラグマン氏は生物工学には手を出していなかつた——で、自分達の研究チームと一緒にこのシエルターに避難していた様だ……… そして彼は『いつの日か “化身” を打倒出来る技術を作り上げてみせる！』と豪語して、更にその為の協力を他の技術者や魔術師達に求めていた。

……… 私達は “化身” の打倒など不可能だと半ば諦めていたので聞き流していたが、彼の『なら、せめてこのシエルターの人達の生活を良くする為に協力してほしい』という言葉には技術者としては思うところはあり、結局私達のチームも彼と協力して技術開発と研究をする事になつた……… まあ、やはり私達も科学者だつたのだろう、人の為に研究している間はそれなりに充実した日々を過ごす事が出来ていた。

私達チームが対 “化身” 用の研究として行なつていた事は、私が持ち込んでいたバッテリー搭載型の試作煌玉馬の改造だつた……… と言つても殆ど自分達の趣味で改造していたが。

とりあえず、その試作機をバッテリーが尽きるまでの間、オリジナル煌玉馬に近いレベルの機動が出来るまで強化する事が出来たのは結構嬉しかった……最も魔改造が過ぎた為か整備性や運用性にはかなり問題を抱えており、それ以前にこのシエルターにはソレに騎乗出来る程の人間はいなかったが。

◇

それからいくらかの時間が経ち私が壮年と言える様な年齢になった頃、リーダーの「大教授」がこのシエルターに居た技術者・魔術師達に一つの提案をした……『ここに居る者達の脳を使って超高性能なコンピュータを作ろう!』と……。

……流石にあまりにも突拍子の無い提案だったので、その提案を聞いた私達は困惑した……だが、彼の話の話を聞くに連れて次第に賛同する人間が増えてきた。

その主な賛同理由を簡単に言えば『これまで研究してきた何の成果も出せず、更には寿命が尽きそうだから』である……実際シエルター内の環境改善はそれなりに上手くいったが、肝心の対「化身」用技術の開発は全くと言っていいほど進歩が無かったのだ。

……まあ、私達が作った煌玉馬も「化身」と戦えば瞬殺されると断言出来る程度の物でしか無いから……そして、それが割と上手くいった側の研究であるというのがこの実情である。

また、シエルターの環境改善も限界が来ており、これ以上の維持・開発を行うには高性能な演算装置が必要になるというのも理由の一つであるだろう……そして、その為の材料はこのシエルター内には他に無かったという事もある。

更にこのシエルターに居たもう一人の超級職「パベット・プリンセス人形姫」の女性——彼女は自分の研究に没頭しており、私達と話す機会は殆ど無かった——がその計画に賛同した事で、その場に居た人間達の多くは賛同に傾いた……だが、私達チームがその提案に乗った理由の最も大きなところは、彼が発したある言葉にあるのだろう。

……『私達の頭脳を結集させれば、あのフラグマン氏以上のモノが作れる筈だ!』……という言葉に……。

やはり、頭では彼が別格の存在だと解つていても、心の何処かには彼への嫉妬や対抗心があったのだろう……最も、こんな計画が実行に移される事になったのは、こんなシエルターの中でただひたすら研究を続けた結果、思考が狂気に犯されていた所為なのかもしれないが……。

……私は特に自分の生に未練は無いが……強いて言うなら、私達チームが作り「マグネトロベ」と名付けたあの煌玉馬が未来に残ってくれればいいのだが……。



□?? シエルター管理用人口知能【アークブレイン】

こうして、彼等の脳を素材としたシエルター管理用人口知能は完成した……少なくとも、そんな事が出来るぐらいには【大教授】と彼等研究者達は優秀だった。

そして、その名前は名工フラグマンが就いていたジヨブアーチ・ワイズマン【大賢者】からとって【アークブレイン】と名付けられた……その【アークブレイン】は素材となった科学者達の技術と知識を全て受け継いでいた。

この【アークブレイン】には主に二つの命令が与えられていた……『シエルター内環境及び人員の守護・保守・管理・発展』と『対“化身”技術の開発』である。

最初の方はその莫大な演算能力においてシエルター内の環境を大幅に改善し、研究者達が残した対“化身”技術を大幅に高性能に改良したりも出来ていた……少なくともその力によって、諦めと不満が蔓延していたシエルター内の人間に希望を持たせる事には成功していた。

だが、そのシエルターにはひとつだけ不幸に事があった……そのシエルターで“化身”達の目を誤魔化していた隠蔽結界が非フラ

グマン製の不完全なモノで、時間経過によって綻びが出来てしまった事である。

その結果、施設を管理していた「アークブレイン」の存在が「化身」達に気付かれてしまったのだ………そして「大教授」が中心となって作り上げた「アークブレイン」は、自意思意を持つ非人型範疇生物<sup>モンスター</sup>であった。



【〈U B M〉認定条件をクリアしたモンスターが発生】

【〈過去に類似個体なしと確認。〈U B M〉担当管理AIに通知】

【〈U B M〉担当管理AIより承諾通知】

【〈対象を〈U B M〉に認定】

【〈対象に能力増強・死後特典化機能を付与】

【〈対象を古代伝説級——【完理全脳 アークブレイン】と命名します）



?? 【完理全脳 アークブレイン】

………【アークブレイン】は自身が「化身」の能力影響下に入つた事をその莫大な演算能力で即座に理解し………その結果、それは壊れた狂った。

だが、【アークブレイン】は〈U B M〉になつても、かつて自身に与えられた命令は忘れる事は無かった………その行動方針は大きく変化したが。

まず、「化身」達からシエルターを守る為に〈U B M〉化して強化された自身の能力を持ってシエルターの防衛機構を全力で拡張・強化したのだ………シエルター内の人間の生活用リソースを犠牲にして。

その結果として生活水準が下がり、未来に希望を抱いていたシエル

ター内の人間は一転して暴徒と化してしまった………【アークブレイン】は即座に彼等を配下の警備用モンスターを使って鎮圧し、強力な【催眠】を掛けて幸福な生活が出来ていると思いつまませた上で、増設したシエルター最下層に保管した。

更に【アークブレイン】はその保管した人間達を生きたまま栽培し、シエルター内を管理する為の動力源として利用し始めた………彼等の意識は新しく編み出した精神干渉スキル《燈幻狂》で作り上げた仮想空間内に閉じ込めて、そこで幸福な生活を送らせているが。

また、その事件によって幾らかリソースに余裕が出来たので、【アークブレイン】は更なる戦力の増強を開始した。

………例えばとある科学者達が作った試作煌玉馬を、自立機動する黄金の機械人馬に。

………例えばとある【人形姫】が亡き娘を模して作った人形を、永久に踊り続ける舞踏人形に。

………例えばとある【大教授】が対「化身」用に作り上げた魔獣達を、より強力な融合魔獣に。

そのように戦力を強化していく中で自立意思を持ち再現不可能なモノが〈UBM〉化する事態も発生したが、それらが作成者である【アークブレイン】には友好的だった事と、そのスキル《ハイパーデーターリンク》——自身の作製物との距離を無視した情報共有を可能とするスキル——によって協力関係を築く事が出来ていた………また、いくつかの実験の結果〈UBM〉するのは【アークブレイン】の制御下でないモノ達であり、自身が完全に制御下においているモノは〈UBM〉には認定されない事も分かった。

そして、その後も【アークブレイン】はシエルターの防衛・強化と対「化身」技術の開発と実験をただひたすらに続けて行き、その結果シエルターの防衛能力の大幅な強化や配下であるモンスターの増産を進めていった………その最中〈UBM〉化したモンスターが説得を受け入れず制御下から外れる事もあったが、それらのモンスターも《燈幻狂》で催眠をかける事によって封印、又は思考を誘導する事で対処出来たので基本的には問題無かった。

……………最も、彼等が〈UBM〉化している時点で“化身”の管理下にあるので、対“化身”というその在り方は根本的に矛盾しているのだが……………既に狂った「アークブレイン」はその事に気付く事は出来なかった……………。



??□ 管理AI4号ジャバウオック

……………ふむ、「アークブレイン」はなかなか面白い事になったな。……………まさか、自力で〈UBM〉に認定されるモンスターを作成し、更にそれらと協力関係を結んでいくとは……………。

シエルターの強化や拡大にしたがって自己強化もしているようだし、いずれは神話級……………制作物を制御するあのスキル次第ではその先に至る可能性もあるか……………。

……………問題は、その在り方からこちらに引き込む事がほぼ不可能な事なのだが……………まあ、基本的にシエルターを防衛しながら地下に籠って技術開発をしているだけであるし、地上のパワーバランスに影響を及ぼす事はあまりないだろう。

……………とはいえ、地上に〈マスター〉が現れた時には何か行動を起こす可能性もあるか……………それまでにイレギュラーになっていればこちらで処理をする事にして、そうでなければ〈マスター〉達への試練の為にあのシエルターの情報を地上に出すのも面白いだろう。……………何せ、今のあのシエルターは難易度だけなら神造ダンジョン深層にすら匹敵する最高難度の自然ダンジョンだから……………〈SUBM〉はなかなか数を揃えられないのだし、〈マスター〉達への試練は多い方がいいだろう……………。

## アルター王国一周旅行・北の厄災 色々な問題

□アルター王国北部 【突撃騎兵】チャージライダー レント

ミュウちゃんが超級職に転職してからしばらく、デンドロが始まってからこちら側の時間で一年が過ぎた頃、俺達は旅行の続きをする為にクレールミルを出て一路東へ向かっていた………ちなみに、そのまま北西にあるルニングス公爵領に向かう案もあったのだが、『なんか東に行った方がいい気がする』というミカの鶴の一声でこうなったのだ。

今は「マグネトロベ」でクレールミルで買った新しい馬車（ある程度の速度を出しても大丈夫な頑丈なもの）を引いて、クレールミルから北東方向をミカの直感の導きに従って進んでいるところだ。

「それで？ こっちで合っているんだよね？ ミカ」

「うん、多分ねー。………この先に何があるかは分からないけど」「ですが、地図を見るとこの先はだいぶ濃い森になっているのです。このままだと、馬車が使えなくなるかもしれません」

ミュウちゃんの言う通り、この先にある森を馬車で進むのに難しいか。これ以上進むなら馬車を閉まって徒歩で行くか「マグネトロベ」で空中を進む事になりそうだ。

………幸い偶に出て来るモンスターは俺とフェイの援護を受けたウチの妹二人が殆ど瞬殺しているから、特に問題にはなっていないが……。

「しかし、ミュウちゃんは超級職に就いてから大幅にパワーアップしたよね」

「確かに、動きのキレが上がっている感じがするな」

「それはアスカ氏が教えてくれて【武闘姫】のスキルでラーニングした各種ジョブスキルと、彼が残してくれた特典武器のお陰ですね。………後は、自分に掛かっていた枷が少しだけ外れたのもありますが」



そう、喜ぶべき事に先日ミュウちゃんは去年の事件から疎遠になっていた友達との和解に成功したのだ………ちなみに事情を聞いた俺とミカは大喜びして、その晩叔父さん叔母さんと一緒にパーティーを開いたりもした（尚、少しはしゃぎ過ぎた所為でミュウちゃんからは若干引かれたが）。

………それに、あの事件を阻止出来なかった事は俺とミカもかなり気にしていたから、これで心のしこりが大分取れたかな。

「レベル上げも兼ねたこれまでの戦闘で【武闘姫】の特性やラーニングしたスキルの使い方も大分把握しましたから、これからはもつとパーティーの戦力になれるのです！」

「………これまでも充分に戦力になっていたと思うが」

まあ、ミュウちゃんが喜んでる様だし良しとしようか………問題は俺の事なんだが。

「これで超級職を取っていないのは俺だけか。………俺も何とか超級職を取れたらなあ」

「お兄ちゃんは【ザ・スキル技神】の転職条件を満たしていたでしょ？」

『そういえば、最初に試練に挑んでから以降の様子は聞いていないね』

………つい愚痴が口をついてしまったが、そこを聞いてしまうかミカとフエイよ。

「別に何か伝える程に進展がある訳じゃないからな。………毎回、瞬殺されているだけだし」

「………一応相談に乗りましようか、兄様？ 私達でも何か力になれる事はあるかもしれませんし」

「そうだね！ 一人で悩んでいると行き詰まる事も多いから、話をするぐらいはした方がいいんじゃないかな？」

そこまで言うなら話そうか………と、言っても何から語るべきか………。

「じゃあ、まずは先代【技神】アバターのスペックについてだな。………これまでの戦闘経験から、あのアバターのスペックはオリジナルと比べると『心技体のうち心が無く、技は劣化していて、同じなのは体ステータスだけ』ぐらいだと思う。………後、何度も挑戦した結果、前

回の試練の戦闘経験を受け継いだりはしない事も分かっている」

「つまり、相手はこちらの事を常に初見の状態という事ですね」

「そういう事だな」

なので、有効な手段があれば次回以降の挑戦でも攻略手段の一つとして使えるという事になる……………問題は、その有効な手段を未だに発見出来ていない事だが……………。

……………一応、最初の頃と違ってステータスが上がって動きにも多少慣れてきた今なら、初太刀以外の遠隔斬撃ぐらいはある程度凌げる様になったんだが……………。

「初太刀以外？」

「ああ、最初に鞘から抜刀する時だけ相手のA G Iが桁違いに上がっているみたいでな、多分百倍ぐらい。……………後、遠隔斬撃の正体は刀身をオーラっぽいもので伸ばしている事が分かっている」

「それは、多分抜刀術系のスキルだと思っただけです。……………クラスメイトの子が『天地には抜刀時にA G Iを増加させるスキルがある』と言っていたので、おそらくその系列にある超級職のスキルでしょう」

多分ミュウちゃんの言う通りだろう……………なので、初太刀だけは【救命のブローチ】で凌ぎその後の攻撃は短剣で凌ぐ形で、相手の攻撃を五回ぐらいまで防げる様にはなったんだが……………。

「そうやって防いでいる隙にいつの間にか接近されて、気づいた時には身体を両断されている……………というのが最近のパターンだな。……………先代【技神】さんの剣技は、遠隔斬撃と刀の間合いでの斬撃を比べると天と地ぐらい差があるからなあ。遠隔斬撃を防ぐのもギリギリなのに、接近されるとなすすべが無く一太刀で真つ二つにされる」

「……………つまり、遠隔斬撃は接近する為の布石でしかないという事ですか」

そういう事だ……………最も、その布石ですら気を抜けば一瞬で即死する攻撃なので、遠隔斬撃を凌ぎながら先代【技神】の接近を妨げる事は今の俺には不可能だが。

……………おそらく、この試練は『ミュウちゃんクラスの才能の持ち

主が複数の超級職に就いている』事が前提条件なんだろう。俺も色々な工夫をしてはいるんだが……。

「二応前回の試練では【死兵】と【決死隊】を取った上で、身体デス・ソルジャーに自分のHPがゼロになった瞬間に発動する【ジェム】を大量に身につけておいて、相打ち狙いでダメージ倍加自爆する戦術を使ってみたりもしたんだが……返しの太刀で魔法を切り裂かれてあっさりと対処されたしな」

「うーむ……自爆カウンターもダメか」

「そもそも、超級職に複数就いているという事はステータスも相応のものでしょうし、上級職の奥義ぐらいで倒せるのでしょうか？」

多分、ステータスも平均数万はあるだろうし無理（断言）………ステータス・スキル・技術に差がありすぎて今のところどうしようもないんだよなあ。

後は、前回の試練の後に解放された【マグネトローベ】の最後のスキルが希望だな………上手く使えば先代【技神】にもダメージを与えられそう（倒せるとは言っていない）なスキルだったし、相性の良い【突撃騎兵】と騎乗時に槍を使う為に【槍士】のジョブを取ったから次の挑戦までに練習とMPの蓄積をやっておこうか。

………さて、色々と話したお陰で考えも纏まったし、この話はここまでにして話題を変えようかな。

「まあ、1パーティーに超級職が集まっていると色々悪目立ちするみたいだし、俺が超級職を取るのももう少し後でもいいさ」

「まあ、デンドロが始まって現実ではまだ四ヶ月ぐらいだから、この時期に超級職を取った人間はどうしても噂になっちゃうしね。………超級職を独占しているとかいちやもんをつける奴も居たし」『それでPKまでしようとする人も居たから、嫉妬って怖いね。………まあ、全員返り討ちにしたけど』

「他人に嫉妬する程度の有象無象に負ける程、私達は弱くないですからね」

つまり、クレール滞在中にそんな事もあってちよつと居づらくなった事と、そこで起きた色々なイベントのせいで滞在期間が長く

なっていた事が街を出ようと思った理由になるんだよな……………まあ、ティアンはマリアさんの様な良識的な人物が殆どだったし、ヘバビロニア戦闘団の皆さんもフォローしてくれたから、そこまで問題にはならなかったが。

……………そして、話を続けるうちに、ミュウちゃんが今一番問題になっている事を口に出した。

「……………後、私達に取材の依頼が来た事には驚きましたね。確かエフさんでしたか」

「そうだねー。確かりアルで作家をやっていて、自分の作品の材料を探すためにデンドロをプレイしているんだってね」

……………そう、先日俺達の元にエフと名乗る「マスター」が『各地で様々な事件を解決しており、この「Infinite Dendrogram」でも希少な超級職に就いている貴方達に是非取材がしたい』と依頼して来たのだ。

その際に向こうから提示された報酬が非常に高額だった事と、ミカの勧めがあった事もあって俺達は彼の依頼を受ける事にしたのだ……………取材自体はごく普通に俺達が遭遇した事件の事を聞かれるぐらいだったし、こちらが話せない事についても多少聞き返されたぐらいで深くは聞いて来なかったため、その取材自体は普通に終わったんだが……………

「それでミカ、お前はエフ氏を危険人物だと言っていたが、あの取材を受けても良かったのか？」

「うん、あの取材自体は危険の無い普通なものだったし……………何より、あそこで取材を受けない方が危険な気がしたからね」

「成る程……………では、先程からずっと上空でこちらを見ている不可視の球体は彼の「ヘンブリオ」でしようか？」

……………俺達が街を出てからしばらくした時、ミュウちゃんが上空から視線を感じたので《第六圏》——ラーニングしたスキルの一つで周辺の気を読む感知スキルらしい——を使ったところ、上空に不可視の球体が浮いている事を感じたらしい。

一応、俺の風属性感知魔法や、ミカの《竜意圏》でも三つ程の球体

が上空にある事を確認しており、更に《魔力視》などで調べたところ光属性の光学迷彩魔法で姿を消していると推測出来た。

『それで？ その球体は放置していいのかい？』

「今のところ危険は感じないし放置で。……………多分、破壊しても意味がないと思うし」

「まあ、本体をどうにかしないと変わりを送ってくるだけだと思うのです。……………彼は、自分の目的の為なら手段を選ばないタイプに見えましたし」

「光学迷彩を使っている事と、さつきからの会話に対して反応が無いところを見ると、おそらくは光属性の《エンブリオ》だろうから音までは拾えていないと思う。一応、読唇術とかで会話の内容を悟られない様に位置取りには気をつけているしな」

なので仕掛けて来たら返り討ちにするというのが、今のところの基本方針になっている……………念の為、光属性耐性を上げる《シャイン・レジスト》の【ジェム】は全員に持たせているしな。

……………問題は……………。

「この先で起きるトラブルでちよつかいをかけて来る事だな。……………ミカ、この先で起きる事件はどのくらいの規模かわかるか？」

「うーん……………はつきりとは解らないけど、規模だけなら【ハデスロード】の時以上。しかも、事前に規模を低くする方法が無い感じかな」

……………それは物凄くヤバイ事件じゃないか？ あの【ハデスロード】は事前に一番弱い時を狙い撃ちにしたからどうか出来た様なものなんだが……………。

「では、彼はさつきと始末した方がいいですかね？ ……………彼の目を欺く方法がありますし、時間をかければ上の端末から《第六圏》で位置を逆探知できそうですなので、でき次第ちよつと行って来ますか？」

『以前、目を誤魔化すのに丁度いいスキルをラーニングしたしね』

「それは待ってね、二人共。……………多分、まだ始末はしない方がいい気がするから」

なんか、妹達が非常に物騒な話をしているのは聞かない事にしよう  
………と、思ったその時、進行方向上の森の奥から何かが発火して  
いる様な音も聞こえてきた。

「むー！ お兄ちゃん、馬車はお願い！ 多分、あっちに行つた方がいい  
気がする！」

「姉様！ 私も行きますー！」

その悲鳴を聞いたミカはそう言つて即座に馬車を降り、悲鳴が聞こ  
えた方向に超音速で駆けていき、更にミュウちゃんも肩にフェイを乗  
せてミカの後を追つて走つていった。

「さて、俺もさつさと馬車を仕舞つて後を追うか。………頼むぞマ  
グネトローベ」

』  
』  
二人が走り去つてから直ぐに、俺は馬車を手早く仕舞つて「マグネ  
トローベ」に乗り空を駆けてその後を追つた。



□??アルター王国北部 フラッシュマンサー 【閃光術師】エフ

三兄妹から数百メートル程離れた森の中、そこには片目を瞑つた一  
人の男が居た………ただし、その瞑つたままの片目には数百メート  
ル先に居るはずの三兄妹の馬車を上空から見た光景が写っていたが。

………彼の名前はエフ。以前に三兄妹を取材した「マスター」で  
あり、その目に写されている光景は三兄妹の上空に光学迷彩状態で滞  
空させている球体——彼の「ヘンブリオ」【光輝展星 ゾディアック】  
によつて視覚スキルを遠隔発動させる事によつて実現している。

（ふむ、今のところ彼等が事件に遭遇した様子はありませんね。  
………道中のモンスターは亜竜級であつても瞬殺されていますか  
ら材料にするは物足りませんし）

彼が三兄妹について知つたのは、取材の為に王国内を散策している  
最中に『王国内で様々な事件を解決している三人組がいる』と言う噂  
を耳にした事がきっかけである。

そして偶々クレールミルに立ち寄っていた際に超級職騒動で目立っていた三兄妹を見つけて、もしかしたら噂の三人組ではないかと彼にしては珍しく普通に取材を申し入れたのだ。

(咄嗟の思いつきでしたし報酬もかなりかかりましたが、王国で噂になつていた事件の詳細も知る事が出来ましたし、取材を申し入れたのは正解でしたね。……………何より取材時の彼等の発言や事件への遭遇する頻度及びその解決速度、後は勘になりますがおそらく彼等が事件へ遭遇しているのは偶然ではない可能性が高い気がしますし)

……………なので、こうして追跡していれば、今まで見た事がない事件の光景を目にする事が出来るかもしれないと彼は考えているのだ。

(まあ、たとえ意図的ではなく偶然であったとしても事件が起きてそれを見れば良いのですし。……………事件が起きない様ならばこちらで起こしてしまえば、未だに貴重な超級職〈マスター〉の戦いを見る事が出来るでしょうね)

……………同時にそんな物騒な事も考えながらエフは三兄妹の追跡取材を続行していたが、ある時に突如として彼等の進行方向から爆発音が聞こえてきた。

そして、それとほぼ同時に馬車に乗っていた二人がそこから飛び降り超音速で音が聞こえた方向へと駆けていき、更にそれを追つてレントが機械馬に乗って空を駆けて行く光景がその目に映った。

(ふむ、どうやら何かが起こった様ですね。……………さて、彼等はどんなリスクを私に見せてくれるのでしょうか)

……………そう考えながら、エフは「ゾディアック」を動かして彼等の後を追わせつつ、自身も爆音が聞こえた向けて足を運んだのだった。

## 事件の序章

□アルター王国北部 【戦棍姫】ミス・プリンセス ミカ

爆発音が聞こえて来てから、私とミュウちゃんはその方向へ全速力で走っていた………近づくに連れて爆発音以外にも剣撃の音や複数のモンスターらしき声も聞こえて来たので、どうやらかなりの規模の戦闘が繰り広げられているみたいだね。

「見えて来たね。……あれは」

たどり着いたそこで私が見たものは、空を飛び回り或いは地上を走り回る様々な種類のモンスター達が続々と集まって来ていて、それらに取り囲まれた数台の馬車を守っている騎士達が激しい戦いを繰り広げている光景だった。

………また、馬車を守っている者達の中に一際目立つ一台の戦車と一人の着ぐるみがあり、その戦車は砲撃を撃って周囲モンスターを駆逐して、着ぐるみ（多分カンガル）は手に持ったハンマーで近づくモンスターを殴殺していた。

「爆発音はあの戦車から聞こえて来たみたいだね。………ていうか、あれは多分シュウさんだよな？」

「姉様、それより早く助けた方が良いと思いますよ。………馬車の中を《看破》した所、あの中には戦えない人達がいる様なのです」  
「おっと、そう言う事なら早く助けに行きますか」

そう言った私はとりあえず戦闘が行われている場所に突っ込み、そのまま近くにいたモンスター達を薙ぎ倒していった………しかし「ブラックウルフ」に「ホブゴブリン・ウォリアー」に「ツインヘッド・ヴァイパー」などと、私が屠ったモンスターだけでも種類が見事にバラバラだね。

また、それらのモンスターはお互いを襲う事が無く、更に近くにいる人間だけを狙っているみたいだし………これは以前の「テンプテーション・マンティス」や「ラーゼクター」の時みたいな精神干渉、それもより大規模なヤツだね。

………そうやってこの事件の原因について当たりをつけながら、



私は敵中を突破して馬車に接近する事が出来たので、ひとまず周囲の敵を吹き飛ばしてから近くにいた女性の騎士に話を聞く事にした。

「《テンペスト・ストライク》！ つと、大丈夫〜？」

「え!? はっはい、大丈夫です。……つて、貴女はミカさん!?？」

「おや、確かりリアーナさんだったかな？」

なんか見覚えがあると思ったら、以前王都で起きた事件を解決した時に遭遇したリリアーナさんだったみたいだね。

………とりあえず、今のうちに詳しい話を聞いておこうか。

「それで？ これは一体どう言う状況なのかな？ なんかピンチっぽかったから殴りこんだけど。……あ、今更だけど助けっっている？」

「あ、はい！ 私達はこの馬車をクレールミルまで送り届ける任務を行なっていたのですが、いきなりこのモンスター達に襲われて応戦していて、偶々近くにいた《マスター》のシュウ・スターリング氏の協力でなんとか持ちこたえていた所で……後、助けは大歓迎です！」

成る程、やつぱりあつちで戦っているのはシュウさんだったみたいだね………守る馬車が近くにいて、更にこの乱戦だと広域殲滅もやり難いか。

「それじゃあ、私とミュウちゃんて馬車を守りながら周りの敵を倒そうか。フエイちゃんは怪我した人を回復させつつ援護で。……後、シュウさんはほつといても自分で何とかするだろうから放置で」

「分かったのです」

『了解』

何か向こうの方から『凄く雑に扱われた気がするガルー！』と聞こえた気がしたけど、そもそも戦えない人が乗った馬車及びティアンの騎士達とシュウさんならどちらを優先するかは考えるまでも無いしねえ。

………と、そんな事をしている間にも、向こうから突っ込んで来る『デュアルホーン・デミドラゴン』を初めとして、色々なモンスター達が地面を走って来たね。

「ミカさん！ 危な《ギガント・ストライク》！ 『GYAAAAA!!』

とりあえず、私は突っ込んで来た『デュアルホーン・デミドラゴン』

をメイスの一振りによるカウンターでそのツノを粉々にしながら吹き飛ばして光の塵に変えた。

更に向こうからやって来るモンスター達を《ウェイブ・インパクト》——地面にメイスを叩きつけ、前方の地面に扇状の衝撃波を発生させて敵を攻撃する中距離用スキル——で吹き飛ばしておく。

「全く、誰に操られているのかわからないけど面倒な連中だね。……それで、何かなりリアーナさん？」

「……………いえ、何でもありません……………」

何故かリアーナさんが凄く遠い目をしているけど、これ以上話をする時間はなさそうだと判断した私は吹き飛ばした敵がいる方向へと突っ込んで行き、そのままメイスと《竜尾剣》を振り回して周辺の敵を殲滅していった。

……………そうやって、私やミュウちゃんがモンスターの相手をしたお陰で騎士達に掛かる負担が減ったので、彼等もどうか態勢を立て直した様だ。

だが、裏で糸を引いている黒幕もこれで終わるつもりはない様で……………。

『KEEEEEEE！』

「！ 《エフェクトバニツシュ》！」

いきなり上空から降下して来た「クリムズン・ロックバード」が馬車に向けて炎を吐いて来たのだ……………だが、それを直感で先読みした私がギリギリでその炎をメイスで殴ってかき消したので、馬車やそれを守る騎士達に被害が出る事はなかった。

……………にやろう、私達に勝てないからって馬車を狙ってコッチの動きを封じる方向に戦術を変えたな。

「ミュウちゃん！」

「了解なのです！ 《軽気功》《空歩》！」

私の言葉と共にミュウちゃんは《軽気功》——自分の重量を軽くするスキル——を使って大ジャンプし、更に《空歩》——スキルレベルに応じた歩数だけ空中ジャンプが出来るスキル——を使って「クリムズン・ロックバード」に接近した。

………ちなみにミュウちゃんがスキル名を宣言しているのは、使えるスキルが増えたので何のスキルを使っているのかを周りの味方に伝える為である（当然、無詠唱発動も可能らしい）。

それに対して、相手は迎撃の為に炎を吐こうとするが、私の《エフェクトバニツシュ》の効果でスキルを封印されている為に何も出来ず、その隙に接近したミュウちゃんは相手の背に飛び乗って……。

「《発勁》」

『KYAAAaa……』

その頭部に掌底を放ち、スキル《発勁》によって内部に浸透した衝撃で脳を内側から破壊して「クリムズン・ロックバード」を絶命させた。

しかし、空中にはまだ多くのモンスターがおり、その内の一体「ストライクワイバーン」が空中から降下中のミュウちゃん目掛けて強襲を仕掛け………横から「マグネトローベ」の新スキル《レイル・アクセル電磁加速》によって超超音速まで加速したお兄ちゃんの手を持った長槍によって、その身体を貫かれた。

「兄様、助かったのです」

「ていうか、お兄ちゃん来るの遅いよ!」

「仕方ないだろう、途中で此処に向かっている飛行モンスターの一団と遭遇して、そいつらを倒していたんだからな! 《ブレイズ・バースト》!」

お兄ちゃんは空中を駆け回ってモンスターを長槍で貫きつつ、私達とそんな会話をしながら《詠唱》していた魔法を放って近づいて来たモンスター達を消し炭にした………そして、そのままお兄ちゃんは「マグネトローベ」を駆って空中戦を続行していった

「とりあえず空中の敵は俺が何とかするから、地上のモンスターをどうにかしろ!」

「了解」

「分かりました!」

そんな感じで私達とシュウさんによって周辺の敵が減って来ると騎士達にも余裕が出て来た様で、態勢を立て直しつつ馬車をモンス

ターが少ない安全な所へと避難させ始めた。

「……………なので私は、今のうちにシユウさんと話して連携を取れる様にしておこうと思ひ、モンスターを蹴散らしながら彼の元へと移動した。」

「ヤツホー、シユウさん」

『おお、ミカちゃん。援軍に来てくれて助かったガル』

私が話かけると、カンガルーっぽい着ぐるみを着たシユウさんはこちらを向いて礼を言ってきた……………ちなみに、その間も彼のへエンブリオ〜であるらしい戦車は砲撃を周りのモンスターに撃ち放つていたが。

「……………とりあえず、彼と今後の行動について話し合おうと思ったのだが、そこで私はとある事に気がついた。」

「敵の数が減ってきている……………。いや、増えていないのかな？」

『そうみたいガルね。……………裏でモンスターを操っていたヤツが手を引いたのか？』

そう、おそらく私達が来た時辺りからモンスターの援軍が居なくなっていたのだ……………多分、私達が来た時点でモンスターを操っていた何者かが、此処にモンスターを誘導するのをやめた所為なんだろうけど。

「どうしてこんな事態になっているのか、シユウさんは知ってるの？」

『いや、知らんガル。……………俺もついさっきリリアーナ達が襲われているのを見て助けに入ったただだからなガル』

ふむん、やっぱリリアーナさんに詳しい事情を聞く必要があるかな……………先日から働いている私の直感にも関わりがある気がするし。

「じゃあ、さっさと敵を殲滅して彼女に事情を聞こうかな？」

『そうガルね。……………バルドル、第五形態』

『了解』

その言葉と共に戦車形態だったシユウさんのへエンブリオ〜——バルドルが光に包まれると共にその質量を大幅に増加させ、その光が晴れた所には一隻の戦艦が鎮座していた……………噂には聞いていたけ

ど戦艦のへエンブリオ」とかもあるんだ……。

そして次の瞬間、バルドルは先程までの戦車形態とは比べ物にならない威力の砲撃を放って周辺のモンスターを殲滅していった。

「流石は討伐ランカー。基本プチプチ潰すぐらいしか出来ない私とは殲滅力が違うね」

『(亜竜級モンスターを)プチプチ潰すガルね、分かるガル。……………まあ、これでも結構大変ガル……………主にコストが』

まあ、これだけの火力を出すには、当然代償が必要みたいだね……………さて、あんまりシユウさんばかりに任せておいても申し訳ないし、私も残存モンスターを掃討してくるとしましょうか。



□アルター王国北部 【突撃騎兵<sup>チャージ・ライダー</sup>】 レント

「マグネトロローベ、通常速度で《電磁加速》……………《ランスチャージ》！」  
『GYAAAAA!』

俺は今にも電撃を吐こうとしている【ライトニング・デミドラゴン<sup>AG120000</sup>】  
に対して、マグネトロローベのスキルによって音速の二倍ほどまで加速して接近し、ブレスを吐かれる前にその喉を手に持った長槍で抉り取り絶命させた。

そう、これが【マグネトロローベ】の新スキル《電磁加速》……………まあ、へUBM」だった頃にも使っていた磁力による超加速スキルだな。

……………ただ、加速させるだけのスキルなので空気抵抗軽減とか姿勢保持とかは自前でやる必要があるし、速度を上げれば上げる程消費MPとクールタイムが指数関数的に上昇していくから、普通に使うなら音速の二倍ぐらいまで留めるのがいい感じの様だが。

「さて、これで空の敵は大体片付いたかな。……………まあ、三割ぐらいはシユウさんのへエンブリオ」による対空砲火のお陰だが」

それに、途中からこの場所にモンスターが誘導される事が無くなった様だしな……………ミカの直感の事もあるし詳しい事情は知ってお

きたいか。

「それじゃあ、地上に降りて騎士達やシウさんに話を……ん？」

俺がそんな事を考えつつ地上に降りようとすると、北側の森がある方向から何か物凄いスピードでこちらに向かって飛行してくる者がいる事に気がついた。

………とりあえず、俺は戦闘の構えを取りながら《遠視》を使って相手を確認すると……。

「えーと【セイクリッド・ハイペガサス】か。………おや？ 乗っているのはひよつとしてリヒトさんか？」

こちらに飛行してくる相手をよく見るとそれは一頭のペガサスで、その背にはアルター王国第一騎士団団長のリヒトさんがまたがっていた。

………どうやら向こうもこちらに気がついた様なので、俺は話を聞くために彼の下へとマグネトロローベを走らせた。

「お久しぶりです、リヒトさん」

「！ レント君か、久しぶりだね。……ところで、グランドリア卿からモンスターの集団に襲われていると聞いたのだが……」

どうも、彼はモンスターに襲われているという連絡を受けたので援軍に来たらしい………なので、モンスターは偶々通り掛かった俺達とシウさんが粗方倒した事を伝えた。

「そうか、王国の民と騎士達を救ってくれて感謝する。………では、話の続きは地上に降りてからでも良いだろうか。詳しい事情はそこで話そう」

「分かりました」

そうして、俺とリヒトさんは地上の馬車の所まで降りていった。



「グランドリア卿、被害状況は？」

「はい、避難民・騎士達共に死亡者はありません。また、騎士達には負傷した者もいましたが既に回復済みです」

「そうか、それは何よりだ。……実はこちらにも襲撃があつてな、そのせいで遅れてしまった。時期に村の方から残りの騎士達も来るだろう」

地上に降りた後、リヒトさんは馬車と騎士達の様子を確認しに行つたので、その間俺はミカ達やシユウさんと情報交換をしておく事にした。

「はーい、お兄ちゃんお疲れ〜」

「はい、お疲れ様。……それで、シユウさんはこの事件の事情はご存知で？」

『いや、さっぱりガル。俺も襲われているところを助けに入ったただけだガル』

「今分かつているのはあれらのモンスターが何者かに操られていた事ぐらいなのです。……後、逆探知は周りのスキルや意識が多すぎて無理だったのです」

……ふむ、やつぱりリヒトさん達からの説明待ちかな、これは。  
「………すまない、待たせてしまったね。………とりあえず、君達にも事情を説明しておきたいのだが構わないだろうか。そして、出来れば今回の件について手を貸して欲しい、もちろん報酬は出そう」

「ッ！ ローラン卿！ 今回の件は王から我等騎士に命じられた事で〈マスター〉の手を借りる訳には……！」

状況の確認が終わった後、リヒトさんが俺達に説明と協力の申し出をしようとし、そこで護衛の騎士の一人がそれに異を唱えたりもしたが……。

「先程言い忘れていたが村の方にも襲撃があつた上、その隙にあそこの封印へ干渉しようとした者が居たのだ。………幸いその者は【封竜王】殿の手で討伐されたが、これらの事から今回の襲撃が何者かの意思によつて行われているのは明白である以上、避難民の護衛を増やす必要がある。だが、今現在ここに連れてきた騎士だけでは戦力が足りない以上、彼等の力を借りるのが妥当だろう。………それに彼等はこの王国で起きた事件をいくつも解決している〈マスター〉だから人格面でも問題無いだろうしな。……何、責任は私が取る」

「はっー」

そんな感じであっさり部下を説得してしまった………実際に出来る上司って感じだよな、リヒトさんは。

………そして、部下の説得を終えたリヒトさんはこちらに向き直り改めて聞いて来た。

「途中で話を切ってしまったってすまない。それで、如何だろうか？」

「………とりあえず、詳しい事情を聞いてから判断させて下さい」

流石にまだ話が見えて来ないので、まずは詳しい事情を聞いてみる事にした………妹達やシユウさんもそれで良い様だ。

「そうだな。………時間もあまりないから簡潔に話すが、馬車に居る彼等はこの先にある〈クリラ村〉の住人で、俺達は彼等をクレームまで避難させる任務を行なっている最中なんだ。………そして避難させている理由だが、クリラ村には【封竜王 ドラグシール】という古代伝説級の竜王が居てね、その彼が『この土地に古代伝説級〈U・B・M〉を封印している術式の効果がそろそろ切れそうだから、その前にこの村の人間を安全な場所まで避難させてほしい』と王国に依頼して来たんだ」

………ミカの直感で俺達が危険に突っ込んでいくのは何時もの事だが、どうやら今回はかなり厄介なネタを引いたみたいだな………。



## クリラ村へ

□アルター王国北部 【チャージ・ライダー 突撃騎兵】 レント

ミカがいつも通りその直感によって事件を察知したので、俺達はクレミルを出て北東に向かっていた（ストーリーカー付き）のだが、そこで馬車とそれを守る騎士達がモンスターの大量に襲われている所を発見した………なので、俺達は同じく偶々通りがかったシユウさんと一緒にそれらのモンスターを殲滅したのだが、そこに現れたりヒトさんから俺達は衝撃的な話を聞く事になったのだ。

………と、そんな経緯で俺達はリヒトさん一通りの話を聞いたのだが……。

「ええと、つまり『この馬車の人達はこの先にあるクリラ村の住人で、そこには【封竜王 ドラグシール】という古代伝説級ユニーク・ボス・モンスターが別の古代伝説級〈UBM〉を封印している。そして、その封印が近日解除そうだから村の人を避難させてほしいと王国に依頼があつて、それで近衛騎士団や王都の騎士団から人員を派遣して避難させている途中で何者かの意思によるモンスター達の襲撃と封印を破ろうとした者が現れた。なので現在の戦力では避難民を守り切れない可能性があるので、この件を既に連絡した王都から援軍が来るまで俺達に護衛を手伝ってほしい』という事ですか」

「そういう事だ、レント君」

「見事に纏めたね、お兄ちゃん」

『分かりやすい纏めガル』

改めて聞くと予想以上に厄介事の気配がする案件だな………まあ、元々その為に来た様なものだし、この依頼を受けるのに嫌はないのだが……。

とか考えていたら、突如ミカが手を挙げてリヒトさんに質問しました。

「ハイはい！ リヒトさん質問です。その封印って後どれぐらいで解けるんですか？ 残り三日ぐらい？」

「封竜王殿からは後半年ぐらいいは持つと聞いているな。………ま

あ、外部から干渉を受けた場合は分からないが」

成る程、そのぐらいか………だが、ミカが残り三日と言ったという事は……。

そんな事を考えていると、次はシユウさんが質問をした。

『俺からも質問良いガル？ 村人の避難はどれくらいで終わるのかと、その封印された〈UBM〉の危険度について聞きたいガル』

「村人の避難は後一週間ぐらいで済ませる予定だったが、今回の事件もあるし王都やクレールミルから増援を募って出来るだけ早く終わらせるつもりだ。そして封印されている〈UBM〉の事は五百年程前に封印されたもので、封竜王殿は『理性もなく近くにいた人間とモンスターを手当たり次第に食い散らかし、その結果としていくつかの街が滅ぼされた』と言っていたな」

………話を聞く限りでは非常にヤバそうな相手だな。幸いなのはその【封竜王】さんが味方ポジションっぽい事だが……。

「私からも質問があるので。封印を破ろうとした者がいたという話ですが、その者達がどういう連中だったのです？」

「俺は直接見た訳ではないが、封竜王殿は『人形をしていたが、おそらくアレはホムンクルスの類である非人間範疇生物だろう。……まあ、追い込んだら自爆したから詳細は分からないが』と言っていたな」

機密保持の為の自爆とか、この事件の裏で糸を引いているヤツも相当ヤバそうだな………本当に今回は冗談抜きで危険なヤマっぽいなあ。

………じゃあ、俺も一つ質問をしておこうかな。

「俺からも一つ質問です。依頼を受けるとして、俺達は村と馬車のどちらを守ればいいんですか？ 後、その期間は？」

「ふむ……。戦力的には主に狙われるだろう村の方に行ってほしいのだが………実は以前、特典武器狙いで封竜王殿に戦いを挑んだへマスターがいてな、それ以来クリラ村ではへマスターに対する警戒感が強まっているんだ。………後、期間についてだが後三日もすれば王都から援軍も来るし、これからクレールミルで協力者を募るつもりだから1日ぐらいの間は頼みたいな」

あー……まあ、そういう奴等もいるよなあ……。一応、手出ししたら罪に問われるへU B Mゝがいるって事も周知はされているんだが。それと期間の方だが今日明日は休日だし俺達は1日ぐらいなら問題はないかな。後、シウウさんの方も問題はないらしい。

……さて、とりあえず一通りの情報は出集まったんだが。

「それで？ どのルートだと上手くいきそうだ、ミカ？」

「うーん……。まずは村に行つてその【封竜王】さんに会う必要があるかな？ 多分だけどこちらの時間で三日後ぐらいにコトが動きそうだし」

「では、村の方に行く感じですね」

「……。いや、ちよつと待つてくれ。君達は今回の事件の犯人を知っているのか!?」

とりあえずミカと今後の方針について相談していたら、それを聞いたりヒトさんからツツコミが入つた……。まあ、普通はそういう反応になるよなあ。

……。さて、どう説明したものか……。

「まず、俺達は今回の事件を起こしたのが誰かとかは分かりません。……。ただ、ミカは生まれつき勘がいいので、危険な事がいつどんな風起こるのかがある程度事前に解るんですよ」

「今回はこのあたりで何か起きそうな気がしたから来てみただけですし」

「……。それは……」

うーん、やっぱりいきなりこんな事を言われても困惑するだけだよなあ……。と、思っていたのだが……。

「待つてください、ローラン卿。……。ミカさんは以前王都で起きた誘拐事件を解決した時にも、何の手掛かりも無い状況で誘拐した人を見つけ出していました。なので彼女達の言っている事は《真偽判定》に反応が無いですし、嘘ではないと思います」

「……。そうだな、どの道彼等に協力を依頼するつもりだったのだし、今回の事件が起きた事でクリラ村の住人の避難も出来るだけ早く済ませるつもりなのだから、彼等の話が本当かどうかは別に構わない

か。……………それに、生まれながらにしてそういう力を持つ人間がいるのはありえなくは無いな」

この様にリリアーナさんのフォローもあり、どうにか納得してくれた様だ……………やっぱりコッチの世界だと《真偽判定》がある分、色々説明が楽だな。

……………おっと、そういえばシユウさんに確認を取るのを忘れていたな。この依頼をどうするのかをキチンと聞いておかないと。

「それで、シユウさんはどうします？」

「出来れば、私達について来てほしいんですけど…………。その方が色々と上手くいきそうなので」

『依頼は受けるし村の方でいいガルよ。ミカちゃんには借りもあるし、どうせ暇だから手伝うガル』

有り難い、今回の事件はかなりヤバそうだからシユウさん程のへマスターが協力してくれるのは助かるな。

「それじゃあ、君達には正式にクリラ村の人間の護衛を依頼する。そろそろ村の方から追加の騎士達が来る筈だから、その彼等と俺達で馬車を護衛するので、君達へ彼等の代わりに村を守ってくれ。案内には面識のあるグランドリア卿に頼む。……………どうか力を貸してほしい」

「分かりました」

【クエスト【護衛——クリラ村避難民 難易度：十】が発生しました】  
【クエスト詳細はクエスト画面を ご確認ください】

こうして、俺達のクエストが始まったのだった……………しかし、難易度十って確か最高の難易度じゃなかったか？



□アルター王国北部森林 メイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

あれから援軍に來た騎士達とリヒトさんが馬車を護衛してクレールに行つたのを見送つた私達は、リリアーナさんの案内でクリラ村がある森の中を徒歩で進んでいた……………途中から森が濃くなつて

来た所為で馬車が使えなくなったからね。

後、道中はリリアーナさんがお兄ちゃん【マグネトローベ】について聞いて来たり（何でも彼女の父親が似たような煌玉馬に乗っているらしい）、リリアーナさんが最近【聖騎士<sup>パラディン</sup>】に転職して近衛騎士団所属になった話を聞いたりしてそれなりに良い雰囲気だったね。

「そういえばリリアーナさん、さつきは私の話を信じてくれてありがとうね」

「いえ、ミカさん達には色々と助けて貰っていますから。……………それに、どちらにしろ避難は急ぐつもりでしたから、協力してくれる方が有り難いですし」

まあ、既に事件が起きた後だったから私の話も違和感なく受け入れてくれたんだろうし、そもそも私の話を信じる信じないに関わらず彼等騎士達の行動は対して変わらないけどね……………そういう訳で今のところ上手く行っているけど、今後も綱渡りになるかなあ。

……………そう考えていると、シユウさんが先導しているリリアーナさんから離れて私に近づいて来た。

『……………ところで、さつきから覗き見をしているヤツについては気付いているガル？』

「うん、多分エフって人だと思っただけだ。クレールを出たあたりからコツチをつけているっぽいね」

シユウさんはリリアーナさんに聞こえない様にそんな事を私に耳打ちして来たので、私も同じ様に追跡には気付いている事と私達が以前エフさんから取材を受けた事を含むそれに関しての事情を説明した……………ちなみにリリアーナさんはお兄ちゃんとミュウちゃんが話し掛けているので、コツチには気付いていないね。

……………そして、それを聞いたシユウさんは頭を抱えた。

『ハア……………全く、面倒な時に面倒なヤツが……………』

「エフさんってそんなに面倒な人なの？ まあ、何かやらかしそんな人だとは気付いているけど」

『ああ、あのエフって男は……………』

流石に気になったのでシユウさんに聞いてみると、物凄く面倒そう

な雰囲気になって色々エフさんについて教えて貰った。

「……………どうやら彼は自分の取材の為に意図的に事件を起こして、それに巻き込まれる人を観察するという事を各地で行なっており、シユウさんもそれに巻き込まれた事があるらしい。」

『エフは事件を長引かせる為に有利な方を攻撃するぐらいはするヤツだからな、対処は早めにした方がいいと思うガル』

「んー……………多分、それは今じゃない気がする。今は村に向かう事を優先するべきだと思う」

『成る程ガル。……………まあ、このメンバー相手に下手に仕掛ければ返り討ちになるのはヤツも分かっているだろうからな。戦闘はさつき見ただろうし、マンネリになるからモンスターを喚ける事も無いだろうガル』

一通りの事情を聞いた上でまだ対処するべき時では無い気がしたので、シユウさんにそう伝えると彼も私の意見に賛成してくれた。

「……………ていうか、シユウさんもあっさり私の直感を信じてくれたね」

『ん？ ああ、ミカちゃん達が嘘を付いている様には見えなかったかなガル。……………後、そういう人も居るって事は知っているしな』  
妙にあっさり私の直感を信じてくれたのが気になったので、彼にその事を少し聞いてみるとそんな答えが返ってきた……………シユウさんの言っている「誰か」が気になるけど、彼の雰囲気なんか物凄い影を背負った感じになっているので、多分深く知ったらいけない感じだろうから黙っておこう。

……………という訳で、適当な話をして話題をそらす方向で。

「そういえば、シユウさんはリリアーナさんと以前からの知り合いなの？」

『ああ……………以前迷子になっていた女の子を家まで送り届けた事があつてな、その時に知り合ってから以来の関係ガル。それからいくつかの事件に巻き込まれた時に顔を合わせる事もあったガル』

「え？ 巻き起こしているとかじゃなくて？」

『俺は巻き込まれている側ガル。どちらかと言うとそれは女狐かアイ

ツの役割ガル。……………と云うか、ミカちゃんには言われたくないガ  
ル』

「私は事件を感知して突っ込んでいるだけだから」

まあ、そんな感じで適当に話をしてしばらく経つと、リリアーナさんが目的地へ到着したと私達に伝えて来た。

「皆さん着きましたよ。ここがクリラ村です」

そこにあつたのは民家が十数件並ぶ程度の小さな村であり、周辺には何人かの騎士達が辺りを巡回していた……………そしてリリアーナさんはそのまま巡回していた騎士の一人に近づいていった。

……………おや？ あの騎士には見覚えが……………。

「ローラン卿、ただいま戻りました」

「お疲れ様ですグランドリア卿」

ああ、確か「ハデスロード」事件の時に出会ったリヒトさんの娘さんのリリイさんだね。彼女も此処に来ていたんだ、挨拶はしておこうかな？

……………と思つたら、お兄ちゃんが前に出て先に挨拶してくれたよ。

「お久しぶりです、リリイさん」

「お久しぶりです皆さん。貴方達の事は既に父から話は聞いているので今回は宜しくお願いします」

そんな感じでみんな簡単に自己紹介をした後、私はやっておかなければならない気がする事をリリイさんにお問い合わせする事にした。

「それじゃあ、お願いがあるんですけど……………この封印を守っているっていう封竜王さんに合わせて欲しいんだよね」

「……………会つてどうするつもりで？」

……………ふむん、以前やらかした「マスター」が居るせいでちよつと警戒されているかな？ ここはちゃんと事情を説明しておくべきか。

「ここに封印されて居るって言う「UBM」について聞きたいんだよ。

……………多分、今回の依頼ではソイツとは戦う羽目になると思うし」

「……………封竜王殿の言では、封印が解かれるまである半年はある筈

ですが「いや、話をするぐらいなら構わないよ」っ!

私がリレイさんに説明をしていると、その会話に割り込む様に村の方から声が掛けられた……………声が聞こえて来た方向を見ると、そこには一人の銀髪青眼で古びた黒いローブを羽織った男性がいた。

……………だが、その男性が現れた瞬間にその場の雰囲気は一変し、張り詰めた様な空気が辺りを包んだ気がした。

「えーと、ひよつとして貴方が……………」

「ああ、私が【封竜王 ドラグシール】で間違いないよ。……………最も、今は人化しているけどね」

確認してみたところ、彼がこの村に住んでいる【封竜王 ドラグシール】で間違いない様だね。

「封竜王殿。貴方は先程封印の様子を見ておくと言っていました……………」

「封印の方はあのホムンクルスに多少緩められていたけど、問題無く補修出来る範囲だったからもう直したよ。……………それよりも、この村にかなり強い気配が近づいて来たから様子を見に来ただけど、君達が連絡があった追加の人間でいいのかな?」

「あ、はい、そうです」

……………まともに言葉を交わせるへUBMには初めて会ったけど、思った以上に理性的な感じだったね。

「……………ふむ、成る程。全員へマスタースベリオルジョラで超スベリオルジョラ級職が二人、もう二人も相当な実力者だね」

「へマスターではダメでしょうか?」

封竜王さんがこちらを見て少し目を細めたので、お兄ちゃんがへマスターに悪印象を持っているかを聞いてきた。

「ん? ……ああ、以前にへマスターに襲われた事もあるけど、それでへマスターと言う存在自体にどうこう言う気はないよ。……………まあ、戦いを挑んでくるなら容赦をする気は無いけど、これでも竜王の端くれだからね」

その言葉と同時に彼から凄まじい威圧感が発せられ、それに対して私達は即座に身構えた……………しかし、それを見た彼はあっさりと威



圧感を消して薄い笑みを浮かべた。

「そんなに身構える必要は無いよ。別にここで君達をどうこうする気はないし。……………うん、ここで話すのも何だし詳しい話は村の中でいいかな？」

「え、構いませんが……………」

「それじゃあ色々話を聞かせてもらおうか。……………特にそちらのお嬢さんにはね」

……………私の方を見ながらそんな事を言った封竜王さんはそのまま村の中に入ってしまったので、とりあえず私達もその後を追う事にしたのだった。

## 封竜王と厄災

□クリラ村 メイイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

あれからクリラ村に到着した私達は、そこで出会った【封竜王 ドラグシール】の話の聞いたために村にある民家の一つにお邪魔する事になりました。

そして、今は紅茶とお菓子を下されてもてなされています。

「どうぞ召し上がれ。茶葉とお菓子は結構いいを使っているから、美味しいと思うよ」

「『ア、ハイ。イタダキマス』」

「……………ただし、この紅茶は【封竜王 ドラグシール】さんが入れたものだけだね……………」

うん、民家の一つに案内されたところまでは良かったんだけど、そこで当たり前の様に封竜王さんが紅茶を淹れだした時には私達は全員固まってしまったからね……………リリアーナさんとリレイさんなんて表情を凄く引きつらせているし……………」

まあ、流石にお菓子は戸棚から取り出した物だったけど……………」

「え？ 古代伝説級の〈U B M〉って紅茶とかも淹れられるの？」  
「いや、私は人間の中で暮らしていた時期が長かったからね。多分、こう言う事が出来る〈U B M〉は少数派だと思うよ。後、このお菓子も自分で作った物だよ」

……………へー、そうなんだ……………あつ、この紅茶とお菓子美味しい。

「さて、確か此処に封印されている〈U B M〉の事が知りたいんだったね。……………一応、どういう理由で知りたいのかは聞いておこうか」  
「えーつと……………多分、後三日以内ぐらいにソイツと戦う事になるから、出来るだけ情報を知っておきたいんだけど……………」

そこまで言うと、封竜王さんは少し怪訝そうな表情を浮かべた……………やっぱり自分の封印があっさり破られると聞いたらそういう反応になるかあ。

……………機嫌を損ねて彼の協力を得られない事は避けなきゃいけ

ないし、どうか説明しないと……。

「一応、襲撃があつたとはいえ此処の封印は後半年ぐらいは持つんだけど、どういう根拠があつて三日以内に封印が解けると君は言うのかな？」

「あー、私は生まれつき直感が鋭いんですけど……」

とりあえず私は自分の直感の事を含むこれまでの事情を全て正直に話す事にした……相手は人間の事を良く知るへUBMだし、下手な嘘や誤魔化しは状況を悪くするだけだろうからね。

「生まれつきの直感……解析したら嘘は付いていないし、精神に異常があるタイプでもない。……ああ成る程、バロア氏と同類か」

「バロア氏？」

何か聞いた事がない名前が出てきたね、誰なんだろう……&思考したら、リリアーナさんがその名前に反応した。

「それはもしかしてグランバロアの語源にもなったかの国祖の事ですか？」

「うん、そのバロア氏であつてるよ。彼には六百年程前に一度会つた事が会つてね、その彼には未来を見る様な直感を持っていたから同類だと思つたのさ」

「へー」

グランバロアの国祖バロア氏か……以前聞いた【先導者】ヴァンガードもグランバロアの話だったし、機会があれば行ってみたいな。

……そんな事を考えていると封竜王さんが少し雰囲気鋭い物にして、私に向き直つた。

「それで、君は何故自分の勘で把握した事件に首を突つ込んでいるのかな？ 別に君がどうこうしなけばいけない訳でもないだろう？」

「え？ いや、事件が起きるのを知つててなにもせず被害が出たら後味が悪いでしょ？ ……それに、私はもうそういう思いはしたくないので」

私がこのデンドロをやっている理由の一つがそれだからね……私のへエンブリオもその為のものだし。

「ふむ……他の人もそうなのかな？」

「ミカがやると言うなら俺も付き合いますよ……これでも兄なのでね」

「姉様を助ける事も私が此処に居る理由の一つなのです」

『俺は偶々巻き込まれただけだが……ここまで聞いておいてなにもしないのは後味が悪すぎるガル』

うん、ここにいるみんなはいい人ばかりだね………ありがとう。

「ふむ、嘘は言っていないし人格も問題なさそうだから別にいいかな。

………それに、もし三日以内にアイツ——【十狂混沌 ギガキマイラ】が目覚めるなら戦力が欲しいしね。何せ相手は古代伝説級最上位、同じ古代伝説級でも中堅どころの私一人では自身の陣地であるこの森で戦っても勝率は三割ぐらいだろうし」

………そう言った封竜王さんは自身の過去とかつてこの村であつた事を話し始めるのだった。



#### □【封竜王 ドラグシール】

それじゃあ、まずは私が生まれた頃の話をしようか………ああ、別に今回の件に私の生まれが関わっている訳じゃないんだが、その方が色々と説明しやすいんでね。

何、関係のない話だからすぐに終わらせるさ。

私が生まれたのは今から六百年程前………と言うか、私はかつて

「魔法都市」と呼ばれた都市で作られたモンスター【クリスタル・キメラドラゴン】で、そこに住んでいた一人の女性——【封印姫】シール・プリンセスクリラの従魔をしていたんだ。

………まあ、この時代は【霸王】に魔法都市を滅ぼされてからクリラと一緒に各地を放浪していただけだから端折るよ。強いて言うなら三神の作る対霸王封印に少しだけ関わったぐらいだし。

時代は少し飛んで大体五百年前——ああ、クリラは長命種だから普通に百年生きているよ。私と出会った時には五百歳を超えていたしね——私とマスターはまだ名前もなかったこの村で隠遁生活を送っ

ていたのだが、そこで【聖剣王】と【邪神】の争いが起きたんだ。

……ちなみに私とクリラはとりあえずまだましな方だった【聖剣王】側について【邪神】についた先代【封竜王】と戦ったりもしたけど、この辺りも今回の件とは特に関係ないからカットで。

事の始まりは【聖剣王】と【邪神】の戦いが終わってからすぐ後のことだった……突如、どこからともなく【ギガキマイラ】が現れて街々を襲い始めたんだ。

……しかも、間が悪い事に【邪神】との戦いが終わったすぐ後だったせいで【聖剣王】を始めとする超スベリオルジヨフ級職が殆ど動けない状況でね、仕方が無く丁度近くに居て動く事の出来た私とクリラで相手をしたんだが……。

ヤツは理性がない代わりにSTR・END・AGIが五万はある純粋性能型な上、《竜王気》や高速再生などの素材となったモンスターのモノと思しきスキルを複数使ってくる古代伝説級最上位の〈UBM〉だったんだ……生憎、私とクリラは封印と結界を主な戦闘手段とする補助・防御型だったから、高ステータスでゴリ押ししてくる相手だと勝ちの目が無くてね。

……なので、止む終えず私とクリラが力を合わせて発動した最終奥義《人柱封印》フレイナルクによってどうかこの地に封印したんだが、その所為でクリラは寿命をかなり減らしてしまいそれから百年後に死去、私も封印の要になっているのでここから離れられなくなってしまったんだよ。

それからは村の救い主であるクリラにあやかって〈クリラ村〉と名付けられた（クリラ自身は『恥ずかしいからやめろ』と言って拒否していたから、その名前になったのは彼女の死後だったが）ここに封印を守りながら五百年程過ごしていたんだ……その間に私が〈UBM〉になる事態も起きたが、事情を知っているこの国の王族の働きかけで特に問題無く暮らす事は出来たし。

まあ、そうやってこの村で暮らしてきた私なんだが流石に封印の効果が切れる時期になってきたので、このままでは村の人間に多大な被害が出るからどうにかしたかったんだよ……五百年も暮らして

いれば情の一つぐらいは湧くからね。

そこで昔【聖剣王】が私とクリラに『肝心な時に力になれなくてすまない、いつか封印が解ける時が来たらこのアルター王国は力になるう』的な事を言っていたのを思い出して、王国の王族に住民の避難と【ギガキマイラ】討伐の協力を要請して今に至ると言うわけさ。



□クリラ村 【突撃騎兵】チャージライダー レント

「と、大雑把に説明するとそんな感じかな。何か質問はあるかい？」

封竜王さんから一通りの情報を聞き終わった俺達は、手元の紅茶とお菓子（メイドイン封竜王）を飲み食いしながら今の状況について考えていた。

……………とりあえず気になった事を聞いておくか。

「じゃあ一つ質問です。……………この封印に干渉してきたホムンクルスについて詳しく聞きたいんですが」

「うーん……………生憎封印に干渉してきた相手を逆探知して遠くから殺した感じだから詳しくは分からないが、スペックは亜竜級だったけど身体に機械を埋め込まれて強化されていたし、総合的な質は魔法都市時代に見た事があるホムンクルス作成特化超級職が作った物と遜色無いぐらいの出来だったかな。……………ここからは私見になるが、あのホムンクルスと【ギガキマイラ】はどちらも何者かに作られたモノで、その製作者は同一だと思う。それにあのホムンクルスはすぐに自爆したから多分捨て駒で、近くに本命がここに来る可能性は高いと思うよ」

曰く、私も作られたモノだからね、その辺りは何となくわかるんだ、との事……………ちなみに倒した方法は相手が封印に干渉するルートから魔力を逆流させてダメージを与えつつ、《竜王気》を物質化させた水晶の杭を遠隔発生させて貫いたらしい。

尚、クリラ村周辺の森はスキル《陣地作成》によって彼の領域を化しており、その範囲内ならばスキルの遠隔発動や対象の詳細な解析が

可能との事。

更に彼は話を続ける。

「ちなみに陣地と言っても有利に戦えるってだけで私はあくまで多重技巧型、条件特化型程の絶対性はないよ。そして相手はステータスで圧倒的に上回られていて、更にこちらのスキルが殆ど効かないから相性が悪いし。……………だからこそ王国に【ギガキマイラ】の討伐協力を要請したのだが」

「後、先程の報告によると王都からの援軍到着は早くとも一週間はかかるそうです」

「つまり三日以内には間に合わない」と

……………さて、これである程度の情報は出揃ったかな。

「で？ ミカ、お前は思う？」

「んー…………その【ギガキマイラ】だけなら封竜王さんと協力して、更に私が必殺スキルを使えば何とかかなりそうだけど…………。問題はそれ以外かな？」

『黒幕や取材犯の事ガル？』

シユウさんにそう聞かれてミカはどこか遠くを見るような目をしてながら返答した。

「それもあるんだけど…………まだ、何か厄介事が増えそうな気がするんだよね。…………正直ギリギリかなあ…………」

……………どうやら、この事件は一筋縄ではいかない様だな。



??とある遺跡深部 【完理全脳 アークブレイン】

『封印術特化外部行動用【アバターホームンクルス】から該当地点の封印術式のデータを取得。……………解析終了』

ここはとある遺跡の中、そこで神話級〈UBM〉【アークブレイン】は【アバターホームンクルス】から得たクリラ村の封印を解析していた……………【アバターホームンクルス】とは【アークブレイン】の複製脳を搭載したホームンクルスで、《ハイパーデータリンク》によって遠隔操

作する外部端末である。

………【アークブレイン】はこれらのホムンクルスを地上に配置する事で、遺跡内部にいなから外部での行動をある程度可能にしているのだ。

『解析結果、封印の持続時間は約百九十三日。………複製脳と現在の状況、及び今後の方針を思考』

そして、それと同時にそこに封印されているかつて自身が作ったへ U・B・M 〔十狂混沌 ギガキマイラ〕の監視も行なっていた……… 【ギガキマイラ】はかつての【大教授】が生前対 “化身” 用として作り上げたモンスター十体を融合させたキメラであり、対 “化身” の為に育成を進めていたモノである。

その際には最もレベルと潜在能力の高かった【ハイエンド・グラトニー・ウルフ】をベースとし、その【喰王】を参考にした捕食時にリソースを効率的に吸収できるスキル《暴食餓狼》を使って他の九体のモンスターを食わせる形で他の九体のモンスターを上乗せし、其れ等のスキルを全て使えるキメラとなる様に調整した。

尚、残り九体のモンスターの内訳は以下の通り

・【ベルセルク・ハイグランプルキング】——キング・オブ・ベルセルク【狂王】の最終

奥義を参考にした常時発動型狂化スキル《ビースト・バーサーク》という理性を無くし闘争本能だけで動く様になる代わりにSTR・END・AGIを二倍化させスキルの消費MP・SP半減するスキルを有するゴリラ型モンスター。

・【ハイ・シャークドラゴン】——物理・魔法問わないエネルギー減衰に特化した防御専門の《竜王気》である《海竜王気》を有する鮫型ドラゴン。

・【スクラッチ・ハイドラグタイガー】——爪牙での攻撃時に対象の防御効果を自身のSTRに応じて減衰させるスキル《ブレイク・リッパ》などの爪牙系スキルを有する虎型モンスター。

・【インフェルノ・ハイドラグファルコン】——高速飛行能力と炎熱攻撃、及び炎熱耐性を持つハヤブサ型モンスター。

・【ヴェノム・ハイドラグスコープイオン】——複数の猛毒を持つ針を



有する尾と高い病毒耐性を持つ蠍型モンスター。

・【リカバリー・ハイドラグリザード】——自身のHPと傷痕系状態異常を自動回復させる《自己再生》スキルを持つトカゲ型モンスター。

・【アンチマジック・エレメンタル】——周囲の魔法効果を減衰させるアクティブスキル《マジックジャマー》を有するエレメンタルの変種。

・【ハイ・アームドメタル・ドラゴン】——自身の身体を金属化する《金属変身》スキルを有する上位地竜。

・【ライトニング・ハイストライクベア】——全方位放電スキル《サンダーカタラクト》を始めとする雷属性スキルを持つクマ型モンスター。

そしてスキルを使いやすい様、融合させたモンスターのパーツを元に自身の肉体を変形させる《キメラアビリティ》のスキルを付加し、更に理性の無い欠点を脳改造によって遠隔操作出来る様にする形で欠点を補うプランだったのだが……。

『キメラ化には成功した。……だが、制御下に置くための脳改造直前で制御を外れて〈UBM〉化』

『狂化のせいで《燈幻狂》が効きにくく、封印・拘束も各種スキルによって困難』

『本能だけでスキルを使い分けると言うのは誤算だった』

なので、止む終えずシエルターに被害が出る前に外部へ緊急転送して好きに暴れさせつつ、そのまま《ハイパーデータリンク》によるデータ取りを行うプランに切り替えたのだが……。

『その結果は大してデータが取れない内に【封印姫】と現【封竜王】による封印』

『当時の技術では制御下に置く事は難しかったので放置した』

『しかし、現在の技術でなら古代伝説級〈UBM〉をコントロール下に置く事も可能』

『脳に寄生して対象を支配下に置く【侵食型ナノマシン】を使えば良い。試験型は上手くいったからな』

故に【アークブレイン】は封印術特化の【シール・アバターホムン

クルス」と精神干渉特化の「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」を派遣して現地の封印のデータを取得したのだ……………「シール・アバターホームンクルス」の方は撃破されたが、元々使い捨て用に作ったモノなので特に問題は無い。

……………そして、もう一体の「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」には「侵食型ナノマシン」を持たせている。

『時間が経てば封印は解けるだろうが、こちらの第一目的を考えると早く解除出来るならしておくべき』

『試算すると、封印を破るなら【侵食型ナノマシン】で支配下に置いてあるアレを使えば可能と出た』

『第一目的にも合致する上、ナノマシンを使う圏にもなる。三日後には実行可能』

『【マインド・アバターハイホームンクルス】なら【ギガキマイラ】に対する短時間の精神干渉が可能。その際にナノマシンを使えば良い』

『では、そのプランを試行する』

……………こうして、クリラ村に更なる災厄が訪れる事となった。



??城塞都市クレールミル ???

三兄妹とシユウが封竜王の話を聴き終わった頃、クリラ村の避難民を乗せた馬車は予定よりも大幅に早くクレールミルに到着していた。

それからリヒトを始めとする騎士達は今回の事件の対策の為に慌ただしく動き回っており、避難民達は住居の準備が整うまで一時的に待機していた……………そして、その避難民の一部がそこに通りかかった一人の女性〈マスター〉に話しかけられていた。

「成る程、それは大変でしたね」

「ああ、本当にな。……………だが、通りすがりの着ぐるみや〈マスター〉が助けてくれたお陰でどうにかなったよ」

「〈マスター〉は以前【封竜王】様を襲ったからあまり良い印象は持っていないかったんだが、良い〈マスター〉も居るみたいだな」

その女性は避難民に何があったのかを聞いており、避難民の方も三兄妹とシユウのお陰でへマスターへの印象が良くなっていたので特に何か問題が起きる事も無く話は進んでいた。

……………そして避難先の準備が整ったと騎士の一人から連絡があった。

「おっと、どうやら行かなきゃいけないらしい。……………悪いが嬢ちゃん、話はここまでだな」

「いえ、この私もそろそろ行かなければならないと思っていたのでお構いなく。……………話をしてくれてありがとうございます、皆さんもこれから大変でしょうが頑張ってくださいね」

「ああー、これから厄災に立ち向かう封竜王様と比べれば、このぐらい何ともないさー！」

そう言つて、その女性は住居の準備をしに行つた彼等と別れて街の路地裏に奥深くに入っていく……………人目が無くなったところでその身体の輪郭がまるで液体であったかの様にドロリと崩れた。

……………そして、先程までは女性だったソレは眼鏡をかけた中肉中背の男性へと変わっていた。

「戦うと罪になるへUBMがいると聞いて情報を集めていたのですが……………まさか、シユウまで来ているとはね。……………では、この私もクリラ村に行くのでしょうか」

そうして、その男性……………キング・オブ・クライム【**犯罪王**】ゼクス・ヴユルフエルはクリラ村へと足を運ぶのだった。

## 援軍と交渉

□クリラ村

【突撃騎兵】チャージライダー レント

俺達がクリラ村に来てから三日、その間は特に何もなく村の中と外は平和であった……そして、三日後の現在の村の状況はと言うと。

「じゃあ、村の人達の事はよろしく頼むよ」

「お任せ下さい封竜王様」

そう、つい先程どうにかクリラ村の住人の避難が全て終わったのだ……あれからリヒトさんを始めとする騎士達が物凄く頑張った様で、たった三日で残りの住人全てを避難させる準備を整えてくれたらしい。

……まあ、これだけ早く準備と避難を終えるにはティアンのおかげでは無理だったらしく、クレールミルでへマスターへの援軍を雇い入れたのだが、その雇ったへマスターとは……。

「お久しぶり……と言うほどでもないですね、フォルテスラさん」

「それもそうだな、レント君」

そう、フォルテスラさん達へバビロニア戦闘団だったのだ……まあ、クレールミルで実力がありティアンからも信頼を得ているへマスター達を雇うと言うなら、彼等が最も適しているだろうしな。

……なので、彼等にも諸々の事情を話して協力を要請したところ……。

「ああ、構わないよ。……と言うか、元より俺達が受けた依頼は避難民の護衛と王都から援軍が来るまでこの村の警護をする事だから、やる事は特に変わらないしな……シャルカ」

「はい、この村を警備するメンバーは腕の立つ者を回しておきます」

「ありがとうございます、皆さん」

そういう訳でへバビロニア戦闘団のメンバーが援軍に加わってくれる事になったのだ……これで、こちらの戦力は大分整って来たと思うのだが、ミカが言うには『それでもギリギリ』だそうなんだよなあ。

……………そんな事を思案していた俺の元に、騎士達と村の警備について話し合っていたリリアーナさんとリリイさんがやって来た。

「お疲れ様です、そちらはどんな感じですか？」

「はい、住民の避難は全て終わりました。避難民の護衛には騎士達と〈バビロニア戦闘団〉のメンバーが付いています」

「村の方にはローラン卿を始めとする近衛騎士団などの精銳がつく事になりました。……………ですが、リヒト団長は避難民の生活などの交渉でクレームに暫く留まるそうです。なるべく早く村に戻りとは言っていました」

成る程、リヒトさんは今居ないのか……………まあ、取り敢えずこれで村の人間が巻き込まれるのは防げそうだし、封竜王さんやフォルテスラさんも交えて、今後の事を話し合っておきましょうか。

……………そう話し合っているとフォルテスラさんとリリアーナさんから質問があった。

「おや？ そう言えばミカちゃん達は居ないのか？」

「あれ？ シュウウさんも居ませんね」

「ああ、あの三人はちよつと村の外でこちらを監視しているエフという人との交渉に行っています」

そう、ウチの妹二人とシュウウさんは今この村には居ないのだ……………ミカが『事が始まる前にちよつとエフさんに話を付けてくるから、村の方はお願ひね』と言ってミュウちゃんとシュウウさん連れで出て行ったのだ。

……………ちなみに相手の位置は封竜王さんが森の中に入って来た彼の〈エンブリオ〉を解析・逆探知することで大まかな場所を割り出してくれたので、現在ミカ達が向かっているところだ。

それにミュウちゃんの《第六圏》やミカの《竜意圏》など、大まかな位置さえ分かれば何所を見つける手段はあるからな。

「封竜王さん、色々迷惑をかけてすみません」

「いや、大した手間じゃなかったから別に構わないよ。森の中に入って来た球体を破壊するついでに逆探知しただけだし」

「……………ちよつと待ってくれ、レント君。エフって……………アイツがい

るのか!?!」

そんな感じで俺が妹達が不在の事情を説明していると、フォルテスラさんが物々しい雰囲気になってこちらを問い詰めて来た……………で、よく見るとへバビロニア戦闘団のメンバー全員が同じ様な雰囲気醸し出しているんだが……………。

「あー……………エフさんが今まで何をやってきたのかはシユウさんから聞きました、皆さんも何かあったんですか?」

「以前、ヤツの起こしたトラブルに克蘭が巻き込まれてな……………お陰で散々な目に遭った」

「もう二度と会いたくな——い!」

「幸いテイアンに被害は出ませんでした……………。あの男、やるだけやって逃げたので後始末が大変でしたよ」

『その上、ギリギリ罪に問われないやり方だったから、こっちから何かするのも難しくくてな……………』

「克蘭的な体面とかもあるし……………」

……………うわあ。皆さん苦虫を噛み潰したような表情(ライザーさんは仮面を被っているが雰囲気でわかる)をしているなあ……………これは説得出来ても不和のタネになるだけでは?

ちなみに詳しく話を聞くと、どうやら『非常に面倒だけど克蘭総出で報復する程では無い』感じの事件だったらしい。

「ま、まあ、エフさんに事についてはミカが何とか説得すると言って居ましたし、それでダメなら始末するので大丈夫でしょう」

「本当に大丈夫なのか? ………………アイツは遠距離戦闘なら王国の〈マスター〉の中でもトップクラスだぞ」

うーむ、ミユウちゃんが『彼の目を誤魔化す策があるのです』と言っていたし、あのメンバーなら大丈夫だと思うが……………むしろ、あの規格外三人組が向かったエフさんの方に同情するレベルだけど。

……………それに、リアル側でミカが『必要だから交渉は大分エゲツない事をする』と言っていたからなあ。やり過ぎ無いかないアイツら……………。



??□アルター王国北部 フラッシュユマンサー【閃光術師】エフ

そこはクリラ村がある森から少し離れた場所、ここでエフは自身の〈エンブリオ〉を使って三兄妹を監視していたのだが……。

「ふむ、森に入れた【ゾディアック】は全滅ですか。……やはり、古代伝説級〈U ユニーク・ボス・モンスター B M〉の領域に光学迷彩程度では無意味ですか」

その為に森に入れた【ゾディアック】は直ぐに結界に囲まれてそのまま潰されてしまったので、今は森の上空など外側に配置した【ゾディアック】で監視を続けているのである。

「とは言え、これでは村の様子が分かりませんね。……行き来する馬車やクレーミルに居る騎士達や避難民の様子や集めた情報から村で何かがあった、或いはこれから何かが起きる事は分かっているのですが、このままでは何も見れずに終わってしまいそうですね。……さて、どうしたものか……ん？」

そうエフが今後の行動を思案していると、森の監視につけて居た【ゾディアック】の一つがとある光景を彼の目に映し出した。

「あれは……シユウ・スターリングの戦艦ですね。……しかも、上に乗っているのは妹さん達ですか」

それはシユウ・スターリングが有する戦艦——【バルドル】の第五形態である軽巡洋艦であった……更にその艦上には主人であるシユウの他に完全武装したミカとミュウが乗っていたのだ。

……そして、彼等の乗った戦艦は真つ直ぐにエフがいる場所へと全速力で進んでいた。

「これは、不確定要素になり得る私を始末しに来ましたかね？ ……以前、シユウ・スターリングや〈バビロニア戦闘団〉には取材をした事がありますし、何か起こる前にこちらを排除するというのは十分あり得ますか」

視界に移る彼等の様子から相手の目的をそう推測したエフは、僅かな時間今後どうするかを思考し……。

「仕方ありませんね……今は一旦引いて事件が起きてからどさくさに

紛れて接近しましょうか」

ここでデスペナになれば事件を取材できなくなるリスクを考え、更にどうせ事件が起きなければそのまま撤収すれば良いとも思いつつ、エフは左手の紋章から「ゾディアック」をいくつか展開して一旦ここから離れる為に必殺スキルを行使しようとした。

「では《天ソに描く物グ》「それはさせられないのです」なっ!?!?」

その時、必殺スキルを発動しようとしていたエフの左手を何者かが掴んだのだ……………周囲には誰も居ない筈なのに、いきなり現れた腕を掴まれたエフはその人物を見て更に驚愕した。

「貴女は……………確かミュウさん……………でしたね」

「はい、そうなのです。分かっていると思いますが妙な真似はしない様に……………この一挙手一投足の間合いであれば、貴方が何かするよりも早く私が貴方を始末出来るのです」

確かにこの間合いで近接型超級職に腕を掴まれているのでは、魔法型である自身にはどうしようもない事ぐらいはエフにも分かっていた……………だが、彼にはそれよりも気になっている事があり、内心の動揺を押し隠してミュウに問いかけた。

「……………しかし、私の《エンブリオ》には貴女が戦艦の艦上にいる様に見えていますし、貴女はいきなり此処に現れた様に見えたのですが……………」

「あれは私の《エンブリオ》が作った幻術なのです。……………こちらミュウ、目標を確保したのです」

そうやって彼女が「テレパシーカフス」で連絡を取ると、次の瞬間には艦上にいた彼女の姿はかき消えていた……………この光景を作り出したのは、以前フェイが「ジャック・デスサイズ・キラール」からラーニングした《ファントム・トリック》——術者の姿をした高精度な幻術を周囲の空間に映し出すスキル——の効果である。

また、この《ファントム・トリック》は術者の幻影しか作れない代わりに《看破》など一定レベル以下の視覚系感知スキルを誤魔化す効果もあるため、視覚系スキルしか遠隔使用出来ない「ゾディアック」では見破れなかったのである。



そして彼女はエフの疑問に答える様に、自分がどうやってここまで来れたのかを説明していった。

「やった事は簡単なのです……………目立つ戦艦に目を向けさせつつ、フエイに私の姿を幻術として映し出させてながら、私自身はスキルで姿を消してここまで接近だけですね」

「成る程、納得しました。……………私のへエンブリオへは視覚情報しか取得出来ないのでからね」

ちなみに彼女が姿を消すのに使ったスキルは《気圏合一》——周囲の気と自身の気を同一化させる事で自身が発する情報を他者に認識されなくするアクティブスキル——というものであり、更にこれと《第六圏》による感知でエフを位置を捕捉して接近した形になる。

……………さて、当初はミュウがいきなり現れた事にやや動揺していたエフだが、疑問を解消する会話をする内に落ち着きを取り戻していた。

「それで、私に一体なんの用でしょうか？ ………………こうして私にまで生きているという事は、ただ始末しに来たという訳では無いのでしょうか？」

「はい、今回は貴方と交渉するつもりで来たので姉様とシユウさんが来るまで大人しく待っていてほしいのです。……………勿論、抵抗した場合が容赦なく仕留めますので」

その言葉と同時に掴んだ手の力が僅かに強まった……………この状況ではどうしようもないと判断したエフは交渉に応じる旨を伝え、更にこれ以上抵抗しない証拠として自身のへエンブリオを紋章の中に収納した。

……………それを確認したミュウは掴んでいた腕を話したが、自身が即座に相手を仕留められる距離を維持しつつ警戒は続行していた。

「……………そこまで警戒しなくても、こちらはもう抵抗する気などないのですが……………」

「念のためなのです。……………どうやら来た様ですね」

エフは両手を広げながらそう言うが、ミュウはそれを適当にあしらった……………そうしていると村がある方角からキャタピラの音が

聞こえて来て、見ると一隻の戦艦が真っ直ぐこちらに向かって来ていた。

……………それからすぐに接近して来た戦艦は二人の近くで停止し、その艦上から二人の影が地上に飛び降りた。

「はーい！ エフさん久しぶり〜！」

『よー！ エフ。そろそろ年貢の納め時ガル〜』

「お久しぶりですね二人共。……………それでご用件は？」

勿論、飛び降りて来たのはミカとシュウ、そしてミカの肩に捕まっているフェイである……………それに対してエフは妙に高いテンションの二人をスルーして用件を尋ねた。

「ああ、それは交渉に来たんだよ。……………これから始まる戦いに手を貸してほしいんだ」

『ちなみに拒否したら砲弾の雨をプレゼントするガル』

「……………それは、一般的に交渉では無く脅迫と言うのでは？」

シュウが言ったその言葉を裏付ける様に「バルドル」の砲門がエフに向けられていた……………文字通りの砲艦外交に流石のエフもやや引いている。

……………そんな彼を無視して二人は交渉の具体的な内容を話していく。

「詳しく話すと後半日ぐらいでクリラ村を古代伝説級〈UBM〉が襲う気がするから、それを撃破する為に力を貸してほしいって事」

『後、ここに【契約書】を持って来てるから、〃この件に対する全面協力〃と〃今から三日間俺達の味方陣営に危害を加えない事〃を誓ってもらおうガル』

「……………流石にもう交渉の定すら成していないのでは？」

……………余りにあんまりなその内容にエフの雰囲気はかなり剣呑なモノになっているが、二人は更に話を進めていった。

「だってそうしないと貴方はこの事件で有利になった方を襲いにかかるとでしょ？……………要するに、こちらが貴方に支払う対価は〃ここで貴方を殺さない事〃になるね」

『お前の性格からしてここで見逃したり、ただ味方に付けただけでは

背中を預けられないガル。……………それに、これはお前にとつても悪い話だけではないガル』

「……………ほう?」

シユウのその言葉にエフは剣呑な雰囲気を少しだけ引っ込めて、代わりに興味を示し出した。

『今、お前は封竜王の領域を突破出来ずに村の様子を覗き見できていないガル。……………ここで俺達の話を飲めば、村の中の様子はこれから起きる事件を何の憂いもなく取材出来る様になるガル』

「ただし、ここで話を飲まないなら不確定要素を排除する為に貴方は確実に始末するよ。……………そうなれば三日後のデスペナ開けには、この事件は終わっているから貴方が最も見たいと思う光景は見れなくなるから」

「……………成る程、確かに私にも利がある話ですね」

その二人の話を聞いたエフは乗り気になったのか剣呑な雰囲気はかなり薄くなったが……………

「ですが、一つ質問をよろしいでしょうか。……………何故、ミカさん達はそこまで正確に事件が起きる事を知る事が出来るのですか?」

『それを話す必要はn』それは、私が生まれつきそうだった事を事前に知る事が出来るぐらい勘がいいからだよ」……………ミカちゃん、いいのかガル?』

エフの質問に対してシユウはミカの事を考えて回答を拒否しようとしたが、それに被せるようにミカ自身があっさりと自分の能力を明かした。

……………それに対してシユウはその後の事も考えてミカに真意を問うたが……………

「うん、どうも私の能力について気付かれかけているみたいだし、ここで話した方が良いかな。……………シユウさんが気にしているのは彼が今後私達に付き纏う事だろうけど、まあ覗き見されるぐらいならあまり気にはならないしね。……………それに、こちらに危害を加える様なら直感で先んじて潰せばいいだけだから」

「はい、姉様や兄様に手を出そうとするなら容赦はしないのです。

「……………具体的に言うとは彼は痛覚を遮断していない様なので、人体構造上発狂するぐらいの痛みを与えた上で殺します」

『えーと……………ミュウの望みなら可能な限り答えるけど……………あんまりやり過ぎない様にね』

『……………この妹達アグレッシブ(婉曲表現)すぎるガル。レント君の苦勞が偲ばれるガル』

「……………これは、地雷を踏みましたかね(冷や汗)」

その真意がかなりヤバイ(控えめな表現)モノだったので、フェイトとシユウとエフは物凄くドン引きしていた……………特に直接ミュウの殺気(ガチ)を向けられたエフは冷や汗を流しながら硬直していた。「私達がデンドロをやっているのは、自分の才能に対して答えを見つける為でもあるからね。……………今回は釘を刺しおくだけだけど、それを邪魔する様なら敵と見做すよ」

「その事を知らずに偶然邪魔をするならば別にどうこうしません、それを知った上で意図的に邪魔するなら容赦をする気はないのです」  
「ア、ハイ……………」

……………どうやら、この交渉( )の趨勢は完全に妹二人に傾いた様だ……………。

『あ……………で、どうする?』

「……………分かりました、貴方達の提案を受け入れます」

かなりアレになった空気を誤魔化す様にシユウがエフに答えを聞き、それに便乗する様に彼はその提案を受け入れると答えた……………  
と言うか、完全にその場の空気に飲まれた感じだが……………。

……………その後、エフはこれ以上何か言われる前にさっさと【契約書】にサインをしてしまった。

「さて……………これでエフさんも味方だね!……………脅す様な形になったのはちよつとアレだったけど、この事件で貴重な光景が見られる事は保証するよ」

「そうですね、楽しみにしていますよ。……………それに、改めて考えてみると【契約書】で縛られて戦わされるのは初めての経験ですし、話を聞く限り古代伝説級(UBM)と戦うという貴重な経験を積める様

ですからね。まあ、満喫させてもらいますよ」

『……………こいつ切り替え早い上にブレねえなあ……………』

……………そんなシユウのやや呆れた声をもって、不確定要素の排除と戦力確保の為の交渉（）は終わりを告げたのだった。

## 来たるモノ達

??アルター王国北部 「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」  
クリラ村から離れた場所にある森の中、そこに居るのは中肉中背の  
何処にでも居そうな男性……………だが、その顔には感情というモノが  
無く、ただクリラ村がある方角をジツと見つめていた。

……………彼こそが「アークブレイン」の遠隔操作分体の一人「ハ  
イ・マインド・アバターホームンクルス」であり、現在は作戦の開始時  
間を待ちながら隠密モードで待機していた。

（現在の「ギガキマイラ」封印地点には複数の劣化“化身”とこの国の  
騎士、そして封印の要である「封竜王」が配置されている。……………  
第二目的である“「ギガキマイラ」掌握”の難易度は上がったが、第  
一目的の遂行には問題ない。計画は“アレ”が到着次第、予定通り実  
行する）

ちなみに彼の監視方法は偵察用に持ち込んだ「フローター・ハイ  
ンドアイ」——策定・隠蔽能力に特化した空を飛ぶ一つ目型モンスター  
で《透視》《遠視》《光学迷彩》《気配遮断》などのスキルを持つ——を  
「封竜王」に感知されない様、領域である森から離れたところに複数配  
置して、それらが得た情報を《ハイパーデータリンク》で取得する方  
法をとっている。

……………そうして、しばらくの間監視を続けつつ待機していると、  
突然僅かに地面が揺れた。

（どうやら“アレ”が到着した様だ。……………これより作戦行動を開  
始する）

そうして準備が整った「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」は、  
息を潜め隠密系スキルを使いながらながら目標地点であるクリラ村  
に近づいていったのだった。



□クリラ村 チャージライダー 「突撃騎兵」 レント

「と、言うわけで、今回の事件の解決を手伝ってくれる事になったエフさんです！」

「宜しく願いますね」

一通り騎士達やへバビロニア戦闘団、そして【封竜王】さんとの打ち合わせを終えた頃、エフさんとの交渉を成功させたミカ達が村に戻って来て彼が今回協力者になってくれる事を伝えた……………のだが……………。

「……………本当に大丈夫なのか？」

「信用出来ないですね」

「こいつ嫌ーい！」

『うん、予想通りの反応ガル』

まあ、予想通りへバビロニア戦闘団の皆さんからの反応はかなりキツイものだった……………尚、騎士団の人達はへバビロニア戦闘団から話を聞いていたのか、それとも彼の悪名が広まっていたのかやや懐疑的な雰囲気、封竜王さんは我関せずな感じだった。

「うーん、分かっていたけどエフさん信用ないねー……………一応【契約書】で二十四時間はこちらを撃てない様に縛っているんだけど」

「今回は普通に協力する気なんですけどね。古代伝説級ユニーク・ボス・モンスターへU B Mとの戦いなど滅多にありませんから、満喫させて貰いますよ」

「……………一応《真偽判定》にも反応は無い様だな」

『まあ、何かやらかしそうなら後ろから撃てばいいガル』

その後、へバビロニア戦闘団の皆さんはいくつかの確認や話し合い、そしてミカとシユウさんの取り成しの末、どうにかエフさんが今回の事件に協力する事を認めてくれた……………最も、疑惑の視線は最後まで変わらなかつたし、彼が何かする気配があればすぐに斬り捨てる事も条件に加えられたが。

ちなみに、エフさんはそんな針のむしろ的な状況の中でも終始いい笑顔を浮かべていた……………この人本当に面の皮が厚いな。

「……………おいミカ、これ戦力は増えたけど連携とかに問題が出来てないか？」

「うーん……多分大丈夫だと思うよ。この方が被害は少なくなる気がするし……それに、事が始まったらそんな事を気にする余裕はなくなると思うから」

この状況は不味いのでは無いかとミカを問い質してみたら、そんな感じの答えが返ってきた……薄々分かつてはいたが、今回はそんなにヤバイ事件なのか……。

……俺が今後の事を思案していると、ミカが更に話を続けてきた。

「それでお兄ちゃん、ちよつと頼みがあるんだけど……」  
「何だ？」

……そして、話を聞く事しばらくして俺はミカの「頼み」を聞き終わり……。

「……分かった。それがこの事件を解決する為に必要な事なんだな？」

「うん、お兄ちゃんが頑張ってくればこの事件で被害が出る確率少しでも減らせると思う」

やれやれ、どうも今回は俺の活躍が事件に影響を与える比重がかなり大きいらしいな……プレッシャーはかかるが、ここは兄として妹の頼みぐらいは聞いてやらねばな。

……それに、さっきの「説得」の事や死んだらそれまでのテイアンの騎士達がいる事もあって、今回はミカもかなり余裕がないみたいだしな。

「じゃあお願いね、お兄ちゃん。……私はミュウちゃんにも話してくるから！」

そう言ったミカは急いで今言った二人の元へと駆けていった……まあ、ミカの言う事を全面的に信じてくれる人間は俺やミュウちゃんぐらいだからな、他の人間だと説明が面倒だし。

「……さて、俺も「お兄ちゃん」として頑張りますかね」

……そうして、俺はミカからの「頼み事」を熟す為に行動を開始したのだった。





□クリラ村 メイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

さて、お兄ちゃんとミュウちゃんに一通り支持を出しておいたし、後は相手の出方待ちかな……………私の直感でも〃これ以上は出来る事は無い〃って感じだけどちよつと不安かな……………

……………と、そんな事を考えていたら、それを察知したミュウちゃんが話しかけてきた。

「……………姉様、大丈夫なのですか？」

「あ、うん、大丈夫だよミュウちゃん。……………出来る事はやったからね、後は……………ッ！」

……………その時、私の〃直感〃が今回の事件の始まりを告げた。

「どうやら来るみたいだね。……………とりあえず、封竜王さんに伝えるに行こうか」

「お供するのです」

そうして、私はミュウちゃんを伴って封竜王さんの所に向かい、彼にもうすぐ敵が来る事を伝えに行った。

「封竜王さん？ 多分もうそろそろ此処に敵が来ると思うよ」

「ふむ、私の探知には引つかからないが……………。常時発動しているパッシブ型の探知は封印の監視にリソースの殆どを割いている所為で、隠蔽は光学迷彩ぐらいしか見破れないしな。……………じゃあ能動探知で詳しく調べてみるか……………」

そう言った封竜王さんは目を閉じて探知に意識を集中させ始めた……………ちなみに、その話を聞いた他のみんなは半信半疑だったが、封竜王さんの反応を見て戦闘準備を整えつつ周囲を警戒していった。

……………後、シユウさんとミュウちゃんは一見普段と特に変わらず自然体だけど、多分アレで常時警戒してる感じらしい。

「……………ふむ、確かに侵入者がいるな。……………位置はその民家の影だな」

「ッ！ 全員警戒！」

目を瞑ったままの封竜王さんが侵入者がいる事を伝え、その位置と

して一つの民家を指差した……………それに真つ先に反応したフォルテスラさんが全員に警戒を呼び掛け……………。

「しかし、珍しいジョブだな……………  
【キング・オブ・クライム犯罪王】とは」  
「『ッ!!』」

封竜王さんがそのジョブ名を口にした瞬間、騎士団の皆さんとシユウさんの警戒度合いが大幅に膨れ上がる……………そして、それとほぼ同時に封竜王さんが示した民家の影から一人の男性が姿を現した。

……………ふむん、見た目は眼鏡を掛けた普通の男性に見えるんだけど、シユウさんの警戒度が尋常じゃないから多分かなりヤバイ相手なんだだろうなあ。

「おや、あつさり見つかってしまいましたね。一応、この特典武具には王城の警備を潜り抜けられるぐらいの性能があるのですが」

『ゼクス……………一体何の用ガル』

客観的に見てかなりピンチな状況なのに、そんな事を言いながら平然としているゼクスさんに対し、彼を警戒しているのか前に出たシユウさんはそう問いたました。

「ああ、要件ですか。この私はこの村に戦うと罪になる（UBM）が居ると聞いたので戦いに来ただけですよ」

「?……………この人、行動指針がよく分からないね。シユウさん、分かりやすく説明プリーズ」

『世界派の犯罪ロールプレイヤー』

要するに犯罪者になる為に行動している感じなのかとシユウさんに聞き直すと、彼は『その通りガル』と答えてくれた……………どうやらかなり変わった人みたいだね。

……………さてと……………。

「封竜王さん、多分彼は本命じゃないから引き続き探知をお願い出来ますか?」

「ふむ……………了解した。少し範囲を広げてみるか」

他のみんながゼクスさんに集中しているのを後目に、私は封竜王さんに探知の続行をお願いした……………そうしている間にも、以前からの知り合いらしいシユウさんがゼクスさんを牽制しながら問い詰め

ていた。

『しかし、らしく無いんじゃないか？ これだけの戦力が揃っている所に突っ込んで来るなんて』

「いえ、この私は少し偵察でもするつもりだったのですが、不覚にもあつさり見つかってしまっただけですよ」

尚、この二人は凄く和やかに話している様に見えるけど、二人の間には余人を寄せつけない様なヤバイ雰囲気にも包まれているんだよね……まあ、すぐにそんな事を気にしている余裕は無くなるんだけど……

「……来たね」

「ッ！ 地下から超大型モンスターの反応！ これは……ッ！」

『ッ!!』

そして、私が直感で、封竜王さんがスキルによる探知で「ソレ」の襲来を感知すると同時に地面が激しく揺れた……その直後、村がある森のすぐ外側、私達から見て後方数百メートル程離れた地面が、咆哮と共に地中から出てきた「何か」によつて大爆発を起こした様に爆ぜ飛んだ。

……そうやって土煙りの中現れたのは直径十メートルを超え、高さ数十メートルにも達しそうな円柱………否。

「あれは生物みたいだね。………巨大な蚯蚓かな？」

「馬鹿な!? 【魔鋏蚯蚓 アニワザム】だと！ 何故奴が此処に!!」

ソレは地上に出ている部分だけでも数十メートルに達する大きさを持つミミズ型モンスターだった………それを見てゼクスさんが現れた時にすら余裕を崩さなかつた封竜王さんが、焦った様に【魔鋏蚯蚓 アニワザム】という名前を告げた。

………ふむ、聞いた事がある名前だね。確か私が超級職に転職する際にお世話になった自然ダンジョンへ水精洞窟を作った古代伝説級〈UBM〉だったかな。

そして、「アニワザム」は動揺する私達を後目にその鎌首をもたげ、先程現れた時とは比べ物にならない程の大音量で咆哮した。

『ッッッ!!』

「ちよっ！ 耳が痛いね！」

「ちよつと待て！ これは……！」

『地面が揺れて……！』

その大咆哮に私達が怯んでいると、いきなり地面が先程現れた時とは比べ物にならない程に揺れだした……その揺れの規模は戦闘職である私達ですらバランスを崩す程で、更には周囲の地面が割れたり隆起したりする程だった。

……そして、古代伝説級〈UBM〉の能力がただ大声を出しながら地面を揺らすだけの筈が無く……。

『これは……！ 地属性魔法による此方の領域への強制干渉!?？ 封印術式への干渉ではなく、大魔力によって領域そのものを無理矢理破壊するつもりか！ これでは流石に……！』

『ッ!!』

封竜王さんが発したその言葉を裏付ける様に地面の揺れは更に勢いを増し、とうとう森の木々や民家すら壊れる程の地割れや隆起が起きる程だった。

……そして、その揺れがピークに達した時、村の地下から何かかじり割れる様な甲高い音が鳴り響いた。

「不味い！ 封印が解けr 『G A A A A A A A A A A A!!』 ツ！」

封竜王さんの焦りの声とほぼ同時に地中から咆哮が聞こえて来て、更に私達から見てゼクスさんを挟んだ向こう側の地面が吹き飛び、そこから一体の巨大な狼が現れた……その狼は体長十メートル程で、よく見ると背には燃え盛る翼が生え、尾はサソリのモノ、更に四肢は虎のモノになっており、更にソレ等以外にも身体の一部が別の動物のモノに置換されている様に見えた。

……そして、その異形の狼の瞳からは狂気の意味しか伺えず、頭上には【十狂混沌 ギガキマイラ】の文字があった。

『G U U U U ……』

『』

『これは……！』

『前門と後門に古代伝説級と……分かっていただけ面倒な事になった』

ね」

「……………んー、流石に状況が混沌としすぎて、皆さんどうすればいいかわからずに居るみたい。」

幸い前方の「ギガキマイラ」は復活したてだからか周囲の様子を探っている様で、後方の「アニワザム」も大魔法を使った後だからか先程と比べてかなり大人しくなっている様だった……………が。」

『……………G A A Aアツ！』

「む」

周囲の確認を終えたらしき「ギガキマイラ」が音速の五倍以上の速度で近くにいたゼクスさんに襲い掛かり、その口で彼の身体の膝から上を噛み砕き丸呑みにしてしまったのだ……………「ギガキマイラ」はゼクスさんを咀嚼して飲み込み、残された彼の足半分はそのまま液体になって溶けてしまった。

……………そして、この場に居る最後の古代伝説級〈U B M〉である封竜王さんは何も出来ずに居る……………訳が無く。」

『永遠竜晶』全展開」

『……………！ G A A A A Aアツ！』

『……………！』

封竜王さんがそのスキル名を宣言すると同時に周辺一帯の地面から紫色の水晶が生え、更にソレ等の水晶からオーラの様なものが発生して二体の〈U B M〉を覆い尽くした……………そして「ギガキマイラ」を覆ったオーラはそのまま水晶へと変じて相手を閉じ込め、「アニワザム」の方はオーラが紐状に変形してその動きを拘束した。」

「この五百年、私がただこの村でのんびりと料理の練習だけしてきたとでも？ 当然、万が一の仕込みの一つや二つはしてあるさ……………と言っても、さっきの干渉で仕込みを半分ぐらい潰されてしまったかな。特に領域の範囲外だった「アニワザム」の方は長くは持たないだろう」

流石は古代伝説級の竜王さんだね、動揺していたみんなを落ち着かせる為の時間稼ぎをしてくれたよ……………それに、この状況なら私が音頭をとる事も出来るだろうし。」

「それじゃあ、手早く役割を決めようか。……………私と封竜王さんで【ギガキマイラ】の相手をするから、残りは【アニワザム】を相手にする感じで行こう」

『……………二人で大丈夫なのか？』

そんな風に私が音頭をとると、いち早く状況に対応したシユウさんが疑問をぶつけてきた……………と言うより、敢えて反論する事で私が音頭を取りやすくしてくれてるみたいだね。

「必殺スキルを使えばどうにかなると思うから、多分大丈夫。……………それに【アニワザム】の方が相手をする為に人数がいるみたいだし」

『成る程、あれか』

シユウさんの言葉に釣られて全員が拘束された【アニワザム】を見ると、そこには色とりどりの“何か”を多数召喚している相手の姿が見えた……………遠いからよく分からないけど、以前聞いた情報からしてアレは……………

「【アニワザム】のエレメンタル召喚能力か……………あつちは質量が大きすぎて全身を覆う事は出来なかったからな」

「そうみたいだね。……………お兄ちゃん、しばらく時間稼ぎよろしくー」

『無茶振りを言うな！』

封竜王さんの言う通り、アレは【アニワザム】が召喚したエレメンタルモンスター達だった……………とりあえず事前に事情を説明して、近くに配置しておいたお兄ちゃんに時間稼ぎを頼んでおこう。

……………その指示に対し文句を言っていたお兄ちゃんだが、【マグネトローベ】を駆って空中に躍り出ると各種魔法や【ジエム】でエレメンタル達を攻撃し始めてくれた。

「さて、あんまり時間をかけるとお兄ちゃんが死ぬから、こつちは私に任せてシユウさんはあつちで戦ってほしいな。……………と言うか、シユウさんがあつちに行ってくれないと詰むし」

『……………分かった、バルドル第五形態』

『了解』  
ラージヤ

私がそう頼むとシユウさんは呼び出した戦艦形態のバルドルに乗って【アニワザム】の元に向かつて行った……………近くにいたエフさんをついでに乗せて。

「何故、私まで？」

『テメーは近くに置いておかないと（こつちが）危ないガル』

「信用無いですねぇ。……………まあ、今回は普通に戦う気でしたし別に構いませんが」

そうしてシユウさんが率先して動いてくれたお陰で、他のメンバーも動揺から立ち直り始めた……………その中でも立ち直りが早かったのは、それぞれの集団のリーダー格であるフォルテスラさんとリリイさんだった。

「ミカちゃん、俺達はどうすればいい？」

「この状況を最も把握しているのは貴女の様ですから、この混乱した状況を打開する為に指針をお願いします」

「それじゃあ、二人は他の人を纏めて【アニワザム】の所に行つてほしいな。……………それとミュウちゃん、感知出来た？」

「……………はい、あの【アニワザム】を操っていると思しき意思は見つけたのです。以前と違って強力な力を一体に集中していた所為で分かりやすかったですね」

そう、ミュウちゃんには事前に精神干渉を行う伏兵がいるかもしれないから、そいつをどうにか見つけてほしいと頼んでおいたのだ。

「それじゃあ、そいつを倒す為にミュウちゃんの方にも1パーティー分ぐらい援軍が欲しいかな」

「それなら、俺達の中で足に自身があるヤツ等を付けよう。……………ライザーは足の早いメンバーを何人か連れてミュウちゃんに同行してくれ」

『分かった』

「まずはクレールミルと王都に事件の連絡を！　そして準備が終わり次第【アニワザム】の迎撃に向かいますよ！」

「了解！」

私の提案にフォルテスラさんは即座に応じてくれて、リリイさんも

素早く騎士達に指示を出して混乱を納めてくれた……………私じゃ何をすればいいか分かつては集団を纏めあげるの難しいから、クランオーナーである彼や騎士達のリーダー格である彼女が協力してくれるのは有り難いよ。

「シャルカは残りのメンバーを率いて【アニワザム】の迎撃を頼む……………ミカちゃん、俺とネイの必殺スキルならステータスで上回る相手にも打つ手があるから【ギガキマイラ】との戦いにも参加出来ると思うがどうだろうか？」

「む……………それじゃあ、フォルテスラさんは私の援護をお願いします」

そうして、頼れるリーダーの指示の下で態勢を立て直した私達は各々が向かうべき戦場へと向かって行った……………そのすぐ後に【アニワザム】の拘束が解けたから、本当にギリギリだったね。

……………そして、私達の準備が整った事を見た封竜王さんがこちらに声を掛けて来た。

「【ギガキマイラ】の方の拘束もそろそろ解けるから準備をしておいてくれ。さて、私も本気で行こうか……………人化解除」

その言葉と共に封竜王さんが光に包まれ、その質量を大幅に増大させた……………光が消えた後に私達の目の前に居たのは、紫色の水晶のような鱗を持ち、背中には大きな翼を持つ西洋風の大型ドラゴンだった。

……………その本来の姿に戻った封竜王さんは、私を見てこう質問した。

『さて、君はアレに対して有効な手段を持っている様だが、どう戦う気なのか？』

「基本は私が必殺スキルを使って正面から殴り合いますので、二人は援護をお願いします……………後、フォルテスラさんは出来れば必殺スキルの発動条件を教えてください」

「俺達の必殺スキルの発動条件は『相手の攻撃でネイが砕かれる事』だ」

「必殺スキルを使うと相手のステータスを自分に加えられるんだよ」

成る程、それならステータスの差は意味がなくなるね……………そし



て説明を終えたネイリングちゃんは長剣形態になってフォルテスラさんの手に収まった。

「……………」と、そうこうしている内に「ギガキマイラ」を閉じ込めた水晶にヒビが入り始めた。

「とりあえず、私の必殺スキルの効果は時間制限付きなので短期決戦を目指します。……………」どうやら時間が無い様なので、後は臨機応変にやっつけていきましょう」

『まあ、それしかないか。……………来るぞ！』

話しているうちに水晶のヒビが大きくなって来たので、私は話を打ち切り戦闘準備を整えて前に出た……………直後、封竜王さんの警告と共に水晶が砕けちり、中に閉じ込められていた「ギガキマイラ」が解放された。

『GYAAAAAAAA!!』

解放された「ギガキマイラ」は迷わず近くにいた私に飛びかかり……………。

「《神碎刑崩》」

その直前、私は「激災棍　ギガス」の必殺スキルを行使した。

## 神を砕くモノ

□クリラ村 メイイス・プリンセス【戦棍姫】ミカ

さて、私のへエンブリオ〈激炎棍 ギガス〉のモチーフはギリシャ神話において神々に戦いを挑んだ巨人達の事である（初日のログアウト時にwikiで調べた）……………これは私が『自身に直感という形で降り掛かる神々<sup>理不尽</sup>を打ち破る力が欲しい』というパーソナルに由来するモノだろう。

それ故に【ギガス】の能力特性は『理不尽を打ち破る為の力』であり、その為の手段として高い物理ステータス補正と防御効果減衰の《バーリアブレイカー》が与えられているのだと思う……………多分。

そして必殺スキル《神砕刑崩<sup>ギガス</sup>》には発動条件として『自身よりも敵の方が強い』必要があり、更にこの条件は相対評価だから私が強くなるほど条件が厳しくなる……………が、今回の相手は古代伝説級<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>へU B Mだからこちらも条件を満たしているね。

……………では、肝心の効果はと言うと……………

『G A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

「ふっー！」

封印から脱してこちらに突っ込んできた【ギガキマイラ】は、そのまま鋭い爪が生えた前足を振り下ろし……………私は音速の五倍で振られたそれを片手で受け止めた。

……………向こうは五万を超えるSTRな上に全長10メートルを超える大質量だから、受け止めた反動で私の足元の地面に小型のクレーターが出来たが、今の私の身体には何の影響も無かった。

しかし、ヤツは狂化している所為か自身の攻撃が受け止められても構わずこちらを喰らおうと牙を剥いて来た。

「《不治呪瘡》《インパクト・ストライク》！」

『G Y A A A A A A A A A A A A A A A A!?!?』

だが、その喰らいこうとしていた狼の頭部を、私は【ブラックオーツ】のスキルを使った上でもう片方の手に持っていた【ギガス】でブン殴る事で粉々に砕き、その余波でヤツを吹き飛ばした……………こ



新たに生えて来たのだ………そして、その熊は帯電しながらこちらを向いて大口を開けていた。

これは砲撃だと直感した私は「ギガース」を振りかぶり……。

『GUUAAA!!』

「《エフエクトバニツシュ》！」

その直後、熊の口から放射状に雷撃が放たれた………が、それを先読みしていた私は雷撃を「ギガース」で殴る事によってかき消し、そのままの速度でヤツを殴れる距離まで肉薄した。

だが、ヤツは既に何かオーラの様なモノ（多分、封竜王さんが言っていた《竜王気》）を展開し、更に背中の中翼を巨大化させた上で金属化させ、自身の身体を覆う事で防御の姿勢をとった。

「でも無駄ア！ 《インフェルノ・ストライク》！」

『GUUAAA!!』

しかし、私が放った豪炎を纏う「ギガース」による一撃は、それらの防御をまるで紙切れか何かの様に粉碎した上でヤツの身体に叩き込まれた………まあ、今の十五万に迫る私のSTRと自身の攻撃力に応じて防御・身代わり・ENDバフといった『身を守るスキル効果』を減衰する《バリアブレイカー》を組み合わせればこうなるよね。

私のその攻撃を受けたヤツは直撃した片翼と熊の頭部、そして片方の前足を焼き潰されながら吹き飛ばされていた………うーむ、STRが高くなりすぎてるね。吹き飛ばされたヤツを追うのに時間をロスしてしまう。

………正直、私はミュウちゃんやお兄ちゃん程の技術が無いから、ステータスが上がり過ぎると制御が難しいな……。

『GAA!』

「え？ 壁？」

そんな事を考えていると、吹き飛ばされた「ギガキマイラ」がその先にあった紫色の水晶の壁にぶつかっているのが見えた………あれは封竜王さんが出したヤツかな？

………そう思っただけで周りをしてみると、いつのまにか村の周りに高さ数十メートルもある円周上の水晶の壁が展開されている所だった。

『時間が無いのなら戦闘領域が限定した方がいいだろう。ついでにこ  
の中ではヤツにデバフが掛かる様にもしてある』

「ありがとう！ 封竜王さん！」

疑問に思つて後方に居た封竜王さんを見てみると、彼はその様に説  
明してくれた……………これでヤツの移動範囲が狭くなるから正面か  
らの殴り合いに持ち込めるね！

……………そう思つてヤツに向き合うとその狼の頭部は再生されて  
おり、更に熊の頭部があつたのと反対側の肩から鳥の頭が生えた。

そして、その頭部が甲高い鳴き声を上げると、ヤツの身体が炎に包  
まれた上で背中の翼が大型化してその身体を宙に舞わせ、その翼から  
無数の炎弾をこちらに放つてきた。

『KEEEE!』

「つて、逃がさないよ！ 《竜尾剣》！」

流星に今の私でも空を飛ぶのは無理なので、降りかかる炎弾を上昇  
しているEND任せで無視して《竜尾剣》を音速の十倍でヤツに向け  
て射出し、そのSTR十万以上の攻撃力で右翼を貫き爆砕した  
……………本当は胴体を狙ったんだけど速度が高すぎて外してしまつ  
たので、次からは少し速度を落とすべきかな。

そして片翼を破壊されたからか、ヤツは空中でバランスを崩し  
……………

『空を飛ばれると厄介だから落ちて貰うぞ……………《飛行封印》』

『!?? KEEEE!!』

封竜王さんのその声と共に空を飛ぶ事が出来なくなつて、そのまま  
地上に墜落していった……………スキル名から考えると『飛行』という  
行動を封印する効果かな？ 封竜王さん自身も今は地面に立ってる  
し、この空間全体に効果を発揮するタイプみたいだね。

……………さて、ヤツが飛行を封じられている間に接近しますか。

『KEEEEE!』

『GAAAAAAAAA!!』

『GUUUU!』

「つて、そう簡単には行かないか！」

だが、ヤツの方もただやられているままな訳ではなく、狼の頭と鳥の頭、そして再生を終えた熊の頭が一斉に咆哮すると共に、その身体に雷と炎を纏わせてこちらに突っ込んできた……うーん【ブラツクオーツ】の再生障害は向こうの再生能力が高すぎるのか、それとも逸話級と古代伝説級の格の差か、それこそ耐性でも獲得したのかあんまり効果は無いみたい。

『《ストライクブラスト》！』

『G A A A！』

とりあえず牽制の為に【ギガス】を振って衝撃波を発生させるがヤツは咄嗟に横に飛んで躲した為、残っただけでもう片方の左翼を破壊するだけに終わった……だが、ヤツは破壊された翼の代わりに蠍の腕の様なモノを生やし、その先端についている金属化させたハサミをこちらに振るって来たのだ。

『G A A A A A A A A A A A！』

「ええい！ ビックリ箱か何かか！」

まず、ヤツは私から見て左側の腕を勢いよく伸ばしてこちらに刺突を放って来た……が、私は直感によって未来位置を割り出した上で、そこに被せる様に振るった【ギガス】でそのハサミを破壊する。

しかし、ヤツが纏う雷と炎は防ぐ事は出来ず、特にENDでの減衰を望めない雷によるダメージが私を襲った……が、その雷と炎は私の身体にいつの間にか纏っていたオーラによって、そのエネルギーを減衰させられてしまった。

『私の《竜王気》を貸そう、余波はそれでどうにかなるだろうから存分に暴れるといい』

「本当にありがとう！ 封竜王さんつと！」

『G A A A A A A A A A A A!!』

どうやら、そのオーラの正体は封竜王さんが私に纏わせてくれた《竜王気》だった様だ……そう確認をしつつ私はヤツが振るって来たもう片方のハサミを【ギガス】で弾き飛ばし、そこから更に踏み込んで来たヤツが振り下ろして来た前足の爪を【ギガス】の持ち手部分で受け止めた。

……だが、ヤツはこちらの両手が塞がっている隙に蠍の尾を伸ばさせて、それに付いている針でガラ空きの胴体を串刺しにしようとして来た。

『G A A A A！』

「甘いっ！ 《竜尾剣》！」

しかし、直感でそれを先読みしていた私は《竜尾剣》を使って（速度はA G I五万ぐらいに落とす）その蠍の尾を斬り飛ばした……のだが、よく見ると《竜尾剣》に僅かにヒビが入っている様だった。

……流石にS T R十五万近く、A G I最大十万で振るう事は装備への負担が大きいみたいだね。多分「ギガース」も《アンブレイカブルメイス》による強度上昇が無かったら早々に砕けていたと思うし。

そのまま私はヤツの前足を跳ね上げて、その懐に潜り込もうとするが……。

『G U U U U！』

『K E E E E！』

「あーもう！ ろくろ首か！ 《サンダーインパクト》！」

その両肩にある熊と鳥の頭が伸長してこちらに噛みつこうとして来たので、止む終えず一旦足を止めて雷を纏った「ギガース」でその双頭を打ち砕いた……が、次の瞬間には距離を取られた上で再生された蠍の腕がこちらに襲いかかって来た。

てゆーか、コイツ再生能力が高すぎる！ 封竜王さんとクリラさんが倒さず封印した理由が分かったよ。

『G U G Y A A A A！！』

『S Y A A A A A！』

「また生えた！』

私が再生されて襲い掛かって来た蠍の腕と尾を破壊していると、先程砕いた鳥と熊の頭部があった場所から新たにサメとドラゴンの頭部が生えて来た……S T Rが三倍近く上回っていても砕いた所を片端から再生されるんじやジリ貧だよ。

それに向こうの身体が大きい上に手足を伸ばしたりして来るからリーチで負けているのも問題だね、お陰で相手の懐に潜り込んで必殺の一撃を打ち込むのも難しい。

『G A A A A A A A A A A A!』

『G U G Y A A A A A!』

『S Y A A A A A A!』

「これじゃあ近寄れないんだけど!」

その上、ヤツは狂化している所為で痛みや恐怖を感じていないのか、手足が吹き飛んでも関係無く高速再生させた上で攻撃を繰り返して来る……:AGIにはそこまで大きな差は無いし、今の私のENDでも直撃を食らえば無傷とは言えない上に蠍の腕と尾には毒もあるから防御しない訳にも行かないし。

更にこっちは「ギガース」一本と強度に不安がある《竜尾剣》しか攻撃手段が無いのに、向こうは複数の手足と蠍の尾で攻撃して来るから手数でも圧倒的に負けている。

……:一応、ステータスで上回ってれば、直感で攻撃を先読み出来る以上防衛と回避には支障は無いんだけど……:

「逆に言えば、それしか出来ないって事何だよね!」

『G A A A A A A A A A A A!』

……:そう、私の「近い勘」はあくまでも自身に降りかかる危険を事前に感知出来ると言うモノでしかなく、故にこの様なクロスレンジでの攻防で、尚且つ早急に相手を仕留める必要がある状況だとイマイチ役に立たないのだ。

これがミュウちゃんやお兄ちゃんなら『相手の攻撃を先読みさえ出来れば一方的に殴り倒せる』とか出来そうだけど、私は良くも悪くもステータスによるごり押しが基本戦術だからなあ。正直、大幅に上がり過ぎたステータスを持って余しているし。

それに……:

「コイツ! なんか徐々にステータスが上がってない!」

『G A A A A A A A A A A A!』

『G U G Y A A A A A A A!』



『SYAAAAA!!!』

そう、この短時間の間にコイツの速度が徐々にではあるが上がっているのだ………と言うか、肉体の再生速度や変形速度に関しては戦闘開始時を比べて大幅に伸びているみたいだし……。

封竜王さんのデバフ結界や私の再生阻害も効果が薄いみたいだし、これは「耐性の獲得」とかもスキルにあるかな？

◇

………尚、これはミカや封竜王も知らない事だが、この【ギガキマイラ】がここまでデタラメな再生能力を持っているのは【アークブレイン】による融合改造が上手くいき「過ぎた」事、及び「UBM」化によってスキル《キメラアビリティ》が強化………否、「狂化」された事が原因である。

………元々【アークブレイン】によって想定されていた《キメラアビリティ》はスキル使用時に肉体を変形させる程度のモノで、その応用で傷痕系状態異常の回復が出来るぐらいの性能だった………だが、現在は再生・変化能力共に古代伝説級「UBM」としてもあり得ない程の性能と化しており、更に僅かずつであるが継続的なステータス上昇と受けた攻撃やスキル効果に対し肉体構造を変異させる事による耐性獲得効果まで備わってしまったのだ。

ただし、それだけの性能を実現する為に現在の《キメラアビリティ》にはデメリットとしてコストとして自身の寿命を削る事が課せられており、更に暴走状態で常時発動している【ギガキマイラ】に残されている寿命は半年も無い状態にある………最も常時狂化していて痛みも恐怖も感じない【ギガキマイラ】にとっては特に問題があるモノでは無く、その生命が尽きる時まで狂気と本能のままに暴れ続けるだけだが。

………とはいえ、この【ギガキマイラ】最大の凶スキル《キメラアビリティ》の本領は状況に対応する為の肉体変化である事には変わり無く……。



『GOOOOOOO!!!』

「クッ!?」

どうにか直感による先読みで【ギガキマイラ】の攻撃を躲して懐に潜り込もうとしていた私は、ヤツの前足が変化した巨大な拳に殴り飛ばされた……………直撃だけは【ギガース】を盾にして防いだけど、お陰でまた距離を取られてしまった。

……………そして、その僅かな時間でヤツは更に肉体を変形させた。

『GAAAAAAAAAAA!!!』

『GUGYAAAAAAAA!!!』

『GOOOOOOO!!!』

「……………第二形態とか勘弁してほしいんだけど」

変形したヤツの姿はまずサメの頭部の代わりにゴリラの頭が生え、更に前足がゴリラの手の様に変形した上で二足歩行の巨大な狼男の様なモノであった……………加えて、背中からは伸長した蠍の腕四本と尾が二本生えていると言う異形の姿になっていた。多分、リーチと手数  
数の差を活かすための姿に変化したらしいね。

（さて、必殺スキルを使つてから三十秒は経つたから、残りは一分弱つてところかな）

異形の姿に変化したヤツと向き合いながら、私は自身の肉体に生じていた黒いヒビを見てそんな事を考えていた……………このヒビは必殺スキルを使つてからできてきたモノで、恐らくコストとして削られた最大HPが原因だと思われる。

……………まあ、HPの上限が削られるのに肉体に何の影響も無いとはいかなかったのだろう。幸い肉体の動作に影響は無いが痛覚をオンにしたら酷い事になりそうだ。

（以前、試練の時に使った際には速攻で終わらせた上で結界の効果で元に戻ったから気づかなかつたよ。やっぱりスキルは事前に検証して置くべきだね。……………さて、コイツの再生能力だと普通に攻撃し

ても意味は無いみたいだし、やっぱり【戦棍姫】の奥義を使うしかないか)

………そんな事を考えつつ、私は【ギガキマイラ】との戦闘を続行するのだった。

## 星を穿つ鉄槌

□クリラ村跡地 【戦棍姫<sup>メイス・プリンセス</sup>】ミカ

さて、なんか異形の巨大な狼男に変化した【ギガキマイラ】との戦いだが………はつきり言つて大苦戦である。

『GOOOOOO!!』

『GAAAAAAAAA!!』

『GUGYAAAAAAAA!!』

「ッ！ ええいつ！」

ヤツの狼・ゴリラ・ドラゴンの三頭が咆哮すると共に、右斜め上から繰り出されたハサミ（溶解毒付き）を【ギガス】で砕き、同時に左側から来たハサミを身を逸らしてで回避………したところに正面から二本の蠍の尾が突き込まれたので【ギガス】で打ち払った。

だが、それと同時に回避したハサミが軌道を変えて右側から襲いかかり、更に残り二本のハサミと尾が正面・上・左側から同時に繰り出される。

「《テンペスト・ストライク》！」

その纏めてこちらに襲い掛かる攻撃を私は【ギガス】に纏わせた風を撒き散らす事によって粉碎した………ちなみに《テンペスト・ストライク》の風の威力は、スキルを使用した際に振るったメイスの攻撃力と同じである。

しかし、その直後にヤツは太さが一メートルはありそうなゴリラの右腕でこちらに殴りかかって来た。

「チィ！ 《竜尾剣》！」

『GAAAAAAAAA!』

その拳撃を私は後ろに飛び退いて回避すると同時に背中ワイヤー付きブレードを最上速度で相手の動体に射出した………が、ヤツが咄嗟に身を振った為にその左肩を抉るだけに終わった。

………その直後、再生の終わったハサミと尾が私に襲い掛かった。

（やっぱりヤツの再生速度が早すぎて決め手に欠けるね。………接

近しても体格の差で【ギガース】は相手の膝上ぐらいにしか届かないし）

そもそも、今の私のSTRが十五万近くあると言っても、ヤツのHPやENDが高すぎる所為で手足を殴ったぐらいじゃその箇所を砕くだけで終わるだけだからね……………END減少スキル《ストライク・ペネトレーション》も“相手が防御出来なかった時”のみ有効だから攻撃の迎撃時には作用しないし。

……………そう考えている間にも襲いかかってくるハサミと尾を破壊しつつ、伸ばしてままの《竜尾剣》を迂回させる様に操作してヤツの背後から狼の頭部を狙い突撃させた。

『GUGYAAAAAAAAA!?!』

「チッ！ 外した！」

その不意をついた一撃は迂回させた所為か狙いがずれて、その横のドラゴンの後頭部を貫いた……………その後、一旦《竜尾剣》を引き戻したが、よく見るとブレード部分のヒビが大きくなっていった。【ドラグテイル】もかなり頑丈な筈なんだけどね。まあ、特典武器だから時間を掛ければ再生するし、最悪使い潰すつもりで行こうかな。

……………そう私は身体全体の半分くらいに増えて来た黒いヒビを見ながら考えていた。

（残り時間は後五十秒ぐらい。……………やっぱり、私一人じゃ決め手がないか）

改めて考えると、身体の一部を砕いたぐらいでは即座に元通りになる頭のおかしい再生能力を持ち、AGIに対した差がなく体格とリーチで上回られている相手に単騎ではどうしようも無いかな……………でも、ここで戦っているのは私一人じゃないんだよね。

そう私が考えていた時、まずは後方で支援に徹していた封竜王さんが動いた。

『魔法無効系のスキルがあったから手間取ったが、仕込みはおおよそ完了した。……………《竜気結晶・縛》』

『!?? GAAAAAAAAAAAAAAAAA!』

『GOOOOOOOOOO!』



そんな事を考えている間にも、ヤツは損傷した部分を瞬時に再生させてこちらに襲いかかって来た。

『G A A A A A A A A A A!!』

『G U G Y A A A A A A!!』

『G O O O O O O O!!』

「全く元気な事で！」

そのまま、先程までの焼き直しの様に私とヤツの殴り合いが始まった……ふむ、横合いから邪魔されてもあくまで狙いは私だけか。基本的に自身にとって一番脅威になる相手に対して優先的に対処するのがコイツの行動パターンなのかな？

……でも、それ故に次の一手は刺さるだろうね。

「行くぞ、ネイ！」

『オツケー！』

『! G A A A!』

ヤツが私に集中しているこのタイミングで動いたのは、ずっと後方で状況を伺っていたフォルテスラさんだった……彼は自分がヤツのマークから外れている事を利用してその背後まで接近して、そのまま切り掛かったのだ。

……だが、その速度は亜音速は超えているものの超超音速域の私やヤツと比べれば遥かに遅く、更にヤツも接近自体には気付いていたのか即座に蠍の尾の一本を彼等に突き刺そうと伸長させた。

「それを……！」

『待ってたよ！』

その超超音速で正面から迫りくる尾に対し、彼は不敵な笑みを浮かべながら自身はその軌道上に剣形態のネイリングちゃんを置いた……その結果として超攻撃力を有する尾の直撃を受けたネイリングちゃんは碎け散り、更にそのまま突き抜けた尾は彼に直撃してその身体を吹き飛ばした。

……だが、彼はその攻撃によるダメージを【救命のブローチ】で防ぎ切り……。

『『《超<sup>ネイ</sup>ク<sup>リ</sup>を果<sup>ン</sup>たす者》!!?』』

それと同時に、二人は必殺スキル発動の宣言を行った………瞬間、折れた刃先から眩い光が伸び、それによって失われた筈の刃が光の剣となって再構築された。

そうして必殺スキルを発動したフォルテスラさんは即座に空中で身を翻してヤツの尾を切断し、更にそのまま地面に着地すると同時に私達と同じ超超音速で疾走してヤツの足元まで接近した。

「《オーヴァー・エッジ》《テイバイド・ブレード》！」

『G A A A A A A A A A A A!?!』

そして、彼は光剣を伸長させてその片足に剣を振るい超硬度の筈であるヤツの身体をあつかりと切断して、その膝を地面に突かせたのだ………成る程、敵のステータスを自身に上乘せする必殺スキルと言っていたけど攻撃力とA G Iを上昇させているみたいだね、多分S T Rが上がってるって感じじゃ無いっぽい。

更に、そのまま彼はヤツとの接近戦を行おうとするが……。

『G A A A A A A A A A A A!!』

「おっと」

「チッ！」

だが、ヤツは新たな脅威に対応する為に自身の体毛の一部を炎を纏う羽毛に変化させて、それらから周囲一帯に向けて大威力の火炎を放射して来たのだ………私達には封竜王さんの《竜王気》が纏わされているのでダメージは受けず、上昇していたA G Iもあつて火炎には当たらなかったが、接近しようとした出鼻を挫かれてしまったのでその隙にヤツは切断された足をくっつけて私達に向き直った。

………止む終えず、一旦距離をとった彼は私の隣に来て剣を構え並び立った。

「すまない、攻めあぐねた」

「大丈夫、まだ時間はあるし。……私がヤツに直撃を入れられる様な隙を作ってくれば、後は【戦棍姫】の奥義でなんとか出来ると思う」

とりあえず、あまり時間も無いので簡潔に今後の戦術を伝えてからヤツとの戦闘に戻ろうとするが、それよりも僅かに早くヤツは次の手を打って来た。









ゼクスさんは肉体の一部をボードの様な物に変化させてからそれに乗って空を飛んでその場から離れていった。

……………それらを見届けてから、私はヤツが再び動き出すよりも早く【戦棍姫】の奥義を解き放った。

「メテオライト・ストライク」

……………そうして放たれた奥義の効果は、STRを現在値の十倍にした上で相手をブン殴るといふ実にシンプルなものである。

「!!!?」

そのSTRにして百五十万に迫るその一撃は【ギガキマイラ】の胴体に直撃し、その肉体を粉々にした上で跡形もなく消し飛ばした。

◇

【UBM】十狂混沌 ギガキマイラ が討伐されました

【MVPを選出します】

【ミカ】がMVPに選出されました

【ミカ】にMVP特典【十装混鎧 ギガキマイラ】を贈与します

よし、アナウンスもあつたしどうやら【ギガキマイラ】の討伐は出来たみたいだね……………全身が肉片になつてもそこから再生するなんて事が無くて良かったよ。

……………とは言え、周りと私自身はかなり酷い事になつてゐるが……………

「……………なんか余波で周囲が壊滅しているし、【ギガス】も殆ど壊れるし」

まず、私の《メテオライト・ストライク》に余波によつて地面には巨大なクレーターが出来ており、先程の戦闘と合わせて周辺一帯は大災害でも起きた後の様な壊滅状態になつていた。

更に、奥義の反動で私の両腕の骨が折れており、必殺スキルの反動で腕に出来ていた黒いヒビは亀裂になり夥しい血が流れていた……………そして、百五十万に届くSTRで振るつたからか【ギガス】の持ち手部分は折れ曲がり、三角錐の部分には全面にヒビが入り一部

は碎けてる程のダメージを負っていた。

《アンブレイカブルメイス》と《反動軽減・戦棍》があってもこれかあ……。身体にも全身の八割ぐらいに亀裂が入ってるし……あ、封竜王さんとフォルテスラさんは大丈夫かな？

そう思っていたら、空を飛んでいた封竜王さんとフォルテスラさんがクレーターの中にいるこちらに向かって降りて来るのが見えた。

『どうやら【ギガキマイラ】は倒せた様だね』

「はい、特典武器も手に入りましたし。……余波で酷い事になってますけど、そっちは大丈夫でしたか？」

「こっちは封竜王さんが《竜王気》で防御してくれたから大丈夫だよ。……むしろミカちゃんの方が酷い事になってるけど……」

まあ、見た目的には私の方が余程酷い外見になってるかな……さて、残る問題は……。

「おや、終わったんですね。……では、この私の目的を果たさせてもらいましようか」

上空からいい笑顔で降りてきたこの【犯罪王】さんをどうするかなんだよねえ……。私はスタボロでもうすぐ死ぬし、フォルテスラさんはネイリングちゃんが必殺スキル使用の為に壊れてしまったからか予備の剣を取り出して構えている有様だし。最悪、時間切れになる前にブン殴れば相性差で倒しきれれるかな？

……そう私が考えていたら、その前に封竜王さんがゼクスさんに質問をぶつけた。

『確か、君の目的は私と戦う事で王国に罪に問われる事でよかったかな？』

「ええ、その通りです」

『私と戦うと罪になるのは【ギガキマイラ】の封印の要になっていたからで、それが倒された以上は私と戦っても罪にはならないが』

「じゃあ辞めます」

そういう事になった。

「それじゃあ、この私はここで帰りますのでシユウにはよろしく伝えておいて下さい」

「アツ、ハイ……」

そう言つて、ゼクスさんはさつきも使つていたボードの様な物に乗つて空を飛び、その場から立ち去つて行つた………本当に何しに來たんだらうね、あの人。

………そうこうしている内に必殺スキルの制限時間が終わるうになつていた。

「あ、もう時間切れだから後はよろしくね」

「……分かつた。後の事は任せてくれ」

『私とクリラの後始末を引き受けてくれてありがとう。後日お礼をさせて貰うよ』

その会話と共に黒い亀裂が私の全身に広がつて、更にコストとして消費されていた最大HPがゼロになり………直後、私の身体は黒い亀裂に沿つて砕け散つた。

【致死ダメージ】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限72h】

しかし、デスペナルティのログイン制限時間三倍のデメリットはキツイよねえ………まあ、後の事はお兄ちゃんとミュウちゃんとシユウさん達に任せますか。

## 魔鋤蚯蚓・前哨戦

□クリラ村外縁部 チャージライダー【突撃騎兵】レント

さて、ミカから『お兄ちゃん、村の外のあの辺りから敵が来る気がするから足止めをお願いね!』と頼まれたので、指示された場所で待機していたのだが……。

「こんな化け物が相手とは聞いてないぞ! ミカアアア!」

村の外側の地面を吹き飛ばしながら現れたのは直径十メートル以上、全長は地上に出ている分だけでも数十メートルを超える程で灰色の体表に様々な色の鋤石を貼り付けた巨大な蚯蚓——古代伝説級ユーク・ボス・モンスター  
B M「魔鋤蚯蚓 アニワザム」だった……これはちよつとぐらい文句を言っても許される気がする。

まあ、文句を言っただけではどうしようもないので、とりあえず俺はアイテムボックスから「マグネトロローベ」を取り出して騎乗し、この「アニワザム」を迎撃する為に上空へと駆けて行った。

……その直後、相手は鎌首をもたげて気が狂ったかのような大声で咆哮した。

『!—これは……!—』

その咆哮と共に莫大な魔力の流れを感じた俺は、咄嗟に《魔力視》を使って相手とその周囲を観察した……すると、目の前の「アニワザム」が大量の魔力をクリラ村がある方角の地面に流し込んでいる所を見る事が出来た。

……これは村にある封印を破ろうとしているのか?』

『流石に放置しておく訳にも行かないか! 行くぞ「マグネトロローベ」』

とは言っても、流石に古代伝説級UBMを単騎で倒せるとは思っていないので、援軍が来るまでの足止めに徹するつもりだったのだが……相手の元に到着する前にその咆哮は止まり、直後に地上に生

た大量の水晶から発せられたオーラによつてその肉体は拘束され  
た。『?』  
『?』

つき村の方から何かがヒビ割れる音がしたので、咆哮を辞めたの  
は封印を破壊し終わったから。そしてあの水晶とオーラは恐らく封  
竜王さんの物だろうな)

村に流れていた魔力も止まっているし大方そんな所だろう  
……そう考えていたら「アニワザム」から先程とは別種の魔力を  
感じ取つたので注視してみると、ヤツは周囲に大量のエレメンタルを  
召喚している所だったのだ。

そして召喚されたエレメンタルモンスター達の八割は「アニワザ  
ム」を縛るオーラの排除に、残りはこちらに向かつて来たのだ。

……そんな、割とピンチなタイミングで「テレパシーカフス」に  
ミカから連絡が入った。

『お兄ちゃん、しばらく時間稼ぎよろしくー』  
「無茶振りを言うな！」

向かつて来るエレメンタルだけでも十体以上居るんだよ！ しか  
も全て亜竜級以上、中には純竜級も数体混じってるし！ ……と  
りあえず《魔法発動待機》のスキルで準備していた《エクスペロージョ  
ン》を《魔法射程延長》を併用しつつ、向かつて来るエレメンタルの  
中心部に炸裂させて戦力を削っておこう。

……以前、水精洞窟の時に調べた情報によると、ヤツが召喚す  
るエレメンタルは全員が《精霊体》スキルを持つから攻撃の手段は選  
ばなければならぬのだが。

(何せ《精霊体》を持つエレメンタルは実態を持たない属性だった場合  
には純粋な物理攻撃に効かないし、同属性の攻撃だと逆に吸収されて  
しまうからな。 ……まあ、スライムとかと違って属性攻撃なら風  
や地などの物理的なものも、同属性でない限りは効いたりするが)

今も、さっきの《エクスペロージョン》を吸収した「フレイム・エ  
レメンタル」が三体程コツチに向かつて来て、更に火属性の攻撃魔法  
を撃ち込んで来てるし……とりあえずコツチに飛んでくる炎弾





……やはり、複数属性で来られると本当に面倒くさい。

「《モンスター・ハント》エレメンタル! 《瞬間装備》《ウエポン・ブレッシング》《チャージスラスト》!」

『!?!?』

なので、俺は取り出した長槍に霊体特効効果を付与した上で「マグネトローベ」と共に突撃し、接近して来た「ウインド・エレメンタル」を貫いて撃破した……どうやら召喚されたエレメンタル達のHPはかなり低いみたいだな。

「そうやって俺がエレメンタル達の相手で手間取っている間に「アニワザム」は拘束を破壊して……その身体を翻してゆつくりとクリム村から離れていった。」

『』

「逃げる気か? ……いや、エレメンタル達は半数以上コツチに向かって来ているし……そうか、あの方向にはクレールミルがあるな。」

「古代伝説級《UBM》である「アニワザム」がクレールミルを襲えば甚大な被害が出るだろう……それが分かっている以上は止めない訳にも行かないか。」

「だが、移動速度が遅いので本来の目的は恐らく困だろう。どうやら黒幕は余程この場から戦力を引き離したいと見える。」

「まあ、今の問題はコツチに向かって来るエレメンタル達だ。何せ数だけでも先程の三倍以上、しかも「アニワザム」がどんどん追加を召喚しているので、俺だけだと普通に死ぬ。」

「更に悪い事に《魔力視》で見たとこ、撃破されたエレメンタルから幾らかの魔力が「アニワザム」の方に流れているのが見えた……どうやら、相手は召喚に使った魔力をある程度なら回復出来る様で、恐らくHPが低いのもこの能力を考慮したものなのだろう。……そう相手の能力について考えていると、村がある方角から大音量と共に砲撃が放たれ「アニワザム」に直撃した。」

『あれは……シウウさんの《エンブリオ》か! ようやく援軍が来』

たみたいだな」

後ろを見ると一隻の戦艦——シユウさんの〈エンブリオ〉【バルドル】が砲弾を放ちながらこちらに向かつて来ている所だった……………とりあえず俺は彼に連絡を取るために《ウインド・ウイスパー》——自身の声を遠くに人物に届ける風魔法——と《ウインド・リスニング》——遠方にいる人物の声を聞く風魔法——を使った。

「シユウさん、助かりました」

『おー、待たせたガルー。……………それで？　なんかあいつ逃げようとしているみたいだが』

「進行方向がクレールミルなので、恐らく囷かと」

『やっぱそうか。……………今は戦闘団や騎士団と協力してどうにかするしかないか』

あまり時間も無いので、簡潔にこれまで分かったヤツの情報シユウさんに伝えて情報共有を済ませておく……………やはり、現在の戦力だとそうせざるを得ないか。何分敵の数が多いからな。

……………一通りの情報共有を終えた所で、同乗していたエフさんから報告が入った。

『どうやらミカさんの方も戦闘を開始した様ですよ。……………後、こちらに大量のエレメンタルが向かって来ています』

『あー見えてるガル。……………狙いをこつちに絞って来たか』

「脅威の度合いが高い方を優先してきましたかね」

どうやら相手はシユウさんの方にエレメンタル達の八割以上を差し向けて来た様だ……………そして、それらのエレメンタル達はバルドルに向けて無数の攻撃魔法を放ち始めた。

シユウさんの方も砲撃を放って応戦するが、敵の一团は物理攻撃が効きにくい種類のエレメンタル達で構成されていた所為であり効果が無かった……………それならばと本体である【アニワザム】を狙った砲撃も攻撃魔法によつて途中で撃ち落とされるか、追加で召喚された対物障壁が使えるエレメンタルに防御されてしまった。

『おや、完全にメタを貼られている様ですが』

『分かってるんならお前も働けガル。……………対応が早すぎるな』

「この対応力は厄介ですね」

『!!』

そう話しつつも、俺達は砲撃と対空ビットレーザーと各種魔法攻撃などでエレメンタル達を迎撃していく……だが、エレメンタル達は次々と召喚されているから一向に数が減る様子は無い。

ウチの妹達が上手くやってくれれば、封竜王さんがフリーになるか洗脳が緩むかして状況は変わりそうだが……。

『【アニワザム】も離れて行ってるし、このままじゃ埒があかないガル。……レント君、エレメンタル達はこっちで引きつけるからちよつと本体をつついて来てほしいガル』

「……まあ、このままだとジリ貧になりそうですしね」

今の状況だと延々とエレメンタル相手の戦闘を続けるだけになるだろうし、古代伝説級〈UBM〉の能力がこれだけとは思えないから詳細情報を手に入れて状況を有利にする為には多少のリスクもやむ終えないか……この中で一番機動力が高いのは空中を移動できる俺だろうし、最悪【電磁加速】で逃げ切れるだろう。

……それに村の方を見ると、どうやらへバビロニア戦闘団と騎士団も来てくれた様だからエレメンタル達の相手は任せてもいいだろう。

「分かりました、確かにここは多少無茶してでも動いておいた方が良さそうですしね。……それじゃあ、ちよつと行ってきます」

『ありがとうガル。じゃあ道を作るガル。……バルドル、二十秒だけ全力砲撃。後エフ、お前も手伝え』

『了解』

『はいはい。……』《グリント・パイル》

そして、さつきまでとは比べ物にならない密度の砲撃がバルドルから放たれ、更にエフさんも【閃光術師】フラッシュユマンサーの奥義である光の槍を射ち放ちエレメンタルを撃破していく。

……それらの攻撃と到着した援軍のお陰でエレメンタル達の大部分はそちらへ掛り切りになったので、俺はその隙に【マグネトローブ】の高度を上昇させて大きく回り込む様に【アニワザム】へと

接近させた。

「……………さて、上手く行くかな」

幸い《遠視》や《千里眼》で確認すると、AGIの高い「ウィンド・エレメンタル」「ライトニング・エレメンタル」「シャイン・エレメンタル」はこちらには来ていない……………というか、それぞれ砲撃による爆風耐性や砲弾対策・金属性の戦艦に対する攻撃能力・光属性攻撃無効能力などの特性を活かすためにシユウさんの所に行っている様なんだよな。

更に地上の援軍には飛行能力と物理攻撃耐性がない代わりに物理耐性が高い「ランド・エレメンタル」などの地属性エレメンタルと、騎士団対策に聖属性無効の「ホーリー・エレメンタル」が向かっている様だ……………。

「タの貼り方が上手すぎる、これはかなり厄介な相手だな。……………よし、見えて来たな」

『……………』  
そうして、ようやく「アニワザム」の上空に到着した俺はその周辺を一通り確認した……………。「アニワザム」本体はゆっくりと地面を這ってクレームルの方角に向かっており、その周囲には護衛と思われる海属性エレメンタル達が待機していた。

……………さて、障壁はシユウさんの方向にしか展開されていない様だし、とりあえず一当てしてみますか。

「それじゃあ……………突撃！ 《魔法多重発動》三十発 《ヒート・ジャベリ》！」

『……………』  
俺は「アニワザム」の真上に位置取ると、そのまま重力に従って「マグネトローベ」を直下に加速させて急降下した……………それと同時に《詠唱》で威力を上げた大量の炎槍を上空からばら撒いて、地上にいる護衛のエレメンタル達を攻撃した。

それらの炎槍の殆どは「アクア・エレメンタル」の水流や「レジスト・エレメンタル」の防壁に防がれたが、俺と「マグネトローベ」はその間にエレメンタル達をかくぐり「アニワザム」の近くまで接近

「……!!」

「……そして俺はアイテムボックスから『ジエムー』《ヴァイオレット・デイスチャージ》を取り出し……。」

「『ハワースロージエム』!」

「可能な限り接近したところでジエムを『アニワザム』へと投げつけた……そして、そのジエムは『アニワザム』へと当たり、内に込められた紫電をスキルにより強化した上で解放してその身体に襲い掛かった。」

「……だが……。」

「ええいつ! 殆ど効いてないな! やはり魔法耐性が高すぎる!」

「その雷撃は相手の体表に僅かな焦げ目を作ったぐらいで、さしたるダメージを与える事が出来なかった……魔力の籠った鉱石ばかり食べている所為か魔法耐性が物凄く高いのだろう。」

「上級職の奥義ならもう少しダメージを与えられると思ったのだが、この程度と言う事は多分防御魔法とかも使っているんだろう。」

「……直後、ヤツの身体に付いた鉱石が光を放ち始め、それと同時に『危険察知』と『殺気感知』に反応があった。」

「『?』 《電磁加速》!」

「俺は即座に『電磁加速』によって音速の三倍まで加速してその場から全力で離脱した……のとほぼ同時に、さつきまで俺が居た上空に向けて『アニワザム』の身体に付いた鉱石が一斉に攻撃魔法を発射したのだ。」

「更にそれらの魔法は火・風・雷・氷などの様々な属性の攻撃魔法で、その上一つ一つが上級職の奥義クラスの威力があった。」

「……とりあえず一旦ヤツから離れた俺は、アイテムボックスからMP回復ポーションを取り出して煽りつつ状況を整理していく。」

「なんてデタラメな……それに、あの身体に付いている鉱石は全てエレメンタルだったな!」

あの対空攻撃を受ける直後、ヤツの身体に付いている赤い鉱石の上に「フレイム・マテリアルエレメンタル」の文字が浮かんで居たのが見えたのだ………恐らくあの鉱石は全て召喚したエレメンタルで、あれだけの攻撃魔法を連射出来るのも鉱石型エレメンタルが各々で魔法を使っているからなのだろう。

「正直言って戦力が足りないな。……多分、ヤツには物理攻撃の方が有効なんだろうが、あれだけの巨体である以上HPも相応に高いだろうし」

巨大な相手なら脳とか心臓とかを狙うのがセオリーなんだが………ミミズの脳や心臓ってどこにあるんだ？ 俺はあんまりそういうのに詳しくないんだが……。

「……と、流石にこのまま放置されるなんて事は無いよなあ」

『!!!』

どうやら、そうしている間にもヤツは俺に対する追撃用のエレメンタルを召喚して喚けて来たらしい………まあ、ヤツのリソースを分散させる”という最低限の目的は果たしているからこれはこれで良いんだが……。

………後、「アニワザム」の方は未だにゆっくりと地面を這っているだけで、俺に追撃を仕掛けてくる様な事は無いようだ。どうやら囮として村から離れる事を優先しているのか？

（怒って俺の元に来る様ななら誘導とか出来るかと思っただが……。やっぱり、ウチの妹二人が鍵かな。……今はあちら側で状況が動くまで死なない様に戦うしかないか）

それに、なるべく「アニワザム」の能力や行動パターンを暴いておく必要もあるしな………そう考えつつ、俺は向かって来たエレメンタル達との戦いに移るのだった。

## クリラ村追撃戦

□クリラ村周辺・森林地帯

マーシャルアーツ・プリンセス  
【武闘姫】ミユウ

クリラ村へ「魔鋏蚯蚓 アニワザム」が襲撃し、それによって封印されていた「十狂混沌 ギガキマイラ」が復活した時、私はあらかじめ姉様に言われていた通り《第六圏》で敵に精神干渉を逆探知を試みていました……………幸い大量のモンスターに干渉していた前回と違い、今回は分かりやすかつ強力に「アニワザム」のみに干渉していたので逆探知は上手くいったのです。

そして、今はライザーさんを始めとする「バビロニア戦闘団」のメンバー四人とパーティーを組んで、逆探知できた方角に向かっているのです。

『ミユウちゃん、コツチで間違いないんだな?』

「はい。……………ある程度近づいて来たので、大分詳細な精神干渉スキルの発生源が分かかって来たのです」

スキル《第六圏》は『効果範囲内の“気”を感知する』という一見よく分からない効果なのですが、何度か使って行くうちに『スキルなどを使った場合に発生・移動する何らかエネルギー、及び生物に内包されているエネルギーを感知する』スキルらしい事が分かってきたのです……………多分、この二つは同じ物なのでしょう。

ただし、このスキルはそういったあらゆるエネルギーを感知するの識別などが非常に難しく、私も使いこなすのに三日も掛かってしまいました……………ですが、今ならエネルギーの向きを逆に辿ればスキルを使用している相手の位置を知る事も出来るのです。

「しかし、大したもんだねえ超級職ってのは!」

「流石っす! ミユウさん!」

「スゲエっす! ミユウさん!」

「ありがとうございます、アマンダさん、サクさんとボウさんも」

そう、今回私に同行してくれたメンバーには、以前海水浴場出会ったアマンダさんとサクさんボウさんの三人が加わっているので……………どうやら彼等は最近「バビロニア戦闘団」に加わったらし



く、ライザーさんと同じく私と面識があつて実力も十分だと言う事で今回のメンバーに選ばれたそうです。

道中少し聞いた話だとアスカ氏の事件があつた直前ぐらいに加入したそうで、その時にはタイミングが合わず私達と出会う事は無かつた様なのです。

……尚、村で再会した時にはこんな話をしていたのです。

「まあ、なんか調子に乗っていたところで “上には上がいる” 事を知ったコイツらが、心機一転克蘭に所属して頑張ろうと言ひ出したのがきっかけだったね」

「克蘭に入つてみたら自分の視野が如何に狭いかがよく分かつたす」

「正直、決闘ランカーとか同じ人間だと思えないし……」

『いや、二人とも入つて時と比べたら大分実力は上がっているし、結構頑張っていると思うぞ』

と、そんな感じの事を言っていたのです……まあ、今回の依頼で村の防衛に選ばれる程度には実力と信頼がある様なので、もつと自信を持つてもいいと思うのですが。

ちなみに現在の移動手段は私が肩に乗せたフェイと一緒にライザーさんのバイクへ相乗りさせてもらつていて、アマンダさん達は彼女のヘエンブリオであるベヒーモスに着けられた鞍（《騎乗補助》）スキル付きらしいのです）に乗って追走しています。

……さて、そんな事を考えている内に大分相手に近づいて来たのです。

「……よし、ここまで近づけば正確な位置が分かるのです。……前方五百メートル程先、数は一人で人型の相手ですね」

『そうか……じゃあ急ぐぞー！』

そう言つてライザーさんはバイクのスロットルを回して更に速度を上げ、まばらに生えている木々をそのドライビングテクニクで掻い潜りながら疾走していきます……急いでへUユニーク・ボス・モンスターB Mを操っている相手を倒さないと兄様達がピンチになりますからね。

……ッ！ これは……！

「どうやら相手に気付かれた様なのです！　現在こちらから離れようとしているのです！」

『ッ！　なんだと！』

「どうやら相手もこちらに気付いたのか、捉えていた相手の気が急に離れて行くところを感知しました。」

『どの方向への逃げているのかを教えてください！』

「えーと、相手はそのまま走ってこちらから離れて………いえ！　鳥型のモンスターに乗って空から逃げようとしています！」

「感知したその相手は走っている途中で鳥型のモンスターを呼び出し、それに乗って空へと舞い上がってしまったのです………そして、その直後に肉眼でも前方の上空を飛行している鳥型モンスターとそれに乗っている人型の影が見えました。」

「更にその鳥型モンスターの速度は亜音速を優に超えており、地上と空中という地形の差もあってこのままではそう遠からず感知範囲外に逃げられてしまうでしょう。」

「この距離だと跳んでも追いつけませんね」

『クッ！　このままでは！』

「なんだい？　あれを撃ち落とせばいいのかい？」

「相手との距離が広がって行く事に焦りを覚え始めていた私とライザーさんに、追走していたアマンダさんがその声を掛けてきました………彼女達にはこの距離で遠距離攻撃を行う手段があるのでしょうか？」

「！　どうにか出来るのですか？」

「ああ！　……サク！　ボウ！　撃ち落とすな！」

「了解！」

「そう言ったアマンダさんに答えて、同乗していたサクさんとボウさんが左手の紋章からそれぞれ一本の剣を取り出しました………彼等が取り出した二つの剣は色以外全く同じ形をしていて、持ち手の部分が銃のグリップの様な形をしており刀身の先端に銃口が付いている銃剣で、それぞれサクさんが黒色、ボウさんが白色をしていました。………そして、彼等は手に持った剣を空を飛んでいる相手に向け



《我<sup>フエ</sup>らが成るは光の使者》《エコー・オブ・トゥワイス》

『《エンチャント・アジリティ》《エンチャント・ストレンジス》』

そう、回避・防衛行動を取った事と翼へのダメージによって飛行速度が落ちた事で、ライザーさんと相手の距離はかなり縮まってくれたのです。

更に私は必殺スキルを使ってフェイと融合しつつ、いつも通りフェイの魔法や「ジエム」で自身に単体バフを掛けていきました。

「ライザーさん、あそこまで跳ぶので距離を縮める事は出来ますか？

『お安い御用だ！』

私の頼みに応えてくれたライザーさんは更にバイクの速度を上げて相手との距離を急速に詰めていき……そして前方にあった倒木に突っ込んで行きました。

『ミュウちゃん！ 跳ぶぞー！』

そのままライザーさんはバイクの前輪を上げて、その倒木を踏み台にして大ジャンプをしたのです………凄<sup>サイ</sup>いバイクテクニクですね！ 流石はリアル仮面ライダー!!!

………そして私はジャンプの頂点に達した時、即座に《軽気功》を使って彼の肩に飛び乗り………

「少し肩を借りるのです」

『《フォロー・ウィンド》！』

そして、魔法によって発生させた追い風に乗りながら、彼の肩を足場にして飛行中の相手に向かって大ジャンプをしました………そのまま《空歩》を使って空中を駆け上がりつつヤツに接近していきま

す。

『!? KEAAAAAAAAAAAA!!!』

私に気付いたのかヤツ——接近したお陰で見えた名前には「ライトニング・ガルーダ」とありました——は接近させまいとこちらに大量の雷撃を面で放って来ました………やはり、この攻撃は「マグネットローベ」のモノと同じ、お陰で近づき難いですね。

………なので、私はそれ以上近づかずに《空歩》のちよつとした

応用で何も無い空中を踏み込みながら拳を引き絞り……。

『《粉碎波動拳》！』

そのまま正拳突きを放つと共に、触れた物体全てを粉碎し得る拳の形をした衝撃波を放ちました……このスキルは以前アスカ氏から学んだモノの一つで、何でも【キング・オブ・グラインド粉 砕 王】という超級職の奥義らしいのです。そして、その効果は衝撃波の当たった対象の元々の防御力をゼロとして扱うというものなのです。

……まあ、雷撃など防御力が無いモノにはただの衝撃波なのですが、それでも超級職の奥義なので。

『!?? KEEEEEEEEEEEE!!!』

相手が放った雷撃を突破してその身体の何割かを消し飛ばすには十分な威力があるのです……まあ、レベルが低い所為でSTRが足りないので本来の使い手である【粉碎王】程の威力は出せませんが、SPもまだ少ないので連発も出来ませんが。

……さて、今の攻撃で【ライトニング・ガルーダ】は飛行困難な程にダメージを受けているので……。

「当然追撃です。……フェイ！」

『《魔法多重発動》十三発《ヒート・ジャベリン》！』

『KEEEEEEEEEEEE!??』

ふらついている相手に向けて事前にフェイが準備していた魔法を叩き込みます……そうして放たれた数多の炎槍は【ライトニング・ガルーダ】と乗っている黒いフード付きローブをまとった人型に次々と直撃していきます。

『KEEEEEEEE……』

「……離脱を実行」

度重なるダメージで【ライトニング・ガルーダ】は飛行を維持できなくなり墜落していきますが、乗っていた人型はローブで身を守りながら飛び降りて逃げようとしていました。

「……逃す気は無いのですよ? 《サイクロン・ターンキック》！」

「ッ!??」

ですが、それを読んでいた私は即座に空を蹴ってローブの人型に接

近して、身体を横回転させながら風を纏った回し蹴りを相手の胴に叩き込み、そのまま地面に向けて蹴り飛ばします。

……付加された風の効果もあって勢いよく吹き飛ばされた相手は、轟音を上げながら地面に叩きつけられました。

「このままやられてくれるとありがたいのですが……そうも行かないでしょうね」

その証拠に《第六圏》には相手の気が感知されているので、どうやら未だに健在の様です……蹴り込んだ時の感じだと物理的ステータスはあまり高くなさそうだったので、おそらくは「ブローチ」などの身代わり系アイテムか何かですかね。

私はそのまま地上に降りようとも思いましたがスキルを連発した所為でSPが心許ないので、落下しながらポーションを取り出して飲んでおきましょう。

(アスカ氏との「稽古」の際や超級職転職後にマリアさんから受けたジョブクエストで多くの格闘系スキルをラーニングしてしまったので、《見稽古》のデメリットでジョブレベルがかなり上がりにくくなっているのが問題なのですよね)

お陰で未だに「武闘姫」のジョブレベルは五十にも届いていないので、今の私のステータスはカンストへマスターに毛が生えた程度……その所為で超級職のスキルを使うと直ぐにSP・MPが枯渇するのが今の問題なのです。

一応、フェイと融合していればMPの方は何とかなるのですが、そもそもMP消費の格闘系スキルはあまり多くはないですからね。

「それでは、急いで追撃するのです」  
『分かったよ』

そして、私はポーションを飲み終わった後、急いで空を蹴って相手が落ちた場所に向かって降りて行きました。



そのまま私は《軽気功》と《フォロー・ウィンド》を駆使して地上

に降り、先に地上に落ちた相手に追いつきました……………相手もこれ以上逃げるつもりはないのかこちらに相対しています。

……………外見は人間そのものですがその顔には表情というモノが無く、更にもう隠すつもりも無いのか頭の上には先程までには無かった「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」の文字がありました。「さて、出来れば精神干渉を辞めてほしいのですが……………」

「不可」

まあ、でしょうね……………しかし、地面に叩きつけられても「アニワザム」への精神干渉は途切れていないとは、あわよくばダメージで精神干渉を不可能に出来るかと思いましたが狙いが外れましたね。

「なら、仕留めさせてもらうのです！ 《ライトニング・ストレート》！」

ことこうなれば倒すしかない、私は《アクセル・ステップ》を使って超音速で接近して雷を纏った正拳突きを叩き込みます……………が。「着装」

その雷を纏った拳は機械のように腕に受け止められていました。

「ッ！ 機械甲冑!?？」

そう、私が接近する直前に「ハイ・マインド・アバターホームンクルス」は黒色のパワードスーツを身に纏い、それによって強化されたステータスでこちらの拳を受け止めていたのです……………しかし、相手も踏ん張っているとはいえバフをガン積みした私の攻撃を受け止めて、更に纏わせた電気も効果が少ないとは相当高性能なスーツですね。

……………直後、相手の受け止めている腕から「嫌な気」が私の腕に流れ込むのを感じとったのです。

『《スリープ・マインド》』

「《心頭滅却》！」

『《マインド・レジスト》《霊環付与》！』

強烈な眠気に襲われた私は即座に手を振り払って距離を取りつつ、自身に精神耐性バフと状態異常持続回復を掛けました……………お陰でどうにか眠気は飛びましたが、精神干渉を使ってくる事を考慮して

フエイに対策を取って貰って置かなければヤバかったですね。

しかし、距離を取った私に対し、相手は追撃せずにただ右手の甲をこちらに掲げ……。

『喚起<sup>「叫び」</sup>「トライホーン・ストライクビートル」  
「デュアルホーン・ライ  
ノセラス」』

『KETEKETEKETEKETE!!』

『GOAAAAA!!』

その手にあった「ジュエル」から三角の巨大なカブトムシ型モンスターと、二本角のこれまた巨大なサイ型モンスターを呼び出して来ました……配下のモンスターは先程の「ライトニング・ガルーダ」だけでは無かったんですね。

「……これは厄介ですね」

私は目の前の強敵達をどう倒そうか思索しつつ、相手を迎え撃つ為に構えを取りました。





エレメンタル相手の攻撃手段には困っておらず、リレイさんの指揮とそれぞれ鍛え抜かれた技量で問題なく戦っていた。

それに、シャルカさんから『連携は上手くいつているから、取り巻きのエレメンタル達相手なら遅れをとる事はない』という連絡（戦闘団の通信系へエンブリオ〈によるもの〉もあつたし問題はなさそうだ。

「とは言え、あちらはすぐに片付けられる訳でもなさそうだったし……こちらもこのまま終わるなんて事は無いだろうがな。アイツは未だにただ地を這うだけで大した行動をしていないし」

『古代伝説級へU B M』ユニーク・ボス・モンスターがそこまでヌルい筈がない……と、俺が考えていると、それに呼応するかの様に「アニワザム」がこれま

『なっ!?』

あッはいきなり雄叫びをあげたかと思うと、その巨体を勢いよく持ち上げて頭から地面に突っ込み、そのまま地面を掘削して地中に潜っていったのだ。

「まあ、地中から出てきたんだから当然地面に潜る事も出来るのだからだ。」

「不味いな、これでは攻撃が届かない」

流星に俺の魔法もシュウさんの砲撃も地中にいる相手にはどうしようもない……一応、俺が覚えている地属性魔法には地中に攻撃出来るものもあるが、その程度では地属性魔法に特化した〈UBM〉には効かないだろうし。

さて、これまでのアイツの行動パターンからして、おそらく次に狙ってくるのは……。

「当然、自分にとつて最も厄介で巨体故に地中からの攻撃がし放題なシュウさんだよなあ！」

『バルドル！ 今すぐこの場から離れる！』

そう考えた俺はシュウさんの元へと全力で「マグネトローベ」を走らせ、彼もそれに気がついたのかバルドルをその場から離脱させようとしたが、その巨体と無限軌道という移動手段故にそこまでの速度は

出せない様だった。

そして次の瞬間、いきなりバルドルの下の地面が崩落してその船体の半分以上が地面に沈み、更にその地面が爪の様に變形してバルドルの船体に組み付いて身動きを封じたのだ。

……俺はどうにかシユウさんの元へとたどり着いたが、他の人達はエレメンタルの相手で手一杯の様だった。

『チッ！ 地属性の拘束魔法か！』

「地面がいきなり陥没したのは……ああ、食べたのか」

以前に調べた情報によると【アニワザム】は鉱物を食べるモンスターの一種らしく、それならば地中の土などを食べてある程度減らしつつ地属性魔法で陥没させるぐらいは訳ないだろう。

……そして、『食べられた』という事はそこにヤツがいるという事であり……。

直後、バルドルのすぐ後ろから【アニワザム】が勢いよく地中から飛び出して来た……不味いな、身動きが取れない今のバルドルはただの的だ。

……加えて、ご丁寧にバルドルの各砲塔にも土が絡み付いてその動きを封じている。

『……』

更に【アニワザム】は即座に大量のエレメンタルを召喚して俺とシユウさんに差し向けて来た……しかし、あのエレメンタル達これまでモノよりかなり速度が速い上に魔法も放たず一直線に突撃して来ているな。

……まさか!?!?

「《バラージ・スロー》！」

嫌な予感がした俺は、慌てて取り出した【エクスペロージョン】【スチーム・エクスペロージョン】【エメラルド・バースト】の各種広範囲魔法入り【ジエム】三つを投擲してした。

放たれた三つの【ジエム】は計算通り、こちらに高速で向かってく

るエレメンタル達とすれ違う直前に爆発し……………それに巻き込まれたエレメンタルは連鎖的に大爆発を起こした。

「やっぱり自爆型のエレメンタルか！」

そいつらはエレメンタルの中でも希少な自爆能力を持ったヤツらだった……………攻撃に巻き込まれたヤツが爆発したところから、おそらく任意だけでなくHPがゼロになっても爆発する仕様なんだろう。

幸い、俺は召喚出来るモンスターの中に《エクспロード・エレメンタル》が居たから気づけて対処出来たし、それを見てシユウさん達も気が付いた様だ。

『チィー！ やっぱり砲撃は効かんか！』

「数が多くて撃ち落としきれませんね」

だが、どうやら自爆エレメンタルにも《精霊体》による物理攻撃無効を持っており、それらをこちらよりも遥かに多く差し向けられた所為でシユウさん達でも迎撃しきれない様だった……………そして、それらの自爆攻撃はバルドルの砲塔を集中的に狙っており、その多くが破壊されるなどかなりのダメージを受けていた。

……………だが、追撃出来るタイミングにも関わらず、攻撃が終わった後に「アニワザム」は再び地中に潜っていった。

「このタイミングで地中に？ 反撃を警戒したのかね？」

『それ以外にも何か目的がありそうだが……………とりあえずレント君、一旦バルドルの形態を変えて拘束から抜け出すから、ちよっと相乗りさせてほしいガル』

「私もお願いします」

流石に二人は載せられないんだが……………止む終えずエフさんを後ろに乗せて、シユウさんは俺が片手持ちにするというやや無茶な方法で運ぶ事になった。だってシユウさん着ぐるみ着てる所為で後ろに乗せにくいし……………

……………まあ、バルドルの形態を変える際は一時的に動けなくなるらしいシユウさんを近くの地上に運ぶだけだからこれでも問題は無いんだが。

「それでシユウさん、バルドルのダメージはどれぐらいで？」

『砲塔がかなり潰されたし、船体にもダメージがけっこうあるから巡洋艦での全力戦闘は難しいガル』

うーむ、ヤツに対して数少ない有効打が打てたシユウさんのバルドルがそれだとキツイか……そう考えていた時、クリラ村がある方角からまるで隕石でも落ちて着たかの様な凄まじい轟音が鳴り響いた。

『……………エフ、どうせ向こうの状況も見てるんだろ。何があった？』  
「……………見えた範囲だと、この音はミカさんが【ギガキマイラ】を殴った所為で起きた音の様です」

「あなるほど、奥義を使ったか」

ミカの奥義を食らったのなら如何に古代伝説級〈UBM〉であっても一溜まりも無いだろう……………アイツの必殺スキルはデメリットがキツイ分反則的な性能だからな。

……………その後、エフさんからの追加報告でミカのデスペナルティ、及び封竜王さんとフォルテスラさんがこっちに向かっている事、そしてミュウちゃんが精神干涉の大元の相手と交戦を開始した事を伝えられた。

「とりあえず、この事を伝える為にシャルカさん達と合流しませんか？ ………………どうも相手は時間を掛けたがっているみたいですよし」

『まだ出てこない以上はそういう事なんだろうな……………食事にしても時間がかかり過ぎだし、どうも操っている側の都合っぽい』

「私としては、希少な取材対象を観察出来る時間は長いに越した事は無いので有難いですがね」

エフさんのブレ無さに俺とシユウさんは揃って白い目を向けつつ、そのままシャルカさん達と合流する為に移動していった……………【ギガキマイラ】が倒され、精神干涉の術者が補足されたにも関わらず時間を掛けようとしている黒幕の思惑は分からないが、今はそれを考えられている余裕は無いしな。



□クリラ村周辺・森林部

マーシャルアーツ・プリンセス  
〔武闘姫〕 ミユウ

『KETEKETEKETEKETE!』  
『GAAAAAAAAA!』

今、私の目の前にはパワードスーツを着た「ハイ・マインド・アバターホームクルス」と、その配下の「トライホーン・ストライクビートル」【デュアルホーン・ライノセラス】が今にもこちらに襲いかかるうとしています。

また、先程村の方から轟音が聞こえて来たのでおそらく姉様が敵を倒したのでしょう……ですが、兄様の方はまだでしょうし、なるべく早く精神干渉の術者であるホームクルスを仕留めねばならないのですが……。

『——行け』

『KETEEEEEEEE!!』  
『GAAAAAAAAA!!』

そうホームクルスが指示を出すと同時に「ストライクビートル」と「ライノセラス」がこちらに突っ込んで来ました……仕方ない、とりあえずこの二体を倒しますか。

………と、思ったその時、私の目は突撃する二体の隙間を超高速で縫ってこちらに迫る銀色の刃を知覚しました。

『《スネーク・エッジ》』

「ツ??? 《硬気功》!」

私は慌ててスキルで自分の手を硬化させた手刀で打ち払いました………払ったそれをよく見ると、沢山の刃が紐で繋がれた所謂「蛇腹剣」というやつで、それはホームクルスが来ているパワードスーツの右手甲部分から伸びていました。

幸い《硬気功》を使っておいたお陰で、ダメージは手に僅かな切り傷を負う程度で済み………直後、私の身体はまるで恐怖で身を竦んだ様にその動きを止めました。

「っ、れはっー!」

『KETEKETEETEEEEEEEE!!』

その致命的な隙を相手が見逃す筈も無く、突撃していた「ストライクビートル」が背中<sup>の</sup>羽を広げて更に加速し、その三本のツノでこちらを串刺しにしようとしてきました。

……私の動きを止めた状態異常——おそらく精神系の「恐怖」——は《霊環付与》の効果で直ぐに回復しましたが、その時にはツノが私の直ぐ目の前にまで迫っていて回避は間に合わず……。

『《エアロ・ハンマー》!』

『KETEEEEEEEEEE!?!?』

そうして迫っていた相手を、私と融合しているフェイが放った暴風が吹き飛ばしました……突っ込んでくる連中を迎撃する為に準備しておいた風魔法が役に立って良かったのです。

……どうやら厄介な事に、あのホムンクルスの攻撃で僅かでもダメージを負うと状態異常にかかってしまう様ですね。

『GAOOOOOOOO!!!』

『《ファントム・ステップ》』

そう考えている間にも残った「ライノセラス」が突撃して来たので、幻影を囿にしつつ回避し……。

『《チェーン・ケージ》』

その回避直後の隙を狙いホムンクルスが両手の甲部分から伸ばした二つの蛇腹剣を乱舞させ、更にこちらを包囲する様な連続攻撃を仕掛けて来ました。

……傷一つでも負ったら状態異常を食らって切り刻まれるであらう、その刃で出来た檻に対して私は……。

『《瞬間装着》! 疾イツ!!』

『——!』

咄嗟に爪付きの手甲である【外装地竜の爪手甲】を装備して、全方位から立て続けに襲い掛かる剣尖をその手甲の爪部分で打ち払い、そうして無理矢理作った包囲の隙間から離脱する事で難を逃れました……やはり、傷さえ負わなければ状態異常を食らう事も無い様なので、武器などで打ち払うか受け流すかするのが正解の様ですね。

……ラーニングした【爪拳士<sup>クロウ・ボクサー</sup>】のスキルを使う為に、ジヨブク





姿を消してヤツに接近する事が出来たのですから………突如現れた私に相手はほんの僅かに動揺しただけで即座に対応しようとした。

「《真撃》《粉碎拳》！」

ですが、私にとつては【武闘家】の奥義を乗せた上で、相手の心臓がある左胸を殴るには十分すぎる隙でした………更に、使用した《粉碎拳》は《粉碎波動拳》の近接版で対象の元々の防御力をゼロにする効果があります。

………その一撃は狙い通り相手の心臓を打ち抜く………。

「……ダメですか」

「……！」

事は無く、ただ相手を吹き飛ばしただけに終わりました………どうやら、ただスーツが硬いだけで無く何か特殊な防御能力を持っている様ですね。

………《第六圏》で探ってみると、どうやらダメージを受けた時に右手の【ジュエル】から何かの「気」が出ている様ですが……。「あれは確かモンスターを倒した時の……ああ成る程、多分《ライフリンク》ですかね」

おそらく【ジュエル】内に入っているモンスターにダメージを移し替えたのでしよう………どうりで、最初から攻撃しても大してダメージを負った様子が無い筈ですね。

………そう考えていると、ライザーさん達にやられた二体の様子がおかしい事に気付きました。

『KETEEEEEEEEEEEEEEEE!!』

『GOAAAAAAAAAAAA!!』

『ッ!?? こいつらあれだけのダメージを受けてまだ!??』

「……いや、こいつら超高速で再生してるね」

「マジで……」

どうやら、あの二体はごく丁寧にも再生能力に特化したモンスターだった様ですね………先程ライザーさん達が負わせたダメージも殆ど回復していつてます。

とりあえず、彼等と合流して情報を共有しておきましょう。

『……………成る程、そういう事か』

「強力な精神干渉に超音速機動、おまけに《ライフリンク》による耐久力とは……………これは仕留めるのに時間が掛かりそうだねえ」

「精神干渉に対しては私の必殺スキルによるバフが掛かっている間は大丈夫でしょうが……………」

問題は肉壁がいくつ残っているか分からない《ライフリンク》による身代わりですね……………兄様の為にもさっさとケリを着けたいのに、本当に厄介な相手なのです。

## 古代伝説級・その本領

□アルター王国北部・クリラ村郊外

【突撃騎兵<sup>チャージライダー</sup>】レント

とりあえず、俺とシユウさんとエフさんはへバビロニア戦闘団と騎士団に合流し、情報共有などを済ませてから【アニワザム】との戦闘を続行したのだが………先程までと違い、今の戦況はかなり不利な感じになっていた。

………ちなみに、相手がやってきた戦術は単純なもので……。

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』 またエレメンタル達が来るぞー！

……………こちらの攻撃が届かない地中を移動しながら、ある程度距離を取つたところで顔を出して大量のエレメンタルを召喚してこちらに喉けらというものである……………更に召喚されたエレメンタルの半分近くが自爆型なので、その内一体でも通してしまうとかなりの被害が出てしまうのだ。

「遠距離攻撃が出来るメンバーは自爆型を優先的に狙え！ 近接型はそれ以外を！ 自爆型には近付くなよ！」

「グランドリア卿、”累ね”で行くぞー！ 他の団員も可能な限り自爆型を削れ！ 《グランドクロス》！」

「《グランドクロス》！」

『……………』

『……………』

今のところは個々の実力とシャルカさんやリレイさんの指揮でどうにか凌いでいるが、このままのペースだといずれMP・SPとかが持たなくなつて息切れするだろうな。

……………そして、そんな状況で俺が何をしているのかと言うと、単騎で【アニワザム】本体への直接攻撃に行おうとしている所である。（今は他に飛行出来る人間が居ないし、地上から行くと大量のエレメンタルと【アニワザム】自身の地属性魔法に阻まれるからな）

他にもヤツの対空迎撃魔法攻撃を潜り抜ける為には、俺の《電磁加速<sup>レイル・アクセル</sup>》の様な回避スキルや強力な防御スキルとかが必要なのも

理由にはあるが。

……とはいえ、空を飛べるのは俺一人だが援護がないわけじゃないしな。

「こちらレント、目標に到達したぞ」

『はい、こちらでも確認しました』

俺が虚空に向けて発した言葉に念話で返答してくれたのは、ヘバビロニア戦闘団のメンバーの一人、シエスタ・テイクアレストさんである……彼女は「フリーズスキャルヴ」という玉座型ヘエンブリオ<sup>①</sup>を持っており、それに座っている間地中を含む広域の索敵や味方<sup>②</sup>の念話<sup>③</sup>が出来る様だ。

そのお陰で「アニワザム」が地中から出て来る場所やタイミングを先読み出来たので、俺はヤツに接近出来たのだ。

「……?!?!」

「おっと、気付かれたか」

とはいえ、向こうにも索敵能力はあるので俺がある程度近づいたところ<sup>④</sup>で気付き、迎撃の為に高高度を飛行可能な風属性エレメンタルを差し向けて来た……だが、向こうに戦力を割いている分呼び出された数は少ない様だな。

「シエスタさん、向かって来るエレメンタルは任せていいんだな？」

『はい、お任せ下さい……《ホワイト・フィールド》』

『……?』

直後、こちらに向かって来た「ウィンド・エレメンタル」達の中心部分から強力な冷気が吹き出して敵が白い霧に覆われた……どうやら、彼女の「フリーズスキャルヴ」にはスキルを遠隔発動出来る能力もあるらしい。

そして、霧が晴れて敵が居なくなったのを確認した俺は、そのままヤツの迎撃魔法の射程距離ギリギリまで接近しつつ、アイテムボックスからいくつかの「ジェム・クリムゾン・スフィア」を取り出した。「さて、どこまで効くかな……《フォローウィンド・スロー》《電磁加速》！」



【ジエム】に放ち自分に届く前に破壊してみせたのだ。

その結果、内に込められていた魔法が解放されて水蒸気爆発が起こり、それによって発生した衝撃波がこちらにも届いてしまった所為で俺はバランスを崩してしまった。

「コイツ！ 能力だけじゃなく技量もこれまでとは比べ物に……ッ？  
《瞬間装備》《ウエポン・ブレッツシング》！」

』！！』  
どうにか態勢を立て直した所で《殺気感知》と《危険察知》に反応があつたので、俺は直ぐに短剣を取り出して対エレメンタルの付与を掛けた……直後、衝撃波を回避しながら接近して来た【ハイ・アトモス・エレメンタル】が片腕を雷の剣へと変形させて、こちらに斬りかかって来たのだ。

………どうにかその斬撃自体は短剣で防ぐ事は出来たが、接触した際に短剣を通して流れてきた電流を防ぐ事が出来ずに僅かなダメージと【麻痺】を食らってしまった。

』！！』  
「グウツ？ 【ブローチ】が！」

幸い身体の痺れ自体は短時間で解けたが、その隙にヤツはもう片方の腕を光の剣に変形させて俺を袈裟切りにした………その一撃は【救命のブローチ】で凌いだが、クールタイム中で《電磁加速》が使えない現状では距離を取る事すら難しい。

………その間にもヤツは距離を詰めて両手の剣を振るってきた  
『《アイス・バインド》〜！』

』？？』  
だが、その剣がこちらに届く直前、シエスタさんが氷属性の拘束魔法を遠隔発動させてヤツの動きを僅かに止めてくれたお陰でどうか距離を取る事が出来た。

「助かった！ 《魔法発動加速》《ハイドロ・スプラッシュャー》！」  
』！！』

すぐさま俺は魔法による高圧水流をヤツにぶつけて吹き飛ばした………だが、ヤツは大したダメージを受けた様子もなく即座に態勢

を立て直し、そのまま天属性の各種魔法弾を大量に放ってきた。

……ええい！ 先程までの特攻前提エレメンタル達と違って耐久力も高いし、ここで確実に空を飛べる俺を落とす気かね。

「《魔法多重発動》《ボルテクス・ジャベリン》！」

『《ヘイル・ストーム》〜！』

!!!

それらの魔法弾をどうにか回避しつつ反撃に水流の槍を射ち放つが、彼我の攻撃頻度が違いすぎてどうにか牽制になる程度である……シエスタさんが氷属性広範囲攻撃魔法で弾幕をある程度相殺してくれていなければ既にやられていただろう。

!!!

「また接近戦か！ これでは逃げ切れんか！」

そしてヤツは魔法弾で仕留め切れないと判断したのか、再び風を纏ってこちらに接近してきた……自由自在に飛べるあちらと違って、コッチは騎乗しながら空を走っている訳だから機動性が大分劣っているからな。

!!! 一応、騎兵系スキルを併用して直線的な速度を互角に持ち込んでいるからどうにか逃げられているが、このままではもう一度捕まってしまうだろう。

……そう思っていたのだが、どうやら向こうが考えていた戦術はもう少しタチの悪い代物だったらしい。

『』

『』

『あれは【アニワザム】!? ……それに【ウィンド・エレメンタル】

か!?』

俺が空を走っているといきなり前方地中から【アニワザム】が現れ、更に十数体の【ウィンド・エレメンタル】を召喚してこちらに向かわせて来たのだ……どうやら、こちらの逃げ道を塞ぐ為に回り込んで来たらしい。

……そして、更に悪い事は続いた。

『ちよ〜!? ……ごめんなさい〜！ こつちにも強力なエレメンタ

ルが……』

「シエスタさん!?? ……援護は期待出来ないか」

そんな言葉と共にシエスタさんからの連絡が途絶えたので、どうも「アニワザム」は向こうにも上位エレメンタルを送り込んで来たらしい。

今まである程度戦えていたから、古代伝説級ユニーク・ボス・モンスターへU B Mと言うのを甘く見ていたか………相手が少し本気を出して来たただけこのザマとはな。

「………止む終えん、覚悟を決めよう」

正直言つて状況はほぼ詰んでいるが、幸い既に《電磁加速》のクルタイムは終わっているそう、前方の「ウインド・エレメンタル」を無理矢理潜り抜けて「アニワザム」へと最大加速で突撃するぐらいは出来るだろう。

………そう考え、俺は短剣の代わりに槍を取り出して「アニワザム」に向き合い突撃を仕掛け様として……。

『それは少し早いな……《竜気結晶・槍波》』

『『『『』』』』』』

直後、俺を取り囲んでいたエレメンタル達に向けて紫色をした水晶で出来た槍が大量に撃ち放たれた………それらの槍は物理攻撃を無効にする筈の「ウインド・エレメンタル」を当然の様に貫いて消滅させた。

攻撃が放たれた方向を見ると、そこには紫色の巨大なドラゴンがおり、その頭上には「封竜王 ドラグシール」の文字があった。

「封竜王さん！ 助かりました！」

『ああ、こちらこそ遅れてすまなかつたね。 ……さて、あちらは少し手強い様だな』

『『『』』』』』』

そう言つて封竜王さんが目を向けた先には、先程の攻撃を全て回避していた「ハイ・アトモス・エレメンタル」の姿があった。

………そのままヤツは両手の剣を振りかぶり、封竜王さんに向かって突撃を仕掛けるが……。



『生憎、私の攻撃はまだ終わっていないぞ? ……包围』

それよりも早く、先程放たれた水晶が起動を変えて宙を動き「ハイ・アトモス・エレメンタル」を360度全方位から包围してその動きを封じ込めた。

『《竜晶封印》 ……砕けろ』

『 …… ……』

更に、それらの水晶が一斉に「ハイ・アトモス・エレメンタル」に纏わりついてヤツを内側に取り込んだ一つの水晶塊へと変形した……そして封竜王さんが一言呟くと、その水晶は中に閉じ込められていたヤツ諸共砕け散った。

……俺が詰んでいると思つた状況をあつさりと覆した封竜王さんは、そのまま「アニワザム」の方向に飛んで行った。

……さて、そちらも随分やる気の様だな……《竜気障壁》』

接近する封竜王さんに対して「アニワザム」は咆哮を上げると共に大量のエレメンタルを召喚・攻撃させつつ、上級職の奥義に匹敵する威力の攻撃魔法を連射するが……封竜王さんはシールド状に変形させた《竜王気》を前方に展開してそれらの攻撃を全て防ぎきつたのだ。

だが、それによって封竜王さんの足が一時的に止まってしまった。その隙にヤツは口内に白色化する程の高熱を宿す火炎球を生成していたのだ。

……成る程、肉体に付けているエレメンタル達と魔力を同調させての《ユニゾン・マジック》か。「炎王」の《恒星》以上の威力がありそうだな』

そう言いながら、封竜王さんも身体に力を溜めて迎え撃つ姿勢を取る……尚、嫌な予感がした俺は慌てて封竜王さんの後ろに移動した。

……そして、両者のスキルがほぼ同時に発動した。

『電氣障壁』対炎熱特化《電氣結晶・壁》変形・並列展開！』

そうして「アニワザム」は口内に限界まで蓄えられた光球を超超高熱の白色熱線としてこちらに発射した……………それに対して封竜王さんは大量の《竜王氣》を前方に展開した上で四角錐型の水晶に変化させ、更にその表面に《竜王氣》を纏わせて盾とした。

……………そして、放たれた白色熱線は四角錐型水晶の盾にぶつかりその表面を滑る様に四方に散らされて無力化された。

『あ、正面から防げない威力なら受け流してしまえばいいだけだからな。……………再形成』

何の事も無い様にそう言うてのけた封竜王さんは融解している四角錐型水晶を四つに分解して、それらを先程放った物の数十倍の大きさがあがる槍へと変形させた。

『おそろく操られているであろう貴様に同情する気持ちが無い訳では無いが……………これでも“竜王”の名を戴いているんでな、売られた喧嘩は全力で買わせてもらう。《電氣結晶・槍波》』

『!?』  
そして、それらの槍を超高速で「アニワザム」に向けて射出した……………それに対してヤツは前方の地面を隆起させて壁にする事でその内の三本までを防いだが、最後の一本は防ぎきれずにその身体に突き刺さった。

……………だが、威力は落ちていたのかヤツはその槍を振り払って、そのまま地中へと潜っていった。

『逃げられたか、やっぱり私は火力に欠けるな。……………大丈夫かい？ レント君』

「助かりました封竜王さん。……………それにしても古代伝説級へUB M∨って凄いですね」

というか「アニワザム」の方も今までのエレメンタル召喚は完全に舐めプだったみたいだしな……………やっぱり古代伝説級へUB M∨ってヤバイ。

『まあ、これでも「竜王」の一人だからね。……とは言い、分かってはいたがアイツを倒すには私だと火力が足りないな。操られている以上はまた仕掛けてくるだろうし』

「封印とかは出来ないの？」

『そもそも封印術は事前準備や重いコストが必要な技術で戦闘向きでは無いからね。【ギガキマイラ】を封印出来たのは最終奥義ファイナルブローと言う反則技を使ったからだし。……：……：……：戦闘中にへUBM∨クラスの相手を封印するとか先々代【龍帝】みたいなトチ狂った技術と圧倒的な実力が無いと不可能だから』

そういつた封竜王さんはどこか遠い目をしていた……：……：……おっと、とりあえずシエスタさん達の様子を確認してみるか。

「あくもしもし、シエスタさん聞こえる？」

『あ、は〜い、聞こえてます〜。大丈夫だったみたいですね〜』

「封竜王さんが来てくれたお陰でどうにか。そっちはどうなんだ？」

『コツチはウチのオーナーが来てくれた事と〜、上位エレメンタルをハンマーで殴り潰した着ぐるみさんのお陰で何とか戦えています〜。……：……：……それでもまだ戦闘中なので〜、コツチに援護に来られます〜？』

どうやらフォルテスラさんも来てくれた様だが、あちらはまだ予断を許さない様だ。

「封竜王さん、俺はこれからあちらの方に行くつもりなのですが……：……：……もちろん私も同行しよう。……：……：……キミ達には私の長年の懸念を解決してくれた恩があるからね、最後まで手伝うとも』

そう言ってくれた封竜王さんと共に、俺はへバビロニア戦闘団∨と騎士団達が戦っている場所に向かったのだった。

## 其の命脈を断て

□クリラ村周辺・森林地帯

マーシャルアーツ・プリンセス  
【武闘姫】ミユウ

実に厄介な特性を持っている事が分かった【ハイ・マインド・アバター・ホムンクルス】一派を相手に戦ってからしばらく、現在私達はかなりの苦戦を強いられました。

……………そして、私は現在一対一でホムンクルスと戦っているのです。

『《ダンシング・ヴァイパー》』

「《エンチャントアーム・ウインド》せいっ！」

まず、ホムンクルスがその両手の蛇腹剣を超高速で乱舞させてこちらを切り刻もうとして来ますが、私は両手に風を纏わせる《エンチャントアーム・ウインド》——腕部格闘系スキルに風属性を付与する【魔拳士】系統のスキル——を使った上でそれらの刃を横から打ち払う様にして弾き飛ばしていきます。

『《ヒート・ジャベリン》！』

「《フアントム・ステップ》！」

『対魔法障壁展開。《バインディング・エッジ》』

そうしている内に準備を終えたフェイが炎の槍を放ち、私はその隙に距離を詰めようと思いました……………が、相手はアーマーのスキルと思わしき障壁で炎槍を防ぎ、更に反撃としてこちらを捉える様な動きで蛇腹剣を放ち足止めを測って来ました。

「《ウイングド・リップ》！」

私は止む終えず足を止めて、その蛇腹剣を手甲の爪から放った斬撃波で叩き落しました……………と、こんな感じの攻防を今まで続けているのです。

……………ちなみに他の人達は【ストライクビートル】と【ライノセラス】を押さえ込んでおり、どれだけ回復能力と防御能力が高くとも基本的に突撃以外の攻撃手段が無い相手なので問題無く押さえ込んでいるのですが……………。

「やっぱり俺たちも援護した方が……………」

「アレを完全に捌けないアタシらじゃ、すぐ【魅了】されて足手まといだよー！」

「魔法も防がれるしな……」

『全く、我ながら不甲斐ない！』

そう、私達と相対したホムンクルスは初手で【魅了】効果付きの蛇腹剣で攻撃して来たのです……あの蛇腹剣はライザーさんのスーツすらあっさり切り裂く程に攻撃力が高く、上手く受け流している筈の私ですら【外装地竜の爪手甲】にもいくつか傷を付けてしまう有様です。

更に、凄まじい技術DEXで襲い掛かって来るので回避もままならず、スベリオルジョブ超級職である私でも距離を詰められず捌き続けるのが限界な程なのです。

……その為、最初は蛇腹剣を捌ききれなかったライザーさんやアマンダさんが【魅了】されて私に襲い掛かって来たり、サクさんポウさんの魔法が私に放たれたりして不利な状況になってしまったのです。

（幸い、必殺スキルの効果で《霊環付与》の効果 皆さんにも適応されているので【魅了】は直ぐに回復するのですが……こんな乱戦では五秒も味方が寝返った状態だと戦いにならないのです）

特にサクさんポウさんが【魅了】されるとノータイムで追尾式魔法を撃ってくるので非常に厄介なのです……その為、二人にはそれぞれの《エンブリオ》を近接用のエネルギーブレード状態を主体にして戦って貰ってます。

……そう言う訳で、他の皆さんには一旦離れた所であの二体の抑え役をやってもらい、まずは私が一対一でホムンクルスと戦ってその手札を明らかにする戦術で行く事にしたのです。

（急いで倒したいのは山々ですが、焦ってやられては意味がないですからね。……まあ、向こうも時間稼ぎが目的の様なので、敢えてこちらの思惑に乗って一対一で戦っている様なのは問題ですが）

つまりは完全に向こうの良い様に動かされている訳で……《気圏合一》による奇襲も一度見せた後では通じないでしょうし、正面か

ら突破するしかありませんか。

「……………まあ、このままではどうしようもないですし、色々やってみましょうか。《バックステップ》」

『了解、《ミラクル・ミキシング》《エメラルド・バースト》イン《粉碎波動拳》』

『……………警戒 《スネーク・エッジ》』

私が後方に距離を取ると相手は警戒しながら牽制の蛇腹剣を放つて来ました……………やはり、先程《粉碎波動拳》を一度見せたからか、その攻撃範囲を分かった上で撃たれても確実に回避出来る様に立ち回って来ましたね。

……………ですが、そうさせる事がこちらの狙いなのです。

「《粉碎波動拳》！」

『!?? 防御結界展開!』

私は放たれた蛇腹剣を片手で打ち払いつつ、もう片方の拳からヤツに向けて広範囲を吹き飛ばす豪風を炸裂させた……………相手には私と融合しているフェイの声は聞こえませんか。《ミラクル・ミキシング》で魔法スキルを融合させているとは気が付かなかった様です。

そして、広範囲風属性攻撃魔法である《エメラルド・バースト》と防御無視の衝撃波を放つ《粉碎波動拳》を融合させた、広範囲を剥ぎ払う防御無視の豪風が相手を展開した障壁や周囲の森ごと吹き飛ばしました。

……………まあ、これも身代わりで凌がれた様ですが、狙い通りヤツは防御姿勢を取っている所為でこちらを攻撃出来ない状態。更に衝撃波で発生した土煙りで視界が塞がれているのでこの隙に接近しましょう。

「《縮地》」

そして、私は《第六圏》で特典したホムンクルスを位置に《縮地》——一步の距離と速度を上昇させて、更に移動中に《気配遮断》効果を与える歩法系スキル——で拳が届く間合いまで接近しました……………懐に潜り込めれば蛇腹剣は使いにくい筈なのです!

「《浸透勁》！」

『!?? 防御ッ!』

こちらの接近に気付いたヤツは即座に両腕で急所である頭部と心臓部を防御したので、止む終えず私はガラ空きの腹部に拳を見舞いませた……………この《浸透勁》は《発勁》から派生した防御・身代わり系スキルを無視する内部攻撃を可能とするスキルなので、《ライフリック》に阻まれる事無くダメージを与えられるのです。

……………とは言え、その効果がある分《発勁》よりも威力が低いので、急所に当てられなかった以上はあまりダメージにはならないでしょう。なので、このまま一挙手一投足の間合いを維持したまま可能な限り削り倒します!

「《タイガー・スクラッチ》！」

『近接戦闘モード《ブレード・パリイ》』

私が爪手甲で斬りかかると、ヤツも両腕の蛇腹剣を縮めて普通の剣へと変形させて迎え撃ってきました……………最初の攻撃は弾かれましたが、スキル効果による追撃の二発がヤツに直撃してその態勢を崩しました。

(フエイ、今です!)

『《アースハンド》!』

『ッ!??』

そうやって態勢を崩したヤツの足を、フエイが事前に準備しておいた魔法で作られた土の腕が掴んだ……………低位の地属性魔法ですが一瞬だけ動きを止めるには十分なのです。

その隙に私はヤツの剣の間合いよりも更に内側に潜り込み……………。

「《発勁》! 《ニースマッシュ》! 《ベアー・スクラッチ》! 《シャイニング・フィスト》!」

『グウ!?? ガッ! クッ! チイ!』

そこから浸透打撃、ヒザ蹴り、爪手甲での斬撃、そして光属性を纏った正拳突きを立て続けに放って行きました……………これこそが格闘系スキルの真骨頂、技の出が早く出し終わりの隙も少ないので使用者の技量次第ではこの様にコンボを繋げられるのです!

身代わりの所為でダメージは与えられませんが、ノックバックで動きを封じられるのを嫌がったヤツはこちらの狙い通り後ろに下がって距離を取ろうとしました。

『《マッドプール》！』

『回避……!?』

なので、事前にフェイに指示を出してヤツが下がる場所に小さな泥沼を作らせておき、後ろに飛び退いた所でそこに嵌める事に成功したのです。

そうしてヤツの足が止まった所に私は飛び掛かって片足を振り上げ……。

「《ヒールクロウ》！」

『グッ！』

そのままカカト落としを見舞いました……：……：攻撃自体は相手が交差した両腕に受け止められましたが、その衝撃で泥沼へと更に深く埋める事が出来ました。

……：……：そして、私は受け止められている踵を支点にして縦に一回転して、ヤツの背後に降り立ち……。

「《<sup>ア</sup>転<sup>ス</sup>成<sup>カ</sup>練<sup>ス</sup>技》《真撃》《浸透勁》！」

特典武器「アスカ」のスキルで使用済みスキルのクールタイムをカットし、再使用可能になった《浸透勁》を強化した上でヤツの後頭に打ち込みました……：……：このまま脳を直接潰して確実に仕留められるといいのですが……。

……：……：そう思ったのがフラグだったのか、攻撃が当たる直前にヤツが着ていたアーマーから声が聞こえた。

『内蔵【ジエムー《サンダーカタラクト》】起動』

「!? ツウー！」

その声と同時にヤツの全身から迸った雷撃によって私の攻撃は中断されて、そのまま弾き飛ばされました……：……：と言うか、またこのスキルですか！ 便利ですからね！

更に、ヤツはすぐさま泥沼から脱出してこちらと距離を取ったので追撃も出来ませんでした。



『脅威判定修正、撃破優先。《チェーン・ゲージ》』

「チー！」

そのままヤツはこちらに全方位から蛇腹剣を襲い掛からせて来ました……………それらの攻撃は直接こちらを狙うものが少なかったので弾き飛ばすのは問題ないのですが、どちらかと言うと逃げ場を封じる事が主体の様で私はその場に足止めされてしまいます。

……………そうしている間にヤツのスーツの胸部が開き、そこから非常に高い“気”を感じ取れる宝石が姿を現し……………

「ツ!?」 《瞬間そ『内蔵【ジェムー《光環》』起動』

直後、その宝石からこちらに向けて無数の光線が放たれ、私とその周囲一帯をまとめて撃ち抜いて行きました。



そうして、広域殲滅型超級魔法の直撃を受けた私はどうなったかと言おうと……………

「まあ、生きてはいるんですけどね」

『……………対象生存』

この様にか生き残る事が出来ています……………咄嗟にクルタイムをキャンセルしていた《瞬間装着》で【身代わり竜鱗】を装備して、元々付けていた【救命のブローチ】と各種魔法耐性バフの陰でどうかと言う感じでしたが。

しかし、受けた魔法が光線の超連続攻撃だったので防ぎきれずにかなりのダメージを負ってしまいました。頭部や心臓などの急所は手でガードしましたが……………

「足と腹部には撃ち抜かれた所もありますか……………回復を」

『《ファイフスヒール》!』

それらの傷はフェイの回復魔法でとりあえず塞ぎましたし、《霊環付与》なら肉体欠損や【炭化】なども時間を掛ければ回復しますが……………

『ダメージ確認、装備破損、攻撃継続《スネーク・エッジ》』

「見逃してはくれませんよね！」

当然、ヤツは再び攻撃を仕掛けて来たので凌いでいきますが、やはりダメージの所為か私の動きはやや鈍い……………このままだと不味いですかね。

……………しかし、そうやって攻撃を仕掛けて来るヤツの背後から超高速で迫る影がありました。

『《ライザアアアアアキイイイツク》!!!』

『回避』

その影の正体はヤツに向かって飛び蹴りを仕掛けるライザーさんでした……………その飛び蹴り自体は回避されましたが、そこに更なる追撃が加えられます。

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!!』

『反撃 《ダンシング・ヴァイパー》』

ヤツに追撃を仕掛けたのはアマンダさんの《エンブリオ》であるベヒーモスでした……………ですが、ヤツはあっさりとその攻撃を回避しながら反撃の蛇腹剣でライザーさん諸共切り刻んでいきます。

……………不味い、あの蛇腹剣を受ければ「魅了」に掛かってしまいます！ 私を助けに来てくれたのですがこのままでは……………。

『グッ！……………うおおおおおおお!!!』

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!!』

『!?!?……………対象【魅了】効果無し』

しかし、彼等はヤツの攻撃を食らったにも関わらず、そのまま何事もなかったかの様に戦闘を続行していました……………あれは状態異常耐性ですかね？

そう考えていたら、こちらにアマンダさんがやって来ました。

「ダメージの方はどうだい？」

「どうにか、少し休めば戦闘続行は可能です。……………とこころであれば一体？」

「ああ、アレは私の手持ちに「精神興奮薬・ファイト一発タイプⅢ」つてのを持っていてね。そいつを飲んだお陰で暫くの間、精神系状態異常には掛からなくなってるんだよ」

ちなみに最初から使わなかった理由は、その薬の使用に強制的に【興奮】の状態異常になるので行動に制限が出来る事と、使用后長時間に渡って【酩酊】【衰弱】などの状態異常になるデメリットがあるからだそうです……………そりゃあ、ホイホイ使えませぬよね。

「後、あつちの方は二人に『死んでも抑えろ』って言うてあるから暫くは大丈夫だろう。…………で、今の状況はかなり不味い感じだけど、何か打つ手はあるかい？」

「……………一つ、今なら使える手があるので、どうか私がヤツに一撃入れられる状況を作ってくれませんか？」

アマンダさんの質問に対して私は一つだけ打つ手があると答えました……………使用条件を満たす必要があるのでも今まで使えませんでした。アスカ氏から学んだスキルの一つにこの状況でもヤツを仕留められるモノがあるので。

「出来る限りヤツの防御能力を減らして欲しいのです。…………外したら次がないタイプのモノなので」

「分かった、じゃあそれで行こうか。…………ここで仕留めないとジリ貧だからね、死んでもアンタの道は開いてやるさ」

そう言っアマンダさんはヤツの元へと向かって行きました……………信じてくれた彼等の為にもやって見せねばなりませんね。

『スキルの効果時間が切れたから再使用するよ』  
《我らが成るは光の使者》《エコー・オブ・トゥワイス》

「ありがとうございます、フェイ。…………私は少し集中するのです」

フェイが回復とバフの再使用をしている間、私は深く集中して以前アスカ氏との試練で至った『あの領域』へと自分の意識を持っていきます……………まだ、かなり追い込まれた状態でないとコレは出来な感じですよね。

『内蔵【ジェム】《サンダー・カタラクト》起動』

『グワアツ!??!?』

『G A A A A!??!?』

「攻め続けなあ！ コイツの手札を可能な限り削るんだよ！ どうせあの子のスキルのお陰で回復するんだからねえ！」



直後、四度目の全方位雷撃が放射されました……………ええ、接近して来た私にそう来る事は分かっていました。だからこそ、これまで切り札を伏せておいた甲斐があったのです。

「フエイ！」

『《サンダー・カタラクト》！』

相手から放たれた雷撃は分かってから放たれた同じ全方位雷撃に相殺されました……………実は、以前「マグネトロベ」が散々使ってきた時にラーニングしていたのです。

……………攻撃は大体回避か防御出来るのでアスカ氏との試練の時間ぐらいしか使わなかったのですが、向こうも乱発するだけあってやっぱり便利ですねこのスキル。

『《アクセル・ステップ》』

『ツッ？』

そうやって雷撃を凌いだ後、即座に加速した私はヤツの懐に潜り込む事に成功しました……………これから使うのはアスカ氏がかつて戦ったという超級職「アーツ・ハーミット武仙」の奥義。

……………この「武仙」は周囲の「気」を読む『第六圏』や、周囲と自身の「気」を同調させる事で姿を消す『気圏合一』などの「気」という概念を用いた格闘スキルを極めたジョブであり、その奥義も「気」への干渉を主とするモノなのです。

更に発動には対象と自身の「気」の流れを同調させる為にその流れ完全に読み切る必要があるのです、一定時間『第六圏』で対象の「気」を感じする必要がある、更に自身のHPを任意の割合消費して発動されます。

『《断気絶招》』

それは相手の「気」に同調させた自身の「気」を叩きつける事で、相手の生命力の根本を断つという一撃……………具体的には消費したHP×スキルレベル×10%の数値だけ対象の最大HPを削り取るスキルである。

『アツ……………』

その一撃はHPを減らすものではないため防御・身代わり系スキル

の意味はなく、私のHPの大半を消費したので魔法型である【ハイ・マインド・アバター・ホームンクルス】の低い最大HPを全て削り取って絶命させたのでした。



「ふう、どうにか倒せました」

「やったみたいだね、すっかり疲れたよ」

『これで精神干渉も無くなったのか？』

えーと《第六圏》を使っても精神干渉能力が使われている様子はないので、おそらく向こうの操作も解かれている筈です……………上空にはエフさんの球体がありますし、すぐに向こうにも伝えられるでしょう。

……………その時、まだ残っていたアーマーから音声が発せられました。

『…………ガッ、ガガ…………装備者死亡により機密保持の為に自爆を実行。

内蔵【ジェムー《圧縮恒星》】起動』

「！ 全員離れて！」

その内容が聞こえて来た途端全員即座にアーマーから離れ、それとほぼ同時にアーマーが白い円球に包まれました……………それが消えた時そこには半球状に抉れた地面と僅かな残骸以外は何も残っていませんでした。

「……………自爆したのかい？」

『その様だがほとんど熱を感じなかったぞ』

「おそらく熱量を完全に制御して内側の物体だけを消滅させたのでしよう」

……………この事件の黒幕は一体何者なのでしょう 「ギャアアアア!!!」

「ちよ！ そろそろ足止め限界なんですけどー！」

「終わったんならこっちヘルプー！」

『GO A A A A A A A A!!!』

『KETEEEEEE!!!』

声が聞こえて来た方向を見るとお二人が例のモンスター達に追いつまれている所でした……………アイツらまだ残っているんですね。

「やれやれ、締まらないねえ」

『流石に放置して置くわけにもいかないがな』

「では、助けに行きましょう」

その後、私の《ミラクル・ミキシング》からの《粉碎波動拳》&《エメラルド・バースト》のコンボを中心に片方を集中攻撃して再生される前に倒し、それで再生能力を失ったもう片方も問題無く倒せました。

さて、これで「アニワザム」の制御は無くなった筈ですが、兄様達は大丈夫でしょうか？

## 金色の流星・銀魔を穿つ

アルター王国北部・クリラ村郊外 【突撃騎兵<sup>チャージライダー</sup>】 レント

あれから、俺は援軍に来てくれた封竜王さんと一緒に戦闘団・騎士団側のメンバーに合流する事が出来た……………その際、まだ上位エレメンタル含む敵がいくらか残っていたが、封竜王さんがあっさり蹴散らしてくれたので特に問題は無かった。

……………まあ、自分達が苦戦していた相手を一蹴した封竜王さんにはみんな驚いていたが。

『そういう訳で、私も「アニワザム」を倒すのを手伝うよ』

「よ、よろしくお願いします……………」

と、そんな感じで封竜王さんが協力してくれる事を他の人達に説明した訳だが……………あれだけ凄まじい戦闘能力を見せられたからか腰が引けている人も結構いるな。

まあ、フォルテスラさん、リレイさん、シユウさん辺りのメンバーは平然としているが(尚、エフさんは古代伝説級<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>へU B Mの戦いを見て、めっちゃいい笑顔でメモを取ったりしていた)。

……………そんな微妙な空気をスルーして封竜王さんは話を続けた。

『私はヤツとなら一対一でも守りに徹する分ならある程度やり合えるだろうし、短時間ならアレの動きやスキルを封印するぐらいは出来るだろう。……………まあ、基本的に君達の指示には従うつもりだから上手く使ってくれ、これでも人間と一緒に戦うのには慣れて居るんでね』

「え、えーつと……………そう言われましても……………」

まあ、古代伝説級へU B Mにそんな事を言われてもすぐには答えられんよなあ……………だが、俺はまだ逃げる気は無いし、話のきつかけを作る為にも一つ提案してみようか。

「じゃあ、封竜王さんにアレを止めてもらって、その間に俺達の最大火力を叩きつけるしか無いんじゃないかな。……………一応、俺は一撃限りなら十万以上の攻撃力を叩き出す方法があるが」

『うーん、俺も一撃限定で高攻撃力を出す手段はあるが……………問題



はどうやって近づくかじや無いガル？ レント君みたいに空を飛べるなら問題は無いがそれも行かないガル』

「封竜王さんは【アニワザム】の動きを止められると言う事だが、止められる時間や方法を詳しく聞きたいかな。それによって取れる戦術も違うだろうし」

俺がそんな提案すると、シユウさんとフォルテスラさんもそんな発言をしてくれた……………やっぱり、こう言う事は一人で考えるよりみんなで見解を出し合う方がいいな。一人だと色々で見落としがあるし。

『ふむ、アレを拘束した上でスキルを封じられる時間は最大三十秒で、更にある程度接近しなければならぬだろうな。……………それに、あのレベルの相手を封じるには、コチラも封印術に全力を尽くす必要があるだろう』

「とすると、やっぱり接近手段がネックになるか。三十秒でアレに接近するのは……………」

『それに封印中は封竜王さんが掛り切りになるのも問題ガル。……………そう簡単には封印なんてさせて貰えないだろうからな』

「……………いや、距離だけならどうにかする方法はある。……………シエスタ、必殺スキルは使えるか？」

「ん、使えますけど〜」

俺やシユウさんなどがアレの迎撃を躲す方法や接近手段を話し合っていたら、フォルテスラさんがシエスタさんの方を見てそんな事を言った。

「私の必殺スキルは、玉座周辺にいる念話登録された人のスキル効果の発動地点を感知範囲内の任意の場所にする事が出来るからね〜。数が増える事に消費MPも増えるけど〜、遠距離攻撃系スキル持ちなら距離を無視して攻撃出来るよ〜」

「成る程、それは便利そうだな。……………ん？」

そうやって、彼女の話聞いてる途中でいきなり地面が僅かに揺れだした。

「これは……………ヤツが仕掛けてきたのか？」

「え〜つと、私の探知だと【アニワザム】は結構離れたところの地下に居るみたいだけど〜」

『いや……………これはそう言うことか？……………《竜気結晶》対地展開、《竜気結界》《魔法封印・地属性》起動』

地面の揺れに俺達が警戒しているのを後目に、そう言った封竜王さんは地面に手をつけて何かのスキルを発動した……………すると、俺達が居る地面の一角が円状の水晶に覆われて、更にそれを底面として半球状の結界が展開された。

……………直後、地面の揺れが一気に大きくなると共に水晶の地面が少し陥没して、逆に円周の外側の地面がやや隆起した。

「ツ！これは!?？」

『おそろく、地属性攻撃魔法《アースイーター》かな。……………一応、ここら一角に地属性魔法を封印・抑制する結界を張ったからこの程度で済んだけど』

「……………これは、かなり不味い状況ですね。どうやら向こうは地面に潜ったままこちらを一方的に攻撃する事にした様です」

シャルカさんの言う通り、ヤツが地面に潜ったままだとコツチには攻撃する手段が無くなるんだよな……………向こうは今までの舐めプを捨てて本気でこちらと戦う気になったらしい。

「ちなみにシエスタさん、君の必殺スキルは地中への展開は……………」

「ん〜、発動点は遠隔視で見える場所にしか置けないから難しいかな〜。土に阻まれて威力も落ちるし〜」

『ふ〜む、どうやら黒幕は【アニワザム】を本来の戦い方に戻して来たみたいだね。今は防いでいるがこのまま続けられると庇いきれなくなりそうかな。……………状況が変わったし、撤退する気ならそれまでヤツの相手を請け負ってもいいよ。こちらの問題を解決してくれた恩もあるしね』

うーん、確かにヤツを地中から引きずり出す手段が無いとどうにもならない状況だからな……………他の人達も話し合っているが地中に對する有効な攻撃手段とかがある人は居ないみたいだし。

……………そう考えていたら、さつきからずっと片目を瞑ってどこか

を見ていたらしいエフさんが声を上げた。

「それは少し待った方がいいですよ。……………どうやら、ミュウさん達別働隊が「アニワザム」を操っていた相手を倒した様ですから。撤退はその事によるアレへの影響を見てからでも遅く無いかと」

「そうか！ やってくれたか！」

「……………問題は制御を外れたヤツがどんな行動をとるかだな」

「洗脳が解けて逃走してくれるならそれでもいいんだが、制御を外れて暴走したりしたら面倒になりそうだ……………ミカが『洗脳に対処した方がいい』と言っていた以上、何も変わらない事は無いだろうがどうなるか。」

「ん？ あゝ地下の「アニワザム」に動きがあったよ。凄い速度で地上に向かっていているみたい」

『こちらでも感知出来たな。……………これは暴走しているのか？』

『そうシエスタさんと封竜王さんが言った直後、ここからやや離れた地面が大きく爆ぜた。』

『そこから現れたのはやはり「アニワザム」だった……………更にヤツは地上に出た途端、これまでと比べても明らかに異常と分かる様な絶叫を上げながら辺り一帯に各種魔法をばら撒いて暴れまわり始めたのだ。』

……………これは……………。

『どう見ても暴走しているガルね』

『ふむ……………おそらく精神操作は完全では無かったのだろう。だから、ああなるのを防ぐ為にわざわざ精神干渉を行う手駒を近くに配置したのであるしな』

「そして、そいつがやられた事によって精神操作が緩んであなつたと……………」

まあ、古代伝説級〈UBM〉を完全に支配下に置くのは相当な難事だろうからな……………多分「アニワザム」自身の意思と操っている能力が相反しあっているんだらう。

……………とは言え、あんな風に暴走している〈UBM〉を放置すれ

ば確実に何らかの被害が出るだろうし倒すべきだろう。そうして周りを見ると、どうやら他の人達もそう言う考えになった様だ。

『幸いヤツはああやって地上に出て来たし、ただ暴れるだけなら近づいて封印術を掛けるのも簡単だろうからね』

「そうしてヤツの動きとスキルを封竜王さんが封じている間に、シエスタの必殺スキルで総攻撃を掛けると言ったところですか。……ヤツが地属性魔法を乱発しているお陰で、その周囲の地面は酷い事になってるから空を飛ばないと近づくのは難しいからでしょうし」

「俺は空が飛べるし、攻撃手段も近接型だから封竜王さんと一緒に行くよ」

「そうやって、俺達は今後の戦術を手早く話し合って行き……」

「よし！ アイツを倒してこの一連の事件にケリをつけよう！」

「出！ 応！ ！」

フォルテスラさんの号令の下、俺達は最後の戦いに赴くのだった。



「そういう訳で俺と封竜王さんは「アニワザム」の下へやって来たのだが……そこにか地面をのたうち周り辺り一帯の地形を変えながら魔法を乱射するヤツの姿があった。」

「おわあ……めちゃくちゃ暴れているな」

「だが、ただ暴れているだけでこちらの事は目に入っていない様だな。エレメンタル召喚や超級魔法の行使も出来ない様だし、上級魔法を闇雲に撒き散らされるだけならば防ぐのは容易いよ」

「その言葉通り、封竜王さんはこちら側に飛んでくる上級奥義相当の魔法を全て結界と水晶で防いでいた……そうやって、ヤツに近づいたところでシエスタさんから俺に念話で連絡が来た。」

『あ、こっちの準備は整いました』

『了解。……あちらの準備は整った様です』

『分かった。では、さっさと始めるとしよう。……………あまり長引かせるのも哀れだからな。《竜気結晶・縛》《魔法封印》最大展開!』

その言葉と共に封竜王さんは巨大な水晶の柱を複数生成して、それを「アニワザム」の周囲の地面に向けて射出した……………それらの水晶柱はそのまま地面に突き立つと、瞬く間にその形を紐状に変えてヤツを縛り上げてその動きを完全に封じてみせたのだ。

!!更にその水晶からオーラが発せられてヤツの全身を覆うと、先程までヤツ自身や身体に付いたエレメンタル達が狂ったように発動していった魔法が全て無くなったのだ。

『これで動きと魔法は封じたぞ。あまり長くは持たないから早く決めなぐれ』

「分かりました。…………魔法は封じられた! 攻撃を頼む!」

『了解。じゃあ皆さん準備お願いします……………設定座標は「アニワザム」頭部のすぐ直上へ《主神の名もて彼方を穿てや勇士達》』

直後、拘束されたヤツの頭部のすぐ上から雷を纏った矢・超高熱の炎弾・超威力の光弾など様々な属性の攻撃が放たれ、そのまま既に防御魔法が無いヤツの頭部に当たりその上部を吹き飛ばした。

だが、それだけのダメージを受けても「アニワザム」はまだ死んでおらず、先程より弱々しいながらも拘束を破ろうと悶えていた。

……………そこで、俺は吹き飛ばされた部分から見えたヤツの体内に妙なモノが蠢いているのを見た。

「……………封竜王さん、ヤツの体内にある銀色のモノは一体……………」

『む?……………《看破》《鑑定眼》……………ふむ、何らかのアイテムの様だが、鑑定しても【寄生型ナノマシン】と言う名前しか分からないな』

「ソレ」はぱっと見銀色の粘菌の様なモノで「アニワザム」に付けられた傷口の中の半分ぐらいを埋め尽くす様に蠢いていたのだ。

……………そして「ソレ」——封竜王さんが言うには【寄生型ナノマシン】(俺の《鑑定眼》では分からなかった)はこちらに見つかるや否や激しく動き出して、それに連動するかの様に「アニワザム」動きも激しくなったのだ。

『????????????????????』

「封竜王さん！ アレの動きを！」

『分かってる！ 《竜気結晶・槍波》《装備封印》！』

「蠢く【寄生型ナノマシン】に対し封竜王さんは小型の水晶の槍をいくつも撃ち込み、突き刺さっているそれを介して封印術を行使してナノマシンの動きを封じたのだ。」

『成る程、アイテム扱いだから装備品のスキルを封印する術ならある程度の効果があるみたいだな。種類としては装備者を操る呪われた装備品……いや、先々期文明の特殊な機械系アイテムの類いか』

「まあ、ナノマシン」って言うぐらいですからね。………つまり、アレが【アニワザム】を操っているモノって事で良いんですね。どうにかならないので？」

俺がそう聞くと封竜王さんは難しそうな顔をしながら答えてくれた。

「私に機械関係の知識が無いからか、或いは予報特殊な代物なのか、あのナノマシンには《装備封印》が完全には効果を発揮していないんだ。だから封印は難しいだろうし、アレは【アニワザム】の中枢に寄生している様だから引き剥がす事も現状では不可能だろう。………これ以上あのままにしておくのは同じ古代伝説級《UBM》として忍びない。………頼む、終わらせてやってくれ』

「………分かりました。行くぞ【マグネトロローベ】！」

そして、俺は馬上槍を持って高空に上がっていった………ちなみに俺と【マグネトロローベ】にはこれからやる事への対策として《エアレジスタンス・ディクリース》——自分にかかる空気抵抗を軽減する風属性魔法——と《キネティック・レジスト》を掛けており、更に封竜王さんに事情を説明して空気抵抗軽減と物理耐性特化の《竜王気》を付与して貰っている。

………まあ、ここまで色々勿体ぶつたが、やる事は《電磁加速<sup>レイル・アクセラ</sup>》の最大出力での突撃だけなんだがな。

「マグネトロローベ、俺のスキル使用と同時に残り約MP二百万を使って《電磁加速》を使用してくれ」

ただし、消費するMPは膨大だがな………最も、このスキルは速度を上げる事に燃費が悪くなるから、これだけ使ってもAGI二十万に届くぐらいだろうが。

………そうして準備を終えた俺は真っ直ぐに【アニワザム】に寄生しているナノマシンへと突っ込んで行き……。

「《空想秘奥》《フルオフエンス・チャージ》！」

「!!」

!!! スキルによって強化した上で【突撃騎兵】の奥義《フルオフエンス・チャージ》——突撃時の速度を倍加させ《騎乗突撃》の攻撃力上昇率を100%にするスキル——を使用して、それとほぼ同時に【マグネトローベ】が《電磁加速》を起動する。

………これにより突撃時の速度は《電磁加速》を倍加させた事で音速の四十倍を超え、その攻撃力も突撃時の速度を100%加算された事で四十万以上を叩きだせるのだ。

「!!」

そうして、四十万を超える攻撃力を持った上で音速の四十倍以上で走る一条の流星と化した俺は、そのまま蠢く【寄生型ナノマシン】の中央部に着弾した………その結果として、ナノマシンは【アニワザム】の頭部上方毎消しとばされたのだった。

????????????????????  
「………ゴフッ！ ガフッ！ あー無事………じゃ無いが」

突撃を終えた俺は、その結果として【アニワザム】頭部の半分ぐらいを消しとばして出来たクレーターの中で立ち上がった………最も、槍を持っていた右手は衝突の際の反動で肘から下はズタボロ、更にその衝撃で身体の至る所にダメージがある有様だが。

………また、スキルのコストで半減していた事もあって俺のHPはゼロであり、今は《ラスト・スタンド》の効果で無理矢理肉体を動

かしているのだが。

「マグネトロローベは大破で済んだか。……良くやってくれた」

そう言つて、俺は辛うじて原型を留めている「マグネトロローベ」をアイテムボックスの中に収納した……。俺もコイツも突撃の反動で粉々になるかと思つていたんだが、封竜王さんの《竜王気》のお陰か思つたよりもダメージが少ないな。

「……………しかし、この【アニワザム】はまだ死んでいないのか」

コイツが光の塵になつていない以上はHPはまだゼロになつていないと言う事だからな……。まあ、その巨体故に身体の大部分がまだ残つていて最大HPも数百万近くある原因の様だ。

とは言え、ナノマシン毎コイツの中核部分は消しとばされたのか先程までと違つてピクリとも動いていないので、後は残っている人達での集中攻撃で倒し来れるだろう。

……………と考えていたら、突如足元が揺れ始めた。

「！…これは、まさかコイツまだ動け……ガハアツ!!!」

俺が突然の【アニワザム】再起動に対して行動を起こそうとした瞬間、俺の左胸が後ろから飛んできた石の槍に貫かれた……。慌てて後ろを振り向くと、そこには銀色の蠢く金属——【寄生型ナノマシン】の姿があつた。

よく見るとナノマシンはその質量を徐々に増やしており、それに連動して【アニワザム】の動きも大きくなつていた……。コイツ、自分が【アニワザム】の中核に取つて代わる気か!?!?

「だが、頭を狙うべきだったな! 《ラスト・アタック》《クイツクスロー》!」

だが、俺は心臓を貫かれたまま【決死隊<sup>フォーロウン・ホープ</sup>】のスキルで攻撃力を倍加させた上で、最後の【ジエムー《クリムゾン・スフィア》】をナノマシンに投げつけて焼き尽くす……。もう死んでいる以上、頭をやらなければならない動く事には支障は無いんだよ! 肺も潰されたから呼吸困難だけだな!

「ゲホッ! ……だが、このまま見過ごす訳にも行かないな! 残り全MPで《魔法発動加速》《魔法威力拡大》《魔法範囲指定拡大》!



《クリムゾン・スフィア》!!!」

更に、まだ残っているナノマシンを可能な限り威力・範囲を強化した《クリムゾン・スフィア》でその一帯毎焼き払った………が、それでも足元の揺れは収まらなかった。

「どうなってる!?」

『感知したところ、どうやら【アニワザム】の全身にも少数だが【寄生型ナノマシン】が配置されている様だね。………質量自体は中枢に寄生していたモノよりも少ない様だが、徐々に身体を乗っ取り始めているみたいだ』

俺の疑問に答えてくれたのは近くに来ていた封竜王さんだった………ええい！ どうする!? このままコイツが復活したらシヤレにならないぞ！

………と、俺は内心かなり焦っていたのだが、それにひきかえ封竜王さんは冷静だった。

『だが、今はまともに身体を動かせない様だし……レント君、コツちに』

「あ、はい」

そう言っただけで彼は手を差し伸べて来たので、俺は急いでその手に飛び乗った………そして、彼は【アニワザム】からある程度距離を離して滞空した。

「どうするんですか?」

『なに、トドメを刺すだけさ。今なら動きが鈍いお陰で、さっきの様に拘束する必要は無いから攻撃に全力を尽くせるしね……《竜気結晶・

槍波》最大展開……発射』

そう言いながら封竜王さんは【アニワザム】の周囲に巨大な水晶の槍が十数個も生成され、彼の号令と共にそれらは次々と【アニワザム】の身体に突き刺さっていき……。

『《竜気結晶》内の全リソースを攻性型《竜王気》に変換……《竜気爆散》』

それらの水晶全てが封竜王さんの指示の下で大爆発を起こして【アニワザム】の身体をバラバラに吹き飛ばした………うん……。

「……………火力不足とか言ってますませんでしたっけ？」

『古代伝説級「竜王」としては火力不足だよ。……………それに、この攻撃は準備に時間がかかるから、相手が防げず避けられない状況だからこそ使えたモノだしね。燃費も悪いし』

そうしている間に、バラバラになった【アニワザム】は光の塵になっていった。

【UBM】【魔鉱蚯蚓 アニワザム】が討伐されました

【MVPを選出します】

【レント】がMVPに選出されました

【レント】にMVP特典【魔鉱外套 アニワザム】を贈与します

「あっ、UBMの討伐報告が来ましたね。どうやら本当に倒せた様です」

『そうか、これでひと段落だな』

そして、今回は俺がMVPらしい……………累計戦闘時間と中枢部分の破壊のお陰かな。特典武器も気になるけど、確認している時間は無さそうだ。

「封竜王さん、もう《ラスト・コマンド》の効果時間が来れるのでこれで失礼します。今回はありがとうございます」

『礼を言うのは私の方だよ。……………復活してからは一度クレームに来て欲しい。今回の報酬を渡すからね』  
「分かりました」

その返答とほぼ同時に《ラスト・コマンド》が切れて、俺はデスペナルティになった……………これで死ぬのは二回目だが、前回と違ってUBM相手に相打ちに持ち込めたからよしとするか。

【致死ダメージ】

【パーティー全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】

終幕・そして……

□クリラ村周辺森林部

マーシャルアーツ・プリンセス  
【武闘姫】 ミユウ

あの後、残っていたモンスター二体を倒した私達は、急いで兄様達と合流する為に森の中を移動しています………徒歩で。

『済まないな、あの戦いで鎧になっていた「ヘルモーズ」が損傷してしまつて』

「いえいえ、ライザーさんの援護が無ければ私は死んでましたし」

「ベファイも薬の副作用がまだ抜けてないからね。………ていうか、回復スキル持ちのベファイですら薬が抜けるのに時間がかかるとか………」

ライザーさんの「エンブリオ」ヘルモーズは先程の戦いで鎧として装着されていたのでダメージが酷く、アマンダさんのベヒーモスは例の【精神興奮剤・ファイト一発タイプⅢ】の副作用が抜けきらなかったので紋章の中で休んでいるのです………ちなみにライザーさんの副作用はクールタイムが回復した【ハデスロード】の《霊環付与》を掛けた上で、回復魔法を併用してどうにか動けるまで回復させました。

………どうやら、薬の副作用であるからか非常に回復させ難い様なのです。

「さて、そろそろ範囲内だろうしシエスタのやつに連絡するか………あーもしもし、シエスタ？ コツチはそろそろ合流出来そうだ………」

私達が戦闘地点に近づいて来たところで、いきなりアマンダさんが耳に手を当てて話し始めました………こつそりライザーさんに話を聞いてみると「バビロニア戦闘団」には念話使いの人が居て、その人に連絡を取っているのだと教えてくれました。

「………ああ、分かった。私達も直ぐに合流するよ………どうやら【ギガキマイラ】と【アニワザム】はもう撃破されたみたいだ」

「それは良かったのです！ とりあえず、これで今回の事件は解決したと言うことですね！」

そう言った私に対し、アマンダさんはやや気まずそうな顔をして言葉が続けた。

「ただ……………その戦いでレントとミカがデスペナになったみたいなんだよ……………」

「そうですか……………まあ、兄様と姉様は切り札が自爆気味のモノですからね、そうなるのも仕方ないでしょう。……………それより、他に犠牲は出たのですか？」

私がそう聞き返したら、アマンダさん達は少し驚いた様な表情になりました。

「あつ、ああ……………デスペナになったのはその二人だけで、戦闘団や騎士団の方には死人は出なかつたみたいだ。それと封竜王も無事らしい」  
「それは良かったですね。古代伝説級<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>へU B M<sup>が</sup>が二体も出たのに、テイアンの犠牲を出さずに解決出来たのなら上出来でしょう」

と言うか、姉様が「自分と兄様は今回高確率でデスペナになる」と事前に伝えていましたからね……………それに、この世界は私達に取ってはあくまでゲームですからね、死んでも次があるのでですよ。

……………まあ、この辺りの意見は人によって違うでしょうし、あまり深くは言いませんが。

「まあ、大丈夫ならいいんだよ。……………仲のいい身内がやられると仇討ちに行くタイプもいるからね」

「私は「あくまでゲーム」と割り切っていますから。……………敵がまだ残っているなら敵討ちぐらいはしますけどね」

そんな会話をしつつ、私達は合流地点に急ぐのでした。



そうして、私達は森の外に出てへバビロニア戦闘団<sup>本隊と騎士団</sup>、そして封竜王さんと合流出来たのでした……………しかし、周囲の地形がかなり荒れ果てていますね。激戦だった事が伺えるのです。

『団長、ただいま合流しました』

「おお、ライザー！ それにアマンダとミュウちゃんも、今回は助かつ

たよ。君達が精神操作を行っているヤツを倒さなければ、こちらはやられていただろうからね」

「本当に助かりました」

そんな感じで合流した私達はフォルテスラさんやリレイさん達に凄く感謝されました……………どうやら、私達も今回の事件の解決に役だった様で良かったのです。

……………あ、そうでした。

「リレイさん、フォルテスラさん、事件は解決しましたが、この後は何をやる予定なのですか？」

「え？……………事件は解決しましたし怪我人も回復し終わりましたから、クレームイルにいるリヒト団長と合流して今回の報告と事後処理を行う事になるでしょうね。一応、事件解決の事は先に連絡し終えましたが」

「俺達も騎士団と一緒にクレームイルに戻る予定だが」

なるほど、後はもう事後処理だけみたいなので、私に出来る事はもう無さそうですね。

「じゃあ、私はそろそろお暇するのです。クエストの報酬はまた後日改めて……………確か二人のデスペナ開け地点はクレームイルになっていたはずなのでそこで受け取るのです」

「あつ、ああ……………しかし何か用事でもあるのか？」

「いえ、用事は有りませんが……………母様にこちらに訪れるなら兄様か姉様と一緒に無ければダメだと言われているので、二人がデスペナである以上はあまり長居は出来ないのです」

そう事情を説明すると皆さんわかってくれた様で『後日、二人のデスペナが開けたらまた会おう』ということになりました……………ただ、姉様の方はデスペナ三倍のデメリットが有りますから兄様と一緒にになりそうです。

（おっと、その前に封竜王さんに挨拶をしておきましょうか。……………少し話しておきたい事と聞いておきたい事も有りますし）

そうして周囲を探ってみると、人化している封竜王さんがシユウさんと話しているのを見つけたので、私はそちらに向かいました

……途中でエフさんも見つけましたが、凄く良い笑顔で手に持ったメモ帳に何かを書き込みまくっていたので、そつとしておきましよう。

「おや、ミュウちゃん。何の様かな？」

「そろそろお暇しようと思ったので、その挨拶に。……それと少し聞きたい事があったのですが、大した話でも無いのでダメそうなら別にいいのです」

『いや、そつちが先でも構わないガルよ。……今話していたのはこの事件の黒幕についてガル。多分、そつちも似た様なものじゃ無いかガル？』

……確かに、私が聞きたかったのはその黒幕さんの事なのです。とりあえず、こちらが話したかった情報から先に言っておきますか。

「私が戦った【ハイ・マインド・アバター・ホムンクルス】には、【アニワザム】への精神干渉とは別にもう一つ精神に働きかけるラインがあつたのです。そちら側は隠蔽が強くて詳細は分からなかつたのですが、相手の言動や行動からあのホムンクルスも何者かの配下だろうと思うのです」

『成る程ガル。……封竜王さんは何か心当たりがあるガル？』

「済まないが、私が知る限りではそんな事をしそうな者に心当たりは無いな。……だからこそ問題なんだが」

……そう言った封竜王さんは難しい顔をして話を続けました。

「これでも、私は『三強時代』から生きているそれなりに古参のへUBMで、昔は世界中を旅していたりもしていたからそれなりに強者の情報を知っている。だが【アニワザム】……私より古くから存在している古代伝説級最上位のへUBMを支配下に置ける様な相手には心辺りが無いんだ」

『……それだけの相手にも関わらず、一切の情報を出していないって訳か』

「そして、クリラ村を狙って来た事と高位ホムンクルスの存在から考えて、あの【ギガキマイラ】を作ったのもその黒幕である可能性が高

い」

「あのホムンクルスは最後証拠隠滅の為に自爆しました……………逆に言えば、あのレベルの配下を実質使い捨てにしたとも考えられるのです」

……………こうして並べ立てると、その『黒幕』のヤバさが際立ちますね。

「十中八九、黒幕は神話級以上のバケモノだろう。……………だが、それ故に気掛かりな事もある」

『ここまでまともな情報を出して来なかった黒幕が、どうして今回はここまで派手に動いたのかガルね。……………と言うか、それだけの相手がやったにしては今回の事件は余りに杜撰過ぎるガル』

「姉様の直感混みにしても、少しくまく行き過ぎですからね……………」

そもそも『存在を知られていない』という事自体が凄イメリットなのに、今回は存在を知られても構わない様な動きをしているのです……………本当に古代伝説級へUBM二体と高位ホムンクルスを使い潰してまで一体何がしたかったのでしょうか。

『正直、黒幕の情報が少なすぎて断言は出来ないが……………近くに行動を開始するから、もう身を隠す気は無くなったとも考えられるガル』

「その可能性はあるか……………目的が読めないのが怖い、下手に首を突っ込んででも返り討ちに合いそうだし……………」

「向こうが動かない限りはどうしようも無い感じですかね」

これ以上話しても拉致があかなさそうだったので、封竜王さんが他の人達にも注意しておくという事になって私はログアウトしましたが……………いつか、何かの事件が起きるのは確実でしょうかね。



??とある遺跡深部 【完理全脳 アークブレイン】

『……………【十狂混沌 ギガキマイラ】【魔鋳蚯蚓 アニワザム】【ハイ・マインド・アバターホムンクルス】の撃破を確認。複製脳との集積

データ解析・考察を実行』

とある場所に存在する遺跡の最深部、そこでは今回の事件の黒幕である「アークブレイン」が自身の複製脳との思考会議を行っているところだった。

………ちなみに思考会議の際には意見・考察に幅を持たせる為、各々の複製脳には擬似的に人格を与えている。

『第二目標 “ギガキマイラ” の制御』は失敗………その上、「アニワザム」や「ハイ・マインド・アバターホムンクルス」も撃破された』『「アニワザム」は討伐される事が前提だったとは言え、こちらの想定よりも遥かに早く倒された………劣化 “化身” への脅威度を上昇させておくべきか』

『データによると「ギガキマイラ」「アニワザム」の特典武器を確保したのは、以前「マグネトロバー」を撃破したのと同じ劣化 “化身” の様だが』

『その劣化 “化身” 達のデータは優先度高で検証中です』

その場所に並ぶ無数の脳による《超並列思考》が行使され、更に《ハイパーデータリンク》と《超高速演算》を駆使して今回の事件で得られた情報を超高速で精査していく。

『「アニワザム」の撃破に関しては精神干渉が不完全だった所為で本来の性能の半分も出せなかった事と、こちらが目的の為に意図的に戦況を引き延ばした事もあったからだろうが……ホムンクルスの方の補足が早すぎるな。高レベルの隠蔽装備と《魔法発動隠蔽》を併用していた筈だが』

『解説出来た範囲だと【武闘姫】の劣化 “化身” は《第六圏》をラーニングしていた様だ』

『【武仙】のスキルか……あのジョブはリソースの運用に特化しているからな。リソースの直接感知では殆どの隠蔽は意味を成すまい』

『初期型とはいえパワーダスーツを装着した高位ホムンクルスを撃破しているからな、戦闘能力も侮るべきではなからう』

『「アニワザム」とのラインは感知されたが、こちらとの《ハイパーデータリンク》はどうだ？』



『計算によると、存在する事自体は感知されただろうがこちらの位置までは分からない筈だ』

『元より多少の情報露出は想定内であり、時期が来るまで劣化〃化身〃にこの場所が探知されなければいい』

その絶対的な演算能力と解析能力で、あの場所に居た〈マスター〉の能力を始めとする様々な情報を次々と明らかにして、更に思考を推し進めて行く。

『二体の〈UBM〉の早期討伐については、事前に襲撃を行った所為で防衛体制が整っていた事も原因では？』

『それもあるだろうが……やはり、〈UBM〉は戦力として安定しない事の方が問題だろう。【ギガキマイラ】に関しては理性がない所為で力押ししか出来ず、スペック以下の性能しか発揮出来ていなかったからな』

『【アニワザム】も【寄生型ナノマシン】だけでは制御出来ず、適時精神干渉魔法を使わなければ支配下に置けない所為で外部派遣にはホムンクルスを同行させざるを得なかったからな。……正直、〈UBM〉の精神支配はリソースを食うから効率が悪い』

『伝説級〈UBM〉一体を精神支配するよりも、初めからこちらに従う様に調整された高位純竜級モンスターを十体程作って運用した方がコスト・戦力共に上回るだろう』

『そもそも、私達にとって〈UBM〉と言うのは〃技術蓄積の為の試作機〃でしか無いのだからな。以前の【マグネトローベ】も騎乗運用前提のモノを無理矢理改造した所為で機体バランスが悪化し、内包リソースでは古代伝説級を目指せたのに結局は伝説級止まりだったからな』

『【アニワザム】を討伐前提で送り出したのも、目的以外にこれ以上の維持はコストとメリットの釣り合いが取れない為でもあったからだし、むしろ隠密行動用のホムンクルスがやられた方が損失としては大きいだろう』

『【エターナ・レイ】の様にこちらと利害が一致していて、かつ技術的な再現が難しい〈UBM〉など殆どいないだろうからな』

彼等はそうやって何千・何万といった情報が《ハイパーデータリンク》を介して複製脳同士を駆け抜けさせて、そこから更なる思考を展開する事を延々と繰り返しているのだ。

……………そして、その思考は今回の事件の本題に移って行った。

『第二目標の方は失敗したが、幸い第一目標——外部リソースを吸収する能力を持った古代伝説級UBMのデータ収集自体は成功している』

『「ギガキマイラ」の《餓狼暴食》、「アニワザム」の《魔鉱之王》の戦闘時のデータは集積し終わっている』

『出来ればもう少し長く戦って貰ってデータを集めたかったところだが……………まあ、最終調整の為にデータは既に集まっていたし、今回のデータが無くては何とかなるが』

『今回の作戦の目的は実戦データを多く集める事で「計画」の精度を上げる事だからな。収集されたデータが多少なかろうと「計画」そのものには影響はない』

つまり彼等「アークブレイン」が今回の事件を起こしたのは、とある「計画」に必要なデータを集める事が最大の目的だったのである。

……………そして、その「計画」と言うのは……………

『とにかく今回の作戦で得たデータによって、漸く「計画」——我等「アークブレイン」のレベルを100以上にする計画の最終調整段階に入る事が出来る』

『それに必要な膨大なリソースをどうにかする為に、外部のリソースを自身の物にするへUBMのデータが必要だったのだから……………我等は人工物であり他のへUBMを打倒する機会も少ない所為で、自己進化には特殊な方法が必要だからな』

『その為の準備には長い時間が掛かったが、既に最終調整段階……………先の作戦で集まったデータがあれば、後数年で作業は終了するだろう』

そう、自身を「ヘイレギュラー」の領域にまで進化させる事である……………そして、その為の作業はほぼ終了しており、残すは最終調整のみという段階に入っているのだ。

『「こちらをモニターしているであろう進化の「化身」は今のところ行

動を起こして来ない』

『以前から偽装として、我々が只のシエルターを守る神話級〈UBM〉である』と思わせられる部分の情報に見抜かれる事を前提とした旧式の対「化身」用隠蔽結界を、この思考を含む「計画」を司る重要部分の情報には大幅に強化された隠蔽結界を張っている』

『これにより進化の「化身」は未だに「アークブレイン」が只の神話級〈UBM〉だと思っている筈だ』

『劣化「化身」達が現れる様になる前後からヤツ等の行動形式に変化がある様だから、それが原因かもしれないが』

『どちらにせよ、我等とこのシエルターの存在に気付かれた時点で進化を実行に移す必要があるだろう。現在の状態でも90%程度のスベックは出せる筈だ』

『なるべく完全な形で進化を行いたいがな。故に作業を急ぐとしよう。……………思考終了。それに基づく各種作業を続行せよ』

そうして、実時間では数十秒程度で「アークブレイン」達の思考は終了して、再び自身の戦力強化の為の各種作業に入ってしまった。

『全ては「化身」を打倒し、彼奴等がこの世界で成そうとしている悪事を打ち砕く為に』

……………彼等「アークブレイン」はこの遊戯の<sup>infinite</sup>世界を破壊する為に作られたのだから……………。

## アルター王国一周旅行・ようやく東へ リザルト

□地球 加藤蓮かとうれん

クリラ村で起きた【ギガキマイラ】【アニワザム】との戦いから現実の時間で二十四時間経つ頃、漸くデスペナが開けた俺は由美ちゃんと一緒にへInfinite Dendrogramへにログインしようとしていた。

ちなみに美希みきは必殺スキルのデメリットの所為で、1まだデスペナが開けていないので部屋のソファアの上で不貞腐れている。

「うだー！ デスペナ三日は思ったより長〜い！」

「おいたわしや、姉様……」

「仕方あるまい、そう言うデメリットだからな。だからあんまり喚くな、近所迷惑になるだろう

しかし、たった三日デンドロが出来なくなるだけでここまで騒ぐとは、俺達もすつかりヘビーゲーマーになったもんだなあ。

「ハア……。まあ、しょうがないから部屋に戻って宿題でもしてるよ。

………ああ、私の分のクエストの報酬も一緒に受け取っておいて良  
いよ」

「分かったのです、しっかりと貰って置くのです」

そう言って、美希は自分の部屋へと戻って行った………さて、  
じゃあこれからログインして諸々の報酬を貰いに行きましょうか。

「確か、クレームルにある騎士団の詰所に行けば良かったんだよね」

「はい、前回ログアウトする前にリリイさんからそう言われましたの  
です。………後、封竜王さんも報酬を用意しているとの事なので  
す」

何分、俺達は以前さつさとログアウト（デスペナ）してしまっただか  
らな、その後の顛末も気になるしログインしたら真っ先に向かう事に  
しようか。



□城塞都市クレールミル 【突撃騎兵】チャージャーライダー レント

そんな訳でクレールミルのセーブポイントからログインした俺達はそのまま騎士団の詰所へと向かい、そこに居たりリイさんとリリアーナさんに再開した。

そして、その一室であの事件の顛末を聞きつつクエスト達成、及びユニーク・ボス・モンスターへU B M討伐の報酬を受け取る事になった。

「はい、ではこちらが今回のクエストの報酬になります」

「ありがとうございます。……結構な大金ですね」

「クエストの報酬と【ギガキマイラ】【アニワザム】の懸賞金を含めた物ですからね」

ちなみに、古代伝説級二体を大した被害も無く討伐したという事で、リヒトさんが方々に掛け合ってクエストの報酬にはかなり色を付けてくれた様だ……。後、事件の時に居た他のメンバーへの報酬の受け渡しは既に終わっているとの事。

せっかくだし、そこまでしてくれたリヒトさんにも挨拶がしたかったのだが……。

「申し訳ありません。……今、リヒト団長は奥で眠ってるんです」  
「……………何かあったのです?」

まさか、また事件が起きたのか? ……と思ったが、二人の様子を見ると、どうやらそういう事では無いらしい。

「いえ、単なる過労です。……………リヒト団長はここ最近クリラ村の問題でまともに寝ていませんでしたから」

「五日程徹夜で働いたところで治療班からストップがかかりました」  
「それは……………お大事になのです」

詳しく話を聞くと、彼はクリラ村住民の避難に彼等のクレールミルの住居の確保などの指揮をほぼ休み無しで行っており、更に【ギガキマイラ】【アニワザム】の襲撃時には王都へと連絡しつつ、クレールミルで可能な限りの戦力を集めて援軍に行こうとしていたらしい。

幸い援軍を集めるまでに決着はついたらしいのだが、今度は事件の

各種事後処理や参加したへマスターへの報酬の用意などで働き詰めだった模様……………そりゃあ、ドクターストップも掛かるだろうな……………。

「……………それは働きすぎなのでは？」

「……………リヒト団長は指揮や事務仕事に関しても非常に優秀なので、こういう時だと仕事量が増えるんですよ」

「父う……………近衛騎士団長も『アイツは真面目に働き過ぎるのが唯一の欠点だからな』と言っていました……………」

「出来れば彼にも挨拶をしたかったが……………そう言う事情ならやめて置こうか」

……………そんな風に俺達が話していた時、突然部屋の扉がノックされた。

「済まない、封竜王だが。レント君達に報酬を渡しに来たんだが」

「は、はい！ 今開けます！」

そうして、リリアーナさんが開けた扉から人化した封竜王さんが部屋の中に入って来て、気さくな様子で俺達に挨拶をして来た。

「やあ、レント君とミュウちゃん。約束通り報酬を持って来たよ、はいこれ」

「あ、ありがとうございます……………」

そう言った封竜王さんは懐から一つのアイテムボックスを取り出して、そのままこちらに手渡して来た……………多分、この中身が報酬なんだろうが……………。

「中には一体何が入っているのです？」

「ああ、この中には私が陣地を作るのに使っていた【竜気結晶】が入っているよ。これでも魔力触媒としてはそれなりだから、結構いい値段で売れる筈だ」

そう言いながら、彼は見本として手元に拳大の水晶を取り出して見せた……………詳しく話を聞くと、これらは以前クリラ村の陣地を作る際に使っていた物で、事件の時に壊れたか中に込められていた魔力を抜き取った物を再利用した物だから遠慮無く受け取ってくれとの事。

……………魔力が込められている物は危険だから渡せないらしいが、

魔力が抜けた物はただのアイテムだから問題ないだろうと考えて報酬にしたらしい。

「流石に【アムニール】などと比べれば質は大分落ちるが、数百年陣地に使って来た物だし素材としても十分に性能がある筈だ。後、大きさは疎らで中には結構大きい物もあるから、取り出す時には広い場所にした方がいいかな」

「あ、はい、ありがとうございます……ヤベエ、鑑定出来ん」

これでも俺は【ジエム・マイスター魔石職人】の端くれなので、鉱石の鑑定に補正が入るスキルも持っているのだが……あの水晶、名前が【封竜王の竜気結晶】である事以外は殆ど分からないぞ……。

……ちよつと不安に思ったので、リレイさんにアレについてこつそり聞いてみる事にした。

「……あれ、古代伝説級へUBMが作ったアイテムだから、相当な代物じゃないかと思うんですがね……」

「……専門家に鑑定を以来たところ、騎士団に渡された分だけでも数億リルは超える価値があるみたいです……」

コレの管理には気を付けないとやばいかな……などと俺が考えていたら封竜王さんがこちらに向かつて頭を下げて来た。

「……改めて、私とクリラがやり残した事を解決してくれて本当にありがとう。お陰で漸く責務から解放されて自由になれたよ」

「こちらこそ、先日は色々助けて貰ってありがとうございます」

とりあえず、コレで今回のクエストは全てクリアって事になるかな……と、俺が感慨深い気持ちになっていたらミュウちゃんが封竜王さんに質問をしていた。

「そう言えば、封竜王さんはこれからどうするのです？ またクリラ村の人達と暮らすのですか？」

「いや、これから私は以前から知己のあった【雷竜王】殿の伝手を頼って〈天蓋山〉に住まわせて貰う事になっているよ。古代伝説級へUBMが特別な事情も無しに人里に居続けるのはあまり良くないからね。……それに五百年近く一つの場所に縛られて居たから違う場所にも行きたいし」

まあ、五百年も同じ場所に居て、そこから解放されたのならそんな  
るよな……………そう言えば、俺達も気が付いたら大分長くクレーム  
にしている事になってたし、そろそろ旅行を再開しようかな。

「それじゃあ報酬も渡し終わってたし、あまり街中に居続ける訳にも  
いかないから私はここで失礼しよう。……………何か困った事があつた  
ら言ってくれ、可能な限り力になるよ」

そう言つて、封竜王さんはこちらに手を振りながら部屋を出て行つ  
た……………でも、封竜王さんが住む事になったへ天蓋山へって侵入禁  
止の場所じゃ無かつたつけ？ 相談しに行くとか無理では？

◇

そうして、報酬を貰った俺達はリリイさんとリリアーナさんに別れ  
を告げて詰所から出た後、クレームルの外の人目がない場所にやつて  
来ていた……………先日の事件で手に入れた最後の報酬を確認する必  
要があるからな。

「そういう訳で《瞬間装着》つと……………ふむ、悪くないデザインだな」

『お兄さん、それは……………』

「灰色のコート……………もしかして【アニワザム】の特典武器ですか？」

その通り、このコートは先日倒した【魔鋹蚯蚓 アニワザム】の特  
典武器【魔鋹外套 アニワザム】である……………色は【アニワザム】の  
体表と同じ灰色で、形状は長袖のロングコートだ。

とりあえず、その辺の喫茶店にでも入つて肝心のステータスを確認  
してみる事にした。

【魔鋹外套 アニワザム】

エンシェントレジェンダリーアームズ  
〈古代伝説級武器〉

鋹石を食らい数多の魔法を用いる大蚯蚓の概念を具現化した至宝。  
持ち主の生命力・魔力を増大させると共に、鋹石を消費してエレメ  
ンタルを召喚する能力を持つ。

※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限無し

・装備補正



防御力+50

HP+「着用者の合計レベル」×10

MP+「着用者の合計レベル」×10

攻撃魔法耐性+（「着用者の合計レベル」÷10）%

・装備スキル

《鉱石保管》

《従精召喚》

《??》※未開放スキル

成る程、装備補正はHP・MP・魔法耐性の上昇で、スキルの方は未開放のモノが一つあるのか………まあ、それに関しては後々調べしていく事にして、まずは使えるスキルの方を調べて行くか

「まず《鉱石保管》の効果は『鉱物系アイテムを収納し、それらを自由に取り出す事が出来る』と言うモノの様だな」

「つまり、鉱物系アイテム限定のアイテムボックスみたいな物と言う事なのです？」

おそらくミュウちゃんの言った通りの物だろうな………試しに、持っていた【ジエム】作成用の魔石を手にとってみたら、そのまま収納する事が出来たし、それを手元に取り出す事も出来た。

また、加工済みの【ジエム】も収納出来るか試してみたところ、こちらも問題なく出し入れ出来る様だ。

「出し入れの速度も《即時放出》《即時収納》機能付きアイテムボックス並みだし、戦闘時に【ジエム】を多用する俺にとっては有り難いな」  
「ですが、古代伝説級特典武器としては地味な効果なのです」

まあ、出来る事は普通のアイテムボックスと変わらないし、鉱石しか収納出来ないからな………でもまあ、盗難耐性もあるみたいだし、超高級な鉱石を手に入れたばかりに俺にとっては丁度いいスキルでもあるか。

そういう訳で報酬の【封竜王の竜気結晶】を全部【アニワザム】の中に入れる事にしようか。ミュウちゃんも『正直、持っているのが怖いのです』と言って、これ幸いと【竜気結晶】を俺に預けて来たし。  
「……………よし、これで全部しまい終わったな。かなり大きい物も

有ったがこの《鉱石保管》は収納量も相当大きいらしい。……………  
じゃあ、もう一つの《従精召喚》の方を見て行きますか」

そうして、二つ目のスキル《従精召喚》の効果を見てみると……………  
どうやら収納してある鉱物系アイテムと自身のMPをコストにエレメンタル系モンスターを召喚する効果の様だな。

「詳しく言うと、召喚出来るエレメンタルのステータスはコストにした鉱物系アイテムで決まり、更に同じアイテムを複数コストにしてステータスを上昇させる事も出来る。後、召喚時間は支払ったMP数値×1秒間でクールタイムは10秒間という感じだな」

「ふむん、召喚したエレメンタルのステータス次第ですが、大量に召喚出来るクールタイムも短い様なので強力なスキルになりますかね」

『お財布には優しく無さそうなスキルだけどね』

まあ、この《従精召喚》は「召喚師<sup>サモナー</sup>」の《召喚契約》の様な触媒によってバックアップが取れるタイプ召喚スキルと違って、その場で使い捨てのモンスターを呼び出すインスタントの召喚スキルの様だしな……………その分、コストが嵩むんだろう。

また、召喚するモンスターのステータスは事前に見る事が出来る様なので、試しに「ジエムー《ヒート・ジャベリン》」を対象にして召喚エレメンタルのステータスを見てみる事にした。

「ふむふむ、名前は【フレイム・エレメンタル】で、ステータスはSTR・END・AGIが平均100ぐらい、MPが5000、HPが500ぐらい……………エレメンタルだからか魔法型のステータスמידだな。後、スキルの方は《ヒート・ジャベリン》を始めとするいくつかの火属性魔法が使えて、更に《火属性適正》と《火属性耐性》があるな」

『ポピュラーな魔法系エレメンタルって感じだね』

ふむ、コストにしたアイテムの性能の割には強力なエレメンタルが召喚出来ているのかね……………インスタント召喚のスキルは他に無いから基準が分からないな。

……………そう思っていたら、効果欄に気になる基準を見つけた。

「……………いや、どうやら召喚出来るエレメンタルの種類はいくつか

選べる仕様らしい」

「種類を変えられるとかですか？」

「いや、召喚する前に『魔法型』『近接型』『耐久型』『自爆型』のどれかを選択出来て、それによってステータスの配分や所有するスキルが違いうらしい」

例えば『魔法型』の時には魔法系のMP特化型であるが、これを『近接型』にした場合はMPが減るかわりにHP・STR・AGIが上がってスキル構成も近接型になるという感じだな。

他には『耐久型』ならMPが下がってHPとENDが上がりスキルも防御以上に、『自爆型』ならならMP・AGI特化になってスキルが自爆系のモノのみになる様だ。

「正直スキル欄だけみてもよく分からないし、これは実際に試して検証した方がいいかな………コストにする鉱物系アイテムの種類と召喚型の組み合わせが重要そうだし」

「それじゃあ、早速その辺で狩りでもしますか？ 私もレベル上げとラーニングしたスキルの修行がしたいですし」

俺が自分の考えを口にする、ミュウちゃんがそんなヤル気満々の言葉を返してきた………俺としてもこの手の組み合わせを試行錯誤するのは大好きなので、喜んでその提案に乗る事にした。

………そうして、俺達は検証と訓練の為に周囲のモンスターを口グイン中狩り続けていったのだった。



□地球 加藤蓮

「………ふーん、報酬はそんな感じかく。ああ、私の分の【竜気結晶】もお兄ちゃんの預かりで良いよ。盗まれるの怖いし、私じゃ使い道もなさそうだし」

「俺もコレといった使い道は思い付かないんだがな………コストにするのも使い捨ての【ジェム】に加工するのも、正直希少過ぎて躊躇いを感じる上、俺じゃあ加工出来るかどうかも怪しいぞ」

「やはり、専門家であるへプロデューズ・ビルド」の皆様にアイテムとしての加工はお任せした方が良いでしょう」

あれから一通りの検証を終えた俺達は、美希への報告の為そのままログアウトしていた………ちなみに検証結果は中々良い感じだったとだけ言っておこう。

更に、俺達はソファアに座りながら今後のデンドロ内における予定を話し合っ行って行った。

「それじゃあ、私のデスクペナが終わると共に旅行を再開して、今度こそ東に進むって事でいいかな」

「まあ、それで良いんじゃないか。準備は俺達が明日明後日の内にやっておくさ」

「何かトラブルでも起きない限りはその予定で良いのでは？」

「そこまでは知らない。私の管轄外だよ」

美希曰く『トラブルが起きたら自動で解っちゃうんだからしようがないでしょう』との事………まあ、見過ごすのも後味が悪いからな。

………そうやって話をして行く内に日が沈み、夕飯の時間になっていた。

「確か今日は叔父さんと叔母さんは仕事で遅くなるし、夕飯は買っておいたから作って食べておいてくれて話だったな」

「レトルトカレーと惣菜を買ってあると言っていた筈なのです」

「じゃあお兄ちゃん宜しくね！」

「ご飯は炊いてあるし、カレー温めて惣菜を盛り付けるだけなんだからお前でも出来るだろ。いいから手伝えや」

そうして、俺はソファアで寝転がっている美希を引っ張って連れ出しながら、自主的に手伝おうとしてくれる由美ちゃんと一緒にキッチンへと向かって行ったのだった。

### 三兄妹のまつたり駄乗り旅

□アルター王国北部 【戦棍姫】 ミカ

長かった私のデスペナが明けた後、私達は予定通り直ぐに馬車に乗りクレールミルを出て東へと足を進める事にした……………幸いにも【マグネトローベ】の修復は間に合ったので、今は快適な旅が出来ている。まあ、私達なら極論馬車とか引かずに走ったりした方が早く移動出来るんだけど、画面の中のキャラを動かすゲームならともかくVRで街から街への全力ダッシュとかしたら疲れるし、何よりゆっくり旅行を楽しめなくなるからね。

……………そんな事を考えつつ、私は馬車の荷台の上に座りながら自身に装着された全身鎧を色々と変形させて遊んでいた。

『ふむむく？ これは結構応用が効くかな』

「……………姉様、その鎧の形状が凄い事になっているのですが……………」  
『凄く禍々しいデザインだね』

そこに同乗していたミュウちゃんとかフェイちゃんからそんなツツコミが入った……………今、この鎧の形状は全身からギザギザの棘を生やしたフルフェイスの全身鎧の上に色を黒く変えてあるので、側から見ているとどう考えても悪役が着ている鎧に見えるかな。

まあ、形状変形は一通り試し終わったしとりあえず元に戻そうか……………えいと。

「あ、戻ったのです」

『ふむふむ、デフォルトに戻す分には早く簡単に出来るみたいだね……………この【ギガキマイラ】は』

元に戻したその鎧の外見は、狼っぽい形状の青いフルフェイスの兜を被り、胴体部分には竜を模した意匠が凝らされていて、更に手足などの至る所にまるで別の装備を継ぎ接ぎした様な様々な形状のパーツが取り付けられているという変わったモノだった。

そう、これこそが先日の事件で私が手に入れた全身鎧型の古代伝説級特典武器【十装混鎧 ギガキマイラ】である……………それで基本ステータスはこんな感じ。

【十装混鎧 ギガキマイラ】  
エンシエントレジェンドダリーアームズ  
〈古代伝説級特典武器〉

十体の力ある獣が融合した狂気の合成獣の概念を具現化した至宝。  
極めて高い強度を持つと共に、他の装備品を融合させてその能力を  
取り込む事が出来る。

※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限無し

・装備補正

無し

・装備スキル

《キマイラ・アーマー》

《シエイプ・チェンジ》

《エクストラ・アビリティ》

ちなみに【ギガキマイラ】の装備に必要な枠は頭部・上半身・外套・  
両手・下半身・両足の六つであり、元のデザインは頭部が狼の意匠が  
あるだけのシンプルな青い全身鎧だったんだよね。

『……………最初は装備枠が【ドラグテイル】と被っていたからどうしよ  
うかと思ったけど、そこは特典武器だけあってちゃんと私にアジャス  
トされていたから良かったな』

「確か、他の装備品を取り込んで強化されるのでしたか」

そうなんだよ。この【ギガキマイラ】の第一スキル《キマイラ・ア  
ーマー》の効果は、説明文にあった通り他の装備品と融合することによ  
ってそれらの装備補正・装備スキル・強度を自身に加算するというモ  
ノだったのさ。

そして、このスキルで取り込める装備品の数は全部で十個……………  
しかも装備枠を複数使う装備でも一個分として計算されるので、二枠  
分使う【ドラグテイル】を取り込む時も一つの枠で済むんだよね。

『実質、装備枠が大幅に増える事になるからかなり強い特典武器だよ。  
取り敢えず、今まで付けていた装備品を全部突っ込むだけでも大分強  
化されたし』

『だから、そんなチグハグなデザインになったんだよね』

まあ、装備を取り込むには五分ぐらい時間が掛かるから戦闘中の切

り替えとかは出来ないし、一度取り込んだ装備を取り出すにはデンドロ口内で一週間以上経っている必要があるといったデメリットもあるが、それでも十分過ぎる程に強力にスキルだね。

……………後、融合させると装備に合わせて鎧の一部が変形する特性もあって、【ドラグテイル】の時には胴体部に竜の頭部を模した意匠が付いたりもした。

『まあ、デザイン自体は《シェイプ・チェンジ》を使えば変えられるんだけど……………やっぱり、フルフェイスの兜があると喋りにくいね。仕舞っておこう』

「あ、マスクオフも出来るんですね」

そう言って、私は頭部の狼型フルフェイスメットを胴体部の鎧に収納する様に変形させた……………この、さつきからやってる【ギガキマイラ】自体を変形させているのが第二のスキル《シェイプ・チェンジ》の効果である。

先程から色々試してみた結果、このスキルは無消費で使う事が出来て基本的にマニュアル操作で好きな形に変えられるが、その際には正確にイメージしなければならぬので時間が少し掛かってしまう。

……………ただし、元の形状や取り込んだ装備に由来する形、後は鎧の一部を収納又は展開する形でなら超高速で変形可能になっている様であり、どうも細かいところで色々な制限がある様にも感じる。

「例えば【ドラグテイル】の《竜尾剣》を背中に生やすのは一瞬で出来たけど、それ以外の部分に生やすのは時間が少し掛かっている上、一本以上《竜尾剣》を生やす事は出来なかったからね」

「融合させた装備以上の性能には変形出来ない感じですかね」  
『無消費のスキルでそこまで出来るのは強すぎるからかな』

まあ多分、二人の言う様な制限があるんだろう……………これに関しては今後も装備の融合と一緒に色々試して行くしか無いかな。

……………そして、最後のスキル《エクストラ・アビリティ》の効果だが……………

「他の特典武器を融合させた時、それに基づく装備スキルを追加で一つ発現させる……………多分、私が複数の特典武器を持っている事にア

「ジャストされたスキルみたいだね」

「実質的に他の特典武器のスキルを一つ増やせるのですから、凄く強いスキルですよ」

ちなみに「ドラグテイル」を融合させた時に発現したのは《竜気鎧装》——MPを消費して鎧の表面に全ての攻撃を減衰させる《竜王気》を展開するスキルである……このスキルは消費MPが非常に少ない代わりに持続時間が最大1分間、クールタイムが十分掛かる仕様になっているので緊急的な防御手段として使えそうかな。

そして、「ブラックオーツ」を融合させた時に発現したのは《黒刃》——SPを消費して鎧から非生物を透過する黒色のブレードを展開するスキルだった……さつき全身から生やしていたのがコレで、展開出来る数には制限が無く長さや形状もある程度自由に操作出来て、更に《闇纏》を使っている状態でも攻撃判定が出る仕様だ。

この二つのスキルから考えると、発現するスキルは特典武器の元になった<sup>ユニーク・ボス・モンスター</sup>U B Mの能力を私にジャストされたモノになる感じかな。

「総合して、色々と応用が効きそうな特典武器だけど、使いこなすには要練習ってところかな？ 融合させる装備もきちんと思えないといけないし」

「まあ、力をポンと渡されたとしても、それを使いこなせる様になるには練習が必要ですからね……む？ 《第六圏》」

そうやって話している途中、ミュウちゃんが突然雰囲気鋭いものに変ながら目を瞑り周囲を索敵し始めた……直後、私の《殺気感知》にも反応があり、同じく感知したであろうお兄ちゃんも馬車を止めた。

……その直ぐ後にミュウちゃんの目が開かれた。

「兄様、九時の方向、上空に九体」

「《遠視》……二人共、こっちに来ているのは「レッサーワイバーン」の群れみたいだ」

「あらら……ていうか、さつきからドラゴン系のモンスターが良く襲って来るよね」



そう、この辺りに通りかかってからしよつちゅうドラゴンが襲い掛かって来るんだよね……………まあ、強さは最大でも亜竜ぐらいだし、知性も無い様な連中だから全部返り討ちに行っているけど。

「この辺りは天竜種の住処であるへ天蓋山へが近いからな。多分その所為だろう」

「そこからドラゴンが出てきてるって事？」

「へ天蓋山へと言えば、アルター王国の北部にある複数の「竜王」を始めとする強力なドラゴン達が住む秘境でしたね。……………その割には襲って来るドラゴンは知性も無く弱いですが」

そうなんだよねー。さつきから襲い掛かって来るドラゴン達は、どいつもこいつも彼我の実力差も理解出来ないレベルの連中ばかりだしね。

……………そう私達が駄弁っている間にも、彼我の実力差も理解出来ないレベルな「レッサーワイバーン」達はこちらに向かって来てるし。

『『『GYAAAAA!!』』』』

「ジェムーへファイアーボール」をコストにした自爆型を《多重同時召喚》で九体分、三十秒間《従精召喚》……………行け」

『『『!!!』』』』

そんな連中に対し、お兄ちゃんは自爆特化の「フレイム・エレメンタル」を九体召喚して睨けた……………それらのエレメンタル達はお兄ちゃんの新ジョブ【高位召喚師<sup>ハイ・サモナー</sup>】のスキルによる強化もあって、かなりのAGIでワイバーン達に突っ込んで爆発した。

まあ、所詮は下位亜竜である「ワイバーン」の更に劣化版でしかない連中が、低位とはいえエレメンタルの自爆に耐えられる筈もなくそのまま光の塵となった。

「ふむ、やはり自爆型は攻撃魔法の代用としてなら使いやすいな。内包された魔法と使われている魔石で召喚獣のステータスが決まる以上、召喚モンスター強化のスキルを乗せれば、ただ【ジェム】を使うよりも遥かに威力・速度が上がる。また、誘導性も付くから当てやすい」

「でも、あの程度の相手に使うにはコスパが最悪じゃない？」

「今回はスキルの試運転と未開放の第三スキルの解放条件を探る意味があるから別にいいんだよ」

そんな風に喋りながら、私達は出てきたドロップアイテムを回収して行く……………正直、戦闘よりもこの作業の方が面倒くさいね。シユウさんが使っていたドロップアイテム自動回収カンガルーが欲しいよ。

……………そうして一通りの作業を終えてから、お兄ちゃんが再び馬車を走らせた。

「さて、さっきの話の続きだが……………そもそも、強くて知性の高いドラゴンなら〈天蓋山〉から外には出ないだろうからな。あそこは地竜種と怪鳥種が住むという〈厳冬山脈〉と違って食料とかも十分にある様だし」

「つまり、弱くて知性が無いから外に出てしまうと言う事ですか？」

「後は、そうやって外に出たドラゴンが繁殖するから、この辺りにはドラゴン型モンスターの生息数が多くなっている事も理由にあるだろうがな」

「要するに、近くに〈天蓋山〉があるからこの辺りはそこそこの強さのドラゴン型モンスターの生息地になっていて事だね！」

まあ、私達にとっては純竜以上のドラゴンでも出てこない限りは問題にならないから、このまま旅行を続ける感じになるんだけど……………と言うか、先日からずっとこんな風にモンスターを蹴散らしながら馬車を走らせて続けているんだよね。

途中で街や村とかも殆ど無いから休む事も出来ず、モンスターが居なさそうな所でのログアウトを駆使する事でどうにか進んでいる感じである。

「じゃあ、王国の北部に街が少ないのも多くのドラゴンが住んでいるからなのかな？」

「それは、どちらかと言うと〈天蓋山〉が近くにある事が原因だと思うがな。……………昔、〈厳冬山脈〉に攻め込んだ大国が逆侵攻して来たドラゴン型に滅ぼされたと言う話もあるみたいだし、そんな恐れのある場所の近くに住みたいと思う人は少数派だろう」

「でも、これから向かうカルチエラタン領は〈天蓋山〉の近くに有りますよね？」

言い忘れていたけど、私達はアルター王国とドライブ皇国の国境にあるカルチエラタン領を最終目的地にして旅をしているのだ………まあ、前述の理由でなかなか途中の街で休んだりが出来ないのが困りものだけだ。

「そりゃあ、国境に街を作らない訳にも行かないだろう、国防的な意味で………それに〈天蓋山〉に住むドラゴン達は領域を侵さない限りは地上に降りる事は少ないし、山の両端には神話級の【竜王】が門番をやっているらしいからドラゴンが外に出る事は殆ど無いらしいし」

「でも、この辺りにはドラゴンが出るけど」

「それは、単純に山の横合いは面積が広くてカバーしきれないか、取るに足らない連中は止めるまでも無いと判断しているのか。………まあ、俺は〈天蓋山〉内部の事情なんて知らないから、ここまでの話は又聞きの上に推測を重ねたもので確証とかはさっぱりだが」

一通り話終わった後、お兄ちゃんは首をすくめつつそう締め括った………そもそも、別に私達は長く馬車を走らせている間は暇だから駄弁っているだけで、真面目に考察とかしている訳でも無いし。

「空を飛んで行けば早いんだけど、私達の空中移動には少し制限があるしね」

『それに、ここで空を飛ぶともれなくワイバーンが付いて来るからね。さつきも空を飛んでいる最中に襲われて余計に時間を食ったし』

「【バルーンゴーレム】のクールタイムもまだ終わって無いしな、暫くの間は地上移動だ」

やっぱり、私達の空中移動には【マグネットローベ】に二人しか乗れない事がネックだよな………全員で移動するにはお兄ちゃんが《空中浮遊》持ちの【バルーンゴーレム】を召喚する必要があるんだけど、お兄ちゃんの消費MPや召喚時間とクールタイムの関係で長時間の移動はやや厳しい。

「どこかに宙に浮く馬車とか売ってないのかなー」

「王国内でそんなのが売っている所は見ただ事無いな」

「レジェンダリアとかで売ってそうですねソレ」

じゃあ、アルター王国一周旅行が終わったらレジェンダリアにでも行ってみようかな？ 確か、仲直りしたミュウちゃんの友達が所属していたし、コツチデントロで会いに行くのもいいかもね。

……………と、言う話をしてみたらミュウちゃんが凄く嬉しそうに賛成したので、私達の始めての国外旅行の行き先はレジェンダリアに決定したのだった。

「まあ、国外旅行に関してはこの旅行が終わってひと段落してからで良いだろう。……………それよりも、話の途中で悪いがまた【ワイバーン】だ」

「またあ？ なんか本当に多くない？」

「今度はレッサーが付かない普通の【ワイバーン】の様ですが……………姉様、何か事件の気配とか感じませんか？」

そう言われてもねえ、今のところは危険とかは感じないけど、何分「遠い勘」の方はムラが多いからあんまりアテにしたくないんだけど……………何より、私は自分の直感をあまり信じたくないから。

「特に何も感じないよ。……………単に運が悪いだけじゃない？」

「ありがとうなのです姉様。……………最近トラブルが多かったから、どうも深読みしてしまうのです」

「まあ、俺達の特性上しようがないさ。……………それよりも、さっきの連中よりは強いだろうし数も多いから、お前達にも戦ってもらおうぞ」……………まあ、【ギガキマイラ】の実験試験には丁度いい相手が来た

ら【ギガス】を取り出して戦闘態勢へと移った。

そして、お兄ちゃんも【マグネトローベ】を馬車から外して空に上がり、ミュウちゃんはフェイちゃんを馬車の護衛に残して私と一緒に前に出た。これが私達の旅行中における基本的なフォーメーションである。

「さて、じゃあ戦おうか」

『オツケー』

「はいなのです」

『『『GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』』』』

そんな感じで襲い掛かって来るモンスター（九割がワイバーン系）を蹴散らしながら、私達は目的地であるカルチエラタン領までのんびりと旅をして行くのだった。

## 到着・カルチエラタン

□アルター王国北東部 【高位召喚師<sup>ハイ・サモナー</sup>】 レント

あれから、俺達が空を走ったり地上を走ったりまた空を走ったりしながら、何故か途中で襲い掛かって来るワイバーン達を蹴散らしつつ東への旅を続けた。そして朝方頃に、漸く目的地であるカルチエラタン領の近くにある山岳地帯まで来る事が出来たのだった。

……………クレールミルからカルチエラタンまではそれなりに距離があつたのだが、思ったよりもかなり早く着いたな。やはり空を飛ぶ手段があると街々の移動はかなり楽になるな。

「古来からRPGの道中で街から街への移動手段として、飛行や転移の手段が追加される理由がよくわかる。コレがあるのと無いのでは移動の効率が桁違いだ」

「初めての道中では景色や新しいモンスターとかで感動出来ても、何度も通っていると飽きが来るからね。プレイ時間だつて限られているし、二度目以降は『ルーラ』か『そらをとぶ』でいいよねつてなる」  
「ですが、デンドロには街々への転移手段なんて無いですからね。飛行が最も効率的に移動手段になるでしょう」

『空間転移という現象自体殆ど聞かないからね。レジエンダリアの〈アクシデントサークル〉ぐらいかな?』

……………と言うか【マグネトローブ】が優秀過ぎるんだよな。やや燃費が悪いとは言え空中を長距離移動可能、戦闘を考えなければ三人程度なら輸送可能な馬力、更に空中戦闘においても小回りが利く上、最近では自立機動にも磨きが掛かって来ているからある程度判断を任せて俺自身は戦闘に集中出来る様になったしな。

「……………おっと、どうやらバルンガのクールタイムが終わった様だ。もう一度飛ぶから準備するぞ」

「待っていたよ! コレでカルチエラタンに付けるかな?」

「まあ、十分届くのでは? ……………途中でワイバーンでも出てこない限り」

まあ、空中移動における最大の問題がそこなんだよな……………この

世界の空は基本的に飛行可能なモンスター達の領域だからな。人間は空では物凄く弱いし。

ミカとミュウちゃんが空戦が苦手な為、俺達でも空中戦闘ではワイバーン相手ですら結構苦戦してしまう。

「私も一応《空歩》などのスキルである程度の空中を移動出来ますが……正直、空戦が出来ると言う領域では無いので、どうしても兄様の足を引っ張りがちなのです」

『お兄さんみたいに常に飛べる訳じゃ無いから、定期的に空に居る「マグネトローベ」やバルンガに着地する必要があり、その所為でその機動の邪魔になってるからね』

「私も【ギガキマイラ】に《空中跳躍》スキル持ちの装備を融合させたりしてるけど、やっぱり空戦は厳しいよ。……あー、何処かに飛行するへU B Mとかいらないかな？ ぶっ倒して特典武具をいただくのに」

………<sup>天災児</sup>この二人でさえ空中では「ワイバーン」にすら苦戦するくらい、〃空中を移動出来る〃事と〃空中で戦える〃事には違いがあるからな。

だから、飛行中には常に周囲を警戒して飛行型モンスターを感知した場合には高度を落としたり、或いは地上に逃げる必要も出て来るのだ………そんな事を話しながらも、俺達は空中移動の準備を終わらせた。

「まあ、それでも地形を無視出来るから地上をよりも遥かに早く楽に移動出来るんだよね。……一度楽を味わえば、人間戻って来れないものだからね」

「モンスターと遭遇するのは地上と変わりませんし」

「俺はゲームで移動手段を短縮する方法がある場合、ガンガン使って行くタイプだからな。と言うわけで行くぞー」

そうして、俺は「マグネトローベ」に騎乗してミカがその後ろ、ミュウちゃんとフェイが紐で繋がれたバルンガの上に乗って空へと舞い上がり、そのままカルチェラタン領がある方角へ飛んで行ったのだ。た。



そうやって空を走って行く事暫く、時間としてはお昼を少し過ぎた頃、俺達は漸く遠目に民家が見える所まで来る事が出来た。

「やっと人間が住んでいる様な場所についたね。あれがカルチエラタン領かな？」

「地図を見るとその様だな。………じゃあ、降りるぞ」

そうして、俺達は地上に降りてバルンガと「マグネトローベ」をしまいカルチエラタン領に入ってしまったのだ………次の街に来たにも関わらず、今回は俺達にしては珍しく特に何も無かったな。

………何時もは、街周辺で起きそうな何かの事件に首を突っ込むか何かするんだが。

「………ミカ、本当に何も無いんだな」

「もう！ だから何も感じないって言ってるでしょ、お兄ちゃん！ いくら何でも次の街に行く度に事件が起こる筈もないじゃない！」

「兄様、少々無神経ですよ」

今回はあまりに普通にカルチエラタン領に入れたから、ついミカに確認したらそう言われてしまった………事件の感知はミカにとつてあまり良いものではないのだし、確かに少し無神経だったな。ここは素直に謝っておこう。

「あー、悪かったなミカ。………後で何か奢るから許してくれ」

「まあ、別に良いけどさ。………今回は私の直感には何も反応が無いし、普通にゆつくりと観光が出来ると思うよ」

「とりあえず、長旅でお腹が空いたのであそこのレストランで食事にしましょう………もちろん兄様の奢りで」

『結構高級そうなレストランだね』

………と、言うわけで、俺達は近くにあったレストランで遅めの昼食を取る事になった。そこはフェイの言う通り結構高級なレストランで、妹二人も俺の奢りだからと遠慮なく高いメニューを頼んだので、結構な出費になってしまった。



まあ、先日の報酬や【ジエム・マイスター魔石職人】としてそれなりの稼ぎがある俺にとつてはそこまで問題のある額では無かったが。

「うん、中々美味しいね、このミートスパゲッティっぽいヤツ。お兄ちゃん、そっちの親子丼はどう？」

「コツチも美味しいな。……………ミユウちゃんが頼んだのはハンバーグ定食か」

「はい。……………しかし、ここのメニューや内装を見ると現実にあるファミリーストランを思い出しますね」

確かに、メニューの内容が和洋問わずだったり、店の一角にドリックバーがあったり、定員さんの呼び出しボタンがあったりする所とかはソレっぽいな。

……………後で知った話だが、ここの店はへマスターから伝え聞いた日本のファミリーストランの情報を元に改装したらしい。

「しかし、少し見た限りだとこのカルチェラタン領は長閑な所みたいだね。ここなら特にトラブルも無くのんびり出来そうだよ」

「ワイバーンの問題があるかとも思いましたが、大量発生している場所がここから離れていたお陰で大丈夫そうですね」

『あのワイバーン達、自分の縄張りに入ってきた相手には積極的に襲い掛かって来るけど、外に出た相手を追ったりはして来なかったからね』

「あの様子なら人里に被害が出る様な事も無いだろう」

自分達のテリトリーに入ったら嫌になる程襲い掛かって来たのに、一旦テリトリーの外に出たらさっぱり追って来なかったからな。アイツら一体なんだっただろうか。

……………と、そんな感じで俺達は食事を続けながら、今後の予定を話し合っ行って行った。

「それで？ これからどうしようか？」

「うーん……………とりあえず、観光しながら冒険者ギルドに行つて適当な依頼を受けてみるのは？」

「実にいつも通りだな。……………まあ、街に来たらとりあえず観光しつつ、クエスト資金稼ぎをするのが俺達の基本だしな」

それに冒険者ギルドを始めとする各種ギルドには色々情報が集まっており、きちんと依頼をこなして信用を得れば街の外から来た旅行者にもそれらの情報を教えてくれるからな。

とりあえず、その街のギルドでクエストをこなした方がその街では資金的にも信用的にも色々やり易くなるのだ。今までこの世界で旅行していった時に学んだ知恵である。

「それじゃあ、食事が終わったら早速冒険者ギルドにでも行くとするか」

「『はい』」



□カルチエラタン領・冒険者ギルド

マーシャルアーツ・プリンセス  
【武 闘 姫】ミユウ

食事を終えた私達はその足で冒険者ギルドへと向かい、そこでクエストのカタログなどを読み漁って色々調べていたのですが……。

「ふーむー……私達が受けやすそうな、高い戦闘能力を必要とされる討伐系のクエストは少ないみたいだねー。この領は実に平和だよ」

「まあ、平和なのはいい事だがな。まあ、別に討伐系の依頼に限る事は無いだろう。……配達系のクエストもあるし、俺ならちやつちやと行ってちやつちやと帰って来れる」

「でも、それは兄様一人でやった方が効率が良いですよ。私と姉様は暇になるのです」

「ご覧の様に中々決まりません……何だかんだ言って私達は戦闘特化なのでその手の依頼しか受けられませんし、私と姉様と言う<sup>スベリオルジョブ</sup>超級職を二人も要する所為か低レベルの討伐系のクエストを受ける<sup>スベリオルジョブ</sup>とあまりいい顔をされないのですよね。

以前聞いた話ですが、討伐系クエストはレベル上げの要素もあるの<sup>スベリオルジョブ</sup>で高レベルの人が低ランクの依頼を総ナメにするとかは、低レベルの人の成長の機会を奪うからあまり頻繁にやっつてはいけないと言う不文律がある様なのです。

「ああ、高い戦闘能力が必要そうなクエストもあつたな……………この領の近郊に大量発生したワイバーンの調査依頼と言うんだが」

「暫くワイバーンは見たくないから却下。……………あ、ユニーク・ボス・モンスターへU B M」

の情報もあるね。何々『風精鉱山』に新種のへU B M『魔鉱風精シルフィーザム』が出現。情報求む』ねえ」

「えーっと、ふむふむ『風精鉱山』は『魔鉱蚯蚓 アニワザム』が縄張りにした所為でへ自然ダンジョン』と化した鉱山であり……………また、最近聞いた様な名前が出てきましたね」

『改めて見てみるとへU B M』の名前とかも似ているね。何か関係があるのかな?』

どうやら、兄様と姉様も自分達が倒したへU B M』と関係がある件だから気になってる様なので、一旦ギルドの受付嬢さんにこの件の詳しい話を聞いてみる事にしました。

「済みませーん、この『シルフィーザム』とへ風精鉱山』について詳しく聞きたいんですけど」

「へマスター』の方ですね、分かりました。……………このへ風精鉱山』はカルチエラタン領近郊にある風属性エレメンタルが出現するへ自然ダンジョン』で、いくつかの風属性の鉱石が取れる場所だったので、最近になってへU B M』『魔鉱風精シルフィーザム』が出現しまして」

その受付嬢さん曰く、そのへ風精鉱山』は『アニワザム』が縄張りにしたへ自然ダンジョン』であり、そこに住むエレメンタル達は決して外には出なかつたので、偶に風属性の鉱石が必要な人間が少し潜る程度の重要度の低い場所だったそうです。

また、へマスター』が増え始めてからも『ダンジョン』という事で腕試しや冒険の為に入る人も偶に出る程度で、それによって風属性の鉱石が少し多く市場に出回ったりするぐらいの、言ってしまうえば放置して置いた方が良いダンジョンだった様です。

……………しかし、最近『アニワザム』が討伐された直後にへ風精鉱山』内で『魔鉱風精シルフィーザム』が目撃され、領の近郊にへU B M』が現れた事とそれによってへ風精鉱山』内のエレメンタルが外に出て来る可能性があると考えられ、調査の必要があるところの様なク

エストが出されたそうなのです。

「ですが、クエストを受注して『シルフィーザム』の調査・討伐に向かったへマスター達はほぼ全員倒されていまして……………今のところ分かってるのは『シルフィーザム』がへ風精鉱山から出てこないらしいという事ぐらいなんです……………」

「成る程ね……………【アニワザム】が討伐されたから、その制御下を外れたエレメンタルがへUBM化したのか?」

「さあ?へUBM発生のプロセスなんて知らないし……………でも、私の直感だとその『シルフィーザム』は特に事件とか起こす感じじゃないみたいだけど」

受付嬢さんの話と姉様の直感を総合すると、その『シルフィーザム』はへUBM化してもこれまでと同じ様に自分の陣地を守り続けている様ですね……………特典武器目当てでこれまで多数のへマスターが討伐に向かっている様ですが、ダンジョンから出て来る事は無かったですし。

……………そこまで話を聞いた所で、兄様が確認を取って来ました。

「それで、この『シルフィーザム』調査のクエストはどうする?」

「うーん……………今行動しても特に意味は無い気がするし、へUBMとは先日散々戦ったから保留でいいんじゃない?」

「せっかく新たな街に来たのですし、まずはのんびりと行きましょう」『特典武器は沢山持つてるからね。あんまりがつつく必要は無いんじゃない?』

そう言うわけで、このクエストはとりあえず今の所は保留という事になったのです……………後、姉様曰く『勘だけど『シルフィーザム』は私達でも勝てるか怪しい気がする。特典武器は欲しいんだけどね』との事なので、暫くは様子見した方が賢明みたいです。

……………さて、いい加減受けるクエストを決めましょうかね。

「しかし、俺達が受けるのに丁度いいクエストが見つからんな」

「ふむ……………もう『丁度いい』とか『効率』とか考えるから見つからないんだよ! そう言ったのを無視して面白そうなクエストを選ぼう、街中のゴミ拾いとか!」

「姉様がそれでいいなら構いませんが………あ、後ろから二人程来たのです。此処にいますと邪魔になりそうなので離れましょう」

「どうも、クエストを見つけるのに躍起になっていた所為で受付に長時間止まりすぎていた様なのです………まだクエストが決まらない以上、後ろから来たモヒカンとロン毛の男性二人に先を譲った方がいいでしょう。」

「邪魔をしまい申し訳ないのです。私達はまだ受けるクエストが決まらないのでお先にどうぞ」

「ああ、悪いな嬢ちゃん。それとツレの………ゲエツ?!」  
「フアツ!」

そんな風に声を掛けて道を譲ったら、二人の内のモヒカンの方が見た目にそぐわぬ丁寧な対応をしてくれた………と思ったら、いきなり規制を上げて後ろに飛び退いたのです。

「………どうやら兄様と姉様を見てその様な反応になった様ですが………」

「兄様姉様、あの人達とは知り合いですか?」

「えーっと………誰だっけ?」

「ふむ………ああ。まだデンドロを始めたばかりの頃、俺達をカップルと勘違いして襲い掛かって来たPKがいただろう。確か名前はモヒカン・デイシグマとボツチーだったか」  
「ヒイツ!!」

成る程、私がデンドロを始めるよりも前に出会った人達なのでね。どうりで見覚えがない筈なのです。

「………そして、そのモヒカン・デイシグマさんとボツチーさんですが兄様達を見てめちやくちやビビっている様なのですが、どうしたのでしょうか?」

「ちよ、ちよと待ってくれ! 俺達はもうPKからは足を洗ったんだ! だからアンタたちと争う気はこれっぽっちも無いんだ!」

「き、クエストの報告をしに来ただけで………」

「別にそんなに怖がらなくても、そっちから仕掛けて来ない限り私達はどうもしないよ?」

「受付嬢さんが困っている様だからさっさと報告したらどうだ？ 俺達は他所に行くからさ」

そう言った兄様と姉様は、何か色々と言ひ募っている二人を少し困った様な目で見ながらその場を離れて行きました………何か妙な展開になりましたが、とりあえずその辺の椅子にでも座ってクエスト選びの続きをしましょうか。

## ちよつと温泉宿行つてみた

□カルチェラタン領・街中 【戦棍姫】 ミカ

何か妙な再会があった後、私達は冒険者ギルド内の空気が微妙に居た堪れなくなつたので予定を変更してクエスト探しを中断してカルチェラタン領内を散策する事にしたのだった……………正直、ピンと来るクエストが全然見つからないから意地になつて迷走していた感があるし、今回はご縁が無かつたという事でスツパリ諦めました。

……………と、そうやって適当に街中をブラついている途中で、ミユウちゃんが私とお兄ちゃんにやや呆れた様な声で質問をして来た。「ところで二人共、あの人達に一体何をしたんですか？ 物凄いビビってましたけど、そんなにアレな人達だったの？」

『とてもそうには見えなかつたけど』  
「いや、大した事はしてないよ？ あの二人がPKを仕掛けて来たから普通に返り討ちにしただけだし」

「ああ、こつちの地雷を踏み抜いて来たヤツらと違って、特に甚振つたり念入りに心を折る様な事はしていなかった筈だ」

うんうん、あの二人はコツチをカップルと勘違いして襲い掛かつて来ただけだから普通に返り討ちだけだった筈だからね……………こつちの事を特典武器を大量に持っているから、チートとかズルとか反則とか言つて来る連中とは違つて。

確かに、私が直感でユニーク・ボス・モンスターへU B Mを見つけ出せる事もあるのは事実だけど、これでもそれなりに苦労しているんだよ。それに、私の直感って悲劇が起きる事が感じ取れるから結構キツイし。

「コツチだつて好き好んでこんな“チカラ”を持つている訳じゃ無いからね……………それをチートだのと言われるのは結構ムカつくんだよ」

「それに、そういう連中はしつこいからな、二度とこちらにちよつかいを出す気が起きないぐらいに念入りに潰さないとな」

「まあ、それに関しては別に良いんですが……………あまりやり過ぎないで下さいね、あのお二人が改心したというのは事実でしょうし」

別にさつきも言った通り、向こうから仕掛けて来ない限りは何もしないよ。それにあの二人みたいに『カッパル爆発しろ!』とか、いつかの黒黒さん(仮)みたいに『お前たちを倒して名を上げてやる!』みたいなPKにはそこまで悪くは思わないし。

……もちろん、向かって来たら普通に倒すんだけどさ。

「とりあえず! この話はこれで終わりにして、しばらくはこの街での観光を楽しもうよ。最近は大喧嘩いっばなしだったし」

「まあ、暫くはのんびりとするのもいいかもしれないな。……どうせ、何か事件が起きたら首を突っ込む事になるだろうし」

「休める内に休んだ方がいいですかね」

……二人の言い分にはやや言いたい事も有るけど、今日私達はとりあえずカルチエラタン領内の観光をする事に決めて街へと繰り出していったのだった。



そんな訳で、私達は今カルチエラタン領の郊外にある天地様式(らしい)温泉宿でのんびりと温泉に浸かっています……領内を観光している時に温泉宿があると聞いて、旅先で温泉を満喫するとか一回やってみたかった私の意見で今日は此処に泊まる事になったんだよね。

……そう言う事で早速私達は温泉に入る事になったんだけど、まさか兄妹水入らずで温泉に入る事になるとはね。現実ではこういうのは中々ないし。

「しかし、この時間帯は混浴だったのでね。知りませんでした」

「うんうん、いきなりお兄ちゃんが入って来た時にはビックリしちゃったよ」

「それはこちらのセリフだ。男湯に入ったと思っただら何故かお前達がいるんだからな。慌てて《空想秘奥》ブリュリーナック付きのAGI単体バフを自分に掛けて、亜音速機動でここの暖簾やら注意版やらを確認する羽目になったんだからな」



そうして確認した結果、ここの温泉は一定の時間帯は混浴になつて  
いる事が分かったので私達は安心して一瞬に温泉に入る事になつた  
訳です。

「……………え？ エツちなハプニングとかは無いのかつて？ 兄妹  
でそんな事が起きる訳ないでしょう（真顔）。

『ていうか、最初は慌てていたのに今はあつさり混浴してるよね』  
「別に兄妹なら混浴しても問題ないでしょう。そもそもこの身体はア  
バターだし」

「他に利用者がいるのならまた別の時間にしたかもしれませんがね」  
「まあ、偶にはこういうのも良いだろう。本来旅行とはこうあるべき  
だ」

確かにこれまでの私達の旅行は、旅先で片っ端から事件に首を突っ  
込んでそれを解決する水戸のご老公様方式になつちやつてたからね  
。この領にいる間ぐらいはのんびりとしていてもいいでしょう。

「しかし、この温泉宿は天地様式らしいけど天地ってこんな感じなの  
かなー。宿の前にはシーサーっぽい何か置いてあつたけど」

「どちらかと言うと『外国人から見た日本』みたいな感じだが…………ま  
あ、実際に天地に行った事が無いから何とも言えんが」

「天地所属のクラスメイトの話だと戦国時代の日本的な純和風の国ら  
しいですが…………いずれは行ってみたいですね」

そんな感じで、私達は適当に駄弁りながら売店で売つてた温泉卵を  
食べたりして露天風呂を一通り満喫したのだった……………まあ、途中  
でミュウちゃんの《第六圏》で他の利用客が温泉に来る事が感知され  
たので、慌てて超音速機動で脱衣所に戻つたりしたけど。

……………流石に肉親ならともかく他人と混浴はちよつと難易度が  
高いかな。



□カルチエラタン領・天地〃風〃温泉宿内【ハイ・サモナー高位召喚師】レント  
「風呂上がりの客室はノーマル牛乳派、コーヒ―牛乳派、フルーツ牛乳

派に分かれて混沌を極めていた……！」

「ちゃーらーらーらー、らーらー、らーらーらーら、このーままー」  
「ハイハイ、ビルドビルド……というか、お前達知能指数が低くなっていないか？」

予期せぬ混浴だった為、さつさと温泉から上がった俺達は、客室にあつた浴衣を着て近くにあつた売店で買った牛乳を飲みながら寛いでいた……ちなみに俺はコーヒー牛乳派、ミカがノーマル牛乳派、ミュウちゃんとフェイがフルーツ牛乳派である。

……それで、俺のツツコミに対し部屋でゴロゴロしている二人はそのまま寝そべった体勢のまま返答してきた。

「えー、別に良いじゃん。最近直感で感知した事件を解決するのに頭を使いすぎたしさ、今日はダルダルすると決めたのささ」

「そういう訳で、今日はお休みなのです」

「……………分かった、好きにしろ」

どうやら完全にウチの妹二人はお休みモードらしいな。フェイもミュウちゃんの紋章の中で休んでいるし。

まあ、最近は鬨い詰めだったし今日一日ぐらひはそんな態度でも構わないだろう。

「それじゃあ、俺はこの旅館の中を散策してくるから」

「いつてらつしやーい」

「いつてらつしやいなのですー」

そんなこんなで、俺は二人のだらけまくった声を背に客室を出ていった。



さて、そんな訳で特にやる事も無く暇なので天地風「らしい」この旅館内を歩き回っていたのだが……。

「ヒイイイ〜!?」 お、俺達は本当にPKからは足を洗ったんですー」

「いや、それはさつきも聞いたから……」

「やはり、念入りに潰さないと気がすまない……！ お、俺達をキル

するのは構わないが、ここの旅館に迷惑を掛けるのはやめて貰おうか！」

「今この状況が一番迷惑を掛けていると思うのだが」

「えーっと、昔貴方とお二人は敵対していたかもしれないませんが、今のこの二人はそれなりに良いへマスターなので出来れば恩情を掛けてくれると……」

「……………ハア……………」

余りにも理解を放棄したくなる状況に、俺は思わず頭を抱えてため息をついてしまった……………何故こんな力オスな状況になっているのかと言うと、まず俺が旅館の中を歩いていたらさつき冒険者ギルドで会ったモヒカン・デイシングマ&ボッチーと再会したのだ。

まあ、そこまでは良かったのだが、こいつらは何故か俺の顔を見ると途端に怯え出すし、なんか一緒にいたこの旅館の店員さんには二人を許してほしいと懇願されるし……………俺はナマハゲとか荒御魂とかの類いでは無いんだが。

「とりあえず、そつちから仕掛けてこない限り俺からお前達に何かする事はないからいい加減に怯えるのをやめろ。……………というか、お前達にはそこまで怯えられる様な事はしていないだろ」

「え？ 貴方達三兄妹は噂によるとPKには一切容赦せずに徹底的に痛めつけると聞いたんだが……………」

「噂ではどれだけPKが泣き叫ぼうとも決して拷問の手を止めないと……………」

「ちよつと待て、なんだその噂は」

この二人から放たれたその話に俺は愕然とした……………いやまあ、それに関しては心当たりが無いことも無いんだが……………。

……………まさか、この二人が過剰に怯えているのはその噂が原因か？ やれやれ、どう説明したものか……………。

「とりあえず、俺はお前達二人にそこまでする程の悪印象を持っていないし、何度も言っているがこちらから何かする様な事は基本しないから」

「つまり、向こうから仕掛けられた上で印象が悪かった場合には容赦

無く痛めつけると?」

「……………まあ、デンドロで二度と関わり合いになりたく無いと思う様な相手にはな」

「やっぱり!」

だから、やっぱりじゃない!　ここは一度懇切丁寧にこちらの詳しい事情を説明した方がいいか。

「とにかく!　俺達はこっちの事をチートとか反則とか言ってくるPK相手なら痛めつけもするが、別に『カップル爆発しろ!』とか言つて襲い掛かって来る程度の相手にはそこまでしないから」

「……………えーっと、そもそもそう言うことを当たり前にやってるのが問題なのでは?」

「え?　だって不死身のへマスター相手デンドロで二度と関わりたく無い場合には、もう相手の心を折るしかないじゃないか」

「ヒエツ」

まあ、へマスターには痛覚オフがあるし、一発逆転要素のへエンブリオもあるからな。実際には手足をへし折ったりスキルの発声を出来なくする為に喉を潰したり、後は痛覚オフでも呼吸困難の苦しさは消せない事を利用して死なない程度に肺を潰したりするぐらいだし。

……………そう言う事を懇切丁寧に説明したら三人からはドン引きされた。その辺の悪役ロールのPKとやってる事はそんなに変わらないんだがなあ。

「しかし、チートとか反則とか言われるのがそんなに嫌なのか?」

「まあな。少しへUBMを人より多く倒したぐらいでそんな事を言われるのはイラつくんだよ。……………こっちだってそれなりに苦労しているのに」

「持てる者への嫉妬はMMOの常だからな。あまり気にする事も無いと思うが」

「噂されたり陰口を叩かれるぐらいなら、そこまで目くじらを立てたりはしないさ。……………それで、こっちをPKしようとするなら排除対象だが」

どうやら、ちゃんと説明したお陰かモヒカンとポッチーもこっちを

過剰に恐れる事は無くなった様だし、とりあえずこれで一安心かな。

「それじゃあ、俺は部屋に戻るから」

「そ、そうか………今日は色々と迷惑を掛けて済まなかったな」

「申し訳ない」

「いや、分かってくれたならそれで良いさ。それじゃ」

「ゆっくりして行って下さいね」

そう言っ、俺は（多分）事情を分かってくれたであろう三人を背に自分の客室へと戻っていったのだった。

◇

「ただいま……」

「お帰り〜っ、なんか疲れてるねお兄ちゃん。なんかあったの？」

「ああ、それはカクカクジカジカ……」

あれかと、客室に戻って来た俺は二人に先程あった事を一通り説明した。

「ふーん、大変だったねーお兄ちゃん、ご愁傷様。………しかし、私達の事ってそんな噂になってるのか」

「私達って基本的に身内でのプレイだけで他のへマスター〜との交流がかなり少ないですし、掲示板とかも殆ど利用しませんからね。その手の噂に疎くなるのは仕方がないでしょう」

「まあそうなんだよな。話の分かる身内だけでプレイした方が楽しし」

それに俺達の場合はミカの直感があるからな。事件が起きそうな時とかに説明する事が難しいので、その事情を知らない他の人間を誘いづらいという事もある。

………まあ、今回の件でもう少し他のへマスター〜と交流を持つ方がいかなとは思いついたが。

「まあ、その事に関しては何に過ぎても仕方ないでしょう。基本今まで通り直接仕掛けて来る連中以外は無視で」

「噂なんてどうにかなる類いのものでも無いですし、今回の事も思い

当たる事があつたあの二人が過剰反応しただけでしょうし」

「それはそうなんだがな」

「……………畳の上で浴衣着て寝転がりながらゴロゴロしてる状態  
言われてもなあ…………。」

「とにかく、今日は休むと決めたのでゴロゴロするの」

「するのです」

「はいはい」

まあ、この二人がこんな調子じゃしょうがないし、また明日で構わ  
ないかな。